イエス、マイ・マスター

リゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イエス、マイ・マスター

【Ｎコード】
Ｎ３２６９Ｖ

【作者名】
リゼ

【あらすじ】
幼少期に結んだ契約に基づき、異世界の魔法使いの使い魔になった私。
ご主人様の恋模様を野次馬したり、抱っこされたり、イヌさん（？）といがみ合ったり、撫で回されたり撫でくり回されたり撫で（以下略）しつつ、唯我独尊俺様な主と、呑気な同僚と共に、私も異世界でネコとしてそれなりに平穏な毎日を送っています。
……ええ、うっかり踏まれそうになったり、ドアノブと白熱の決戦を演じたり、立ちはだかるドアに無情な現実を思い知らされたり、

体当たり程度では不動不変を保つドアの前にうなだれたり……って、気が付けば私の人生の難問はごく一般家庭に備わっているドアばっかりに！？

……早く一日中人間の姿が当たり前の生活に戻りたいです、主。

（このお話は、作者同一作品のレプリカント・ドッペルの続編となります）

prologue

若気の至りとでも申しましょうか……私にも、かつては後先や裏の意図を考えない、未熟過ぎる程に愚かな若い頃があったのでございます。

そして、その頃の浅はかな言動によって、私は今……

「ほーれユーリ、気になるだろう？　うりうり～」

目の前で金髪碧眼美形の兄ちゃんが、満面の笑みでネコじゃらしをフリフリする、などというまさしく反応に困る窮地、理解不能な事態に陥っているのでございます！

内心嘆いている彼女の名は森崎悠里。当年とって１８歳の、箸が転がるだけで面白おかしく笑い転げるお年頃の、人間の娘（ここ重要）である。

そんな彼女が今、いったい何をしているのかというと……

綺麗に掃除された自らの自室の床の上に、うつ伏せに寝そべった主が機嫌よくフリフリするネコじゃらしに、利き前足でネコパンチを繰り出しているところであった。

彼女は人間ではないのか？　と、ツッコミをいれたくなる状況説明であるが、ＴＰＯに合わせたお義理で肉球てふてふ攻撃に、ただいまご機嫌急上昇中な彼女の主の意向によって、ユーリは人間でありながら黒い毛並みの子ネコの姿に変化させられているのである。

彼女の目の前の金髪碧眼美形兄ちゃんこそ、諸悪の元凶な主である

魔法使いのカルロス様。
そしてユーリは、不承不承ながらそんな彼の使い魔を務めていた。
ここはユーリの故郷たる地球の日本ではなく、魔法使いカルロスが生まれ育った世界……眼前で揺れ動くネコじゃらしを、邪魔臭いと言わんばかりに鬱陶しげに振り払っているユーリにとっては異世界にあたる。

こちらの世界には魔術を論理的に体系だてて学問として広く研究し、発表する機関というものがあり、一般的な人々にとってその存在は当然のものとして認知されている。
そんな魔術の中に、使い魔契約というものが伝えられていて、ユーリはその契約を求めるカルロスの広げた界を跨いだ探査検索術に、うっかりとヒットしてしまったのだ。

こちらの世界での使い魔契約とは、いわゆる自らの能力を高める裏技的なチート術とでも言おうか。使い魔の知識、能力、そういったものを自分のものにするべく、魂を食ら……もとい吸収するのである。
手段の是非はともかくとして、お手軽レベルアップ方法として魔法使いの間では知られているようだ。

ただ、リスクのないハイリターンな手段という便利なだけの魔術でもなく。自分自身の魂に他者の魂を吸収する訳なので、当然合わない場合は拒否反応が出て恐ろしい事態に陥ってしまうようなのだ。
世の中、便利な手段ほど濫用出来ないよう上手く出来ているもの。
しかしそこはそれ。抜け穴を探す人というのはいつの時代にも現れるもので、『全く同じ魂から分離した生き物から魂を吸収すれば、１００％拒否反応は起こらない』というかなり乱暴ではあるが盲点を突いた手法が発見され……カルロスが魔法使いとして学んだ現在では、使い魔契約を結ぶのは同じ魂を持った存在が当然、という常

識がまかり通ってしまっているのであった。

その話を聞いた時にユーリは、（……まるで移植手術のようだ）などと連想したものである。

いわゆる、自分の体の一部をクローニングして移植するという技術。

彼女の理解力では、恐らく似たようなものという認識でいれば良いのだろう。

つまりユーリと彼女の主であるカルロスは同じ魂を持つ存在という訳で、彼と使い魔契約を結んだ彼女は、死ねばカルロスに魂を食…吸収される訳だ。

では何故、ユーリはそんな理不尽な契約を結んだかと言えば……これがもう、若気の至りという他ないのである。

……初めて主に召喚された私は、『使い魔にして私の魂が欲しけりゃチョコをくれ』という契約を結んだのです。

ええ……私は文字通り、チョコレートに魂を売った女なのです！

なんと愚かだったのでしょう、５歳頃の私は。

そしてそれから色々ありまして、主は見事に異世界の食べ物を私に差し出すという契約を完了せしめ。私は正式にカルロス様の使い魔となり、主からのご下命を日々誠心誠意、果たしているのです。

そして我が主は超特大の動物好き。

つまるところ、本日のご命令は『ネコじゃらしでにゃごにゃご』にございます……

ユーリは遠い眼差しを彼方へと向け、再び声にならない嘆きを上げる。今はネコなので、いくら声帯を震わせようとも「にゃーにゃー」というネコの鳴き声でしか音になってくれないのだ。

頭の中で考えようが、ネコの鳴き声として口に出そうが、主である

カルロスはその気になれば彼女の思考はテレパスで軽々と読めてしまうので、丸々筒抜けである。
なので、さして気にする事なくユーリは独り言をペラペラと喋った。
無論、口から出るのは相変わらず「にゃうにゃう、に～」といった、子ネコの鳴き声だが。

それにしても、こちらでの『使い魔契約』や『使い魔の在り方と意義』は、私の世界でのイメージとは全く違っているようにしか思えません。魔法使いなんて存在は、そもそも迷信と言われるような社会に生まれ育った私ですが、その辺りの違和感は全く拭えないのです、主。

「それは恐らく、ユーリさんの世界にこの世界での『＊＊＊』と、正確に符合する単語が存在しないからだと思いますよ」

『ネコじゃらしフリフリ』から、続いて『抱っこして頬擦り』に移行するカルロスの、止まるところを知らないネコ可愛がりタイム、自らと主の2人だけの空間にげんなりしていた彼女の耳に、不意に第三者の声が割り込んできたのであった。

「シャル、せっかくだから今日はお前もイヌバージョンになって、ユーリと二匹で俺を癒すか？」

カルロスがユーリを抱き上げたままドアの方へと振り返るので、彼女の目にもその姿が映った。
魔法使いカルロスの第一の使い魔、ユーリにとっては同僚で先輩にあたる、シャルと呼ばれている青年である。
動物大好きなカルロスは、使い魔であるユーリをネコに、シャルをイヌの姿に変身させて日々の疲れを癒やしているらしい。

「せっかくのお誘いですがマスター、生憎とわたしにはまだまだ仕事が残っておりますので、ご遠慮させて頂きます。わたしの分まで、ユーリさんがたっぷりお相手して下さると思いますし」

彼はキッチンから運んできた、お茶の入ったカップと、ミルクの入った浅い皿、そして焼き菓子が盛ってある菓子皿を乗せたトレーをカタンと机の上に置き、笑顔で主人に命令拒否の旨を告げる。

……主、使い魔からあっさり反抗されていますよ、良いんですか？

「ちっ……最近付き合い悪いぞ、お前」

「マスターが家事をなされれば、貴方様のお望みのままになりますが？」

「よし分かった。シャル、仕事に戻って良し」

「イエス、マスター」

ユーリの同僚にして、この家の殆どの家事をたった1人でこなしている、執事兼家令兼家政夫状態のシャルは、優雅に一礼して退室していった。

ユーリはまだこちらでの生活に慣れておらず、主のカルロスと先輩であるシャルから基本的な常識や知識、お仕事を教わっている真っ最中。

故に、シャルに掛かる負担は軽減されるどころか逆に増えている有り様。

そんな毎日では、主の息抜きにまで付き合っていられるか！　という気分だったとしても無理はない。

……何気に気になる事を口にしておきながら、なんというマイペースな主従なのでしょう。取り敢えず主、私室で動物わふわふモフモ

フ空間というのが癒やしというのは同意しますが、しかし中身は人間というのは本当に癒されるのでしょうか？

ユーリはにゃーにゃーと鳴きつつ主の気を引くと、カルロスは彼女が人間の姿の時では間違いなく見せない、蕩けるような笑みでネコなユーリの頭を撫でる。

「よしよし、ユーリ、喉が渇いただろう？　ミルクを飲もうな」

……我が主は、分かっていてこんな言動をとっているに違いありません。

ユーリが不機嫌にフシャーッ！　と威嚇的な鳴き声を出すと、カルロスは仕方がなさそうに表情を改めた。

「分かった分かった、疑問には答えてやる。だがミルクは舐めろ」

まともに会話しようとしない点が嫌だとか、主が手ずから床に直に置いた皿の上のミルクを舐めとれだとか……まあユーリは色んな状況が不愉快なのだ。

だが所詮、彼女は主たるカルロス様のしもべ。

悲しいかな、人間である悠里の人権なぞ、カルロスの使い魔でネコのユーリという生活の前では、ぼろ雑巾のように打ち捨てられてしまう定め。

様々な諦めを抱き、大人しくミルクを舐め始めたユーリの背中を、カルロスはそれはもう嬉しそうに撫でさする。

……主、飲みにくいです。

2

「そうだな……まずは、お前の世界との使い魔についての認識の食い違いから説明するか」

主の前に跪きひたすらミルクを舐めるユーリと、そんな彼女を見下ろしながらその背中をひたすら撫で回すカルロス。

……というと、どこかしら淫靡な何かを感じさせるが、ユーリはただいまネコの姿であり（舌でミルクを舐めとるのって、意外と大変なのですね）などと、呑気な事を考えていた。

彼女は精神を平常に保つ自衛策として、ネコの姿の時に主からベタベタと触られ撫でられる事に、何の羞恥も抱かないよう常に自らに言い聞かせている。いわゆるマインドコントロールだ。

基本、カルロスはユーリが人間の姿の時には横暴かつ乱暴かつ傍若無人であるが、ネコの姿の時には甘い。メロメロに甘い。

結局のところ中身は同じ『森崎悠里』なのだが、見た目のインパクトや雰囲気とは結構な印象の違いをもたらすものだ。

そんな訳で今は甘々モードな魔法使い様は、ユーリの抱いた疑問についておもむろに語り始めて下さるのであった。

「思考というものは、大別すれば言語によって成り立っていて、ユーリはお前の故国の言語である『ニホンゴ』で考える事に慣れている。

しかし当然だが、『こちら』で使われ交わされている言語は『ニホンゴ』ではない」

カルロスはそう告げて一旦言葉を切り、カップを傾けてお茶を一口

含む。
ユーリはミルクを舐める苦行を中断して、皿の前にちょこんと座り込んだ姿勢で主を見上げて小首を傾げた。

こちらの世界で……主が暮らすこの国の言葉は日本語ではない。
地球でも海を越えれば全く違う言葉を喋っていて当然だったのですから、驚くには値しませんね、はい。
あれ？　ですがそれならばどうして、異世界同士で使い魔同士な私とシャルさんは言葉が通じるのでしょう？
私達使い魔同士の間には、主と繋がっているテレパシー能力に相当するものはありませんのに。

「まだ気が付いてないのか、ユーリ？
お前がこの家で口にしている言葉は全て、『こちら』の言語だ。
大陸の共通語として統一化されていて、単純に『大陸共通語』と呼ばれている」

……私はそんな言語を習った覚えは無いのですが、主。

「お前はアホか？　契約を持ち掛ける際に、そもそも言葉が通じなかったら契約出来んだろうが。
使い魔契約の召喚に応じた時点で、お互いの母国語の知識が頭に刷り込まれるんだよ。まあ、喚んでみたら知恵を持たない獣だった、つー事例もあるらしいけどな。
しかしユーリ、お前は自覚しないほどナチュラルにこっちの言葉を喋ってたのか、へぇー」

カルロスは焼き菓子を一口かじって、楽しげに笑みを浮かべる。その眼差しは、興味深い実験動物を観察する研究者のように感じられて、ユーリは居心地悪く尻尾を揺らした。

感情を素直に表現するネコの耳が今どうなっているのか、あまり考えたくはない。

「つまり、だ。ユーリの世界では魔術師が少ない上に『＊＊＊』に該当する術の存在が知られていない。
俺の出した条件から最も近いと判断した、あー、『ツカイマ』？その単語で脳内翻訳をしていたんだろう」

なんと、殆どノータイムで頭の中自動翻訳機になれるぐらい、私は主の母国語を完璧に使いこなすバイリンガル少女になっていたのですね。
……自覚してみれば、確かにたった今主が喋っているのは『大陸共通語』で、所々に日本語の単語を織り交ぜて説明して下さっています。
会話中に複数の言語が混ざる、コード・スイッチ現象が起きていますよ。
それにしても、私が『使い魔』として翻訳した本来の単語は発音が難しいんですね。えー、くぉ、こぉ……？

「恐らく、隷従をもっと全面に出せば『ドレイ』と翻訳したのだろうし、魂を強固に要求すれば『イケニエ』とでも考えたんじゃないか？」

しばらくポリポリと焼き菓子を噛みつつ、適当だと思われる日本語を思案していたカルロスは、そう結論付けてユーリの口元にも小さく割った焼き菓子を差し出した。

……これはいわゆる、ネコ好きな飼い主が大喜びな、ネコちゃんと一緒に食べられるクッキーですね、分かります。

カルロスの手ずから焼き菓子をモグモグと食べつつ、ユーリはううむ、と考え込んだ。
会話に苦労しないのが当然の島国に生まれ育ったせいか、（何故言葉が通じるのだろう？）という疑問すら沸き上がらなかった。自分自身で日本語以外の言語を操っていたにも関わらず、だ。この辺、確かに主がアホだと呆れて当然の呑気さかもしれない。
カルロスやシャルの発言に、不意に和製英語的な横文字が混じったりするなぁ、などと考えていたりもしていたが、微妙なニュアンスの違いを自分自身で勝手に解釈して脳内翻訳していたのだから、言語に統一感が無いのも頷ける。

つまり私は、カルロス様という魔法使いと契約を結んで従う存在、という点により重きを置いたから『使い魔』として認識していた訳ですね。

「だろうな。俺はお前の知識や記憶を写したが、ユーリには俺の知識を言語しか与えてねえ。
他人の記憶を丸々放り込むと、廃人になりかねねえし」

……主、何気に不穏当な発言をしないで下さい。
自分だけ私の知識を盗み取ってズルいです、とか考えてて申し訳ありませんでした。
だからその怖い笑顔は止めて下さい、切実に。

喋り続けて喉が渇いたのか、カルロスはゆったりとカップを口元で傾け、すっかり冷めてしまった茶を飲み干した。
そしてそれをカチャン、とソーサーの上に戻すと、床に大人しくお座り状態のユーリを抱き上げて運び、ベッドの上に仰向けになった。

主、お休みになられるのでしたら、お召し替えを……

まだシャルについての疑問が残っていたが、カルロスの気ままな行動の方がユーリにとって優先しなくてはならない事項だ。
ユーリは主の腕の中からスルリと抜け出て枕元にちょこんと座って進言したのだが、ゴロンと寝返りを打って彼女を眺めるカルロスは、そんなしもべの頭をぐりぐりと撫でつつ、

「んー……面倒。
お前が着替えさせれば良いだろ」

そんな事をのたまってきた。

……ネコの姿でどうやれと仰るのでしょう。

「シャルは自分の意思で人間とイヌの姿に変化出来るぜ？
お前も成せばなる、日暮れ前には起こせ……」

ええええっ！？　と、内心絶叫するユーリだったが、どうやらカルロスはいち早くテレパス回線を切断していたらしく、ユーリの体を再び胸元に抱き寄せて、スヤスヤと寝息を立てだした。
相変わらず主からは手加減抜きでグイッと胸元に押し付けられてしまい、ユーリは息苦しさにジタバタと暴れるのだがカルロスは気にする様子もない。
懸命にもがいて、どうにかこうにか体勢を整えて呼吸困難の危機からは脱したが、このまま主に寝返りでも打たれたら潰されてしまう。

ぬ、抜け出せれません……いつもの添い寝の時にはなんとか脱出出来るのにっ！
シャルさん、シャルさ～んっ！　たーすーけーてーっ！？

に～、に～、と、胸元でネコが騒がしく暴れているにも関わらず、やはりカルロスは全く起きる気配が無い。
お仕事のスケジュールが詰まっているとかで、彼は昨夜も一昨日も殆ど眠っていないらしい。ユーリに手助け出来る仕事などたかがしれていて、半人前であるが故に与えられた夜の休息の時間は、何か非常に居心地が悪かった。

「そんなに切羽詰まった声を出してどうしました、ユーリさん？」

と、そこへ、コンコン、と軽いノックの音を響かせてドアが半分開けられ、ユーリが救助を求めた銀髪の青年が顔を覗かせた。

「……マスターから伽でも命じられたのかと思いましたが、問題はなさそうですね。
では、わたしはこれで失礼」

い・く・な！？

しっかりと室内の様子を見渡しておきながら、なんの困り事も問題も行っていないと判断を下し、笑顔でさっさと顔を引っ込める先輩に向かって、ユーリはフシャーッ！？　と、毛を逆立てた。

「おや、何ですか、ユーリさん？
こう見えて、わたしもそこそこ忙しいのですが……ああ」

再び半開きのドアから怪訝そうな顔で覗き込んできたシャルは、ハッと気が付いたようにポンと手を叩いた。
そして室内に静かに入室すると、スタスタと歩み寄り……丁寧な手つきで持ち上げてユーリを笑顔で見下ろした。

「すみません、これを下げていませんでしたね。
では、お休みなさい」

シャルさん、それと違いますーっ！？

空になったカップや、菓子皿とミルクが入っていた皿が乗っているトレー。ベッド脇に放置されていたそれを手に、微笑んで就寝の挨拶を寄越してくるシャルに、懸命にユーリは訴えた。

訴えたのだが……主がふと寝返りを打って、本当にあわや圧迫死の危機に陥るまで、気が付いてもらえず、シャルから救助された時には最早、ユーリは息も絶え絶え。
それが本当に彼女の言い分を理解出来なかったが故の結果なのか、それとも分かっていてワザと嫌がらせに焦らしていたのか……シャルの本心がいったいどちらだったのか、ユーリには今ひとつ判別がつかない。

……シャルさんは、優しい親切な良い先輩だとばかり思ってましたが、もしかしたら、違うのかもしれません……

3

シャルの手によって、熟睡しているカルロスの下から引っ張り出されたユーリは、恨みがましい眼差しを同僚に向けた。
が、どれほどガンを飛ばそうとも、全く悪びれもせず柔らかな笑顔で見返してくるシャルに、ガックリと肩を落とした。

……助けて下さって有り難うございます、シャルさん。
主がそのまま寝入ってしまったので、寝間着への着替えをお願いしても？

「ああ、それもそうですね。では」

今度のユーリの頼みは実にあっさりと納得し、部屋の引き出しを開けて寝間着を取り出し……彼女の目の前で眠っているカルロスの着衣に手を掛けるので、慌てて主のベッドから飛び降りて背を向けた。

主が普段身に纏っているのは、ユーリがイメージする魔法使いのローブやマントではなく、仕立てのしっかりとしたシャツに飾り襟を付けたり、クラヴァット。そして膝下ほどの丈のゆったりとしたズボンに、ブーツを合わせている。
因みに仕事着だと、ローブというかチュニックのような物を着ている。

膝まであるブーツを履いたままでも平然とベッドに横になれるなど、ユーリからしてみれば信じがたい生活習慣だが、主に言わせれば、
『年頃の娘がみだりに足をさらけ出すな！
……家では裸足で歩き回って当然だと？　なんというっ……！』

と、盛大なるショックを受けていた。文化の違いによる認識の違いはなかなかに大きい。

「さて、それではわたしは仕事に戻りますね。
ユーリさんはどうぞ、夕方までご自由にお過ごし下さい」

カルロスは横着して普段着のまま寝る事が多いのか、慣れた手付きでテキパキと着替えさせたシャル。彼は先ほどまで主が身に着けていた、皺が寄ってしまった服を片腕に掛け、ドアの方をジーッと無意味に凝視していたユーリの背中に向かって声を掛けてきた。

シャルさん、私も一緒に行きます！

慌ててシャルの方に振り向いて彼の足元でにーにーと訴えると、シャルは困ったように少し首を傾けた。

「それは構いませんが……今のユーリさんに足元をウロチョロされますと、偶発的に蹴りつける危険性が……」

うっ！？　と、言葉に詰まるユーリに、シャルは「ああ」と呟いて表情を僅かに輝かせた。

「むしろ我々の身長差とユーリさんの鈍くささでは、わたしがユーリさんを踏み潰す可能性の方が高いかもしれません」

何故、そんな未必の故意的事件発生の懸念を、楽しげに語る！？
……私はもしかして、シャルさんから嫌われているのでしょうか？
魔法使いの家は、危険がいっぱいです……魔法云々や毒薬とかではなく、体格差的な問題で。
早く人間に戻して下さい、主……

仕事に戻るシャルの肩に乗り、ひたすらしがみついて落ちないようにする、という事で合意を得たユーリは、階段を下りて一階のキッチンへ向かった同僚の肩から屋内を見回した。
シャルの平素の視点は、彼女が普段見慣れた目線よりも遥かに高い。

先ほどカルロスに出したティーセット一式が乗ったトレーを一旦置いたシャルは、続いてランドリーに向かう。間取りとしては水回り関係はこちらの方に集中していて、それは裏の井戸水の水を使用する為だろう。
腕に引っ掛けていたカルロスのシャツとズボンに軽くブラシをかけて汚れを払い、ハンガーに掛けた。洗濯やアイロン掛けはまた明日行うようだ。

「せっかくですから、今日はユーリさんに畑のお世話の仕方をお教えしますね」

はぁ～い。

そんな諸々の動作をキビキビとこなすシャルの肩から滑り落ちないよう、必死に爪を立ててしがみついていたユーリは、それでも返事だけはなんとか返した。
カルロスに運ばれる際は、大抵腕に抱き上げられていたので移動も楽チンだったのだが。
同僚の腕の動きにつられてバランスを崩したりする、肩の上のユーリの体勢やバランスについて、シャルは全く頓着してくれない。

……こ、これがネコ好きと普通の人の対応の違いなのですね……
頑張るのよ、ユーリ！　万が一落ちたりしたら、蹴り上げられて踏

み潰される……！

そんなこんなで、端からは微笑ましい光景に見えるのだが、本人としては割と地味に断続的な生命の危機を覚えていた。
先ほどから、今のユーリはネコであるにも関わらず、シャルと何故会話が通じているのかという素朴な疑問を本人に問いたいのだが。
休むヒマ無く動き回る彼の肩にしがみつく事と、そんな同僚の様子に気を遣うでもなく、次々とご教授して下さるお仕事の説明をキチンと目に焼き付けて頭に詰め込む事に彼女はいっぱいいっぱいで、とてもそんな隙は無い。

シャルは肩にユーリを乗せたままキッチンの勝手口から裏庭に出ると、物置からじょうろを取り出し、ちょっぴりご機嫌なのか鼻歌混じりに井戸に釣瓶を落とした。
……シャルの肩の上から見下ろす井戸の中は、途方もない深さである。暗く、日が射し込まないせいで底を見渡す事も出来ないほどで、中がいったいどうなっているのか全く窺えない。
いつもの水汲みの際には、身長が足りずに見えなかった視点だ。少し怖いな……と、ぶるりと震えたユーリだったが、その時丁度シャルが釣瓶を引き上げようと腕を動かしたせいで、ズルッと前足が滑った。

お、おおお落ちるーっ！？

「おやおや。ユーリさんは本当に、毎日賑やかですねぇ。
もしかしてやるかなー？　とは思いましたが、本当に落ちそうになって慌てふためくとは。
見ていて飽きませんね、あなたは」

ぎゃにゃーっ！？　と、パニックを起こしてシャルの服の鎖骨の辺

りに全力で爪を立ててしがみき、下半身はブラーンと垂れ下がってしまっているユーリを、シャルはロープから手を離して抱き上げた。
彼が引き上げ途中だった釣瓶はまた底へと落下してしまったが、ユーリとしてはそれどころではない。

「ユーリさんが井戸から転落してしまってはいけませんから、水瓶に貯めてあるお水を使いましょうね」

フーッフーッ！　と興奮状態のユーリの前足を自らの服から離させ、宥めるように頭を撫でられた。
しばらく同僚から大人しく撫でられいたユーリは、もぞもぞともがいて再び彼の肩の上に乗ると、ショボーンとうなだれた。

すみません、シャルさん……お仕事の邪魔をしてしまって……

「いえいえ、お気になさらず。予想以上に面白かったですから」

……はい？

余計な仕事を増やしている、邪魔臭い存在でしかないと思われるユーリを肩に乗せたまま、シャルはクスクスと笑みを零している。
訳が分からず首を傾げるユーリに構わず、彼は水瓶からじょうろにお水を注ぎ、畑へと向かった。

魔法使いカルロスの自宅兼お仕事場所は、周囲を人気のない森にぐるりと囲まれた中にひっそりと建つ一軒家である。
二階建ての家屋と、井戸がある裏庭、そして前庭には広大な花畑が広がっていた。
門扉の向こうには、人工的に整えられ作られたと思しき小路が森の中へと続いていて、あの道を歩いていけばそこそこ大きな街道まで

出られるらしい。

「花によっては、少しお世話の仕方を間違えただけで枯れてしまうような物もありますから、しっかり覚えて下さいね」

はぁ～い！

色とりどりのお花や薬木、食用のお野菜、それぞれに世話の仕方が違っている上に種類も多彩で、名前を覚えるだけでも一苦労だ。

ネコの姿に変化すると、人間の姿の時よりも耳や鼻がよくなったという訳ではなさそうだが、花畑に入ると様々な香りが鼻腔をくすぐる。

このお花、良い匂いがします！

肩に乗ったまま、この花からは精油が採れて……云々と、水やりをしながらシャルが行う解説を今の状態ではメモが取れないので必死に頭に叩き込んでいたユーリは、不意に好みの香りを漂わせる花を見付け、鼻を近づけてフンフンと匂いを嗅ぎ、うっとりしつつシャルに感想を告げた。

「こんなに様々な花に埋もれていて、どれからどんな匂いがしているのか、嗅ぎ分けられるんですか？」

ユーリの発言に驚いたようにシャルは水やりの動きを止め、まじまじと肩の上のネコなユーリを見つめる。

……何かおかしかったですか？

「ああ、いえ……大気中に広がる香りの濃度や勾配を嗅ぎ分けるの

は調香師の基本ですから、ユーリさんにその素質があるのはマスターが喜びそうですね。
その点、わたしは駄目ですねぇ。うっすらした残り香や特定の匂いを嗅ぎ分けるのは得意なんですが、周囲をこんなに強い香りに囲まれると、逆に鼻が曲がりそうで」

それは、強い芳香は悪臭に感じるっていう感覚ですよね？
シャルさんは嗅覚が優れていらっしゃるんですね。

「わたしは鼻だけではなくて、耳も良いんですよ？
わたしの姿が見えないからと安心していて、実はわたしの耳に聞こえる範囲内でうっかりと愚痴や独り言を呟いたマスターの、恥ずかしい秘密なども拾い上げたり……」

ふふふ……と含み笑いをしつつ、人差し指を軽く唇に当てて内緒ですよ？　なポーズを取る同僚に、ユーリは思わず身を乗り出した。

ええっ、なんですがそれ！？
なんだかとっても気になります！

「そうですね、ここだけの話なんですが……」

ワクワクと、肩の上で更にグッと身を乗り出したユーリだったが、笑みを浮かべていたシャルはふと言葉を切って表情を真顔に変え、門扉の方を振り向いた。
目を細めるようにして彼が見据える方向に、ユーリも同じように目をやってみるが、特に異変は見当たらない。

シャルさん、どうかしました？

小首を傾げて問い掛けるユーリに答えず、シャルはすっと片手を軽く宙に持ち上げた。
何事だろうかと息を詰めて見守るユーリの目の前を、ヒラヒラとした何かが横切る。そしてそれは、シャルの翳された人差し指に止まった。

思わず我が目を疑いまじまじと見つめてみるが、ユーリは初めて目にする不可思議生物としか言いようが無い。
例えて言うならばそれは……蝶だ。
光を発する真っ白い蛍光ペンか何かで一筆書きに蝶の形状を描いたら、こんな感じだろうか。それが動いて、どこからともなくヒラヒラと飛んできて、シャルの指先に止まっている。

彼はそれを、しばらく無言のまま見つめていたが、いつもは柔らかい笑みを浮かべている事が多い表情をやや固くして、ユーリに目をやった。

「ユーリさん、今日のお仕事の説明は中断します。
……どうやら、これからお客様がいらっしゃるようです」

お客様、ですか？

契約不履行として、ユーリがカルロスに再召喚されてしばらく経つが、この家に来訪者が訪れるなど初めての事だ。
それにしても、ただお客が来るだけにしては、シャルのやや強張った表情の意味が気にかかる。

「ええ。どうやら招かれざるお客様も、ご一緒にいらっしゃるようです」

……『招かれざる』？

いったいどんな方なんでしょう。怖い方ではないと良いのですが。

4

せっかく、主の居ぬ間……というか寝ている間の、使い魔同士水入らずリラックスほのぼのタイムであったというのに、シャルは表情をややしかめて「マスターを起こして下さい」と告げてきた。
カルロスの私室にまで早歩きで駆け付けたシャルは、コンコンとドアを軽くノックするも、中からは返事が無い。

先ほどから、ユーリは懸命に主に向けて念を送っているのだが、それにも全く返事は返ってこない。明らかに、カルロスは熟睡している。
シャルはカチャリと静かにドアを開き、ユーリを室内へと送り込んだ。

「ではユーリさん、マスターを起こして差し上げて下さい。来客の詳細は、その先触れで理解して下さるので。
それでは、わたしはお風呂の用意をして参りますので、少し失礼します」

嫌な役割を振られた!?　と、ガガンとショックを受けるユーリの目の前で、ぱたむと閉じられるドア。
未だネコの姿であるユーリでは、カルロスの私室のドアの開閉のみならず、お風呂の用意だって出来ないのだからして、理屈の上では当然の役割分担ではある。

シャルが『先触れ』と称した光る蝶は、何故か先ほどからユーリの耳元に止まったまま微動だにしていない。
花畑から移動する際に、同僚が自らの指先から彼女の耳元に勝手に

引っ付けた物だが、これからどうやって情報が引き出せるのだろうか。とても不思議だ。

とはいえ、お客様が来訪されるというのに、家主がぐーすか寝入っていては流石にバツが悪いだろう。

シャルの態度から推察するに、なんだかちょっと、困ったお客様のようだし。

ユーリは勢いをつけてぴょこんとカルロスのベッドに飛び乗り、すーすーと健やかな寝息を立てる主の寝顔を見下ろした。

相変わらず、目を閉じ静かで穏やかな表情をしている彼は、文句のつけようのない美青年である。

主は眠っている姿は天使のようですのに、何故に起きると途端に残念なお方になるのでしょう。異世界の七不思議です。

てちてち、と、頬に軽く肉球パンチを繰り出すも、カルロスは全く起きる気配が無い。

低血圧の性質は無さそうなのだが、だからといって彼は寝起きがすこぶる良いという事も無い。

仕方がなく、体全体を使って全力で頬を押し上げるようにしながら、一心不乱に念じる。

あーるーじーっ！　起きて起きてーっ！　起きて下さーいっ！

“ん～？　眠い起こすなアホネコ吊すぞ”

カルロスの唇はムニャムニャと動いて、意味のなさない唸り声とも呻き声ともつかぬ囁きが漏れただけだったが、明らかに寝ぼけている主からの思念は飛んできた。

お客様が来るんですーっ！

『吊す』とは具体的にどうなるのか不明で不穏な単語であるが、めげずにてちてちてちと、連続肉球パンチを繰り出すユーリの利き前足を鬱陶しげに払いのけ、カルロスは不機嫌にパチリと瞼を開いた。ベッドの上に片肘を突いて上半身を起こし、寝乱れた金髪を軽くかきあげて、あふ、と小さく欠伸を漏らす。

そして彼は寝起きの不機嫌さを滲ませたまま、枕元にちょこなんと座り込み、ゆらゆらと尻尾を揺らしながら主を見上げているユーリを睨みつけ……何故か「うっ！？」と、言葉に詰まった。

そしてカルロスはベッドをバフバフと、無言のまま一心に殴りつけだした。いったい何がしたいのか、ユーリにはサッパリ分からない。

眠いところを起こされた彼なりの、苛立ち解消法なのだろうか。

「はー……良し、落ち着いた。
さてユーリ、来客が来ると？」

ちょいちょいと軽く手招きされるので素直にユーリが歩み寄ってカルロスの膝に前足を乗せると、主は彼女の耳元から例の蝶を自らの指先に移し、シャルと同じようにしばし無言のままそれをじっと見据える。

「……なるほど、あいつか……面倒くせぇな」

そして幾度か瞬きを繰り返して小さく息をつくなり、実に嫌そうに吐き捨てる。

そんなカルロスが指を軽く振ると、止まっていた蝶は空気に溶けるようにしてゆっくりと消えてしまった。結構綺麗だったのに、残念

である。

主、シャルさんが今、お風呂のご用意を調えて下さっています。

「ああ、分かった。

……ユーリ」

はい。

「客が来てる間は、お前は身を隠してろ。決して気取られるな」

承知致しました。

ベッドから降り、ブーツではなく室内履きに足を入れたカルロスは、軽く寝癖のついてしまった髪をまたかきあげつつ、そう命じてきた。ユーリはそんな主の背中に向かって軽く頭を下げ、承諾の意を表す。カルロスはそんな忠実なしもべの返答に軽く頷くと、湯を使うべく階下へと降りていった。

……さて、困りました。

出て行く際に主がドアを閉めてしまったので、私は主の私室にうっかりと閉じ込められてしまいましたよ？

ベッドの上に座り込んだまま、ユーリは小首を傾げた。思いがけず、リアル脱出ゲームだ。

別段、カルロスは客人にユーリの存在を知られたくないからと、それならばいっそのこと閉じ込めてしまおうとした、訳ではない。単純に、ドアを閉じたらネコ姿のユーリが出られない、という燦然たる事実を失念しているだけであると思われる。

このまま、カルロスが気紛れにユーリの姿変化の術を解くのを待つか、自力で変化出来るよう頑張ってチャレンジしてみるか。
そうでなければ、ネコの姿のままドアノブを捻る努力をするかの三択となる。

……姿変化の術って、どうやって自分の意志で姿を変えられるのでしょう？

しばらく、ベッドの上でゴロゴロと転がってみたり、一心に『戻れ戻れ』と念じてみたり、ダダーッ！　と室内を駆けてみたり、バック転を繰り広げてみたりといった試行錯誤の努力を重ねたユーリは、カルロスの私室のど真ん中の床におもむろにお座りすると、ショボーンとうなだれた。

分・か・ら・ん！

早く人間になりたーい！　とばかりに、思いつくまま様々な方法を試してみたものの、ちっとも成果は上がらず、相も変わらずネコのままである。
姿変化のコツは、今度シャルに質問してみるとして……どんどん同僚に尋ねたい項目が増えていくが、あれだけ毎日一緒に過ごしているというのに、ちっとも質問の機会が得られないのは何故だろう。
ともかく、これで残るは『待つ』か『ドアノブの壁に挑む』かの二択。

ふっ……昔の方はこう仰っています。『そこにドアがあるのなら、ノブを回したらイイじゃな～い？』と！

カッ！　と目を見開いたユーリは、ドアの下に駆け寄ると、せいやっ！　とばかりに大ジャンプを行う。

が、惜しいところでノブにまで前足が届かない！　こちらの世界では人々の身長も一様に高いらしく、そんな彼らの背丈に合わせた住居のドアノブもまた、当然のように高い所に位置している。

二度、三度とネコまっしぐらジャンプを行った結果、試行し思考するネコたるユーリは、カルロスのベッドに飛び乗ると、複数乗せられている枕の一つを口に銜えてベッドから落とし、そのままドアの下まで銜えて引っ張っていった。微妙な位置の微調整を行い、助走をつけていざジャーンプッ！

ガチャゴチッ！　……ぼて。

「おや、こんなところにマスターの枕が……
それで、床にゴロッと寝そべってどうなさいました、ユーリさん？」

ユーリが跳んだまさにその瞬間にドアを開いたシャルは、ドアアタックで勢い良く彼女をふっ飛ばし、床に伸びたユーリを満面の笑みで見下ろしてきた。

ワザとですか。偶然ですか。ノックが無かった事実を、私はどうみるべきなんでしょう？

「さて、なんのお話ですか？
わたしはただ、マスターのお着替えを取りに上がってきただけですが」

にっこりと邪気の無い笑みで言い切られ、ユーリは言葉に詰まった。このほぼ常に笑顔の同僚が、腹の内ではいったい何を考えているのか、全くさっぱり予想がつかないが、再びこの部屋に置いていかれてはたまったものではない。

ガッシとズボンにしがみついてくるユーリを「おやおや」などと呟きつつ再び肩に乗せ、シャルはカルロスの洋服タンスから着替えを取り出し、主の下へと向かった。
因みに、シャルの肩に乗っているユーリ、という構図を目撃した動物好きなご主人様であるカルロスは、

「……なんて羨まっ……！
ユーリ！　今すぐ俺の肩の上に乗れ！」

全裸で湯船につかった状態のまま、水面をバシバシと叩きつつそんな命令を下してきた。
それにはユーリも、そっぽをむいたまま即座に『否』の返事を念じた。
例え主がすっかりと忘れ果てようとも、彼女は年頃の乙女である。

「何故だ！　おのれユーリ、使い魔の身の上で主の命に刃向かう気か！？」

たかだか肩の上に乗るかどうかで、えらい剣幕だ。

「マスター、ユーリさんは意外と頻繁に爪を立ててきますから、服を身に着けてから肩に乗せる事をお勧めしますよ？」
「くっ……シャルめ、自分はもう体験済みだからと余裕ぶりやがって……！」
「マスターを出し抜けたというお墨付き、有り難く頂戴致します」

そんなこんなで、お洋服を身に着け風呂から上がってくるなり、カルロスは問答無用でユーリを抱き上げて肩の上に乗せた。

バランスを取るため慌てて爪を出してしがみつくと、即座に「痛いだろうが！」と、怒鳴られて膝の上に乗せられてしまうのだった。

「ね？　マスター」

その様子を眺めていたシャルは、それ見たことかと言いたげにクスクスと笑みを零し、カルロスは苦虫を噛み潰したような表情で彼を睨み付けた。

……うちの主と同僚は、本当にいつも仲がよろしいと思います。

可憐なお客様と余計なオマケ

「本当に君はどうしようもない輩だな！
そんな君に負けただなんて、未だに自分に腹が立つ！　君は僕の人生の汚点とも言うべき存在だ！」
「あー、そうかいそうかい、そりゃまた結構。
負け犬はとっとと立ち去れ。俺の家から今すぐ出て行け。惨めったらしくトボトボ歩いて帰るがいい！」
「ああ、出て行ってやるとも！
こんな気分の悪いところ、一分一秒だって留まりたくはないね！」
「もう二度とくんな！」
「君が真面目に連盟に顔を出せば、僕だってこんなところに来る必要は無いんだよ！」
「てめぇが伝達役引き受けなきゃ済む話だろうが！」
「同期の誼とか意味不明な事言って、上が押し付けてくるんだよ！」

……えー、ただいま、我が主と『厄介なお客様』は、周囲が口を挟む隙の無い怒鳴り合いを繰り広げていらっしゃいます。
私としましては、その勢いに押されて呆然としているしかございません。まあそもそも、私はずっと隠れて様子を窺っている身なので、特に何をするでもないのですが……

魔法使いのお家に客人が来訪したのは、カルロスが風呂から上がって身支度を調えてすぐの事であった。

森を横切る小道をギリギリ通れる、程度の大きさの馬車が門扉の前に停められ、シャルが出迎えの為に出て行く。

客の前に姿を表すな、と命じられてはいたが、様子を探るなと禁じられてはいないユーリは、好奇心の赴くまま花畑に身を隠しつつ、馬車から下りてくる客人の姿を見物していた。因みに、何故玄関にまで馬車を進めないのかと言えば、前庭が花畑で埋まっているせいで、馬車が進入出来ないのだ。

まず、馬車から下りて来たのは亜麻色の髪をしたマント姿の人物。花陰からではやや見えにくい上に、ユーリの目には如何にも魔法使い！　なイメージに沿うファッションのせいで、性別はよく分からない。

その人物は、出迎えに現れたシャルを一目目にするなり、

「……お前！　まだ浅ましくカルロスに魂を捧げずにいたのか！」

斬りつけるような激しい口調で、開口一番に怒鳴りつけてきた。声はどちらかというと幾分高めだが、恐らく男性であると予想される。

顔を合わせるなり叱責を飛ばしてきた、そんなマントの男に対してシャルは慇懃に頭を下げる。

「お久しぶりでございます、アルバレス様。ようこそお越し下さいました」

反論するでもなく、ただ型通りの歓迎の挨拶を寄越すシャルに、アルバレス様なるマントの男はフンと鼻を鳴らした。

うーん……私、シャルさんの心が読めなくて良かったかもしれません。

今のシャルさんが何を考えているのか、考えるだに恐ろしい……

人間の姿だったなら、間違いなく冷や汗がダラダラと溢れ出ていそうなほどの気まずさに、ユーリは揺らしていた尻尾をパタリと落とし、溜め息を吐く。

と、そこへドアが開いたままの馬車の中から、涼やかな声が聞こえてきた。

「アティリオ様、シャルを苛めないで下さいな」

「エステファニア嬢、僕は彼を苛めているのではありません。本分を説いているのです」

そんな会話を交わしながら、マントの男が差し出す手の平に白魚のような手を乗せ、馬車のタラップを下りてきたのは、森の中には似つかわしくないような逆に幻想的でぴったりなような、ふんわりとドレープの広がるドレスを身に纏った人……クルクルとウェーブのついた金髪はキラキラと光を反射し、それに彩られた小顔は愛くるしさに満ち。数年後には『絶世の』などと形容されそうな美少女だった。

……異世界のお姫様だ！

うわ、こっちに来てから会う人会う人男ばっかりでムサいとか内心思ってたけど、お姫様キターッ！

何か性格の悪そうな、キャンキャン怒鳴り散らすお客様に気分が沈んでいたユーリだったが、美少女の登場で一気にテンションが上がり、ピンっと耳と尻尾も上がる。

「エステファニアお嬢様、ようこそお越し下さいました。お嬢様のお越しを心より歓迎致します」

「有り難う、シャル。カルロスの家令としてすっかり板についたようで、わたくしも嬉しく思いますわ」

「過分なお言葉、身に余る光栄にございます」

アルバレスだか、アティリオだかと呼ばれたマントの男に対しては明らかに歓迎の挨拶にも心が籠もっていなかったシャルだったが、エステファニアお嬢様なる美少女の事は心底から歓迎している様子で、本当に嬉しそうな輝くような笑みを浮かべている。

お客様2人と、お付きの人らしい壮年の人物と御者の方が、シャルに案内されて目の前の花畑の間の細い道を歩いて家の玄関に向かう姿を息を潜めて見送りつつ、ユーリは花に埋もれたまま思考を巡らせた。人間の姿では仕事に追われて考える暇もあまりないが、ネコの姿では考えるぐらいしかする事が無い。

すぐそばを通り過ぎた際にじっくりと観察したマントの男は、年齢的には主であるカルロスと大差ない年頃に見受けられた。
シャルはカルロスに魂を捧げる事が本分だと言い切った事から察するに、彼もやはり魔法使いなのだろう。

この世界では使い魔は使役する対象ではなく、魂を抜き取り自らの力を増す為に吸収して当然。
それが普遍的な常識としてまかり通っている世界なのだと、知ってはいてもあまり実感は湧かなかった。それはユーリの主が彼女を殺そうとしないからだし、同じ境遇であるシャルがあまりにも普通にカルロスと一緒に生活していたからでもある。
だが、今日の客人の言動によって、ユーリの胸には言い知れぬ不安が広がってゆく。

シャルは使用人として、また仕事の助手として、カルロスの有能な片腕である。彼は十二分に主の役に立っているし、あれほどテキパキと家事をこなす実務能力など、得難い存在だと思われる。

にも関わらず、出会い頭に『何故まだ死んでいない？』と、見下すように頭ごなしに怒鳴られ、そしてそれに反論さえせず、ただ黙って言葉の暴力を受け流すだけの同僚。

あのアルバレスと呼ばれた男は、多くの人から進んで傅かれ世話をされて当然の富裕層の人間である為、シャルの能力は使用人としてこなせて当然の実力であるとしか評価出来ず、それ故に『主へ魂を捧げる事が使い魔として正しい行動』と考えているのか？
それとも、『同一の魂を自らの力にする』という行為は、魔法使いにとっては躊躇う事さえ愚かしいほどの、至極当然で真っ当な選択なのだろうか？

もしもユーリの存在を彼が知ったなら。眉一つ動かさずに殺されてしまうのだろう。
何故ならば彼女は、カルロスに魂を捧げるべき存在であり、死ぬ事に究極の価値を見出される使い魔なのだから。

ホロホロと、ユーリの瞳から零れ落ちた涙が畑の土へと染みを作ってゆく。
そこになんの感情もなく、ましてや悪意や害意さえ一片も抱かぬまま、『食べ物』として搾取されるのが当然だと、それこそがこの世界の魔法使いである人々の、絶対的に正しい考え方なのだとしたら。その契約を結んだユーリやシャルに、彼らは些かの人権も認めようとはしない。いや、権利云々についての考えさえ欠片も浮かばないに違いない。

“……だから隠れてろと言ったんだ”

不意に送られてきた主からの短いメッセージに、この世界での魔法使いの人々が使い魔をどう捉え考えているのかを知ったユーリが、

心構えはあれど深いショックを受ける事を見抜いていた事を悟る。

この家は揺り篭のようだった。

彼女にとっての異世界において、主のカルロスは生まれ育った世界でありながらこちらの常識で量れば異質どころの話ではなく異常であり、根本的なところではこの世界の常識に沿う考え方を持っていなかったからこそ、異世界の人間であるユーリもまた、自らの価値観を保っていられたのだ。

主、私は死にたくはありません。

“俺が構わんと言ってるんだ。お前は俺に従って生きろ”

……はい。

主には主なりの考えがあり、それがこの世界での『正道から逸れた生き方』であろうとも、それを貫こうとしているのか。

ユーリはカルロスの手によって隠され守られている。それは彼女にとっては良いとしても、カルロスの使い魔として知られ、矢面に立たされているシャルはそれをどう受け止めているのだろうか。その事が無性に気にかかる。

無能で無力であるから主から無条件に庇われるユーリと、有能で実力があるからこそ他者から侮蔑の言葉をぶつけられるシャル。

時折、もしかしてこの同僚から嫌われているのだろうかと不安に思う事があったが、そんな不平等な状態であるのならば、彼から疎まれていても当然ではないのだろうか。

ユーリは一階の部屋の様子が窺える窓枠に片っ端から飛び乗り、シャルの姿を探してみる。

探し人は程なく見つかり、玄関脇の控えの間で馬車を操っていた御者の方と差し向かいで、のんびりとお茶を飲んでいるところであった。

その表情は穏やかで、先ほどのマント男・アルバレスとやらの発言を気に病んでいるようには見えない。

同僚は大抵いつも笑顔なので、本当に気にも留めていないのか、怒鳴られ慣れてしまっているだけなのか、ユーリには判別がつかない。

が、とりあえずこちらは平穏なようだ。

嫌な感じの男と愛らしい姫君、そして主の様子を見物するべく、ユーリは続いて応接間の様子が窺える窓目掛けて飛び乗った。

上手い具合に窓の一つが開いていて、室内の人々の動きも会話もバッチリ。こちらは窓枠の梁に取り付けられた丈夫な板の上に飾られた鉢植えの影に身を隠し、スパイとしては完璧。こういう時、小柄で身軽な子ネコの姿は実に便利である。

さて、問題の客人方の様子はというと……

「はっ。エストに頼み込まねえと、俺に辿り着けれなかったような奴がよく言うな」

カルロスはソファの上で足を組んでふんぞり返り、マント男・アルバレスを睨み付けてそう吐き捨てているところだった。

それに、美しいエステファニア嬢が表情を曇らせた。

「ごめんなさい、カルロス……わたくし達の都合で、お仕事のスケジュールを変えさせてしまって」

「エストはちっっっとも悪くはねえぞ。

そこの、年下の少女に、べったり頼るしか出来ない、無能が全て悪い」

カルロスは爽やかな笑みを浮かべて、マント男を皮肉る。

「随分と偉そうだがな、カルロス。君は事態を正確に把握しているのか。

そもそも、君が連盟への奉仕を怠ったなら、後見であるパヴォド伯家が引っ張り出されるというのは自明の理だろう。そんな事も分からないのか」

「……なるほど？　アティリオお前、エストを盾に人を脅迫する気か？」

「僕はそんな事は、一言も言っていない。言い掛かりは止めて貰おうか」

どうも彼らの関係が今一つ掴めないが、睨み合う男性2人はお互いをあまり良くは思っていないようだ。そんな彼らはしかし、あの美少女エステファニア嬢の事は好意的に見ている、と。

どうも、カルロスが『連盟』なるものに対して不義理を働いている事を、あのマント男……恐らく名前がアティリオで名字がアルバレス……は、不満らしい。

三角関係的な感情も含まれているのかなぁ、などと、微妙にハラハラドキドキしている野次馬なユーリはさておき、室内ではカルロスとアティリオの口論は益々激化してゆく。

「奉仕、連盟への奉仕だぁ？　ふざけやがって……体の良い国へのゴマ擦り、点数稼ぎじゃねえか！」

「それでも、だ！　国から睨まれるという事がどういう事か、分からないとは言わせないぞカルロス！」

「自分達の考えばかりに固執して、シャルを良く思わないような連盟なんざ、俺はどうでも良い」

カルロスのその一言に、アティリオはバンッ！　とテーブルを乱暴

に叩いて立ち上がった。

「本当に君はどうしようもない輩だな！　君は僕の人生の汚点とも言うべき存在だ！」

そんな君に負けただなんて、未だに自分に腹が立つ！

……というところで冒頭に戻る訳なのですが、怒鳴り合う主とアティリオ……様、の、様子を目の当たりにしていても、全く動揺する素振りも見せずに優雅にティーカップを傾ける美しきエステファニア嬢は、実は儚げな風情に反して結構肝が据わった方なんでしょうか？

何気に、お付きの方の空気っぷりも凄いです。あれが正しい使用人のあるべき姿なのですね、勉強になります。

2

ただ今、窓際の鉢植えの影からこんにちは、なユーリです。

「こんなところにエステファニア嬢を残していけるものか！」

「はん。俺の結界を探知出来なかったような三流は、さっさと暇乞いするんじゃなかったのかー？」

……相変わらず、主とアティリオ……様、は、子供の戯れ合いのような怒鳴り合いを繰り広げていらっしゃいます。

「君の結界術については、正直認めたくはないがまた格段に腕を上げたなカルロス！」

「そっちこそ、先触れの術のセンスはクドいぐらい綻び一つねぇな、アティリオ！

今日の光る蝶はベストマッチだった！」

……怒鳴り散らしてはいても、お互いの優れた部分については素直に認め合うようです。実は仲が良いんですか、主？

「カルロス、アティリオ様。

もうよろしくて？」

2人が口論している姿をヨソに、彼女の周囲だけ優雅なティータイム空間を醸し出していたエステファニア嬢が、カップを置くとにこやかな笑みを浮かべて口を挟んだ。

カルロスとアティリオは令嬢へと顔を向け、どことなく居心地悪そうに黙り込む。同席している彼女を1人放置して、紳士らしからぬ

白熱した怒鳴り合いを繰り広げていた事が気まずいようだ。

「とんだお見苦しいところをお見せしてしまい、申し訳ありません」
「いいえ、アティリオ様。
わたくし、お2人の口論現場には慣れておりますもの」
「……」
「ま、確かにエストの言う通りだな。
今更取り繕ったところで遅いぜ？　アティリオ」

愛くるしく小首を傾げ、微笑んで告げるエステファニアに絶句するアティリオと、ドサッとソファに背中を預けてクールダウンするカルロス。
しばらく額を押さえていたアティリオは、顔を上げてローブの隠しから封筒を取り出し、それをテーブルの上、カルロスの眼前へと置いた。

「連盟からの、召喚状だ。
君にこれを届ければ、僕の用件は終わる」
「なら、それを置いて帰れよ」
「そうしたいのは山々だが、君が連盟の意向に従うと確約するまでは、僕とて帰る訳にはいかない」

お手紙を届けるだけならば、配達人を経由して託せば済むだけの事。
わざわざ本部から直接人を寄越すという事がどういう事か、ユーリには嫌な想像しか浮かばない。

「カルロス。わたくしはあなたの事を、家に縛り付けたくはないの。
でも……あなたは、わたくしの父の思惑に、十分に応えてしまった」
「それは違う、エスト。
閣下は……俺によくしてくれたさ。

やれやれ。少し怠けてたら、流石の爺婆様方もブチ切れたか」
「少し？　三年間という期間は、少しで済ませられる話じゃないぞ」
「居たら居たで嫌がるくせに、頻繁に顔は出せだなんて、勝手な爺婆どもが」

カルロスは溜め息混じりに封筒を手に取ると、テーブルに両手をついて身を乗り出してくる真正面のアティリオを、冷ややかな眼差しで見据えた。

「召喚状は確かに受け取った。近日中に王都の本部に顔を出す。だが……俺の使い魔についてまだグダグダ言うようなら、本部の塔なんざ輪切りにしてやるからな。そう伝えとけ」
「どこまでも野蛮で乱暴だな、君は」
「お前にだけは、言われたかねぇな」

スッと目を眇め、冷たく睨み合う男2人は、全く同時にフンッ！と顔を背け合った。
それと同時に、室内でもずっと被っていたアティリオのマントのフードがずり落ちて、頭部が露わになった。
彼は忌々しげに舌打ちし、再びフードを被る。今度はより目深に被ってしまうせいで、亜麻色の髪はおろか風貌や表情さえ容易に窺えなくなってしまった。それはまるで、一瞬だけ現れたアティリオの艶やかな髪と、尖った耳を徹底的に隠すように。

「アティリオ、俺の家でそんなもん要らねえだろうが」
「滑稽だと嘲りたいなら嘲笑すればいい。君には分からないこれを、ね」

どこか疲れたようにそう早口で言うと、アティリオはエステファニアに向き直った。

「エステファニア嬢、僕の目的は無事済ませる事が出来ました。感謝致します。
この上長居は無用です。一緒に帰りましょう、と申し上げても……」
「ええ、わたくしはこちらに残りますわ。
帰りはカルロスに送って頂きますから、ご安心下さいな」
「やはりですか」

にっこり微笑んで、あなたと一緒には参りませんと断る令嬢に、アティリオは嘆息混じりに頷いた。

「すっかり変わられたと思っていましたが、やはりエステファニア嬢は昔から変わらず、カルロスにべったりなのですね」

そんな感想を漏らしてエステファニアからの満面の笑みを受け、玄関に向けて歩き出すアティリオ。気のせいか、ユーリの目にはその背中がちょっと寂しげな気がする。
ユーリはピョンと窓際から飛び降りて地面に着地し、前庭まで駆け出して花陰に隠れ、カルロスやシャルに見送られつつ、アティリオが実にあっさりと門扉から出て行く姿を確認する。

うーん、箒がどこにも見当たりません。まさか本当に、あの方は１人トボトボ歩いて帰るのでしょうか？
……はっ、振られたの！？
マント男さん、主とお姫様を取り合って、お姫様は主を選んだの！？

“アホかお前は？
ユーリ、もう出てきて構わんぞ。こっちに来い”

三角関係の行く末？　に、興奮気味に尻尾を振るユーリが身を隠し

て伏せている花畑の地点を正確に睨み付けられ、カルロスからそんな思念による命令が下された。
お客様はまだエステファニア嬢とそのお付きの方が残っているが、ユーリの存在を知られてはならない客人は、アティリオのみだったようだ。

そろりと花畑の細道に顔を覗かせると、早歩きで歩み寄ってきたカルロスに、両手でヒョイと抱き上げられた。両足をぶら～んと垂らしたままの状態で、そのまま運ばれてしまう。ちょっと辛い。
シャルが開いた玄関から彼が再び応接間に戻ると、エステファニア嬢はお付きの壮年の執事さんにお茶のおかわりを淹れて貰っているところであった。

「お帰りなさい、カルロス」

背後には見栄えの宜しい執事さんが控え、ソファに優雅に腰掛けたままにこり、と微笑みお出迎え。
まるで彼女の方が、この家の正当な女主人のようである。

……いえ、先ほど主の後見云々という言葉も出てきましたし、もしかしたら本当にそうなのかもしれません。

「待たせたな、エスト。
やれやれ、ようやく邪魔臭いヤツは帰ったぞ」
「あら、いけないわ、カルロス。
アティリオ様は、ずっと昔からの、あなたのお友達でしょう？」
「あいつとは『お友達』なんて可愛い関係じゃねぇよ」

応接間に入るなり腕からユーリを床に下ろし、カルロスはスタスタとエステファニア嬢の傍らに……跪いた。

「久し振り、エスト。
しばらく見ない間に、また一段と綺麗になったな」
「本当に？　嬉しいわ有り難うカルロス」

おおおっ！？　あの傍若無人な主が美少女の傍らに膝をついて、手の甲に接吻とな！？
あれがこちらの世界での、紳士の貴婦人に対する挨拶なのでしょうか……異世界でありながら、私の世界と同じ敬愛の挨拶が存在するだなんてびっくりです。

目の前で繰り広げられる、微笑みあう美青年と美少女、というまるで映画の一場面か一幅の絵画のような一角を、目を輝かせて見物するユーリだった。彼女の主が普段の色々と残念な美形から、まるで恋物語の正統派なヒーローのように見える。素晴らしい快挙だ。
カルロスはエステファニア嬢の手の甲に口付ける間も上目遣いに彼女を見上げ、エステファニア嬢もまた、恥じらいがちに頬をほんのりと染めつつ彼を見返す。

「エスト……」

エステファニア嬢の手の甲から唇を離し、カルロスは吐息混じりにそっとその名を舌の上で転がすように囁く。
何か2人だけの甘い雰囲気のようなものが漂っているように感じられて、野次馬状態のユーリは内心キャーキャー歓声を上げていた。人様の色恋話……それも、あの俺様主様なカルロスの恋バナだなんて、興奮するなと言う方が無理だ。

だがそこへ、エステファニア嬢が連れて来た壮年の執事が「オホン」と実にわざとらしく咳払いをし、彼らはハッと我に返ったように瞬

き、カルロスは握ったままであったエステファニア嬢の白魚のような手をそっと離した。

……おのれ、ちょっとダンディでステキ（はーと）とか思っていましたが、執事め！
そこは年若いカップルに遠慮しましょうよ、空気読んで黙りこむところでしょう！
たった今応接間に入ってきて、そのまま黙って控えてるシャルさんを見習え！

主と令嬢の互いを見つめ合う眼差しといい、ユーリの中ですっかりと、カルロスとエステファニア嬢は憎からず想い合っている男女、という位置に確定してしまっており。その2人の邪魔入りをするお付きの男性を睨み付け、絨毯が敷かれた床を不機嫌に肉球でバシバシと叩いた。

「それでな、エスト。お前に頼まれてた品が完成したんだ。
……シャル」
「はい」

我に返ったカルロスは、すっとエステファニア嬢から一歩距離を取り、パチンと指を鳴らしてしもべに合図を出す。
背後に黙って控えていたシャルは、主にガラス瓶を差し出した。
アティリオを見送ってカルロスやユーリと一緒に応接間に入らず、シャルは少し席を外していたと思えば、それを取りにいっていたようだ。
カルロスはそれを受け取ると、

「エストに似合う香りをイメージしてたんだが、今のお前には少し可愛い過ぎるかな」

そう呟きながら、ムエット（香水の香りを試す為の厚紙）に付け、軽く振ってアルコール成分を飛ばし、エステファニア嬢に差し出した。

「……まあ、果物みたいな甘い香りね。瓶も可愛らしいし」

「初めは甘いが、時間が経つと段々爽やかさが出てくるようにした。……気に入ったか？」

「ええ、とても！　有り難うカルロス。早速付けてみるわね」

エステファニアは嬉しそうに手首に軽く香水を付け、応接間に緩やかに広がってゆく甘い香り。

カルロスがここのところ、寝ないで頑張って調香していた香水は彼女の為の香りだったのか、と、合点がいった。

あれですね。好きな女の子に、彼女の為だけの唯一の香りを作ってプレゼントとか、我が主はなかなかのキザな男なようです。調香師ならではでしょうか。

シャルは香水瓶を衝撃吸収クッション材な綿入りなお持ち帰り用のケースに入れ、可愛らしいリボンを手早く結んだ。

同僚の早技に感心しているユーリに、

「ユーリ、こっちに来い」

主から早口でお呼びがかかった。

先ほどからの内心の野次馬っぷりはお見通しなのか、彼女を見る目はちょっとばかり不満げである。

呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃん！　とばかりに、応接間の家

具を避けつつ駆け、ピョコンとカルロスの足下で急停止を掛けて見上げた。

「エスト、これはユーリだ。俺のもう一匹の使い魔」

……主、匹って。

「まあ、可愛い子ね！
抱いてもよろしいかしら？」
「おう」

内心ツッコミを入れているユーリの思考は丸無視して、カルロスがエステファニアの膝に乗せようとするので、ユーリは慌ててにゃがにゃがと訴えた。

主！　抱っこの前に手足拭かせて下さい！　エステファニア嬢のドレスが汚れる！
乙女の服を汚す男は最低です！

「あ、ああ？」
「マスター、ユーリさんは先程まで外を歩いていましたから、これをお使い下さい」

ユーリの抗議に戸惑ったように動きを止めるカルロスに、すかさずシャルから濡れタオルが差し出された。
どうも、仕事部屋から香水瓶を持ってくるついでに、そんな物までしっかりと用意してきたようだ。なんとも絶妙なタイミング、痒いところに手が届く気配りぶりか。

その濡れタオルでカルロスにやや乱暴に手足を拭われ、改めてユー

リはエステファニア嬢の膝の上に乗せられたのである。

「初めまして、ユーリちゃん。
わたくしの名前はエステファニアよ。エストと呼んで下さいませね」

初めまして、エストお嬢様ー。ユーリと申します。

柔らかな笑みを浮かべ、優しく頭を撫でられながら許可が出たので、早速エストと呼んでみる。
どうやら彼女も小動物を好むタイプなのか、「可愛い可愛い」を連呼されてしまう。
しかし、彼女の腕に優しく抱っこされても、頬擦りされても、主の時のような乱暴さや力加減無しの圧迫感は全く無い。
生命の危機を覚えない抱っこは、ユーリがネコの姿に変化して以来、初めてである。

……うん、これが正しい子ネコの扱い方ですよね。
私、どうせネコとして飼われるのなら、こういった可愛らしい美少女に飼われたかったです。

3

エストが小さく溜め息を吐く。彼女は小窓の方へと身を乗り出し、馬車の前方へと視線を投げかける。その目線の先には、ただ1人の人物。

しかし、いくらも眺めない間に同席者である壮年の執事からわざとらしいオッホンという咳払いをされ、エストは渋々と姿勢を正して……再び溜め息を吐いた。

そんな彼女の膝の上で丸まっているのは、相変わらず絶賛子ネコ姿のユーリだ。

ご令嬢とそのお付きの方々の帰宅を送る、というカルロスに付き合って、何故か彼女まで引っ張り出されたのだ。しかし、せいぜいネコとしてエストの膝の上で丸くなっているぐらいしか出来ないユーリに、護衛がわりなど務まるのかどうかは本人にも大いに疑問だ。人間に戻れば一瞬の足止め程度にはなりそうだが、その場合はエストのみならず襲撃者や壮年の執事の前で真っ裸になってしまう。それは嫌だ。物凄く遠慮したい。いや、そこは主の心一つな訳だが、切実に願っておく。

異世界へ呼び出されて以来、カルロスの家の敷地から一歩も外へと出ることのなかったユーリは、エストの膝の上という実に安楽なポジションから、馬車の小窓の向こうに見える景色をマジマジと興味深く眺める。

とはいえ、彼女はあの家の中に閉じ込められていた訳ではない。無知を自覚する故の慎重さと、周囲を森に囲まれており（虫とかいそう……うぇ～）という物臭さから、出歩いてみようという気にならなかっただけだ。

林と言えば竹林が思い浮かぶユーリから見ると、植物の植生は、日本の雑木林とはやはり何かしら違うようだ。

馬車の前方を、周囲を警戒しながら早歩きで進むカルロスの背中へと、エストが切なげな眼差しを向けるたびに、戒めるように咳払いをする執事のせいで、車内は沈黙が下りていた。

せめてシャルも付いて来てくれていれば……と、お家に残ってお留守番をしつつ、今頃はお夕食の支度をしているに違いない同僚の姿をユーリは脳裏に思い浮かべた。

ほわん、と何を考えているんだか分からない笑顔のシャルを思い起こし、仮に一緒に来ていたとしても十中八九馬車の外っぽいか、と考え直した。

それにしても、馬車の車輪がデコボコ道な地面の上を通過するせいで、車内はかなり揺れている。

今は森を抜ける為に馬はだく足でさほどスピードは出ていないが、これで速度を上げたらいったいどうなってしまうのだろうと、ユーリはブルリと身を震わせた。

サスペンションとかゴムとか、車輪に付けたら良いと思うんですが、私、材料も作り方もとんと知りませんし……

使い魔であるユーリの知識に無いのだから、主であるカルロスにだってお手上げだ。

彼女は元の世界で、どちらかと言えば浅〜く広く雑学に興味を示したタイプなので、専門的な知識は皆無であり、主に『異世界の深遠なる英知！』的なモノはさっぱり提供していない。

「ごめんなさいね、ユーリちゃん。お外からガタゴト音がして揺れていますけれど、怖いことは何もありませんわ」

不意に震えたユーリをいったいどう捉えたのか、エストは慈愛に満ちた笑みを浮かべて膝の上の彼女を見下ろしてくる。
ユーリはやや困惑しつつ、にーにーと鳴きながら返事をする。

あのー、エストお嬢様？
私は馬車に乗ったのは確かに生まれて初めてですが、だからといって怖がってる訳じゃないんですがー……

「大丈夫ですわ、カルロスもすぐ近くに居ますし。
一緒にお外を眺めていましょうね」

優しく背中や頭を撫でられてから、その両腕にそっと抱き上げられ、視点が高くなったお陰で馬車の小窓の向こうがより広々と見渡せるようになった。
それは良いのだが、やはりエストにはユーリの意図が全く伝わっていない。シャルに通じる方が特殊な事例のようである。
今日のお茶の時間、馬車で帰宅するまでの間、カルロスとエスト、シャルの談笑中にユーリは幾度か彼女に話し掛けてみたのだが、ネコの鳴き声ではさっぱり分からなかったようだ。

ぼんやりと今日の会話を反芻しつつ、ユーリは今日得た情報を整理してみる。
話に取り残されているユーリに、会話中に時折主からテレパスで解説が入ったりもしたので、多くの物事を学べた有意義な時間だった。

えー、まず、こちらの世界で主が住んでいらっしゃる場所の名前は『マレンジス大陸のバーデュロイ国、パヴォド伯爵領・グリューユの森』だそうです。
ええ……私、国の名前すら初耳でしたよ！　だって知らなくとも、

自宅に引き籠もりスローライフは送れますから！

ユーリはこちらの常識を学んでいる最中とはいえ、その教育内容は『こちらでの生活を送る上で必要な行動』に終始しており、それは即ち井戸の水汲みであったり、釜戸に火を熾す方法であったりだ。カルロスの家の外がどうなっているのかなど会話の端にも上らないのに、『ここはバーデュロイ国という国で建国以来云々、最近の税率について云々、領主の動向は云々』などと、何気に体格差による気苦労の絶えない、マッタリとした使い魔ネコライフを送るユーリが知る由もない。

そして、今私を優しく撫でて下さっているご令嬢が、ご領主様であるパヴォド伯爵のご息女、エステファニア嬢、愛称はエスト様ですね。

主が魔法学校に入学出来るように、後見になって後押ししたのがエストお嬢様の父君、パヴォド伯爵と。

どうも話を聞く限り、こちらの世界では学問を修める為には、ある程度の身分や地位、資産が必要な世界のようだ。

そして察するに、魔術を学ぶ人種は特殊でもあるらしく、誰でも扱えるようなものでもないらしい。

そんなある意味特別な技術者たる魔法使いを、パヴォド伯爵は子飼いの手駒として確保しておくべく、素養のある子供を見つけ出して育て、学校に入れ……その『素養のある子』であったカルロスは、しっかり優秀な成績で学校を卒業。以後は伯爵領に住み、時折伯爵からの依頼をこなしていると。

幼少期、カルロスはエストがそれこそ赤ちゃんだった頃から伯爵邸に住み、シャルとエストの子守りをしながら魔術の勉強をしていた

そうだ。
３人はやけに親しげだと思えば、精神的には主人と召使い以上の関係を築き上げてきた間柄であるらしい。

妹のように可愛く思いつつお世話を焼いてきた主家のお嬢様が、美しく成長して目の前に現れる……これこそまさに、王道ロマンスですね！

さて、それはともかくとして。
ここで問題になるのが、どうも、魔法使いや魔術師と呼ばれる人々は、こちらの世界ではどちらかというと恐れられ、下手をすると迫害の対象になる存在であるらしい、という事だ。
ソレつまり共食いですか？　一種のカニバリズムですか？　と、思わず聞きたくなるような魔術が平然と知られているような魔術師の世界なんて、さもありなんというのがユーリの本音であるが、別に使い魔契約術のせいで嫌悪されている訳ではないようだ。

そして、バーデュロイ国の魔術師達が所属する『魔術師連盟』は、国家への忠誠を示す事で、連盟に所属する魔法使い及び研究者である魔術師の保護を保証してもらっているらしい。
その忠誠の示し方というのが、分かり易いところでは『魔物の討伐』だとか、過酷なものになると『紛争地帯への最前線送り』だという。
それに表立って逆らえば連盟は即解体させられ、そこに所属する魔法使い達への保護が取り消される。
多くの魔法使い達は、それを殊の外恐れるというのだから……どれほど、この世界の魔法使いへの風当たりは強いのだろうか。

それにしても、エストがしきりにこちらを小さい子供扱いしてくる事に、やけに後ろめたい違和感のようなものが湧く。
主が特に訂正しなかったせいで、エストの中で子ネコのユーリは、

生まれたての幼子として認識されたようなのだ。

「ほら、ご覧なさいな。
ユーリちゃんのご主人様が、あちらで元気に頑張っていますわ」

煩い執事対策としてか、今度はユーリを大義名分に堂々とカルロスを眺める事にしたらしきエストは、ほぅ、と、熱い溜め息を零す。
いかに外見は華奢で儚げに見えようとも、恋する乙女はいつだって強かだ。
まだカルロスやエストから決定的な話を聞いた訳ではないのだが、ユーリがじっくりと観察し続けた結果から言うと、惹かれ合う男女だ。
さて、そのエストの熱い眼差しの先の想い人はと言えば……

ナニ、やらかしてらっしゃるんでしょうか、主？

抱き上げられたまま外の様子を探ってみたユーリは、現在の状況に内心1人で全力ツッコミを入れていた。
恐らくはゴブリンと思われる魔物複数を、水で出来たツルで逆さ吊りにして高笑いを上げている。
唯一地面に倒れ伏した一匹は、鎌鼬にでも襲いかかられているのか、遠目からは刃物のような物は何も無いのに現在進行形で体がズバズバ裂かれている。

……主、『元気に頑張り』過ぎではないでしょーか？

そんなカルロスの姿にうっとりするエストもエストだ。
こちらの世界では、ああいった行動が頼もしく映るのか？　それはユーリには分からない。

何だかんだ言っても、カルロスがユーリの姿を変化させる以外の魔法らしい魔法……それも攻撃魔法を使っているところは初めて見た。彼が今日の午睡で寝ぼけて発した『吊す』とは、ああいった状態を指すのだろうか？　と、ガタゴトと揺れつつゆっくり移動する馬車の窓の向こう側で前方から真横、そして後方へと流れてゆく逆さ吊りのオブジェを見やる。流水のツルは結構綺麗なだけに、かなりシュールだ。

吊されて半狂乱にもがいているゴブリンの姿を、自らの姿に置き換えて想像してみる。

『お仕置きだ』などと言い放ち、腰に手を当てて高笑いする主と、『わたしよりも背が高くなって良かったですね』と、にっこり微笑んで逆さまのユーリの頬をツンツンとつつく同僚、という構図が即座に思い浮かんでしまった。

今後何か、ユーリが大失敗をやらかしたりすれば、ネコの姿の時にはメロメロに甘くとも、彼女が人間の姿の時にはとても厳しいカルロスが、躊躇うとも思えない。

私の普段着は、主のお下がりである少年用の子供服、半ズボンで良かったかもしれません……

4

馬車が森を抜けて主要街道に出たところでカルロスも車内に乗り込み、馬車は一気に加速して目的地に向けて駆け抜ける。

執事がお嬢様の隣に座る訳にもいかないのか、乗り込むなりカルロスが堂々と「ユーリが揺れる車内に驚いてるからな。俺が近くに居てやらねえと」などとエストと似たような内容を言い放ち、彼女の隣に座った事で、先ほどから突き刺さるような忌々しげな眼差しを向けてきている。

いるのだが……唯我独尊俺様なユーリの主様は、実に平然とその眼差しを跳ね返している。時折エストのふんわりカールした髪を指先で優しく梳いて、耳元に何事かを囁いたりと、オジサマ執事さんの血管大丈夫だろうか？な行状には、流石にユーリも同情を禁じ得ない。

どうして主がシャルさんを連れて来ずに、敢えて私をネコ姿のまま連れ出したのか……ええ、ええ。ようやく納得がいきましたとも。

主にダシにされる為に、馬車酔いになりかねない状況下に置かれているのかと、今更ながらに得心したカルロスの忠実なしもべであるところのユーリは、相変わらずエストの膝の上で丸くなっていた。

この状況では、主と楽しくお喋りという気分にはなれない。

私、馬には蹴られたくありませんしねぇ……

そうなれば、ユーリは黙って丸くなって思索に耽るぐらいしかする事が無い。

という訳で、早速気が付いた事をつらつらと考えてみる事にする。
……広くて真っ直ぐな街道に出た事でスピードが上がった割には、車内の揺れは予想よりも酷くはない。
相変わらず、突き上げられるかのように上下左右に揺れ動くものの、エストの膝から転がり落ちる危険性は感じられないというのは驚きだ。

馬車の性能が突如バージョンアップなどするハズもないので、カルロスが乗り込む前に何らかの対策……（衝撃緩和魔法とか？）を施したか、そうでなければ街道の整備状況が良いかのどちらかである。
ユーリの生活していた日本では交通量も多く、国民は乗り物に乗って移動する生活が当然、国道は整備されているのが当たり前であったが、こちらの世界ではどうなのだろうか。

領主なる存在が置かれている事から考えるに封建制度で、農民は土地に縛られていてもおかしくはない。むしろ、安定した税収入を得るためにあの手この手で縛り付けておくだろう。
街道を使うべき人間が存在するからこそ、道は整備されているものだ。農民が利用する機会はあまりない。

となると、真っ当に考えられるのは商人の行き来、流通が発展しているという事になる。
商人が集まる土地というのは、栄える。情報、金、物品、伝手……そして集まれば集まるほど、蜜に惹かれるように彼らは益々群がってくる。しかし損害を被る危険性を敏感に察知すれば、あっさりと次の上手い商売場所に移る。それが商売人だ。
そんな街を維持する事が可能な支配者……それは即ち、一筋縄ではいかない人物である、という事で。

ではここで一応別視点、真っ当ではない理由で、街道整備の必要に

駆られる理由を考えてみよう。
街道を使うのは人である。
あるが……頻繁に利用し、歩きやすい道を造るとなると、一度に大人数の集団が通るから。ではその集団とは何者か？
他の地域に人が纏まって移動するとなると、パッと浮かぶのは旅人に行商人、避難中難民、戦争を仕掛けに行く部隊、だ。
難民の受け入れ・避難の為に大事業とか有り得ないし。という訳で真っ当じゃない可能性は戦争に使う為、になる。

領主の姫君であるエストお嬢様が、ろくな護衛も付けずにお忍びで領内を出歩いますし……流石に戦時下って事は、ないですよねぇ？

ユーリの背中を撫でるエストの、手入れの行き届いたひび荒れ・あかぎれ・擦り傷一つ見当たらない指先を観察し、無いなと判断を下した。
彼女の肌は、多くの人材やモノが費やされて、美容に関して大いに力が入れられている。身に纏っているドレスの感触からも、いかにも高貴なご令嬢らしく細部に至るまで手が込んでいるように見受けられる。
大貴族の姫君というものは、当主にとっては一種の商品な訳だから、内面と外面を磨き立てる事が重要な訳だが、そうして作り上げる『芸術品』というものはべらぼうに金が掛かる。
つまり、とてもではないが、エストは戦費に資産を湯水の如く費やしている家の姫君には見えない。

“相変わらず、お前の発想転換力は面白いな。
異世界人は、街道一つでそこまで考えるもんか”

揺れる狭い車内で、エストと隣同士に座り、いかにも『揺れるし、狭いんだから、偶然こうなっても仕方がありませんわ』と言わんば

かりに、エストとカルロスは至近距離でドレスの裾に隠れて手を重ね合っている。
2人で睦まじくしていると思えば、そんな事をしながらも主は黙り込んだしもべの思考を読んでいたらしい。

執事さんの目には映りにくいところで、そのような行動……主、まるでドン・ファンのようです。

“誰が漁色家だ”

冗談混じりにからかってみただけだったのだが、カルロスからは即座に、そんなメッセージがユーリの脳裏へと苛立ちの感情を伴って送られてきて、ついでにネコ耳をペシッと軽く叩かれてしまった。

「カルロス、どうかなさいましたの？」
「なんでもねぇよ、エスト。
ユーリの奴がご主人様に対して失礼な事を考えてたから、軽く躾ただけだ」
「ユーリちゃんはまだ小さいのですから、あまり厳しくなさらないで下さいまし」
「子供の頃からしっかり躾ねえと、本人の為にもならねえからな」

テレパスで会話はしていたのだが、表面上ではそんな事は分からない。エストの目には、カルロスが急に寝ているユーリに意地悪をしたように映ったとしても、無理からぬ構図だ。
カルロスは「心配は無い」と呟きつつ、エストの頬を彩るふんわりカールの髪の毛を耳にかけさせ、露わになった耳たぶ……そこに飾られたピアスに、そっと指を這わせた。そして再びそこに唇を近づけ。

「これ、まだ着けてくれてるんだな」
「わたくしの宝物ですもの。
今日もまた一つ、素敵な宝物が増えましたわ」

今ここで、この場で2人っきりであるかのような、そんな熱々空気がユーリの頭上から吹き付けてくる。
別に邪魔入りしたい訳でもないが、なんだかなあ、という微妙な居心地の悪さ。元の世界でも、バカップルと呼ばれる人種とお近づきになった事がなかったユーリには、こういった場面での対応策がサッパリ分からない。

それにしても。カルロスにとって、ユーリが年頃の人間の娘であるという事実は忘れられがちであるが、エストに対しては殊の外隠し通したい項目のようだ。
まあ、気になる女の子に誤解されたくはないという気持ちはよく分かるし、ユーリにとってもカルロスは異性というより仕えるべき主だ。自分を保護してくれている雇い主、という感覚が一番近い。

主がエストお嬢様の事がお好きで、仲良くされていらっしゃるのはとても喜ばしい事です。
けれど、エストお嬢様に私は子ネコであるとしか、知らせようとなさらないのは。まるで『森崎悠里』という存在を全否定されたような、そんな寂しい気がするのは、どうしてなのでしょうか。

そんな事は、最初から分かっている。
主のカルロスが求め認めているのは、気紛れに可愛がれる、愛嬌に溢れた使い魔の子ネコであるユーリであって。
不器用で鈍臭い、取り柄の一つも無い未熟な半人前の人間である森崎悠里ではない。
せいぜい、愛玩動物としての価値しか無い無駄飯食らいのくせに、

人として扱えと要求する方が厚顔なのだと。

私も早く、一人前になりたいものです。
そうすれば、この正体不明の寂しさも、消えて無くなってくれるのでしょうか？

エストの膝の上で丸くなったまま微動だにしない、眠ったように大人しいユーリの背中を撫でる彼女の手付きは、とても優しい。
労るように、ゆっくりと一撫でする毎に少女の手のひらの温もりが、寂しいと震える寒さを追い払っていくようで。
それはまるで、遠い記憶の彼方に眠っていたユーリの幼少期の、母親の記憶を思い起こさせるような。昔はよく、母に抱き付いては撫でて貰う事をねだったものだ。

――泣いてるのか？

――お前さえ良ければ、俺がお前の親になってやる。
――そうか、お前には母親が居るんだな、ユーリ。

――……たとえどんなに離れても……
――……これでお別れだ……

――いつか必ず来る、遠い遠い先の未来でまた会おう。

ん……あれ、何でしょうか、これは。私の母はこんな口調ではなかったのですが。
お母さんの事を思い出しそうになっていたんですが、何故か違う記憶らしきものが。

う〜ん？　と、不可解さに首を傾げて尻尾をパシパシと動かして、あれは誰から言われた言葉だったのだろうと、さして他意もなく車内をキョロキョロしていたユーリは、微妙に気まずそうな表情をしているカルロスと目が合った。
ジーッと見つめ返してみると、ぎこちなく視線を外される。

……ははあ。あれは私の幼少期の、主とのやり取りですか？
また勝手に人の思考を読んだせいで墓穴を掘った、と。

実にわざとらしく、あからさまにエストの膝の上のユーリから視線を外したまま、カルロスはエストと重ねた手に少しだけ力を込めたようだ。
エストは不思議そうに小さく首を傾げて、カルロスの名を呟く。

主と契約を結んだ当時の出来事など、全く記憶に残っていないものと思っていたが、意外なきっかけで昔の思い出が蘇るものだ。
初めてカルロスに召喚されたのは、母を探してさ迷っていた最中の出来事で。

“……ノーコメント！”

ですから主。それは認めたも同然ではないかと、あなた様のしもべは愚考する次第です。

なんだかなあ。
ネコ姿とはいえ、どうして主からぎゅーぎゅーされても断固として抵抗する気になれないのか、分かっちゃいましたよ。
私がちっちゃい頃に、ギュッとして欲しい時にギュッとしてくれたのは、母だけではなくてあなたもだったんですね。

ユーリがニマニマしながらカルロスを見上げている間に、馬車は街の周囲を囲む城壁の外門をくぐった。
その街はパヴォド伯爵のお膝元、伯爵家の居城の裾野に広がる城下街・フィドルカ。

「久しいね、カルロス。
この頃は私も多忙で、君の顔を見に行く事すら叶わなかったが……
息災なようで、何よりだ」
「ご無沙汰しております、閣下。ご健勝そうで何より」
「いやいや、このところすっかり体が鈍ってね……寄る年波には勝
てないものだ」
「またご冗談を」

本棚と、お酒の並んだ棚……そしてテーブルと1人掛けのソファ。
蒸留酒のグラスを片手にそこに座った中年の男性は、正面に立った
ままのカルロスを見上げて笑う。
この部屋はこの方の、私的なプライベート空間……というやつでし
ょうか？

エストの乗ってきた馬車がお城に入るなり、お城の召使いの人にカ
ルロスは問答無用でこちらの部屋の前へと連れて来られ、通されて
みればこじんまりとした室内で寛ぐ男が1人。

彼を目の前にし、カルロスは腕を胸元にあてがって会釈。そして敬
語。
主がそんな態度であるならば、しもべであるユーリがカルロスの腕
の中でそっぽを向いている訳にはいかない。
床にペタンとお座りし、男の視線が寄越されると大人しく頭を下げ
た。

紹介されずとも、カルロスや男の態度でだいたい予想がつく。

ユーリが想像していた以上に若々しいが、この目の前の４０代ほどの男性がエストの父であり、カルロスの後見をしていたパヴォド伯爵だろう。

ネコに向かって『面を上げよ』なんて重々しく許可を出す人種など居るとも思えないので、ほどほどだと思われるところで顔を上げた。だが、さっさとカルロスに視線を戻していると思われたパヴォド伯は、予想に反してしげしげと興味深そうな眼差しをユーリに注いでいる。

腹回りがせり出した、恰幅の良い紳士でもない。
威圧感を増す眼光や鷲鼻で、迫力を滲ませている訳でもない。
パヴォド伯の風貌は、すらりとした美少女顔の美青年がそのまま年食っちゃいました、といった、いかにも権力者としてイメージしていた人物像とはかけ離れた、気迫や覇気といった堅い雰囲気に欠けた風貌の、洗練されてはいるがどことなく浮き世離れした美しい人、といった印象を受ける。流石は親子、エストとよく似ている。

あの綺麗なエストお嬢様が、まさか父親似だったとは……異世界はびっくりの連続です。

こちらも遠慮なくパヴォド伯を観察し返して、ユーリはそんな感想に落ち着いた。
だが、外見が『こう』だからといって、中身も決め付けるのは危険だ。
なよなよしく穏やかで人の良いだけの男が、あんなに活気づいた城下街を持てる訳が無い。

馬車で通過した際に車内から眺めただけであったが、夕刻近くの大通りはどの店も賑わい、行き交う人々は誰もが健康そうで笑ってい

た。
路地をじっくり観察する暇は無かったが、物乞いのような貧しい身形の人も見当たらない。
領主として、街を荒らす事は簡単だが、治安の良い街を維持する事はとてつもなく難しい。

「それで、この子は君の新しいペットなのかい？
男の子かな、女の子かな」
「はい、ユーリといいます。性別はメスで……
ユーリ、この方はパヴォド伯爵、エスピリディオン・ファビアン・パヴォド様だ。ご挨拶しなさい」

はい。お初にお目もじ仕ります、閣下。
ユーリと申します。どうぞお見知り置き下さいませ。

『メス』ってなんですか、『メス』って……と、内心大いに不満ではあったが、伯爵閣下の手前、文句を垂れ流す訳にもいかずに丁寧に頭を下げる。
ネコのままで言葉が通じるとも思えなかったが、敬語を使うのは気持ちの問題だ。

それにしても、バーデュロイ国では家名と爵位が同一なのか。分かり易いと言えば分かり易い……のだろうか。
ユーリがイメージする中世ヨーロッパ貴族の名前は、敬称なども混じって無駄に長いのだが。

「物静かで大人しい子だね。女の子だからかな？
こちらにおいで、ユーリ」

パヴォド伯から手招きされてしまい、ユーリは困惑してカルロスを

見上げる。彼女の主はコクリと頷き、

「閣下の仰る通りに。失礼のないようにな」

無表情で促されてしまった。貴人に対して失礼のないようになどと、相変わらず万事を元の世界での常識で推し量ろうとしてしまう傾向にあるユーリには、難易度の高い命令である。

恐る恐る、ソファにゆったりと腰掛けているパヴォド伯爵の足元にまで歩み寄り、ちんまりとお座りして見上げる。

このまま伯爵の膝の上に飛び乗ると、許可も得ずに触れたとして処断されてしまうのか？　それとも、足元でただじっとしているだけでは面白みが無いと苛立たせてしまうのか？

下手に不興を買われるような判断を下しては、累はカルロスにまで及んでしまう。

彼は手にしていたグラスをテーブルにカタンと置くと、足元のユーリを見下ろして笑う。

ゾクリと、彼女の背筋を駆け抜けてゆく恐怖感。

殊更に厳めしい外見を持たずとも、危害を加えられるような発言が無くとも。ただ笑うだけで、人の心に畏怖をもたらす事が出来る人種が居るのだと、ユーリは生まれて初めて知ったのだ。

硬直してしまったユーリを、両手を使って掬い上げるようにして、伯爵は彼女を自らの膝の上に座らせた。

内心（ひいぃぃ～～！？）と、怯えた悲鳴を上げるユーリであったが、かといってジタバタ暴れて逃れ、カルロスの背後に隠れる訳にはいかない。

大人しく、恐れ多くも伯爵閣下の手で背中を撫でられる、などという機会に恵まれてしまったユーリは、されるがままにじっとしていた。

「カルロス。この子はシャルと同じ、『＊＊＊』なのだろう？」

ひたすら伯爵の膝の上で置物状態になっていたユーリは、かのお方が主に話し掛けるので、ジリジリと体を捻ってカルロスの方へと向き合った。伯爵閣下のご尊顔を拝し続けて、またあの恐慌をきたす表情を間近で見つめたくはない。

主の姿が視界に入ると非常に安堵する自分自身に、（そこまで怯えてたのか、私！）と、二度驚いた。

「はい。とはいえ、ユーリとは数日前に契約を結んだばかりですが」

「なるほど、君は本当に優秀な術者だな。

『＊＊＊』召喚の儀は、失敗例が多いと聞く。それを二匹も、自らの内に取り込まずに保有したままにしている術者は、君ぐらいなものだろうね」

……何か、嫌な話の流れであるような気が致します。

２人も居るのなら、１人くらいは……みたいな？

冷や汗が流れ落ちそうになっているユーリの背中を、変わらずにゆったりとした手付きで撫でる伯爵。頭上の彼の表情は、背中を向けてしまったのでユーリには知る事が出来ないが、目の前のカルロスは、努めて保っていたらしき無表情の中で、ひくりと僅かに眉が動いた。

「私の行動は、閣下の意にそぐわぬと仰せですか」

「いいや？　以前にも言っただろう、カルロス。

『＊＊＊』であるシャルを簡単に身の内に取り込んでは、長期的にその威力と偉力とを人々の心に覚え込ませておくことは難しい。人は、慣れる生き物だからね」

……な、なに、を……？
この人は、何を言っているのだろう？

パヴォド伯爵の声音は、カルロスとユーリがこの部屋へと入室したその時から全く変わらない。荒ぶりも激昂もせず、ただ穏やかで優しげな、今夜の夕食は好物なんだ、とでも気ままに雑談しているかのように。

「シャルを常に側に付き従わせれば、それと知る者に対して、君は『いつでもその気になれば力を得る事が可能』なのだと、簡単に示すのに丁度良い、とね」

パヴォド伯爵の言は、ユーリの耳には『君は示威行為に、武具を常に身に着けて歩きなさい』と、同義のように感じられた。
それも伯爵の言い草からは、使い魔から得る力とは、下手なナイフや鈍器程度の迫力や威力ではなさそうだ。大規模な爆弾の遠隔作動スイッチか、軍用機のヘリが常に上空で滞空してます、レベルだろうか。

「今日はエストだけではなく、君の同期のアルバレス侯の孫とも会ったのだろう？　彼にもユーリを紹介したのかな？」
「いいえ。あの男が知れば、間違いなく無力なユーリから躊躇なく魂を抜き取りますので、隠しました」
「そうか。カルロスは本当に賢い。
君の特異性が簡単に広まってしまうより、最も効果的なタイミングで開示しなくては、切り札の意味が無いからね」
「はい」

クスクス、と、機嫌良く降ってくる小さな笑い声。

使い魔を……いや、『クォン』を、ただ、兵器や道具としてしか捉えていない。
そこに何らかの愛着めいた感情もあるのかもしれないが、所詮はモノ以上には考えていないようにしか思えない。
伯爵にとっては、ユーリの主であるカルロスでさえ、盤上の駒の一つでしかないのだろうか。

私達にも感情があり、生きた存在なのだと……理解していても、切り捨てるべきところとして、敢えて排除して考えていらっしゃるのでしょうか……
これが、権力を持つという事なのなら、辛い生き方ですね……

「閣下。いくらお忍びとはいえ、ご令嬢とアルバレスを共に外出させるとは、些か外聞が……」

アティリオの名が出たせいか、ずっと気にかかっていたらしき事項に関して、懸念を申し立てるカルロス。
自分は馬車の中で、恐らくは未婚の姫君であるエストの手や髪、耳を撫でたり触れたりして、明らかにアプローチを仕掛けていた癖に、そんな事実は彼女の父親の前ではおくびにも出さない。

「それは実はね、カルロス。これはまだ未確定事項なのだが……とても嬉しい知らせがあるのだよ。
アルバレス侯の孫とエストは、婚約が決まるかもしれない」
「……閣下、それは孫にあたるどのご子息の事でしょう？」
「なにを言ってるんだい？
勿論我々がたった今話題にしていた、アティリオ・ミュゼラ・アルバレスに決まっているじゃないか」
「しかし、彼はハーフエルフですよ？」
「アルバレス侯爵の内孫である事には変わりがない」

えー、あのマント男さん、マジでエストお嬢様に横恋慕ー！？
いや、貴族間の婚約や婚姻には、本人の意思とか考慮されないのかもしれませんが。

相変わらず伯爵の膝の上に乗せられたまま撫でられつつ、ガビーン！？　と、尻尾を伸ばしてわなわなと震わせているユーリをヨソに、穏やかな口調のパヴォド伯と、内心を押し殺しているらしきカルロスの会話は続く。

「それにね、カルロス。
私はエストには幸せになってもらいたいのだよ」
「しかし、あの男では……」
「このままではあの子は、殿下が成長なされた暁には、本当に側妃に召し上げられてしまうだろう」
「……それは」
「あの子は聡い。それはそれは、上手くご正妃様や他の側妃の間を取り持ち、後宮の手綱を握るだろうとも。
しかし、そこにエストの幸福はあるのだろうか」

室内に、沈黙が下りた。
ユーリとしては、少し怖いという印象を抱いたパヴォド伯爵が、自分の娘の事に関しては彼女の未来を憂う心があるのかと、なんだか安心するものがあった。
伯爵といえども父親であり人の子、やはり娘は可愛いのかと、垣間見せられた人間らしさに緊張感が解れていくのを覚えた。
……そう、この時は。

「その点、アルバレス侯の孫は実に都合が良い。
彼は昔からエストと交流もあり、術者である君でさえ難色を示すハ

ーフエルフだ。
家格も申し分なく、王家に対しても侯爵家に対しても、この後どう転んだとしても捌きやすい」

……あれ？　何か変な言い草じゃないですか、伯爵閣下？
なんだかそれ、エストお嬢様が本当に幸せになれるように旦那様を厳選したというより、閣下がエストお嬢様を餌に策略を巡らせやすい、みたいな……？

「ですが、それではあまりに……」
「これは君への相談事ではないよ、カルロス。
殿下の側妃への話も、アルバレス侯の孫との婚約も、あくまでどちらも『纏まるかもしれない話』だ」
「……申し訳ありません。出過ぎた真似を致しました」
「いやいや、カルロスらしいね」

唇を噛んで俯くカルロスに向かって、先ほどから一切揺らぐ事が無い穏やかな声音が、ユーリの頭上から降ってくる。
おずおずと、ユーリは勇気を出して体を背後へと向け、伯爵閣下の顔を見上げた。

「あの子の幸せの為に、これから先も、君もより一層頑張ってくれるだろう、カルロス？
だって君は、昔からエストの事を本当に大切に思っているのだから」

閣下はただ、笑う。
笑いながらそんな言葉を、カルロスへと告げた。

この方、は……
結局はご自分の娘でさえ手駒でしかなくて。

そして、後見して養育した配下と娘が想い合っている事を見透かした上で、尚その感情さえ、利用されようとしていらっしゃる……？

恐らくカルロスは、彼自身の想いが伯爵に知られている事に気が付いている。

そして伯爵もまた、こうして言外に脅迫してくる事から考えても、知っている事をカルロスが自覚している事に気が付いている。

――あなたは、わたくしの父の思惑に、十分に応えてしまった。

エストのあの言葉の意味は。

カルロスが、優秀な魔法使いに育ったという意味だけではなくて。

決して、パヴォド伯爵に反旗を翻す事が叶わないほど、雁字搦めに捕らわれた状態である事を、彼女もまた知っている、という意味ではないのか。

……そう、他ならぬエスト自身の存在によって。

2

夕食を一緒にとるかね？　というパヴォド伯爵のお誘いを丁重に辞したカルロスは、メデューサでも直視したかのようにピキーン！と硬直してしまっているユーリをその腕に抱き上げ、部屋を後にする。

そのままスタスタと、無人の廊下を早足で歩き出したカルロスは誰に案内されている訳でもないが、彼の足取りは迷いがなく、目的地もはっきりしているようだ。

主、このお城の間取りにお詳しいので？

なんとなく、主とエスト、そしてパヴォド伯爵に関しては、簡単には踏み込んではいけない事項のような気がして。その必要があればカルロスは話してくれるだろうし、ユーリが今何を考えているのかだとて、主にはお見通しだ。知る必要の無い事はつつき回さない。いずれにせよ、ユーリに求められている事はカルロスの負担を減らす事であって、主人としもべとしての分は弁えておくべきだ。

“ ああ、大まかなところはな。閣下やパヴォド伯家の祖先が、秘密の通路や隠し部屋をこっそり造ってるかもしれんが”

古城に存在する秘密の通路！　隠し部屋！　まさにロマンと冒険ですね、主！

そんなカルロスからの返答に、ユーリはカルロスの腕を無意識のうちに尻尾でポムポムしていた。

彼女の脳裏には、日本で遊んだテレビゲームや冒険小説の世界が広がった。
そんな血肉沸き踊る世界が、手の届くところにある！……かもしれない。

“地下には拷問部屋や、通路には盗賊殺しの仕掛けがあるかもしれんがな”

……ッ！！

“まあ、どうしてもお前が冒険してみたいと言うのなら、前々から隠し部屋への入り口なんじゃないかと睨んでたところへお前を放り込んでやるのに、俺もやぶさかじゃない”

イイ笑顔を浮かべて見下ろし、そんなテレパシーを飛ばしてくるカルロスに、ユーリは懸命に首を左右に振った。
このご主人様は、やると決めたら本当にやるお方である。
ネコの姿では脱出不可能な迷宮へと放流された暁には、ユーリが大混乱をきたしながら右往左往する様を、腹を抱えながら高みの見物と決め込むに違いない。テレパスを駆使しての、リアルタイムで冒険実況ラジオ状態……自分が迷宮に潜る方でなければ、とても楽しそうだ。

あー、えー、主。
ところで、今はどちらへ向かっていらっしゃるのでしょう？

パヴォド伯と対面した部屋周辺は非常に内装にも凝っていたのだが、カルロスが歩を進める廊下はどんどん殺風景になってゆく。こちらは城の外周に近い回廊なのだろうか？　ガラスも入っていない、ただアーチ状に開けてあるだけの大きな窓が並び、主の腕の中から身

を乗り出して下方を覗き込めば、歩哨らしき人々が簡素な武装に身を固め、2人一組で巡回しているらしき姿が小さく見えた。

先ほどまでの通路の床には豪華な絨毯が敷かれ、両側の壁には等間隔で燭台が取り付けられており、明るく照らし出されていたのだが。今は大きくアーチを描く窓の向こうから差し込む、暮れてゆく夕日の茜色の光が唯一の光源である。

石材の床はカルロスの足音を小さく響かせ、カツン……カツン……と、無人の廊下に溶け込んでゆく。

そして廊下の突き当たりに辿り着き、彼はそのまま螺旋階段を軽快に上りだした。外から城を眺めた時に見えた、塔のうちのどれかだろうか。

“このまま上に行って、結界の定期メンテ。

この城だけじゃなくて、フィドルカの街とその周辺をカバーする大規模結界だからな。穴が空かないようにしとかねーと”

ぐるぐると回りながら上る螺旋階段は、やはり空間が開いているだけの換気と採光用の窓と思しき物が要所にある。雨や雪が降ったら、簡単に滑り落ちそうだ。

それが、主のお仕事のうちなんですね。

ところで、『結界』って具体的にはどんな効果があるんです？

“この城のは、単純に魔物の侵入を阻む壁。

家の周囲のは、それプラス住人以外の侵入拒否と、探知遮断”

……探知？

“連盟の連中に、俺の住まいを知られたくねえからな。

けど、見る奴が見れば遠距離からでもそこに結界があって、誰が張ったのかはだいたい分かる。けどそれじゃあ意味がねえだろ？　お前流に言うと、『ステルス』を付加してる”

ふわ～流石は剣と魔法の世界……こちらの世界は魔物除けの結界などというものがあるのですね。

道理で、カルロスの家でのほほんと暮らしていた頃は、魔物の姿を影も形も見掛けなかった筈だ。今日のように家の敷地から出れば、すぐさま馬車に襲い掛かろうとするゴブリンなんて存在が、グリューユの森には存在していたのに。

ところで、伯爵との対面を経てからこっち、カルロスとユーリはずっと、思念によるテレパシーを使用して会話している。

どうも、ユーリがカルロスの使い魔であるという事実はパヴォド伯爵の命令通り隠し通すつもりであるらしく、自宅以外での主は、ネコ姿の彼女との会話は全て徹底的にテレパシーで済ます事に決めたらしい。

先ほどから人の姿が全く見当たらないにも関わらず、カルロスは決して口を開こうとはしない。

夕日も大分傾いてきた頃、ようやく螺旋階段は終わりを告げた。

床一面に、どこか見覚えのある複雑な紋様や文字が記された魔法陣が描かれており、どこで見たのだろうかと記憶をひっくり返すと、カルロスの仕事部屋の一室の床と似ている気がした。

この塔の最上階は壁らしき物がなく、ただ四方を太い石柱で囲むのみであり、天井は高い。転落を防ぐような柵は見当たらず、おまけにこの塔の最上階は城の中で最も高い場所なのか、見晴らしが恐ろしく良い。お前1人で上れ、と言われたらユーリはウンザリするような高さだ。こういう時は、本当にカルロスに運ばれて移動する場

合が多いネコ姿で良かったと思える。

目的地に到着するとカルロスはユーリを腕から下ろし、

“今日はシャルを連れてきてねえから、あんまり隅の方へは寄るなよ”

そんな注意を促して、魔法陣の中心に立った。わざわざ言われなくとも、あんな強風に煽られて簡単に転落死しそうな隅の方へなど、近寄る気にもなれない。

というか、先ほどの主の言では、シャルが側にいれば落ちかけても助けて貰える、という意味に聞こえたのだが、あの同僚はそんなに機敏だったのか。

普段のほわんとした雰囲気からは全く想像もつかないが、カルロスがそう言うからには、転落しかけた誰かを救った実績が恐らくあるのだろう。

……それにそう、ユーリも今日の昼間、うっかりと井戸の中に転げ落ちそうになったところを、シャルにサッと救われなかったか？

取り敢えず、陣の上にユーリが立っていようが問題は無さそうなので、目を閉じ何やら呪文を唱え始めたカルロスの傍ら、主のブーツに頭を預けるようにして、ちょこんとお座りしておく。場所が場所だけに、何かこう離れるのが怖い。

そして、手持ち無沙汰につらつらと1人で考えこんだ。

益々不思議な人です、シャルさん……帰ったらじっくりお話を聞き出したいものです。

というか毎回毎回、なんだかんだと邪魔や仕事が入って、私、シャルさんと2人きりでじっくりお喋りとか、した事無くないですか？

一緒に居ても、会話はお勉強お勉強ばっかりで……

お留守番中のシャルさんに、この機会に何かお土産を買って行きた……いですが、私、こちらの世界の通貨を持っていません。主にお願いしたら、買って下さるでしょうか？

「光の導は星と共に、我らの灯火を司る。
暗雲を払い、我らの頭上に輝け！」

ボケーッとよそ事を考えているユーリはさておき、ずっと集中してブツブツと呟いていたカルロスが最後にそんな呪文を唱えると、床の魔法陣が輝きを放ちだした。主の魔法の副作用か、心持ちユーリの体まで仄かに光っている気がする。単なる反射なのだろうが。
ゆっくりと、魔法陣から光を放つ蛍のような丸く小さなものが幾つも幾つも浮き上がってきて、ふわふわと城とフィドルカの街上空へ向かって舞い上がってゆく。

綺麗ですねぇ……これが結界の修復ですか。

“……ああ、そうなんだが……”

感嘆の声を上げるユーリに、カルロスは腑に落ちない様子で首を傾げた。

どこか、結界や修復の術に不具合でも見受けられたのですか？

“いや、逆。やけにスムーズに修復が行われてるし、今まで以上に規模も耐久も強化されてる”

……という事は。前回結界のメンテを行った時から、主は魔法使いとして、劇的に成長したのですね！

“……そうなる、んだろうが……”

知らぬ間のレベルアップ、めでたいめでたいと単純に喜ぶユーリを再び腕に抱き上げて、カルロスはしかし納得しかねる様子で考え込んでいる。

ユーリはパタパタと尻尾を振り、にゃーにゃーと鳴き声を上げた。

うう、視点が益々高く……あ、あんな遠くにもっと高い山が……

もう殆ど沈んでしまった夕日とは丁度反対方向に、暗く遠く霞みながらも、山脈が見えた。

なんだか、東京タワーから富士山を眺める観光気分だ。

それを見物している間にもジリジリと太陽は地平線の向こうへと沈んでゆき、世界は暗闇に閉ざされた。

“ああ、あの山な。そうだな……あれは言うなれば、魔王城だ”

は！？

発光し続ける魔法陣から、ふわりふわりと小さな光の球体が舞い上がってゆく中、もっともらしい表情を浮かべたカルロスが、腕の中のユーリを見下ろしつつそう告げてきた。

“そして十中八九、俺の祖先の故郷でもある”

はい？　え、魔王城がですか？

というか、この世界には魔王が居るんですか！？

カルロスはわたわたと慌てるユーリをしばし眺めて……堪えきれずにぶぶっ！　と吹き出した。

“ま、本当に魔王なんて存在が居るかは定かじゃねえが、あの山から魔物が湧き出てくる事は確かだ”

カルロスの解説に、ユーリは『はあ……』と、気の抜けた吐息を吐いた。

一瞬、そういった認識を受けている存在がいる世界ならば、勇者様的な英雄が現れたりするのだろうか！　などと、現実的な生活の危機も忘れてミーハー根性がむくむくと湧き上がったが、どうやら彼女の主の単なる冗談であったらしい。

こちらの世界でも、魔王はお伽話の中で存在しているのですね。ガキっぽい趣味を持ってるしもべで申し訳ありませんね！

それにしても、何故にそんなところにカルロスの祖先は暮らしていたのかと、素朴な疑問が湧いてしまう。

しかし、ユーリがその疑問を主へとぶつける前に、

「……エスト？」

「やはりこちらでしたのね、カルロス」

修復のお仕事を終えて最早ここでの用事は済んだのか、螺旋階段の方へと振り向いたカルロスの目の前に、丁度そこをカンテラを片手に上ってきたエストが姿を見せたのである。

互いの目と目が合うなり、ふわりと微笑み合う男女。

お邪魔虫にならないよう、ユーリは慌ててカルロスの腕から飛び降り、早歩きでエストの傍らにまで出迎えに向かう背中を眺めた。

……もしや主は、以前からこの場所でエストお嬢様と、人目を忍ん

で逢い引きとかなさっていらしたんでしょうか？
ここに居たら確実に私、邪魔になってしまうのですが……かといって、このまま1人で帰宅とか無理ですし。
いえ、むしろお留守番しているシャルさんへのお土産を、ちゃんと用意出来るのかが益々心配になってきました。ごめんなさいシャルさん、今夜のお夕飯はとっても遅くなりそうです。

3

ただ今、螺旋階段の影からこんにちは、なユーリです。

「お前はまた、こんなところに忍んで来て……階段で転びでもしたらどうするんだ？」

「ふふ、そんな事を仰っても無駄ですわ。わたくしのお転婆ぶりには、カルロスも匙を投げたではありませんか」

未だ淡く輝きを放ち、発光する小さな球体が舞い、周囲を幻想的に照らし出す塔の最上階で。

カルロスはエストの手を取り、呆れたようにそんな小言を口にするも、彼女はわざとらしく小首を傾げてにっこりと微笑んでみせた。

うーん、舞台装置も雰囲気もバッチリ、今回は無粋な横槍を入れてくるお目付役もいません。

私は唯一の観客として、姫君と魔法使いの恋物語を、遠慮なく見物させて頂こうと思います。

当人同士の側に居ると実に居心地が悪いですが、こうして離れた場所からじれったい男女を眺めているのは、乙女としてはやっぱり興奮しますねぇ……！

「それは自慢にならん、自慢に。

……エストがこんなところにまで来なくても、帰る前に俺の方からお前のところへ訪ねるつもりだったんだ」

「そうしてわたくしには素っ気ない挨拶だけを告げて、帰ってしまうのでしょう？」

「当たり前だ。ここは閣下とエストの家であって、俺の家はあの森にあるんだからな」

エストは拗ねたように「酷いわ」とだけ呟いて、カルロスの手を両手で握る。そうして何かをねだるように、無言のまま彼を見上げて。カルロスは自身の感情を抑えるかのように、困ったようにしながらも表情をしかめる。

「エスト……エスト、エスト、俺は……」

「分かっていますわ、カルロス。わたくしだって……」

ゆっくりと、足元から舞い上がってゆく光の球体が数を減らしてゆく中で。

そのまま2人はただ無言で見つめ合い、カルロスはエストに取られた手を眼前にまで持ち上げ、片方の手を取り、ゆっくりとその指先に唇を落とす。とても大切そうに、一本一本に触れるだけの口付けを捧げ、そのままひっくり返すと、今度は彼女の手のひらへと。その間、もう片方のエストの手は、カルロスの空いた方の手によって指を絡めるようにしっかりと握られ、捕らわれていた。深い溜め息と共に押し当てられていた唇が離れると、エストはそのままその手をカルロスの頬にあてがう。

「このままお前を連れ出したら、どうなるかな」

エストの手のひらの温もりを味わうかのように目を伏せ、カルロスは低く囁いた。

そんな主の一言に、ひたすら縮こまって邪魔にならないよう傍観していたユーリはビクリと身を震わせた。

身分違いの恋の果ての駆け落ち……ありきたりな話だが、主人がそんな選択をしたりすれば、しもべである自分はどうなるのだろうか。

一緒に連れて行かれる？　置いてきぼり？　それとも……

「それはもう、父は冷静に連盟に対して抗議するでしょうね」
「だろうな。そうして連盟はスポンサーと国、両方に背いたとして、死に物狂いで俺に追っ手を出すな」
「逃亡と潜伏の連続で、追っ手を返り討ちにして……けれど、どこまで逃げてもマレンジスに安息の地はないのでしょうね」

……な、何か2人して、淡々と凄い会話してません？
今まで何度も、駆け落ちについて考えを巡らせたって事なのでしょうか。

「そんな生活、俺はゴメンだね」
「気が合いますわね。わたくしもですわ」

台詞こそ冷たく響くが、カルロスもエストも、痛みを堪えるかのように辛そうな表情を浮かべている。

「結局は、まだ現状維持、だな」
「カルロス、わたくしはあの父の娘。黙って言われるがままに踊る人形ではなくてよ」
「頼もしいな。
俺も、曲がりなりにもあの方に育てて頂いたんだ。自分に不利な勝負なら、素知らぬ顔してゲームを外部から操作するのは得意だね」

クスリ、と、小さく笑いを漏らす2人。

「なあ、エスト……あまり早く、大人にならないでくれよ？」
「カルロスったら……」
「もう少しだけ、俺に時間をくれ。そうしたら……」

「ええ……」

その時、先ほどから数を減らしていた光の球体の最後の一つが舞い上がり、それで結界修復術は完了したのか、淡く発光し続けていた魔法陣はフゥッと光を消し……月と星々、そしてエストが持参してきたカンテラの灯りのみになった。

夜空に浮かぶ星の煌めきと、地上の城下街や城で明々と浮かび上がる篝火の光。それらが一体となり、まるでこの塔の最上階のこの部屋だけが、世界から切り取られたかのような。

時は、彼らの望み通りに止まってしまえるのだと、そう錯覚させる。

「流石に暗いな……」

カルロスがパチンと指を鳴らしながら「光よ」と呟くと、彼の指先に光り輝く光源が現れた。魔法使いが光を生み出すなど、いかにもな魔法で雰囲気はバッチリなのだが……

あ、主……何故、懐中電灯代わりの明かりを、超ミニサイズのネコなどという形状にする必要が！？

実に器用ですが、あなた様はどこまでネコ好きなんですか、今までの『をとな～』な雰囲気が呆気なく霧散して、そこはかとなくダレた空気に早変わりしたんですけども！

肉球で石造りの階段をバシバシしつつ、内心でそうやって全力ツッコミを入れているユーリをヨソに、カルロスの作り出した明かりを目にしたエストは、

「まあ、とっても可愛らしいわ！」

「だろう？」

おおおい！？　エストお嬢様まさかの大喜び！？
ちょっ、どんだけネコ好きなんですかこのカップル！？
しかも主、エストお嬢様の賛辞に鼻高々だし！　こっち向いてどや顔しないで下さいませんかね？

「エスト、流石にこんな遅くまで行方を眩ますのはまずい。部屋まで送る」
「……分かりましたわ」

部屋へ帰る事を促すカルロスに、エストは数瞬躊躇ってからコクリと頷いて……辺りを見回して小首を傾げた。

「ところでカルロス、ユーリちゃんはどちらに？」
「ん？　ああ、あいつなら今見張り番中。ユーリ、もうこっちに来て良いぞ」

別段、ユーリは誰かが階段を上がって来ないかどうかを見張っていた訳ではないのだが……いや、誰かが上ってくる足音が聞こえれば、それは即座に迷わず主へと伝えるので、見張り番をしていたと言えなくもない。結果的には初志貫徹に野次馬っていたのだが。

カルロスの呼び掛けに応えて階段を上がり、ひょっこりと顔を覗かせたユーリを、エストが嬉しそうに抱き上げてきた。
この子ネコの姿になっている際は、様々な人々からとにかく抱っこされたり撫でられたりの毎日だが、果たして自分はこのままで良いのだろうかと、若干哲学的な気分になる瞬間だ。いや、ネコ大好き主のお望みのままな訳だが。

そういえば、と、ふとユーリは考える。

今こうして、ユーリを抱き上げて頬擦りしてくるエストも、ぐりぐりと頭を撫でてくるカルロスも。決して、お互いを抱き締め合おうとしない。

カルロスはどちらかと言うと、積極的で情熱的なたちであるようだ。その眼差しに熱い恋情を滲ませ、愛おしげに手のひらへ口付けたりしているくせに、強く惹かれているのは傍目にもよく分かるのに。

どうして……『好きだ』『愛してる』とは、口になさらないのでしょう。

お互いの気持ちが通じ合っていても、相手の口からその言葉を聞きたくなるものではないのだろうか。

こちらの世界では、直裁的な言葉を相手に掛ける事は、無粋だとして避けられているのか。それとも。

……例え誰に邪魔される事なく2人っきりの逢瀬でも、決して抱き締めたり好意を口にしてはならない、そんな理由があるのかもしれません。

ユーリの脳裏に、パヴォド伯爵がカルロスに向かって、エストについてを話す際の笑顔が蘇り……ゾクリと、背筋に悪寒が走ったのである。

伯爵にとって、カルロスも、エストでさえも、有益な手駒なのだとしたら。彼らの確定的な行為一つで、ここぞとばかりに何らかの処置が下されるのかもしれない。

伯爵の思惑がどこにあるのかはユーリには全く分からないが、そもそも曲がりなりにも大貴族の姫君である自分の娘の子守を、年端もいかない少年に任せるなど、考えてみればおかしな話だ。

……そもそもの発端からして、将来2人がこんな感情を抱くよう、

伯爵がそうして策略を巡らせて仕向けたのだとしたら。ユーリの主は、かのお方の掌の上でいいように転がされているという事になる。

……大丈夫。例えそうだとしても。

私の主は、やると決めたらやり遂げるお方なのですから。

パヴォド伯爵が娘と配下を利用して何を企てようとも、カルロスは黙って不利益を被り、みすみす望ましくない相手の手に想い人を渡すような人ではない。

生まれて間もない子ネコだと信じて、素直に可愛がってくるエストの頬に、ユーリは自らの頬を擦り付けた。

愛くるしい彼女は、驚いた事に自分よりも年下の少女なのだから。

年上のお姉さんとして、お嬢様の事は私が守って差し上げなくてはね。

4

「ユーリちゃん、わたくしね、あなたへプレゼントを用意致しましたの」

エストが持参してきたカンテラはカルロスが手に持ち、2人はそのまま螺旋階段を下りていく。今度はそのエストの腕に運ばれる形で塔から下りつつ、ユーリは「にー？」と鳴きながら小首を傾げた。

このお嬢様からの贈り物とはいったいどんな物なのか、非常に気になる。

気になるのだが……それよりも、ユーリの体はそろそろ空腹を訴えていた。

思えば、家でおやつにクッキーを一つとミルクを飲んで以来、何も口にしていない。それはお腹だって減る。

「うふふ、気になります？」

楽しげかつリズミカルな足取りで螺旋階段を下りきったエストは、そこでユーリを床へと下ろした。

何事だろうかと、大人しくお座りして彼女を見上げるユーリの首に、ポケットから取り出した物をスルリと巻き付けるエスト。

「さあ、これで良いわ。

女の子なのだから、お洒落にも気を遣わなくてはね。とっても可愛らしいわ、ユーリちゃん」

そうして、実に満足げに満面の笑みで再びユーリを抱き上げるご令

嬢。
首の辺りを恐る恐る触ってみると、ツルツルと滑らかで細い何かが巻かれているようだ。
キツくもなく、緩くもなく。
先ほどエストがポケットから取り出した時に見えたのは、ピンク色の何かだったが……

主、これもしかして首輪ですか？

ユーリ自身は、ネコ姿の際に仮に首輪を着けられても、チョーカー感覚で流してしまえるので、気分的な面では実のところさして抵抗感はない。
しかし、ネコ好きなカルロスが、飼いネコ扱いなユーリに首輪を着けていない理由はただ一つ。
人の姿に戻る際に、首輪で喉が締まったり、下手をすると同化したかのように体内へとおかしな風に食い込む危険性があるからだ。なので、絶対に着けられては困るのが首輪だ。

“いや、リボンだな。質も良さそうだし、結び方も簡単だ。
仮にそのまま人間に戻っても、解けて落ちるぐらいだな。
エストはシャルとも付き合いが長いし、変化に伴う装飾品の問題だとか理解してる”

な、なるほど……ん、あれ？って事はもしかして、エストお嬢様って実際にシャルさん（イヌバージョン）に首輪を着けてみた事があるんでしょうか……でもって、そのまま人間の姿に戻って大騒動！
その経験を生かし、主は私に首輪を着けようとはなさらない、とか。

そんな訳無いですよねー？　と、エストの腕の中で尻尾をゆらゆら

させつつ、冗談めかしてカルロスに向かってそんな念を送ってみたユーリ。
対するご主人様からの返答は、というと。

“……ノー、コメント”

ぱたり、と、思わず尻尾が落ちた。
カルロスのこの反応は、ユーリには肯定としか受け取れないお言葉である。

シャルさん……そんな過去が……ですよね、昔に誰かの失敗があったからこそ、私の身の安全を図るべく『首輪ダメ』な忠告を告げられるんですよね。

ただ今お留守番中な偉大な先輩が居る（恐らく自宅は向こうの方角だ！）と思しき方向へと、ユーリはちんまりと頭を下げて黙祷を捧げた。
取り敢えず、シャルが作っているであろうお夕飯が、早く食べたいユーリである。

ああ……主は帰りがたいのでしょうが、私としては古城から自宅へ早く帰りたいです。
あ、結局シャルさんへのお土産はどうしましょう……？

エストを彼女の部屋へと送り届け、例の壮年の執事やら年長のメイドからは冷ややかな眼差しを受けつつも、カルロスは平然とした様子で優雅にエストに別れの挨拶を告げて、そのまま城門を後にした。
どうも、エストとカルロスの仲は、年配の人ほど歓迎されていないらしく、若いメイドさんなどは頑張れと言いたげにキラキラと目を

輝かせていた。

そんな訳で、お土産お土産と繰り返し申し立てるしもべの頭を鬱陶しげにグリグリしたカルロスは、厨房から持ってきて貰ったお土産の包み……中身はなんだろう、楽しみです……を片手に、ユーリを片腕に抱きつつ早歩きでフィドルカの街を抜ける。

城門から外門までのメインストリートは大賑わいで、夜間にも関わらず人込みでごった返している。

主、まさか家までこのまま歩いて帰るんですか？　馬車は？

“あのなあ、そうしたらまた、安全な場所まで馬車を送ってかなならんだろうが。

昼間ならこれから街を出る馬車に便乗させてもらうんだが、今は夜だしな……”

そんなカルロスからの回答に、ユーリは片腕だけという微妙にいつもよりも安定の悪い腕の中で顔を上げた。

ならば主、今こそ箒の出番ですよ！

魔法使いと言えば箒で空を飛ぶ、これ定番です！

「はあぁぁぁあ？」

ユーリからのテレパスに、思わず素っ頓狂な声を上げたカルロスである。とにかく忙しそうな人々が行き交う人通りの多い道なので、すれ違う人々はチラリと彼に目線を寄越しはしたが、興味無さそうにすぐさま自分の用事に戻ってゆく。

そして、ユーリが脳内に描く『箒で空飛ぶ魔法使い』の図を正確に読み取ったカルロスは、

“アホだ……アホ過ぎるだろう、このアホネコ”

重々しく苦悩に満ちた感情と共に、そんなメッセージを送ってきた。

それが私の世界の由緒正しき魔法使いのイメージなのです！

だがしかし、とにかくめげずににゃがにゃが訴えまくったユーリ。

空を飛んでみたいという情熱は、人の根源的な欲求ではないかと思うのである。

……それで結局、どうなったかというと。

「要するに、風を吹かせて浮き上がれば良い訳で……

つまり術式としては……」

頑張って、主！

フィドルカの街の外門から出て、大通りの店で買い求めた箒に横座りで腰掛け、ブツブツとぶっつけ本番に新しい魔法を組み上げてゆくカルロス。

そんな彼の上着の中から顔をひょっこりと出した状態のユーリは、ワクワクしながらしっかりと服にしがみついていた。カルロスは両手で箒を掴むので、彼女を抱き上げ支えてやる事が出来ないからだ。

「風よ、天空を舞い踊りし自由なる風よ。我らにその意を示し、大地の楔を断ち切れ！」

カルロスの唱えた呪文に合わせて、ゴッ！　と、箒の後方から強風が吹き付けてきた。

しっかりと箒を握るカルロスの両足が浮き上がり、そのまま勢い良く飛翔する。

「……あ！？」

本当に飛んでる、凄い凄い！　と、興奮するユーリだったが、次の瞬間には視界が回転。

カルロスは箒ごとバランスを崩して地面に落下し、ユーリはその衝撃でころんと上着の中から草原へと放り出されていた。

「つ～っ！　だあっ、スピードは出るがバランスが面倒だ！　ユーリ、無事か！？」

ぶっつけ本番の夜間飛行に、カルロスは苛立ちを吐き捨てつつ、転がっているユーリの顔を覗き込んできた。

――ごめん悠里、怪我はない！？

ああ、私を自転車の後ろの荷台に乗せてて転んだ時の、お母さんの顔とそっくりです、主。

ふふふ、主大好き！

“……怪我は無さそうだな。

よし、さっさと帰るぞ”

けらけらと楽しげに笑いながらのユーリのそんな感想に、乱れた髪をかきあげつつそっぽを向いたカルロスは、再び彼女を自らの上着の内側へとそっとしまい込んだ。

ユーリからのストレートな好意に、滅茶苦茶照れているらしきカルロス。

ふ。やはり我が主は可愛らしい方です。

“うるさい！”

照れ隠しの素っ気なさも、最早慣れっこだ。

そのままスピードを出しては転げ落ちたり、強風に煽られて左右に揺れ動いたりしつつも、カルロスは自宅へと帰り着く頃には、すっかりと『箒で飛行術』をマスターしたようである。

何気に満更でもなさそうなカルロスと、スリリングな夜間飛行をたっぷり楽しんだユーリの2人を出迎えに出て来た、お留守番係なシャルは、

「……マスター、何故、そんなに服を泥だらけにして帰ってくるんですか？　ユーリさんまで……」

主人と同僚の見るも無残なぐしゃぐしゃ泥塗れな姿に、呆れたように嘆息したのである。

ただでさえ毎日忙しいシャルに、明日は朝一で泥塗れのお洋服を徹底的にお洗濯というお仕事が増えた瞬間であった。

微妙に怒っているらしきシャルの姿に、やっべー……と呻きつつ、ユーリはカルロスの腕の中で小さくなった。

「ユーリがな、どーしーてーも箒で空を飛びたい、とにゃーにゃー鳴いてうるさくてな。仕方がなく、だ」

「なるほど……？」

だが、そんなユーリをあっさりと人身御供に差し出すご主人様。カルロスにとっても、服を汚して帰宅というのは些かマズいものがあ

る事態であるらしい。
微笑みを浮かべた同僚は、カルロスの腕の中からユーリを抱き上げ、濡れタオルでグイグイと汚れを拭い始めた。

「後で、じっくりお話しましょうか、ユーリさん？」

何故、こちらの世界には笑顔が怖い人種が、こんなにもいらっしゃるんでしょう？
主のバカーっ！？

「ユーリさん、お返事は？」

は、はいぃぃっ！

「そうそうシャル、ユーリがお前に土産を持って帰れと、これまたしつこくてな」

笑顔のままユーリを見つめるシャルと、再びピキーン！　と硬直してしまったユーリを見かねたのか、最初から彼女へ投げっぱなしにするつもりはなかったのか、カルロスが救いの手を差し伸べてきた。

「お土産、ですか」
「ああ、この包みだ。お前の好きにしろ」

ぱちぱちと瞬いてカルロスを見返すシャルに包みを渡し、ご主人様はひらひらと手を振りつつ本日二度目のお風呂へと向かった。

「お土産……香辛料と食べ物の匂いがしますが、何でしょうね」

先ほどまでの怒りはどこへやら、シャルはいそいそと包みを開封す

る。
同僚のタオル攻撃が止んだのを幸いに、肩の上に乗っかったユーリも興味津々で中身を覗き込む。
そして、中から現れた物は。

「……ユーリさん」

は、はい。

「あなたはつまり、マスターにとってイヌであるところのわたしは、こういった物を常に食べるべきである、と仰る訳ですね？」

違いますっ、いっぱい墜落したせいで潰れちゃっただけで、不可抗力なんですーっ！？

パヴォド伯爵家のお城のコックさんが、丹誠込めて作ってくれた燻製ベーコンとソーセージ……だったらしき物は、ぐっちゃりでべったりに、中身の具材も飛び出てミンチ的な状態。保存が利く食料品をわざわざ選んでくれたようなのに、包みの中でエラい事になってしまっていた。
ベーコンはともかくとして、この大量の元ソーセージなミンチ肉は……

「食べ物を粗末には出来ませんし、ユーリさんも責任を持って、駄目になる前に全て消費して下さいね？」

わ～いお肉パーティーだー、豪華ですー……

同僚からの有無を言わせぬお言葉に、ユーリは棒読みで喜びの声を上げるに止まった。

閑話　ご主人様から見たわんことにゃんこ

風呂を使ってさっぱりし、帰宅が遅くなったせいか、嫌味のようにシャルが時間を掛け手間暇を掛けて作った、手の込んだ夕食を平らげたカルロスは、食後のお茶を飲みつつエストから渡された本を読んでいた。

想い人からの贈り物が本だなんて、そこはかとなくロマンチックな何かを期待した自分が甘かったのか。などと嘆くも、表紙を見て納得した。

流石はエスト。

俺の趣味をよく分かってるな。

贈られるとお互いが嬉しい物を選択出来る。そんな関係がある種、特別である事の証明なような気がしてくすぐったい。

エストの柔らかい微笑みが脳裏に蘇り、思わず熱い溜め息が漏れてしまう。

彼女はまだ子供だと、そう自分に言い聞かせても無駄で、気持ちが引き摺られていくのを抑えきれなくなったのは、いったいいつの頃からだっただろう。一目見たその日から、カルロスにとってエストは特別だったのかもしれない。

「マスター、1人でニヤついているところを申し訳ありませんが」

「誰が不審人物だ」

ご主人様はただ、可愛い少女の事を想っていただけであるというのに、しもべであるわんこはにべもない。というか、今のシャルは本当にイヌバージョンになっていた。

「急にそっちになって、どうしたんだシャル？」

思わず無意識のうちにフラフラと、床に寝そべったシャルの傍らに座り込み、その見事な毛並みの巨体に手を伸ばして撫で撫で撫で撫で。相変わらず極上の毛皮で触り心地が良い。イヌ万歳。

基本的に、ユーリの方は彼女自身が膜の操り方を把握していない事もあって、カルロスが意識的に人間とネコへの変化を転換させているが、シャルの方は仕事もあればその巨体などの弊害もあり（服着たままでは破ける）、本人の意志に任せている。

「別に。わたしは、夜はいつもこちらです」

カルロスの問い掛けに、シャルはふいっと鼻面を背けてそう答える。シャルは、そちらの方が楽だからと、寝る際には自室でイヌバージョンになっている事を、カルロスとて知っていた。ただ、このわんこは滅多にその姿で家の中を歩き回ろうとはしないのだ。

カルロスがその体に抱き付いて背中を撫でまくっても、シャルは嫌がって離れようとする素振りも見せない。以前はそう、鬱陶しげにカルロスの事を尻尾でぺちぺち叩いてきたくせに。

「はっは～ん……なるほどな」

「……なんですか？」

「つまりお前は、ユーリにヤキモチか」

遠慮なくぐりぐり撫でつつ、カルロスは可愛いわんこを眺めてにやけていた。

このしもべが、最近やってきたユーリに対してビミョ～～な感覚を覚えている事を、ご主人様はきっちり把握していた。

子ネコ姿のユーリを可愛がりまくるカルロスに、わざと距離を取って素っ気なくしたり、ユーリに意地悪な悪戯を仕掛けたりと、実に可愛らしい捻くれっぷりだ。
対してユーリの方は素直過ぎるほどに素直で、『主、主、大好き！』と、全身で表現しつつ懐いてくる。
タイプの違う2匹とも可愛すぎる。普通、イヌとネコの性格って逆じゃね？　とも思うが。

つまり、ユーリがただ今のんびりお風呂中な隙を狙って、ポッと出の新人にご主人様の寵愛を横取りされたと拗ねて、ちょっと離れたりしていたシャルがカルロスを独占しようとしてきた、と。つまりはそういう事らしい。
カルロスの言に、シャルはピクリと耳を反応させ、

「マスターは……」
「うん？」
「ユーリさんと性交なさらないのですか？」

そっぽを向きながらのシャルの問い掛けに、カルロスは思わず顔面をシャルの腹の辺りの毛皮に押し付けていた。
うっかり見事な銀色の毛を一本引っこ抜いてしまったが、気にした様子もなくわんこはご主人様をうっそりと眺めてくる。

「お前なあ……」

わんこのトンデモ発言に、なんだか頭が痛くなってきた。
なるほど、確かにユーリを子ネコ姿に変化させる事を好むとはいえ、本来のアレは一応人間の娘だ。
一緒に暮らしていて、ネコ姿限定とはいえ寝台に引き摺り込み、撫

でまくって抱き締めまくっていれば、それは確かに差し障りがあるだろう。
だが、カルロスは声を大にして言いたい。
俺にとってユーリは、対・象・外！
で、あると。語弊の無いように言っておくが、向こうも迷わず同様の返答を返してくる。
仮に、エストとの事が全く無かったとしても。カルロスからしてみれば、考えている事が嫌でも筒抜けな相手に対して、恋愛感情など抱けるか？　という基本的な疑問点がある。
特にユーリは他者に読まれないよう思考に壁を張り巡らせる、という技術を全く体得しておらず、カルロスへ向けて様々な思考や感情が垂れ流し状態だ。非常に手間のかかることに、ご主人様の方が意識的に壁を構築してやっているぐらいである。
だが、このやたらとデカいわんこにとっては、ユーリはまだ群れの一員として認めがたい存在であるらしい。
故に、シャルにとって群れのボスであるところのカルロスが、彼女と肉体的な交渉を持てば、ボスのハレム構成員だとかそういう位置に追いやって納得がいく、という事らしい。
『らしい』とか結論付けつつ、正直なところカルロスにはそこに至るまでのシャルの思考は意味不明だ。
例え考えている事や感情を読み取る事は可能でも、それらを導き出す知識や認識を知る事が出来ようとも、結局のところは自分とは違う他人。だから、わんことにゃんこの頭の中を自由に読み取れてようが、カルロスには同意しがたく頷きかねる感覚も多い。
だがなシャル。あのアホネコは、人に母親の面影とか重ねて懐いて

きてるガキんちょだぞ？
そんなお子ちゃまとイタせってか。そりゃまず無理だろ。

見た目は幼くとも、肉体的にはあれでも一応年頃の娘であるし、思考回路そのものはいっそシャルよりもよほど知識も豊富で論理的、頭脳回転も早い。
だが、カルロスにとっては感情的に受けつけない相手でしかない。人間の姿での彼女に、普通に触れる事には嫌悪感など全く覚えないが、『そういう意味』で触れたいとは思えない。例え真っ裸で目の前に現れても、男としての反応を覚えない自信がある。
そもそも、そういった目で見ている相手ならば、ネコの姿に変化させていようが毎晩のように添い寝などしない。

エストで想像したらすぐその気になるんだが……いや、今その手の事は考えるな、俺！

つまるところ、

「あのなあ、シャル。
俺がユーリを抱けるなら、お前の事も抱けるって事になるじゃねえか」

苦々しく告げられたカルロスの窘めるような答えに、シャルは不思議そうに首を傾げた。
そして、『じゃあ試しにちょっと想像してみましょう』とばかりに、モヤモヤと脳内で考え始めたのである。
にゃんこの考え事も突飛で面白いが、このわんこの考え事も、中々に笑えるものが多いので、カルロスは好奇心でシャルの思考を追跡してみた。
……が、すぐさま、しなきゃ良かったと後悔する羽目になった。

シャルがものは試しと想像してみたモヤモヤは、巨大なシャルにのし掛かられているカルロス、などという構図になっていた。傍目にはただペットに戯れつかれている飼い主、という光景でしかないが。

シャル……お前、想像力豊か過ぎんだろ。なんだその子細で詳細な想像図！

しかも俺が下か！　ご主人様を組み敷くな！？

冗談半分の想像でさえ自分が上でしか考えられんとか、お前もしっかりオスだったんだな……

ユーリは基本的に考え事は言語主体で物事を考え、記憶の回想以外で脳内に具象化され映像が伴う事は滅多に無いし、今日見た『箒で空飛ぶ魔法使い』などは、子供の悪戯書きか？　と聞きたくなるほど拙い想像図だったのだが。

シャルの方は反対に、具体的な想像図を鮮明に脳裏に思い描きながら考え込む事が多い。

「……マスターと合体、というのは……そもそもどうすれば良いのでしょう？」

「んなもん悩まんで良い！」

脳裏で散々、飼い主に戯れつくわんこというほのぼのな光景を思い描いた挙げ句、シャルは首を傾げてカルロスにそんな事を問うてきた。

「そうですね。わたし、マスターと子作りはしたくないです」

「俺だってしたかねえっ！　さっきからそう言ってんだろうがっ！」

……シャルがこういった、ぽやっと間抜けな発言をかましてくるた

びに、（もしかして俺は、こいつの育て方を間違えたか？）と、頭を抱えたくなるカルロスである。

と、シャルが不意に、耳をピクリと反応させて鼻面を上げた。
カルロスの耳にはさっぱり聞こえてなどこないが、このわんこはにゃんこがお風呂から上がったと判別がつくような、物音や独り言を聞きつけたようだ。
シャルはのっそりと四肢を伸ばし、立ち上がる。
カルロスがユーリの姿を、人間から子ネコの姿へと変わるよう、遠隔から念じると、

“ちょっ、主ーっ！？”

うるさいアホネコ。

にゃんこから抗議を訴えてくる思念が、脳裏に大絶叫状態で響いてくる。
シャルの方はその心の声が聞こえる訳ではないが、非難の鳴き声はしっかり耳に届いたらしい。鼻を鳴らしてふいっと踵を返し、階段の方へと歩みを進め……階段の左右の壁に横幅が合わずに引っ掛かった。

「シャルー、ちゃんと折り畳んでから上れよ？　この家、お前には狭いんだからな」
「そのお言葉は聞き飽きました」
「何回忠告しても、お前がうっかり忘れちまうからだろうが」

毎度毎度、シャルは部屋でのびのびぶわっと広げるから、必ず一度は階段で引っ掛かるのだ。
見ている分には笑える光景ではあるが、あの巨体にこう何度も突撃

をかまされた、我が家の階段脇の壁の強度が不安にもなる。そこだけちょっぴりへこんでるし。
一歩二歩、と、後退りし、丁寧に畳み直してから改めて階段を上っていく姿も、滅茶苦茶面白可愛い行動である。

シャルが自室へと引っ込んでしまうので、カルロスは自ら厨房へと足を運んで浅めの皿を出し、そこに冷やしておいたミルクを注いだ。

“主ーっ！　何故わざわざ私をまた、こっちの姿にするんですか！？”

その皿を手に食堂へと戻ると、タオルとピンクのリボンを口に銜えて引き摺ってきたにゃんこが、ぷりぷりと怒りを露わにしながらそんな思念を飛ばしてくる。

「まあ落ち着け。俺が拭いてやるから、取り敢えずミルクを舐めろ」

“ま、まさか、主はそれをしたいが為だけに、私をネコに……！？ネコ好き、恐るべし……”

別にそんな事はないのだが、がっくりうなだれるにゃんこの姿は滅茶苦茶可愛い。
まさか正直に、「お前が夜に人間の姿だと、シャルからまた肉体関係を結ばないのかと聞かれて面倒だから」とは言いにくい。

生乾きのユーリの毛並みをタオルで拭って乾かしてやり、ミルクをちびちびと舐める彼女の首に、改めてリボンを結んでやる。エストからの贈り物だけあって、生地も染料も上等なものだ。

「じゃあ俺は部屋に戻って本を読むから、お前もそれ飲んだら寝ろ

よ」

ぐりぐりとユーリの頭を撫でてやってから、机の上に読みかけで置きっぱなしにしていた本を手に、カルロスは階段を上がって自室へと戻った。
机に向かって改めて表紙を開く。
気になっている項目は果たして書かれているのだろうかと、目次を流し読みしてみると、

「……あるじゃねえか」

その一文を指で辿りつつ、カルロスは思わずぽつりと呟いていた。
本はそのものズバリ、『ペットと暮らす楽しい生活』で、イヌとネコを一緒に飼う際の悩みや体験談なども載っていた。
それによると、今までは、のほほ～んと暮らしていても愛情独り占めだったイヌ。新たにライバルとしてネコが出現するまでは、従順で反抗することも吠えることも無かったが、ネコが来てから性格が多少変わったようだ、とか。

「我が家の状態そのものだな」

ユーリがそばに来そうになるとなるべく避けようとしたり、悪戯を仕掛けたりと、シャルは今までの従順で大人しい態度が一変して、ある意味『吠えたてている』と言えなくもない。

だが、ユーリはなにかと言うとシャルを気にしているし、シャルの方もユーリの存在を意識しまくっている。
ライバル心のような嫉妬めいた感情をユーリへと抱いている事に、シャル本人はあまり気が付いていないが、彼女の立てる物音や声に、常に耳を澄ませてその動向を探っているのが確たる証拠だろう。

まあ、取っ組み合いの喧嘩に発展しそうな気配がある訳じゃなし。しばらくこのまま、あいつらの好きにさせておくか。

改めて一番最初の頁から最後にまで目を通し、内容を熟読したカルロスは、そう考えつつパタンと本を閉じた。

わんこ・ぶいえす・にゃんこ

パンパンにはちきれんばかりに膨らんだお腹を抱えつつ、ユーリは必死こいて二階へと上る階段をヨロヨロしつつよじ登っていた。

うう……お、お腹が苦しい……

シャルの作っていたお夕飯のシチュー、ユーリはそこへ急遽、大量のミンチ肉を早速食べてしてしまうべく、即席ハンバーグを作成して煮込みハンバーグもどきとして食卓に提供した。

主であるカルロスがお風呂から上がってしまえばすぐにお夕食タイムと相成ってしまう為、急ピッチでの作業、オマケに材料も限られる最中、我ながらよくやった……と、自画自賛してみたり。

シャルの方は彼の知らない、ユーリの世界の料理をしげしげと興味深げに眺めているだけで手伝おうとはせず、お陰様で無駄に緊張感の漂う短くも濃密な時間となってしまった。

しかしそれもこれも、カルロスからは、「今日の夕飯は随分手が込んでるな。うん、美味い」と、お褒めの言葉を頂けたので万々歳だ。

その言葉を聞いたシャルが、僅かばかり憮然とした表情を浮かべたような気がしたのだが、瞬きした次の瞬間にはいつもの笑顔だったので、きっと気のせいだろう。

それは良かったのだが、お料理をする為に主にテレパスを送って人間の姿に戻してもらい、皆で食卓を囲んでお夕食をお腹一杯に平らげ、ゆったりバスタイムを満喫したユーリは……お風呂から上がってタオルで濡れた体を拭いてる最中に、再びネコの姿へと変化してしまったのである。

どう考えても、今日のお夕飯で食べた容量がこの子ネコの胃袋には収まりきらないのだが、この変化の術は本当に物量的な謎が多い魔法だ。

主……何故本当にあの方は、私をネコ姿へと変える事を好むのか。

答えは分かりきっている。カルロスが動物好きだからだ。

それはともかくとして、今の問題は目の前の長大なる階段である。このネコ姿の際は、大抵カルロスの腕に抱き上げられた状態で運ばれて移動するので、自力でよじ登るとなると、改めて一階から階段を見上げて眺めたユーリは、あまりの高さにグラグラと目眩がしたほどだ。一段の高低差もそれなりにある。

人間の姿ならば……最悪、満腹で苦しい程でなければ、普通に上っていけたと思われる。

だが、今のユーリは腹痛を抱え込む程に満腹だった。先程の、湯上がりのミルクが特に効いた。

主の厚意だか、趣味の欲求だかを無碍にする訳にもいかず、忠実なるしもべとして大人しく飲んで……リバース寸前にまで追い込まれたのである。人として、最後の砦だけは死守するべく、懸命に耐える。とにかく耐える。

お、お腹一杯に詰め込むと、痛くて苦しくなるものなのですね……初めて知りました……

元の世界では、常に腹八分目かそれ以下で過ごしてきたユーリの胃袋は、滅多に無い非常事態に悲鳴を上げる羽目になった訳だ。

両前足を上段に掛け、懸垂の要領でグッと体を持ち上げる。
カルロスがいつもユーリを変化させる子ネコの体は、小柄な上に身軽だ。なので、主の腕の中や机の上など少し高い場所から飛び下りたり、窓枠やベッドの上に飛び乗ったりといった行為は、比較的楽々とこなしていたのだが……今はとにかく、お腹が辛くてジャンプなど無理だ。
いっそ、一階の食堂か応接間に勝手に横になっていれば良かっただろうか？　と、弱気になって階段途中の踊り場で立ち止まり、今まで懸命に攻略してきた背後へチラリと目線をやってみる。

こ、これをまた改めて下りるのは、ちょっと……

上り始める前に、その結論を下すべきだったのか。階下に窺える一階は、子ネコの身には遥か遠く感じてしまう。
階段のド真ん中の踊り場にてちんまりとお座りし、立ち往生ならぬお座り往生状態になり、二階と一階を見比べてみる。

ネコへ変化しているからといっても、別段聴覚や嗅覚が鋭くなっていないのと同様、夜目が利くようになった訳ではない。
だが、カルロスが夜間の廊下には常に燭台代わりに光魔法を掛けている為、視界は良好。本物のネコに近い身体能力や機能が備わっていれば良かったのにな―、ともたまに思うが、そうするとユーリをユーリたらしめる理性やら感情、知能までもがネコ並みになってしまうのかも？　という不安もあるので贅沢は言わない。

蛇足だが、自宅での灯りにまで遊び心を発揮してはいないのか、発光する丸い球体が天井付近に止まっている。
これが様々な動物の姿だったりしたならば、ユーリはうっかり一つ一つをしげしげと眺めてしまい、視力に大打撃を受けていたかもしれない。

いくら耳を澄ませてみても、一階は勿論、残りの住人達が居るであろう二階からも、物音一つしない。夜の魔法使いの家は静寂に包まれ、そこにはただ、魔法に照らし出された無人の階段が浮かび上がるのみ。

ユーリは溜め息混じりに踊り場から重い腰を上げた。
せっかくここまで上ってきたのだから、今更階段を下りたり踊り場で無意味に踊ってみるよりも、初期の目標通り二階にまで向かおう、という結論に達したのだ。

再びよじよじと地道に階段を上る事しばし。
数々の苦労と困難、孤独なる奮闘の果てに、無事に自宅の二階という遠大なる遥か高みまで登頂を果たしたユーリは、廊下に倒れ込んで目を閉じた。

激しい戦いでした……私にとっては、チョモランマやモンブランに匹敵する強敵でしたね！

チョモランマとモンブランとは、地球に存在する高い山の事である。古来より魔の山などと呼ばれる、プロの登山家でも登頂成功率の低い山だ。因みに、当然ながらユーリはかの山に挑戦してみた事は無い。
自分の住んでる家の、一階から二階までの階段上りにて思いを馳せるには明らかに比較対象がおかしいが、ユーリはあくまでも大真面目だ。

やり遂げた達成感を胸に少しの間廊下でゴロンと大の字になっていたユーリは、もぞもぞと身動きをして改めて立ち上がった。このまま廊下で寝入ってしまっては、何の為に苦労して階段を制覇したの

か分からなくなる。
テコテコと歩を進め、カルロスの自室のドアの前にちんまりとお座りし、心の中で念じる。

主ーっ、開けて下さいなー？

そのまましばし待つ。
……無反応。
小首を傾げつつ、もう少しだけ、待つ。
……応答無し。物音も無し。

よくよく考えてみれば。
私が盛大に苦労しながら階段で時間を費やしていたりすれば、主の性格からして迎えに来て下さるのでは……？

ユーリの状況を把握した様子も無く、テレパスにも全く反応がみられないとくれば。
昼間の短いお昼寝タイムと同じく、既にカルロスは疲労困憊で熟睡している、と考えるのが自然ではないだろうか。
見上げるドアはきっちりと閉じられており、ネコ姿のユーリでは例え万全の状態であろうとも、踏み台がなくては全力ジャンプでドアノブにまで前足が届かない、という検証結果が昼間に既に出されている。

な、なんという事……
おのれ、またしても貴様かブルータス！？

主の自室のドアに許可無く命名しつつ、ユーリはバシバシと肉球で憎いブルータスを叩く。
この小憎らしいこんちくしょうに、畜生の身の上で爪を立てでもす

れば、彼女の方がご主人様から叱責されてしまうので、ガリガリ引っ掻く事も出来ない。実に歯痒い。

ううう……魔法使いの家は本当に、困難と危険だらけです。

やっぱり、体格差とか体格差とかの問題で！

今のところ、ユーリが魔法使いの家にて、勇敢に立ち上がって真っ向勝負を挑んできた戦績結果は、

『ブルータス（ドア）二戦０勝。

されど天の高さを知る（井戸）一戦０勝。

エベレスト（階段）一戦一勝』

素晴らしく勝率が低かった。

2

カルロスの部屋の前でがっくり肩を落としているユーリであるが、自分の部屋に戻ってしまえば良いではないか、という至極真っ当な意見は通用しない。
何故ならば、魔法使いカルロスの自宅兼仕事場に、ユーリ個人の部屋は存在しないからだ。

ユーリの生活は、夜に眠る際は、ネコ姿にされて二階にあるカルロスの部屋のベッドで就寝。
朝、人間の姿に戻って一階の物置に仕舞い込まれた服か、主の部屋のクローゼットの奥から、主人が少年の頃に着ていた洋服を引っ張り出してお着替えしてお仕事。
ご飯やお風呂は基本的に人間の姿。

そしてまた夜になればネコ姿にさせられ、カルロスの手によって主の自室へと運ばれる、というサイクル。
つまり、今までなんだかんだとご主人様の傍らで添い寝するのが当たり前となってしまっていたせいか、ユーリの為の寝室が存在しないのだ。

改めて考えてみると、私は自分の部屋を要求してみるべきなのかもしれません……！

そもそも、毎朝の着替えのたびにカルロスを部屋から追い出したりしていた時点で、気が付くべきであったのかもしれない。
仮に、「私の部屋下さい」と言っていたとしても、この家には空き部屋が存在しないので要求が通るかどうかは難しいのかもしれない

が。

無い物ねだりしていても始まらないので、今はとにかく今宵の寝床の確保だ。

またあのしんどい階段を駆け下りて、一階のソファで丸くなるか。

それとも、当てつけのように主の部屋の真正面の廊下で寝るか。

後者を選択した暁には、明日の朝、足元のユーリに気が付かずにカルロスに踏みつけられる、というオチが待っていそうで却下だ。

えーん、結局また下りるんですかー？　今夜の私はいったい何をしているんでしょう？

ふみー、と嘆き悲しみつつトボトボと階段へ向かって歩き出そうとしていたユーリに、

「夜だというのに、さっきから騒がしいですねユーリさん」

どこからかシャルの声が聞こえてきた。

きょときょとと周囲を見回しつつ廊下の曲がり角を曲がってみると、カルロスの自室と書斎のドアはきっちりと閉じられていたのだが、シャルの自室のドアはかなり大きく開きっぱなしになっていた。

ごめんなさい、シャルさん。

ひょっとして起こしちゃいました？

角の向こうから差し込む魔法の光によって薄暗い廊下から覗き込んでみても、明かりの灯っていない真っ暗な室内の様子はさっぱり分からない。

辛うじて、窓の鎧戸はそのまま開け放してあると判別がつくぐらいだ。

「いいえ、まだ眠ってはいませんでしたから。
さてはユーリさん、今夜はマスターから閉め出されたんですか？」

クックックッと、低い笑い声が暗がりから響いてくる。
ちょっぴりムッとしてしまうような言われようであるが、確かに今の状況はそうと言えなくもない。
だがそんな風に揶揄されてしまうと、（起きていたのなら、階段で苦戦しているところを助けてくれても良いのに）と、内心拗ねた感情が湧いてきてしまう。

そうですよ。シャルさん、私、今夜はこちらにお邪魔しても良いですか？

「わたしの部屋に、ですか？
さて、どうしましょうかね……」

少しばかり思案するように沈黙したシャルは、「ああ、そういえば」と呟いた。

「夕食の前に、あなたとお約束していましたね。『後でお話しましょう』と」

う……？　そ、そうでしたね。

えー、お説教とかされちゃうのー？　と、シャルのプライベート空間への入室を遠慮したくなってしまうユーリだったが、

「怯えて泣き叫んだり、半狂乱になって暴れたり、醜い罵り言葉を吐き捨てたりしない自信がおありでしたら、どうぞお入り下さい」

シャルからそんな謎の招待を受けた。
一体全体、自分はこれからどういった類の説教を受ける羽目になるのかと、恐々としつつ同僚の自室へと足を踏み入れる。
以前、この部屋をお掃除させて頂いた際、室内の家具は壁際のタンスのみで、後は部屋中央にシャルのベッド代わりだという寝藁が敷かれているのみであった。
だから、暗さに慣れない目で適当に歩いたとしても、今のように早く夜の闇に慣れてしまうべく目を閉じたまま歩いても、何かにぶつかる心配はない。

シャルさん……どこですか？

「こちらですよ。ああ、そこから藁にぶつかってしまいますので、お気をつけて」

一歩一歩、シャルの声を頼りに目を閉じたまま部屋の中央へ向かってヨタヨタと歩みを進めていたユーリは、敷かれていた藁に半分もがきつつ、そろそろ良いだろうかとパチリと両目を開いた。
開かれた窓の向こう、空に浮かび上がるのは黒い天幕を爪で引っ掻いたかのような三日月。
闇に慣れてきた目は、廊下と窓から差してくる淡い光源のみでも、室内の様子を鮮明に浮かび上がらせる。

飾り気は皆無で素っ気ない室内に、月光を反射し、夜闇には白くも見える細かな輝きを放つ銀色の毛を持つ生き物が、ユーリのすぐそばに寝そべって……

……え……？

ユーリは一瞬、見慣れたシャルの銀髪なのかと思った。そこにはシャルが居ると、頭から思い込んでいたのだから。
それは、のそりと身を起こして四肢を伸ばして立ち上がり、月明かりを背に口の両端を持ち上げた。鋭く尖った牙が、やけにギラリと光る。

しゃ、シャルさん……どこ、ですか……？

クックックッと、先ほども聞こえてきたシャルの笑い声が、目の前の獣から漏れ出る。

「あなたの目の前にいるでしょう？」

鋭い牙を持つ口が動き、そこから耳慣れたシャルの声がする。
見事な銀色の毛皮に被われた、見上げる程の巨大な体躯。
引き裂き、食い千切る為の鋭く頑丈な爪と牙を持ち。
バサリ、と、まるで天使を思わせる純白の大きな翼が部屋いっぱいに広がる。
それは、大地と天空を駆ける獣。

あ、主……シャルさんのこのお姿はどう見ても、イヌじゃなくて狼ですーっ！？

今頃はぐーすか寝入っているであろうご主人様へ向かって、思わずユーリは全力で突っ込みを入れていた。
イヌ科イヌ属、シルバーウルフ、翼付き、だろうか。
ユーリを小柄な子ネコにするのだから、てっきり彼女の主は小動物を好むのだとばかり思っていた。だからきっと、シャルのイヌバージョンも、小型犬なのだろうと。
だがしかし、今ユーリの瞳に映るその姿は。

……て、天狼、って感じですねシャルさん。

「なかなか良さそうなネーミングですね」

そんなユーリの感想に、シャルは大きな翼をバサリと羽ばたかせてみせた。

その動きによって生じた突風に、軽い子ネコの体はコロンと転がってしまう。

シャルの自室には何故家具が全然無いのか、どうしてベッドではなくてわざわざ寝藁が敷いてあるのか……ユーリがずっと疑問に思っていた点は、嫌でも理解出来た。

こんなに大きな体の狼では、人間用のベッドは狭苦しくて不快であろうし、室内に細々とした家具が配置されていては、翼を思う存分広げられまい。

こちらの世界の狼は、今のシャルさんのようなお姿なんですか？

吹き飛ばされてしまった藁の上へと再びもがいて乗り、ユーリはシャルの足元へと近寄って首を傾げる。

シャルは藁の上へと寝そべり、全開に広げていた翼を少し畳んで小さく背中に纏めた。

「さあ……そんな話は聞いた事がありませんね。

一度として同族にお目にかかった事はありませんし、匂いを嗅ぎつけた事もありませんから」

……はい？　え、同族？

「わたしは生まれつきこの姿で、人間の形の方がマスターに頂いた姿ですよ」

そう言って、シャルは唇の両端を持ち上げて牙を剥き出しにした笑みを浮かべる。

ゾクリとユーリの背筋を駆け上がっていく恐怖は、恐らく本能的なもの。

何故、シャルの笑顔が時折恐ろしいのか。彼女は不意に悟った。

目の前の巨大な獣は、ユーリのような脆弱な生命体と比べるのもおこがましいほどに強大な。生き物を追い詰め狩って食らいつく事が当然の、獰猛さや凶暴さを併せ持つ、肉食獣であるからだ……

3

頑丈そうな巨躯と見事な銀色の毛皮を纏う獣は、寝藁の上に寝そべり、その太く逞しい前脚に自らの顎を乗せた。

今のユーリにはシャルの体格や体長はデカすぎて、限界いっぱいまで首を傾けて見上げても全体を見渡せない。狼とは皆、これほどまでに大きいのだろうか？　などと疑問に思うが、普段よりもかなり小さくなっているせいで、より巨大に見えているだけという事もあり得る。

そして彼は、傍らにて半分藁に溺れかけてもがいている、自らの体よりも遥かに小さな生き物を見下ろしてきた。

「さて、それではまず、何からお話しましょうかね」

今の子ネコ姿のユーリなぞ、その気になれば一飲みにしてしまえそうな大きなあぎとから、普段と全く同じシャルの声がする。音程も質も変わらず、喋る事を苦にした様子も無い。

シャルに質問してみたい、意見を尋ねてみたいと思っていた事は数多いが、「何から話す？」と言われてユーリが真っ先に浮かんだ疑問は、

シャルさん……何故、その天狼さんのお姿でも、普通に喋れるんですかーっ！？　不公平です！

という、ある意味切実なような、今の生活を送る上では全く困らな

いような、そんな不満だった。
同僚からそんな叫びを聞いたシャルは、フンと鼻を鳴らす。

「不公平？　どこがです？
この姿で人間の言葉が喋る事が出来るのは、発声が可能な種に生まれただけではなく、練習を積み重ねたからです。
あなただって、もしも不自由があると言うのならばネコの言葉を学べば宜しい」

シャルの冷静な言葉に、ユーリはうぐっと詰まった。
シャルの言葉通り、そもそも彼が目の前の銀の毛並みを持つ獣として生まれ育ったならば、異世界でありながら偶然、主であるカルロスと声帯がほぼ変わらないであろう種族に生まれたユーリの方が、よほど意志疎通や会話に関して苦労はしていない、という可能性が高い。

「わたしはね、ユーリさん。
それぞれ向き不向きがあって、出来る事と出来ない事があると思うんですよ」

は、はあ……

シャルの唐突な語り口に、ユーリは生返事を返しつつもぞもぞと藁の上に丸くなった。柔らかくて滑らかな肌触りの、主のベットで眠る事に慣れた身には寝心地は微妙だ。藁が毛並みに絡まってくるし。

「つまり、あなたはマスターのお洋服をお洗濯出来ないのですから、今後は服が汚れるような遊びを唆さないで下さい」

すみません……以後、気をつけます。

洗濯は洗濯機が自動的にやってくれるのが当たり前、という生活を送ってきたユーリには、全てのお洗濯は洗濯板でゴシゴシ手揉み洗いをするこちらの生活はかなりキツい。物によっては熱湯で洗わなくてはいけないし、真冬になれば水は刺すように痛いだろうと簡単に予想がつく。

仕事を覚えるべくシャルから教わってみたは良いが、ユーリの手際では生地が痛むからと洗濯途中の主のお洋服を取り上げられた経緯がある。家事を一通りこなすには、まだまだ修行が必要なようだ。

それにしても、今のシャルは見た目は確かに恐ろしいという感覚を呼び覚ます狼だが、発言内容が普段の家政夫然とした内容なだけに、妙に笑えてくる。

ユーリが目を閉じてしまえば、彼が牙や爪をふるう意志を見せなければ、いつもの同僚と全く変わらないようにしか感じられなくて。それは、被捕食者となりかねない身の上では、危機感が無さ過ぎる感覚なのかもしれないが。

けれども、今のシャルを目の前にして無闇やたらと怯えるのも、昼間散々お世話になっている彼を否定するような気がするのだ。

ユーリは閉じていた目を開いて、鋭い牙がズラリと並んだあぎとを持つ、巨大な狼を見上げた。

外と廊下からの僅かな光は、変わらず彼の銀の毛並みと白い翼を照らし出している。光と影、その細かい濃淡は彼を彩る特別な装飾か、模様のようにも見えて、彼女の目にはとても美しく見えた。

ねえ、シャルさん。私、昔から空を飛んでみたいと思ってたんです。それで今日、主にお願いしてみたんですが……シャルさんのその翼は、飛べるんですか？

「飛べなかったなら、こんなに大きな翼はただ邪魔なだけですね」

走る分には、きっちり畳んでないと空気抵抗大きそうですもんね……

因みにその、私を乗せて飛んで下さったりなどは……

ユーリのダメもとでのお伺いに、シャルは（何を言い出すんだろうな、この子）と言いたげに首をちょっぴり傾げてみせた。

「面倒だから嫌です」

そ、そうですか……

にべもないお返事にがっくりとうなだれると、

「今のユーリさんが、どうやってわたしに掴まると？

背中の上に寝そべる程度ならばともかく。飛ぶとなればせいぜい、助走や羽ばたきの揺れで転げ落ちるのがオチでしょう。

それとも、わたしの口に銜えられて飛びますか？」

という、シャルなりの実に真っ当な理由が付け加えられた。確かにそういった事に気をつけながらでは、面倒臭いと却下されるのも頷ける。

シャルの口に銜えられながら……というのも一応想像してみたが、どう考えても捕獲された餌状態だ。

シャルさんの口って……

みー、と鳴きながらそう呟いたユーリに答えるように、シャルがぐわっと口を開いてみせた。ズラッと並んだ鋭い牙が、刃物よろしくギランと光る。

……牙が体を貫通しませんか？

「あなたの脆い体では、貫通するんじゃないですか？」

恐る恐る尋ねてみたユーリに、シャルは実に平然と肯定して返してくる。

そして、

「ユーリさんは小さ過ぎて食いでが薄い上に、小骨が刺さりそうで、あまり食べる気にはならないんですがねえ……」

などという、衝撃の発言をかましてきた。

ユーリは思わず後退ろうとして、藁に足を取られて体勢を崩してしまう。

え、私、シャルさん的に食べ物カテゴリーだったんですか！？

おおお美味しくないですよ！？

「ユーリさんはいざという時の非常食ですから、味にまで贅沢はいいませんよ」

ひいいいい！？

藁に埋もれてもがきつつ悲鳴を上げるユーリに、シャルがクックッと笑い声を漏らす。

「別に、今すぐ噛みつきやしませんよ。

今あなたを殺しては、マスターの力が増大してしまいますからねぇ」

主の能力が増すのは、良いことなんじゃないですか？　その為だけに死ぬのは、ちょっと勘弁ですけど！

なんとか藁の隙間から這い出て横になるユーリの腹の上に、のっそりと身を起こしたシャルがおもむろに……片方の前脚を乗せてきた。ヒヤリとした恐怖感が、ユーリの背筋を襲う。体重は全くかけられてはいないが、彼のその大きな脚の爪が喉元へ僅かに刺さるだけで、もしくは少し体重を乗せてくるだけで、彼女は簡単に命を落としてしまうだろう。

「ユーリさんは、本当におめでたい人ですね。
あなたとわたしの元となった根源が同一のものであるなど、未だに信じがたい。
わたしはね、ユーリさん。あなたとは違うんですよ」

独り言のようにそう呟くシャルに、ユーリは段々息苦しくなっていくのを感じながら、ゆっくりと言葉を紡ぐ。彼女を見下ろしてくる琥珀色の双眸から、目をそらしたら一巻の終わりのような、そんな緊張感を覚えつつ。

それはどういう意味、ですか……？

「そのままの意味ですよ？
あなたはあっさりとマスターに屈伏しましたが、わたしはまだ、仮契約の身です」

え……？　だって、シャルさんは、何年も前から主に仕えてた、って……

そう呟いてから、ユーリはふと考え直した。

彼女自身とて、カルロスと仮初めの契約を結んでから軽く１０年以上、本契約には移行しなかったのだ。
カルロスとシャルがいったいいつ、いかなる内容の契約を結んだのかはユーリの知るところではないが、彼女の主がそれで良いと考えているのだから、シャルとは仮契約のままなのだろう。

「本契約を交わしたあなたは、自らマスターの下位に位置づける存在に下りましたが、わたしは違います。仮契約中のクォンは、主人が先に死ねばその魂を吸収する権利がある。故に、わたしとマスターは魂の格付けでは対等なのですよ」

狂気にうかれる光も、血に酔った凶暴性もその眼差しからは全く感じ取れない、その上でシャルは淡々と語る。

「しかし、あなたにうっかり死なれでもすれば、マスターの力はどれだけ増大するか。それでは生涯を終えるのはいつになることやら……」

シャルさんは、主が死ぬのを待ってるんです、か……？

それとも、下剋上よろしく殺そうとしているとでもいうのか。
ユーリの脳裏に、地球でのある種の蜂の逸話が過ぎった。
その種の女王蜂は、巣に対して一匹のみ。
しかし、女王蜂となれる候補の繭は複数存在し、一番最初に孵化した女王蜂の最初の仕事は、まだ繭の中で眠っている他の女王蜂を殺すこと。

「わたしも、それなりに今の生活やマスターの事を気に入ってますからね。
マスターが大往生なされるまで、のんびりお付き合いしますよ」

そ、壮大な計画ですね……

いったい、シャルの寿命はどれだけあるというのだろう。
それにしても、ユーリの腹の上にずっと乗ったままである脚に、先ほどからほんの僅かづつ、重さが加えられてきているのだが。もがいて暴れて逃れ出ようにも、身動きが取れない。

シャルさ……苦し……

「ああ、ちょっと撫でてみようとしただけなんですが。
たったこの程度の事であなたには苦しいんですね。
その小さい体は本当に不便ですねぇ」

……狼の体で撫でるとか、無茶ではないかと思うのです。

前脚がスッと退かされて、ユーリはゲホゲホと咳き込みつつ訴える。危うく、本気でリバースまでカウントダウンは残り三秒を切るところだった。その後、同僚の前脚に押し潰されて圧迫死とか、ちっとも笑えない。

「先ほどから、あなたが人の寝床の中で暴れ回るせいで、落ち着かないんです」

などと、誰のせいだ!?　と、怒鳴り返したくなるような言い分を口にしたシャルは、一瞬光に包まれ……いつもの、見慣れた青年の姿が現れた。
翼が生えた狼の姿でいられるよりは、恐怖感そのものは薄れるのだが、

しゃ、しゃ、シャルさん……ふ、服着て下さいーっ！？

動物さんからの変化直後なので、当然ながら全裸であった。

「何を今更……ほら、これで気にならないでしょう」

ユーリの大絶叫に、うるさそうに実にわざとらしく両耳を塞いでみせたシャルは、彼女を抱き上げて顔の前に持ち上げた。

これで、ユーリの目に映るのは、確かにシャルの顔と、肩ぐらいだが……

気になる。非常に気になる。気にしてはいけない事は理解していても、めちゃくちゃ気まずい。

シャルさん結構イイ身体してますねー。

こちらが主から頂いた姿だと言うのなら、これが主の男の趣味なんですね！

女性は美しく儚げで芯は強い少女、男性は脱いだらそこそこ逞しい爽やか系青年、動物系に関してはストライクゾーンは幅広く……ユーリの主の趣味はとても奥が深いようである。

とはいえ、今現在のカルロスは熟睡中な為本人の是は頂けてはいないが、微妙に現実逃避に走ったユーリの中では、そんなイメージが固まった瞬間であった。

4

ところでそのー、姿変化って、どうやるんでしょう？

そしてユーリは、目の前でシャルが明らかに自らの意志で変化するのを目の当たりにし、真っ先に解決したい項目をようやく思い出した。かなり可及的速やかに解決すべき問題事項だ。

「ユーリさんは、自分で姿を変化させられないのですか？本当にあなたは鈍臭いのですねぇ……」

同僚からこれ見よがしな呆れた溜め息を吐かれて、ユーリはぷうと頬を膨らませた。

正しい方法も教わっていないのに、出来るわけないじゃないですか。

「わたしだって、誰かに教わった訳ではなく自分の創意工夫で体得したのですが？」

拗ねながらの文句には、笑顔でそんな嫌味が飛んできた。様々な難題に立ち向かってきた偉大なる先達は、本当に手強い。

すみません、私には皆目見当もつかないので、ご指南をお願い致します。

「さて、どうしましょうかねぇ……これはわたしの仕事の範囲ではありませんし、あなたに恩を売ってもわたしには何の得もありませんしねぇ」

シャルはぐりっぐりと人の頭を撫で回しながら、そんな台詞をほざいてくる。
内心、（この、意地悪な上に性悪男がーっ！？）と、怒りが渦巻いているユーリではあるが、今の状況で文句を口にするのは得策ではない。
夜中にシャルの部屋に上がり込み、頼み事をしているのは彼女の方なのだから。

今は生憎お礼になるような事も思い付きませんが、出世払いということで……

ユーリの下手に出た再度のお願いに、シャルはしばらくの間考え込むように黙り込み、

「後から利子付きで、ですか？
なるほど……そこまで言うのならば、仕方がありませんね」

実にイイ笑顔でユーリを見下ろしてきたのである。
近い将来、シャルからいったいどんな要求が突き付けられてしまうのか、

……もしかして私、ちょっぴり早まりましたか？

今から空恐ろしく感じてしまうのは何故なのだろう？

「何無駄口を叩いているんですか、ユーリさん。
宜しいですか？　姿変化を行うには、我々の全身を覆う外殻膜をひっくり返すようにすれば良いのです。
確か、あなたの世界には裏表をひっくり返して着れる洋服があるそ

うですね？　それをイメージするのが最も簡単でしょう」

立て板に水のごとく、シャルの口から流れるように解説が語られたが……講義を受けている方のユーリはというと、（は？）（え？）という疑問符で頭の中がいっぱいになってしまった。

あのう、リバーシブルの服をひっくり返すイメージは出来るのですが……『外殻膜』って、何ですか？

「マスターから説明は受けていないのですか？」

ないです。

「そうですか……ユーリさん。ここは我々にとって異世界です」

シャルの唐突な話題転換に、ユーリははあ……と、生返事の意を込めた間抜けな鳴き声を出す。

「……マスターはあなたの頭脳をある程度買っているようですが、あなたとお話しているわたしには、それは少々信じがたいのですが……」

馬鹿にしたような言い草に、如何にかなりノロくて滅多な事では怒らないタイプと評判のユーリでも、ムムムッ！？　と、苛立ちが湧き上がってくる。

喉元を撫でられて集中しがたいながらも、呆れた目で見てくる同僚を見返すべく、ユーリは脳をフル回転させた。

私とシャルさんには、目には見えないが全身を覆う外殻膜が張られている。

私はその存在を主から聞かされていてもおかしくなかった。
ここは異世界である。
以上の事から察するに、異世界から呼び寄せた使い魔である私達に、主がそれを張り付けたと推測される。
それは何故か？　必要だからだ。では、何故必要なのか？
……私達の身の安全を守る為、そして同時にこの世界に異物を混入する危険を防ぐ為、ですか？

しばらく考え込み、シャルを真っ直ぐ見つめ返して尋ねるユーリに、シャルはおやと言いたげに眉を軽く上げた。

ここは異世界なのだから、ユーリが暮らしていた世界とは物理法則が異なっていて当然であろう。なんせ、魔法なんてものがある世界だ。
大地や水、大気を構成している成分、重力、空の彼方から降り注いでくるもの、食事として摂取するもの、挙げていけばキリがない。
それらがユーリの体に害をなさないと、どうして言い切れようか。
そして同時に、ユーリが地球上の何らかの伝染性ウィルスのキャリアーでないとも断言出来ない。あちらの世界では無害な細菌が、こちらの世界に解き放たれる事によって変質しないとも。

だから、私達の体の周囲を、見えない防御膜で包んでる、って事ですかね？

「なるほど、やろうと思えばきちんと頭を働かせられたのですね、ユーリさん」

一々癪に障る言い方をしなくても良いのに、と、憮然としてしまうユーリである。

初対面の頃は、親切で優しい素敵な先輩だとばかり思っていたのに。お客さん扱いから、段々シャルの地が出てきたという事なのだろうか。

「あなたがこちらに来た直後は、ネコ姿だったでしょう？マスターから頂いた姿の方がこちらの世界で安定しやすく、怪我も治りが早いのですよ」

シャルは興味深げにユーリのネコ耳を指先でぐにぐにしつつ、表情はいつもの柔らかな微笑のままそう告げてきた。

こちらで初めて目が覚めた時にネコ姿だったのには、大層驚いたものが……てっきり、カルロスの趣味だとばかり思っていたのが、あれはユーリの火傷を治す為だったらしい。

「ですから、膜を感じ取ってクルッというイメージでこう……」

などと呟きつつ、シャルは再び光に包まれ一瞬のうちに銀の狼へと戻った。

そうすると、彼の手のひらの上に乗っかっていたユーリは、予告なくなんの心構えも出来ていないまま支えを失って、お尻から寝藁へと墜落してしまう。「みぎゃっ！？」という情けない悲鳴が思わず漏れた。実に痛い。

それにしても、同僚は、実に苦もなく膜を操っているように見受けられるのだが。

外殻膜の意義は分かりましたが……その存在がサッパリ感じ取れない私はどうしたら？

「この辺にあるの、分かりませんか？」

ふりふり、と、シャルは右前脚を振って彼の目と額の辺りの何もない宙を示すが、ユーリはいくらそこに目を凝らして見ても、何も見えないし感じ取れない。

こ、この辺で……あてっ！？

実際に自分の顔の辺りで前足を動かしてみるが、うっかり自らの鼻を強打しようとも、膜らしきものに触れる気配もない。

「そうそう、意識的に取っ掛かりを作るのはその辺りですよ。では、わたしはもう寝ますので、ユーリさんは頑張って下さいね」

ええっ！？　シャルさん寝ちゃうんですか！？

「わたしは毎朝忙しいんですよ」

あふ、とわざとらしく欠伸を漏らしつつ、デカい狼は藁の上に寝そべってしまう。

「では、お休みなさい」

あ、はい、お休みなさい。

お休みの挨拶を交わすなり、シャルの方からぐー、ぐー、という大きな寝息だかいびきだかが聞こえてくる。凄まじい寝入りの良さだ。

くうっ……私、負けない！

という訳で。

ユーリはその晩、シャルの傍らで深夜までひたすら顔の前で前足を振って、ひっくり返すイメージを繰り返してみたのだが……その夜の成果は寝不足になっただけ、という結果であった。
眠気に負けて倒れ込むように寝入り、彼女が翌日目を覚ますと、既に日は高い。
日が昇る前に起き出してお仕事に取り掛かるのがこちらの生活基準なので、大寝坊である。

「……っ！　ヤバい！　主を起こさなきゃ！」

寝ぼけ眼でしばらくそのままぼーっと横になっていたユーリは、ハッと我に返ってその場から跳ね起きた。朝、彼女の主にモーニングコールをかますのは、ここのところ彼女の役割だったので。
そうして藁の上に立ち上がって、そこでようやく違和感に気が付く。

「あれ……私、戻ってる？」

顔の前に両手を持ってくると、見慣れた人間の手のひらが思い通りの動きをする。
寝ぼけていた方が、外殻膜を操る事が出来るという事なのか？　と、首を傾げるユーリだったが、

「ああ、やっと起きたんですね、ユーリさん。
さっさとお掃除に取り掛かって下さらないと困ります」

不意に、ガチャリとドアが開かれて、いつもの青年姿のシャルが顔を覗かせてそんな事をのたまってきた。
相変わらず、室内にユーリ1人の場合はノックが無い。それはともかく……

「きっ、きゃあああああっ！？」

ネコから人間に変わったばかりで真っ裸のユーリは、悲鳴を上げてその場にうずくまった。両腕はしっかりと胸元をガードだ。
涙目で無神経な同僚を睨みつけると、彼は夕べと同じように、実にわざとらしく両耳を塞いでみせる。

「ユーリさん、昨夜お話したでしょう？
わたしはあなたとはかけ離れた種なのですから、全裸のネコでも人間でも大差がありません、と。
異性以前の存在相手に、その態度は滑稽にしか見えないのですが……」

「きっ、気持ちの問題です！」

「はいはい」

ユーリの睨みになど全く頓着せず歩み寄ってきたシャルは、藁の上を探ってピンク色のリボンを拾い上げた。
そして、動くに動けずにいるユーリの傍らに両膝をつくと、

「ほら、これはエステファニアお嬢様からの貰い物でしょう？
藁に埋もれて無くしてしまいますよ」

ユーリの髪の毛を器用に梳いて絡まっていた藁を落とし、シャルは彼女の髪の毛を右側に軽く纏めて手早くリボンを結んだ。

「ほら、わたしとお揃いです」

その早技に唖然としているユーリに、シャルはにっこり微笑んでそんな事を言い放つ。
確かに、シャルはいつも髪の毛を右サイドで一つに纏めて黒いリボ

ンを結んでいるけれども。何故にわざわざ髪型をお揃いにする必要があるのか。
毒気を抜かれて脱力するユーリをヨソに、

「マスターはもう先に朝食を済ませていますから、あなたも早くご飯を食べて下さいね」

と、家政夫然とした一言だけ告げて、シャルは一仕事終えたと言わんばかりに去ってゆく。

「シャルさんって……意地悪なのかなんなのか、よく分からない……」

ユーリの同僚で先輩で空を飛ぶらしいデカい銀色狼なシャルは、何を考えているんだかユーリにはもう、サッパリ分からない人である。

因みに、どうやら寝ぼけて上手く外殻膜を操る事に成功した訳ではなくて、朝起き出したカルロスが、ユーリが寝ている間に変化させただけであったらしい。実に残念な事に。
カルロスに外殻膜の操り方を尋ねてみたところ、そもそもユーリには魔力が無いので無理なのではないか、というお言葉を賜った。
ショックを受けるユーリに、更なる追撃。

「つーか、今朝な。朝っぱらからシャルが唐突に、ユーリからは全く魔力を感じ取れないと断言してきて。
俺も、お前は魔力が少ないなとは思ってたが、まさか、魔力がゼロだとまでは思ってなくてな……」

教えるのが遅れて悪かった、と、カルロスはユーリの頭をポンポンと軽く撫でる。

ユーリはふるふると首を小さく左右に振って、主は悪くないと示した。
けれどもつまり、
「シャルさん……初めから私が出来ないであろう事を分かっていて……あ、あの人はーっ！？」
夕べ遅くまでの、私の奮闘の時間を返せ！　と、ダムダムと床を踏み鳴らすユーリを宥めるように、
「まあしかし、お前はシャルとお揃いの髪型になんかして。そうかそうか、シャルと仲良くなりたいアピールか？　そうなんだろ、ん？」
などとからかわれた。
彼女の主は、むしろ火に油を注ぎたいのであろうか。
「すみません、主。シャルさん本人に問答無用でこの髪型にさせられた場合、どう捉えるべきなのでしょうか？」
半眼でのしもべの問い掛けに、ご主人様は気まずく視線を逸らしてそそくさと仕事へ向かった。
やはり嫌がらせか、裸身を曝す事を恥じらう私へのからかい目的かーっ！？

シャルから意地悪されたんだか、からかわれたのか……な、日から数日経った。
本人に直接文句を口にしてみるも、向こうはユーリの苦言など馬耳東風。手強い。
そうして毎日、後になって思い返すと細やかにからかわれたりしたのでは？　という疑惑を抱く日々をやり過ごして、

「ユーリ、明日は連盟に出掛ける」

いつもの如く、カルロスとの子ネコ可愛がり（スキンシップ）タイムにて、主から唐突にそのようなお言葉が告げられた。

応接間兼居間の床に置かれた、子ネコ姿のユーリが丁度潜り抜けられる大きさの、筒状になったフカフカするクッションへ向かって猛ダッシュし、滑り込みよろしく勢いに任せて腹這いで突撃してトンネルを潜り抜ける。
そんな一連の運動を、主が飽きるまで延々と繰り返す。

……これ、どこの障害物競争の練習ですか？　何を想定しての体力作りと訓練ですか？　と、思わず聞きたくなるような単調な作業だったが、その姿を眺めているカルロスは大変ご満悦。
そして、おもむろに連盟行きを切り出されたのである。
匍匐前進よろしく、トンネルの真ん中辺りからよじよじと腕を使って、体の半分だけ顔を出した状態で、ユーリはカルロスを見上げて首を傾げた。

以前、アティリオ……様、が、ウチに乗り込んで来た時に約束した出頭要請の件ですね？

「ああ。取り掛かってた依頼品は全て納品したし、そろそろ行かねえと、またぞろ家に押し掛けられそうだしな」

カルロスはソファに腰掛けたまま両足を組み、背もたれに軽く体重を預けて考え込むように目を閉じた。

「連盟に顔を出したら、そのまま仕事を押し付けられるかもしれん。そうなれば、長期間留守にする事になりかねない。その間、お前をどうするか……」

何でしょう。今私、ペットホテルに預けられるペットの状態ですか？　そりゃあ、マッドな魔術師だらけな連盟になんて、出掛けたくはないですけども。

トンネルの中に後退りして、そのフカフカっぷりを堪能しつつ、ユーリは出張中の懸念材料（お荷物）状態であるらしき現状に、微妙に落ち込む。
そんな彼女を更に追い込むように、ドアが軽くノックされ、シャルが居間へと入って来た。

「ユーリさんが頼りなさすぎてお留守番を任せるのが不安なら、お連れしたら如何ですかマスター？」

いつもの微笑を浮かべたまま、同僚はカルロスにそう進言する。わざわざ嫌味を言う為に立ち寄ったのか、単に手透きになっただけなのか。

出たな、エセ紳士め。
だからシャルさんは一言余計なんですーっ。

「あなたには言われたくありませんね」

人間の姿のまま余裕綽々で見下ろすわんこと、トンネルに体を埋もれさせたままフシャーッ！？　と威嚇するにゃんこの姿に、カルロスはニヤニヤと笑うのみ。

「だいたい、マスターがお仕事に向かおうというのに、自分はただ安穏と待っていようとするその性根が気に入りませんね」

私が連盟なんかに足を踏み入れたら、命狙われて追い回されるじゃないですか！？

「おやおや、何を言い出すやら。
わたしはマスターのクォンである事は知られていますが、あなたの存在を連盟の魔術師はまず知りません」

フンと鼻を鳴らして反論するシャルに、ユーリはしばらく考えてからカルロスへと顔を向けた。

主、魔術師には外殻膜で、私が主の使い魔だと看破されたりはしないんですか？

「俺の術だぞ？　外殻膜にも『ステルス』付きだから本人にしか感じ取れん。
……オマケに、お前はまさかの魔力ゼロ生物だしな。疑いの目を向けても、よくよく目を凝らしても魔力が感じ取れんとくれば、俺の性格を知ってる奴なら、普通のペットだとしか思わねーんじゃねえ

か？」

主……ご自分をよくご存知でいらっしゃいますね。
そのご自分の趣味嗜好を隠そうともなさらない堂々とした態度に、私、うっかり心酔しそうです。

どこか自慢げにふんぞり返ってそんな事をのたまう主に、ユーリはガックリと脱力して床に顔を伏せた。

「それに、シャルの時は学院の施設を利用したが、ユーリの方は伯爵邸でだったしな。
あの連中じゃあ、使い魔が複数居るとは想像の範疇外に違いない」
「ですがマスター、アルバレス様は、マスターがクォンを2匹お持ちな事をご存知でいらっしゃいますが」
「そうなんだよな……今となっては、あいつに2匹目の召還を成功した事を知られてるのは痛いな」

はあ？　なんですかそれは。
アティリオ……様、がどうしてご存知なんですか。

「それはですね、ユーリさん。
普通の魔術師達は、クォンとの契約術に失敗するんですよ。
だから、呼び出す事に成功すれば、それは即ち有能であるという、連盟の中でも手っ取り早い証明になるんです。
まして、それを二回も成功したとなれば、周囲に秘密にしきれずに少年心にも、友達相手に自慢したくもなろうというものでしょう？」

つまりなんですか。使い魔契約術を成功させたと、主が子供の頃、自分からアティリオ……様、にベラベラ自慢した訳ですか。

「ええ、まさしくそうなんですよ。微笑ましい逸話でしょう？」

それはそれは、微笑ましい少年時代ですねぇ。
私の世界にも居ましたよ。都会じゃちょっと珍しい昆虫を飼ってる事を、やけに得意になって自慢する少年達。

「どこの世界でも、男の子は見栄っ張りですねぇ」

使い魔2人からの生温くも白い眼差しに、

「……色々あるんだよ、人間の男としてのプライドの問題だ。女や人外には、分からんかもしれんがな」

ご主人様は非常に居心地悪そうにそっぽを向いて、そう言い切ってみせた。

「同世代の友人に一目置かれたい、などという権勢欲なんて、わたしは一生湧き上がらなくて結構です」

右に同じく。

「お前ら……喧嘩腰かと思えば、あっという間に2匹で手ぇ組みやがって……くそぅ」
「偶発的に見解が一致しただけです」
「とにかく、だ！」

形勢不利と見るや否や、カルロスはご主人様権限で強引に話題のすり替えに走った。
パンッ！　とわざとらしく両手を叩き、トンネルの中で連続寝返りよろしく、筒状クッションに包まれたまま無意味に床をコロコロと

転がっているユーリを、ビシッとオーバーリアクション気味に指差してきた。

「明日はお前も連れてくからな。
それから、その動作は実に良いからどんどん続けろ」

おおっと。特に意味もなくもぞもぞしていたら、これの何かが非常に主のお気に召されたようですよ。
何やっても喜ぶとか、主、ネコ好き過ぎじゃないですか？

「マスター、ユーリさんに延々自力で回転して頂くのは、少々酷ではないかと思いますよ」

と、そこへ、如何にももっともらしい切り口でシャルが口を挟んでくる。
今日は何を言い出す気だ？　と、やや警戒しながら同僚を見上げると、彼はこれまたいつもの微笑みを浮かべたまま、

「ですから、わたしが回して差し上げますよ。くるっくると愉快に回転していく事請け合いです」

と、如何にも（善意と親切心しかわたしは抱いていません）とでも言いたげに、表情ひとつ変えずガシッとトンネルのクッション生地を鷲掴みにする。

待てコラァァァ！？

そして、ユーリがトンネル内から脱出する暇も、カルロスがシャルを制止する暇も与えずに、ていっ！　とばかりに手首のスナップを利かせて回転を加えつつ押し出した。それはまるで、坂道を転がり

落ちてゆく車輪の如く。
数秒間、ユーリの視界は３６０°グルグルと目まぐるしく姿を変え、居間の壁に激突して回転は止まった。その頃には、乗り物酔いでもしたかのように気分最悪な上に、星が飛んで見える。

「楽しかったですか、ユーリさん？」

クラクラしているユーリをトンネルの中から取り出して抱き上げ、そんな事を尋ねつつ、にっこりと笑いかけてくる先輩の顔面に、ユーリは躊躇なく全力ネコパンチをお見舞いした。
体調不良のせいで、威力は全く発揮されなかったが。

魔術師連盟の本部は、王都にある。
そして、カルロスが自宅を構えるパヴォド伯爵領は、王都と隣接している訳ではなく……むしろ国境沿いに存在している。国防の要、といったところであるらしい。

てくてくと歩いて行っては何日も掛かるその道のりを、イヌバージョンのシャルの背中に乗って空から一直線、などという裏技を使って半日で辿り着いたカルロスは、ネコ姿のユーリを抱きかかえて青年姿に戻ったシャルを背後に従え、王都を囲む城壁の大きな門を潜った。

王都へ入る為には、身分証明になる通行手形のような物が必要らしいが、彼の場合はそれが魔術師連盟所属を示す物であるらしい。
門の警備と出入りのチェックを行っている守衛から、胡散臭そうな眼差しを向けられ、

「なんだ手前、人間みてえなフリして魔法使いか」

などと、身分証明になるらしいカードを見せる前の丁寧な応対から、途端に面倒そうに吐き捨てられた。

なーんか、ヤな感じですね。

“まあそう言ってやるな。自分よりも価値が低い相手だと貶めて優越感に浸ってないと、魔法使いが恐くて仕方が無いんだろ”

主はそんな偏見の目には慣れているのか、さして気にした風でもなくテレパスでユーリを窘めてくる。

そしてシャルも、守衛本人の耳に入らないようにか、小声で付け加える。

「魔術師関係の職業と人種差別に関しては、この国はまだマシな方らしいですしね。

実際、連盟の長年の地道な奉仕活動のお陰で、ああいった手合いはむしろ少数派ですし」

「バーデュロイは使えるものは利用しろ、つー方針だが、他国じゃあそれこそユーリの世界での魔女狩りみたいな事になってるらしいぜ？」

カルロスのおどろおどろしい台詞に、ピキッと固まってしまうユーリを主はぐりぐりと撫で。一行は王都へと足を踏み入れたのである。

人通りの多い、活気と清潔感溢れる街並みが、視界いっぱいに広がり……あちこちから賑やかな呼び声や話し声が絶えない。そして王都よりも高くなった丘陵地の道の先には、峻険な峰を背後に悠然とそびえ立つ白亜の居城。

ここが、王都……

“お前が人混みに落ちたら、確実に踏み潰されるからな。しっかり捕まってろよ”

おのぼりさん状態で、ポカンと口を開けたまま周囲をきょときょとと見回すユーリに、カルロスからはそんな忠告が飛んできた。

結局ユーリはどこに行っても、体格差の難題が立ちはだかる毎日なようである。

2

カルロスの腕に抱きかかえられて運ばれつつ、初めて目にした華やかな王都に内心わーきゃー騒いでいるユーリはさておき、彼らが一直線に向かったのが魔術師連盟の本部。

本部の塔、などと称されていた通り、いったい何階建てなのかユーリにはよく分からないその建物は、壁は真っ白に塗られた一本の高い塔であった。窓が大きく開かれていて、敷地内には芝生と花壇まで備えている。

はあ……これが本部。

「やっと来たのね、カルロス」

首を限界まで上げて、塔の全容を伺っていたユーリの呟きに被さるように、両開きの重たそうな扉がバーン！　と開かれて、薄紫色の長いローブを身に纏った美女が、彼を待っていたらしき台詞を口にしつつ、つかつかと歩いて来てカルロスの眼前で立ち止まって腰に手を当てた。

「そのうち顔を出す……だなんて曖昧な伝言を寄越して。あともう一日遅かったなら、待ちきれずにあたし、外出しちゃってたわよ、もう！」

「なんだ。それなら、明日来れば良かったな」

「カルロス！」

カルロスの軽口に眉を吊り上げる美女。彼女の外見的な特徴は美しいというだけではなく、その長い耳も目を引く。

「落ち着けよ婆さん。あんまり怒ると血圧上がって倒れるぜ？」
「若造は若造らしく、年寄りを大事にしなさい！　まったくもう……今日のシャルはそっちなのね」

しれっとしたカルロスを『メッ』とねめつけて、薄紫色のローブの美女は彼の後ろのシャルに視線をやった。
同僚はかの美女に優雅に一礼し、

「ご無沙汰しております、ベアトリス様。相変わらずお美しくていらっしゃる。連盟という殺伐とした塔に咲く、大輪のダリアのごとき華やかさですね」
「……あなたのその歯の浮くような台詞も、相変わらず絶好調ね。なんでイヌバージョンじゃないのよ」

本気なのかおべっかなのか不明な賛美の言葉を述べるが、美女は『はいはい』と受け流して、

「それで、そろそろカルロスに魂あげる気になった？」

世間話のついでのように、そんな事を尋ねてくる。

「婆さん！」
「いいえ、相変わらずですねぇ」
「そう。その気になったらいつでも言ってね？」

それにしても、今日こそイヌバージョンの方が良かったわと、美女は唇を尖らせてその話題をあっさりと終わらせた。

な、何なのでしょうか、このインパクト抜群な方は……

“このハイテンション女はベアトリス、つー連盟のお偉いさん魔術師だ。いわゆる長老格の1人だな。
見た目は若いが……”

３０前ぐらいじゃないんですか？

“見ての通り、こいつはエルフでな。ある程度成長したら、老化しなくなるらしい。
実年齢は３００越えてる婆さんらしいぞ”

……！　お肌の悩みとは無縁のエルフ、もの凄いハイスペック種族です……！

主からテレパスで伝えられた内容の一部分に、本気で驚愕して感心しているしもべに、ご主人様からのご返答は、

“アホだ……本気でアホだこいつ……”

という、苦悩に満ちた感情だった。

そしてベアトリス様と呼ばれた美女は、そんな風に仰天しているユーリにしっかと焦点を合わせてくる。その眼光の鋭さに思わず、出来る限り身を引いてカルロスの胸元に縋りついてしまう。

「……かっ……」

か？

「いやーっ！　何この子可愛い～っ！！」

「そうだろう、そうだろう」

ぶんぶんと両手を握り拳作って上下に振りつつ、ベアトリスはユーリを一心に見つめて「キャーッ！」と大興奮している。それに気を良くしたのか、得意気にふんぞり返るカルロス。

「カルロス、この子あたしに頂戴？」
「それは断るっ！」
「ケチーッ！　カルロスのケチケチーッ！」
「やらんと言ったらやらん！」
「じゃあ、抱っこさせて」
「ん、構わんぞ」

……こちらの世界の方は、ネコ好きがそんなに多いのでしょうか？それとも、類は友を呼ぶとか朱に交われば赤くなる的な現象ですか？

ぬいぐるみ感覚でカルロスの腕からベアトリスの腕の中へと手渡され、げんなりしているユーリを嬉しげに頬擦りしてくる美女。流石はカルロスの知人、抱っこも撫で撫でも手加減抜きで全力だ。ぐったりと脱力しつつ虚ろな眼差しをさ迷わせると、相変わらず笑顔のシャルと目が合った。

『ご・愁・傷・様』

声は出ずに唇だけがパクパクと動いて、そんな意味の言葉を形作る。

……さてはシャルさん、こうなる事を見越して、私を連盟にまで連れて来るよう主に頼んだんですねーっ！？

ベアトリスに抱っこされた状態で、ユーリは連盟本部へと足を踏み

入れた。
内側から見ると、石造りの頑丈そうな床や壁が無機質な印象を受けるが、魔術の明かりが昼間から煌々と灯されていて、入り口のロビーは開放的な空間が広がっている。
受付らしきカウンターには感じの良さそうなお姉さんが座っていて、にっこりと微笑みかけてくる。彼女もベアトリス程ではないが、耳が長く尖っている。

内部の造りをしげしげと眺めているユーリをヨソに、ベアトリスは颯爽と先頭を歩いて塔の中央の、複雑な模様が描かれた円形の床に足を踏み入れた。
それは中央から真っ二つに区切るように、向こう側は青、こちら側は赤く塗られていて、カルロスとシャルもベアトリスと同じように赤い半円形の床に立った。

「じゃあ、いつものところに行くわよ」
「分かった。シャル、ユーリと一緒にしばらく待っててくれ」
「はい」
「アップ、8」

ベアトリスがそう呟くと、彼女の体が浮き上がった。いや、カルロスとシャルの体も浮いている。そのまま3人プラス1匹は、ぐんぐん上昇していく。ユーリが首を伸ばして上の様子を窺うと、どうやらこの円形床の部分は塔のてっぺんまで吹き抜けになっていて、エレベーターのような役割を果たしているらしい。

上の階へ向かって上昇していく中、ユーリは通り過ぎてゆく途中の階を興味深く観察する。
円形の回廊のような廊下がぐるりと吹き抜けのエレベーターを囲み、四方を太い柱が一本づつ伸びて、建物を支えているらしい。

外壁と隣接している部分は様々な用途の部屋になっているのだろう。
各階に階段も備わっているようだが、なんだかあまり使われているようには見えない。

ところで、反対側の青い床は下り用らしく、今丁度、ふよふよとした速度で下りていく、フードを被ったマント姿の魔術師らしき人物が……

あ〝

「ああっ！？」
「よー、アティリオじゃねえか。じゃあな」
「な！？　カルロス、待て！」
「あらあ、アティ。
こんなところで会うなんて奇遇ねえ。それじゃあね」
「師匠まで！」

下りていく過程で、クルリと彼はこちらの方へと体を向け、今現在上りのエレベーターを使用している人物にようやく気が付いたようだったが、
どうやらこのふわふわ浮き上がりエレベーター、移動途中で降り立つ階を変更出来ないようである。
ユーリがアティリオの存在に気が付いた時には斜め上に居た彼も、お互いにどんどん逆方向へと移動していくせいで、短い会話を交わしただけで既に遥か下方だ。

着地点らしき、低い柵のみが事故防止に立てられている床にフワッと降り立つと、灰色や黒いローブ姿の耳の長い人々が立っていて、ベアトリスは彼らに一つ頷くと腕に抱きかかえていたユーリをシャルへと託した。

「それじゃあシャルは、お部屋で待っててね」
「畏まりました。いってらっしゃいませ、マスター」
「ああ、爺婆共の長話に付き合ってくる」
「ほら若造、きりきり歩きなさい」

やれやれ、と、実にわざとらしく肩を竦めるカルロスの耳を引っ張って、ベアトリスはずんずんと廊下を歩いてゆく。
そしてその場には、黒と灰色のローブ姿の魔術師さん達が4人と、子ネコ姿のユーリを抱いたシャルが残された。

「カルロスのクォンよ、こちらへ」
「はい」

魔術師の1人が促し、先導するように先に立つ。そして残り3人はシャルの後ろに。

何かこう……案内係にしては変な配置ですね。
あんまり歓迎されてないみたいな、嫌な感じもしますし。

みー、と鳴きながらユーリが内緒話をするようにシャルの顔に耳を近付けると、

「移動中の監視役ですからね」

などというお返事が返ってきた。
益々、憂鬱になるようなお言葉である。

そんな感じの悪い面々が無言で誘導して入るように示したお部屋は、ベッドが一つにテーブルが一つにイスが二脚、外に面した窓は大き

く明るく太陽の光を取り込むが、分厚そうなガラスが嵌め殺し。
狭苦しくは無いが、殺風景でゆったりと寛ぎ空間には程遠い部屋。
監視役であるらしい彼らは「ここでしばらく待つように」とだけ告げて、カチャリとドアを閉めてさっさと立ち去ってしまう。

……あれ、あの人達、私達を見張らないんですか？

「見張らないんですねぇ、これが。
わたしにはなるべく関わり合いになりたくないと、そういう事らしいです。
あくまでも、廊下で暴れられたら困るから監視はしますが、部屋に押し込めた後は知らんぷり、と」

慣れた様子でシャルはベッドに座るとユーリを自分の傍らに下ろし、背負っていた荷物を床に置いた。

「ユーリさんは、こちらの世界の魔術師は皆、クォンを殺しにかかると警戒しているようですが……それは見ての通り、大間違いです。
わたしを殺したところで、マスターの力が増すだけ。他人の才能を伸ばす為だけに懸命になって骨を折るような方は、アルバレス様ぐらいなものですよ。
他はまあ、気味悪がられたり、罵詈雑言や嫌味を言ってくるのが普通ですね」

ごそごそと家から持ち出してきた荷物を漁りながら、シャルは淡々と語る。

……つまり、なんですか？
あのアティリオ……様、は、こちらの世界の魔術師基準でいけば、『とてつもないお人好しで、同期のカルロス君の為に奮闘している、

今時稀な、実に友達思いの健気な男の子』というカテゴリーに……

「ええ、そんな感じですね。周囲の目としては」

荷物から水筒と浅い皿を取り出したシャルは皿にお水を注ぎつつ、にっこりと笑顔で肯定してくる。

同僚から差し出されたお水をチビチビと舐め、ユーリは室内へと視線を巡らせた。

それにしてもシャルさん。

ここ、いわゆる待合室なんですよね？　まさか、入り口に鍵とか掛かってませんよね？

「鍵なんて掛かっていませんよ。

ほら、下手に鍵なんて掛けて閉じ込められたりしたら、逆に脱出したくなるじゃないですか？」

水筒のお水を飲みながら、笑顔で同意を求めてくる同僚に、（さては一度、無意味に脱走して部屋の前で待機してみせた事があるな）などと、穿った予想が過ぎる。

無関心に放置するぐらいなら、案内係をあんなに物々しくしなくても良いのに……

「それは無理じゃないですか？

結局のところ、わたしは連盟の魔術師からは警戒されていますから」

シャルさん、それ、結局どっちなんですか？

ほったらかしの無関心な現状で、警戒って……

水を飲み終え、ごろんとベッドの上に丸くなるユーリの傍らにドサッと身を横たえ、シャルは声を低める。

「この部屋は実は、魔術を使って犯罪を犯した人物を閉じ込める事にも使われています。
全ての魔術を遮断する結界が張られていて、マスターとの思念による心の声も届きません」

え……？

ピクリと耳を動かしてシャルを見上げると、彼は自嘲気味に笑う。

「なんの備えもない部屋に案内するのも、本部の中をうろつき回られるのも恐ろしい。かといって、閉じ込めれば激しく反発してくる。ならばせめて、魔術遮断結界の中に置いておこう。主人が迎えに来るまで出てくるな、と言い含めて。
確かに、ここに居ればわたしは能力が半減されたも同然ですしね」

それって……

「わたしは、彼ら魔術師にとっては、『得体の知れない化け物』らしいですよ」

思わずぎゅむっと、ユーリは横たわっているシャルのシャツの襟にしがみついた。
異世界から来た、この世界にたった一匹しか居ない天狼だからといって、なんだ。
確かにシャルはいかにも殺傷能力の高そうな、迫力満点の巨躯を持つ狼の姿をしているけれども。

シャルさんは、シャルさんです。得体知れなくなんて、ないです。たまに意地悪だったり、私の事をからかってきたりしますけど、シャルさんは私の先輩の天狼さんです。

「ユーリさんは本当に、すぐ人の服を汚してきますねぇ」

ぐしぐしと、涙ぐみつつ訴えたらば、シャル本人はそんな事をのたまいながらユーリの背中を撫でてくる。

そして彼女のネコ耳を指先で軽くぐにぐにしてきたかと思えば、彼はおもむろに、それをはむっと噛んできた。

ユーリが驚いて「みぎゃっ!?」と悲鳴を上げて飛び跳ねつつ距離を取ると、

「ああ、すみません。
なんだかユーリさんがやけに美味しそうに見えて、無意識のうちに、こうパクッと」

と、全く悪びれもせずに平然とそう言い切る。

……シャルから耳を触られたら、食べようかどうしようか考えている合図であるらしい。今後は、一目散に逃走しなくてはと、ユーリは心に決めたのであった。

文句を言おうとしたユーリの口を、シャルが手のひらで塞ぐ。

「……しぃー。ユーリさん、誰かが来ます。
この匂いは……アルバレス様のようですね」

シャルはベッドの上に身を起こし、ユーリを膝へと抱き上げ、難しい表情で押し黙ってドアを見つめた。

『彼本人は、カルロスの為という善意と義侠心で』クォンであるシャルの命を狙う（？）連盟所属の魔術師アティリオが、シャルとユーリしか居ないこの部屋へと向かってきている。

いったい、何の目的なのか……そう考えて、ユーリは天を仰ぎたくなった。何がも何も、アティリオの目的なんて一つに決まっている。

3

ただ今、本棚の影からこんにちは、なユーリです。

「まったく……本当にちょろちょろちょこまかと！
今すぐ出てこい、黒ネコ！」

アティリオ……様、が、憤慨も露わに怒鳴り散らしつつ、本棚を一つ一つチェックして確認して歩いておられます。

「いつまでも逃げ回っていないで、カルロスの馬鹿に、さっさと魂を差し出せ小動物！」

そう率直過ぎるほど明確に、目的を叫んでいらっしゃいますが。アティリオ……様、内密にという我々との約束を守って下さるつもりはあるのでしょうか？

本棚の一番上に乗っかって暗がりにじっと隠れたまま、ユーリはこっそりと溜め息を吐いた。
またぞろ、あの同僚の人の良さそうな微笑と口車にまんまと乗せられて、彼女1人が貧乏くじを引かされたような気がしないでもない。

さて、いったい何故こんな状況になっているかというと……

カルロスが連盟の方々の前へ出頭している間、一緒にくっ付いて来たシャルとユーリが暇を持て余しつつゴロ寝しながらお喋りしていた控え室に、アティリオの足音が近付いてきているという。

あのー、シャルさん。
ここは一つ、敵が接近してくる前に、サッサと逃げ出しませんか？
　幸い、部屋の鍵は掛かっていないんですし。

ドアを見据えたままの同僚に、彼の膝の上に乗っかっているユーリが小声でそう提案してみると、頭をぐりぐりしてきた。

「ユーリさんは本当に、わたしとは根本的なところで考え方が違いますね。
先ほど、わたしが本部の中を好き勝手にうろつき回るのは、連盟の人々に嫌がられていると説明したばかりではないですか」

あ……

同じく小声で返事を返してくるシャルの声音に、ふんだんに呆れた気持ちが紛れ込んでいて、ユーリは自分のうっかり加減に頭を抱えたくなった。
命を狙われるという非常事態に浮き足立ちになり、逃走の二文字が思考の中で何よりも最優先されてしまったのだ。
勝手な思い込みで忌避してくる魔術師などこちらとて放って置くまでだが、シャルが塔の中を1人で自由に徘徊していれば、それは向こうの恐怖心を煽って攻撃的に変化する可能性もある。

「それにそもそも、何故わたしが逃げなくてはいけないんです？
ここで大人しくじっとしているというのに、わざわざ向こうから乗り込んできて殺そうとしてくるというのならば、堂々と返り討ちに出来て好都合じゃないですか」

ズーン、と落ち込んでいるユーリを抱き上げて顔を合わせ、シャル

は爽やかなまでにイイ笑顔でサラリと言い放つ。

「ええと、なんでしたっけ？　ユーリさんの世界には、自分の身を守るべくそういった行為が当然の行動である、という言葉がありましたよね？」

……正当防衛、ですか？

「そうそう、『セイトウボウエイ』良い言葉ですよね」

笑みを崩さないシャルに、またしてもあむっと耳を噛まれてしまう。もしかしなくとも、彼は今空腹なのだろうか。

肉食獣の腹を空かせたままにしておくなどかなり危険だと、今はどっかでお偉い魔術師様とお話しているであろう飼い主に、切々と訴え言い聞かせたい。空腹時に喰われてしまうのは、非常食扱いのひ弱なユーリなのだからして。

今度はたいして痛くないのがせめてもの救いだが、逃げ出したくてもシャルのデカい手から脱出出来る気がしない。

シャルさんは平気かもしれませんが、私は狙われたら死にます。それはもう、踏み潰されるだけで昇天です！

『闘争』タイプのこの同僚が、『逃走』タイプであるユーリの身の安全を気にかけてくれるとも思えない。

「ならこうしましょう、ユーリさん。

アルバレス様がわたしを狙ってきたらわたしが返り討ち、ユーリさんを欲しがったらあなたは1人、捕まらないよう全力で逃げるという事で」

な、なんですかその結論？

などと、彼らが小声で話し合っている間に、「ここか！？」という叫びと共に、部屋のドアがやや乱暴に開け放たれた。そこには予想通り、連盟の本部の中でもきっちりとフードを被り、肩を怒らせたアティリオの姿が。

「おやおや。ご機嫌麗しゅう、アルバレス様」
「見つけたぞ、クォン！
さあ、潔く今すぐカルロスに魂を捧げろ」

室内には入らず、平然とベッドに腰掛けたままのシャルを真っ直ぐに見つめて、アティリオはどこまでも直情的に要求を突き付けてくる。
そして、それに対するシャルの返答はというと、

「嫌です」

短くばっさりと、いつもの柔らかい笑みを浮かべたまま、これまた率直だ。アティリオの頬がヒクリと引きつった。

うーん、アティリオ……様、って、最初に思ってたよりも意外と可愛い性格なのでしょうか。
それになんというかシャルさんって結構、アティリオ……様、の事、意地悪し返して楽しんでません？
……あぅ、ちょっ、シャルさんダメ、どこ触っ……！？

呆れたような感想を漏らしたのが癇に障ったのか、ユーリはシャルの膝の上に乗せられたまま、彼の手によって尻尾の付け根辺りを撫でさすられ、身悶えする羽目になった。

手付きが妙に雑だが、もしやシャルは、カルロスが子ネコ姿の時のユーリとスキンシップする様を何とはなしに見物していたせいで、彼女の弱点を知っているのだろうか。由々しき問題だ。

「お前は、最もカルロスの為になる選択とは何か、考えた事も無いのか？」

「わざわざそんな問答などしなくても、わたしを殺したいのならば、さっさと仕掛けてきたら如何です？」

話すのも面倒くさい、とでも言いたげな挑発的なシャルの言葉に、アティリオはフンと鼻を鳴らした。

「生憎、場所が悪過ぎる上に十分な距離が無い。僕は適わない相手に真っ向から殴りかかるほど、命知らずじゃない。だから常に、言葉で説得している」

「おや、残念」

胸を張って言い切るアティリオに、なんじゃそりゃと思わず脱力し……そうになったユーリだったが、シャルの手が相変わらず敏感な箇所を撫でてくるせいで、ひっきりなしに変な声が漏れる。お陰で正常な思考が保てず、なんだか段々、頭の中がボーっとしてきた。マッサージ中に、睡魔に誘われる感覚と似ている。

「それに、だ。僕はさっきから気になっている事がある！」

魔術遮断結界外であるらしいドアの向こうで、相変わらず仁王立ちしたまま、アティリオはジーッとシャルの膝の上で「に～、に～」と鳴いているユーリに視線を注いできた。

「カルロスのクォン、『ソレ』はなんだ？」

「なんだも何も、見ての通りの黒ネコですが？」
「仮にもお前の膝に平気で乗ってる生き物が、『見ての通りの黒ネコ』なんかであるものか！」

アティリオの一喝に、シャルの手の動きが止まった。
お陰でようやくまともに働き始めたユーリの思考回路が、一瞬にして警報を鳴らしてくる。

シャルさん駄目、シラを切り通さないと！

「……ああ、何を言い出すのかと思えば。わたしがマスターの飼いネコの世話をしていて、何がおかしいと言うんです？」
「人よりも動物の方がよほど警戒心が強い。まして、凶暴な人食い熊でさえお前の気配を察知しただけで怯えるような獣だ。あの動物好きが今の今まで、ペットを飼えなかった元凶の癖に、とぼけようとは片腹痛い」

アティリオの『どうだ、ぐうの音も出まい』と言いたげな言い分に、ユーリは頭が痛くなってきた。
確かに、何故あの主が、ユーリやシャル以外の『普通のペット』を飼おうとしないのか、謎といえば謎ではあった。
その原因が、シャルの存在に怯えてしまうからとはまた、予想外だ。
そして、アティリオが本当にカルロスの事をよく理解しているらしき事にも。

熊を脅かしたってシャルさん……ナニ、やらかしてらっしゃるんですか、あんさん……

ユーリのその力無いツッコミに対する、シャルからの返答は流石に無い。

しかし、黙りこくっているシャルの態度から、自らの推測に真実味が増したと確信したのか、アティリオはにっと笑みを浮かべ、

「さあ、カルロスのクォンと推定2匹目のクォンの黒ネコ！
さっさとカルロスに魂を捧げろ。そして奴と師匠に、正しいイヌとはどんな生物か思い出させてやる！」

ドンッ！　と開け放されたままの木製のドアを叩き、高々と息巻いた。
彼の本音らしき叫びに、ユーリは思わずシャルの膝の上でコケた。

……いや、私も常々、シャルさんは『イヌ』じゃないとは思っていましたよ？
こちらの世界には私の世界の『狼』や『イヌ』の姿と酷似した生物は居ないのかもなぁ……とまで、思っていましたとも。主はシャルさんを『イヌ』だと言い張るし、今日会ったベアトリス様も『イヌ』と称していましたし。
だからこそ、アティリオ……様、の意見はすんごく理解出来るんですが。理解自体は出来るのですがっ！
だからといって、そんなしょーもない理由で殺されるのは、マ・ジ・勘弁・弁っ！

ユーリの叫びを理解した訳ではないだろうが、うっかりと頭を噴火させ過ぎて思いっきり本音をさらけ出した事に、幾度か瞬きをして我に返ってから気がついたらしきアティリオは、慌てたように言い添える。

「ああ、いや……そう、才能を持つ人材が正しく評価されないなど、組織として正常に機能しているとは言い難い！
カルロスは魂の力を増して、より高度な仕事をこなしていくべきな

んだ！」

ええい黙れ、誰に向かっての弁解ですか、このイヌマニアめが。
この世界の連中は、どいつもこいつも動物好きかこの野郎。
イヌだけ贔屓とかふざけんな。こっちだって、好きでネコになってる訳じゃないんです！

「ぷっ……あは、あははははっ！？
あ、アルバレス様もユーリさんも、面白過ぎる……」

フシャーッ！？　と、ユーリから急に威嚇されてムッと不機嫌そうに眉をしかめるアティリオ。そんな彼らの姿に、シャル自身は腹を抱えて大爆笑していた。

「ああもう、こんなに笑ったのは何年ぶりでしょう。アルバレス様は、意外に面白……いえ、ユーリさん風に言うと、『可愛い方』だったのですねぇ」
「僕を侮辱しているのかクォン！？」

大笑いしだしたシャルに、アティリオは怒気を滲ませて睨み付けるが、ユーリの同僚は彼の殺気程度ではびくともしないらしい。

「これでも褒めているんですが？」

そしてシャルは、膝の上でアティリオを威嚇し続けていたユーリを抱き上げて、おもむろにベッドから立ち上がった。
そのまま部屋の出入り口、アティリオの真正面にまでスタスタと歩み寄る。警戒心を露わにしつつ、一歩後退るアティリオ。

「アルバレス様。わたし、楽しませて頂いたお陰で、多少気が変わ

りました」
「はあ？」
「先ほどまでは、まあ一思いに殺ろうかなと思っていましたが、あなたがユーリさんを追い掛け回している分には、噛み付くのは止める事にします」
……ちょっと待って下さい、シャルさん。
つまりソレ、アティリオ……様、が私を狙うだけなら、シャルさんは妨害せずに放置しておくって事ですか？
きょとんとした表情のアティリオを尻目に、殊の外強いらしい同僚にユーリが慌てて確認を取ると、シャルはいつもの人の良さそうな笑顔で『うん』と言いたげにこっくりと頷いてくる。
「わたしはともかく、連盟に『2匹目』の事が知れ渡ってマスターの立場が微妙になるのは、アルバレス様も不本意でしょう？ですから、ユーリさんの事は内密にお願いしますね」
「……という事は、やはりその黒ネコはカルロスのクォンなんだな？」
シャルさん、あっさりバラしたーっ！？
「さてどうしますか、アルバレス様。
あくまでもわたしを狙って返り討ちにされますか？　それともユーリさんを狙って走り回りますか？」
「その黒ネコもカルロスのクォンだと言うのならば、是非はない。そのネコを寄越せ」
「なるほど……では」
迷わず即答したアティリオに、シャルはチラリと同僚に目配せをし

つつ笑顔で……ユーリを彼の顔面目掛けて投げつけた。意表を突かれたのか、まともに飛びかかられて「ぶっ！？」と驚愕の声を漏らすアティリオの顔に、挨拶代わりに遠慮なく爪で引っ掻いて格子模様を刻んでから飛び降り、ユーリは一目散に廊下を駆け出した。

うわぁぁぁんっ！　あの意地悪男、ホントに私を放流しやがったーっ！？

内心嘆くユーリであったが、そもそもアティリオにユーリの正体を感づかれた辺りで、反撃か逃走しか道は無い。
仮にも魔術師であるアティリオを撃退する術など持たないユーリが生き延びるには、カルロスの庇護下に入るか、気紛れを起こしたシャルに守ってもらうかだ。
そして現状、同僚の『気が変わって』しまったからには、後はもう、捕まらないように逃げ出すしか無い。非常に遺憾な事に。

「何をする！？」
「ほらほら、ユーリさんを見失ってしまいますよ、アルバレス様。彼女、なかなかすばしっこいですからねぇ。
マスターの面談時間内に捕まえられますかね？」

背後からそんなやり取りが聞こえてくるが、カルロスが魔術師のお偉方とのお話を終えるのは、いったいいつになるのだろう？
あてどなく本部の廊下を駆け抜けて、ドアが開きっぱなしになっていた手近な部屋へと駆け込みつつ、縋るような気持ちで主へと思念を飛ばすが、返事は返ってこない。お話している場所も、魔法的な効果がかき消されるところなのだろうか？

という訳で冒頭に戻り、無作為に飛び込んだ本棚だらけの書庫らしきお部屋にて。

有り難い事に、家の書斎とは違って床に本が段差をつけるように堆く平積み状態に重ねられており、ユーリはそれを足場代わりにひょいひょいと棚を駆け上り、暗がりに隠れているのである。殆ど間をおかずにアティリオもまた書庫まで追い掛けてきて、ユーリは肝を冷やしているところだ。

命と意地とを賭けた真剣本気な追いかけっこの、始まり始まり……

「見つけたぞ……！」

かくれんぼの基本、『高いところは見落としやすい』テクでやり過ごそうとしていたユーリは、上段の本を手に取る際に使用される梯子に上り、棚の上まで隅々と見渡していたアティリオと目が合い、尻尾をピーンと伸ばして一瞬硬直してしまった。
敵が腕を伸ばしてくる前に急いで本棚を駆け下り、またしても書庫から大脱走だ。

ほーほほほほ、アティリオ……さん、様？　ドアをしっかり閉じて退路を断っておかないなど、失策にもほどがありますことよ！

4

まるでドーナツのように、ぐるりと綺麗な円形を描く廊下に飛び出たユーリは、直感的に左手に向かって走り出した。進行方向を左右どちらを選んだとしても、その気になれば一周して同じ場所に戻ってこられるのだから、悩むだけ時間の無駄だ。

周囲の様子を窺いつつ、走りながら建物中央の吹き抜けへチラリと視線を向ける。

エレベーターは使い方がイマイチ分からないし、起動には使用者の魔力やキーワードを口にする必要があるかもしれない。

だが万一、今のユーリにも利用可能だったとしても、だ。遮る壁も無い丸見えのエレベーターでは、追っ手を振り切れないから却下だが。

カーブを描く廊下は人気が無く、背後からは騒がしい足音がドタドタとユーリを追い掛けてくる。

このままあてどなく走り続けるよりも、どこかの部屋に逃げ込み、追っ手ことアティリオをやり過ごして休みたい。猛ダッシュしながら目星を付けた、適当な部屋のドアノブ目掛けて全力でジャンプ！

……届いた！　やった、本部のドアノブは家よりも低い場所にあるんでしょうか？

両前足をドアノブに巻き付けるようにして、飛び付いた勢いを利用して、振り子のようにノブを回す。そして同時に全体重を乗せつつ、ドアに体当たりだ。

さあ、開けゴマーっ！

無意識のうちにそんな叫びを上げつつ、ユーリはドアを開……こうとしたのだが、開かない。ユーリが木製のドアとぶつかった際に、ガッ！　と、盛大な音を立てただけで、それはビクともしない。ノブはしっかり回ったので、鍵は掛かっていない筈。諦めずに身を捻って再び体当たりを仕掛ける。

先ほどの書庫のドアは、室内に向かって開くタイプだった。さほど離れていないこの部屋のドアも、同じように廊下から押して開れると予想していたのだが、ユーリの二度目の全力体当たりでも、そのドアはやはり動かない。

な……！？

まさか、このようなところで合間見える事になろうとは、イスカリオテのユダよ……！

相変わらず、許可なく勝手に命名したドアのノブにしがみついている前足が、ぷるぷると震えて痺れてくる。

流石にいつまでもそこにぶら下がっている事は出来ず、ユーリはついに力尽き、床へと滑り落ちた。

「ふっ……いい、ざまだな、黒ネコ……ごとき、が……！

身軽さが、仇と、なった、か……！」

ぜひゅーぜひゅーと、むちゃくちゃ息を乱しつつ、背後から走ってきたアティリオは、しかし台詞だけは余裕綽々な内容を言い放ちつつ、尻餅をついて呆然とドアを見上げるユーリに腕を伸ばしてくる。彼の接近にハッと我に返ったユーリは、その場で体勢を整え直すと同時に、アティリオが踏み込む為に大股になった隙間へと全力で滑

り込んだ。

秘技、トンネルくぐり！

ネコ超絶可愛がり主に、日々付き合わされている飼いネコを舐めんなーっ！

「なあっ！？」

床に転がっていた子ネコに意識を一点集中させていたアティリオは、獲物の予想外の動きに対応が遅れ、肩をドアへと強打する羽目になってしまった。

ぶつけた肩を押さえてうずくまるアティリオを尻目に、ユーリは再び全力で駆け出す。

どこか……どこか、時間が稼げるところは！

カルロスの用事が終わりさえすれば、しもべを危機から救い出してくれる筈だ。

それまではなんとしても、捕まる訳にはいかない。捕獲されたが最後、どのように魂が抜き取られるのかは分からないが、どのみちユーリに明日は無いのだから。

だいたいっ！　真正面から挑んでも勝ち目が無いから、シャルさん相手だと説得を選択したくせに、私は弱っちそうだから実力行使だなんて……納得がいかなさすぎです！

あの人にはやっぱり、様を付ける必要は無いっ！

うなーっ！　と叫びながら逃げ場を求めて廊下を突き抜け階段の手すりを滑り降り、下階へと駆け込む。

どこか、逃げるのに適した場所は無いかと視線を飛ばす。すぐ上の

階とは違い、こちらの階は廊下を行き交うローブ姿の人々が大勢見受けられた。

何か、魔術師や魔法使いって、耳が尖っていて美形な、エルフやハーフエルフだらけなのですね。我が主の耳は丸いですが、やっぱり美形ですしねえ……

どうやら本部の魔術師とは、エルフの血を引く者が大多数を占めているらしい。
きょろきょろと視線をさ迷わせたユーリの瞳は、年若い少女魔術師達が、きゃいきゃいお喋りしながら歩いてくる姿を捉えた。

あれだ！

ユーリは迷わず彼女らのそばへと駆け寄り、その足下に纏わりついてにーにーと甘えた鳴き声を出す。

「えっ、こんなとこにネコ？」
「リボン付けてるし、飼いネコよね？」
「じゃない？」
「可愛い～人懐っこい～」

突然廊下に現れたネコに懐かれて困惑している風の少女魔術師達だったが、幸いな事にネコ嫌いやアレルギー体質の少女は居なかったらしく、４人のうち１人の少女に抱き上げて頂く事に成功。

やはり、可愛い容姿という利点を生かさない手は無い。
人懐っこく可愛い生き物を、少女達ならば高確率で好意的に考えて頂けると期待したが、実に有り難い。
後はすりすりと頬擦りしたり愛想を振り撒いて、出来れば追っ手で

あるアティリオを追い払って頂ければ完璧である。

「誰のネコなんだろうね？」

「受け付けで聞いてみようよ。多分、連れて来た人把握してると思う」

一階に下りようか、と、少女達の意見が纏まったところで、

「きっ、君達……！」

階段を下りて来たアティリオがようやく追い付いてきた。被っていたフードは落ちていて、汗だくかつ、頬に可愛く小さく刻まれた格子模様が露わになっている。

「そっ、そのネコは、僕の……」

『僕の』なんと言うつもりだったのか、言い淀んで困惑したようにユーリを見つめてくる。

ユーリは勿論、アティリオが近寄ってきた段階で、彼に向かって毛を逆立ててフシャーッ！　と威嚇。『私、この人キライ』を少女達に熱烈アピールだ。

「……アティリオ先輩の、飼いネコなんですか？」

「思いっきり嫌われてるみたいです、けど……」

「あははは、先輩ってば、この子に引っかかれたんですか！？」

「男ぶりが上がってますよ、セ～ンパイ！」

キョトンとした表情で見詰めたり、爆笑したりと、少女らの反応は様々だが、アティリオは小生意気な後輩達相手でもあくまでも冷静に、

「僕の飼いネコじゃなくて、知人から預かったネコなんだ。だけどどうも、僕とは相性が悪いらしくて……」

ユーリの引き渡しをお願いしている。

一応、ユーリがカルロスの使い魔であるという事は隠すつもりであるようだ。

彼女のプランとしては、アティリオが少女達からやや強引にユーリを奪い取ろうとしたせいで少女達が反発して、結果的にアティリオを遠ざけてくれるのではないか、と考えていたのだが。

どうやらアティリオという男は、ユーリが考えていた以上に女性に対して紳士的であるらしい。オマケに、後輩達からの受けも悪くない先輩でもあるらしい。

ウチの先輩とはエラい違いです……あ、何故だか涙が。

「アティリオ先輩にも、意外な弱点があったんですね」

「もう嫌がられて逃げられないように、ちゃんと捕まえておかなきゃですよ？」

ここが敵のホームグラウンドである事が、見事に災いした。アティリオに元々好意的だったらしい少女は、腕に抱いていたユーリを彼に向かって差し出し……

「ああ、有り難う」

額の汗を拭って、受け取ろうと手を伸ばしてくるアティリオの笑みが、ユーリの目には悪魔の微笑みに見えた。

捕まえられる前に、遠慮なくガブッと奴の指を噛み、最早保護は望

めない少女の腕の中から飛び下りる。

「つーっ！」

「見事な嫌われようですね、先輩」

「あんなに人懐っこい子なのにねえ」

「あー、ほら先輩、早く追い掛けないと見失っちゃう！」

「っ！　待てこのアホネコ！」

「アティリオ先輩頑張って～」

駆け出すユーリの背後で、そんな呑気な会話が段々遠ざかってゆく。

再び階段に飛び出したユーリは、何段も駆け下りて、更にもっと下の階へと逃走。元々、カルロスを待ちながらシャルとお喋りしていたのがどの階だったのかが曖昧だが、さして内装に変化が無い塔の内部を、無我夢中でぐるぐる回りながら階段を下りていたせいで、元の階からみて何階分を下ったのか、最早さっぱり分からない。

ユーリは廊下へ出て周囲の動きをさっと一瞥。

そこはまたしても、人気の少ない閑静な廊下。そんな中、彼女の間近で動くものがあるとなれば、自然と注意が向く。

それは丁度ドアを開いて室内へと入室しようとしている1人の魔術師で、ユーリはこれ幸いとその部屋を逃亡場所に決め、魔術師さんの足に蹴られないように気をつけつつ、コッソリ室内へと侵入した。うっかり尻尾が挟まれるようなミスも無く、背後で無事にパタンと閉じられるドア。

先ほどアティリオは、ユーリ1人ではドアが開けられない様子を目撃したのだから、きっちりとドアが閉じられた部屋は無意識のうちに初動捜査からは除外する筈だ。

あとはこの部屋に入った魔術師に見つかって追い出されないよう、物影に隠れてやり過ごしてしまえばいい。

それにしても暗いですね……いったいここは、なんの部屋なんでしょう？

ユーリは室内をきょときょとと見回すが、窓には鎧戸が下りていて、光源は天井で小さく淡く輝く魔法の輝きのみ。
大きな魔法陣が部屋の床面積を占めており、家具らしき物は見当たらない。
ユーリは物音を立てないようそろそろと歩いて、床の隅に放置されていた分厚いハードカバーの本の影に隠れてうずくまる。

「理論は間違っていないはずだし、星の巡りも理想的な配置だ。後はこの香が合えば……」

室内には先ほどの魔術師が1人きりで、魔法陣の中央で何やら香を焚き始めた。ユーリの位置からでは後ろ姿しか見えないが、声からするとどうやらまだ年若い少年らしい。やはり彼もまた、耳が尖っている。

彼は手にしたスタッフを一度振り上げて頷くと、魔法陣の上から下がる。
そして眼前に構えたスタッフを両手で握り、何やらブツブツと唱え始めた。呪文に反応してか、床の上の魔法陣が淡く薄青い光を放ちだす。

なるほどー。どうやらこの部屋は、魔法の練習場所とか実験室とか、そういった目的の部屋なようですね。
いったい彼は、どんな魔法を使うんでしょう。
楽しみですが……ここに隠れている私に、危険は及ばないのでしょうか？　何だかちょっとだけ、心配です……

魔法に集中している少年魔術師に決して気取られないよう、息を潜めてじっとしつつ、ユーリは彼の様子を見守る。

いったいどれだけの時間が流れたのか、体感的には既に１０分は経過しているが、少年は淀みなく呪文を唱え続け、魔法陣の輝きは増しつつある。

と、不意に少年がスタッフから片手を離し、左手に握ったそれを高々と掲げた。

「我が呼びかけに応えよ、異界にて試練の磨礪（まれい）に殉じし、我と根源を同じくする者よ。
門よ開け、我が魂の同胞よ、疾く、我が前に具現せよ！」

ユーリには何か気になるフレーズをふんだんに盛り込んだ呪文を叫びつつ、少年はスタッフを魔法陣の中央へ向けてビシッと示す。

ゆらゆらと薄い煙を立ち上らせていた香が、ふと歪んだ。それはまるで、真夏の太陽光に晒されたアスファルトの熱気により、空気が歪んで映る現象を思わせる小さなボカシ。

しかしそれは次第に大きくなっていき、青い魔法陣の輝きとも、黄色い香の色彩とも全く違う、全体的に緑色の何かが混じり始めた。

明確に、そこにそれは形作られていく。鱗のようなもの、水掻きのようなヒレ、全体的に緑色の鱗で覆われたそれは。

……マーマン！？

これは、もしかしなくても召喚魔法ですよね？

そして、ユーリが先ほど耳に拾い上げた単語から考えるに、十中八九。

使い魔召喚……ううん。
これは、『クォン契約の儀式』だ……！

「やった……！」

少年が歓声を上げる。
なんという巡り合わせなのだろうか。まさか、偶然訪れた魔術師連盟の本部の一室で、その術を成功させている現場を目撃する事になろうとは。

5　※冒頭から残酷描写有

頭や腕を覆う緑色の鱗やヒレ。腰から下は魚の体を持ち、尾鰭をビチビチと跳ねさせる。
ユーリの知識に照らし合わせると、マーマンに酷似した生物が……
正式名称は不明なので、以下はマーマンと呼ぶ……魔法陣の上へとハッキリとした形を露わにするなり、変化は起きた。

ボゴリ、そんな音を立てて、マーマンの口から風船のような物が飛び出て、全身を覆う鱗がシューシューと音を立てながら溶解しだしてゆく。
苦痛の呻き声さえ上げられずに、魔法陣の上でもがくマーマン。それを眺めていても、呼び出した張本人であるにも関わらず、心配そうに駆け寄る素振りも見せない少年。

「ふん、醜いな……どうだ、苦しいか、ん？」

それどころか、馬鹿にしたように、彼はスタッフの先端でマーマンをつつく。

深海から引き揚げられた魚は、気圧変化であんな風に口から肺が飛び出ます……だけど、だけど、どうして！
だってあのマーマンさんは、あの魔術師少年のクォンで、だから異世界に来た段階で外殻膜が守ってくれる筈……！

驚愕に固まっているユーリの脳裏に、昨日のカルロスとの会話が蘇ってくる。
あの時確か、主はユーリの外殻膜について、なんと言っていたか。

――俺の術だぞ？　外殻膜にも『ステルス』付きだから本人にしか感じ取れん。

それはつまり、クォンを異世界から呼び出す際、張り巡らせる外殻膜は全て同一のモノという訳ではなくて。その状態を、主人となる術者が任意に練り上げ選択出来る、多種多様なものだとすれば。

ユーリの外殻膜は、決して全ての危害から彼女の身を守ってくれる万能の防御膜などではない。

物理法則の異なる異世界で、最低限生命活動を維持出来るよう、いわば危険要素を分解して濾過してくれる、フィルターのようなもの。

だから、こちらの水を飲んだだけで胃が溶けるような事は無いが、湖にでも沈められたら溺死するし、仮に地球と重力が異なっていたとしても、元の世界と同じように動き回れるが、重たい物が体の上にのしかかってきたら潰されてしまう。

この外殻膜とはそもそも、界を跨いで異なる世界へ呼び寄せられ移動するからこそ、このマレンジスの世界が異物を覆う気泡のように被せるものの上に張り付けて、コーティングしているのだという。

異世界からの異物混入によって、自らの世界の環境破壊を防ぐ為の、まるで免疫機能。

だからこそ、異世界より引き寄せられたユーリや、今目の前で苦しむマーマンが持ち込んだであろうウイルスの類は、決してバラまかれない。異世界からこの世界へと持ち込まれる異物は、全て世界の免疫である気泡によって濾過され、害を成す物質とはなり得ない……

「さあ、その苦しみから逃れたければ、オレと契約を交わせ」

ああ、と、勝手に震えてくる体を無理やり押さえつけながら、ユー

リは胸の内で呻いた。
彼女が主であるカルロスのクォンとなる契約を交わした際、主に差し出すよう要求したものは、好物のチョコレートである。
だがこの世界で、自らの魂と同一のものを抱く生命体を、その魂を吸収する為に呼び出す魔法使い達は、いったい何を条件にどうやってクォンを従わせているのか。『自らのクォンは必ず魂を抜き取る』事が通例となっている彼らが、いったい何を差し出してやるというのか。
かつてふと、湧き上がっていた疑問の答えが、今、示されている。

彼らマレンジスの魔法使いは、意図的にクォンの身を防護する外殻膜を張らず、突如として物理法則の異なる異世界に引きずり込まれ、混乱して苦痛や恐怖に喘ぐ彼らを脅迫して無理やり屈伏させていたのだ。
それがどういう意味を持つ契約であるのかさえ、恐らくは正確に知らせないままに。

「は、ははは！　契約は成立だ！」

テレパスによってマーマンから『是』を聞き出したのだろう少年魔術師の哄笑が、狭い室内に響き渡る。
たとえかのマーマンにとって、この世界の大気は強酸に等しい成分で構成されていようとも。目の前で肉が溶け、激痛にのたうち回っていたとしても。少年魔術師にとって、あのマーマンは『食品』でしかないのだから。

少年はスタッフを振り上げて、打ち下ろす。幾度も、幾度も。
ユーリの目の前にまでビチャリと飛び散ってきた筈の体液は、青く輝く魔法陣の上で、不思議と溶けて消えてゆく。
まるで、最初から存在していなかったかのように。

いや……
もう止めて！

目を、逸らしてしまえたら良かった。
けれども、体は恐怖に竦み、言う事を聞かないで震え上がるだけ。
見たくもないし知りたくもなかった現実から、ユーリは逃れる術を持たない。
あの少年魔術師を止める事も、マーマンを救う事も、ドアを開けてここから逃げ出す事さえも。

しかしこれを、凄惨な殺人現場であると、声高に責め立てる人は、この世界には存在しない。
何故ならばこれは、この世界の魔法使い達が、長年に渡り研究して磨いてきた『釣りの為の技術』であり、『珍味の調理方法』であるからだ。

日本にだって、活け作りという調理法がある。
生きたまま魚を捌き、活きが良い魚は皿の上で身を刺身にされながらも口をパクパクさせている。職人の技を誉める事はあれど、魚を殺す事を詰る客などいない。
魚釣りをしている人を見て、残虐だなどと言い出す人もいない。

だから、こちらの世界では呼び出したクォンを殺し、魂を抜き取る行為は、誰に咎められる事もない。何故ならばクォンは『殺す為に呼び出すだけの存在』であるから。
だから今、ユーリの目の前で起きている事も、弱肉強食の掟に則り、ただ強者が弱者を喰らっているだけ。

ここはたまたま、異世界に生きる同じ魂を呼び出す方法が存在し、

上手く召喚する事に成功したから。
だから、あの少年魔術師はマーマンの魂を吸収しただけで。
もしかすれば立場が入れ替わっていて、自分が喰われる側であったかもしれないという事を、笑っている少年魔術師は理解出来ているのだろうか。

スタッフでグチャグチャになった肉塊は、魔法陣の輝きと共にふっと消え失せてゆく。
せめて体だけでも、元の世界へと戻れたのならば。

あれはあの少年魔術師が辿っていたかもしれない姿であり。
そして、ユーリの身に起こっていたかもしれない結末でもある。

「師匠、師匠ーっ！
オレ、やりましたよーっ！」

不可思議な淡い緑色の燐光を全身に身に纏った少年は、ドアをバンッ！　と開け放ち、喜色満面で部屋から駆け出していく。軽やかな足取りにも、明るい声音からも、なんの翳りも陰鬱さも抱いていない事を思わせる。

今になって気が付く。殺されるという事がどういう事なのか、追い回されていてもユーリはあまり深く考えてはいなかった。
そこにはただ、漠然とした恐怖があるだけで、具体的に何がどうなるのかなど、全くビジョンは浮かんではいなかった。

既に魔法陣の光は消えており、あんな事が起きた現場であるというのに、なんの痕跡も匂いさえも残っていない。
けれど、このままこの無人の場所に留まる気にはどうしてもなれなくて、ユーリはよたよたとした足運びで少年魔術師が開きっぱなし

にしていったドアをくぐる。

目の前に広がるのはカーブを描く廊下と、塔の中央の吹き抜けを浮き上がって移動してゆくローブ姿の人々。

ぺたりと床に座り込んで、ユーリはぼんやりとその光景を眺める。

……ああ、私、異世界に居るんだな。

ふと胸に去来するのはそんな思い。

本当に、今更だ。既に何日もこちらで生活してきて、ちゃんと理解していた筈なのに。

どうして今更、自分が異邦人であるという事を感じるのだろう。

自分は独りだ。この世界で、独りぼっちなのだ。

お母さん、お母さん……

床に座り込んで、口から出てくるのは「にー、にー」という鳴き声だったけれども。

こんなところで絶対に会えるはずもない母を呼び求めてしまうのは、どうしてなのだろう。

俯いていたユーリの体が、不意に何かに掴み上げられた。

おかあ……

「やっと……見つけ、たぞ、この……黒ネコ、がっ……！」

自らを捕らえた人物を見上げたユーリは、そこにアティリオの顔を認めて、頭の中が恐怖で染め上げられていくのを感じた。

怖い。
誰か助けて。
嫌だ。
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない……！
いやーーーっ！！

「うわっ！？」

喉も裂けよとばかりに、ユーリの口から今まで出たことも無いような恐怖の大絶叫による鳴き声が上がった。
それにアティリオが怯んだ隙に、無我夢中で爪を立てて引っ掻いて噛み付き、離せ離せともがいて暴れまわる。

「ちょっ、おい、痛て、痛てて！？」

そんな抵抗を受けて、ユーリを捕まえていられなくなったアティリオの手から握力が弱まった隙に、身を捩って逃れ落ちた。
迷わず駆け出し、追っ手から少しでも距離を稼ぐ。
死にたくない、より明確になった現実の前に、ユーリはとにかく走って走って走り出す。
逃げ場所の心当たりも、作戦も何も浮かばず、ただひたすらに螺旋階段を駆け下りて駆け下りて……

気が付けば、どうやら一階にまで到着してしまったらしい。
もう下りる階段がなく、受付のロビーを通過して開け放たれている大きな玄関ドアへ向かって猛ダッシュ。
いっそ街中にまで逃げてしまえば、他のネコに紛れ込めるかもしれない。

「この、待てアホネコが！」

「あら、カルロスさんのネコちゃん……と、アティリオさん？」

人の良さそうな受付のお姉さんが、目の前を風のように駆け抜けて行くネコと魔術師の姿に、驚いたように呟きを漏らすが、当人達は決死の追いかけっこの真っ最中で説明を挟む事も無く。

捕まったら死ぬ！　そんな一心で中庭の芝生の上を駆け抜け、魔術師連盟本部の敷地から脱出を図ろうとしていたユーリの頭上から、ふと影が差してきた。

まさか拘束用の罠か魔法の類かと、サッと空へと警戒の目を向けたユーリは……予想外のブツが空中から舞い降りてきているのを目撃し、思わず転んでしまった。

……某月某日、魔術師連盟本部の中庭に、天使様がご光臨なされました。

なんの告知ですか。私、いつの間にか懐胎したんですか？

どうやら人間、あまりにも混乱し過ぎたり驚き過ぎたりすると、精神がストッパーを掛けて気が遠くなっていくらしい。

変なモノが見えたのだが、気のせいだろうかと二度見、いや三度見をして確認し直したが、やはり『ソレ』は実在のものとしてユーリの頭上から地面へと舞い降りてくる。

お陰様で恐慌状態からは表面上、幾分冷静になれたようだが、なんだか別の意味で益々錯乱してきた気がする。

芝生の上へと降り立った『天使様』は、転がっているユーリを抱き上げて、再び翼をはためかせて浮き上がる。

「……邪魔立てするのか、クォン！？」

「違いますよ、アルバレス様。生憎と単なる時間切れです。

先ほどわたしはマスターから、彼女を迎えに行くよう命じられましたので」

走り回ったせいか、ぜひゅーぜひゅーと肩で息をしながら文句を口にするアティリオに、あっという間に再び空へと舞い上がった彼は、ユーリを腕に抱いたまま、そんな言葉を返し。

「では失礼」

「待て！　空を飛ぶとは卑怯だろう！」

「おかしな事を言う人ですね。翼を持つ者が空を移動して何がおかしいと？」

そんな事を言い捨てて、さっさと高度を上げるシャル。ユーリが同僚の腕の中から見下ろしていた地上がぐんぐん遠ざかって、アティリオの姿が小さくなってゆく。

ユーリは改めて、上半身は裸で背中から翼を生やし、他は普段と変わらぬ様子の同僚を見上げた。

うん、私もちょっと……いや、かなり、ズルいと思います。

『空を飛べるのは、そういう生き物なんだから仕方が無い』の域を超して、一般的な人間としてはかなり羨ましい生態じゃないかと思います。

だってシャルさん……なんで人間バージョンでも翼が生えてるんですか！　飛べるのはイヌバージョン限定じゃないんですか！

「わたしもそう思っていたんですが、部分的に変化出来ないかと試してみたら、出来ちゃいました」

バッサバッサと純白の翼をはためかせつつ、あっけらかんと呑気な

報告を告げてくるシャルに、ユーリはガックリとうなだれた。
確かに、シャルの場合はこちらの人間バージョンの方が『変身した姿』なのだから、更にどこかしらを改変させる事だって出来るのかもしれない。

塔の中に戻るでもなく、シャルはバサバサと更なる上空へと舞い上がってゆき、上はどうなってるのかなー、などと疑問に思っていた塔の最上階の屋根の上に降り立った。
見渡せば眼下に広がる城下街と、その城下街を挟んで対角線状に位置する、小高い丘の上に建てられた王城の最も高い尖塔部分が、連盟の塔の屋上と等しい高度であるように見える。

「ユーリさん、わたしはね」

はい。

「わたしが狩ってきた獲物を分け与えたり、その外諸々の世話を焼いてあなたを養っていく事に、どうしても納得がいかなかったんです」

はい……

こんなに高い場所に上って初めて、その全容が窺えるほど広大な王都。
道のど真ん中で光に照らされて輝きを放つのは、噴水だろうか？
そんな景色をぼんやりと眺めながら、ユーリはシャルの独り言のような言葉に耳を傾ける。

「マスターは、あなたは狩りに向かない生き物だから子ネコにすると言った。

そんなに頼りない生き物なら、何故養う必要があるのか、わたしにはちっとも分からない」

今まで、主の家で出されてユーリが口にした食事は全て、シャルが狩ってきたり、カルロスと共に育てた野菜だったり、仕事をこなして稼いだお金で得た糧。
新参者で未熟なユーリは、何一つ還元出来ていないというのに、家に堂々と居座っている現状に、シャルが不満を抱いていたとしても不思議はない。

「それならいっそ、放り出してみようかな、と、思ったまでは良かったんですが。
それはそれで、どうしようもなく後味が悪くなって」

ふう、と、憂鬱そうに溜め息を吐くシャル。

シャルさん、私、今日ね、本部の塔で怖い物を見たんです。
主が私の事を、狩りに向かないって考えたのは、実に有り難い話だなって。

「そうですか」

あんなの見たら、『獲物を狩る』のは、私には無理です。
逃げ隠れして、震えるしか出来ません。

「それで、あの悲鳴ですか？
ユーリさんは本当に臆病で惰弱ですねぇ」

シャルさん、自分基準過ぎです。
私に求められる能力は、間違いなく武闘系じゃないです。

「の、ようですねぇ。家事もイマイチですし」

き、きっと他の分野で私は主の役に立ってみせますもん！
ところで、主のところに戻らなくて良いんですか？　こんなところに来て。

塔の屋上はとても高く、吹き付けてくる風もやや冷たい。
ブルッと震えてシャルの胸元に擦り付いて暖をとるユーリに、彼は「ああ」と頷いた。

「あれは嘘です」

はあ、どれがでしょう？

「マスターに命令された、という点がです。まだ話し合いは終わっていないようですね」

はあ……んん？

「さ、今のうちに先ほどの部屋に戻りましょうか」

結局、何故わざわざこんな高いところにまで上ってきたのか不明なまま、シャルはバサバサと翼をはためかせ、開け放たれていた塔の窓へ向けて足から飛び込み、内部へと侵入。
この窓のサイズでは、潜り抜けるには翼が大きすぎてつっかえるのでは？　とユーリは懸念したのだが、予想通りシャルは腰から下は普通に入ったが翼の部分だけ窓枠に引っ掛かって止まり、「あいた」とか漏らしながら翼を消した。
つっかえていたブツが消えて、ドサッと一気に廊下の床に滑り落ち

る。その衝撃で、ユーリも同僚の腕から転げ落ちてしまった。
シャルさん……自分の車体ならぬ翼の幅、ちゃんと把握しときましょうよ。

「自分は頭さえ通り抜ける隙間さえあればどこでも潜り抜けられるからと言って、わたしにもスムーズな隠密行動を期待しないで下さい」

いや、そこまでは言ってないんですが。

シャルはパンパンとズボンを軽く払い、ドアが開きっぱなしの部屋へとスタスタと歩いて行く。
ユーリも慌ててその後を追うと、見覚えのある室内の殺風景な内装と荷物。
どうやら無事に、最初に案内された部屋へと戻ってきたらしい。

「もうすぐマスターも迎えに来て下さるでしょうから、さっさと身綺麗にしませんと」

などと言いつつ、シャルは荷物を漁ってタオルと水筒を取り出した。

連盟のお偉方との話し合いを終えて使い魔達を迎えに来たカルロスは、欠伸を漏らしつつ部屋のドアを開けた。

「よう、待たせたなシャル、ユーリ。
何か問題は起こらなかったか？」
「お疲れ様です、マスター。
いいえ、特には。暇を持て余していた程度ですよ」

開口一番にそう問うて来る主に、シャルは濡れタオルで拭ったユーリの毛並みをブラッシングしながら、間髪入れずに笑顔でそう言い切った。

そうか、と頷くカルロス。

あれ？　使い魔って、ご主人様に虚偽を申し立てたり隠し事したり出来るもの、なんですか……？

閑話　ご主人様から見たわんことにゃんこ　そのに

連盟本部の爺婆共の、何度も同じところをいったりきたりで繰り返しになる長話を聞き流し、たまに寝そうになってはベアトリスの婆さんにはたかれて覚醒し、という苦痛の時間をやり過ごした俺。
つうか、ベアトリスの婆さんのこういうところが、本当にそうなのか？　って疑惑が湧く点なんだがな。シャルは平然と『おやおや。マスターとそういった点はそっくりではありませんか』とか言うし。あいつは再教育の必要があるな。

とまあ長い時間、老人達の（見た目は皆一様に若いのだが）お話という名の拘束をされていたカルロスは、ようやく本題である大量のお仕事を言いつかって解放された。
苦痛の時間を辛抱強く耐えて無事に終えた事で、彼は足取りも軽くわんことにゃんこを待たせている部屋へと向かった。
長時間の退屈な時間を経たせいか、勝手に漏れ出る欠伸をかみ殺しながらドアを開け放ち、「待たせたな」と声を掛けつつ……カルロスは室内の予想外の様子に、思わず首を傾げた。

シャル……何で上半身裸？
つーか、ユーリはユーリで何故毛並みが濡れてる！？

何か問題はなかったかと尋ねるも、シャルはベッドに腰掛けたまま笑顔で「暇だっただけ」と答えるのみ。
そんな彼の膝の上に乗せられているユーリの方は、濡れそぼった毛並みをシャルにブラッシングされつつ、「に～」と甘えた鳴き声を出し、実に気持ち良そうに目を細めている。

疑問は残るが、この部屋は魔術遮断結界の中である為、２匹の胸の内はカルロスにもイマイチ読めない。

カルロスの目に映った状況を、簡潔に表すとこうだ。

……男女が密室で長時間２人きり、男は上を脱いでベッドに座って女を膝に乗せ、彼女の濡れ髪を梳いている。

シャル……お前、本気で何やってやがったーっ！？

まさか、たっぷりの待ち時間中にヤッたのか！？　物理的な問題はどうやってクリアしたんだお前ーっ！？

ガゴッ！　と、思わずカルロスがドアにもたれ掛かると、シャルとユーリはきょとんとした表情で見つめてくる。

いやいやいや、落ち着け俺。

いくらなんでも有り得ん。穿ちすぎだろう。

肉体的には人間とネコ、精神的にはイヌと人間……なんか、『人間』つー共通種族が過ぎったがな！

だがこう、具体的な匂いといった痕跡がある訳ではないし、疚しい方向に思考が滑ったから驚いただけであって。単にユーリが長距離を移動したせいで体が埃っぽいと感じ、シャルに体を拭いて貰っていただけ、というような、何でもないオチに違いない。

カルロスは頭を振って咳払いし、

「早速だが仕事がある。ユーリ、人の姿に戻すから少し部屋から出ろ」

不思議そうにしばし尻尾を揺らしたユーリは、室内をきょろきょろ見回して、ご主人様が口にせずともこの部屋の中では上手く膜を操

れないのだという事実を察したのか、シャルの膝の上からぴょんと飛び下りると、部屋から一歩外に出た。
何をするつもりなのか理解している癖に、部屋の中でのんびりしたままのシャルを外へと引きずり出して見張り役に立たせると、カルロスはユーリからは背中を向けたまま彼女の姿を人の姿に戻した。
背後から即座に、ドアがパタムと閉じられる音がする。

「なあシャル。一つ聞きたい事がある」
「何でしょう、マスター」

クルリとシャルの方を振り返って口火を切ると、わんこはいつものほわ～んとした笑みのままカルロスを見返してくる。
ただいま、室内の中ではにゃんこが荷物からお洋服を取り出していそいそと着ている真っ最中であろう、微妙な待ち時間に、カルロスとしてはどうしても気になる点を問うてみた。

「何でお前、上着てないんだ？」

シャルはそもそもイヌであり、彼本人はどちらかというと服を着込むのが嫌いである。だが、人間の姿の時にはきちんとした服装を心掛けているハズのこのわんこが、ちょっとご主人様が目を離した隙に、何故脱いだ。

「ああ……すみませんマスター。そういえば、わたし自身が服を着るのをすっかり忘れていました。ユーリさんを綺麗にしないと、という点にばかり気を取られてしまって」

だから、汚れるようなナニがあったんだ、ナニが。

遮断結界から出たのを幸いに、こっそりシャルの思考を探ってみた

カルロス。
ひたすらに思考だだ漏れ型のにゃんことは違って、このわんこの考えは纏まりがなかったり取り留めがなかったり精神壁が厚かったりするが、だいたいのところはサッと読める。

えー、ただでさえ落ち着かずにいたところを、初めて耳にするような、ユーリのいつにない鳴き声に煽られるように体が勝手に動いて、気が付けば上着をむしり取るように脱いでいた、と、いう事らしい。

らしいとか結論付けつつ、カルロスは再びガゴッとドアに頭をぶつけていた。
シャルにしては珍しく、脳内で具体的な映像が伴わずにひたすらユーリの鳴き声がリフレインしている。わんことは違って、カルロスにはネコの鳴き声の意味は分からないので、ユーリの鳴き声であろうがカルロスには理解出来ない。
ようやく何か映像が浮かんだかと思えば、（匂いは全て消そう）とか考えながら、ユーリを濡れタオルで執拗にごしごししているわんこの姿。

「もう、主はせっかちですね。
私はまだ着替え中、です！」

早くしろという催促と勘違いしたのか、室内からユーリの声がしばし待てと言い出してくる。

なあ本当に、ナニやってたんだお前らは？

なんだか知ってはいけない類のドラマがあるような気がして、この点について、カルロスは深く考えないようにした。無論、不用意にわんことにゃんこの思考にもなるべく触れないように、気をつけな

くては。

「お待たせしました、主」

カチャリと背後でドアが開いて、服を身に着けたユーリが歩み出てくる。念の為に、家から彼女の服も用意してきて正解だった。ユーリが着ている服は、カルロス自身が少年の頃に着ていた、シャツに半ズボンに膝までのブーツだが、元々幼い容姿の彼女が着ると見事に少年にしか見えない。

子ネコ姿の時に首に巻いていたリボンを手に握っていて、ポケットに入れようか、まだ少し湿っている髪を結おうか悩む様子を見せたにゃんこの手から、わんこがすっとそれを抜き取る。まだ持っていたブラシで軽く髪を梳いて整え、あっという間にピンクのリボンを結んでしまった。……またしても、彼自身とお揃いに。

「はい、出来ました」

「……シャルさん。だからどうして、いつもこの髪型なんです？」

「編み込むのは面倒だからです」

綺麗に結われたリボンの端を摘みつつ、シャルを見上げて半眼で問うユーリに、わんこは微笑みながら答える。

そういや、シャルは昔よくエストのふわふわ髪を結わされてたな。なるほど、『リボン持った女の子の髪は結うべし』っつー条件反射みたいなもんか。

しかし、ピンクのリボン付きだと……今ひとつ、ユーリは性別不詳になるんだが……

人間バージョンのユーリとシャル（服はキチンと着させた）を伴って、カルロスは本部の二階にある、図書室へと足を踏み入れた。
この階は丸ごと図書室になっていて、所蔵されている本は持ち出し禁止の貴重な古書から、大衆向けの娯楽性の高い雑誌まで幅広い。
この階に限っては一般人の立ち入りも許可されており、自由に本を読む事が出来る。貸し出しには流石に制限が掛けられるが。

「うわ、ぐるっと一面本棚だらけ……こんなところもあったんですね」

興味深そうに周囲を見渡して目を輝かせるにゃんこと、心底興味無さそうに多少ウンザリした表情を浮かべるわんこ。

「それで主、ここで調べ物でもあるんですか？」

目的の一角に向かって先導しつつ、本読んでみたい、という欲求を抱えてウズウズソワソワしつつ問うてくるにゃんこに、カルロスは思わず笑みを零した。
わんことは見事に対照的なこのにゃんこは、人間の姿の時には家の書斎が一番のお気に入りで、読書に入り浸っているのだ。わんこは掃除目的以外では見向きもしないというのに。

「いや。今日の仕事は、古書の写本作業だ」
「しゃほん……？　ああ、なるほど。こちらには『インサツ』に相当する魔法とか、無いんですね」
「つくづく、お前の世界は便利そうだな」

上から指定された、関係者以外立ち入り禁止の小部屋のドアをノックすると、担当の司書が顔を出した。
写本作業は地道な作業の為人海戦術の面がある。既に連絡を受けて

いたらしいカルロスの顔見知りの司書は、彼が連れて来たわんことにゃんこを見ても難色を示す事もなく、必要な道具は揃えてある事を告げて、別の仕事に移っていった。

本の修繕や写本作業を行う為の小部屋の中を見回しているユーリに、

「ユーリ、この一角の本が原本だ。綴じる作業はまたさっきの司書が担当するから、お前はどんどん書き写せ。出来そうか？」

「少し待って下さいね」

カルロスの確認に、にゃんこは古くなった原本を慎重に開いて本文を流し読みし、書き写す為の紙を一枚取って羽ペンにインクを付け、しばらく滑らせたりインクの量を試した後、一つ頷いた。

その紙を彼の前に翳してくる。

「こちらの文字は初めて書きましたが、キチンと読める文字になっていますか？」

そこには、紙の上部には羽ペンでクルクルと無意味に線や円が練習に描かれているだけだが、下の方には綺麗な筆致で本のタイトルである『デュアレックス王国外遊録』と記されていた。

「ああ。お前、字上手いな。
じゃあ早速、その本から写していってくれ」

「はい」

このにゃんこの世界では、羽ペンは一般的ではない筈なのだが、元々筆圧が低い方なのか、紙にペン先を引っ掛ける事も少なく、インクで染みを作る事も無く。本人の思考から漏れ出た感想曰わく、（お習字得意ですから）だそうである。

早速イスを引いて机に向かったこのにゃんこに、カルロスの言語知識を与えておいて良かったと、賢いペット……いや、しもべにこうむうむと満足感を覚えるご主人様。

そんな彼は、ムスーッと不機嫌オーラを出しているシャルを目にし、フォローを入れるべく慌てて話し掛けた。

「あー、シャル？
お前は写本作業は好きじゃないだろうし、別の仕事を割り振りたいんだが……」
「いいえ。わたしも写本をします。
見たところ、書き写すべき原本は膨大なようですし、人手は多い方が良いですよねマスター？」
「……それはまあ、そうなんだが」

わんこはご主人様の気遣いを振り切って、手近な古書を手にユーリの真正面のイスを引いて腰掛け、羽ペンを手に取った。
カルロスとしては、できたらシャルの参戦は遠慮して欲しいのだが。
しかし、ユーリに真っ向からライバル心を剥き出しにしているシャルを止める術が見付からない。
命令して退けるのは簡単だが、カルロスとしては、わんことにゃんこの意志をなるべく尊重してやりたいし、多感な彼らの心も出来たら守ってやりたい。そんな気持ちがある、しかし『やんわりお断り』に適した対応が分からない。

シャル、お前、字はなんとか読めるが、殆ど書けねえじゃねえか。
文字の読み書き練習あんなに嫌がってた癖に、何でユーリに対抗心メラメラ燃やしてんだーっ！？

シャルは元々の握力が強い為、すぐに羽ペンを折ってしまうわ、イ

ンクの微妙な調整が出来ずに染みを付けるわ、紙に引っ掛かって破くわ、なんとか書き上がってもヨレヨレで読めないわで、カルロスはこのわんこに『文字を書かせる』という作業は無理であると、早々に匙を投げた。
だがどうも、カルロスがユーリの字は上手いと誉めたせいで、シャルの敵愾心を燃やす結果になったらしい。

お前がダメにしちまった紙やペンの後始末は、俺がせならんのだが……
シャル、頼むから向き不向きを理解して、写本はユーリに任せてくれねえもんかな……

長方形の机に向き合って座っているわんことにゃんこの、丁度斜向かいに当たる席に落ち着きつつ、カルロスもまた写本作業に入る。
時折シャルの方から小さくペキッという音が響いてくるのが、非常に虚しい。

「主」

と、不意にユーリが顔を上げて、小声で呼び掛けてきた。

「ああ、どうしたユーリ？」
「この本のこの一文なんですが……単語としておかしい気がするんです。誤字なんでしょうか。それとも、昔の風潮にはあった、今は廃れた言葉なんですかね？」

ユーリから見せられた一文を読むと、確かに意味が分からない単語になっている。具体的には、『ａ』と『ｄ』が書き間違えられたような、そんな違和感。

「俺にも誤字に見えるが、何しろ古いしな……」
「じゃあここは空欄にして、付箋紙付けて誤字脱字のような部分は、一覧に纏めておきますね。後で司書さんに確認して貰いましょう」

そう言って、ユーリはテキパキとメモを貼り付け、作業に戻る。
そしてそのご主人様とにゃんこのやり取りを、やっぱり『む～っ』と不満げな表情で眺めやるわんこ。

いや、だからなシャル。
お前がイヌとしてこの世界の大空や山野を駆け巡ったり、魔物を退治してきたように、ユーリも元の世界じゃあ、色んな経験を積んだ訳だからな。
お前には文字や言葉の概念はどっちかっつーと縁遠いもんだが、ユーリの方は高等教育を受けて育った人間だからな。
シャルにとっては『のたくった線』から意味を読み取るのは理解しがたい難儀な作業でも、ユーリにとっちゃ呼吸するのと同じようなもんで……

だから、ユーリにたいしてライバル心を燃やすのは結構だが、方向性を間違えんでくれ、シャル！
あ、また羽ペン折ったな、隠そうとしてもバレバレなんだよ！

「たまにはこうやって、皆で静かに机に向かうのも良いものですね、シャルさん」
「そうですねぇ、ユーリさん」

ふと顔を上げた際に、向かい側のシャルと目が合ったユーリは、にぱっと笑いかけながら、小声でシャルにそんな事を言い出す。
捻くれていて素直じゃないわんこは、正直に『わたし、本当は写本苦手だし嫌いです』とは言いたくないのか、それとも言い出せない

のか、にゃんこに話を合わせている。

シャル……お前も、出来ない事は素直に『出来ない』って言えるイヌになろうな。

つーか、色んな意味で意識しまくる相手の前で無駄に見栄張る辺り、お前もしっかり『男の子』だな……

最近では殆ど、兄弟で微妙に喧嘩したりいがみ合ったり、（お父さんは向こうの方を贔屓してる）とばかりに拗ねる子を宥めて、平等に扱っていると諭す、幼い子供の親になった気分に頻繁に陥るカルロスである。

何だかんだ言いつつ、シャルもユーリもまだまだガキだからな。

バカな子ほど可愛いとは、よく言ったもんだ。

魔法使いのお仕事

羽ペンのインクが薄れた。また、ペン先をインク壺に浸すべきところだが、こう頻繁にインクが切れるせいで集中が途切れる書き物というのはユーリには初めてで、どうも上手く勝手が掴めない。

ボールペンや鉛筆、キーボード入力では、書きたいものを書きたいだけ書き綴っていられたものだ。世界が違えば事情も違うとはいえ、羽ペンというものは彼女には扱いが難しい代物であった。あまりの字の下手さに、何年もの間書道に励んでいた経験があるが、羽ペンは小筆よりもずっとか細くて握りにくい。

チラリと、目だけを上げて正面の席に着くシャルを見やった。重なった本や道具が机の上にはゴチャゴチャと散乱しているせで、ユーリからはよく見えない彼の手元に集中しているのか、その眼差しは机の上に注がれている。

しかしふと、ユーリの方からの視線を感じたのか、シャルは顔を上げて『どうかしましたか？』と尋ねるように小首を傾げた。真顔だったその顔に、ふわりと小さな微笑みを浮かべて。

勝手に頬に熱が集まるのを感じながら、ユーリは何でもないと示すように首を左右に振って、書きかけの紙に視線を向ける。

なんで……なんでさっきから、無駄に心臓が活発になったりしてるんですか、私ーっ！？

考えちゃいけないと言い聞かせても、何か色々な感覚がぐるぐる駆け巡ってくる。

よもや自分のこの慌てっぷりが主には筒抜けになっているのではないかと、こっそりと様子を探ってみるが、カルロスはひたすら作業に没頭しているようで、一安心だ。

今の私の心境を主に読まれたら……ヤバい、恥ずかしさで発狂する！　テレパスなんて、なんでこの世界にはあるのーっ！！

カルロスから写本という仕事を与えられたユーリであるが、慣れない作業に苦戦しつつ四苦八苦している間に……非常事態の危機から脱出し、ようやく平常心が戻った彼女は、ふと自らの行動を振り返ってしまったのだ。

そうして、次々と襲いかかってくる様々な感覚や感情に、（私ってば何やらかしちゃったのよーっ！）と、羞恥に堪えない状態に追い込まれ、先ほどから挙動不審な行動を繰り返す羽目になっていたのである。

子ネコ姿のユーリはカルロスの使い魔であると、アティリオにバレた。

これはもうしょうがない。初めから条件が整い過ぎていて、敵の洞察力が予想以上に優れていたのだから。

クォン契約の現実を見た。

あの光景は思い出してはダメだ。思い出してはダメだ思い出しては……

と、とにかく。

私、シャルさんに何やった？

胸元に擦り寄ったり、主が迎えに来るまでべったり張り付いて離れたがらず……

いっぱいいっぱいだったんですよ、色々と。

怖いとかそんな状況を通り越していた時に助けられまして、すっごい安心して、ぐりっぐりすりっすりでブラッシング中はもういわゆる安堵と恍惚状態に……

再び、シャルの顔を眺めてみる。気配に敏感な彼は、じっくりと見つめる隙さえ与えずに本当に即座に反応して見返してきてしまう。心臓が無駄に激しく高鳴る中、ユーリが頑張ってへらっとした笑みを浮かべてみせたら、シャルも微笑みを返してきて……それ以上は目を合わせていられず、慌てて視線を外して俯き、破裂するかと思った胸元を押さえつけた。

だからっ！　シャルさんはいつも笑顔であって、あれはいわゆるポーカーフェースの笑顔版っ！
あの微笑みに意味なんかないんだってば！

何故だ。
何がどうしてこうなった？
目が合っただけで死にそうになるとか、側にいるだけで落ち着かないとか、そっちに視線をやらずにはいられないとか……
どうして、こんな事に。

――わたしはあなたとはかけ離れた種なのです。

シャルさんは、天狼さんなイヌさんですもの。

――異性以前の存在相手に、その態度は滑稽にしか見えないんですが。

シャルさんにとっては私なんて、『非常時に食べる為の家畜』だし。

――そんなに頼りない生き物なら、何故養う必要があるのか、わたしにはちっとも分からない。

何より私、シャルさんから疎ましがられていますし……いけない、落ち込んできた。

ユーリは頭を振って、仕事に集中しなくてはと、改めて原本に視線を落とした。

彼女が今書き写しているのは、『デュアレックス王国外遊録』という、マレンジス大陸の中心に位置する大国を訪れた人物の記録である。

かなり古い本であるようだが、その記述によると、デュアレックス王国はマレンジスのどの王国よりも王朝の歴史が古く、その開闢は一万年も前に遡るとまで記されていた。

にわかには信じがたい話ではあるが、デュアレックス王国はエルフ族の王国であり、王族であるハイエルフの寿命は千年を超えるなどと書かれている。

マレンジス大陸で唯一エルフ達が住む国であり、彼らのみに許された特別な能力である魔術によって、魔法文明で栄えた素晴らしい王国だ、と、本の中で筆者は絶賛。かなり傾倒していたようだ。

本を読みつつ書き写し、ユーリはその内容に首を傾げた。

この本が書かれてからどれほど経ったのかは分からないが、現実としてバーデュロイ国に魔術師連盟なる組合が存在し、多数のエルフ達が暮らしている。

カルロスはエルフではない魔法使いだが、ハーフエルフの魔術師が存在しているのだから、厳密に言えば純血のエルフのみが扱える特殊技能、という事でもないのだろう。魔法使いの素養とはつまり、

この『エルフ族の血を引いている』事を指すのではないのか。

他国では魔法使いは迫害の対象になる、と、主は言った。
連盟が解体されて国の保護を失う事を、所属している術者達は非常に恐れている、だから国には表立って逆らえないのだ、とも。
つまり、エルフ達が住んでいるからといって、バーデュロイ国はデュアレックス王国が名称を変更した国家、という訳ではない。

では何故、エルフ達は自分達の王国に帰らないのだろう。
国におもねり、魔術師は役に立つのだと苦労しながらアピールして民衆の理解を得ようとするのは、ひとえに安住の地を求めているからではないのか？

疑問を抱きながらパラリとページを捲り、ユーリはそこに記された一文をじっと見つめた。

……大陸の中心に位置する、マレンジス随一の霊峰にして最高峰。
レデュハベス山脈の頂上に、デュアレックス王国の壮麗にして荘厳なる王城が建てられている。
このような場所にここまで広大にして美しい建築物を建てられるなど、まさに神の御業に等しいと言わざるを得ない……

以前、物凄く高い山を見つけたユーリが、あれは何ですか？　と尋ねた事があった。その時彼女の主は冗談めかして『魔王城』とお答えになった。
お城なんて影も形も見えなかったのに、魔王城と。
つまりあの山そのものが、王城を想起させる存在である事の証ではないのか？
間違いなく、あの地は主の祖先の故郷だとも口にしていた。あの山周辺が、デュアレックス王国の領土だったのだとすれば。それは彼

が、自らをエルフ族の末裔であると自覚していたからで……

ユーリは、あの山から魔物が湧き出てくるのだと教わった。
エルフ達の王族が暮らしていたかつての居城は魔王城と呼ばれ、現在かの山からは魔物が湧き出てくる。

何万年もの間栄華を誇った、エルフ達の王国デュアレックスは現在、恐らくはもう存在しないのだ。
いったいどうして、魔術によって栄えた王国が魔物の住処になったのかは不明だが……

……こちらの世界も、色々複雑なんですねえ……

インク壺に浸した羽ペンを再び滑らせつつ、ユーリは内心嘆息した。
何気なさを装ってそろりと視線を向けただけで、すぐにパチッと琥珀の眼差しと合う。
すぐさま視線をバッと外すものの、どうにも落ち着かずにイスの上で小さくもぞもぞしてしまう。

今現在、ユーリの前に立ちはだかった解決が難しい懸案とて、彼女個人にとっては複雑極まりなくこの後の生活が左右される、まさしく人生が懸かった最大の難事である。

ほ、本当にどうしてこうなってしまったんでしょう……
シャルさんなんて、意地悪だし驚かしてくるし、私を役立たずのオマケ扱いしてくる人……いやイヌさんなのにっ！

けれども、彼が彼女の名前を呼ぶ時の響きはいつだって穏やかで。
非常に面倒そうにしながらも、ユーリの世話を焼いてくる手付きは優しかったり、撫でてくれる手のひらは温かかったり、する。

面倒に思われてるだけならば、頑張ればまだ挽回の余地があるのかもしれないけれど。
未だ役に立つと認められていないのならば、地道に働いてこれから着実に成果を出していけばいい。

けれど、どんなに想ったところで、どんなに頑張ったところで。
この世の中には、当人同士ではどうにもならない現実的な問題や明確な事情で、叶わない相手だって……いる。

私は人間で、シャルさんは天狼さんで。
例えば私が、ネコによく姿を変えられるからといっても、オスネコさんに惹かれたりするなんて考えられないように。
シャルさんだって、人間の姿にされるからって、人間の女の子に言い寄られても、そりゃあ困惑するだけですよね。

コツンと、机の上に額を落としても、それでも顔の火照りは引かない。

怖いと。
恐ろしいと。
独りぼっちだと嘆いて、泣き出しそうになっていた矢先に、この世界で恐らくは唯一同じ境遇の人に『迎え』に来られて。
ここに居れば安心で安全だ、なんて、そんな幸福感さえ覚えて。

そんな錯覚めいた感情から、こんな気持ちまで抱いたりして。
私、本当にバカだなぁ……

報われる事なんか、未来永劫有り得ないのに。

2

悠里は大学への進学が決まると、それまでの十八年間を過ごしてきたマンションを引っ越す事にした。
1人で暮らすには広い上に、そこは母との思い出が深すぎて、ふと気が付けば暗くなってしまう自分に気が付き、心機一転して新しい環境で頑張ってみようと決意したのだ。
新しく借りたアパートは手狭だが1人で暮らす分には別段問題無く、悠里は慎ましく大学生活をスタートさせた。

彼女が通っていた高校はとある大学の附属であり、外部を受験した悠里は進学した大学に知人が誰も居ないという状況に不安を感じていたのだが、入学早々から新入生は皆一様に、漏れなく凄まじい勢いでのサークル勧誘活動の洗礼を受けた。
気が付けば同じ講義を受ける人達と挨拶を交わしているようになったし、サークルの歓迎会にも巻き込まれ……悠里の大学生活は順調なように思われた。

そんな暮らしがどこかズレ始めたのは、とある同級生の交際を断ってからの事だった。

彼は野々村といい、悠里と同じ学部で同じ授業を選択していた。同じサークル勧誘にも巻き込まれ、更に、暮らしているアパートも実は同じで部屋がそれぞれ三階と一階という近場である事が判明。
これはもう、ご近所付き合いは避けられないという事で、悠里は頻繁に顔を合わせる彼に、いつも笑顔で接するように心掛けるようにしていた。

そんな春も終わりのある日に交際を申し込まれたが、悠里にとって野々村はピンとこない男性であったので、迷わず断った。
それからだ。野々村から付きまとわれだすようになったのは。

初めはそう、偶然だと思っていた。
生活の範囲が重なっているのだから、ちょくちょく顔を合わせるのは当然だし、交際を断られたから話し掛けてくるのが気まずくて、距離を取って背後を歩いているのかな、ぐらいに思っていた。

それが毎日毎日、外出するたびに繰り返されるようになれば、流石に悠里も野々村の行動は異様ではないかと気持ちが悪くなってきた。
大学の知り合いに相談してみても、

「同じアパートに住んでて、講義も重なってるなら、行動時間が同じになっても当然じゃない？」

と、怪訝そうな顔をされるだけ。
野々村は品行方正な上に人が集まれば自然と取り纏め役を買って出るような、信頼感のあるリーダーシップを持つ男で通っており、逆に悠里は自分の考えを口にする事が下手で、内気で交遊関係は薄く浅く、掴みどころのない子という扱いでいた。

悠里が付きまとわれ困惑している、という事を相談した内の１人が野々村本人に直接その事を問い、

「は？　付きまといって何ソレ？
オレと森崎さんは、家近いってだけでグーゼン顔見る機会が多いだけじゃん？
あ、もしかしてオレが冗談で告ったのすっげー気にしちゃってる？
森崎さんって、自意識過剰だね！」

講義が始まる寸前の、同じ授業を受けるクラスメート達がほぼ全員集まっている中、大声で冗談として笑い飛ばしてみせたのだ。野々村に合わせるように、その場で聞いていた同級生達がクスクスと笑い出す。

衆人環視の中で侮辱されたと、頭の中が不満でいっぱいになった悠里が野々村へ抗議するよりも早く、静かに入室した教授が壇上へと立ち、教室は一瞬にして講義に対する集中へと空気が変わってしまった。

悠里が自らの口下手を、心底悔しく思ったその日。彼女は周囲から『自意識過剰』のレッテルを貼られたのだ。

付きまとわれ、精神的な被害を負っていこうとも、『偶然』の一言で片付けられるのは不愉快極まりない。

このアパートを出ようと即断した悠里は、大学に通える範囲でとにかくこのアパートからは逆方向に部屋を探した。

引っ越しの資金を稼ぐべく、大学からもアパートからも一駅離れた、幼児や子供向けのおもちゃ屋でアルバイトを始める事にした。

全ては少しでも、野々村から離れる為。

迷惑電話や家宅侵入や盗難など、実害がなければ「気のせいなのではないですか？」と、取り合ってもくれない警察は頼れない。

悠里が赤ん坊の頃から、彼女名義の口座に定期的な振り込みをしていく、正体を明かそうともしない『足長おじさん』にも、母亡き今、連絡を取る術など分からない。

悠里は自分の頭で考えて、自分の力で難局を潜り抜けねばならなかった。

幾日過ぎようとも、野々村の行動は止む気配など無かったし、アル

バイトを終えた夜道でも、バイト先からアパートまでただ黙って身を隠しつつ後を着いて来る姿など、最早嫌悪感しか覚えない。

悠里は駅までの道でピタリと足を止めた。

頭上のカーブミラーに映し出された、悠里の背後で街灯の灯りに照らし出された電信柱にサッと身を隠す野々村を、無言でしばし鏡越しに睨み付ける。

これが、あくまでも私の自意識過剰の勘違い、偶然だなどと言い張るのか？

幼児や子供向けのおもちゃ屋へなんて、お前が頻繁に近寄る必要がどこにあると言うんだ。

なるほど、確かに悠里は暴行や盗難といった、直接的にも間接的にも迷惑行為は受けていないし、奴は決して距離を詰めてこようとはしない。

ただ気が付けば背後から、ねっとりと粘着的な眼差しが送られてくるだけだ。

悠里はふいっと視線を外すと、駅までの道を早歩きで歩き出した。

背後からの足音も、全く同じ速度で付いて来る。

逃げなくては。

アレは危険だ。

何も被害が出ていないのだから、対処のしようがない？　ふざけるな。『何か』が起こってからでは、遅いのだから……！

更に速度を上げようとした悠里は、突如黒い靄のようなモノに巻き付かれてつんのめった。

「な、何よこれ……！？」

逃れようともがくも、靄はギリギリと悠里の体に巻き付いて締め付けてくる。

駅前の明るい大通りへの光も、ざわめく声も途絶え、周囲の景色が一瞬にして真っ暗になった。

そして悠里の眼前に突如として、ゆうらりと巨大なアティリオの顔が浮かび上がってきた。

「捕まえたぞ、よくも散々引っ掻き回してくれたなこのアホネコが……！」

い、いやーーーっ！？

「さっきからうるさいです」

じたばたともがいていた悠里は、突然衝撃を受けて地面へと放り出された。

何がなんなのか、状況が掴めずに自分の体や周囲を見回してみる。

悠里は……いや、ユーリはまたしても、黒い毛並みの子ネコの姿になっていた。暗がりの中でも見えた、ピンク色のぷにぷに肉球は相変わらず無駄に愛らしい。

ついで、天井はそこそこ高くて壁は石造り。おかしい、ユーリの主であるカルロスの家はこんな冷たい雰囲気の壁や天井ではない。

床は薄いカーペットが敷かれているが、お世辞にもフカフカとは言い難く、ユーリは寝転がっていた床から身を起こした。

すぐそばにベッドの足と、シーツが今のユーリの目にはカーテンの如く垂れ下がっていて、大きな窓からはガラス越しに月夜が見える。

……確か、遅くまで写本作業を行っていたユーリは、カルロスの為に連盟が用意した宿泊用の一室で、主や同僚と共に休んだ筈だ。相変わらず、カルロスの手によって子ネコの姿に変えられたが、部屋は一つでベッドも一つしか無いのだから、人間の姿である方が居心地が悪い。

寝る時はイヌバージョンになるシャルの見ている目の前で、カルロスと添い寝させられる状況が恥ずかしくて堪らなかったのだが、恒例の『寝ぼけた主に潰されかけてぐぇ～！？』を経て脱出し、そのままグッタリと眠りに就いた……筈なのだが。

何故今、私の目の前では、シャルさんにがっちり押さえ込まれてのし掛かられ、あわや爪で引き裂かれそうになっているアティリオさん、なんて情景が繰り広げられているのでしょう？

「全く……寝ているところを叩き起こすだなんて、命知らずですねアルバレス様？」

窓から差し込む仄かな月光に、ギラッと剥き出しにした牙を光らせながら、口調だけはいつもの呑気な調子で同僚は語りかける。内容は剣呑であるが。

「僕は、お前を起こしてなどいない」

「部屋に無断で忍び込んで来た挙げ句、ユーリさんにうるさく騒がれたらわたしが起きて当然ではないですか」

シャルは迫力満点のデカい口で、あふ～とどこか不釣り合いで間抜けな欠伸を漏らすと、

「アルバレス様、わたしは寝ているところを叩き起こされるのが、大嫌いです。このまま喉笛を食い千切ってやりたくなったので、噛んでも良いですか？」
「良い訳があるかーっ！？」

シャルさんダメですーっ！？

アティリオの悲鳴とユーリの制止が綺麗に重なった。
シャルはうっそりと、ユーリの方へと鼻面を向けてくる。
ユーリは慌てて、アティリオを押さえつけているシャルの側へと駆け寄った。

「しかしですねユーリさん。この状況なら、寝ぼけてうっかり……と、言い張れるような気がするんですよ。ああ眠い眠い」

……シャルさん、冗談じゃなく本当に寝ぼけてません？
それにですね、今アティリオさんをザックリ殺っちゃったら、お掃除とかお洗濯といった後始末が、物凄く面倒だと思います！

「……お掃除、ですか。確かに面倒ですね」
「何故今、口にする問題が掃除！？」

どこか琥珀色の眼差しはトロンとしていて、ユーリのかなりとんちんかんな懸念にて思い止まって欲しいという呼び掛けに、シャルはほけーっと考えた後に、こっくりと頷いて同意を示した。
ユーリの鳴き声の意味は、やはりアティリオにも分からないらしく、シャルの独り言のようなその言葉に、思いっきり納得がいかなさそうにしている。

ええい、黙れ諸悪の根源！

乙女と肉食獣の眠りを妨げるな！

にゃー！　にゃー！　と、激しく鳴き喚くユーリを、怪訝そうな眼差しで見下ろしてくるアティリオ。

のっそりと彼の上から身を起こして一歩離れたシャルは、

「アルバレス様、ユーリさん曰わく『乙女の寝室に夜這いを仕掛けてくるとは不届き千万！　一昨日来やがれ！』との事です」

「お、おと……よば……！？」

いつも通りののほほんとした声音で、シャルが同僚の発言をかなり意訳して伝えて差し上げたところ、床から起き上がっていたところであった紳士ではあるらしいハーフエルフ魔術師は、驚愕の眼差しで黒ネコを見下ろしてくる。

……嫌がらせでそんな言葉を選んだのか、シャルの耳にはユーリの発言内容はそういった趣旨に聞こえたのか、非常に不安になる通訳だ。

「今後はユーリさんを狙うのでしたら、わたしやマスターの目が行き届かない範囲でお願いしますね。迷惑なので」

シャルはそうアティリオに言い捨てると、この騒ぎでも目を覚ます事なく、ぐーすかと平和に寝入っているカルロスが横たわっているベッドの足下に、ごろ～んと寝そべった。

そして今宵もシャルの方からは、ぐー、ぐー、という大きな寝息だかいびきだかがやっぱり即座に聞こえてくる。相変わらず寝付きが良すぎなのではないですか。

唖然としているアティリオが我に返る前に、ユーリはササッとシャルの前脚と肩の付け根の間辺りに身を寄せた。シャルのフカフカ

の毛皮は寝心地が良い。

「くっ……おのれ、暴虐クォンの次は、小賢しいクォンだとは……！」

アティリオは口惜しげに呟いたが、寝込みの襲撃は失敗したと判断したのか、「邪魔をした」などと言い残して、静かにドアを開け閉めして出て行った。

アティリオはそもそもシャルのイヌバージョンを知っていて尚、彼と真顔で対話しようとしていたらしい。結構肝が据わった御仁だ……

呼吸に合わせてゆっくりと上下するシャルのお腹と、前脚に擦り寄りつつ、ユーリは目を閉じた。

今のシャルは天狼でユーリはネコなのだから、こんな風に擦り寄っていたって良い筈だ。

彼はしっかり寝入っている事を確かめつつ、シャルの体温と、彼の匂いを胸いっぱいに吸い込んで、ユーリはそっと日本語で呟いた。

『シャルさん、好き』

彼本人からは、自分など全く眼中に無いと理解していても。

ユーリの心は自由だ。

3

「ねえ、アティ？
あたし、さっきから気になってたんだけどね」

ガタゴト、と盛大に揺れる幌付きの荷馬車の荷台の上から、ベアトリスは御者を務めているアティリオの背中に問い掛けた。

「その顔の引っ掻き傷、あなたいったいどうしたのー？」
「……どこぞの、気性の荒いアホネコの仕業です」
「気性の荒いネコ……つまりは嫉妬深い女か。やるな、アティリオ」
「男としての、名誉の負傷って事ね！」

荷台を振り向かずに吐き捨てたアティリオに、カルロスはふっと小さく笑みを零しながら茶化し、ベアトリスはノッてるだけなのか真に受けたのか、笑顔で両手を叩いた。
そんな背後の低レベルなやり取りに耐えきれなくなったのか、ぐわっと振り向いたアティリオは、

「君のところの、暴虐と小賢しいペットがやらかしたんだろうが！」
「アティリオー。しっかり前見ろ、前」

ビシィッ！　とカルロスへ指を突きつけるものの、彼は今、御者さんだった。即座に窘められて、とてつもなく不満げな表情を浮かべつつ、フンッ！　と鼻を鳴らして前へと向き直った。

「人んちの賢くて大人しいペットにエラい言いようだな、おい」
「そーよぅ、アティ。シャルはともかく、ユーリちゃんはこんなに

可愛いのにー」

アティリオから忌々しげに睨み付けられようが、自身を話題に出されようが、ツーンと澄まして彼からは顔を背けていたユーリだったが、朝から彼女を抱っこしているベアトリスに手加減抜きでギュム！　と包容され、息が詰まった。

そんなしもべの危機を救うでもなく、主であるカルロスは満面の笑みを浮かべ、ユーリの頭を盛んに撫で回すのみ。こんなに毎日頭を撫でられていたら、冗談でなくそのうちハゲそうだ。

「師匠……！　くっ、小賢しい黒ネコの分際で、カルロスだけでは飽きたらず僕の師匠までをも惑わすとは……！　黒い悪魔めっ！」

ユーリは地味に窒息死の危機に陥っているというのに、イヌ派ハーフエルフは恨めしいと言わんばかりである。

ううう……シャルさーん、助けてー……

今この場には居ない同僚へ向けて、ユーリは力無く救いの手を求めた。

だがしかし、例えこの場にシャルが居たとしても、あの同僚は笑顔で彼女を放置するであろう、という予想が簡単についてしまうのがかなり悲しい。

連盟の本部の塔の、とある一室にてカルロスやシャルと共に一晩休んだユーリは、てっきり今日も写本作業に勤しむのだと思っていたのだが、主や同僚と共に朝食を取りに出掛けようとした、そんな矢先に現れたベアトリスによってこの荷馬車に引きずり込まれ、彼女の『フィールドワーク』に付き合う事となってしまったのである。

どうやらカルロスが連盟から与えられたお仕事の中にはこれも含まれていたらしく、彼は諦め気味にベアトリスに急かされるまま荷馬車に乗り込んだ。

その際、御者台に座っていた人物は何故かアティリオでカルロスと口喧嘩を繰り広げたり、荷台を曳く馬が人間バージョンのシャルでも大いに怯えたせいで彼だけ別行動になったりと、朝っぱらから一悶着を経て、今に至る。

“……で？　俺の知らん間に、お前はアティリオと顔を合わせてたのか？”

じたばたもがいたお陰で、なんとか苦しいという意は伝わったのか、ベアトリスの腕の力が緩み、ようやく一息ついているユーリにカルロスからテレパシーによるメッセージが飛んできた。

はあ。昨日、主がお偉方とお話をなさっていた際に、私とシャルさんが主を待っていたお部屋にアティリオさんが乗り込んで来まして。バレて殺しに掛かってきましたので、全力で引っ掻いたり噛み付きつつ抵抗し、本部の中で生死を賭けた逃走劇を演じました。あ、あと夕べ主が寝ている間に部屋に忍び込んできて、寝ぼけたシャルさんに喰われかけてました。

ユーリからの返答を送られたカルロスは、嘆かわしげに額に手を当てて首を左右に振り、唸る。

「……アティリオ。いかにうちのユーリが愛くるしく魅力的だとはいえ、女の子相手に強引に迫ったらそりゃあ、いくらユーリが温厚で人懐っこい娘だろうと、普通そんな男は嫌われるぞ？」

「人を変態のように言うな！」

カルロスとしては、まあ自分チの黒ネコの中身が本当は人間であると理解しているからこその忠告だったのかもしれないが、アティリオにとっては黒ネコは黒ネコでしかない。イヌ派だし。

「あらやだ、アティったらそんな事したの！？」

「そうらしいぞ、婆さん。

夕べなんざ、夜這いを仕掛けてきて、寝ぼけたシャルに餌と判断されて危うく喰われるところだったらしい」

「信じらんないっ！　この、女の敵！

あれだけあたしが、女性には紳士に接しなさいって口を酸っぱくして指導したのに、その教えが無駄になっただなんてーっ！」

ユーリを腕に抱きかかえたまま、よよよ、と、大袈裟に泣き真似をするベアトリス。

そうか、アティリオが人間や後輩の女の子にはやけに紳士的だと思えば、彼女の教育の成果だったらしい。

「だよなあ、婆さん。

女の子へは紳士に。婆さんの教えは正しい」

うむうむと頷くカルロス。

もしや、ユーリの主のエストへの何かエロい紳士っぷり……もとい、色気を滲ませた明らかに口説きモードな紳士さも、やはりベアトリスの薫陶を受けたせいなのか。

ええっと。

主、ベアトリス様って、主やアティリオさんの『魔術の師』なのではなかったのですか？

“まあ、魔術の師弟関係でもあるぞ”

そ、そうですか。『でも』って言葉が気になりますが。

「僕は教えを忠実に守っています！
取り敢えず、夕べ部屋にこっそり忍び込んだのは謝罪するが、君も部屋に鍵ぐらい掛けろカルロス！」

「鍵……ああ、そういうモンもあったな。うっかりしてた」

「おい！」

真顔でひとりごちるカルロスに、ギョッとした表情で一瞬振り向いて突っ込んだアティリオ。

「いつも大事な物や自分の住んでるとこの周囲は結界で守ってるから、自分の部屋に鍵って掛ける習慣無くなるわよねえ、カルロス」

「だよな、婆さん。俺、ここ何年も鍵なんて掛けてねえわ」

「……こ、この結界術特化術者達は……！」

カルロスとベアトリスの会話に、アティリオは嘆くが、ユーリも思わず頭を抱えた。
森の中の自宅の部屋に、鍵があるかどうかなど気にした事も無かったし、夜間や早朝に玄関や勝手口の施錠や開錠を担当した事も無い。
ユーリは鍵を渡されたりその在処を教わった事も無かったので、てっきり、家主であるカルロスか、先輩であるシャルの役目なのだと頭から思い込んでいたのだ。

その延長線上で、昨夜は出先であるにも関わらず、戸締まりを確認せずにそのまま就寝と相成ったようである。
どうやらカルロスのその生活習慣は、自宅の結界に付与された『住人以外の侵入拒否』に頼りきった弊害であるようだ。もしかしたら、

侵入者の存在を簡単に察知出来るほどシャルの危険感知能力が優れている、というのも一役買っているのかもしれない。

主がこの調子では、シャルさんに戸締まりの重要性や必要性を説いても、理解して頂けなさそうですね。

今後は、私がしっかり気を付けておかなくては……！

そんな決意を胸に誓うユーリに、主からは愉快そうな感情が送られてくるのみ。

主、笑ってないで、家の鍵が仕舞ってある場所を教えて下さい。

“おう、忘れたぞ”

ちょっ、待って下さい主ッ！？

ベアトリスの腕に抱かれたまま、ユーリがじろりとカルロスをねめつけると、ご主人様は即座に清々しくお答えになった。

グリューユの森へと帰還した暁には、ユーリは自宅の鍵大捜索をする羽目になった模様である。

王都からガタゴトと街道をひた走った荷馬車は、主要街道を逸れて小さな農村へと辿り着いた。

村の入り口でいつもののほほんとした表情のまま佇んでいたシャルは、馬車から地面に軽快に降り立つカルロスに頭を下げ、

「マスター、お疲れ様です」

「待たせたか？」

「いえ、さほど」

ぐりっぐりとカルロスに頭を撫でられ、心なしか嬉しそうである。
ユーリはベアトリスの腕に抱きかかえられたままそんなシャルの様子を眺め、複雑な気分になりつつシャルから視線を寄越される前に目を逸らした。
相変わらず、荷馬車の馬はシャルに怯えて嘶いているのだが、彼は全く気にしていないようだ。
そのまま一行は村の中へと足を踏み入れつつ、

「じゃあアティは馬車と馬をあっちの酒場に預けてきて。カルロスはこの村の結界の点検と修復、陣は村の中央に敷かれてるわ。あたしはまず村長のところに話を聞きに行くから。
何か質問は？」

ベアトリスは指示を出しながらあっち、そっち、と簡単に指で方向を示し、最後に首を傾げて弟子であるらしい2人を見やった。
カルロスとアティリオは短く了解した旨を告げ、サクサクと動き出す。シャルは当然のようにカルロスの隣をついて行くし、ユーリは相変わらずベアトリスの腕の中だ。

村長さんのお家に向かって歩き出したベアトリスの腕の中で、ユーリは首を伸ばして主や同僚の背中を見送る。

……シャルさん、主だけじゃなくて、ちょっとくらい私に何か声掛けてくれても良いのに……

期待するだけ無理な話だと分かっていても、彼から全く気にもとめられていない現実に、ユーリは憂鬱な溜め息を吐いた。

既に時刻は昼に近付いているせいか、村の人々はほぼ農作業に出払っているらしく、閑散としていた。
王都では建物には華やかな色合いの赤レンガや白い石材が使われていたが、この村の住居はそれとはまた別の、どことなく灰色っぽい石材や濃い茶色の木材、漆喰が使われている。
見上げれば大抵の家屋は二階建てで、煙突も見える。これはこの村が特別裕福なのか、バーデュロイ国内全体での生活水準がこれくらいなのか、どちらだろう。

我が家も二階建てですし、居間には暖炉もありますしねえ……

村の中をベアトリスはスタスタと迷い無く歩き、村の中でも最も大きいお家の玄関に立ち、ドアをノックした。

「ごめんくださ～い」
「はいはい、お待ち下さいね」

ノックと共に発した大声での呼び掛けに、中から応えが返ってきて、待つ事しばし。
キィと軋んだ音を立てて木製のドアが開いて、住人が顔を見せた。
初老に入った女性で、簡素な白麻の小さなボンネットを被り、濃い緑色のワンピースの上にオーバースカートを着て、白いエプロンを身に着けている。

これがこの世界の一般女性の庶民的服装か、と、こちらの世界にやって来て実は初めてまともに一般人女性と対面したユーリは、むむむ……とじっくり観察した。
今までは大貴族のご令嬢だったり、メイドさんや魔術師さんといった職業的服装だったり、暗かったり人込みでごった返していたりで、見物する機会が無かったのだ。

王都ですれ違った人々は、鮮やかで様々な色合いや形だったような気がしたが、この方は年配の方だから余計に落ち着いた色合いなのだろうか。

ううん……しかし、当然のようにスカートだし、丈は靴が殆ど見えないぐらい長いですね。こちらの服装は、私には過ごしにくそうです。

女の子らしい服もいつかは欲しいな、と思っていたのだが、こういった服装が一般的となると、少年の服装の方がユーリはまだしも気楽に過ごせそうである。

4

「それでその時にお爺さんがですね……」
「へえ～？　なになに、まだ何か言ってきちゃったの？」
「もうね、『婆さんの話は長い！』だなんて言うんですよ」
「あ～。言う言う。
うちの若造も、口を開けば『婆さんの話は無駄に長い！』なんてね」
「本当にねぇ。男の人だって、自分達だけで盛り上がれる話題で長話しているくせにねぇ」

えー、ただ今、訪れた農村の推定村長宅にお邪魔したベアトリス様と、その家の大奥様？　は、居間のようなお部屋にてまったりとお茶を飲みながら、愚痴だか世間話だかをしていらっしゃいます。
……魔術師のフィールドワークって、茶飲み友達を作る事なんでしょうか……？
僭越ながらベアトリス様、私もあなた様のお話は長いと思います。

と、居間のドアがノックされ、先ほどお昼ご飯の支度をしていた奥さんが顔を覗かせた。

「お義母さん、またお客さんがいらっしゃいましたよ。
そちらの魔法使いさんの、お連れさんだそうで」
「お話し中失礼します。
こちらに連れがお邪魔させて頂いていると……師匠、結界の修復は完了しましたが、この近辺でまだ何か懸念される事柄でも？」

相変わらず目深にフードを被ったままのアティリオは、大奥様にスッと頭を下げ、ベアトリスに淡々と報告する。

「ん～ん、まだ困り事があるかとうかは聞いてない」
「……は？」

あっけらかんと、来訪目的をまだ終わらせていないと告げる師に、弟子は口をポカンと開けて問い返した。ベアトリスが村長宅にお邪魔してから、ユーリの体感時間で既に一時間は経過している。

「……師匠、こちらにお邪魔してから、何を話されていらしたのでしょう？」
「村での近況についてよ！」

大奥様のお爺さんと、ベアトリス様の最近の若造トークです。

「それで、最近何か困った事とかあった？」
「ええ、昨日はお爺さんがですね……」

多少表情を引き締めて仕切り直すベアトリスに、大奥様はまたしても嬉々としてお爺さんトークを再開した。

……すみません大奥様！　昨日のお爺さんについても、先ほど伺いました！
つーか、お爺さんと毎日どんだけラブラブなんですか！

「あのう、魔法使いの先生方。
出来れば近くの森の魔物をやっつけてくれないかね？」

いつもの事と慣れているのか、大奥様の話を遮った奥さんが、アティリオに話しかけた。

「近くの森というと、ここから東の？」
「ああ。猟に出掛けた連中が変な生き物に襲われかけてね。どうも、魔物が住み着いたんじゃないかって、もっぱらの噂さ」
「なるほど……分かりました調査してみましょう。師匠、猟師達のところへ聞き込みに行きますよ！　いつまで茶飲み話に夢中になってるんですか！」

居間のドアの付近で立ち話をしたまま奥さんの相談を吟味したアティリオは、クルリと室内を振り向いて大奥様の話に相槌を打っているベアトリスを引き摺るようにして、村長宅を後にした。
ベアトリスの膝の上で眠気に襲われていたユーリは、彼女に抱き上げられてようやく覚醒し、ふあ～と欠伸を漏らす。

アティリオの方から、じとーっとした眼差しが注がれてくるが、フイッと顔を背けて無視だ。なんだかんだ言いつつ、この魔術師さんは師匠のお言葉には逆らいたがらないようだし、当面はユーリにとって、ベアトリスの腕の中が最も安全地帯なのかもしれない。

「あー、やっと出てきたな。ったく、婆さんの話はいつも無駄に長げぇんだよ」

よそ様のお宅の壁にもたれて、腕を組んで待ち体勢に入っていたカルロスは、村長宅から出て来たベアトリスに不満げに零す。

……なるほど。確かにベアトリス様の仰った通りの態度です。

「カルロス、東の森で魔物らしき生き物に襲われそうになった村人がいるらしい」
「さっきすれ違った村人からも、そんな話聞いたな。どうだ、シャル？」

カルロスは隣に佇むしもべを振り返り、意見を促した。
主から話を振られたシャルは小さく首を傾げて、

「この距離では、なんとも。
ただ、上空から見た限りではさほど大きな森ではありませんので、
ベアトリス様の結界で簡単に封じられるかと」

「つー事らしい」

遠くて正確には探れない、と前置きし、ベアトリスに投げた。それに投げられた当人はあからさまに顔をしかめる。

「えー、あたしー？　やあよ、カルロスが張ればいいじゃない」
「おい、ちったあ働けよ婆さん」
「別に、結界を張るのはどちらでも構いませんが、その時は森に入って殲滅するのは僕と師匠の役割になりますが？」

弟子2人の苦言に、ベアトリスはチェッと舌打ち。

「まあつまり、猟師さんの見間違いで、単なる大きな動物が住んでただけでしたーって事なら、話は簡単な訳よね！」

などと気を取り直したものの、話を聞きに行った猟師さん達は、口を揃えて「あんな生き物は見た事が無い」と証言し、外見的特徴を聞き出したところ、魔物の一種と合致するらしく。

「やって来ました、近くの森！
……ヤダなー。陣敷いてない場所に結界張るのって、すっごく疲れるのよぅ」

これはしっかり退治しておかなくては！　という方向に魔法使い達の話は纏まり、農村から東に位置する、小さめの森の入り口へと一行は佇んでいた。
恐らく最年長であるにも関わらず、相変わらず駄々をこねるベアトリスに、カルロスは「まあまあ」と宥め、

「俺達が森に入ってる間、ユーリを預かっててくれていいから。な？」

よく分からない交換条件を持ち出した。
というか、今の今までユーリは森の外で待っているつもりだったのだが、カルロスの口振りでは魔物が住み着いている森の中へ連れて行かれる予定だったのか。

ベアトリス様は、結界術がお得意だと？

“おう。連盟の中じゃ、結界術で婆さんの右に出る奴はいねえ。なんせ、自分の周りに常時張り巡らして自由に動き回ってるぐらいだからな。そんな化けモンは婆さんぐらいだ”

……化けモンて、主。
私の周りに張られてる外殻膜も、結界の一種なのではないのですか。

“外殻膜は結界術の中でも特殊枠だ。異世界からマレンジスに入り込む時に、最初っから周囲が完璧に覆われて包まれてるからな。繭の内に居ながら外側に一回絵の具被せるのと、自分の体には一切掛からないように丸一日中常に避けまくりながら絵の具を振り掛けられ続けるのと。どっちが難しいと思う？”

……！　ベアトリス様、化けモンだ！

カルロスの分かり易いんだか難しいんだか、な説明に、ユーリは思わず息を飲んで同意してしまった。
あんなにヘラヘラと笑い、至って気楽に生きているように見えて、実はベアトリスはとてつもない運動神経の持ち主で、何故か常に絵の具の襲撃的な気の抜けない日常を送っており、華麗なる回避運動を繰り返しつつ生活しているらしい。

“まあ流石に、魔法陣無しで結界術を張るなら、自分の周囲の結界までは維持しねぇだろうな”

あのー、主。
結界術って、そんなに疲れるものなんですか？

“張り方による。家や閣下の居城じゃあ、予め用意されてる魔法陣が結界術の殆どの工程を補佐するが、無けりゃあそりゃもうしんどい”

ユーリの素朴な疑問に、カルロスからしみじみとした肯定が返ってきた。
その主からのお言葉に、（重たい荷物を、台車に乗せて運ぶのと、自力で担ぐようなものかなあ？）などと、ユーリの脳裏にベアトリスがフンヌっ！　と、鼻息も荒く鉄筋コンクリートを両肩に担ぎ上げるの図、がほわ～んと浮かぶ。
無論、ここで想像図が何かガテン系ベアトリスなのは、先ほどの主からの解説で肉体派的なイメージを抱いたからだ。

「ぶははははっ！」
「……カルロス、君は突然どうしたんだ。ついに頭が沸いたのか？」

「うるせっ！」

どうやらまたしても、ユーリの主は勝手に彼女の思考を読んで、勝手に自爆しているらしい。

突然お腹を抱えて笑い転げるカルロスに、不審そうな眼差しを送るアティリオとベアトリス。

「と、とにかくだ婆さん。

森の中を走り回るより、外に止まってる方が良いだろ？」

「はいはい。最近の若者は、年寄りをいつまでも酷使させてからに」

「よし。シャル、イヌバージョンになってこい」

「はい」

カルロスがくいっと顎で示した木陰に足を向けるシャル。ベアトリスの腕から下ろされたユーリは、その背中をじっと見つめ。振り返りもしない彼に、何故か酷く気落ちする。見返されたら見返されたで、視線を逸らしてオロオロするしか出来ないくせに。

もしも私とシャルさんが同じ種族だったなら、今とは違う関係を築けたのでしょうか？

こんな、始まる前から終わっているような気持ちなんて、抱えずに済んだのでしょうか。

もっと、シャルさんとゆっくり話したいな。

そんなユーリの細やかな願いでさえ、当の本人からはきっと、迷惑で面倒なものでしかないのだろう。

5　※後半に流血描写有り

虚しいと分かっていても、勝手にシャルに対して期待したり落胆したり。考えないようにしていても、ふと気を抜けば様々な気持ちが過ぎってしまう。
そんな独り相撲を繰り広げるユーリをヨソに、顔を見合わせた術者様方は、眼前に手を差し出して唱和する。

「杖よ、我が手に」

短いその言葉と共に、彼らの手にそれぞれ、形も色も様々なスタッフやロッドが……

って主、なんですかその『いかにも魔法でい！』って呼び掛けに応える不思議杖ーっ！？

“は？　何ってだから、術を使う時の媒体？
あるのと無いのとじゃ、術の安定性が段違いなんだよ。
お前の世界のお伽話に出て来る魔法使いも、大抵杖持ってるじゃねえか”

主がそんな杖を出されるの、私、初めて見たんですけど。
どっから呼び出したんですか！

“あー。簡単に言うと、こういう杖持った術者は、バシバシ魔術を使うぞって証拠な訳だ。
だから連盟に所属する術者で見習いを卒業した奴は全員、自分の杖を鞘に仕舞われた剣みたく封印されてる。

封印場所は連盟本部の地下、封印解除条件は『自己の利益のみが目的とならない時』呼び出しが可能”

明るい翠緑色の、肘から手首ほどの長さで先端に鮮やかな碧い宝石が填め込まれたロッドで、自らの肩を軽く叩きつつのカルロスからの解説に、

はあ……何かよく分かりませんが、非常に制限された特殊な武器だという事は理解しました。
魔法のロッドを手にされた主……実に魔法使いっぽいですね！

ユーリはじっくりと自らの主人を見上げ、うむうむと悦に入った。
常々、カルロスには魔法使いらしさが何か足りないと思っていたが、それは服装云々以前に杖であったらしい。

「じゃあいくわよー」

イヌバージョンになったシャルが、着ていた服を銜えながら木陰からのっそりと歩み寄ってくるのに頷き、ベアトリスはユーリ的に『素敵なステッキ』を一度頭上でふりふりし、両手で構えた。

「舞え、統べるものよ。我が意に従い、踊れ、界に満ちし力の源。集え、導きの光よ。我らの頭上に輝け！」
「よし、行くぜアティリオ！」
「君に言われるまでもない！」

ベアトリスが呪文を唱えつつ、眼前に構えていたステッキを頭上に振り翳すと、その先端から眩いばかりの光輝が溢れ出、幾筋もの細い帯状となって森を覆い尽くした。
『なんかすんごくしんどい』などと言っていた割には、以前カルロ

スがパヴォド伯爵家の城で結界修復を行っていた際よりも、ベアトリスはよほど短く雑作も無く術を完成させたようにユーリには感じられた。
魔術の扱い方は彼女には分からないので、それはあくまでも凡人の目から見れば、という話なのだが……

ベアトリスが結界を完成させたと見るやいなや、カルロス、シャル、アティリオは一気に森の中へと走り出した。
森の周囲に結界を張り巡らせる。そして森に特攻して殲滅する。
彼らの会話から察するに、今回の作戦は、決して魔物を逃さないように結界という壁で森を囲み、一匹残らず排除する、という意味なのだろう。

両手で握った赤いステッキを頭上に掲げたままゆっくりとした呼吸を繰り返し、微動だにしないベアトリスを見上げて、ユーリはあれ？　と、瞬きを繰り返した。

彼女の傍らで術に集中しているらしきエルフの女性は、薄紫色のローブを身に纏っているベアトリスなのだが、先ほどまでとは何か印象が違うような気がする。
長いストレートの金髪に碧眼の、どことなく彼女の主を彷彿とさせる美貌のエルフ……

ちょっと待って。
私、昨日初めてベアトリス様を見た時、そんな事思いもしなかった筈。

そう、『薄紫色のローブを着て、ハイテンションでやけに性格的にインパクトがある、耳が長い美人な女の人』という第一印象を抱いたのだ。

……昨日の様子を思い返してみても、ベアトリスの具体的な髪の色や顔立ちが、何故かぼやけたかのように思い出せない。そしてその点について、今の今までなんら疑問にも思わなかった。

ベアトリス様が、自分の周囲に結界を張り巡らせてるって、こういう事なんでしょうか。

となると、ベアトリス様の普段のちょっとオーバーでハイな性格も、『容姿以外でベアトリス様を識別する為』に敢えて装ったもの、という可能性もありますね。

彼女の足元にお座りしていたユーリは、ベアトリスの集中を妨げないようにそろそろと歩いて、草原の上に放り出された、シャルが着ていた服の上着にポスッと倒れ込んだ。

ほんの僅かにだが、夕べ、夢うつつで吸い込んだ彼の匂いがする。

暖かくて滑らかな毛皮とは比べ物にならないほど、このシャツは素っ気ないけれど。

残り香はユーリを無視したり、意地悪してきたりなどしないから。

彼らがどんな風に魔物を狩ろうが構わない。保護され養われている身でありながら、狩りに参加する事を拒否しているユーリには、彼らに物申す権利などありはしないのだから。

ただそう、怪我などせずに無事に戻ってきてくれればそれで良い。

天高く上った日が、僅かに傾いた頃。彼らは森から出て来た。

どちらがより多く仕留めたか、で諍いになる元気なカルロスとアティリオはさておき、真っ直ぐユーリの方へと歩み寄ってきたシャルは、綺麗な銀色の毛皮がべっとりと赤く染まっている。さほど良くもない、ユーリの鼻にまでつく濃い血臭。

ポタリ、と、赤い物が滴り落ち、シャルの歩いた後には赤い跡が残

されていて。

シャル……さん。

ユーリが震えながらみー、と呼び掛けたら、血塗れの獣は唇の両端を持ち上げた。牙と唇が、最も赤く染め上げられている。

「そこを退いて下さい、ユーリさん。
わたしの服が取れません」

血が、いっぱいです。け、怪我したんですか!?

「そんなヘマをする筈が無いでしょう。全て返り血です」

フンッと鼻で笑い、彼の服の上でうずくまるユーリに向かって、シャルは血塗れの鼻面を近付けた。グワッと、赤い牙がズラリと並んだあぎとが目の前で開かれる。

……じゃあ、退く訳にはいきません。今私が退いちゃったら、シャルさんの服が汚れちゃいます。
血の染み抜きは、お洗濯が大変ですよ?

喰らい付き、噛み千切り、引き裂いてきた直後なシャルを見上げて、全く怪我を負っていないと保証されたユーリは、ヘナヘナと力が抜けつつそう返した。

「おやおや。あなたもようやく、洗濯の苦悩と苦労を理解したようですね、ユーリさん」
「だから何故、そこで行き着く結論が洗濯なんだクォン!?」

うむ、と満足げに頷くシャルに、その背後で固唾を飲んで成り行きを見守っていたアティリオが、納得がいかないと言わんばかりに叫ぶ。

「カルロス。いったいあいつらは常日頃から、どういう会話を交わしているんだ？」

「さあ？　ユーリがどんな意味の鳴き声を発してるのかは、シャルにしか読み取れねえからな」

「あの暴虐クォンの言動から推察するに、黒ネコの鳴き声の意味も、どこまでも奇っ怪極まりないに違いない……」

こちらは全く服の汚れも見当たらない、森に入る前と変わらぬ様子のアティリオとカルロス。主人であるカルロスは、知ろうと思えばユーリの意図など簡単に知る事が出来るというのに、そらっと真顔で惚けている。

と、そんなやり取りの最中、結界術を解くなりグッタリとへたり込んでいたベアトリスが、突如「うがーっ！」という叫び声と共に立ち上がった。

「疲れた！　お腹空いた！　後、シャル臭い！
あんた達、今すぐなんとかしなさ～いっ！」

ベアトリスが握っていたステッキをぶんぶか振り回すと、それはフウッと溶け消えてしまう。

……なるほど、彼女のあの叫びは『自身の利益の為』だけに利用されかねないと判断されて、杖は再び封印されたらしい。

「……んー、婆さん本気でへばってるな。
だとすると、やっぱり関係ねえのか？」

カルロスはそんな呟きと共に、ユーリを抱き上げて見下ろしてきた。
彼女は意味が分からず小首を傾げてみたのだが、主からそれ以上の言葉が掛けられる事は無かった。

その後、シャルが川で水浴びをしたり、農村に魔物退治完了報告を行って、ご飯をかき込んだりして、再び荷馬車に乗ってその村を後にした。

ユーリはてっきり、このまま一行は王都の連盟本部に戻るのだとばかり思っていたのだが、そのまま街道を走って四日間ほど掛けて各地の村々を回り、結界の修復に勤しんだり、問題事を解決したりする小旅行となった。
因みに、村人から相談される問題事の内容は大多数が『魔物退治』で、中には『橋が壊れた』といった重要な案件から、『うちの旦那、浮気してるのかも』という、当人同士でなんとかして欲しいようなものまで、なんともバラエティーに富んでいた。

なんというハードな内容なのでしょう、魔術師のフィールドワーク……

3～6人で組んで、定期的に各地を巡るそうですが、バーデュロイ国民の皆さんの魔法使いのイメージは、まさに何でも屋さん状態じゃないですか。

魔法使い達が平穏に暮らす為には、ここまで粉骨砕身しなくてはならないというのもどうにも納得がいかないものがあるが、概ね訪れた村の人々は皆善良で、一行を歓迎している態度をとっている。

けれど、この国から一歩外へ出れば。途端に寄ってたかって追い立

てられ、責められる立場に立たされるのだとすれば、連盟の人々が懸命になり、仕事を全うしようとするのも頷ける。

「ほらーアティ、また擦りむいたの？　薬塗ってあげるからこっちに見せなさい」

「……面目ありません、師匠」

そして何より、本部の塔の中でチラホラと垣間見た、連盟に所属する術者達の間に強い結束力や信頼関係が存在する事が、とても頷けるものであるような気がするのだ。

……取り敢えず。

今回のお出掛けで分かったのは、要するに『魔力＝体力』で、『魔術を扱う素養＝天賦の運動神経』って理解で良いんですね、主？

なるほど、それが両方私に備わっていないというのは、自明の理です！

調香師のお仕事

外回りを終えて塔へと戻ってからも、ユーリは残っていた写本作業や書類整理の仕事をこなしたり、カルロスはカルロスであちこちに引っ張り回されたり調べ物をしたりと、なんだかんだ忙しく過ごし……カルロスとユーリ、シャルの3人は、お出掛けしてからきっかり十日後、グリューユの森にある自宅へとようやく戻れたのであった。

バサバサと翼を羽ばたかせ、一直線に自宅の裏庭へと舞い降りたイヌバージョンのシャルの背中からひょいと飛び降りたカルロスは、腕に子ネコ姿のユーリを抱いたまま背中に背負った荷物を地面へと下ろし、

「俺は畑を見てくるから、シャルは荷解きな」

「はい」

ちゃっかりご主人様権限で重たい荷物をシャルに任せ、すたすたと花畑が広がっている前庭の方へと足を向けた。

シャルが玄関前に着陸しなかったのは、前庭を埋め尽くしている花を薙ぎ倒さないようにする為。

そしてユーリがただ今子ネコ姿なのは、シャルの背中は人が1人乗るのが精一杯だからだ。

ユーリの本心としては、主に抱きかかえられながらではなく、きちんと人間の姿でシャルと2人きり大空遊覧飛行というものをしてみたかったのだが、無論そんな望みは言い出せない。何故ならばシャルはまたぞろ、「マスターならばともかく。鈍臭いユーリさんを乗

せたら、簡単にわたしの背中から滑り落ちそうだから嫌です」とでも言い放つに違いないからだ。

ううう……主はわざわざシャルさんの背中に乗らなくても、自分で飛べるくせに……

そういえば『魔術師のフィールドワーク』中の移動は全て荷馬車だったが、こちらの世界の魔法使いは、箒に乗って……は、ともかくとして、空を飛ぶ魔法というのは一般的ではないのだろうか。

つらつらと考え事をしているユーリには構わず、カルロスは花畑の中に足を踏み入れ、花々の様子を確かめている。
瑞々しい花弁や葉、土の状態をチェック。

「よし、問題はなさそうだな。」

しばらく留守にしてましたけど、ここの畑のお花、丈夫ですねぇ。

相変わらずカルロスの腕の中にいるユーリは、尻尾をぷらぷらと揺らしつつ馨しい花の香りを吸い込んだ。前庭の花畑には様々な種類の花が咲いており、地球のラベンダーに似た香りを放つこのお花はユーリのお気に入りだ。

「アホかお前は？　いくらなんでも何十種類もある畑の花全てが、頑丈で枯れにくい筈ないだろうが。
花が枯れてねえのは、俺が出掛ける前にしっかりと、畑の周囲に保護結界を張り巡らせておいたからだ」

……なんでもありですね、結界術。

「俺は本職で役立てる為に魔術を学んだんだからな。術の利便性や応用化は、日々研究してんだよ」

ふふん、と、得意げに胸を張るカルロスに、ユーリは思わず脱力する。

技術を磨くのは職人として正しい姿なのだろうが、魔術の才を見出されてパヴォド伯爵に拾われ、真面目に魔法学校で勉強をしていながら、まさか将来的には調香師になりたいと考えていたなどと、拾い主は予想だにしなかったに違いない。

鼻高々で「この術も便利でな」などと言いつつ、以前ユーリもチラリと見た水のツルを空中に舞わせ、上空から霧状に降らせて水やりをするカルロスの平和的な姿など、少なくとも戦力になるよう育てられた人間として完成された、と言うには、すこぶる何かが間違っている気がする。

いや、水のツルは相変わらず綺麗だし、花畑のあちこちで小さな虹が出来ていて、とても幻想的なのだが。

魔法使いって、良いなあ……などと、羨ましくなる瞬間だ。ユーリがこの畑に水やりをしようと思えば、ジョウロ片手に小一時間は掛かる。

花畑をチェックし、更に水やりも済ませて玄関から家の中へ入ろうとしたカルロスは、ふと足を止めた。

頭上からふわふわと、綿帽子から飛び立った白い綿毛のようなものが舞い降りてくる。

カルロスがすっと手をかざすと、風もないのに綿毛は方向を変えて、彼の指先に止まった。

彼はしばらくそれをじっと眺め、

「ふむ……」

瞬きを繰り返し、何かを思案するように呟きを漏らした。
心なしか……いや、見間違えようもなく、カルロスは表情が輝いている。本人としては、喜色を隠しているつもりなのかもしれないが。

主、何ですか、それ？

「ん？　ああ、アティリオの先触れの術は見た事あるだろ？
あれは閉じられた結界の中だろうと、どこへでも不特定多数にメッセージを伝達する基本術で、これはその応用術。
決まった相手との往復書簡用で、術者でなくても使えるようにしてある。この白い綿毛はエストからな。聞くか？」

特に秘すべき内容ではなかったのか、ただ単に恋しい少女の事について語りたい惚気たいだけなのか、カルロスは使い方の説明をして、ユーリがちょこんと差し出した右前足の肉球の上に、綿毛書簡を乗せた。
曰わく、術者によって様々な形状をしている伝達用のそれを手に乗せ、書き込みは目を閉じ心の中で念じてメッセージを込める。
読み取りは数秒間じっと見つめていると頭の中へ直接メッセージが聞こえてくる、のだとか。
という訳で、ユーリもジーッと綿毛を見つめ続ける事数秒間。

“カルロス、お元気でいらっしゃいますか？　わたくしは相変わらずですわ。
王都へお仕事に行かれるのなら、きっとこの書簡があなたの手元へ届くのは、森に帰ってからになりますわね。ふふ、綿毛さんがカルロスを追い掛けて、一生懸命青空を舞っていく姿を想像すると、なんだか微笑ましいわ。
また調香依頼が舞い込んだようです。お時間が空いたら、仲介人を

訪ねてあげて下さいませね”

頭の中に、エストの柔らかい声が響いてくる。なんだか、カルロスから一方的に送られてくるテレパス現象と似ている。

「という訳だ。
仕事が入ったからには、フィドルカに行かねえとな」

主への調香師としてのお仕事は、エストお嬢様が後援者をして下さっていたんですか？

にこにこと、いかにも渋々といった台詞とは裏腹に笑みを浮かべ、玄関のドアを開けるカルロスは足取りが軽い。
想い人からのお手紙に、心が舞い上がって旅の疲れなどあっという間に吹っ飛んだのだろう。本当に分かり易く、可愛らしい人だ。などと考えているしもべを見下ろし、

「ああ、そうなる。俺の顧客の大半はエストの友人知人に当たる人達だしな。
エストは昔から花が好きでな……このお花の香りが欲しいって駄々をこねられたら、こう、叶えてやりたくなるだろ？
で、気が付いたらこっちが本職になってた」

エストお嬢様と子守時代の昔を懐かしんでいるのか、カルロスは目を細め。

今まで断片的に耳にした話を総合すると。
ユーリの主は幼少期に、魔術の素養を見出されてパヴォド伯爵から引き立てられ後見を受けたが、そもそも本人は魔法使いになりたいと熱望して勉強していたのではなく、後見人が付いてしまったから

仕方がなく魔術の勉強をしていて、世話を焼いていたエストお嬢様の我が儘を叶えてやるのに、魔術は便利だと気が付き（こりゃあ丁度良いや）とばかりに、それからは熱心に学びだした。

……などという人生を送ってきました、という事なってしまうのだが、それが読み通りなのだとすると、いったいどれだけカルロスはエスト至上主義者なのか、という新しい疑問符が。

ユーリは慎ましいしもべとして、そこは突っ込んでやらずに済ませておく事にする。

なるほど。主とエストお嬢様は普段、どういう手法でやり取りをしているのかと思っておりましたが、まさか古式ゆかしき文通であったとは。意外です。

こうして密やかに、愛を囁き交わしていたのですね。ふふふふ……

しかし、これだけは口にせずにはいられないとばかりに、主の恋愛スタイルの意外さには、思わずにやつくユーリ。

基本的にこちらの人々は、婚姻を結ぶまではどうやらプラトニックなラブを貫くらしく、本人を目の前にすればちょっとした大胆さはあるものの、カルロスとて例外ではなく、エストとひっそりと清い交際を貫いているらしい。

その純なラブを目の当たりにして（主、可愛い）と思わずにっこりしながらカルロスを見上げてしまうのも、仕方のない事。

「……お前の世界が乱れ過ぎなんだ」

主、その言いようは地球にて奥ゆかしい風習を守っている方々に失礼です。

私の世界が乱れているのではなく、私の故郷の一部の人間の観念がこちらよりも大胆なのです。

ただそう、男女交際を行うのに一々親の許可を求めないとか、人前でも手を繋いで歩くだとか、夫婦ではなくとも2人きりで旅行に行ったりお互いの家にお泊まりしたりするぐらいだ。

「……嘆かわし過ぎて言葉も出ん」

どうやらカルロス的には十分アウトであったらしい。

日本は自由恋愛が一般的という風潮だが、ユーリのカップル認識は信じられない行状であるようだ。

シャルさんも、やっぱり主と似たり寄ったりな価値観なのでしょうか……

ユーリのぷにぷに肉球の上から綿毛を手に取ったカルロスは、彼女の何気ない一言に「ほ～」と、意味深な呟きを漏らす。

ユーリが主を振り仰ぐと、そこにはニンマリとした笑みを浮かべたカルロスが。

な、何ですか、主？

「いや？　なんでもないぞ？

さあて、一息ついたらまたフィドルカに向かうぞ。お仕事お仕事」

玄関先でユーリを下ろし、何か機嫌良さそうにキッチンへと歩いて行く。

仕事でフィドルカに来たついでに、という建て前でエストの顔を見に城へ立ち寄る気満々であると見た。

……なんでしょう、あれは。

愛しのエストお嬢様に会いに行くからって事だけではなくて、からかいのネタを見つけた苛めっ子のような印象を受けたのですが。

連盟でのお仕事から帰ってきたばかりであるというのに、今度はフィドルカの街へと飛び立つ。

この忙しなさでは、仮に連盟に向かうカルロスやシャルを見送って、ユーリは1人、お家でお留守番をしていたとしたら……何か十日間を自力で生き延びていられた気がしない。主に食料的な問題で。

再びイヌバージョンになったシャルの背中にカルロスが跨がってお空の旅をする事しばし、ユーリは久々に訪れたフィドルカの街と伯爵家の城を、主の腕の中から眼下に見下ろした。

赤レンガと白い石材で作られた街並みは整然と建ち並び、規模は王都と比べるべくも無いが、その美しさには目を見張るものがある。

「早朝からわたしを酷使した挙げ句、またしてもわたしを飛ばさせるとは。

まったく、マスターは本当にイヌ使いが荒い。わたしは乗り物ではないんですよ」

こちらの世界の都市は、綺麗なところが多いなあ、などと感心していたユーリの耳に、シャルの愚痴が半分風に流されつつも届いた。

それにブブッと吹き出したユーリは、ボソボソと呟く。

彼の聴力は、風がびゅうびゅう吹き荒れる状況下の小さな独り言でも、聞き取れるのかどうかは分からないし、たとえ聞こえなくたって構わない。

どこの世界でも、恋する人間の（想い人に会いたい）という行動意欲を思い止まらせる事は出来ないんですよ、シャルさん。

2

調香師と呼ばれるお仕事は、大別すると主に二通りに分かれる。食品香料（フレーバー）を作り出す者と、香粧品香料（フレグランス）を作る者。

ユーリの主であるカルロスは後者で、仕事部屋の棚には多種多様な香料が仕舞ってあり、植物の精油で手に入りにくいものは前庭を改装して花畑に改装し、自ら育てる程だ。

フィドルカの街に存在する装飾品を扱う店に、カルロスが世話になっているという仲介人は勤めている。

地球での調香師の仕事風景といえば、科学薬品や化粧品関係の会社で研究室に籠もり、様々な香り研究をしている人、というイメージしか持たないユーリであるが、マレンジスでは依頼主が直接調香師を訪ねたり呼びつけてあれこれと注文を付けるのは、ままある事のようだ。

しかし、毎度毎度ご機嫌伺いよろしく顧客の家にまで出向くほどカルロスは時間に余裕のある生活を送っている訳ではないので、仲介人が間に立つ。

依頼人の具体的な希望、依頼人の容姿やその人に似合う香りのイメージなどを纏めておき、調香師に託す。カルロスはそれを受けて香水を作り、仲介人に渡す。

オーダーメイドだけではなく、装飾品の店の棚にはカルロスが作った香水も並べられていて、そちらを買っていくご婦人も多いのだとか。

店の裏手の小さなお部屋で、仲介人の紳士と差し向かいで腰掛け、彼が差し出してきた依頼書をペラペラと捲って中身にザッと目を通したカルロスは、ふむ……と、小さく吐息を漏らした。

「やけに夜会向けの華やかな香りを求めてる客が多いな。しかも、使用者の年齢層がほぼ十代半ば？」

相変わらず子ネコ姿のままのユーリは、主の背後に控えているシャルに託されそうになったのだが、ぷいとそっぽを向いてイスに座ったカルロスの膝の上に飛び乗り、ただ今丸くなっていた。ご主人様がお仕事のお話をしている間中、シャルの腕の中や肩の上におらねばならぬなど、落ち着く事も出来ず、ユーリの心臓が持たない。

「全てシーズンに備えて、でしょう」

「シーズンって……もう殆ど時間ねえじゃねえか」

「ええ。カルロスさんは、急な緊急依頼でもきっちりと良質な品を仕上げてくると、夫人方から評判になっているようで」

「……おい、いくら俺でも、今からシーズン開始までにこの数、納得のいく香水を作るのはまず無理だぞ？」

仲介人とカルロスは依頼書の紙を捲りつつ、何やら主は無理難題を押し付けられそうになっているらしい。

シーズンって……社交界シーズンの事でしょうか？

向こうでは真夏でしたが、こちらはやけに涼しく過ごしやすいと思っていました。もうすぐ社交界シーズンって事は、え、まさか今って冬！？

“今は春だアホネコ”

この過ごしやすい気温で冬なのか!?と、驚愕と真夏への脅威に硬直していたユーリへ、ご主人様から短くテレパスツッコミが入った。地球での社交界シーズンといえば、イギリスの春先から夏にかけての、ロンドンに貴族や上流階級が集まる連日の催しという印象が強いユーリだった。が、バーデュロイでの貴族達が王都に集まる社交界シーズンの時期とは、春の終わりから夏いっぱいまで続くものらしい。

「ええ、ですから期日はこの日までで、品も新しい香りを考案するのではなく、ある程度絞って頂きました」

「……今月末までか……」

カルロスは仲介人に話し掛けるのではなく、独り言のように小さく「デビュタントに間に合うか?」と呟いた。

誰か社交界デビューするのだろうか?　と、ふとした疑問を抱いたが、そんなものは考えるまでもない。この主が気にかける相手など、愛しのエステファニア伯爵令嬢の事に決まっている。

カルロスは装飾品を扱うお店や通りで最近の流行をリサーチしつつ、そのまま領主のお城へと足を運んだ。

正面の城門ではなく、使用人が出入りする際に使用するお勝手的な裏門を潜って顔見知りらしい人々と挨拶を交わし、エストのスケジュールを確認。

元・子守であろうが、現在は外部の人間だ。

仮にも男性である主が伯爵令嬢に会いたいと申し出て、そう簡単に会えるものなのでしょうか?

「……あ、いたいた、カルロスさん！」
「よお、セリア」

ちょっぴりハラハラしているユーリの内心などお構いなしに、お城の中を堂々と歩き、勝手知ったるとばかりに全く物怖じせず廊下を突っ切っていたカルロスとそれに従うシャルは、前方から走ってきたメイド服のお姉さんから手を振りながら呼び止められた。

“彼女はエストのレディーズメイドのセリアだ”

何か見覚えのある人だな……と、まじまじと金茶色の髪に榛色の瞳を持つ彼女の顔を眺めていると、カルロスから簡単な紹介が入った。レディーズメイドとは、レディーに専属で付けられるメイドさんで、身の回りの世話や宝飾品の管理も任される役職の人だ。いわゆる上級使用人である。
どこで見掛けたのだろうと思ったが、前回このお城に来た際に、エストの部屋に居た若い方のメイドさんだ。

「もう、急に今日の午後に来るだなんて連絡をくれるんですもん。慌てて調整しなきゃだし、びっくりしちゃいましたよ」
「はは、そりゃ悪かったなセリア」
「ちゃーんと、エストお嬢様に会えるよう、お茶の時間を空けておきましたからね？　感謝して下さいよ？」
「おう、いつもありがとさん」

カルロスの前に立ったセリアは、ぷうと頬を膨らませて「心が籠もってなーい」などと拗ねている。
と、カルロスの背後に控えていたシャルがスッと歩み出て、そんな彼女へと笑みを浮かべ、

「お久しぶりです、セリアさん。
久々にお会い出来たのですから、そんなに難しい顔をせず、あなたの可愛らしい微笑みをわたしに見せてくれませんか？」
「う、あ、しゃ、シャルさん……」

セリアはシャルの顔を見上げて頬を染め、声にならないのか唇を小さくパクパクとさせ、ぎこちなく視線を逸らした。

……ちょっと待て。
なんですかこれなんですかそれなんですかこの情景ーっ！？
シャルさんが人間に向ける興味って、主だけ別格で『ご飯として美味しそうか否か』じゃないんですかーっ！？
いや、エストお嬢様の事も好意的ぽかったけど！

“あー、落ち着けユーリ。
シャルが女性に口にするこの手の台詞は、いわば単なる社交辞令だ。
婆さんにも挨拶と『綺麗だ』云々言ってただろうが”

どっからどう見ても、口説いてるようにしか見えません！
だいたい、シャルさん私にはそんな甘〜い台詞なんか、囁いてくれないじゃないですか……

「そ、その。シャルさん、少し近いので……」
「ああ、すみません。
無意識のうちに、今までセリアさんと離れていた分を取り戻したくなっていたようです」

セリアは恥ずかしげに顔に手を当ててそっと俯き、彼女の顔を覗き込むようにしていたシャルは、一歩後退って距離を取ると、カルロスとユーリの方へと微笑みかけてくる。

その勝ち誇ったような自慢げな表情に、ユーリは頭を殴られたような、深い衝撃を受けた。

……シャルさんが、女ったらしだったなんて女ったらしだったなんて女ったらしだったなんて……！

人間には興味ないくせに、いたずらに女心を弄ぶ遊び人だったなんて……！

百歩……いや、一億歩ほど譲って、シャルが種族を越えてセリアに気があるのだとしよう。

それはかなりムカッとはくるが、セリアは自分よりも先に彼に出会っていたのは事実だし、彼女がシャルの本来の姿を知っているかいないかは別として、彼の心は自由だ。それはもう仕方が無い事。

だが……だが、これっぽっちもそんな気になる可能性などありはしないくせに、甘い台詞を口にして惑わすような素振りをみせるなど、断じて許し難い。

それがシャルの種族の流儀だとか、バーデュロイでの正しいスタイルだとか言われたとしても、とうてい納得などいかない。

ああ……私って、こんなに嫉妬深かったんだなあ……

額に手を当てて小さく溜め息を吐くカルロスと、そんな主人をきょとんとした表情で見詰めるシャル。

そんな彼らの姿も、まだほんのりと頬を赤く染めたままエストの下へ案内するべく先導するセリアの姿も見たくなくて、ユーリは主の胸元に顔を擦り付け、目を伏せた。

きっと、シャルではない別の誰かが女の子に甘い態度を見せていたなら、ユーリはここまで過剰反応したりなどしなかったに違いない。

彼から一度たりとも『可愛い』とか『綺麗です』とか言われたりし

た事がないからこそ、そして何よりユーリにとってシャルが特別だからこそ、これほど深いショックを受けたのだ。

庭の奥まった場所にある四阿で待っていたエストと、短い逢瀬を楽しむカルロスの様子を、今のユーリには微笑ましく眺める余裕もない。

屋外でお茶の支度をするセリアの手付きはテキパキと頼もしいし、シャルはシャルでそんな彼女を手伝いつつ、カルロスとエストの仲睦まじい様子を見るのが嬉しそうだ。

四阿でエストの隣に腰を下ろしたカルロスは、そのままユーリを膝に乗せてくれようとしたのだが、流石に想い合う男女の膝の上に割り込む訳にもいかず、ユーリはヒョイと飛び降りた。

「あら、ユーリちゃんは今日はお散歩したい気分なのかしら？」

「悪いな、エスト。あいつにもまあ色々あってな……」

今日も『子ネコのユーリちゃん』を撫でたり抱っこしたりと可愛がって下さるつもりだったのか、トコトコと歩いてゆく背中に、エストは残念そうに呟く。

「ユーリさんはいっそ贅沢なほど甘い物がお好きだとお話ししたら、セリアさんがお菓子を分けて下さると仰っていますよ。こちらにおいでなさい」

そんなユーリを、彼女の心中など全く察していないらしきシャルは、とてもにこやかに手招きしてくる。

普通の人間が食べる為のお菓子をネコに与えようとするなど、シャルは何を考えているのだろう。いや、ユーリは本来人間なのだが、

傍目にはごく普通の子ネコの筈だ。

ユーリは呼び掛けてくるシャルからぷいと顔を背けて、手近な花壇に駆け込み、うずくまった。

花に埋もれていると、何故か少し落ち着いてくる気がする。

セリアがどういう人なのか、シャルをどう思っているのか、そんな事は少し見掛けただけのユーリには分からないけれど。

女ったらしのシャルさんなんか、嫌いだもん。

3

シャルの予想外な一面に拗ねて、花壇でふて寝を決め込むユーリの様子を気遣いながらも、エストと短くも暖かい逢瀬の一時を楽しんだカルロス。

ようやく寒く厳しい冬を乗り切ったというのに、春先はカルロスの仕事が忙しかったせいで、満足に2人きりになる暇も無いまま。後数日もすれば、エストは父伯爵に連れられ王都へ出発し、社交界シーズンが幕を開けてしまう。そうなれば、またしても2人は離れ離れになり、ゆっくり会う事もままならなくなるだろう。

のそのそと花壇から顔だけ出し、ユーリは短い時間を大切に過ごす2人の姿を、ぼんやりと眺めていた。
お茶を共に楽しみ、しかしそろそろ……と、お互いにスケジュールは詰め込まれており、次の予定をこなすべく、ラブラブな雰囲気を周囲に振り撒きながら別れを惜しむ2人。

そんなお嬢様と魔法使いの恋物語の一場面を、グッと拳を握り締めながらうっとりと眺めるエストのレディーズメイド・セリア。
お似合いな男女がどこか甘い雰囲気を醸す光景を眺めるというのは、乙女の胸がきゅんきゅんとときめく、平凡な日常に潜む最高の娯楽のようなものだ。ユーリにもその感覚は非常によく分かる。
しかし本日、彼女は新たなる真理を見出した。

『ただし、男性の方に心惹かれていない場合に限る』

カルロスがいかにエストと甘い雰囲気になろうが、口説こうが髪を

撫でようが、悪漢の魔の手から華麗に救出しようが、ユーリは『キャーッ！　主ってば大胆ーっ！　イカスーッ！』で、興奮して拍手して讃えて終わるが、それらがシャルに置き換えられると、あら不思議。ムカつきが止まりませんよ？

再びカルロスに抱えられて城、そしてフィドルカの街を出て、イヌバージョンになったシャルに乗ってグリューユの森へと帰還した。大空を移動中、カルロスという重たい荷物を背負いつつ、懸命に羽ばたいているシャルの背中の毛並みに、えいえいと肉球パンチを繰り出してみたものの、仕方がないとはいえ彼には全く堪えた様子が無いのも、何か気が晴れないユーリである。

おうちに帰って一息入れると、元の姿に戻ったユーリと、改めて人間バージョンになったシャルと共に、カルロスは仕事部屋へと向かった。

一階にあるカルロスの仕事部屋は、三部屋からなる。
調香や調合を行う為の作業部屋と、何らかの魔術を使う為に必要なのだと思われる魔法陣が、床一面に描かれている部屋。
そして、素材や香料が仕舞われているお部屋。
火事現場となったおもちゃ屋さんの倉庫からユーリが召喚された際、目が覚めた時にもここの魔法陣の上に寝かされていたので、恐らくは自宅の結界構築専用という訳ではなく、召喚その他諸々の魔術をサポートする汎用性を兼ね備えているのだろう。

以前、調合のお仕事のお手伝いの際、事前に注意を受けていたにも関わらず、うっかりとカルロスの大事な仕事道具を一つぶっ壊してしまった。その時のカルロスの怒り具合は、非常に恐ろしかった…
…いや、思い出すまい。
そのせいで、それ以来ユーリはこのお仕事部屋には出入り禁止を食

らっていたのだが、主はあまりの仕事量の多さに背に腹は代えられないと、素人ユーリも使う気になったらしい。

「これぞまさに、『ネコの手も借りたい』状態ってやつですね！」

「悦に入ってねえで、とっとと動けアホネコ。お前は隣の部屋で必要な香料を揃える。

シャルはひたすらベース作り」

うむうむ、と、頷いているユーリの眼前に、必要な香料がずらりと走り書きされた紙が翳された。

素直にそれを受け取って、カルロスと共に隣室の材料棚に向かう。

室内に天井まで届く棚を五つも並べ、その全てに香料の瓶がギッシリと並べられている様は、ある意味とてつもなく圧巻だ。

「俺は奥から探すから、お前は手前からな」

カルロスの指示に従い、梯子を使って一番上の棚から一つ一つ、香料のラベルを確認しつつ、棚を探す。

ひたすら探す。

とにかく探す。

「あの……主」

「なんだ」

黙々とラベルを確認するものの、中々符合する目的の香料が見付からない。オマケに、一つの段に数十種類の香料が隙間なく押し込まれている。

「この香料って、いったいこの部屋に何種類あるんですか？」

「さあ？　数えた事はねえな。

地下で冷やしてる素材を含めると、軽く二千ぐらいはいくんじゃねえか？」

に・せ・ん！？

ご主人様の軽～いお答えに、ユーリは梯子の上でぐらりとよろめきかけた。この家には地下室まで存在していたという、驚愕の新事実も発覚。

「まさか、主はその全ての香りを記憶していらっしゃる、と？」

「当然だろうが。

お前も品質の高い香りを嗅ぎこめ。そして頭に叩き込め。

なあに、嗅覚ってのは過去の情景や記憶も付随して覚えるもんで、同じ匂いを嗅げばしっかり思い出せる」

「お、鬼ですか主……」

日本での就職難なご時世から、楽々と住み込みなお勤め先に就けた的感覚でのほほんと暮らしていたユーリに、業務上の必要知識が求められる事となった。

働くというのは、中々に甘くない。

「この何百何千とある香料の中から、目的のブツを見つけ出す、ってのがまた大変でな……」

「主……」

何故だろう、棚の向こう側から聞こえてくるカルロスの力無いお言葉に、涙が禁じ得ない。

「あまりの量とゴチャゴチャっぷりにブチ切れて、丸一日中、掃除や整理に費やしたりした事も数知れず……」

「あ、あるじ……」
「オマケにほれ、頼みの綱のシャルは滅茶苦茶鼻が良いだろ？　それが逆に、あいつをこの部屋へは入れられないって事に」
「作業部屋もこの部屋も、別にそんなに匂いませんけど？」
「人間のお前にはな。それに、換気用の術も徹底してあるし。シャルが初めてここに入った途端……」

気まずいのかふと言葉を切るカルロスに、ユーリは「入った途端に？」と、続きを話して欲しいとワクワクと促す。

「あまりの強烈な匂いに、白目剥いて泡吹いてぶっ倒れた」
「あるじぃぃっ！」

嗅覚が非常に優れているというのも、善し悪しである。

ある程度必要な香料を取り出して、作業部屋へと戻ったユーリが目にしたシャルは、防毒マスクを彷彿とさせるブツを顔に被り、無心に様々な香料をスポイトのような小さな器具で少量吸い上げて混ぜ合わせ……という、非常に繊細な作業を行っていた。
香料は単品で香水となる事は殆ど無く、様々な香料を混ぜ合わせたベースを更に配合して、創り出したい香りを生み出すのだそうだ。

「それであの、シャルさんのその顔の覆面？　はいったい……」
「匂いを遮断する為の物ですよ、もちろん」

ベース作りの作業はカルロスから頻繁に命じられるのだそうで、ふふふふ……と、どこかヤケっぱちのような笑い声が、マスク越しにくぐもって漏れ出る。

「シャル、そっちのベースを作ったら、次はこっちのベースな、フ

ローラル系は作り置きだけじゃあ在庫数少ねえんだよ」

カルロスは『そっち』『こっち』などと口にしているものの、特に何かを指し示している素振りは無い。どんなアバウト命令だ、と少し呆れてしまったが、ふと気が付いた。

恐らく、カルロスは作って欲しい香りのイメージを脳内に思い浮かべ、それをテレパスでシャルに直接伝えているのだ。嗅げば記憶と一緒に云々言っていたし、口でベースの名称を伝えるよりその方が手っ取り早いのかもしれない。

「ユーリはまた香料棚からこれを探して来い」

そしてカルロスから更に探し物の紙を渡され、ユーリは溜め息混じりにそれを受け取った。

一つのベースを作り出すのに、香料を何十種類と混ぜ合わせる必要があるのだ。

換気設備がしっかりしているにも関わらず、様々な香りが立ち上って混じり合う、物凄い強烈な匂いが充満しだした作業部屋。

ひたすらにしらみつぶしに棚を当たったユーリが、目的の香料が幾つか見当たらない事を告げると、カルロスは頭を抱えたり前庭に駆け出して花畑から必要なお花を刈り取って来て、お隣の魔法陣が描かれた魔法部屋で、魔法による蒸留作業を行ったりしていた。

ガラスの容器を置いた魔法陣の真ん中に立ち、水蒸気に包まれた花が光に包まれながら空中で舞うようにクルクルと揺れ動き、やがて花は姿を変え大量の液体となってガラスの中へと注がれていく光景には、何か魔術の美しさを益々見た気がする。

花から天然の香料である精油を取り出す為には、何十キロもの花が必要だというのがユーリの地球での知識だが、カルロスは容積を膨張させる魔術？　を駆使する事で、一本のお花から大量の精油を抽出するらしい。道理で、精油抽出用に育てているにしては量より種類な訳だ。

これも、完全に天然モノとは言い難い、魔術を使った合成香料の一種になるのだろうか。

華麗なるパフォーマンスを見たとばかりに感心しているユーリをヨソに、忙しなく調合作業に戻ったカルロスがそのまま放置していった道具類を後片付けしつつ、ユーリはふと室内を見回して懐かしい気分になった。

この部屋は、ユーリがマレンジスにやって来て、初めて目にした場所だ。

無論、それ以前の記憶の彼方に飛んだ幼少期にも召喚されていたのだが、そちらは詳細を覚えていないのだから、ユーリにとってはこの部屋が始まりの場所だ。

カルロスの魔術の発動によって輝いていた魔法陣は、ふうっと光を消してゆく。その光を何気なく追い掛けていたユーリは、部屋の隅っこに小さな箱が置いてある事に気が付いた。近寄ってマジマジと眺めてみると、一抱え程の大きさで長方形の、蓋付きの物入れのように見えるが、魔法部屋に物入れ……何かそぐわない。

この家の場合、開けてはならない類の箱ならば結界によって厳重に閉じられているので、ユーリは好奇心から何気なくその蓋を開いてみる。

作業部屋の強烈な匂いで段々麻痺していた筈の鼻が、煙の匂いを嗅いだような気がした。

青いミニスカートに、襟や袖にフリルをあしらった半袖の白いブラウス、バイト先の制服である薄桃色のエプロンが仕舞われていた。それらの衣服には焼け焦げた跡が目立つが、奇跡的にエプロンのポケットは全くの無傷で、中身を探るとお財布やケータイ、ロッカーの鍵などの貴重品がそのまま入っていた。

「ああ……私、うつ伏せで倒れてたから、ポケットの中身は無傷なんですね」

ケータイを取り出して開き、バイト中はＯＦＦにしていた電源を入れてみた。読み込みの待機状態の後に待ち受け画面が現れた。バッテリーがまだ残っていたのには驚いたが、電波マークが圏外なのはお約束か。

ふむ、と独り言を漏らしつつ、ケータイの電源を切って再びエプロンのポケットに仕舞い、こちらの世界にやって来た際に着ていた衣服と下着を、ユーリは元通り箱の中に戻した。

あの主が、異世界の物とはいえ女性用の下着を、どんな顔をしながらこの箱の中に仕舞い込んだのか、想像すると笑えてくる。まさかとは思うが、シャルにそれを任せていたとしたらどうしよう。

恐らく、火傷の治療を兼ねてユーリを子ネコ姿に変化させたカルロスは、彼女がマレンジスに持ち込んだ私物を全てここに仕舞っておいたのだろう。

後頭部をさすってみるが全く痛みは無いし、肌に火傷の跡などユーリの知る限り何処にも無い。その高い治療効果には心底感心するばかりである。

しかし、主や同僚がユーリの持ち込んだ私物について、一言も教えておいてくれなかったのは、何故なのだろうか。

そんな風に首を傾げたユーリであったが、火傷の治療を終えて子ネコ姿で目覚めた彼女が、自分の着ていた服について全く言及しないので、あの2人は服をここに仕舞い込んだという事を、ユーリに伝え忘れているのではないのだろうかという想像が過ぎる。
意外と抜けているところがある主従なだけに、可能性大だ。

「それにしても……どうしてこれがここにあるんでしょう？」

服が入っている箱の中で一際異彩を放つそれを引っ張り出し、矯めつ眇めつしつつ、ユーリは首を傾げた。
彼女がバイトしていた先の倉庫に、確かにそれは夏の在庫として大量に存在していたし、背中からぶつかった棚も多分、季節商品ラックだったと思う。

ユーリはてっきり、ネコ姿に変えられて身一つで異世界へやって来たのだとばかり思っていたので、元の世界から着てきた服があるなど思ってもいなかったし、おもちゃ屋さんの在庫を巻き添えにして召喚されていたなどと、今まで考えてもみなかった事だ。

「つまり私……バイト先から万引き状態！」
「いつまで遊んでる気だアホネコ！
お前は今すぐ、風呂と夕飯の用意！」

今まで、無遅刻無欠勤、犯罪に手を染めた事など皆無なまっさら人間だったのに！　と、さめざめと嘆くユーリに、ドアの向こうからカルロスの苛立った怒声が飛んできたのであった。

4

ご主人様からせっつかれ、お風呂の支度を調えたユーリは、一番風呂と洒落込んでいた。

グリューユの森にあるおうち、そのお風呂場は裏庭に面しており、のどかな森の情景が眺められる天井付きの露天風呂だ。

裏庭からは風呂場の様子が見えないよう、高い塀がついているし、井戸から頻繁に水を汲んでくるにも近くて便利。何よりも浴槽と洗い場は広々としていて、ゆったりと入浴出来るのが気に入っている。

作業部屋でお手伝いしていたせいで、着ていた服には匂いが染み付いていたし、そんな格好でお夕飯作りというのも遠慮したい。

なので、まずは自分の体を綺麗にしてから調理に取り掛かる事にしたのである。

調香のお仕事というと、作り上げられる品物などから華やかなイメージを抱いていたユーリであるが、現実にはとても強烈な匂いの中で作業しなくてはならない。

本人は麻痺してしまって気が付かなくとも、作業後のカルロスからは色んな匂いが漂っている事もままある。

そんな訳で、バーデュロイでは庶民は公衆浴場の利用が一般的という生活の中、貴族でもなければ自宅に完備されていない風呂を持ち、特に主は愛しのエストと会う前などは念入りだ。

主人の仕事と趣味を兼ねているのか、お風呂場には髪や体を洗う為のシャンプーや石鹸、ツヤツヤに保つ為のトリートメントや乳液などなど、ヘアケアスキンケアに関して充実のラインナップ。

エストから厚意で頂いた一級品の石鹸などもあり、初めてここに足

を踏み入れた際「これが男2人暮らしのお風呂場のアメニティ！？」と、驚愕したのも懐かしい。

トリートメント剤でヘアパックした髪を頭の上でタオルで纏め、お楽しみの広い浴槽につかったユーリは、魔法部屋から持ち出してきた地球からの手土産を手に取ってみた。

「どっからどう見ても、水遊び用おもちゃ、水鉄砲……」

七歳以上対象の商品で、風呂に持ち込む前に剥いだパッケージに記載された仕様書によると、全長４３０ｍｍで最大飛距離は約８ｍ、タンク容量５９０ｃｃの大型系で、タンク内を加圧するポンプを押す回数によって、引き金を引いた際の水の勢いが変化するらしい。加圧を加え過ぎると、タンクが破裂して壊れるので注意が必要である。

まあ、あのまま火事現場に放置されてても燃えただけだろうし、持って来ちゃったものは仕方がないよね！　と気を取り直し、早速遊んでみるべく風呂場のお湯をタンクに詰め、ポンプを一回押して引き金を引いてみた。

チャキッ！　と、格好をつけて水鉄砲を構えてみたものの、発射口からはチョロチョロと滴り落ちていくばかりなお湯。

「あら、加圧ってどれくらいが丁度良いんですかねえ？」

などと独り言を漏らしつつ、ポンプをしゃこしゃこと動かしてみる。と、そんなのんびりとしたバスタイムの最中に、

「もう、鼻がおかしくなりそうですよ、全く……」

などと愚痴りつつ、器用に風呂場のドアを開け放つイヌバージョンのシャルが突如……

「って、えええ!?　私まだ入ってますー!?」

「ぶぶっ!?」

ユーリは反射的にドアの方へと水鉄砲を向け、銀色の塊に引き金を引いた。

先ほどのジョウロを傾けた程度の勢いの無さから、容赦なく飛距離８mの本領を発揮した水流が、乙女の機微など全く気が付かない天狼さんの鼻面に降りかかった。

「私がまだ使用中ですよシャルさん!?」

「ユーリさん、わたしは今、自分の体から発せられる悪臭のせいで、酷い頭痛さえする状態なのですが?」

慌てて浴槽に肩までつかって身を隠すユーリと、毛並みからポタポタと雫を零しつつ、憮然とした声で反論するシャル。

いかにも、ユーリが長風呂をし過ぎているせいで、多大なる迷惑を被っているのはこちらの方だと言わんばかりである。

確かに、普段のシャルならばユーリの水鉄砲攻撃など、狭い屋内というハンデを差し引いても簡単に避けてしまえるかもしれない。

顔面からまともに食らったという事は、それが出来ないほどに今のシャルは弱っている、という証明な訳で……

「ネコだろうが人間だろうが、ユーリさんはユーリさんですよ。

マスターに肌を晒す事を恥じらうのは理解出来ますが、わたしにまでそんな感覚を覚えられて今風呂場から閉め出されると、わたしはこの頭痛に苦しむ事に……」

ううっ、気持ち悪い……などと呻きつつ、ヨタヨタとした足取りで浴槽に歩み寄られ、ユーリは待ったをかけた。

「分かりました分かりました！
お風呂使って下さって構いませんが、まずは体を洗ってからにして下さいっ。お湯が汚れます！」

「では……」

ユーリの言葉にもっともだと頷いたシャルはおもむろに目を閉じ、その体が光……

「変わっちゃダメぇぇぇ！」

その些細な仕草に、シャルが何をする気なのかにハッと思い至ったユーリが慌てて水鉄砲を放り出し体当たりを仕掛けると、驚いて集中が解けたのか、変化する事なくシャルはイヌバージョンのままだ。

「人間バージョンになっちゃダメですシャルさん！」
「この姿では、自分の体が洗えないのですが」
「ダメと言ったらダメなんです！」

非常に億劫げに文句を口にするシャルに、ユーリは頭の中が混乱して、上手く自分の心情を口にする事が出来ないでいた。

シャルにとっては、ユーリがネコの姿だろうが人間の姿だろうが大差はなくとも、ユーリにとっては違う。
子ネコ姿で衣服を纏わずにいる事にさほど抵抗が無いように、イヌバージョンのシャルが何も身に着けていなくとも『そういうものだ』で済ませてしまえる。

しかし、本来の人間の姿で肌を晒すなど恥ずかしいし、人間バージョンに変化した直後でシャルで真っ裸なのも、非常に困る。

今現在も、シャルの変化を止めるべく浴槽から出てきたせいで、恥ずかしくてたまらず、彼の琥珀色の双眸から反射的に体を隠そうと……

――森崎さんってさ、野々村君をストーカー呼ばわりしてるんだって。

――ええ～、何ソレ、ひっどー。事実無根じゃん。

――自意識過剰だよねー？　野々村君、ホント困ってたよ。

――偶然目が合っただけで、悲鳴上げられたんだって。

――やだやだ、『世の中の男はみ～んな、あたしに気があるの！』とでも、思い込んでるんじゃない？

――うわ、それサイアク。

勝手に脳裏を駆け巡った声に、ユーリは俯いてダラリと力なく腕を下ろした。

彼女がとてつもなく気にしているだけで、シャルは異種族のユーリの裸体になど、何の興味も関心も抱いていない。

せいぜい、恥ずかしがって怒るユーリを滑稽だと嘲笑う程度で。

「どうして急に泣きだすんですか、ユーリさん？」

頬に温かいものが滑った。

鋭い牙の隙間から伸ばされた舌が、ユーリの頬を伝い落ちた涙を拭い取ったのだろう。

肉食獣の舌はザラザラしているものだが、天狼は人間と同じくネコよりも唾液が豊富なのか、舐められてもさして痛くはない。

「ちょっと嫌な事を思い出しただけですよ。
シャルさんが急に舐めたりするから、びっくりしてもう忘れちゃいました」

空笑いを浮かべると、シャルは訝しんでいるのか目を細めてユーリの顔を見返してくる。

「ほらほらシャルさん、私が体を洗ってあげますから、洗い場に横になって下さい」

追い立てるように急かすと、彼は大人しくのっそりと動き、ユーリのされるがままになる。
体を洗う為のブラシと、大量のお水とお湯を使って毛並みを洗ってみるが、こんなに大きな動物さんをお風呂に入れるなどした事が無いので、何かぎこちない。おまけに、鋭い爪に触れでもしたら、ユーリの肌など簡単にすっぱり裂けてしまうだろうから、どうしても動きは慎重にならざるを得ない。

「シャルさん、どの石鹸を使います？」
「……白いケースに入っているのを使って下さい」
「は～い。どこか痒いところはありませんかー？」

意志疎通が出来るシャルは、普通のペットとは違い、実に大人しく洗われてくれるので、顔や頭、尻尾などはブラシを使わずに素手で洗ってやっても、嫌がって暴れる素振りも無い。
翼はどうやって洗えば良いのだろう？　と、疑問に思うものの、シャルの指示は「乱暴に扱わなければそれで良いです」という、とてつもない適当さ。
水に濡らしても大丈夫、という保証は受けているが、畳まれた翼を慎重に手で広げてそーっとお湯をかけてやる。

シャルの翼は、やっぱり羨ましいと感じるユーリである。

「うふふ、シャルさんの毛並みってモフモフしてますね～。私、ちゃんと人間の姿でイヌバージョンのシャルさんと対面した事が無かったから、すっごく気になってたんですよー」

「そうですか。ユーリさん、もう少し下の方を……」

「よしよし、ここですか～うりうり～」

泡でモコモコ状態のシャルの毛並みを、手で揉むように洗ってやり……いやむしろ、ユーリがシャルの毛並みを撫で回してみたいという衝動に駆られた結果なのだが、洗われている方の銀狼さんも、なんだか目を細めて気持ち良そうである。

泡を流すべく、頭からお湯をざぶざぶと被せてやれば、ぶるぶると体を震わせて水滴を飛ばすシャル。

……な、なるほど。主がシャルさんを『イヌ』だと強固に主張する理由が、何となく分かったような気がします！

うっかり間近にいたせいで、その飛んだ水滴を被ってしまったユーリは、何故だかクスクスと笑みが零れてくる。

「ああ、やっと湯につかれます。全く、マスターももう少しイヌ使いが荒くない方ならば良かったのですがねえ」

濡れそぼったせいで、毛並みのモフモフっぽさが減じて見た目が少しスリムになったシャルは、襲い来る悪臭からは解放されたのか、軽い足取りでざぶんと浴槽に突撃し、湯から顔を出した状態でご満悦。

どっ、どういう光景なんでしょうか、これは。
大型の天狼さんがつかるお風呂……なにこのほのぼの感!?

そーっと彼のお隣にお邪魔してみたユーリは、思わず湯の中でたゆたうシャルの毛並みを指で梳いてみたり、腕を回して首の辺りに抱きつき、頭のピンと立った三角形な耳をむにむにしてみたり……

「……さっきからわたしをつつき回したりして、いったい何がしたいのですか、ユーリさん?」
「ハッ！　す、すみませんっ。
無意識のうちに触れたくなっていたようです！」
「……マスターといい、人間は皆そうしたがる生き物なのでしょうか……」

バスタイムを共にし、体を洗ってやって一緒の浴槽に並んでつかる、などという『ただの同居人の人間同士』という関係ではまず有り得ないだろう状況。
例えて言うのならば仲良しの飼い主と飼い犬状態だが、あの動物大好き主を差し置いて、自分がイヌバージョンのシャルとお風呂に入っていても良いのだろうか?
ユーリの脳裏に、ちょっぴり拗ねるカルロスの姿が浮かんでしまい、益々笑えてくる。

「そういえばユーリさん。
先ほどわたしの顔にお湯をかけてきましたが、あなたは水系の魔術が使えたのですか?」

シャルの何気ない問いに、ユーリはええと……と呟きつつ、辺りを見回した。

浴槽を横断して底を探り、沈んでいた水鉄砲を持ち上げる。

「私は魔法なんか使えませんよー。これはですね、水を勢い良く吹き出すというおもちゃなのです！」

じゃじゃん！　と、もったいぶって水鉄砲を頭上に掲げ、首を傾げているシャルに実演して見せてやるべく、森の方に向けて構え……引き金を引くと、勢い良く射出されたお湯が、遠く離れた枝葉に当たって揺らした。

そして即座に振り返ったユーリは、ほう、と、感心したような呟きを漏らすシャルの顔面に照準を合わせ、引き金を引く。

「ぶぶっ！？」

「ふふ～ん。油断大敵ですよ、シャルさん」

不意を打って見事に同僚の鼻面に命中させたユーリは、えっへん、と得意げに胸を張る。シャルは憮然とした様子でそんな彼女を見返しつつ、

「面白そうなおもちゃですね……ええ、殺傷能力はこれっぽっちも無さそうなおもちゃですが」

何かを含んだ台詞を吐きつつ、顔面からポタポタと雫を零しつつ、如何にも『僕はな～んにも気にしてません』と余裕綽々な態度を貫く。

「おもちゃに殺傷能力は必要ありませんもーん。えいえい！」

チャキッと再び水鉄砲を構えるユーリに、

「甘いですね」

シャルは浴槽につかった状態から、斜めに飛び上がってお湯放射を回避するという離れ技をやってのけ、着水と同時にバシャーン！と、派手に上がる水飛沫。

「こんのーっ、シャルさんの辞書には水抵抗の三文字はないんですかーっ！」

「そんな言葉は知りませんね」

連続放射ーっ！　とばかりに、引き金を引きまくるユーリの水鉄砲のお湯攻勢を、風呂場の中をひょいひょいと駆け回って華麗に避けてみせるシャル。

銀の毛並みの天狼さんがジャンプして、空中でくるんと一回転する様は、やけに絵になる。水流は一瞬前までシャルが居た空間を掠めるのがまた悔しい。

「ええい、奥の手、最大速噴射ーっ！」

がしがしとポンプを押し、発射させる水流の勢いを増させて引き金を引く！　しかし、その高速でさえ放射性という性質のせいか、シャルはまるでステップを踏むがごとき足捌きで簡単に避けてしまった。

「簡単に奥の手を見せるなど、まだまだですねユーリさん」

シャルは身体能力の高さを存分に見せ付け、フフン、と、鼻で笑っている。

キーッ！　と、頭に血が上ったユーリが更に彼に向けて水鉄砲を構

え……

“てめえら、風呂場で遊ぶな！
長風呂も大概にしろ！　俺がいつまで経っても風呂にも飯にもありつけねえだろうが！”

突如としてユーリの頭の中に、ご主人様からの叱責が大音量で響き渡った。ユーリはその勢いに驚き、よろめいてしまう。
送られてきたテレパシーにはカルロスの怒気もふんだんに含まれていて、周囲を見回した彼女は一気にザアッと顔が青ざめていくのが分かった。

シャルもユーリも、お風呂場の壁やドア、浴槽や洗い場、塀などを壊したりなどはしていないが、シャンプーや石鹸などのアメニティは洗い場に散乱しているし、肝心の浴槽のお湯は派手に飛び散りまくったせいで、半分以下に減っている。

カルロスから同じテレパスを叩きつけられたらしきシャルが、そろそろ……と、さり気なく風呂場から逃げだそうとしているその後ろ姿を視界の端に捉え、ユーリは迷わずその尻尾をガシッと掴んだ。

「どこに行くつもりですか、シャルさん？
一緒にお片付けして、急いで新しいお湯を張りましょうね？」

ユーリの笑顔でのお誘いに、シャルは深々と溜め息を吐いた。

「仕方がありませんね。
分かりましたから、尻尾は放して下さい」

5

ただ今、グリューユの森の木陰からこんにちは、なユーリです。

「よし、上手く視界を封じたか！　お前はそのまま下がってろユーリ！

シャル、採取し終えるまで押さえつけてろ！」

「は、はい」

「イエス、マスター」

イヌバージョンのシャルさんが、目を押さえて暴れ回る巨大な獅子的な容姿のモンスターを押さえつけ、主がモンスターの背後に回り込みました。

役目を終えた私は、手にしたマイ武装であるアサルトライフル……すみません、嘘です。いかに両手を広げたよりも大きいサイズで連続放射可能な品でも、その実は単なる水鉄砲です……を下ろし、びったりと木の幹の影に避難中です。

そして、主と同僚の奮闘の様子を見守りながら思うのです。

……これって、調香師の仕事とは違くね？　むしろ冒険者に依頼するべき内容じゃね？　と。

ユーリは周辺の様子をびくびくと窺いながらも、こんな状況に至るまでの出来事を思い出していた。

急いで主の為に新しくお風呂を入れ直した使い魔達は、続いてお夕飯の用意に取り掛かった。

お風呂やお夕飯の支度の為、人間バージョンに変わったシャルの姿に、ユーリは思わず何歩か距離を開けてしまう。
そばに近寄られたら飛び退いてしまうし、照れが先に立って、彼の顔もまっすぐ見上げられない。

い、イヌバージョンのシャルさんには、思わず抱き付いたりしたくせに……私ってば。なんて分かり易い挙動不審さ！

初めて会った時、人間バージョンだったから？
天狼の姿が本性だと教わっても、シャルはシャルだから？
何故、異種族の獣である彼に好意を抱いていられるのか。そして何故、天狼の姿をしたシャルの方が、ぐるぐると回る余計な感情抜きで好意だけを覚えていられるのか。

お夕飯を作りながらも、ユーリの頭の中は自分の心でありながら分からない事だらけで。とにかくシャルと何を話したら良いのかが分からない。
チラリと、彼女の傍らで調理中な同僚へ視線をやっても、全く気にした様子もなくテキパキと作ったおかずをお皿に盛り付けている。

イヌバージョンのシャルならば、彼の姿に惹かれたり焦がれたりするお嬢さんは、彼と同じ種族の女性ばかりになるだろう。しかし、今のところマレンジスの人間の中で暮らしているシャルは、同族からは離れた状態だ。こちらの世界の狼とも、お目にかかる機会はそうそう無いのではないだろうか。
だがこれが人間バージョンとなると、お嬢さん方との接点も生まれる訳で……

シャル本人からしてみれば、人間の女性にたいして微笑みかけたり、甘い囁きや褒め言葉をかけたりするのも、愛玩動物を愛でるという

程度でしかないのかもしれないが、それを言われた当の娘さん方にとっては、シャルは立派に『異性』だ。

乾燥させた何かの野菜らしき干からびたブツを、包丁で何か楽しげに細かく切り刻むシャルを横目で見やって、ユーリは溜め息を吐いた。

ユーリも彼を異性として認識したのは、シャルが人間バージョンの姿を持っていたりするからなのだろうか。ずーっとイヌバージョンであったなら、こんな風に嫉妬で頭の中をぐるぐるさせたりする機会はそうそう訪れなかったに違いない。

……シャルさん、ずーっとイヌバージョンでいてくれたらなぁ……

再び無意識のうちにユーリの唇から溜め息が零れ落ち、キッチンにはシャルの操る包丁がまな板にダンッ！　と叩き付けられる音がやけに大きく響いた。

3人でお夕飯を取り、ユーリを子ネコの姿に変えた上にイヌバージョンのシャルにも共に添い寝をさせ、短い仮眠をとったカルロスは、夜も遅いうちから起き出して再び調香作業に取り掛かった。

まだ眠たいまなこを擦って起き上がろうとするユーリには、「お前はまだ寝てろ」と言い渡し、部屋を後にする主。

ユーリは寝ぼけた頭で主と同僚の背中を見送り、再びこてんと寝藁の上に倒れ込んだ。先ほどまで枕代わりにしていた、もふっとした柔らかな肌触りで温かな銀色の毛皮が無くなり、小さく身を震わせて丸くなった。

夢うつつの中で、翻るのは銀色の……

ぐっすりと寝入り、目を覚ましたユーリは寝藁の上に立ち上がって、朝日を浴びながらくぁ～と欠伸を漏らした。

“ユーリ、起きたか。
元に戻すから、服着てこっちに下りて来い”

寝ぼけてぼんやりする頭の中に、カルロスからのテレパシーが飛んでくる。
ご命令に従い、朝の支度を調え階下に下りてゆくと、何やら目が据わっているご主人様が、階段のど真ん前で仁王立ちされていらした。
その背後には、朝っぱらからいつもの何を考えているんだか分からない笑みを浮かべた同僚も控えている。

「おはよう、ユーリ。
さ、出掛けるぜ？」
「は？　あの、オハヨウゴザイマス。唐突に何事でしょう？」
「ハーハハハハハ！」

首を傾げてカルロスを見上げると、睡眠不足とストレスと過労でどこかハイになってしまわれている主は、突如哄笑なされた。

「ちょっぴり隠し味に加えようとした貴重な香料が、探しても探しても見つからねえと思ったら、原因思い出した。
この前、どこぞのアホネコが掃除中にすっ転んで駄目にしたうちの一つだこの阿呆っ！」
「え、あ、う、スミマセン……」

お陰で仕事が進まねえよとばかりに、ギロッ！　と睨まれ小さくなるユーリに、しかしご主人様は「過ぎた事は仕方がねえ」と、やけに鷹揚に頷かれる。

「だから……狩りに行くぜ」

そしてやけに爽やかな笑顔で、ポムとユーリの肩を叩いた。

「香料材料のお花狩りですか？」

「嫌ですねえ、ユーリさん。狩りと言えば、もちろん植物が目的ではありませんよ？」

シャルは手にした皮袋の中に手を入れ、中身の謎の赤い固形物をザラザラと確かめつつ、柔らかな笑みを浮かべて訂正してくる。マレンジスの大陸共通語では、どうやら日本語の『紅葉狩り』や『イチゴ狩り』感覚で翻訳して発言すると、意味が通じないらしい。

「良いか、ユーリ？　この世の中、香料の原材料は花や果物ばかりじゃねえ。魚介類や苔、樹木を始め……動物や魔物からも採れる！故に、これから俺達は狩りに向かう！」

「あの、私は明らかに足手まといですし、遠慮したいな～、なんて……」

後退る逃走派なしもべに、ハハハハ！　と、明らかにヤケっぱちな笑いを浮かべる好戦的魔法使い調香師なご主人様。

「香料駄目にしたのはお前なんだ。

せ・き・に・ん、とれ！」

「ユーリさん、こんな事もあろうかと、夕べこんなものを準備しておきました」

笑顔がコワいカルロスから身を捩って逃れ、シャルに向き直ると、皮袋を袋ごと差し出された。

というか、シャルは昨夜夜中に起き出して、カルロスのお手伝いをするのではなく、別の物を作っていたとかさり気に暴露しているが、それはそれでどうなんだ。
ついで、お風呂場の脱衣所に置いておいた筈の水鉄砲まで持ち出してきたらしく、腕に押し付けられる。

「手に馴染んだ武器があるなら、まだマシだろう」
「って、私の水鉄砲は武器じゃありませんよ、主」
「打ち出す水が、ぬるま湯だから殺傷能力が皆無なのです。ならば、中身の水そのものを毒水に変えてしまえばよろしい」
「待てコラァァァッ!?」

抱え直した水鉄砲のタンクの中に、勝手に危険物を詰めたのかと怒りを露わにするユーリに、しれっととんでもない発言をかましたシャルは、実にわざとらしい仕草でうるさそうに耳を塞ぐ。

「ユーリさん、人の話は最後まで聞きましょうね?
その『ミズデッポー』の中身は、まだ空っぽですよ。わたしは、それのどこにどう水を詰め込むのか、知りませんし」

そしてシャルは皮袋の方を指差し、小さな赤い錠剤を水に溶かして使えば良い、との説明を受けた。
水に浸ければ完全に溶けてしまうので、目詰まりする心配も無い。
牽制に使う分には十分な威力は保証すると笑顔で言い切る、本性は天狼さんな先輩様。

「いったいいつの間に、そんなの作ろうだなんて……」
「夕べご飯を作ってた時に、ブート・ジョロキアの干物がキッチンの棚の奥に仕舞ってあったなあ、と、ふと思い出しまして。
どうせ誰も食べられやしないのですから、それならいっそ遊び……

もとい、武器に転用した方が面白……もとい、有益ではないか、と」

ユーリはふと思い出す。

そういえばシャルは昨日、お夕飯を作るユーリの隣で、包丁を楽しげに閃かせながら謎の干物をみじん切りにしていたが、それが結局どうなったのかは見ていない。

「……シャルさん、人がご飯を作ってる横で、そんな物を刻まないで下さいよ……」

「うちのわんこはどうしてこう、微妙な方向への悪戯には無駄に情熱を傾けられるんだか……」

カルロスは、粉末にして水にサッと溶ける錠剤にする作業を、魔術で手伝わされたらしい。ただでさえ忙しいお仕事の最中にそんな事を引き受けたのは、思い通りの香りを出せない作業の現実逃避だろうか。

呆れたような主人と同僚の眼差しは丸無視して、渡す物を渡して人間バージョンでいる用は済んだのか、サッサと物陰にすっ飛んで行ってイヌバージョンに戻ったシャルは、『早く使って使って』と言わんばかりに目を輝かせている。

仕方がなく水筒と水鉄砲と皮袋を手に井戸に足を向けたユーリは、水を汲み上げた桶から水筒とタンクに水を詰め込んだ。

ユーリの後を付いて来たシャルは、尻尾を振って心なしかワクワクとした眼差しで水鉄砲を凝視している。

「……入れるのは一粒で良いですよね。……なんでこんなに錠剤がたくさんあるんです？」

「刻んだブート・ジョロキアを全て錠剤に変えて頂いたら、そんな

にたくさん出来たんですよ」

タンクに落とした錠剤が溶けだす前に、ユーリは水鉄砲にタンクをセットした。

目に突き刺さるような痛みを伴う刺激的な匂いはしてこないが、ユーリが脳内で勝手に『ブート・ジョロキア』と翻訳したマレンジスの唐辛子の一種も、イメージ通りにかなりヤバい代物だったらどうしよう。

水筒と素入り皮袋を腰に下げ、水鉄砲だけを手にした軽装のユーリは、作業着のままで箒と謎の棒を手にしたカルロスと、イヌバージョンのシャルに連れられて、初めてまともにグリューユの森へと足を踏み入れた。

この森は領主が狩りを行ったり、付近の住人が薬草やキノコの採集に足を踏み入れる事もあるそうだが、広大な森の奥地には魔物が生息する危険な場所でもある。

そんな奥地の家に結界を張って住んでいる魔法使い様と使い魔その一は、作業部屋に引き籠もってのお仕事から一時でも解放された事がそんなに嬉しいのか、朝日の差し込む森を軽快に歩いてゆく。

ユーリは張り出した木の根に躓かないよう気を付けつつ、彼らの後を懸命に付いてゆく。周囲の景色は、鬱蒼と生い茂る……というほどの密林でもないが、景色には殆ど代わり映えがしないのでユーリは簡単に迷子になりそうだ。

と、カルロスが不意に彼女を振り返った。

「ユーリ、空を見てみろ。太陽は見えるだろ？」

「はい」

「この森は空が見えるから、方角の検討は付けやすい。家からこのまま真っ直ぐ東に向かうと、川にぶつかる」

カルロスの解説に、ふんふん、と頷いて聞き入るユーリ。よーく森の様子を見てみると、目立つ大きな樹にはカルロスやシャルが予め付けておいたのであろう目印があったり、耳を澄ませれば川のせせらぎが聞こえてきたりする。

「それから足下な。ぱっと見には分かりにくいが、この森の中での俺やシャルの行動範囲では、今歩いてる場所と同じように進みやすいように下生えを踏み倒したりして、道が出来てる」

言われて足下に視線を落とす。ユーリには違いなぞさっぱり分からないが、今歩いているところは道無き道として目印になるらしい。脇のぼうぼうに丈の長い草が生えた茂みを眺めてみると、確かにこちらの方がまだしも歩きやすそうだ。

「それでシャル。例のライオネル君はどこに居るか分かるか？」

カルロスが傍らをのっそりと歩くシャルに問うと、彼は鼻面を持ち上げてくんかくんかとしばし匂いを嗅ぐ。

「川の向こう側から、それらしき匂いがします。水の匂いで、正確な距離は測れませんが」

「ふ、まだこの近辺を縄張りにしているとは愚かな獅子め。よしシャル、先に行って水辺に引きずり出して来い！」

「イエス、マスター」

カルロスの指示に従い、シャルは楽しげにダッと森の中を駆け出し

て、あっという間に枝葉の向こうに見えなくなってしまう。……もしもしお兄さん。そんなに好きですか、狩り？

「さあてユーリ、少し急ぐから、お前はしっかり付いて来いよー？」

「え！？」

そんな一言と共に、カルロスもまた、ユーリに合わせていた歩みの速度を上げて足早に森の中の道を駆け出す。

内心大慌てしながらも、足の踏み場もない道ですっ転んで1人だけ置いていかれやしないかとヒヤヒヤしつつ、どんどん遠ざかってゆく主人の背中を懸命に追い掛ける。

木の根っこや枝葉、伸びた雑草の洗礼を振り切りなんとか置いてきぼりにされずに抜けた道の先、美しくも透き通った水が流れる川が、朝日を浴びてキラキラと輝いていた。濃い緑色の葉っぱと青空を反射して映す水面は心が洗われるようで……

そう、その向こう岸で、大声で吼えて威嚇するデカい獅子型モンスターと、組んず解れつ牙や爪を閃かせているイヌバージョンのシャル、なんて光景が見えなければ、もっと牧歌的な眺めであった筈なのに。

「巨大肉食獣、二大対決……」

「俺は向こう岸に飛ぶから、ユーリはシャルが距離を取った隙をついて、ここから奴の目を潰せ。外しても構わんが、シャルには当てるなよ」

唖然としながらそんな光景を眺めているユーリに、箒に横座りして腰掛け器用に滞空していらっしゃるご主人様から、そんな指示が飛んできた。

「えええっ！？　ちょ、主、私はスナイパーではないのですが！」
「夕べ、風呂場でシャルを相手に射撃練習していた奴が何を言う。俺がやれと言ったらやれ、アホネコ」
フンと鼻を鳴らしてご主人様権限を振りかざしたカルロスは、箒に乗ったまま滑らかに川の上空を移動し、
「シャルー、ユーリが早速お前が作った毒薬使うから、隙を見て距離取れー」
前衛で奮戦中な天狼さんに勝手に指示を出している。
慌てて水鉄砲を構えてはみたものの、縦横無尽に動く的に上手く当てられる気が全くしない。
主、シャルさん。私、やっぱり攻撃とか無理っぽいです。
手にした武器がおもちゃの水鉄砲ってのも、なんの冗談ですか？
今から木陰に隠れちゃダメですかーっ！？
だがしかし、内心ひーんとユーリが嘆いている間に、じゃ、後はよろしくと言わんばかりにシャルは後ろ脚で『ライオネル君』を蹴りつけて、華麗なる回転を披露しながら飛び退くヒットアンドアウェイの戦術。
全力で蹴り飛ばされた巨大な『ライオネル君』は、衝撃でのけぞって一瞬だけ動きが止まっ……
「うえええん！」
自分の射撃の腕前で当てられるとしたら今しか無いと、頑張って獅子に照準を合わせて構えていた水鉄砲の引き金を引く。
とにかく、直撃はしなくとも口や鼻で吸い込むか目に入れば！　と、

ヤケっぱち気味に連続してユーリが放射した、何かヤバそうな赤い液体は、『ライオネル君』の目に見事に命中したらしく、獅子は物凄い咆哮を上げて地面をのたうち回る。

「あ、当たった……？」

ホッと安堵の息を吐きつつ、ユーリはコソコソと手近な木の陰に身を翻して隠れて川向こうの様子を窺う。

「よし、上手く視界を封じたか！　お前はそのまま下がってろユーリ！」

シャル、採取し終えるまで押さえつけてろ！」

「は、はい」

「イエス、マスター」

目を押さえてのた打つ『ライオネル君』の背後に、嬉々として回り込んで降り立ったカルロスの指示に従い、押さえ込みにかかるシャル。

少し浴びただけなのに、大型モンスターがあんなにもがき苦しむような毒薬を、『面白そうだから』なんて悪戯心で作ってみるというのも、どうかと思うユーリである。

「ハハハハ！　貴様のタマ、頂きだーっ！」

「あ、主……」

金髪碧眼美青年な紳士にあるまじき、イエローカードな発言をかましながら、カルロスは手にした棒の先端を……『ライオネル君』の背後から、お腹の辺りに突っ込んだ。哀れな獅子は、「ギャンッ！？」と悲痛な叫びを上げつつ、這々の体で逃げてゆく。

その様子を窺っていたユーリは、背中に冷や汗が伝ってゆくのを感

じた。

嗚呼。こんな光景はエストお嬢様には、とてもではないが見せられない。

どっちが狂暴モンスターだか分からないような行状、カルロスはヘラのようになっている棒の先端を持ってきた袋の中に詰め、箒に乗ってユーリの傍らに飛行してきた。

「あの、主……ライオネル君から採取出来る香料って」

「嗅いでみるか？」

そう言って、カルロスが広げてみせた袋の口に鼻を近付けてみたユーリは、慌てて顔を背けた。

「臭っ！？　何ですかこれ！？」

「あのモンスターの香嚢の分泌物。香嚢ってのは……」

「聞きたくないです！」

真顔で解説してくれようとするご主人様の話を、失礼は承知の上でユーリは敢えて遮った。

「そうか。

これはこのままだと臭いだけだが、希釈すると良い香りになるんだな、これがまた」

「……あの、主。動物から取る香料って、みんなそういった部位から……？」

「全てとは言わんが、まあ似たようなもんだな。

お前の世界の『ムスク』も、ありゃ匂いからしてそうだろ？」

「……」

天国のお母さん。どうやらあなたの娘は今日、知らない方が幸せに過ごせる類いの世の中の知識を、偶然にも知ってしまったようです。

記憶と匂いが共に蘇るのならば、この香料を希釈した物を嗅いだ際、今後は嫌でも『ライオネル君』の姿を思い出すに違いない。

茫然自失したまま虚ろに視線をさ迷わせたユーリは、川の中でバシャバシャと水を跳ね飛ばして溺れかけている（？）銀色の塊を捉えた。

「主、大変シャルさんが！」

「なっ……どうしたシャル！？」

急いで川べりに駆け寄る主人と後輩に、シャルは川の中から虚ろな眼差しを向け、

「唐辛子が……口に入ってズキズキします」

「……このアホイヌがっ！

自分で作った毒薬の巻き添えを食うな！？」

空中に散布された激痛を引き起こす辛味成分を、うっかり吸い込んでしまったシャルは、しばらくの間川の中で懸命にうがいをしていた。

唐辛子毒水放射は、御披露目されたその日に封印される事となった。

5（後書き）

激辛唐辛子で有名なハバネロではなく、敢えてギネス認定のブート・ジョロキアで。

実際には、魚介類やお肉の類いを除くと、天然の動物性香料は４つあります。

・ムスク＝麝香　（じゃこう）：ジャコウジカ（保護動物です）
・シベット＝霊猫香　（れいびょうこう）：ジャコウネコ
・カストリウム＝海狸香　（かいりこう）：ビーバー
・アンバーグリス＝龍涎香　（りゅうぜんこう）：マッコウクジラ（クジラも保護されています）

手に入りにくい、ワシントン条約で規制されているなどの理由から、以上の香料は一般的には合成香料が流布しています。
……昔は本当に、雄の香嚢などから取り出してたんですよ……
クジラは腸内で出来た結石が香料に。つまり、病気で出来たやつですね。

閑話　ご主人様から見たわんことにゃんこ　そのさん

あの『ライオネル君』は、うちのわんこに敵対心や反抗心でも燃やしているのだろうか？
幾度香料採取の憂き目に遭っても、断固として縄張りを移そうとしねえし、シャルの挑発に簡単に乗って水辺におびき寄せられ、取っ組み合いの喧嘩をするし。

目的のブツを無事に入手し、森から帰ってきた俺とユーリは、自宅の調香作業部屋に居た。
シャル？　あのアホイヌは相変わらず「口の中が……鼻が、目が……」とか言いつつ風呂場だ。
てめぇ、まだ仕事は残ってんだぞオラ。

香嚢になすり付……採取するべく使用したヘラに付着した香料に、いつものように術を掛けて嵩増しし、溶液で希釈。
この香料はどことなくエキゾチックであり、嗅ぐとふんわりと包み込んでくるような温かみ、それでいて全てを見通せない神秘的な気持ちにさせる。香水にするならば人気の高い香料だ。
相変わらず良い匂いだな『ライオネル君』、さてはお前メスからモテモテだろう。

香水が揮発していく際、ミドルノートでこの香りは変調剤の役割を果たす筈だが……おっと、

「ユーリ、これが『ライオネル君』の香料そのままズバリ、ライオネルだ」
「……そのままズバリ過ぎではないかと思うのです、主」

調合前のそれを嗅ぎ込んだにゃんこは、どこか虚ろな眼差しを明後日の方角へと向け、

「良い香りですね。
ええ、神秘的という単語について審議して頂きたいと、小一時間」

謎の呟きをボソボソと囁く。
そしてふと、にゃんこはカルロスを振り仰いできた。

「それで主。このライオネル君のライオネルを、依頼品の香水に使うと？」
「おう」
「……夜会でその香水を身に付けるのは、ご令嬢方なんですよね、きっと？」
「おう」

カルロスのしっかりとした頷きに、にゃんこは顔を押さえ、くっ！
と呻く。
そんな彼女に、基礎的な調合作業を教えてやりつつ。

「使われている原材料の中に、獅子型モンスターのブツから分泌された香料が使われた香水……イヤ、私なら絶対にイヤ……！」
「何を言う、ユーリ。
哺乳類生物の天然動物性香料、好む顧客が多いぜ？」
「それなら主は、動物とはいえオスから分泌された香料を使った香水を、エストお嬢様にプレゼントしたくなりますか！？」

むむ、と眉をしかめながらも、カルロスの指示に従い、正しい配分で香料を調合してゆくユーリ。

エストに贈りたくなるか？　と尋ねられればそれは勿論……

「絶対にごめんだな」

「ですよねー」

「エストを彩る香りには、俺だけがあれば良い。他の男は要らん」

「……あ、主の口から独占欲丸出し発言が……

ヤバいです主。うっかりあなた様を崇め奉ってしまいそうです」

俺の正直なところを口にしてみたところ、にゃんこはやたらと嬉しそうに目を潤ませ、頬を染めて笑みを浮かべている。

ご主人様への忠誠心を増すのは大いに結構だが、そういう顔はシャルに向けてやれ。あいつがまた拗ねる。

どうもユーリは、分かり易く直接的な言葉を駆使したアプローチを殊の外好むようだ。

自分にたいしてだけではなく、周囲の色恋沙汰でもそんなやり取りや駆け引きの方を好ましいと感じるらしい。

まあ、マレンジスに再召喚される羽目になった原因が原因だしな。

あんな、散々後を付け回した挙げ句に見当違いに詰ってくるような、気色の悪い男から逃げ惑った後じゃあ、熱心に熱い眼差しを注いでくる寡黙な男なんざ、関わりたがらないか。バーデュロイの気風だと、そんな奴が結構多いんだが……見初めて、親御さんや主人に許しを願い出るのが普通で。

……ユーリと交際したいだとか、あまつさえ嫁に欲しい奴は、俺の許可が必要な訳だが……うちのにゃんこの愛くるしさが分からんような生半可な男や、まともに自覚もしとらんようなアホイヌに、娘は断じてやらん。

「ユーリは余所に行くより、ずっとうちに居る方が良いよな？」

黙々と、教わったベース調合の作業に集中していたにゃんこは、カルロスの唐突な問い掛けに、顔を上げて小首を傾げた。

「余所とうちですか？　どちらかというと、そうですねえ」

「そうだよな」

よし、本人の言質はとった。明らかに、こちらの意図を取り違えているが、そんな些細な事実はこの際無視だ。

“お外に出て嫌な目に遭うより、おうちでお仕事している方がやっぱり安心します～。
シャルさんも主も居ますし”

『主好き好きオーラ』が出ているのは構わんが、何故俺よりもシャルの存在が真っ先に優先されて思い浮かぶのか、にゃんこよ。

嘆息しながらも、カルロスは手際良く必要な香料を混ぜ合わせていく。

香料は、調合したばかりの作りたてと、時間が経って十分に馴染んでからでは匂いが変化してしまうので、調合したばかりのベースは最低でも一日は置いておく必要がある。

香水を作るべく、書き起こした処方箋通りに調香した香料も、十日程度日にちを置いて馴染み具合を確認しなくてはならない。

が、その時点でイメージにそぐわないからと、作り直しや香りの調整をしていては、とてもではないが依頼の期日に間に合わない。

「ったく、どいつもこいつも仕事が早いからって、厄介な緊急依頼を押し付けやがって。

俺だってゆっくりじっくり経過を確認したり、時間に余裕を持って仕事を受けたいっつの」

そこでカルロスの特技である魔術が活かされる。
隣室の魔法部屋に移動して、作り上げた香料を小さな結界の中に置き、含まれている水に干渉してより短時間で香料が馴染んでゆくように調整してゆく。

カルロスがバーデュロイに住まう調香師の中でも『仕事が早い』との評判を受けているのは結構な話ではあるが、それだけを期待されて名指しというのも、あまり嬉しくはない。

「おお～、もう香水が出来てる。本当に主の結界術は、何でもありなのではないでしょうか」

ご主人様が魔法部屋に移動した後を付いて来たにゃんこは、背後から拍手と共にそんな皮肉だか賛辞だかを寄越してきた。
仕事で欲しいと思う機能が、実際に使えるように結界術を工夫したからこそ、普段便利に利用しているのだが……

だからって、魔術は万能って訳じゃねえぞ？
まあ、まさかの魔力ゼロ生物な我が家のにゃんこに、魔術理論を教えてやる気は全く起こらんが。お前の場合、『まずは自分の中の魔力を感知して、高めましょう』って、最初の段階で躓くからな。

「今日の調合作業はここまでだ」
「実際に香りを確認しなくても良いのですか？」

完成品の一時保管場所にきちんと香料を置き、クルリと振り返って告げるカルロスに、ユーリはきょとんとした表情を浮かべた。

「俺もネコも、朝から調合してばかりで鼻が麻痺してるからな。香りの判別が正確に出来ん」
「だから、鼻を休める為に多少時間を置くんですね。なるほど」

臭覚は疲労するものである。
調合作業中、ずっと同じ香りばかりを嗅いでいると、段々その香りを感じなくなってきてしまうので、そんな状態で納品するに相応しい品質かどうかを検討する事など出来ない。

「つー訳で風呂だ風呂！
ユーリは今すぐ井戸に行って、新しい水を汲んでこい。
俺は、相変わらず風呂場に居座ってるアホイヌを引きずり出してくる」

そんなカルロスの言に、にゃんこはデカい目を更に見開いた。

「シャルさん、まだお風呂場でブート・ジョロキアの威力にぐったりしてたんですか？
大丈夫でしょうか……」

シャルの名を出され、途端に落ち着きなくソワソワソワソワしだす、バカ正直すぎるユーリを井戸へと水汲みに追い立てて、カルロスは仕事部屋を後にし、ズンズンと廊下を早足で歩いて、風呂場のドアを開け放った。

夕べの残り湯で満たされた浴槽の中に、ぷかりと浮く銀色の巨大毛玉が一つ。

まさかあのアホイヌ、唐辛子で口や目をやられて、痛みで気を失っ

てんじゃねえだろうな。溺れるぞ？

「おーい、シャル？　風呂入るからそこ退けー。まだ痛むなら、治癒の術を……」

呼び掛けながらシャルの鼻面を覗き込んだカルロスは、ハッと息を飲んだ。

「シャル、お前……！」

「申し訳ありません、マスター……唐辛子のせいで、兆候を見落としていたようです……」

浴槽の縁に顔を乗せ、弱々しく囁くシャル。

その銀色の毛並みは艶を失い、鼻は乾いてひび割れ……特に目の損傷が激しい。カルロスは問答無用でわんこの膜を操り、人間バージョンに変化させた。

まだしも安定性が高い筈の青年の姿でも、皮膚はかぶれたかのように赤く爛れていて。シャルは疲れたように、目を閉じた。

「あ、主……」

仕切りである塀の方から、ガッ、バシャッ！　という水音と共に、ユーリの驚いた声がした。

風呂場と裏庭を繋げる、塀に取り付けられたドアを開け放ち、空っぽの両手を体の前に差し出した体勢のまま彼女は固まっている。桶を取り落としたのだろう、せっかく汲んだ井戸水が辺りに撒き散らされてしまっていた。

多少は体重が軽くなったわんこを、浴槽から引っ張り出すようにして背負ったカルロスは、

「水が零れてるぞアホネコ。汲み直して来い」
「しゃ、シャルさんは大丈夫なんですか！？」

平静を装ってにゃんこを遠ざけようとしたのだが、彼女は濡れるのも構わず駆け寄ってくる。
カルロスは素早く頭の中を回転させて、彼女に真実を告げるべきかどうかを……

“彼女には言わないで下さい”

意識が朦朧としている本人から、詳しい事情説明を拒否したがる思念が飛んできた。
全く、手の掛かるわんこである。

「見ての通り、あー、お前の世界にもあるだろう、『アレルギー』？　反応。
どーやらシャルは、ブート・ジョロキアを浴びると、ちょっぴり肌荒れを起こすらしい。治療してやらねえとな」

ユーリはその説明で、大いに得心がいったようである。
人間バージョンであるシャルの裸身を、あまりジロジロと眺めようとしない羞恥心と、更に好都合な事に、彼女の世界では似た症状を引き起こしていて誤魔化せる、有名な病名が存在していてくれて助かった。

体を拭いていないシャルからポタポタと雫が滴り落ちて床が濡れるが、後で気を利かせたユーリが綺麗にしてくれるだろう。
しかし、このわんこはおんぶして運ぶのもやたら重たい。こういう時、シャルの人間バージョンの姿を自分の身長よりも高い青年の姿

に設定した事を軽く後悔してしまう。
とはいえ、本人が『使い易い』と大いに気に入っているので、変更もしにくいのだが。

先ほど出て来たばかりの仕事部屋のドアを開け、魔法部屋に直行してシャルを横たわらせた陣を、治癒の術式で発動させる。
気休めでしかないが、やらないよりはマシだ。

治癒が効いてきたのか、シャルはぼんやりと瞼を開き、何も映していない瞳を虚ろにさ迷わせた。
カサカサに乾いてひび割れ、じくじくと血が滲み出てくる唇が微かに動く。

「マスター……」
「シャル、苦しいんだろ？
あっちに戻った方が良くないか？」

“嫌”

カルロスの提案を、シャルは即座に拒絶する。
弱っているせいで、精神壁が殆どなくなったわんこ。彼の脳裏には、あちら……シャルの故郷の風景が思い浮かんでいた。

二つの巨大な太陽が浮かぶ、雲一つ浮かばないどこまでも青いだけの空。カラカラに乾ききった赤茶色の固い大地が、デコボコした地平線の彼方まで続く。
雑草の一本も生えておらず、どこまで駆けていっても動くモノも草木も何一つ見当たらない、荒涼とした熱気だけが満ちる世界……

“嫌です、あそこにはもう行きたくない”

「そうか……」

どれほど苦痛を伴おうとも、こちらに留まりたいと訴えてくるシャルの声ならぬ声に、カルロスは頷くしか出来なかった。

シャルの身を数年程度の周期で襲うこの現象は、決して『アレルギー』などではない。

どんな術でも永遠に効力が続く事など有り得ないし、結界術を維持する為には、定期的に補修したり新しくかけ直す必要がある。そして、使い魔の身を守る外殻膜もまた、結界術の一種であるからには、補修や張り直しをしなくてはならない。

『本契約』を交わしたユーリは完全にカルロスに属する存在である為、主人からの魔力の浸透性が高い。いつでも簡単に外殻膜の修正が行える上に、カルロスがただ軽く彼女の頭に触れるだけで、外殻膜は勝手に自己修復されてゆく。

しかし、『仮契約』状態であるシャルはその魂を完全にカルロスに従属させた存在ではない。対等であるという事は、馴染まず反発する要素をも内包しているという事。

シャルの外殻膜は決して自己修復などせず、一度全て剥がれ落ちた後に新しく張り直さなくてはならない。だが、時間をかけて中途半端に剥がれ落ちてゆく際に、この世界の空気が容赦なくシャルを苦しめる。

強引に剥ぎ取ってしまえば、それはそれで治りきっていない瘡蓋を無理やり剥がすようなもので、シャルに激痛を与えてしまう。

元の世界に戻れば、外殻膜が剥がれてゆく緩慢なその苦痛からは簡単に解放されるのだが、このわんこの故郷はとてもではないが、骨

休めに気楽に里帰り……なんて環境ではない。本人は本気で厭っているし。

そうなると、こうして治癒の術をかけてやりながら、傍らでわんこに新しい外殻膜を張れるタイミングを待つ事しかカルロスには出来ない。

しかし何を思ったか、シャルが唐突にイヌバージョンに戻った。

「シャル、人間バージョンでいる方が治癒も効きやすいし、完全に外殻膜が剥がれ落ちた瞬間が見極めやすいぞ？」

“嫌です”

またしてもシャルから、思念による拒絶の意志が飛んできた。

最近の我が家のわんこは、もしや反抗期なのだろうか。

“あの姿だと、ぷいっだから嫌です”

意識が混濁しているのか、カルロスに話し掛けているつもりは無いのか、シャルが何を言っているのかいまいち意味が分からない。

わんこの思考を探ってみると、子ネコ姿のユーリがぷいとそっぽを向いていたり、人間の姿のユーリが後退って顔を背けたりしていた。

かと思えば、イヌバージョンのシャルの前脚を枕代わりに寝入っている子ネコ姿のユーリや、満面の笑みでイヌバージョンシャルに抱き付いてくる、人間の姿で真っ裸のユー……カルロスは慌ててシャルの回想録の追跡を終了した。

このアホイヌがっ！　こんな時にいったい何を考えてるんだ！？

いや、シャル的にはにゃんこが服を着ていようがいまいが、頓着し

ねえんだろうがっ。

紳士として、お年頃であるにゃんこの素肌を暴き立てるような真似などせず、着替えや風呂を覗こうなどと考えた事も無かったというのに、予想外のところでにゃんこの真っ裸を目撃する羽目になってしまった。

そして以前予想した通り、彼女の裸身を見ても性的な興奮は全く覚えなかったが、見てはいけないものを見てしまったような、深い罪悪感が。

これはあれか。

あくまでも不可抗力だが、万が一本人に知られたら娘から「ぱぱ不潔！」って嫌われちまう！　つう、父親の心理か？

独身であり、若い身空でありながら、年頃の娘を持つ父親の心情を味わってしまったカルロスは、遠い眼差しを向けながら頭を抱えた。

“脆弱なユーリさんにはこんな痛みなんて、到底耐えられないでしょうし。

彼女には起こらない現象なんですから、知る必要もないです”

「そうか……」

ゆっくりと、眠るように緩やかに意識を失ってゆきながら、わんこはそんな思念を飛ばしてきた。

銀色のデカいわんこの寝顔を見つめながら、カルロスは独り言ちる。

「お前ももう少し、普段から素直になれれば良いんだがな」

何よりも気になるのは、このわんこはそんな風にずっとにゃんこを

気にしまくっているくせに、何故その状態から明白な事実に思い至らないのか、という事だ。
異種族という前提は、そんなに絶対的なものなのだろうか？

そんな疑問からカルロスが小さく溜め息を吐いた時、コンコンと、小さくドアがノックされて、ドアの向こうからユーリが声をかけてきた。

「あの、主。お風呂沸きました」
「ああ、今行く」

チラリとわんこの様子を確認するが、治癒の術のお陰か小康状態を保っており、彼のお腹は規則正しく上下して眠りに就いている。
シャルの目が覚めた時に、カルロスから調香後の強烈な匂いがしていては不快だろうから、どちらにせよ風呂には入っておかなくては。

カルロスが魔法部屋のドアを開けて出てくると、にゃんこはひどく心配そうに室内の様子を覗き込むような仕草をみせた。
その頭に、ポムと手を置いてやると、彼女は素直にカルロスを見上げてくる。

「お前の方は、体調不良なんかは無いか？」
「私は大丈夫です。元気モリモリです」

小声ながら、そんな溌剌とした返事が返ってくる。
にゃんこの外殻膜の表面に見えた、後一年ほどそのまま放置すれば微かなヒビにでもなりそうな、本当にほんの僅かな捩れは、カルロスの目の前であっという間に直ってゆく。

これが、仮契約と本契約の違い、か……

再びシャルの側に付き添ってやるべく、カルロスは急ぎ足で風呂場へと足を向けた。

わんこ・ぶいえす・にゃんこ　ふたたび

手早くお風呂を済ませるなり、シャルの側へと舞い戻っていった主の背中を見送り、ユーリもまたお風呂に入った。
賑やかな入浴であった昨日とは違い、今日は長風呂をする気にもなれなくて、手早く体を綺麗にして早々に上がる。

どうしたって、シャルの病状が気にかかる。
外殻膜に守られた状態でも、少し浴びただけであんな風に肌が赤くなるだなんて、流石は地球でも兵器転用の研究がなされているらしきブート・ジョロキア（的なモノ）。
シャルが特別、あの唐辛子に弱いという事なのかもしれないが、心配でたまらない。

髪を乾かしてからカルロスがシャルを運び込んだ魔法部屋へと、無意識のうちに足を向けていたユーリは、ドアをノックをしようと右手を持ち上げたところで躊躇した。
この部屋の中へと入ったところで、ユーリは寝ているシャルの傍らでオロオロするだけしか出来ない。
それは、シャルの看病や治癒の術を使っている主の邪魔にしかならないのではないのか？

ノックをしかけた体勢のまま立ち竦み、ユーリは煩悶する。
苦しんでいるシャルのそばに、ただ近くに行きたいからと、それだけを考えてこの部屋の中に入ったとして、益々あの同僚から疎ましがられるだけではないのか。
ノブを回せば簡単に開く筈の、目の前にあるドアがひどく重たい。
ゆっくりと、息を吐く。

……しっかりしなさい、ユーリ。
あなたはカルロス様のしもべで、シャルさんの同僚で後輩でしょう！

パンパンと両手で自らの頬を軽く叩いて、ユーリは活を入れた。
同僚が体調を崩している時に彼女がやるべき事は、彼がこなす筈だった仕事のフォローであり、主人であるカルロスのサポートだ。

まだお昼ご飯の支度だってしていないし、今日は家の中のお掃除もお洗濯も済ませていない。
やるべき家事は山積みであるにも関わらず、ただ寝ている病人の横で涙ぐんでオロオロしているだけの、そんなお荷物になんて、なりたくない。

「私……役立たずなんかじゃないもん」

シャルが起きてきた時に、何もしていなかったのかと呆れられたり、益々失望されたりしないように。まずは、ご主人様の為にご飯作りだ。

以前、ベアトリスに連れられて農村の一般家庭にお邪魔した際、キッチンは別室として存在しておりその様子はよく窺えなかったが、カルロスの自宅も、同じように客人からは見えないようにキッチンは家の奥で分離されて存在する。
広間中央にある、暖房器具を兼ねた炉端を囲み調理するという文化ではなく、しっかり調理場としてキッチンは確立されており、煙が室内に充満する事もない。

さて、グリューユの森のカルロスの自宅のキッチンに備え付けられたかまど、その調理器具は要するに寸胴と中華鍋だ。

……紛らわしい言い方であるという事は重々承知しているが、ユーリには鍋であるその調理器具は、固定された中華鍋にしか見えない。鍋底は丸く、鍋の周囲に回りこんだ火の熱も余すところなく利用できる。かまどと一体に固定して作られているので、ごうごうと焚く火は漏れず、熱効率も高い。

「あちっ」

調味料を鍋の中へと滑らせた際に、うっかり鍋の縁に触れそうになってしまい、ユーリは慌てて手を引っ込めた。

この鍋一つで、食材を煮たり炒めたりといった調理を行うのだが、その鍋が固定された位置は、ユーリには少しばかり高い位置にある。底の丸くなった鍋底に食材が入っているのだが、その中身をヘラでかき混ぜ鍋肌を使って熱をしっかり通す、という作業が非常にぎこちない。

ああ、こんな事になると分かっていれば、日本に居た頃に中華鍋を使った料理の勉強をみっちりとしていたのに。

「もしかして私……チビな上に腕が短いのかしら？」

日本でも少し低いかもと感じていた１５０ｃｍという身長は、マレンジスではかなり小さい部類なのだろうか。

悩みながらも、以前、伯爵家のお城から貰って帰ってきたベーコンを薄く切って、卵と一緒に炒めたものを、切れ込みを入れたパンにお野菜と一緒に挟んだ。

因みにパンは、昨日夕食を食べた後にシャルが薪のオーブンで焼いていた物だ。モチモチした食感とは言い難い微妙な固さで、丸っこい形状である。

ナイフもフォークも要らないサンドイッチ。

これなら、シャルの傍で付き添っているカルロスも、気軽に手掴みで食べられるだろう。

「シャルさんも、きっとお腹空かせてるよね」

彼もきっと、簡単に食べられる……と、思うのだが、体調不良のせいで気持ちが悪くなって、お肉や卵は食べたがらなかったらどうしよう。

寸胴の方は取り外し可能な品で、何故かそちらはつまみを調節する事で火加減の調節まで出来る。かまどの中がどうなっているのか、非常に謎だ。

シャルはちょくちょく寸胴を使って、じっくりと何日もかけて食材を煮込むスープの類いを作っているが、しばらく留守にしていたので当然今はその中身は空っぽだ。

シャルお手製の野菜スープがユーリの好物で、あれはサッパリしていて非常に美味しい。

むむむ……と唸りながら、ユーリは3人分のサンドイッチの皿と、お水を注いだカップを乗せたトレーを手に、キッチンから魔法部屋のドアの前に立った。

すう、はあ……と深呼吸をしてから、コンコンとノックをすると、カチャリと小さくドアが開かれた。

「どうした、ユーリ？」

ひょいと顔を覗かせつつ尋ねてきたカルロスは、ユーリが手にしているトレーの上に目を留めて「ああ」と、表情を綻ばせた。

「主、お昼ご飯作ってきました」

「わざわざ持って来たのか。有り難うな」

「はい。あの……シャルさんの具合は？」

またしてもカルロスから頭を撫でられて、何かくすぐったい気分を覚えつつ、『室内に入りたいです～』という気持ちを滲ませるユーリに、ご主人様は苦笑気味に体を引いて招き入れた。

逸る気持ちを抑えてユーリが魔法部屋に足を踏み入れると、淡く輝く魔法陣の中央で、銀色の毛並みを持つ天狼さんは「ぐー、ぐー」という、いつものいびきだか寝息だか分からない音を立てて熟睡していらっしゃった。

「見ての通り、シャルはぐっすりだ。
ま、起きたら元気になってるだろ」

カルロスは気楽な口調で保証すると、肩を竦めて床に座り込む。

ユーリも主人の傍らに腰を下ろすと、カルロスは彼女が作ってきたサンドイッチに手を伸ばし、パクパクと舌鼓を打つ。

「うーん、なかなかいける」

どうやら、カルロスの口に合ったようだ。

眠っているシャルの寝姿にチラチラと視線をやりつつ、ユーリもまたサンドイッチにかぶりついた。

シャルがご飯の匂いで起きてこないかな、と、少し期待したりしたのだが、彼は目を覚ます気配もない。

ユーリがこの魔法陣の上で治療を受けていた時も、後頭部の怪我や火傷が完璧に治るまで目を覚まさなかった。治療に専念する為に、シャルも同じように深く眠らされているのかもしれない。

「有り難うございます。
あの、主。シャルさんの好きな食べ物って、どんな物なんでしょう

？」

ユーリの経験上、病気が治って起きた時に好物が用意されていて、それを母と一緒に食べるのはとても嬉しかった。
いつもはパチンコで勝った時にしか買ってくれなかった板状のチョコレートを、『快気祝い』と称して2人で分けて食べるのが、とても美味しかった。……激マズのお粥と、苦い苦い薬を強要された後なだけに、それはもう余計に。

カルロスはユーリの問い掛けに怪訝そうな表情を浮かべた後、ややあってニヤニヤと意味深な笑みを浮かべだす。
そしてカップを取り上げて水を口に含み、コクリと飲み込んでユーリに向き直ったご主人様は、実に慈悲深くも温かみのあるにっこりとした微笑を浮かべ、

「シャルの好物なんて、言わなくても分からねえか？
生肉だよ、生肉。特に好物なのは、やっぱ猪か山羊か。飛びかかってかぶりついてこう、バリバリと」
「さ、左様でございますか……」

爽やかに解説して下さった。
正直なところ、シャルが狩りをしている姿はさっぱり想像がつかないが、ユーリの乏しい想像力でも、それはもう大迫力なのだろうという見当はつく。
流石は肉食獣だなぁ……などと、天を仰ぐ。

「グリューユの森には猪も居るが、山羊は流石に居ねえなあ」
「……」

つまり、ユーリがシャルの好物を用意しておいてあげよう、などと

いう気遣いをみせる為には、森の中に分け入って猪を生け捕りにし、おうちへとお持ち帰りしなくてはならないという事になる。

ムリだ！

自らの気性を知り、実力を過信する事の無いユーリは、早々に結論付けた。

なんという事だろう。シャルの歓心を買うという目論みは、ものの見事に計画倒れとなってしまった。

ううう……シャルさんに好かれたい作戦は、道のりを探すところから躓いてばかりです……

半泣きでサンドイッチを噛むユーリに、ご主人様はやれやれと溜め息を吐き、

「ま、ユーリも知っての通り、俺とずっと暮らしてきたシャルは、肉しか食わんつー訳でもない。

確か……グリューユの森の水辺に生ってた野苺が美味いつって、たっぷり摘んでジャムにしてたな」

「苺ジャム……」

カルロスのお言葉に浮上してきたユーリは、目を輝かせてサンドイッチを飲み込んだ。

いそいそと食事を終わらせて、空のカップや皿をトレーに乗せると、立ち上がってカルロスに軽く一礼した。

「主、私、やる事が出来たので、失礼しますね」

「おう。ま、今日はこの後特に用事で呼びつける事もねえ。好きに過ごせ」

「はいっ」

ご主人様から遠回しに、シャルを喜ばせたい作戦の許可を得たユーリは、足取りも軽く魔法部屋を後にする。
まずは急いでお洗濯を済ませて、その後はキッチンで苺ジャムの瓶を探す。
そして、ジャムで何かお菓子を作ってみよう。こちらの薪オーブンだと、クッキーが良いだろうか？

浮かれ気味に廊下を歩むユーリは、すっかり忘れていた。
彼女自身が甘党であり、バーデュロイと日本では甘味料の事情が全く異なるにも関わらず、召喚されたばかりの頃、日本で暮らしていた頃と全く変わらぬ感覚で、苺ジャムをパクパクと平らげていたが、最近では全くといって良いほど食卓には出されていない、という事実を。

そして何より、シャルがユーリを称して『いっそ贅沢なほどに甘い物好き』と皮肉っていた事も。

2

とにもかくにも、見通しが甘かった。
焦りすぎていて、平静さを欠いてしまっていた。

世の中には予定通りにすんなりと進んでいく事の方が、よほど少ない。
……それを私は失念してしまっていたし、偉大なる魔法使いである主人のカルロス様と、常に精神的に繋がっているという安心感はぶよぶよと助長して、そう、いつの間にやらきっと、慢心の域にまで達していた。

だから今、私は……

「う、うぇっ！　ぐっ、がぼっ」

豪雨が降り注ぐ、一寸先も見えなくなるほど視界が悪くなった森の中で1人、水嵩が増して激しい急流となった川で溺れそうになっているのだ。

さて、そんな危機的状況より、時間は少し遡る。

急いで洗濯物を洗濯板でゴシゴシと洗ったユーリは、裏庭にある物干しに洗濯物を広げつつ、空を見上げた。
時刻は既に昼を回っており、雲が出てきたせいで、日光が洗濯物に差してきているとは言い難い。

「日暮れまでに乾くかな……」

パンパンッ！　と、シーツを綺麗に干しつつ、少し不安を抱くが、別に完全に空を雲が覆っている訳でなし、きっと気持ち良く乾いてくれるだろうと、余計な心配は横へ置き、勝手口からキッチンへと戻った。

お家の中の食材の管理は、基本的にシャルが行っている。
早朝から近隣の農村やフィドルカの街へと出掛け、卵やミルクなどの生鮮食品を買い求めたり、気ままに狩りに出掛けて新鮮なお肉を捕獲してきたりしている。いや、前者はユーリもお供をした事があるが、後者は現場を目撃した事は無い。捌く段階にてキッチンに入ろうとして、情けなくも度胸が足りずに回れ右をし、調べ物中の主の足下でネコ姿なのに更に小さくなって、ぶるぶると震える羽目になった。

調味料の棚を覗いてみるが、目当ての苺ジャムが見つからない。首を傾げながら食料品が並んだ棚の中を確認してみても、やはり見付からない。

「あれ……？　何か、蜂蜜やメープルシロップの瓶の中身も殆ど無いですねぇ」

お料理用のお砂糖が入った瓶も、残量が少ない。
こちらの世界にやって来て今まで口にした甘味は、苺ジャムにホットチョコレート（これは使い魔契約の為）、メープルシロップや蜂蜜のかかった物、後は全て果物だ。
ユーリは子ネコ姿で頻繁に、お家でも出先でもカルロスからお菓子や果物を食べさせて貰っている。

さて、この蜂蜜瓶の隣に苺ジャムの瓶も並んでいた筈なのだが……
そう考えながら、かつてジャムの瓶が置いてあった場所を見つめる。
そこには今、中身は空っぽで綺麗に洗われた瓶が一つ、ぽつねんと並んでいるのみ。
そこから導き出される自然な答えは。

「……お家の苺ジャム全部、私がペロッと食べちゃった!?」

改めて口に出してみるとその予想に強い衝撃を受けて、ユーリはぐらりとよろめいた。

いくら主の許しを得ているからって、シャルさんにとっても大好物である苺ジャムを、私が目の前でことある事にバクバクバク食べ漁って、ぜ～んぶ平らげられちゃったら……そりゃあ、怒って疎んじても当然ですよね……

ユーリはがくーっと、力無くキッチンの調味料棚にもたれかかった。
シャルはさぞかし彼女の事を、食い意地がはっていて体の割に大飯食らいだ、と思っていた事だろうとも。

このまま手をこまねいているだけでは、状況は全く好転しない。
けれども、シャルに喜んで貰うにはいったいどうすれば良いというのだろうか。

――グリューユの森の水辺に生ってた野苺が美味いつって、たっぷり摘んでジャムにしてたな。

主の言をふと思い出し、ユーリはすっくと立ち上がった。

「もうジャムが無いのなら……苺を採りに行くしか無い」

幸いにして、今現在の季節は春だ。出先でも様々な種類の果物を口にしたし、その中には苺っぽい物も含まれていた。

恋しい人に振り向いて貰う為ならば、歩きにくい森の中の探索がなんぼのモンだ！

ユーリは裏庭にある物置きの中から、ホルダー代わりに使えそうな紐と、摘んだ苺を入れるのに丁度良い大きさの袋を探し当て。後で入念に洗おうと井戸の脇に置きっぱなしにしてあった、唐辛子毒水がまだタンクの中に残っている水鉄砲を取り上げ、幅広の紐をグルグルと本体に巻き付けて、肩からたすき掛けにして腰の辺りに下げてみた。朝はずっと両手で持って歩いたら、少ししんどかったのだ。落っこちる心配が無く、例え命中させられなくとも、咄嗟の状況にすぐさま構えて引き金を引ける事が出来れば、逃走時間が稼げるはず。それでこの水鉄砲の牽制意義は、十分に果たせられる。

「……刺激性の高い臭いを相手に振り撒いて、それに敵が怯んだ隙に逃走を図ろうって……この生き様、まるで私、スカンクのようです」

ふと、自らを省みたユーリは、ズドーンと落ち込みつつ、

「私、花も恥じらう年頃の乙女なのに……生き様を例えるとスカンク……」

ショックのあまり二度もそんな独り言を零しながら、そのまま前庭へ回り込み、門扉からグリューユの森へと足を踏み入れたのである。

本日二度目のグリューユの森探索に今度は1人で乗り出したユーリは、朝と同じように東に向かって真っ直ぐ歩き出した。
『グリューユの森の水辺』と言えば、ユーリが知っている場所は例の川しか無い。

あの辺りを探してみて、見つからなければ潔く諦めようと心に決め、カルロスやシャルが出入りして踏みならしてある獣道に沿いつつ、慎重に周囲を見回しながら歩みを進める。

しかし、何か視界が悪くて目印が見えにくいと訝しみ、空を振り仰いだユーリは「げっ」と呻いた。
お洗濯中に湧き出ていた雲は今や空全体を覆い、灰色の空へと変化していた。

「……マズい……雨が降ったらお洗濯物が……」

耳を澄ませば、かすかに川のせせらぎの音は捉える事が出来る。
だが、暗さに目印を見失って森の中で迷うだとか、あまつさえ雨が降ってきて干したままの洗濯物がずぶ濡れ……なんて事態に陥ったら目も当てられない。

ユーリは立ち止まって溜め息を吐いた。
グリューユの森は魔物が生息する、危険な森だ。悪条件を押してまで一人歩きをするには、彼女では明らかに力不足だ。

迷子になる前にお家に帰ろう……そう考えながら背後へとクルリと振り向いたユーリの眼前に、あぎとをグワッと開いた獅子の……

「えええぇえっ!?」

咄嗟に全力で横っ飛びをしたユーリは、服が汚れるのも構わずゴロゴロと転がって木の根っこに引っ掛かる前になんとか様子を窺うと、今朝も邂逅した『ライオネル君』が、明らかにご機嫌斜めで吼えていらっしゃる。

つーかいつの間に背後に!?

彼が背後に居た事に、全く気が付かなかった。
恐らく、『ライオネル君』はユーリを弄んで憂さ晴らしでもするつもりなのだろう。
そうでなければ、背後から忍び寄る捕食者の存在に、獲物は全く気が付いていないという絶好の機会を、あの獅子がみすみす逃す意味が分からない。
シャルと激しい取っ組み合いの喧嘩を繰り広げた、身体能力抜群である巨大な獅子的モンスターがちょいと本気を出せば、ユーリなど一捻りに違いないのだから。

などと、冷静に思い返せば頭の中ではそんな考えを巡らせつつ、ユーリは寝っ転がった体勢から上半身を起こし、腰から下げていた水鉄砲を構えて闇雲に乱射していた。
ポンプの加圧が明らかに足りずに、赤い水流の飛距離は殆ど出なかったし『ライオネル君』に直撃などもしなかったが、要するにこの場から離脱する隙が出来れば良いのだ。

唐辛子毒水が空中に撒き散らされたせいで、ユーリの側には近寄りにくくなり飛びかかるのを敵が躊躇っている間に立ち上がり、全速力で『ライオネル君』とは反対方向へと駆け出した。

「どぇぇぇぇっ!?」

オマケに良かったのか悪かったのか、どんよりしていたお空が突如として激しく大泣きを始めた。その叩きつけられるような勢いに打たれて、思わずユーリの口からヘンテコな悲鳴が漏れる。

『ライオネル君』がどうやって獲物の気配を探り当てているのかは不明だが、この雨ではユーリの気配を察知するのは難しい……と、安堵したのもつかの間、濡れた地面を蹴りつけ、激しい草や枝の抵抗を物ともせぬ獅子様が、唸り声を上げつつ迫ってくる。
どうやら雨のお陰で大気中の唐辛子毒水は綺麗に流され、ひ弱な玩具と侮っていた獲物の挑発的行為に、『ライオネル君』は益々お怒りになられたご様子。

い、嫌ぁぁぁぁぁっ！？

声にならぬ悲鳴を上げながら、全速力でユーリは駆ける。
とにかく逃げなくてはと無我夢中だった為、そちらは家とは真逆の方向である事に気が付いたのは、雨で水嵩が増し、急流の激しい川にぶち当たった時だった。
朝の穏やかな眺めがまるで嘘のように、景色の印象が変わっている。

水辺は木が生えていない為、敵の勢いを削いでくれる障害物が無い。
となれば、どれくらいあるのかは不明だが、とっても凶悪そうな『ライオネル君』の脚力で飛びかかられ、ユーリなど簡単にガブッと……

川縁にまで追い詰められ、ユーリは咄嗟に追っ手の方へと振り向きつつ、素早く左右を見回した。
『ライオネル君』との距離は、まだある。
雨さえ降っていなければ、水鉄砲をまた乱射しているところだが、この激しい豪雨の中では威力のほどは微妙だ。

思わぬところで背水の陣となってしまったが、飛びかかってきた瞬間に左右どちらかに転がって、敵を川に落とせれば……！

しかし獅子は、喜び勇んで走って突撃してくるのではなく、のっそりとした足取りで一歩を踏み出す。ユーリもまた、それに合わせて一歩後退り。

互いの出方を窺うジリジリとした膠着状態に、また一歩敵が歩を進め、彼女もじわりと……

「あ……！？」

そこは既に川縁であり、雨でぐずぐずに柔らかくなった地面は、ユーリの体重を支えきれずにあっさりと崩れ落ちて。後方へとズラした右足の踵が、踏みしめるべき大地を見失っていた。

全神経を眼前の『ライオネル君』に集中させていたユーリは、なす術もなくバランスを崩して背中から川へと転落してしまったのである。

予想以上に勢いがある水の流れに、思うように泳ぐ事も出来ない。なんとか水面から顔を出しても、叩きつけられる豪雨のせいで、満足に呼吸すらままならない。

「う、うぇっ！　ぐっ、がぼっ」

激流に揉まれて流されながらも、ユーリは咄嗟に助けを求めようとして口を開き、汚れた川の水を飲んでしまう。

主……！　助けて……！

だが、頼みの綱であるカルロスへ向けて懸命に救助を求める思念を飛ばしても、主人からはなんの反応も返ってこない。
ユーリの思念には大抵返事を返してくれる主人だが、魔術遮断結界の中や、カルロスが眠っているなどの状況下においては、決してテレパス回線が繋がる事は無い。

……そしてカルロスは、出張から帰ってきた翌日から早速、殆ど眠らずに調香のお仕事をして、休むこと無く病身のシャルに付き添っていた。
そろそろ疲労からダウンしていたとしても、なんら不思議は無い。

お母さん、お母さん！

何度水面から顔を出しても、ユーリは簡単に川の中へと飲み込まれてしまう。

助けて……

「……しゃ、る……！」

大雨のせいで、何も見えなくなっていた筈のユーリの視界に銀色の色彩が翻り、彼女は無我夢中でそちらへと腕を伸ばしていた。
肩からたすき掛けにしていた紐がぐいぐいと引っ張られて苦しい。
けれど、水面から引き上げられて、ユーリはようやく息が出来た。

しこたま水を飲んだせいか、ぼんやりとしたままの頭を巡らせると、幅広の紐を銜えてユーリを持ち上げ、この豪雨の中でも翼を羽ばたかせて飛んでいる、銀色の毛並みの天狼さんの姿がそこにはあった。

シャルさん……雨の日でも飛べるなんて、その翼いったいどうなっ

てるんですか。
やっぱり羨まし過ぎる生態ではないかと……

琥珀色の瞳と目が合い、深い安心感を覚えながら、ユーリは彼女を運んだまま空を滑空するシャルへと腕を伸ばし……そこで限界を迎えたのか、ふっつりと意識が途切れた。

3

六歳の悠里の日常は、視界がけぶるほどの煙草の煙と、四方八方から発せられるうるさいばかりの電子音、そしてはっきり聞き取れず意味も分からない店内放送に彩られていた。

今日も今日とて、母が走らせる自転車の後ろに座って、連れてこられたのは行きつけのパチンコ屋さん。
毎日毎日、悠里はここでパチンコにハマる母の傍らでウロウロしている。

パチンコ屋さんは、当然の事ながら子供の遊び場ではない。
というか、それ以前に十八歳未満の子供は入店する事も禁止されている。
だが、大のパチンコ好きである母は、幼い子供を抱えているからといって、店に通うのを断念せず……悠里を引き連れて、店通いをしていた。
今から思い返せば、よくもまあ母は通報されなかったものだ。

店側が入店を拒否しなかったのは、母が良いカモであったからかもしれないし、別のお店では真夏の車の中に子供を残して親がパチンコ屋さんで過ごし、子供が亡くなるという事故が実際にあったからかもしれない。
そして母が平然と娘を連れて来るのも、悠里がそこいらを走り回って騒ぐような性格ではなく、母の側で床に足が届かないスツールに座ったまま、大人しくお茶を飲んでいるような子供だったから、というのも大きいかもしれない。
それに悠里が張り上げる声よりも、周囲の電子音の方がよほど騒々

しい。

母は別に、プロのパチスロという訳ではない。むしろ下手の横好きを体現したような人で、勝つ日は滅多に無い。

パチンコ屋さんで遊ぶ時間は、悠里とお夕飯のお買い物に行く前の大抵３０分前後。費やす軍資金も微々たる金額。

夕暮れの中、自転車を漕ぐ母の後ろに座り、「今日もお母さん負けちゃったわー」と、嘆く母の背中を慰め撫でるまでがワンセット。

そしてその日もやっぱり、母が換金したパチンコの玉はケースから見る見るうちに減ってゆく。

どうやら今日もまた、何も交換してもらえないようだ。

悠里は自販機で買ってもらった紙コップのお茶を飲み終え、

「お母さん」

むむむぅ～、と唸りながらパチンコ台を睨み付ける母に声を掛ける。

だが、周囲の音に紛れて、見事に母の耳には届いていない。これもまた、毎度の事だ。

自販機はすぐそこだし、と、悠里はジリジリとお尻をズラしてスツールから降り立ち、空の紙コップを捨てにとてとてと自販機に歩み寄り、その横に設置されているゴミ箱の所定の穴へと放り込む。

そしてクルリと振り返った悠里は、お客さんが座っていない台、その埃っぽい床の上を這いつくばるようにしてじっくりと探してみる。

パチンコ中のお客さんの側の床を探していたら、やっぱりイヤな顔をされてしまうので、誰もいない列が一番である。

だが、その日はなかなかお目当ての物が見付からない。どんどん他の列を四つん這いのまま移動しつつ探し、

「み～っけ！」

悠里は隅っこに転がっていたパチンコ玉を拾い上げ、にぱ～っと笑みを浮かべて獲得した玉を掲げた。

ケースにパチンコ玉をたくさん入れ、それを積み上げたりしていると、どうしたって零れ落ちたりする。

そういった玉を、さながら宝探しのように拾い集めて母のところへ持って行き、「いけない子ねえ」などと、悪戯っぽく笑う母に渡すのが、悠里のパチンコ屋さんでの遊び方だった。

早速母のところへ戻ろうと、パチンコ台が並ぶ列を横断して覗き込んだ悠里は、（あれ？）と、瞬きをした。先ほどまで母が座っていたはずの台の前には、誰も居ない。

手のひらの中の鉛の塊をぎゅっと握り込み、うっかり列を間違えたのだと自分に言い聞かせて、その更にお隣の列に向かうが、やはりそこにも母の姿は無い。

その次の列も、その次の次のパチンコ台の並ぶスツールの前に座っているのは、悠里の見知らぬ大人達。

「お母さん、お母さん……」

どこ？

ぐしぐしと涙ぐむ悠里の視界に、その時ホールの照明とは異なる、眩いばかりの光が弾け飛んだのだ。

「お母さん……」

「わたしはあなたの母君ではありませんよ、ユーリさん。

あなたは何度、寝ぼけてわたしを母君と間違えれば気が済むのでし

ょうね」

皮肉げな声が耳に突き刺さって、ユーリはぎゅっと瞑っていた瞼を、なんとか持ち上げた。

歪んでぼやける視界の中、動くのは銀色の……

「シャル、さん」

雨に濡れたせいで、もふもふな毛皮はしっとりと張り付き、普段よりもスリムな見た目になっているシャルは、ユーリの掠れた声を丸無視して、ギランと鋭い牙が生えたあぎとを開き、くぁ～と、迫力のある天狼がするにはどことなく不釣り合いな気がする欠伸を漏らす。

ユーリはどうやら、自宅のキッチンの勝手口の側に寝かされていたらしい。ドアの向こうからは、相変わらず激しい雨音が響いてくる。上半身を起こしながら辺りを見回し、まさか命綱になるとは思いもしなかった肩からたすき掛けにされていたままの幅広の紐を外してみると、シャルの牙が貫通したのだろう。見事に穴が空いている。運ばれている最中に、よくもまあブチっと千切れなかったものだ。激流にも耐え、外れて流されずにいた水鉄砲共々、お前達は実によくやった。

ある意味、自分の育った世界の象徴的な品である水鉄砲を撫でてホッと安堵の息を吐き、ユーリは改めて同僚に向き直って頭を下げた。

「助けて下さって、本当に有り難うございました、シャルさん。あなたが来て下さらなかったら、私はきっと今頃……」

「ええ、全くその通りですね」

ユーリが言い淀んで言葉を途切れさせると、シャルは無言ながらそこに込められた未来予測に対し、全面的な肯定をみせた。

「まったく、本当に信じられませんね。わざわざこんなお天気の中、ひ弱なユーリさんが、単独で森に足を踏み入れるだなんて。探しに行かされるこちらの身にもなって欲しいものです」

キッチンに置いてあったタオルの上で人の姿に戻ったシャルは、髪の毛を拭いながら「ああ、無駄に疲れた」なんて愚痴りながら溜め息を吐く。

チラッと確認しただけですぐさま視線を外したが、カルロスの治療を受ける前には真っ赤に腫れていたシャルの背中は、今は傷跡一つ残っておらず、綺麗なものだ。

「ご、ご迷惑を、おかけして、しまって……」

シャルが人間バージョンになってしまったから、というだけではなく、彼の真っ当な言い分にも申し訳なさが募って、ユーリは益々俯いてしまう。

「確かに、急にわたしが不調になってしまった事が、そもそもの原因ですがね。

しかしまさか、病み上がりに何から何まで後始末に奮闘する羽目になるとは」

シャルから放たれる嫌気に満ちた言葉が、容赦なくぐさぐさとユーリの胸を突き刺してくる。

「あなたは本当に、何をさせても鈍臭いですし」

役に立ちたかった。

「かといって、放っておけば問題を起こして。なんですか、あの雨晒しの洗濯物は」

ただ、シャルに認められたかった。

「もうユーリさんは、ずーっと子ネコの姿のまま家の中に居て、大人しくマスターの側にでも控えていれば良いんじゃありませんか？」

私は、私は、

「なにしろユーリさんは、本当に脆弱で貧弱で惰弱な生き物なんですから。
ユーリさんが満足にこなせる仕事なんて、マスターの息抜きに付き合う程度じゃありませんか」

はあ、やれやれと、ユーリを探しに行く前にキッチンで服を脱いだのか、広げてあった服を彼の考えを口にしつつほぼ身に着けて、シャルはそこでようやくユーリが一言も喋らない事を訝しんだのか、クルリと背後を振り向いた。
少し屈み込んでユーリの顔を覗き込み、まだボタンを止めていなかったシャツの裾がはらりと揺れた。

「ユーリさん、ちゃんとわたしの話を聞いているんで……」

シャルは言い掛けた言葉を途中で詰まらせ、片手を伸ばしてきて…
…ユーリは反射的に、その手をパシンと払いのけていた。

「ユーリさん？」
「……らい」

キョトンとした表情を浮かべるシャルをキッと睨み付け、頬に滑り落ちる涙を感じながら、ユーリは抑えきれない感情の迸るままに叫んでいた。

「嫌い嫌い！　シャルさんなんか大っ嫌い！」

私は、愛玩されるだけの価値しかない、ペットなんかじゃない！

目を見開いているシャルからクルリと背中を向け、勝手口から飛び出すと、勢いは弱まったが未だ降り止まない雨が、物干し竿の白いシーツを打っていた。
無我夢中でそれらを強引に取り込み、胸元に抱え込んでバシャバシャと地面の水溜まりを撥ね散らかしながらお風呂場に駆け込んだ。
そのまま洗い場にペタンと座り込む。
濡れたままの衣服と、雨に濡れた洗濯物がやけに冷たい。

「う……あ、ひっく……」

抱え込んだ洗濯物に顔を埋めても、後から後から涙が溢れてくる。
けれど、大声で泣き叫んでは駄目だ。シャルはとてつもなく耳が良いから、そんな事をしたら彼に聞こえてしまう。

シャルに喜んでもらいたかった。
頑張れば、彼にもきっと認めてもらえると。『森崎悠里』という人間は決して、無能な役立たずなどではないのだと。
けれども、先ほどのシャルの無感動な眼差しと淡々とした口調、それはユーリにたいしての評価を益々下げている事ははっきりしてい

る。

ここは、『私』が居て良い居場所じゃないって、シャルさんはずっと、そう思ってて……

雨晒しでみすぼらしい洗濯物が、自分の姿と重なった。
声を押し殺して涙を零すユーリは、寒さに震えながら瞼だけは熱く、熱い雫と共に後から後から様々な思いが心の底から溢れ出てくる。

しかし急に、ユーリの全ての五感が変化した。持っていた洗濯物の感覚が無くなると同時に、突如として頭上から濡れた布地に押し潰されて、その冷たさと重さに満足に息さえ出来ない。
もがもがともがくユーリの頭上の布が退けられて、体が持ち上げられた。
何が起こったのかを確認する為に顔を動かしたユーリは、自らの身が予想通り黒い毛並みの子ネコの姿に変化している事を確かめて、
「ふみー」と諦観の念を吐き出す。

「ユーリお前、滅茶苦茶冷えてるぞ」

子ネコ姿に変化させつつお風呂場のドアから入って来たらしきカルロスは、ユーリを両手で持ち上げてタオルで包んで水気を拭い始めた。
濡れた服やシーツはそのままに、どこかへと歩きだす。

タオル生地から顔を出したユーリが主人を見上げると、寝間着姿で髪に寝癖を付けているカルロスは、眠たげに目をしょぼつかせながら階段を上って行き、自室のドアを開いて寝台へと倒れ込んだ。
先ほどまでカルロスが横になっていたそこは、掛け布団の中もぬくぬくと暖かい。

主……あったかいです。

「んー。無茶するからだ、アホネコ。家の外が危ない事は、わざわざ俺が言わんでもお前は理解してる筈だろうが……」

申し訳ありません……

ユーリを抱いたままウトウトと再び眠りに落ちていく主人に頭をぱふっと軽くはたかれて、ユーリはしゅんと落ち込みながら謝罪した。

「ん……エスト、頭ごなしのアホイヌ、には、仕置き……だよな……」

よほど眠たかったのか、カルロスはそんな謎の台詞をもごもごと口にしつつ、再び深い眠りに落ちた。

急にエストお嬢様の名が出ましたが、もしや我が主は寝ぼけていらっしゃったのでしょうか？

単なる愛玩動物なんかじゃないと不満を抱いた割には、現実にこうして主人とはペットとして添い寝し、ぬくぬく加減に安堵しているという矛盾した事実に、ユーリは溜め息を吐きながら瞼を閉じた。

今日は、本当に酷く疲れた。

にゃんこ、家出（？）する

ある日、パパが私を抱っこして頭を撫で撫でしながらこう言いました。

「良いかいユーリ？
お前は今とは違う環境に出て、避けては通れない成長段階を乗り越える事も必要なんだよ」

だから私はお行儀良く、こう返事をしたの。

「にゃーにゃ、うにゃうー（はあ、主……とどのつまりは何が仰りたいのでしょう）？」

その言葉を聞いて、パパはにっこり笑ったわ。

「とどのつまり、どうせやるならとことん徹底的に、あのアホイヌ……おっと。
シャルから離れて、お互いに頭を冷やしてみたらどうかな」

そう言って、パパは私をママのところに預けたの。

……と、何か記憶を無理やり誤魔化して、ほのぼの思い出語りのような回想に耽っています、ユーリです。
私は今……

「相変わらず君は大人しい子だね、ユーリ」

「お父様、そろそろわたくしにもユーリちゃんを抱かせて下さいまし」
「ははは、エスト、お前は本当はネコが飼いたかったのかい？　実を言うとね、私も子供の頃はネコが欲しかったんだよ」
「まあ、幼い時分のあなたも可愛らしかったのね」
「フィデリア、その言い方ではまるで、今でも私は可愛らしいようではないか」
「その通りでしてよ？」

パヴォド伯爵と夫人、令息と令嬢の乗る「あははは」「うふふふ」と涼やかな笑い声の絶えない馬車の中で、恐れ多くも伯爵閣下のお膝の上で撫でられつつ日向ぼっこ状態で……あ、今、エストお嬢様の腕に渡されました。
すみません、私、バトンじゃないんですけどー……

今度はエストお嬢様のお膝の上で丸くなりつつ、ユーリは小さく溜め息を吐いた。
要するに彼女の主人は、なんだかんだと理由をつけつつ、離れている間もエストと繋がりを持っていたかったのではないのか？　などと勘ぐりつつ。

ユーリの遍歴を簡潔に表すと、こうなる。
『偉大なりし異世界の魔法使いカルロス様の、第二の使い魔ユーリ（本性人間／擬似種族ネコ）は、使い魔からランクアップして、パヴォド伯爵家の飼いネコになりました、まる』

……す、捨てられたんじゃないですよ！？
主人へと、共に協力しあって誠心誠意仕えるべき立場である同僚と喧嘩してばっかりじゃ、まともに仕事にならないからと、お互いにちょっとクールダウンしようか、って事ですよ。

け、喧嘩別れした上での、衝動的なプチ家出なんかじゃないんだから！

いや、主から「お前はしばらく、社交界デビューするエストの側に居てやってくれ」と命じられた際の気分としては、それに近いものがあるのかもしれませんが……

『パパ公認で、ママのお家へプチ家出するんだもん！』って……私はいったい幾つのお子さんですか。

子ネコ姿のユーリを腕に抱いたままパヴォド伯爵家へと向かうカルロスを見送るシャルは、ユーリと目が合うなり不機嫌そうにそっぽを向いて、のしのしと自室へと引っ込んでしまったが……

手を叩いて、シャルなんて嫌いだと叫んでしまってから、結局一言も言葉を交わす事なく伯爵家へと預けられて、今はこうして社交界シーズンに合わせて王都へと向かう伯爵家の皆様の乗る馬車に、同乗させて頂いている。

シャルさん、元気かな……

ユーリの脳裏には、別れ際に見た、彼の不機嫌そうな顔ばかりが思い出される。

撫でてくれる伯爵家の方々の手は優しくとも、出されるご飯はほっぺたが落ちそうなほど美味しくても、やはりここにずっと居たいとは思えない。

シャルさん……

ごめんなさいごめんなさい、何度心の中で謝ろうと、それが本人の耳に届かなければそれは同じ事。

家出二日目にして、ユーリは早くもホームシックを味わっていた。

そもそも、ユーリがこうしてエストの下へと預けられたのも、シャルではユーリと同じ仕事が果たせる訳ではないからだ、と、ユーリは自らを奮い立たせるべく、自分に言い聞かせる。
ユーリの得意とするところと、シャルの得手は全く異なる分野であり、彼が楽々とこなせる仕事がユーリには行えないからといって、それで自分を卑下する事は無い。

ユーリは非力で、無力で、他者を圧倒する戦闘能力など持ち合わせていない。
シャルが悪ノリして作ってみた唐辛子毒水の素と水鉄砲も、子ネコ姿では持ち歩けないのでそのままグリューユの森の家に置いてきた今、彼女が危機に見まわれた際、身を守る術は逃げ隠れする事のみ。
だが、それでユーリが役に立たないなどと、決め付けられてはたまったものではない。

か弱く、一見無害にしか見えない子ネコの姿は、彼女の正体を知らない相手の油断を招き、何も出来ぬと侮ってかかるが故に、不意打ちや隙を突く事が出来る。
そしてユーリは、本能のままに生きる獣ではなく知能を持った生物なのだから、自分自身で考える事が出来る。

自身の意志と判断で動き、主人へとのし掛かる負担を減らし、補佐をする。それが使い魔だ。
そして自分の適性や性質から自身を省みるに、愛嬌を振り撒いて懐に潜り込み、油断を誘い、主の目となり耳となり情報を得る事、数ある事実の中から重要性の高い真実を速やかに選別して奏上する事。
これは、相手に警戒心や脅威を抱かれない脆弱なユーリだからこそ、可能な役割である筈だ。

だからつまり、今のところカルロスへ向けて、彼女が可及的速やかに送るべき最重要な情報は……
ユーリはむむむ、と、精神を集中させて主人へとテレパス回線を繋いだ。

“どうした、ユーリ。何かあったのか？”

即座に返事を返してくる偉大なるご主人様へ向かって、ユーリはカルロスへと必ず伝えるべきと判断した、現在の最重要最新情報を伝えた。

主！　どうですこの、ドレスの布地越しながらも柔らかい、エストお嬢様の太ももの感触は！

“……アホかお前はーっ！？”

嬉々として念じた重要情報を主人へと送り込んだところ、物凄い勢いでテレパス回線が切られた。
怒鳴り散らしながらも、意表を突いたせいか瞬間的に抱いた感情をうっかりしもべへと漏れ出させてしまい、主には喜んで頂けた事はしっかりと理解したユーリである。

頭の中が覗ける、今現在考えている事がリアルタイムで分かる、という事はつまり、視覚や嗅覚、聴覚や触覚も共有しようとすれば可能であるという事。
その感覚に集中して、頭の中にしっかりと思い浮かべれば良いのだ。

ふっ……なんだかんだ言いつつ、主も悲しい男のサガには逆らえないようですね。

カルロス本人といい、エストといい、パヴォド伯爵といい、『ユーリはエストに惚れているカルロスの使い魔』であるというのに。そんな相手に使い魔を預けたりなんかして、エストのプライバシーの侵害や、今のような普段のカルロスでは到底不可能なエストとのスキンシップ体感について、全く想定していないというのは驚きだ。パヴォド伯爵がクォンの能力について、どの程度把握しているのかも、何を考えているのかだとて不明だが。

だが少なくとも『ユーリのパパとママ』は、そんな事は考えてもみなかったようである。

主のあの驚きようからして、間違いなくそんな下心は欠片も抱いていなかったようです。それぐらいの甲斐性や悪巧みをしてみせたら良いのに。

いや、冷静に考えたらそれって変態ですけど。自分の力を有効活用という意味では、有意義な使い魔の利用方法だと思いますのに。

エストお嬢様の方は……主に伝わる可能性を承知の上だとしたら、なんて大胆な方なんでしょう。いえ、無難に『クォンの感覚共有を詳しく知らない』と考えるべきなのでしょうが。

だがまあ、異性関係についてはプラトニックラブな主人をあまり、からか……いや、頻繁に強すぎる刺激を与えるのも拙い。

本当に危機的状況に陥った場合、止むを得ない理由でなく意図的に緊急救援信号が受け取って貰えなかったりしたら、目も当てられない。

ユーリにとって、最終手段がカルロスへのＳＯＳテレパスなのだから。

悪戯半分に面白がって、狼少年ならぬ狼少女になるのは……

狼、というキーワードに、再び銀色の毛並みを風にたなびかせる、堂々たる天狼さんの佇まいを思い起こしてしまい、ユーリは「ふみ

い～」と、力無く溜め息を吐いた。

「どうしましたの、ユーリちゃん？
そろそろお腹が空いてしまったかしら？」

エストの膝の上から両腕の中へと抱き上げられ、ユーリは「みぃみぃ」と素直に甘えつつ彼女の滑らかな頬に頬擦りした。

「エストちゃん、そろそろお母様にもカルロスちゃんのニャンちゃんを抱かせて頂戴な」
「ええ、お母様」

ガタゴトと揺れる馬車の車内で、うずうずと期待を滲ませた表情を浮かべ、両手を差し出してくるパヴォド伯爵夫人。
そしてまたしても、真新しいぬいぐるみかリレーのバトンの如く、手渡される黒ネコユーリ。

「ウフフ、本当に可愛らしい子ネコちゃんだわ。
ねえあなた、カルロスちゃんからの一時預かりだなんて仰らずに、ずっと我が家で飼いませんこと？」

そんな発言をおっとりと申し出る、どことなく地に足が着いていなさそうな垂れ目のこの貴婦人こそ、エストの母君にして何か恐ろしいパヴォド伯爵の妻、レディ・フィデリアである。
ユーリの主である立派に成人男性なカルロスを、本人に面と向かってでさえ「カルロスちゃん」と呼び掛け、日々知謀策謀張り巡らせてます的パヴォド伯爵に、平然と「可愛いあなた」とか呼び掛けたりする、常識のぶっ飛んだ貴婦人である。

更に恐ろしい事にレディ・フィデリアは、彼女から三代遡れば国王

陛下の御弟君、四代遡ればバーデュロイ国王陛下という、れっきとしたやんごとなき高貴な姫君、元・公爵姫である。
デビュタント前のエストが早くも、未成年の王子様の側妃筆頭候補に名を連ねているのは、そちらの繋がりらしい。

「いやいや、それはいけないよフィデリア。ユーリはカルロスの大事なネコだからね」
「ディオン。わたくしだってユーリちゃんが気に入りましたわ」

しかしこういった、唇を尖らせて夫にペットが飼いたいとねだるという、どことなく少女めいた普段の態度を拝見していると、レディ・フィデリアがいったい何を考えていらっしゃる方なのか、ユーリにはイマイチ分からない。
何も考えていないだけのほわ～っとした貴婦人が、女主人として采配を揮っていられる訳はないのだが……ふ、深いな、高貴な姫君という生き物は。

因みにレディ・フィデリアが時折口にする『ディオン』とは、察するに伯爵閣下のファーストネーム『エスピリディオン』からとった愛称のようである。

「それならまた、私達の可愛い子供達を増やさないかい、フィー？」
「まあ……」

そして伯爵閣下は、ふっと笑みを浮かべながら伯爵夫人の結い上げられた髪、その小さくほつれて零れるストロベリーブロンドに指を絡め、小さく口付けた。
子供の前であろうが堂々たる夫婦間スキンシップ、その一連の仕草には伯爵閣下、全く迷いが無い。
察するに閣下が口になされる『フィー』というのも、以下同上。

……えー、主のあの『馬車の中で髪を撫で撫で』は、どうやら伯爵閣下の普段の御行状に倣った行動であったようです。
てゆか、私を膝に乗っけた女性に対して行うのはデフォなんですか？

まさかこうして、第一印象がアレな伯爵閣下のイチャイチャ場面に居合わせる羽目になるとは、人生……いや、ネコ生分からないものである。
閣下が本心では奥方の事をどう考えているのか、その血筋と実家の後ろ盾のみが主目的であるのか、その態度だけでは見事にその心は計りかねる。

そしてそんな、閣下と夫人の『たのしいかぞくけいかく』、ゴホンゴホンとわざとらしい咳払いをして中断させ、車内の注目を集めた人物が1人。

「申し訳ございませんが、父上。
母上は既に出産という難事を迎えるに際し、体力が持たないかと」

この馬車の中に乗り込み、両親と妹が子ネコのユーリにワイワイガヤガヤ騒いでいた最中もずーっと押し黙っていた、パヴォド伯爵閣下の推定長男の君である。少なくとも、エストが「お兄様」と呼んでいたので、彼女よりは年上らしい。

ストロベリーブロンドのストレートの髪と、水色の瞳を持つ伯爵令息。
名前は……まだ誰も呼んでいるところに居合わせていないので、ユーリは知らない。
顔は流石はエストや閣下の血縁で麗しい美貌の持ち主なのに、何か企んでいそうな父親と、周囲にお花畑のイメージを振り撒く母親、

そして儚げながらもハッとする美しさと涼やかな声、滲み出る知性で人目を引く妹に囲まれていると……無口なせいもあってか、全くと言って良いほどその存在感は希薄である。

なんというか……どうも私の苦手なタイプです。推定伯爵閣下の長男の君。

2

相変わらず、レディ・フィデリアのお膝の上からこんにちは、なユーリです。
むしろここから早く下ろして頂きたいんですが。
いや、かいぐりかいぐりしてくる貴婦人の手付きが乱暴で痛い、って訳ではないです。ただひたすらに、頭上から時折降ってくる閣下の眼差しが怖いのであります……

やってる事も台詞内容も、愛妻を可愛がる旦那なのですが、閣下が堂々とその手の言動をなさると、その本心は全く別のところにありそうな雰囲気が滲み出て本当に怖いです。

ユーリは体を震わせつつ、視線を伯爵令息と令嬢の方へと向けた。

どうやらエストは、たくさん兄弟を持っているらしい。
昨日、フィドルカのお城でちらほらと小耳に挟んだところによるとエストは長女で、妹が1人居るのを除けば残りの兄弟は全員男のようだ。
エストよりも幼い弟妹達はまだ社交界に出られない為、彼らはお城でお留守番である。

そしてこの馬車に乗って王都へと向かっているのが、伯爵夫妻と今年社交界デビューするエスト、そして推定長男の君な訳だが。涼やかな切れ長な目でも可愛らしい垂れ目でもなく、ごく平凡な目つきと、いつ見掛けても不機嫌そうに眉間に皺を寄せた寡黙な推定長男の君は、母譲りの髪と目の色以外は、その性格も他者に抱かせる印象もサッパリ両親と似ていない。

「まあ、グラちゃんったらお母様の体を気遣っていますの？
本当にグラちゃんは心配性ですこと。ウフフフ」

手の甲を口元にあてがい、笑い声を漏らすフィデリア。
ユーリの目から見ても彼女は若々しい美女だが、既に成人した息子を持つ母親である彼女が、更にこれから子供を出産……というのは、確かに不安になる。こちらの医療水準は今一つ不明なので、なんとも言えないが。

「グラは本当に、昔からお母様っ子だね。もう少しお父様にも懐いてくれても良いのに」

そして伯爵閣下は、ふうやれやれ、と、息子は成長してもいつまで経ってもつれないと言わんばかりに、額に手を当てて軽く溜め息を吐く。

えーと、伯爵閣下。それはつまり、
『お母様のご実家の顔色ばかりを窺っておもねり、父、ひいてはパヴォド伯家の地盤や権威を蔑ろにするつもりか？
なるほど、お前がそのつもりでいるならば、私はお前を後継ぎから外しても構わんのだぞ。お前の代わりは幾らでも居るのだからな、グラ』
という意味でございますか。

因みにこれは、あくまでもこの馬車に同乗しているグラ氏が、本当に長男で跡取りであった場合の推測だ。次男以下であった場合は、これとはまた異なる意訳になる。

『グラ』と呼ばれた推定長男の君は、父親からのそんなお言葉に目

に見えて顔色を青褪めさせ、呼び名の通りに馬車の揺れに合わせてグラッグラと身を傾げさせている。
ところで彼の名前は本当に『グラ』で良いのだろうか。愛称か通称の類かもしれない。

「まあ、お父様ったら。わたくし達にとってお母様は、お父様と比べる事も出来ないほど大切な方なのですから、お兄様がご心配なさるのは当然ですわ」
「嬉しいわエストちゃん。
お母様はグラちゃんもエストちゃんも大好きよ」

兄の窮地を救うべく、ころころと明るく笑い声を響かせるエスト。
母と娘は向かい合わせの馬車の中で小さく手を握り、フィデリアがにこやかに囁く。

「ほら、よーく見てご覧グラ。これが親子の姿というものだよ。
だから君も、今ここで何をすべきか分かるね？」
「はっ……」

そして伯爵閣下は、にこやかに妻と娘の様子を指し示し、息子に笑顔で『行動で示せ』と威圧しだした。
それにグラはまだ青い顔色の上、更には冷や汗までかきだし、落ち着かずに目はさ迷い、父の意図を汲み取るべく懸命に頭を働かせているようである。

……なんというかあのぐらぐら様、ちょっと可哀想な気がします。
あのパヴォド伯爵閣下の息子として、相応しいかどうかを日々試されているだなんて、どれだけ精神的に気力を削り取られる毎日なのでしょう。

自分も人間として対面していれば、いったいどんな難題をふっかけられていた事か……と、遠い目をしつつ、子ネコ姿は本当に有り難いなどと考えながら、相変わらずフィデリアの膝の上で大人しく丸くなっているユーリ。

しかし、どうやら伯爵閣下が遠回しに何を要求しているのか、グラは本当に見当もつかないようである。

これはあくまでもユーリの推測でしかないが、閣下は具体的に何をしろと命じているのではなく、『伯爵の息子として相応しいとグラが自分で考えて示す』行動がどういったものであるのかを、それによって息子の器を量りたいのではないだろうか。

人生、『これが正解！』という明快な選択肢など少なく、ましてや領地を預かる次期領主ともなれば、発想力や計画力に行動力、突発的なトラブルへの柔軟性をも求められる。

だからこの場合、困り果ててひたすら固まっている、というのはかなり良くない反応ではないかと思うのだが。

ユーリはやれやれと身を起こすと、フィデリアの膝の上からぴょんとジャンプして、グラの膝の上に乗っかった。

「うわっ！？」

急にネコに飛び乗られ、ギョッとした表情で彼女を見下ろしてくるグラ。

眉間の皺や無表情のせいで若々しさは皆無であった伯爵令息だが、どうも間近で見上げてみると彼女よりは年上っぽいが、驚いて目を見開いてくる表情からして、少なくともユーリの主人よりも年下のように見える。

因みにカルロスの年齢は２５歳だ。

「あらあら。良かったわねえ、グラちゃん。ユーリちゃんみたいな可愛らしい女の子に懐かれて」
「そうだね、フィー。
グラはどうも無愛想なところがあるから、女の子からは遠巻きにされてしまうからね」
あははは、うふふふ、と、暢気な笑い声を上げる伯爵夫妻。
彼を見上げて「みぃみぃ」と鳴き声を上げるユーリを、無言でしばし見下ろしてきていたグラは、
「その……父上、どうぞ。どうも私は、ネコは……どうも」
もごもごと困惑気味に呟きつつ、ユーリの首根っこを持ち上げて、パヴォド伯爵の方へと差し出した。
……そうきますか、ぐらぐら様。
「ふむ……そうかい？」
やれやれと諦め気味のユーリを受け取った閣下は、彼女を膝に乗せて背中を撫でつつ息子の選択について、吟味しているようである。
たかがネコ一匹と言う無かれ。飛び込んできたモノを、あっさり父親に差し出して場を濁そうとする後継ぎ……私ならちょっと、頼りないって考えてしまいますねえ。
ぐらぐら様は閣下の息子とは思えぬほど、実直で腹芸スキルが低いようです。
そのまま馬車は進み、本日伯爵一家が泊まる休息地である別荘へと

到着した。
フィドルカの居城から王都までの旅程は、馬車にゆっくり揺られて約三日ほど掛かる。
無論、休憩抜きでもっと馬車を飛ばせば時間は短縮出来るが、社交シーズン開幕まで余裕を持っての出発の為、別段急を要する訳ではない。

ここは既にパヴォド伯爵領と隣接した、別の貴族が治める土地であるが、閣下や奥方は風光明媚な土地のあちこちに、別荘をお持ちであるようだ。
そして、明日は挨拶がてらそのお貴族様のお屋敷に寄って宿泊し、また移動して次のお貴族様が治める領地を……以下省略。やはり領地がお隣同士だと、それ相応の交流があるのだろう。

貴族同士のお付き合いって、複雑そうです。
あんまり居合わせたくはないですねえ。

ようやくガタゴトと揺れ動く馬車から降りる事が出来、ユーリはホッと安堵の吐息を吐きつつそんな事を考えていた。

「疲れたでしょう、ユーリちゃん？
もうすぐご飯ですからね」

そしてまたしても、ただ今彼女は巡り巡ってエストの腕の中だ。
今夜の晩餐までひとまずそれぞれに休息を取り、日が暮れてから親子４人で揃ってご飯になるらしい。別の馬車に乗って移動してきた従僕やメイドの人々が伯爵一家に寛いで頂くべく動き回り。

エストは優雅に自分の部屋へと足を運び、居間のようなお部屋のソファに落ち着いて、彼女のレディーズメイドであるセリアにお茶を

淹れさせている。
この別荘へはよく足を運ぶのか、白を基調とした内装には品があり、続きの間である寝室もまた、エストによく似合っている。

それにしても相変わらず、セリアの仕事ぶりは堂々かつテキパキとしていて、任せて安心、的な自信に満ちた勤務姿勢だ。

シャルさんって私の事、家事すら覚束ないって呆れてるし。
やっぱりこういう、いかにも『仕事の出来る女性』が、シャルさんの好みなんでしょうか……

そんな事を考えつつ、仕事に勤しむセリアの姿を、ひたすらジィーッと目で追い掛け続けるユーリを、エストは眼前に抱き上げた。

「セリアがどうかしましたの？
ああ、ユーリちゃんはセリアに抱っこして貰いたいのかしら？」

お茶のご用意を調え、続いてエストが今夜の晩餐で身に着けるドレスについて考えているセリアの仕事の邪魔をしたい訳ではなかったのだが、お嬢様は自らのレディーズメイドを側に呼びつけてしまう。

「はい、エストお嬢様。いかがなさいましたか？」
「セリア、ユーリちゃんを抱っこしてあげてちょうだい」

このドレスにこのアクセサリーを……いやいや、こちらのドレスの方が……と、真剣な顔つきでいたセリアは、お仕えしているお嬢様からの不可解なお願いに、流石にキョトンとした表情を浮かべた。

「セリア、浮き立つのも分かるけれど、今からその調子では、とても社交シーズンを乗り切れなくてよ？」

「す、すみません……」

そうか、持ってきたドレス広げてあーでもないこーでもないってぶつぶつ言ってたの、セリアさんはしゃいでたんですね、アレ。

差し出されたユーリを恐る恐る抱き取り、撫でてくるセリア。
ユーリとしては複雑な気分であるが、セリア自身はいったいシャルの事をどう思っているのか、是非とも知りたいところである。

もしもし、セリアさん。
あなた、シャルさんの事、どうお考えでいらっしゃいますの？

「ユーリちゃん、そんなにセリアに抱っこされて嬉しいんですの？良かったわね、セリア」
「人懐っこくて大人しいネコって、可愛いですねエストお嬢様」

「みぃみぃ、みぃ～？」と、大真面目に問い掛けてみたのだが、やはりというか当然というか、エストやセリアには全くユーリの意図が通じていない。

「ついにお嬢様も、社交界にデビューなされるお年になられたのですねえ。わたしも感慨深いです」
「そうね、わたくしも緊張や期待がない交ぜになって……複雑だわ。ねえ、セリア。あなたはわたくしにかまけてばかりで、社交界にデビューする機会を逃してしまったのではなくて？」

くっ……！　と、虚しい現実に黄昏ているユーリをヨソに、お嬢様とメイドさんは真面目な話題を持ち上げていた。

「イヤですよぅ、エストお嬢様ってば！　わたしが社交界デビュー

だなんてしたら……我が家の家計が火の車になっちゃいます。
それにわたしは、お嬢様のお側に居る方が嬉しいです」
「それでもわたくしは、セリアには素敵な旦那様を見付けて幸せになって欲しいわ」
「エストお嬢様がお幸せな結婚をなされたら、その時は考えてみます」

大多数の貴族にとって、社交界は普段は遠方に住まう知り合いと楽しくお喋りをしたり、遊びに興じる場であるが、そこに出入りする未婚の若者達にとっては、結婚相手を見つける場、という面がある。セリアもまた、社交界デビューしていてもおかしくはなかったというエストの口振りからするに、今でこそ彼女のメイドさんをやっているけれども、セリアは実は貴族のご令嬢なのだろうか。

むむむ……セリアさんの言う『エストお嬢様の幸せな結婚』って、主との事ですよね、きっと？
それでもって、セリアさんも婚家に付いて来たがる素振りと、その後『自分の結婚について考えてみる』って事は……
……セリアさん思いっきり、シャルさんの事結婚相手に考えてるーっ！？

セリアの腕に抱かれたまま、尻尾をガビーン！？　と伸ばしてわなわなと震わせているユーリに全く気が付かないまま、エストとセリアは会話を続ける。

「まあ、本当に？　それでセリアは、どんな殿方が好みなのかしら」
恋バナに興味があるお年頃なのか、目を輝かせて尋ねるエスト。
それにセリアは「うーん」と考え込み、

「そうですねぇ……やっぱりわたしは、頼もしくて誠実な方が良いですね。
顔がそこそこ整っていて背が高く、いつでも笑顔を振り撒いていて誰にでも良い顔をして、冗談半分に口説き文句を口にしてからかってくるような銀髪の方は、遠慮したいです」

やがて口にしたその一言に、ユーリはんん？　と、首を傾げた。

「そうなの？　わたくしにも納得はいく言い分だけれど……随分具体的なのね」
「ええ、世の中にはそういう種類の殿方がいらっしゃるんですよ。エストお嬢様も、十分気を付けて下さいね」

ユーリが見上げたセリアは、真剣大真面目な顔をしてお仕えしているお嬢様に諭している。

シャルさん。もしや、セリアさんの目の前で、他の女性にも良い顔したんですか。思いっきり怒っていらっしゃるようですよ。
まさか私に、フォローなんか期待しないで下さいよ？

3

このままじゃ駄目だ。早く一人前にならなくちゃ。と、思い立ち。
自らの適性と合致するであろうお仕事に取り掛かり、ひとまずエストの側で周囲の様子をひたすら観察しているユーリであるが。

相変わらず子ネコ姿のまま窓枠の上にお座りし、ガラスが入っていない窓の向こう、日も沈んで風景に溶け込む森は薄暗く、見上げれば満点の星空と流れゆく雲は月に掛かり、時折細やかな虫の鳴き声が耳に届く。

そんな静かな夜の景色を眺めつつ、ユーリは溜め息を吐いた。
そして、クルリと振り向いて室内の様子を観察する。

「さあエストお嬢様！　気合い入れてドレスアップしますよー！」
「セリア、今夜は家族だけで晩餐なのだから、そこまでめかし込まなくても良くはない？」
「そんな油断はいけませーんっ！
よろしいですか、エストお嬢様？　美の道は日々の努力によって磨き上げられていくのです！」
「セリアはお洒落の話になると、人が変わるわね……」

今のところは、何らかの危険が予想される仕事内容ではなく、『エストお嬢様のお側に侍り、アニマルテラピー的に癒されて頂こう』の、真っ最中だ。

現状は特に、何か主にお伝えしなくてはならない情報もありませんねえ。

恋敵出現!?　とか、閣下からの緊急呼び出し!　とか。そういったドラマティック展開は、そうそう起こらないものです。

それにしても。向いてるとか、そういう事は取り敢えず置いといて。やっぱり私……好きか嫌いかで言えば、ヨソにお出掛けしてのお仕事よりも、在宅の作業の方が安心します、主。

お仕事なのだから選り好みなどすべきではないが、こういった苦手意識の克服もまた、ユーリに与えられた課題ではある。

現在エストの寝室では、セリアがどばーっと広げたドレスを選定したお嬢様が、疲れた様子でコルセットの紐を絞り上げられ、ようやくドレスを身に着け終えていたところであった。因みにアレは医学的観点から見ると、かなり体に悪いらしい。締め付け過ぎていなければ良いのだが。

化粧台の鏡の前の椅子に腰を下ろし、お化粧を始めたエスト。それに一つ頷いたセリアは、クルリとユーリの方に向き直ってくる。

「さあユーリちゃん、どのおリボンが良いか選び終えられたかなー？」

そう言って、宝石でも乗せるような赤いビロードが敷かれた小さな台をユーリの眼前に差し出してくる。

セリアの台詞通り、そこに並べられているのは色とりどりのリボンなのだが……それには全て、重たそうな宝石が飾られている。

そんな高価なアクセサリーを平然と示してくるセリアに、思わず後退るユーリ。

あれはどうやって縫い止められているのかは知らないが、重さでリ

ボンから、もしくはリボンごとおっこちたり、それによって傷が付いたりひび割れたりでもすれば、とてもではないがユーリには弁償出来ない。

「晩餐に出るのだから、ユーリちゃんもしっかりドレスアップしなくてはね！」

ひぃぃぃぃっ！？

に、人間は分相応という言葉を、しっかり弁えておくべきだと思いますセリアさんっ！

予想外なところで、高貴な人種に飼われるネコの実態を知ったユーリは、庶民的人間としての心情を覚えてすっかり逃げ腰。

笑顔で台を近付けてくるセリアと、警戒心も露わにジリジリと後退るユーリ。

窓から外へと飛び下りて逃れようにも、この別荘でのエストの私室は防犯上の都合でか、三階にある。逃げ場は徐々に失われてゆく。

夜の涼しい風が時折吹き込んでくる、それはまさに互いの信念と威信を懸けた、緊迫した無音の攻防戦であった。

だがしかし、背後で足の踏み場である幅の狭い窓枠が途切れ、これ以上の後退もままならなくなってしまう。

「セリア、ユーリちゃんにあまり無理強いはしないでちょうだい？」

万事休すか！　と、焦るユーリの耳に、化粧台の前のエストからおっとりとしたお声がかかった。

「ですがお嬢様。美の道は一瞬の気の緩みが命取りなのですよ？　連れ歩くネコちゃんも、徹底的に磨き上げなくては！」

唇を尖らせて、セリアは熱弁を奮う。

「愛くるしさを引き立てる小動物は存分に活用せねば！」

「家族での晩餐では、そういった活用は不用なのではなくて？」

「いーえっ！

うちのお嬢様はバーデュロイ一の美少女なのですから、そこのところをまずは身内の方々に改めてしっかりと胸に刻んで頂きましょう！　今後の社交場でも、グラシアノ様にはきっちりとガードして頂かなくてはなりませんし」

エストお嬢様のお化粧の修正を行いつつ、セリアは懇々と諭す。

ぐらぐら様の名前はグラシアノ様なんですねとか、私は動くアクセサリーですかとか、エストお嬢様がバーデュロイ一の美少女って根拠はまさか、若かりし頃の閣下の評判……？などなど、彼女の言い分には突っ込みどころが満載なのだが、ユーリにはそれを口に出す術が無い。お化粧を終えたエストにうっとりして「お嬢様可愛い」と、頬を染めている姿を見るにつけ、セリアはかなり暴走型のメイドさんのようである。

エストの足下にユーリがトコトコと近寄ると、ドレスにネコの毛を付ける訳にはいかないからか、いつもならば胸元に抱き寄せてくれるというのに、お嬢様は彼女を両手で顔の前に持ち上げるのみ。

うーん、確かに夜向けメイクを施したエストお嬢様、滅茶苦茶可愛いです……

「ね、ユーリちゃん。うちのセリア、面白くて可愛いでしょう？」

まじまじと、美少女の風貌に見入っていたところ、エストから小声で悪戯っぽく囁かれた。

……確かに。端から眺めている分には、何やら笑えるタイプのメイドさんですねえ。

主人からそんな評価を得ているとは露知らず、クルクルでふわっふわなエストの髪に慎重に櫛を通すセリア。この国でも、髪を結い上げるのは大人の女性の証らしい。

軽く纏めていたり、丹念に櫛を入れて豪奢な印象を受けるヘアスタイルは頻繁に見掛けていたが、アップに纏めるのは今夜が初めてだとか。

お嬢様の両手からそっと床へと下ろされたので、ユーリは手近な椅子の上に飛び乗り、エストの髪が結い上げられていく光景を眺める。

エストは今年、１６歳になる。

そして、カルロスは今２５歳。

日本では問答無用で犯罪者扱いであるが、バーデュロイではこの程度の年齢差はさほど珍しくもないらしい。

マレンジスの他の国の事情は知らないが、この国の男性は伴侶を娶る為には一定以上の稼ぎや社会的地位が求められる為、結婚する平均的な年齢は上がるし、女性の方は逆に、適齢期は１５歳からと若い。

主、見て下さい。

エストお嬢様の大人の装い、初お披露目ですよ。

“……”

ユーリの方を振り向き微笑むエストの姿を、懸命に主に向けて伝えると、声こそ聞こえないが、テレパシーは伝わったらしき感覚がする。

――なあ、エスト……あまり早く、大人にならないでくれよ？

かつて主が冗談めかして囁いた一言が、不意に蘇ってきて、ユーリは小さくゆっくりと息を吐いた。

エストが大人になるという事は、これから先、本格的にパヴォド伯爵家の看板を背負って、政略の表舞台に乗り込むという事。

ただでさえ、貴族の姫君と一般市民という身分差が横たわる彼らの間には、益々触れ合う事さえ叶わない壁が立ちはだかってしまう。

どれほど願っても、求めても。少女はいつか大人になるし、大人としての振る舞いを要求されるようになる。

カルロスが好きだと、そんな気持ちは『子供の戯れ』として捨て去れと強要されてしまう日が、近いうちにいつか必ずやってくる。

だからこそユーリは誰よりも早く、それこそエストの父であるパヴォド伯爵よりも先に、彼女を愛するカルロスに、大人の装いをしたエストを見て欲しかった。

その手が決して届かなくなる、その前に。

何故に自分まで参加しなくてはならないのか、全く不明な緊張しきりの晩餐を終え、ユーリは再びエストの私室の窓枠に乗っかって窓の外を眺めていた。

相変わらず満天の星は瞬き、先ほどよりも高く昇った月は煌々と輝いている。

そんな静かな夜半は、時折ザアッと吹き付けてくる風が木々を奏でるのみで、静寂を破る音も無く。
照明の一つも無いが、ただ夜を愛でる分には全く不自由は感じない。

ただ今エストは、セリアに世話を任せつつお風呂で入浴中である。
貴族のお姫様は、やはり1人ではお風呂に入らないものらしい。
本当のところ、エストはユーリを連れてお風呂に入ろうとしていたのだが、「一緒にお風呂に入りましょうね」と言われて慌ててエストの腕の中から飛び乗りた。

もし万が一、カルロスからの緊急連絡を受けたりした時に、ユーリがエストと入浴などしている最中だったりしたら、うっかりエストの裸体を主人に見られてしまう危険性がある。
というかそんなタイムリーなハプニングがなくとも、後日必要に駆られてユーリの記憶を検索した際に、『ママとお風呂』映像が出てくる可能性が……

覗き見だとかそんなつもりはなくとも、想い人の裸身を見てしまったりしたら。あの妙なところで律儀な上に生真面目な主人が、とんでもなく強い衝撃を受け、罪悪感からしばらく立ち直れなくなるのは目に見えている。

という訳で、ユーリは断固としてエストと共に入浴するのは拒否の姿勢を貫いていた。因みに、着替え中に外を眺めていたのも同じ理由である。
お風呂、という言葉を聞いた途端に腕から逃げ出し、部屋の隅っこに隠れるユーリに、

「やっぱりネコは濡れるのが嫌いなんですねえ」

などとセリアが感心していたが、あくまでもこの子ネコの姿は姿形を真似ているだけであって、その生態まで忠実という訳ではない。ユーリ本人は風呂が好きだ。その点をきっちりと主張したいところであるが、エストにもセリアにも、ユーリの鳴き声の意味はさっぱり通じない。

ふふ……私もお風呂入りたいなあ……

だがしかし、それもこれも全ては主人の為にひたすら我慢である。

エストがお風呂に入ってしまって、手持ち無沙汰になったユーリは、ヒマを持て余して……あ、いや。もう一つのお仕事である情報収集を兼ねて、別荘の内部探検でもしてみようと窓枠から飛び下り、トテテと室内を駆けると、廊下と繋がっているドアの前に座り込んで無言でノブを見上げた。

ふ。流石は我が主がお世話申し上げたお嬢様。ドアはキッチリ閉めて出入りという行動基準を、忠実になぞっておいでですね！

というか、この場合はセリアがずぼらではない、きちんと物事に区切りをつけて仕事に勤しむ、しっかりした人種と考えるべきか。やっぱり爪を立てる訳にもいかないので、バシバシと肉球パンチを繰り出してみるものの、当然というかなんというか、ドアはびくともしない。

ええいっ。日々、ネコ可愛がり主のスキンシップという名のネコじゃらし追っ掛け障害物競争で鍛えている飼いネコの実力、今こそまさに見せる時！

助走分の距離を取り、後退ったユーリは、全力でドアノブ目掛けて

ダッシュし、せいやぁっ！　と、大ジャンプを行う。
両前足を巻き付けるようにしてノブに抱き付き、ふんぬっ！　と、ジャンプの勢いと体重をかけてノブを回……回らない。

あ、あれ？

懸命にノブを回そうと身を捻るものの、それはがっちりと固く、決して動く様子も見せない。
流石に何十秒もドアノブにしがみついてはいられず、ユーリは無様にどてっと床に崩れ落ちた。

そーか。よく考えてみればここは伯爵閣下の別荘であって、「鍵？　ここ何年も掛けてねえわ」とか笑い飛ばす、我が主の自宅じゃあないですもんね。ましてや、伯爵令嬢の私室で令嬢本人は入浴中……それは鍵が掛かっていて当然です！

うんうん、と頷いて納得はいくものの、しっかりエストのお部屋に閉じ込められ状態のユーリは、ドアの前に再びお座りして、がっくりとうなだれた。

伯爵閣下！　ネコが飼いたいと思われるのでしたら、お家にはネコドアの設置を切実に希望致します！

4

「いったいあなたは何がしたいのですか？」

無人である居間にあって、ひたすらに子ネコ姿でのユーリの行く手を阻む、憎たらしい天敵を睨み据えていた彼女に向かって、背後からそんな呆れた声がかけられた。因みに何をしていたかと言えば、新たなる強敵に名付けるべく思索していたのだ。

この場に居る筈のない人物の声に、ユーリは慌てて窓の方を振り向く。

そこには予想通り、距離の制約なんてなんのその、な、行動範囲の広さとフットワークの軽さには非常に定評のある同僚が、普段着のズボンに、何故か上は黒っぽい外套を翼を羽ばたかせる分には邪魔にならぬよう両手で無理やり巻き付けるという、ファッションとしては微妙なるセンスでの組み合わせな『天使様』バージョンにて、窓の外で純白の翼をバッサバッサと羽ばたかせつつ、優雅に滞空なされていらっしゃった。

しゃ、シャルさんダメ！

今すぐ部屋に入って下さい！

「はい？」

大慌てで窓辺にまで駆け寄り、焦って辺りを見回しながら室内への侵入を促すユーリに、シャルは実に不可解そうな表情で首を傾げる。

エストお嬢様におかしな噂が流れますっ。乙女の機微を察してぇぇぇっ！

ユーリの悲鳴にやれやれとシャルは肩を竦め、その足を窓枠へと掛け、そのまま室内に……入ろうとしたところで、相変わらず翼の部分だけ横幅が合わず、ドガッとつっかえて止まった。彼の翼は、人を乗せて運べる事からも察して頂きたいが、飛翔する為に広げている状態ではかなりデカい。

……

「……」

無言で両者の視線だけが絡み合う、しばしの沈黙がその場に降りる。

……シャルさん、もしかして今、何気にツッコミ待ちですか？
それとも必ずつっかえなくては気が済まないとか、シャルさんなりの様式美でもお持ちなのですか？

窓辺の床、フカフカ絨毯の上にお座りして尻尾をゆらゆら揺らしつつ同僚を見上げるユーリは、静かに口を開いて問い掛ける。
それにシャルはぷいっと顔を背けつつ翼を消し、ヒョイと居間の床に降り立った。

「……どうせわたしは、光を大いに反射して夜でも悪目立ちな全身銀色の毛並みに真っ白な翼で、その上ガタイも大きいし。
ええ、ええ。隠密行動なんて全く向いていませんよ。何か文句でも？」

エストお嬢様のお部屋の窓の鎧戸が突如壊れていたら、謎の敵襲や侵入者に、お屋敷中上へ下への大騒動が勃発する事必至です。

拗ねたように唇を尖らせつつ言い返してくるシャルに、ユーリは追撃の一手を放つ。
どうやら、イヌバージョンではなくわざわざ『天使様』バージョンで飛んできたのは、少しでも人目を引かないよう苦慮した結果らしい。シャルはシャルなりに天狼と人間の生活で、ユーリとは正反対の苦労を味わっているようである。
即座に窓の外を確認した彼は、ホッと胸を撫で下ろした。

「なんともなっていません」

確認が出来たなら、なるべく窓から離れて下さいよ。見回りに見つかります。

やれやれ一安心と笑顔を取り戻すシャルのズボンを噛んで、くいくいと奥へと引っ張るユーリを拾い上げた彼は、居間の絨毯のど真ん中に座り込んだ。
同僚の真正面に下ろされたユーリは、ちんまりとお座りし、改めてシャルを見上げる。
急を要するハプニングが解決してしまうと、喧嘩別れしたシャルと、何を話せば良いのかサッパリ分からない。

えー、では改めまして。今晩は、シャルさん。

「……はい、今晩は、ユーリさん」

挨拶を口にしたら、いきなり次なる会話への弾みが途絶えた。
まさか、シャルがこの別荘に姿を見せるなど、予想外だったのだから仕方がない。

だがもしも、ユーリがしばし距離を取らず、あの家の中でカルロス

の影に隠れてばかりいて、シャルから離れて過ごさなければ。こんなに早く彼ともう一度向き合って、話そうとする勇気はなかなか持てなかった筈だ。

可愛い子には旅をさせろという格言があるが、主人の選択も似たようなものだったのだろうか。

シャルさん、手、叩いちゃってすみませんでした。あと、嫌いって叫んだのも……

シャルがなかなか口を開かないので、ユーリは勇気を出してぺこりと頭を下げ、真っ先に謝るべきであった過失を謝罪した。

彼が何を言い出そうと、話し合いを拒絶する姿勢を最初に示したのはユーリの方なのだから、これは自分から撤回していくべきだと感じたのだ。しかし、謝れたのは良かったが、次なる言葉が浮かばない。

「……マスターが」

話題に困って言いあぐねているユーリよりも早く、シャルが口を開く。

「マスターが仰るには、ユーリさんは溜め込む傾向があって、わたしは一方的にぶつける傾向があるのだそうです」

どうにも彼の発言は曖昧だが、ユーリが知らぬ間に、シャルもまたカルロスからお叱りを受けたのだろう。

「この世界でわたしと同じ立場にいるのは、あなたしかいません。初めて対等な感覚を覚えて、わたしは無意識のうちに、あなたにばかり甘えとストレスをぶつけていた……のだそうです」

シャルが語る客観的なその見方は、恐らくカルロスの言なのだろう。
ユーリは小さく小首を傾げた。

その感覚は、私にも覚えがありますよ、シャルさん。連盟の本部の中で逃げ惑っていた最中に、『私だけ異物だー。いやいやシャルさんが居るなあ』といった気分をですね。

シャルはユーリの言葉に小さく苦笑する。

「なるほど……マスターが仰る通り、本当にユーリさんは理解していても、わたしは分かっていなかった事が多いのですね」

主から何か、厳しいお叱りでも賜りましたか？

上からの辛い評価に、慰め励ましあうのも同僚の役割であろうと、ユーリがおずおずと促しつつシャルの膝に前足を軽く置くと、彼は爽やかに笑った。

「マスター曰わく、『この激ニブでノータリンのアホイヌがっ！女を苛めて泣かせる男の風上にも置けんアホは、去勢して元の世界に放り出すぞボケがっ！』だそうです」

いや、シャルさん。ソレ、笑い話として明るく爽やかに語る内容じゃないですよね？
主ってたまに、イエローカードな暴言吐きますねぇ……

「ユーリさんの場合は、子ネコ姿の方が饒舌ですよね」

唖然として感想を漏らすユーリに、シャルがそんな言葉を口にする。

……え、そうですか？

「ええ。わたしはユーリさんの短い鳴き声に凝縮された意図を汲み取っているから、人間の姿でいる時よりも多弁に感じるのだと思います」

ふ～ん……確かに、色んな気持ちを込めていても喉からは『にゃ～』としか出ませんが、元の姿だと頭の中で言いたい事を纏めるのにも、舌に乗せるにもタイムラグが生じますものね。

「ユーリさんは、もっと自分の気持ちを喋るべきです。どうせわたしは、あなたよりも頭が悪いそうですから？　言われなくてはさっぱり分かりません」

唇を尖らせつつのシャルの言に、ユーリはぶぶっと吹き出した。

ははあ……さてはシャルさん。

今夜急に現れたのは、主に叱られてムカっ腹が立ち、衝動的に家を飛び出したのは良いけれど、真夜中で行く当ても全く思い浮かばなくて、ヨソに出張中の同僚である私のところに無意識のうちにやってきた……と。

「……見てきたかのように、ズバッと言い当てないで下さい。さては、マスターから思念でも飛んできましたか」

いいえ～？　単に、多感なる青少年の行動パターンを私なりに分析した推論です。

にまにまと笑いを含みながらのユーリの言葉に、シャルはむーっと

不機嫌そうな表情を浮かべ、ユーリのネコ耳を指先でぐにっぐにと弄る。

痛い痛い、何気にソレ痛いですから、シャルさん。

文句を口にしながらも、ユーリは腹の底から喜ばしい気分が湧き上がってくるのを感じた。

主人であるカルロスから叱責を受けて家を飛び出し、咄嗟に思い付いた行く当てがユーリであったという事は。この同僚は口にこそ出さないが、カルロスの次に信頼しているのは必然的に彼女である、という事になる。

家からこの別荘まではそこそこ距離がある筈なのに、途中で思い止まらなかっただなんて、それほどシャルは内心ではユーリに『甘え』ている部分があったのか。

「ユーリさんなんて、いつも自分1人だけ何でも分かってます、って顔をして」

「みぎゃっ！？」

不意に両手で掴み上げられて、おもむろにはぐはぐと、シャルに弄られていた耳を噛まれた。加減されているのか痛みは全くないが、相変わらずこれは心臓に悪い。

夜道を飛んできたせいで、シャルはまたしても空腹なのだろうか。しかしユーリは何も食べ物を持っておらず、何気に激しく生命の危機だ。

そ、そういえばシャルさんはどうやって私達がこの別荘に泊まる事を突き止めたんですか！？

空腹感を覚えているらしい肉食獣の意識を逸らすべく、ユーリはそ

こそこ気になっていた点を尋ねてみた。
シャルは子ネコな同僚の片耳を解放し、

「パヴォド伯爵閣下が王都へ向かう際の旅程は、マスターと共に護衛として加わった事もありますから。例年の傾向からして、今年はこちらのアルバレス侯爵領を通過するだろうと。後は、知っている人間の匂いを辿りました」

どうだ、どんぴしゃだ。凄いだろうと言わんばかりに胸を張るシャル。
シャルが護衛をするなど、まず伯爵家の馬車の馬が怯えて大変だと思うのだが……ああ、いつぞやのフィールドワーク中と同じく、シャルだけ空を飛んでいたのか。
ユーリは前足を伸ばして、ギリギリ届いたシャルの前髪を撫でてやる。

あー、シャルさん偉い偉い。凄い凄い。
……って。あるばれす、こーしゃくりょー？

やけに聞き覚えのある単語に、ユーリは自分の表情が引きつるのを感じた。

「マスターや師であるベアトリス様が、我々をイヌやネコとして持て囃す事を『そんなものは所詮偽物だーっ！』と苦々しくお考えの、アルバレス様のご実家ですね」

ああ……エストお嬢様とアティリオさんは、結局どういう関係なのかと思っていましたが……実家の領地が隣接してたのですね。

アティリオに関しては、ユーリとしては『なるべく関わり合いにな

りたくない』というのが本音だ。
向こうも、魔術師のフィールドワーク中に非情な手段を駆使してでも、積極的に攻撃してこようとしなかったところから察するに、彼の心中としては複雑なのだろう。例えどんなにシャルやユーリにたいして、アティリオが不満をぶつけようともカルロスが決して、アティリオを排除しようとしないように。

彼らは自らの信念こそ分かたれたが、その奥底では友人同士でもあるのだから。
シャルがその気になれば、アティリオなど簡単に血祭りに上げてしまえると、本人も認めていたぐらいだ。闘争派な肉食獣である同僚が今まで見逃していた理由など、『カルロスが望んでいないから』興が乗らないとしか、想像がつかない。

と、思索に耽っているユーリのヒゲを、シャルがむにっと軽く引っ張る。
痛みに我に返り、人のヒゲを勝手に摘まんでいるシャルの指先に、無言のままネコパンチをお見舞いした。

「ユーリさん、また黙り込んでいますよ。1人で考え事をするのなら、このまま持ち帰っても構いませんね？」

持ち帰り？　って……グリューユの森にですか？
いや、まだ私、お仕事中なのでダメです。

きっぱりと断ると、シャルは再びむーっと不満そうに睨んでくる。

そんな顔しても、ダメですって。
シャルさん……意外と甘えっ子さんですか。それともクールダウン期間を経て、おもむろにツンデレのデレ期に突入ですか？

5

ユーリは自らの身を両手で眼前に持ち上げているシャルを見返し、溜め息を吐いた。

だいたいシャルさんは私に吐いた暴言、まだ謝って下さっていませんしー？

エストお嬢様の側で安全飼いネコ生活中の私が、どうして帰らなくちゃならないんですかねぇ？

「……ユーリさんも、相当意地が悪いと思います」

ユーリのにっこり笑顔での嫌味に、シャルは苦虫を噛み潰したような渋い表情を浮かべる。

シャルさん、悪い事をしたら『ごめんなさい』はしなくちゃダメですよ？

「言い過ぎてごめんなさい」

はい、良くできました。

むーっと頬を膨らませながらも、謝罪の言葉を口にするシャル。ユーリの前足が届く範囲である前髪を再び軽く撫でてやると、胸元にギュムッと抱きすくめられた。

流石はあの主人に長年仕えてきただけあって、照れ隠しにしてもその抱擁は半端なく全力である。「ぐぇ～」とくぐもった呻き声を上げつつベシベシと殴りつけ、ようやくその力が緩められた。

やれやれ。これでめでたく喧嘩両成敗ですね。

抱きすくめる力が弱まりはしたが、相変わらずユーリはシャルの裸の胸元に抱っこされている。彼が肩から掛けていた筈の巻き付けていた黒っぽい外套は、床に滑り落ちて久しい。

恋しい人の胸に抱き締められる、なんて。ただでさえ落ち着かない状況であるというのに。せめて露わになっている素肌を隠すぐらいの気遣いをして欲しいものだ。

「では、家に帰りましょう」

だから、仕事があるから無理です。

ユーリを胸元に抱いたまま嬉々として立ち上がるシャルに、彼女はベシベシベシっとその腕に肉球連打をお見舞いしつつすかさずツッコミを入れた。

帰宅拒否されたせいか連打攻撃を食らったせいか、不満げに眉をしかめたシャルは、不意に何かに気が付いたようにハッとした表情を浮かべ、寝室の方に視線を向けた。

「水音が……エステファニアお嬢様が、入浴を終えられたようですね。
では、わたしは帰りますが……本当にユーリさんは一緒に帰らないのですか」

帰りませんて。

鍵が掛かった室内から、突如ユーリの姿が消えていたら大問題だ。

エストに非常に心配をかけてしまうだろうし、カルロスの事情でユーリはエストの下に預けられたのだから、無断で帰宅など言語道断だ。

「……分かりました。
では、明日もまた来ます」

エストやセリアが浴室から出たせいか、シャルはユーリの耳元に唇を近付けて微かな声音でそう囁くと、ペロリとそのネコ耳を一舐めしてから彼女を床に下ろし、拾い上げた外套の前後をバサリと逆向きに羽織った。

シャルさん……その格好はやっぱり私のツッコミ待ちですか？
それともその創意工夫っぷりに、私は感じ入るべきですか？

「仕方がないでしょう、わたしの翼は背中から生えているんですから」

喉元で留める外套のボタンを背中で留めるとあら不思議。背中だけ丸空きな、照る照る坊主シャルの完成だ。明日も晴れるだろうか。

背中が丸見えのシャルは窓に近寄り、中庭の様子を見下ろして見回りが回っていない事を確認すると、窓枠に足をかけた。同僚を見送る為に、再び窓の下の絨毯にちょこなんとお座りしているユーリにシャルは顔だけ振り向き、そっと呟いた。

「お休みなさい」

はい、お休みなさいシャルさん。

いつもの、何を考えているのか分からない笑みではなく。本当に嬉しそうにシャルはふわりと笑い、身を屈めてユーリの頭を優しく一撫でする。

そして彼は窓から飛び出し、一瞬にしてその背には純白の翼が広げられた。バサバサと力強く羽ばたいてゆく彼の羽音に気が付いた者が頭上を見上げても、最早はその時には既にシャルは遠い夜空の彼方だ。

白い翼は本当に綺麗なんですけどねえ……あの、照る照る坊主的外套の下はズボンしか着てないとか、その実態に思い至ると雰囲気台無しになるのが天狼さんの天狼さんたる所以なのでしょうか。

『何かちょっと、やり取りが甘くなかった～？』などと、主からニヤリとからかわれそうなお休みの余韻の照れ臭さを誤魔化すべく、違う方向に焦点を当ててみるユーリである。

窓枠にひょいと飛び乗って夜風に吹かれると、先ほどまでは止んでいた虫の音が届く。

「ユーリちゃん、お待たせしましたー！」

ふと気が付いた事実に、んん？　と首を傾げつつ窓の向こう、シャルが飛んでいった夜空を眺めていたユーリだったが、突如として寝室と居間を繋ぐドアが開かれて、彼女はキョトンとそちらに首を向けた。

輝くような笑顔を浮かべたセリアが、ユーリの側へと歩み寄ってくると、彼女を両手でひょいと抱き上げる。

……セリアについてを問い詰めてないだとか、いったいいつからユーリの様子を窺っていたのだとか、明日も来るって明日はアルバレス侯爵家の居城にお泊まりですが本当に忍び込む気ですかとか、今

更シャルに問いたい疑問が湧き上がってくる。

しかし、そんな懊悩を抱えているユーリをヨソに、セリアはエストの休む寝室へと足を踏み入れ、部屋の主人であるエストはフカフカなクッションに腰を下ろしていて、自らのメイドとネコに微笑みかけてきた。

寝る前であるからか、当然寝間着である。ユーリはさり気なく湯上がりのエストから視線をズラした。

エストは、何やら木製の箱や布の袋の中身を探って銀色の布地と針と糸を取り出しているところであった。あの箱はソーイングセットらしい。

「あら、ユーリちゃんはこれが気になるのかしら？
ふふふ、実はあなたへのプレゼントなのだけれど、出来上がりまでまだ内緒よ？」

エストの手やソーイングセットの方に重点的に視線をやっていたら、彼女は製作途中らしき作品を背後に隠して楽しげに笑う。

うーん、私、こちらの世界に来てから、誰かにプレゼントを貰ったのってエストお嬢様からばかりな気が。有り難い限りです。
私もお嬢様へお誕生日プレゼントぐらいは用意したいものですが、子ネコ姿で用意出来る品って何でしょう……

「ではお嬢様、浴室お借りしますね」
「ええ」

むむむ……と、考え込むユーリはさておき、寝室の更に奥まった位置にある、エストが先ほどまで使っていた浴室へと足を踏み入れたセリア。

考え事に没頭していたせいで、メイドさんにいそいそと連れ込まれたユーリは、盥に湯が張られる水音でようやく我に返った。

焦る要因であるセリアの着衣だが、彼女はメイド服のままだ。主人が深い罪悪感を抱く要因にはなり得ないようだと、ホッと安堵の吐息を吐く。

どうやら彼女は、ユーリをお風呂に入れて下さるおつもりらしい。

「さ、ユーリちゃん、キレイキレイしましょうねー？」

はあ……こんな姿のせいでお手数をお掛けしますが、よろしくお願い致します。

盥に張られたお湯を使って、丁寧な手付きでユーリの黒い毛並みを洗うセリア。

余計な手間を掛けているのだからと、大人しくじっとされるがままになって万歳したり何故か肉球をくにくにされつつ。

セリアが石鹸を泡立て始めると浴室内にふんわりと立ち上る香りに、ユーリはふと気が付く。グリューユの森の家でカルロスが好んで使っていた石鹸だ、と。

主……主のお手製香水で包むだけではなく、入浴で使う石鹸まで同じ物を用意して、眠る時に身に纏うのはお揃いの香り（はーと）とか……！　もうどんだけあなた様はラブラブなんですか！　ヤバいです主！　離れていても私のあなた様への崇拝度数がグングン上昇とか！

てゆかセリアさんも、エストお嬢様の愛用品の石鹸を私に使わないで下さいな！？

「あら、やっぱりユーリちゃんもこの石鹸好き？

そうよね、あなたのご主人様のカルロスさんが作った石鹸だものね」

大人しくされるがままになっていたユーリが、石鹸の香りを嗅ぎ取るなり「みーみー」と鳴き出して、セリアはにっこりと笑って「グッジョブわたし！」とか言っている。

「よく知っている香りの方が、やっぱり嬉しいものねー？ふふ、ユーリちゃんすっかりご機嫌ね」

……すみません、セリアさん。これはご機嫌な鳴き声ではなくてですね。

飼いネコが自分の気に入りの石鹸を使ったところで、エストはさして気にしないのかもしれないが、ユーリの主は非常にロマンチストである。

セリアの手によって隅々まで洗い上げられつつ、ユーリは泡が入らないよう目を瞑って、この後カルロスへとどんな情報を伝達するべきか、今後の現在の自分を取り巻く状況について考えてみた。

主の様子や、一般の村人の皆さんの服装からして、こちらの世界では女性は男性の前でみだりに足をさらけ出さないのがマナーなのですよね。

“……”

日本ではこう、『巨乳』『爆乳』『美乳』という単語があるのに対し、美しい足を称える二文字に関しては『美脚』ぐらいしか思い付かない事からも、恐らく日本人男性は『足よりも胸！』を好む文化だと思われるのですが。

“……”

バーデュロイの貴族女性の夜会服は、胸元が大胆に開いているんですよねえ……エストお嬢様も、実にけしからんモノをお持ちでした。思い出すだにけしからんけしからん。

“さっきからお前は何が言いたい”

何気に考え事をしている最中に、主人へとテレパス回線を繋ぎたい時と同じぐらい、うっかり強く念じてしまっていたらしい。セリアの手によって盥のお湯を流し掛けられつつ、ユーリは真剣に自らの主人へと問うた。

主、エストお嬢様のお寝間着を拝見して、ついでに添い寝してもようございますか？

“……”

因みに伯爵家の居城に預けられた初日である昨夜はどうしていたのかといえば、ユーリはお城に着くなり泣き疲れて早々に眠ってしまい、目が覚めたら城主達の出発に向けて慌ただしい明け方前だったので、エストは早々に起き出して支度を整えていたのだ。

間違い無く、お嬢様の素足や足首やふくらはぎや、エストお嬢様の寝相によっては膝だって視界に収める事になりますが……

ああそれに、きっと薄ーい布地でしょうし、抱き締められたらエストお嬢様のけしからん膨らみにしっかりと押し付けられてしまいますねぇ。

“〜〜〜っ！？　ぜってー添い寝なんぞするなこのアホネコがっ！”

そのように怒鳴り散らしつつ、カルロスからのテレパス回線はブチリと途切れた。

何も知らないセリアは、相変わらず優しい手付きでユーリの全身の泡を流すと、ふっかふかのタオルで水分を拭ってくれる。

エストお嬢様の寝間着姿を見てもダメとは、念押しをなされませんでしたねぇ。殿方とは本当に悲しいサガをお持ちです。

ふ……と、自らの主人の可愛い純情っぷりに微笑ましさを抱きつつ、主の願い通りになるべくエストの寝間着姿からは視線を外し、寝台に誘う愛らしいお嬢様の声を断腸の思いで振り切り、寝椅子の上で丸くなるユーリであった。

移動初日、本日エストお嬢様の周辺に特に異常は無し。

パヴォド伯爵に逆恨みを抱く輩からの嫌がらせ及び、工作の気配無し。

エストお嬢様が共に寝ようと寝台に誘うお声を、サービスで思い返して差し上げつつ……以上、ユーリより我が主へ、本日の最終報告です。

6

悠里はいつものように、大学での講義に出席し終えると、駅から電車に乗ってバイト先であるおもちゃ屋さんへと向かった。
本日の作業は品出しとレジ打ちで、大切なお客様であるお子様が財布……もとい、やはり大切なお客様である親御さんに思わずねだるように、手頃な値段のお菓子が目立つように気を配りつつ。

レジ脇のお菓子はついで買いが狙える、大切な商品なのだ。例え売り上げへの貢献は微々たる額でも、おもちゃが高くて買えぬと断念した保護者が子供を宥めすかす手段として買い与えて下さったりもする。
それは消費者が無意識のうちに店にたいする（もう二度と来たくない）といった悪感情を抱かないようにし、足が遠のく可能性を減らし、再度の来店へと繋がる。
接客業はそう、小さな事からコツコツと。

本来、消費者側からしてみれば店員などいなくとも、店の中に商品さえあれば自分で探して買える。それを、店舗を通しての売買でわざわざ余分な金額を支払っているのは、彼らは店側の『サービス』に対してお金を出しているのだ。
欲しい商品がすぐに見付かるディスプレイ、どんなおもちゃなのかを気軽に聞ける詳しい説明、綺麗な店舗、気分の良いお買い物……商品の代金に、サービス料がプラスされた店頭表示価格のお金を払う。消費者に納得のいくお買い物をして頂くのが、悠里達従業員の本来の目的である。

先輩のバイト店員が、にこにこと笑顔でとあるおもちゃについて商

品説明をし、『なかなか良さそうなおもちゃだわ』というお客様の購入意欲を煽っている姿を、レジ前待機がてら見学しつつ。

うーん、お見事……あれがセールストークというものか。

勉強になります、先輩。

このアルバイト経験で悠里が学んで身に付いたと思われる技術は、相手の目を見てにっこり笑顔で「いらっしゃいませ」と朗らかに挨拶を出来るようになり、咄嗟の場合でもですます調で話す、というものぐらいだろうか。

まだまだ、滑らかなる滑舌やウィットに富んだ会話や切り返し、即座に返事を口に出来るとは言い難いが、ただ言葉にならぬ感情が頭の中で渦巻くしか出来なかった一時期と比較すれば、そこそこ鍛えられてきた感はある。

悠里はシフトで組まれていた作業割り当て通りにバイトでの勤務を終えて、スタッフルームに戻っていた。

このバイト中は、人目を気にせず呼吸が出来る、とても貴重な時間だ。一歩外に出れば、また……

「あ、森崎さん待って待って」

溜め息を吐きながらタイムカードを入力しようとしていた悠里に、スタッフルームのドアを開けた店長が、忙しなく声を掛けてきた。

「お疲れ様です、店長」

「お疲れ様。森崎さん、もうタイムカード押しちゃった?」

「いえ、今からですが?」

悠里の答えに、まだ30代半ばほどの若い店長は、ホッとしたよう

に笑顔を深めた。
そしてその両手をパンっと合わせて、
「急だけどお願い森崎さん、残業して！」
この通り！　と、頼み込んできた。
悠里としては、帰宅が早かろうが遅かろうが、さして困りはしないのだ。どうせあの気持ち悪い輩は、帰り道に変わらず張り付いてくるのだろうから。むしろ、悠里の急な残業で奴の予定が狂って振り回されるのなら、ざまあみろ、だ。
「別に構いませんけど？」
「有り難うー！
じゃあ、早速バックヤードに来て」
「倉庫作業ですか？」
スタッフルームからすぐ一枚ドアを隔てたすぐそこは、おもちゃ屋さんのバックヤード……いわゆる商品在庫保管場所である倉庫となっている。
悠里がバイト先に選んだおもちゃ屋さんは、店舗の規模も倉庫の大きさもそこそこ大きく、倉庫整理も一仕事なのである。
とはいえ、商品が詰まった段ボール箱や折り畳みコンテナなどは重たく、悠里は倉庫での作業を割り振られた事は少ない。
「ごめんね、ヤード担当のパートさんに急用が入ってさ……
こっちの単管ラックのコンテナに食玩系が入ってるんだけど、中身全部チェックして、賞味期限残り3ヶ月のお菓子は弾いといて欲しいんだ」
そう言って店長が示したのは、単管を組んで板を敷き、二階立てに

してある簡易式の在庫置き場の一つである。
倉庫の中は商品の分類別に置き場が決まっており、ラベルが貼ってあったり天井から『過剰在庫一時置き場』『季節品在庫』『新入荷在庫』『大型商品在庫』といった文字が書かれた看板が吊り下げられている。
悠里が任されたラックは、細々とした大きさの商品が並んでいる中でも、お菓子の類いが纏められている棚であった。

「賞味期限残り3ヶ月以下のはこっち、1ヶ月以下のはこっち、切れてるのはこっちに。
3ヶ月以下は三割引、1ヶ月以下は半額、切れてるやつは避けてそのままね。
ラベラーの使い方は分かる？」
「はい」

よほど忙しいのか、せかせかと説明する店長。
要するに、仕舞われている在庫のお菓子の賞味期限をチェックして、期限が残り少ないお菓子を指定された箱に入れ、値下げラベルを貼り付ければいいのだ。量が多くてしんどいぐらいで、さほど重労働ではない。

「良かった。森崎さん、何時ぐらいまで働ける？」

悠里はチラリと、倉庫の高い壁に掛けられた丸い掛け時計に視線をやった。現在時刻、午後六時を大きく回ったところ。

「八時ぐらいまでなら」
「了解。僕は事務所に居るから、作業が終わるか、時間になったら声かけて」
「分かりました」

店長は「よろしく！」と悠里を1人倉庫に残し、スタッフルームのドアへと向かった。奥にある事務所で何か急ぎの仕事があるらしい。

「さて……」

悠里は在庫置き場を振り返り、独り言を零しながらそれを見上げた。

「……八時までに終わりますかねぇ？」

賞味期限のチェックは確かに重要だ。

食べる直前になって、買ったお菓子の期限が切れている事に気が付いたりしたら、地味に腹立つ。

とはいえ、コンテナ8個分を1人で仕分けするのは、なかなか骨が折れそうである。

黙々と作業に没頭し、ふと顔を上げた悠里が、壁に掛けられた時計の針が夜七時半を回っているのをなんとなく視界に収めた時。

不意に背後からポンと、彼女の肩に手が置かれたのだ。

びくんっ！　と、激しい恐怖と焦燥感から無意識のうちに痙攣してしまい、悠里は……いや、ユーリは寝起きから無駄に活発な心臓を落ち着かせるべく、ゆっくりと深呼吸をしながら周囲を見回した。

そこは地球でのバイト先の倉庫ではなく、パヴォド伯爵が所有する別荘の、エストの寝室。

昨夜丸くなったフカフカな寝椅子の上で。閉じられた窓の鎧戸の僅かな隙間から、朝日が差し込んできている。

ううう……微妙な夢見です。

まったく。朝っぱらから嫌なモノを見ましたねえ。

一晩経っても、変わらず自身が子ネコ姿である事を確認して、ユーリはキョロキョロと薄暗い寝室の中を見回し、カーテンが半分引かれている天蓋付きの寝台に、幕を避けつつ飛び乗ってみた。
エストが４人ぐらいは余裕で寝そべれそうな、大きい上にフカフカな寝台の真ん中で、薄明かりの中でも存分に輝く豪奢な波打つ黄金の髪を枕の上に広げ、すうすうと健やかな寝息を立てて寝入っているお姫様。
上掛けを肩までしっかりと被っているので、見えているのは寝顔と手ぐらいなもの。

彼女の寝顔を、ユーリは存分にジィーッと眺めた。
長い黄金の睫毛はその瞼を彩り、柔らかい印象を与える頬はほんのりと薄桃色に色付き、紅を乗せずとも赤くぷっくりとした唇はうっすらと開かれていて、真珠色の歯が小さく覗く。
染み一つ無いきめ細やかな肌、整った顔立ち……

ううん……エストお嬢様、寝顔も眼福です。びゅーてぃふぉーです。至高の芸術というやつですね！
我が主も寝顔が一番美麗ですが、もしや2人並んで一緒に眠っているところが最もお似合いなお姿なのでは……

むむむむ……と、ユーリは自らの頭の中で、眠るエストの横に眠っているカルロスの姿を追加してみた。
ちょっとイメージしてみたら一幅の絵画のように、完成図からは荘厳な印象を受けるのだが、これも両者の派手な金髪による華やか効果だろうか。羨ましい限りだ。

と、不意にユーリの背後で天蓋のカーテンがシャッと引かれて、寝

台の上に明るい光が差し込まれた。

「あら、おはようユーリちゃん。早起きね」

エストの傍らにお座りした体勢のまま背後を振り向いたユーリの頭を撫でつつ、にこやかに朝の挨拶を寄越してくるセリア。

おはようございます、セリアさん。

そろそろエストの起床時刻なのだろう。

いつの間にやらやって来たセリアは窓の鎧戸を大きく開け放ち、寝室内はすっかり明るくなった。

寝台の上からピョンと飛び降り、テテテと窓に駆け寄ったユーリは、窓の外の光景を見回す。今朝も素晴らしい景色だ。

眩しい朝日、小鳥たちの囀り、森を渡る爽やかなそよ風に乗せて運ばれてくる、「ふんっ！　ふんっ！」という、暑苦しい裂帛の気合い……

ユーリは無言のまま階下の庭を見下ろしてみる。

雑草一つ生えていないそれなりに開けた地面の上で、朝っぱらから素振りをしているご令息が1人。

ぐらぐら様、朝も早くから精が出ますねえ。

というか、あの方は剣術を修めていらっしゃる方だったのですか。

窓枠に乗っかったまま、何気なく視線を巡らせたユーリは、朝稽古中のグラに近寄ってくる人物の姿を捉えた。

それはどことなく見覚えのある、壮年に差し掛かった執事っぽい服装の男性で、何やらグラに話しかけ始めた。

グラは素振りの手を止め、無表情のまま執事を見返して何事かを返している。
……だが、ユーリが見下ろしている場所は三階であるせいか、全くもって会話は聞き取れない。
あの執事さん、どっかで見た覚えがあるんですけど……途中で引っ掛かって思い出せませんねえ。
その中途半端な感覚が、妙にモヤモヤとした不愉快さを抱かせ、一度気になりだすとちっとも落ち着かない。確かに対面した事がある筈なのに、思い出せないもどかしさ。
ユーリは溜め息を吐き出し改めてクルリと寝室の様子を振り返ると、セリアがエストを起こそうとしているところであった。
寝室内を駆けてドアの前にお座りし、「にゃーにゃー」と鳴いてセリアの注意を引いてみる。
「ユーリちゃん、どうかしたの？」
爪で引っ掻かないように気を付けつつ、両前足でドアを叩くように滑らせてみると、
「ああ、外に出たいのね？」
ユーリの意図が通じたらしく、セリアは笑顔で頷いてユーリを抱き上げ、ドアを開いて居間の絨毯に下ろしてくれた。
ユーリは更に廊下へと繋がるドアの前に座り込み、「にゃーにゃー」と鳴きつつ、憎き天敵をバシバシと叩いてアピールする。
「えっ……もっと遠くにお散歩に行きたいの？

うーん、どうしよう……」

出立前にユーリが行方不明になる事を懸念しているのか、セリアは悩む様子を見せる。

朝ご飯までには戻ってきますから！　セリアさん、このドア開けて下さい～っ！

更に「にゃーにゃー！」と、騒ぎつつドアに肉球パンチを見舞うユーリの姿に、セリアは観念したように肩を竦めた。

「ずっとお部屋に閉じ込めておくのも可哀想だしね。名前を呼んだらすぐに出てくる大人しくて賢いネコちゃんって、カルロスさんからの太鼓判、信用して良いのよね？」

うんうん、と頷いてみせるユーリ。

セリアは少し不思議そうに、ユーリの名を呟くので素直に「にゃ」と鳴いて返事をすると、彼女は益々不可解そうにユーリを凝視してくる。

「ユーリちゃん、ドアを開けてあげるから、そこを少～し退いてくれる？」

……ユーリは見た目こそ子ネコであるが、意思疎通が可能であるという事にセリアが気が付き始めてしまったようだ。

うーん、ちょっと気儘に振る舞い過ぎたようですね。

思えば私、普通のネコのフリなんて全然していませんし。

閣下のご命令に反しますし、なるべく知らんぷりしていましょう。

うん。

という訳で、セリアを見上げたままキョトンと首を傾げてみせるユーリ。
反応するのは名前と「おいで」という言葉ぐらいですよー、という事を、今更ながらアピールしてみる。

「ユーリちゃん、また馬車に乗らなくちゃならないから、ちゃんと帰ってきてね？」

はーい。

何かおかしいな、という違和感を覚えたようであるが、セリアはカチャリとドアを開けてくれるので、その隙間からいそいそと廊下に飛び出すユーリであった。
昨日の夜は断念したが少しくらいはお散歩に出たいし、何よりこのモヤっと感を解消しない事には、気になって仕方が無い。

早朝の静かな廊下を横切って階段を駆け下り、一階に降り立ったユーリは、開いている手近な窓から庭へと抜け出し、トコトコと回り込んでグラと執事の姿を探す。
もう会話を終えてどこかへと立ち去ってしまっているかと思われたが、何やらひそひそと声を潜めて何かを話し合っているようである。

好奇心からコソコソと茂みに身を隠しつつ近寄っていくと、彼らの声がようやく耳に入ってきた。

「……ザナダシアの動き、やはり不穏な匂いが」
「私は父上の意向に従うまでだ。
だがその時がくれば、誰がなんと言おうが、私が出る」

「ですがグラシアノ様、あなた様はパヴォド伯家の跡継ぎ。出兵などなされて、万一の事があれば……」

三階から見下ろしていた時にはよく分からなかったが、茂みに隠れて近寄り、じっくりと観察してみてようやく思い出した。エストがグリューユの森を訪れた際、付き添っていたおじ様執事さんだ。てっきり、エスト付きの爺やさんなのかと思っていたが、この様子を見るとグラの執事なのだろうか。

「私の取り柄など、どうせこれしかない。もう下がれ」
「はっ……」

グラは手にした長剣を見下ろして低く呟き、執事に手を振って追い払うような仕草を示す。
執事は慇懃に頭を下げ、隠れているユーリの存在に気が付いていないのだろう。目の前をそのまま通過していき……何故かは分からないが、口元に笑みを浮かべていた。

再び一心不乱に素振りを始めたグラ。
その長剣は刃を潰している練習用の物なのか、本物の真剣であるのかは、素人であるユーリには判別がつかない。剣を見たのは、今日が生まれて初めてなのだから。
「ハッ！」と、気合いを吐き出して、振るわれたその刃の軌跡、ビュンッ！　と空気を切り裂く短く鋭い音が耳を打つ。

主……主……

“ん？　おはようユーリ。
どうかしたか？”

何かは分からずとも、黙々とグラが長剣を振るう姿に言い知れぬ不安を覚え、ユーリは主人であるカルロスへと、内心で懸命に呼び掛けていた。

主、ザナダシアとはなんですか？

しもべからのその問い掛けに、カルロスはしばし黙り、

“バーデュロイの隣国に位置する国の名だ。
パヴォド伯爵領から東はザナダシア王国の領土になる”

ユーリが理解出来るようにと、カルロスはマレンジス大陸のバーデュロイ国周辺を拡大した地図をイメージし、ユーリの脳裏に送り込んできた。
バーデュロイの王都はパヴォド伯爵領から見て北西部。アルバレス侯爵領はパヴォド伯爵領のすぐ北。

元・デュアレックス王国の領土はマレンジス大陸の中央に位置しており、バーデュロイはその西南西に隣接し、ザナダシアは南に存在する。
アルバレス侯爵領から東はデュアレックスで、パヴォド伯爵領から東はザナダシア……

“ほー。ザナダシアがきな臭い、ねえ……
いよいよ武力衝突が起こるのかね？”

主、何か嬉しそうに感じます。

ユーリが地理を確認している間に、彼女の知り得た情報を読み取っ

たらしきカルロスの呟きに、ユーリは憮然と返した。

“戦争なんざ、ちっとも嬉しかねえさ。だがな、いざ開戦ともなれば俺は真っ先に戦場に出るからな。一応心得ておけ”

え……！？

“別に、お前を連れてくつもりはねえ。

だが、連盟には間違いなく大量の出征要請が下る。術者は戦力になるからな。

女子供を戦場に駆り出す訳にはいかねえから、俺ら若い連中が軒並み出るしかねえだろ？”

かつて、連盟について教わった際に、確かにユーリは主人から聞いてはいた。

連盟の奉仕には、『紛争地帯の最前線送り』という過酷な任務も存在すると。

けれども、ユーリの周囲はとても平和だったから。戦争など、遠くの出来事という認識しか、彼女には持ち得なかったのだ。

“ま、そうカリカリすんなユーリ。

バーデュロイとザナダシアは、ここ何十年も微妙な均衡だったからな。今更だ。

どちらかに派手な政変でも起こらん限り、真っ向から戦争なんざしねえだろ”

相変わらず、隠れているユーリの姿に気が付かぬまま、グラは無表情で剣を振るっている。

それは綺麗に型をなぞっているようで、基本動作を黙々と繰り返しているのだろうか。

朝日を反射する金属の輝きに目を細めつつ、ユーリはぶるりと身を震わせた。

主、主は……

カルロスは上手く言葉に出来ないユーリの感情を読み取ったのか、

“そんな心配はすんな。最初っからそれを目当てに動いてなんざいねえよ。

俺はなあ、ユーリ。単に元々、ザナダシアは好きじゃねぇんだ。

他の国の事情はよく知らねえ。だが、あの国で経験した事は、どうしたって忘れる事なんか出来ねぇ。そういうもんだ”

そう静かに告げると、彼はテレパシーを切った。

この世界は決して、平和なだけの優しい場所などではない。

マレンジスにはマレンジスの流儀があり、ユーリは主人であるカルロスに従う存在だ。

カルロスは、戦力になどならぬユーリを戦場に連れて行くつもりは全く無いのだろう。

けれども、第一の使い魔の方はどうだろうか。大きな翼を広げ、縦横無尽に天空を駆け巡る獣である、シャルは。

7

ガタゴトガタゴトと、パヴォド伯爵一家に連れられ馬車に揺られてやって来ました、アルバレス侯爵の居城。
領地の境が国境だそうですから、城壁がやけに高いのも頷けます。防衛を考えて作られているんですね。
思えば、パヴォド伯爵の居城が由緒ある広大な古城で、高い塔があったり城壁が高かったり、隠し通路の入り口っぽい場所がある（カルロス談）のも、同じような理由なんでしょう、きっと。

ユーリは最近すっかり慣れてきた抱っこによる移動の間、目の前の建築物を首を限界まで仰け反らせて見上げつつ、そんな事を考えていた。
一言で表すと『うわー、おっきい～』という、田舎者丸出しな感覚である。

城門をくぐって城内へと足を踏み入れると、吹き抜けになっていて広々とした玄関ホールだ。目の前には赤い絨毯が敷かれた大きな階段が、緩やかなカーブを描きながら二階へと繋がっている。
「おお」という声がして、二階から姿を見せた初老の男性が、深い皺を刻んだ顔ににこやかな笑みを浮かべ、ゆっくりとそこを下りてくる。その彼の背後には付き添いだろうか、若々しい青年が続く。

「おお、よく来てくれたのぉ、エスピリディオン殿」
「久々ですね、ドゥイリオ殿」
「うむうむ、細君はほんにいつ見ても麗しい。ご機嫌よう、レディ・フィデリア」

パヴォド伯爵から『ドゥイリオ殿』と呼ばれた初老の紳士は、続いて本日ユーリを抱っこしているネコ好きたるフィデリアに、笑みを深めて彼女が差し出した手の甲に軽い接吻を落とした。

「ご機嫌よう、ドゥイリオのおじさま。お元気そうでわたくしも嬉しゅうございますわ」

ネコを抱っこしている貴婦人に対しても、なんら躊躇いなくこの行動……ドゥイリオのお爺様は、なかなかどうして器の大きい人物のようですねぇ。

ユーリは尻尾を揺らしつつ、じーっと好々爺といった雰囲気を醸し出すドゥイリオを観察する。伯爵一家とやけに親しげな空気の中、グラやエストの成長を喜んでいるようだが、この人は何者なのだろう。

でんっと構える居丈高な貴族というイメージを抱いていたユーリにとって、アットホームなお出迎えをして下さるところが意外なのだが、この初老の男性がアルバレス侯爵家の人間というのは想像に難くない。

玄関ホールでの立ち話から、美しい庭が見渡せる開放的なラウンジへと場所を移し、メイドさんがお茶を淹れてくれる間に、ユーリは続いてチラリと、若い方の男性に視線をやった。

青年のあの亜麻色の髪は、アティリオを彷彿とさせてビミョーな感覚を覚えるのだが、フード付きのマント男とは別人である。

到着早々、お茶とお菓子を頂きながら歓迎のお喋りだなんて、ユーリが想像していたお貴族様の生活とは随分違う。

フィデリアの膝の上に下ろされて同席を果たし、お茶の間もレディの手ずからお菓子の欠片を分けて頂くなどという、来訪側のマナー

としてどうなんですかそれ？　と、尋ねたくなるような行動をなさる伯爵夫人。

いや、焼きたてらしきマドレーヌは有り難く食べますけれども。美味しくうまうまです。

そんな私の様子を眺めながら笑う、伯爵閣下とドゥイリオのお爺様が何か怖いです。

「あなたとこうしてお話しするのはお久しぶりですね、エステファニア嬢。

本当にお美しくなられた……こうしてあなたの愛らしいかんばせを、心ゆくまで愛でられる幸運に浴する私は、本当に幸せ者です」

そんな中、当然のようにお茶の席に着いた、アティリオ似ではあるが人間である青年が微笑みながらエストに声を掛けた。

……何か今、このおにーさんの口から、もったいぶったクサい台詞が聞こえてきた気がするのですが。

エストお嬢様のお隣に座られているぐらぐら様、無表情から眉間に皺が寄りだしましたねえ。

エストのレディーズメイドであるセリアや、フィデリアのレディーズメイドらしい年配のメイドさん、それに侯爵家で働いているらしきメイドさん達は席に着かずに背後に控えているのだが、堂々と同席する資格を有するという事は。

まさかこの青年がアルバレス侯爵なのでしょうか……って、普通挨拶するのは身分が高い相手を優先するでしょうから、ドゥイリオさんよりもこのおにーさんが目上って事は無いですよね。

「有り難うございます、ブラウリオ様。ブラウリオ様のような見識の深い方にそんな耳に心地良いばかりのお言葉を頂いてしまったら、わたくしは少しばかり鼻持ちならない娘になってしまいそうですわ」

エストは青年ににっこりと微笑み、喜んでいるのか違うのか、どちらとも取れる返答を返している。

……かの青年の名は、ブラウリオというらしい。パヴォド伯爵家の方々よりも、アルバレス侯爵家の人々は名前が似たり寄ったり過ぎて、ユーリは頭の中がこんがらがって辟易してきた。

もっとスッキリした名前にならないものか。『一太』『二朗』『三夫』とか、どうだろう。

「いいえ、エステファニア嬢。あなたの愛らしさは、間違いなく今年の社交界の話題を攫う事は間違いありません」

三夫もといブラウリオは、尽きることなくにエストに向かっての賛辞を口にしている。

このブラウリオはアルバレス侯爵家の人間らしき事は確定として。

ユーリが伯爵の口から聞き及んだところによると、エストへの縁談が持ち上がっているのはこの三夫ではなく、一太もとい、アティリオの筈だ。それなのに何故、こうもあからさまにアルバレス侯爵家の人間である公子が、彼女を女性として非常に好意的に見ている発言を、積極的に繰り出すのか。

「これこれブラウや。あまりにもレディ・エステファニアが可愛らしくて舞い上がるのは分かるが、彼女を困らせるような真似は慎むようにの」

「……ええ、お祖父様。皆様方、失礼しました」

二朗ちゃんことドゥイリオは、若者の暴走とは微笑ましいとばかり

に「カッカッカ」と笑って済ませてしまったが、ユーリはどうもあのブラウリオ公子にたいして好感を抱く事が出来ない。

……変なあだ名を考えるより、名前を省略しとこう。

えー、『ドゥイ』のお爺様に『ブラウ』のあんちゃん、と。

ブラウにーちゃんは、ドゥイお爺様の孫なのですか。あまり似ていませんねえ。

一つ嫌なところを見つけると、どんどん芋づる式に嫌気を増していくものだ。

ブラウがエストに向ける眼差しがイヤらしく感じるだとか、仮にも客人であるフィデリアがかいぐりかいぐりしている、明らかに可愛がっている飼いネコっぽいユーリにたいして、不愉快そうな蔑む眼差しを向けてくるだとか。

別に、ネコが嫌いだというのならば仕方が無い話だし、飲み食いする場に連れ込まれては不快だと考えるのも、さして悪い事だとは思わない。

だが、それを客人の前で分かり易く顔に出すというのは、如何なものなのだろうか。

状況的に見て、アルバレス侯爵の爵位を預かっている人物とはドゥイであると思われる。

となると、ブラウはそんな彼の跡を継ぐ人間……という事になるのだろうか。

当代では友好関係を築いている両家だが、次世代を継ぐと思しき青年らの、お互いを見る目がやけに冷たい気がするのは由々しき事態ではなかろうか。

だが、それはそれ、これはこれというものがある。

ぐらぐら様、頑張れ～。
エストお嬢様のお側に、図々しいブラウなんかを近寄らせるなー！
眉間パワーで撃退だー！

無言で冷戦を繰り広げる公子達の戦場において、懸命に応援の念を送るユーリであった。

アルバレス侯爵のお城の客室の中でも、伯爵閣下とフィデリア夫妻に用意されたのはかなり豪華な一室である。
主人達がのんびりとお茶を楽しんでいる間に、連れてきた従僕の皆さんは、必要な荷物などは既にしっかりと運び終えていたらしい。
あのまったりティータイムは、下に仕える人間が裏ではバタバタする時間を捻り出す為の行いだったらしい。

お茶を嗜んだ後に、そのままフィデリアに抱っこされて夫妻にあてがわれた寝室にまで連れてこられたユーリは、その広い間取りのお部屋からバルコニーに出ていた。柵の間からふと見下ろせば、気が遠くなりそうな遥か彼方に地面が見える。うっかり滑り落ちでもしたら、などと考えてしまい、ユーリはぶるりと身を震わせた。

そろそろ夕刻に差し掛かるこの時刻、地平線へと日差しは緩やかに吸い込まれていき、世界が黄金と茜を合わせたような色合いに染まる。
小高い丘の上に建てられているこの城の中でも、見晴らしの良い場所を提供されているのだろう。見渡す限りの大パノラマは、夕暮れを渡る鳥達の群れと、美しく輝く湖が望める。
そして、パヴォド伯爵家の居城から眺めた時よりも更に間近に迫る大山脈、レデュハベス。日出る方角にあんな高い山があったら、この城の夜は余所より長いのかもしれない。

今宵のアルバレス侯爵家の居城で開かれる『細やかな歓迎の宴』に出席するべく、華やかな夜会用のドレスに着替えているフィデリア。礼服に改めている伯爵閣下。
そんな彼らのお着替え風景を眺める訳にもいかず、ユーリはこうしてバルコニーに出てきたのだが。

「フィー、君は本当にいつまで経っても美しいね。
この滑らかな肌を他の男の目に触れさせるなど、彼らの心が君の美しさに狂わされてしまうのではないかと、私は心配で気が気でないよ」
「何を言うの、ディオン？
わたくしの胸に住む殿方はあなた1人きり。美しく装いたいのも、あなたの為だけでしてよ」
「君は本当に可愛いよ、私だけの奥さん」
「可愛いのはあなたの方よ、旦那様」

などという、あんたらどこの新婚バカップルですかとツッコミを入れたくなるようないちゃらぶ会話が、絶えず背後から吹き付けてくる。
奥さんのお着替えをせっせと手伝い、頻繁にちゅーを交わしているらしき伯爵閣下。ユーリは断固として背中を向けているので、それとしか考えられない『ちゅっちゅ』という物音から判断している。

これで実は、夫婦2人して可愛らしい音を立てる靴を履いて踏み鳴らしている、という意表を突きまくりな光景だったりしたなら、閣下にたいする忠誠心が『三べん回って「わん」』を喜んで行うほどに上昇する気がします。ネコの喉の限界に挑戦してやりますよ、私！
うふふふ……と、虚ろな笑いを内心浮かべつつ、雄大なる景色に見

入るユーリ。
子供達が目の前に居る状態でも、何か激甘空気を平然と構築していらっしゃったご夫婦は、夫婦のプライベート空間に移動してからは益々糖度を上げた会話を繰り広げている。
パヴォド伯爵という人は本当に何を考えていらっしゃるのか、ちっとも見当がつかないユーリである。案外、本心からこの『万年新婚夫婦生活』を楽しんでいるのかもしれない。

「ああ、バルコニーに居たのだね、ユーリ。
こっちへおいで」

と、存分にいちゃらぶを楽しむお着替えタイムがようやく終わったのか、背後からパヴォド伯爵の呼び声がする。
ユーリはクルリと振り向いて家具を避けつつテテテテッと室内を駆け、ソファに腰掛け喉元のクラバットの調節をしているらしき閣下の足下に、ちょこなんとお座りした。
パヴォド伯爵はユーリを両手で掬い上げるようにして自身の膝の上に乗せると、彼女の頭を撫でながら笑った。相変わらず、心構えの無い時に見ると、心臓に悪い笑みだ。

「私達はこれから晩餐に出るが、ユーリは連れてけないからね。
待っている間は寂しいかもしれないが、ここで大人しくお留守番をしているんだよ」

どうやら今夜の晩餐は、伯爵家の家族だけでのお夕飯ではないので、ネコはパーティー会場に連れて行けないらしい。
どうせ重々しい雰囲気の晩餐でも立食パーティーでも、さして興味がある訳ではないユーリであるが、エストの傍を長時間離れるというのは些か問題だ。
特に、エストに気がある素振りを見せたあの、三……もといブラウ

公子の動向が気になる。

伯爵閣下はそんな事を考えているユーリの頭を撫でながら、笑う。
唇の端を持ち上げ、ユーリの喉元を指先でくすぐり、

「晩餐会は時間が掛かるからね。それまでちゃ～んと、良い子にしているんだよ、ユーリ？」

そう囁いて、彼女を床へと下ろした。

これは……つまり閣下、『晩餐の間に、お前にどれだけの行動を取れるかは見物だが。私達夫婦が寝室に帰ってくる時間までにやり遂げられるというのならば、留守の間の事には関与せず、知らぬ顔をしておいてやろう』という事ですか……

思いがけず与えられたらしい機会に考え込むユーリに、メイドさんの1人がトレーに乗せたお料理を運んできて、

「ああ、ありがとう。そこへ置いてちょうだいな。
さ、ユーリちゃんのご飯ですわよ」

嬉々としたフィデリアの声によって、思索は中断を余儀なくされた。
床にトレーを置くのではなく、フィデリアはユーリをテーブルの上へと運び、目の前には何かのソースが掛けられたお魚の丸焼き。初めて見るお魚だ。

「さあ、お腹いっぱいお食べなさいね」
「みぃ～」

この後の行動に悩むのはさておき、まずは何はともあれ腹拵えとば

かりに、頂きますと一声鳴いてお魚さんにかぶつくユーリであった。
この伯爵家の飼いネコ生活になってから食べるご飯はお魚ばかりなのだが、たまにはお野菜を口にしたいと思うのは人としてしごく自然な考え方ではなかろうか。

もごもごとお魚さんを平らげ、お腹一杯になって眠気に襲われているユーリの頭を一撫でし、

「では、行ってくるよ、ユーリ」
「お母様とお父様はすぐに帰ってきますから、ユーリちゃんは安心してお留守番をしていてちょうだいね」

夫妻はそんな言葉をユーリに掛けてくる。
お夕飯が乗っていたトレーは、ユーリが食事を終えるなりメイドさんの手によって下げられ、汚れた口元はフィデリアがハンカチで丁寧に拭って下さった。有り難いが、いたたまれない。
そんな彼らは、伯爵夫妻の身の回りのお世話を担当しているらしきメイドさん達を引き連れ、すっかりとお支度を調えた麗しの貴婦人の腰に腕を回し、何事かを囁きながら寝室を後にしていった。

私もそろそろ、行動方針を考えなくては……しかし、眠い……

パヴォド伯爵閣下が、アルバレス侯爵家の居城を探索するようユーリに遠回しに仄めかしたのには、何かこの家の人間に疑わしい点がある故と考えられる。そしてそれを彼女の主人であるカルロスに把握させ、彼が動くのを期待しているものと思われる。
もしくは、自分では入手出来ない類の情報を集めてくる事を、ダメ元で期待しているだとか……

眠気を堪えて、よろよろしながらカーテンがそよ風に揺れる大きな

窓をくぐり、バルコニーにまで歩いていったユーリは、すっかりと薄暗くなってしまった景色を視界に収めながら白い床にへにょんと横たわった。

……まずは、このバルコニー伝いに他のお部屋に抜けて、出来たら怪しいブラウ公子の真意を探りに……眠い……

8

「ユーリさん、ユーリさんってば」

うにゅぅ～、やあ、眠いの～。

心地良くうたた寝に移行しつつあったユーリは、ゆっさゆっさと揺さぶられてイヤイヤと首を振って再び眠り体勢に入る。

だが、相手は容赦なくユーリのヒゲやら耳をグイッと引っ張ってきた。

いったーっ！？

ちょっ、流石に酷くないですかこれ！？

怒鳴りつけながら、ユーリのヒゲをみにょんと引っ張る指先に肉球連撃を繰り出しつつ、カッと見開いた目で頭上を睨み据える。

そこにはいつもながら何を考えているんだか不明な、コソ泥的な黒いほっかむりで顔面を覆った、照る照る坊主スタイルの同僚が……

「おはようございます、今晩はユーリさん」

……今晩は、おはようございますシャルさん。

私はもう、どこからツッコミ入れるべきなんですか、この寝覚め。

ユーリはぐるりと周囲を見回して、ひとまず状況の把握に努めた。

今宵、頭上を覆うビロードは生憎の曇天にて朧月、星の瞬きは殆ど見えず、常より尚暗い。忍び込むにはうってつけのお天気。

場所は相変わらずの白いバルコニーで、見下ろせば各箇所に篝火が

焚かれて、見回り巡回中の兵士が掲げている松明の炎がゆらゆらしている。

ユーリとシャルが居る客間のバルコニーからは少し距離があるが、中庭に面した室内で例の晩餐会が開かれているのだろうか。そこが城の中でも一際明るく、漏れ出た光が中庭を幻想的に照らし出している。

ユーリは改めて、バルコニーに座り込み、子ネコ姿である彼女を膝の上に乗せてネコ耳をみよんみよんと引っ張っているシャルを見上げた。

どうやら相当ネコ耳に興味を抱いているらいが、ユーリの耳を勝手におもちゃにしている同僚の手に、無言のまま頭突きをかまして『やめい』と訴える。

さて、シャルさん。

まずその、珍妙奇天烈なファッションの意義をお尋ねしてもよろしいですか？

ペシペシと、シャルの膝を尻尾で軽く打ちつつ、ユーリは静かに尋ねた。

シャルは鼻の下で結ばれている、黒い手拭いの端っこを持ち上げ、自慢げに口を開く。

「ああ、コレですか？

マスターがわざわざ、わたしの為に用意して下さったのですよ。

わたしの髪は目立つだろうから、これで覆うと良い、と」

さ、左様ですか。流石は主……

自分の事を心配して、気を回してくれたと喜んでいるらしき同僚に、ユーリは言葉少なく主人を讃える感想を述べた。
常々、どこか抜けているところがある主従だとは思っていたが、このセンスは如何なものなのだろう。
カルロスがシャルに敢えてこのスタイルを推奨するなどと、あの主人は本当に色んな意味で残念な美形である。

「今日は外でゴロゴロしてくれていて助かりました。
流石に城の奥で眠っていたら、忍び込むにも見つけ出すにも骨が折れますから」

はあ、私はまさか、警備が厳しい城の中にまでシャルさんが本当に忍び込んでくるとは思いもしておりませんでしたが。

「こんなに杜撰な警備の城、わたしなら侵入する事など雑作もありませんよ。
アルバレス様の結界は魔物除けが精一杯で、マスターのように対空防御が備わっていませんからねえ」

ほっかむりと照る照る坊主のまま、ふんぞり返って胸を張るシャル。
この同僚のように、空から入り込んでこようなどとする侵入者がどれだけいるのかは不明だが、確かにそれに備えていないのは不用心だ。
地上の見回りの体制は厳しく隙がないように見えた為、てっきり万全の警備体制なのだと思ったのだが。

それはアティリオさんに、ご実家の結界を全面的に見直すよう助言した方が良いのかもしれませんねぇ。

うんうん、と頷いてシャルの意見に同意を示したユーリだった。

上空や地下からの侵入を想定して警戒しておかないなど、それは杜撰と言い放たれても仕方が無い。

「そうだ、これを……」

シャルはスッと、肩から吊してでもいたのか、照る照る外套の内側から袋を取り出した。
口を開けて手を差し込み、中からそっと小さなブーケを取り出す。
瑞々しく甘い香りをふんわりと放つ花がリボンで纏められていて、とても可愛らしい。
ドキンと、ユーリの心臓が飛び跳ねた。

シャルさん、それ……

まさかこの同僚が、こんな素敵な贈り物を持参してくれるだなんて。
ずっと、シャルから疎んじられていて、迷惑だと思われている事に傷付いていたユーリにとって、こんなに嬉しい事など無い。
シャルはにこっと微笑み、「ええ」と頷く。例え微妙なるシャル流忍び込みスタイルのままで雰囲気が台無しでも、ユーリにとっては夢にまで見た瞬間で……

「マスターからエステファニアお嬢様へのプレゼントです。
お嬢様のお側へ参るのならばきちんと持参していけと、昨夜は家に帰ってからマスターにこってりと絞られまして。わたしもうっかりしていました」

これからは忘れないようにしませんと、などとうんうん頷く同僚の腹に、ユーリは全力ネコパンチをお見舞いした。

「急に何をするんですか、ユーリさん？」

うるさいうるさ～いっ！
私はこれから探索に出るんですっ。忙しいんですっ！
乙女の機微を察しない天狼さんなんて、サッサと帰れーっ！

勘違いを招いた紛らわしい行動をしてみせたシャルに、ユーリの八つ当たりによる罵声とネコパンチの雨が降る。
鬱陶しそうにユーリを片手で持ち上げて彼女に高い高いしてやったシャルは、眉をしかめて立ち上がった。

「何を言っているんですか、ユーリさん。
まだわたしのお仕事は済んでいませんし、あなたに危険な真似をさせる訳にもいきません。
エステファニアお嬢様のお部屋はこちらなんですね？」

そして、バルコニーから室内に侵入しようとするので、ユーリはペシペシと自身を掴んでいるシャルの手をはたく。

残念でした、こちらはパヴォド伯爵閣下とレディ・フィデリア夫妻のお部屋ですー。

「そうですか、では、エステファニアお嬢様のお部屋に案内して下さい」

ユーリのふてくされた台詞にピタリと足を止めたシャルは、再びブーケを袋に仕舞って、そう言い出してきた。
シャルが困ろうが知った事か！　と、知らんぷりをして溜飲を下げたい衝動に駆られるユーリであったが、彼女の主からエストへの贈り物輸送を妨害するなど、カルロスのしもべとしてあってはならない姿である。ユーリの個人的な感情と、カルロスの命では、計りに

かけて考えようとする事自体が噴飯物の行動であると、きっちりと線引きをしなくてはならない。
私情は私情、仕事は仕事である。

すっごくすっごーく、納得はいきませんけど！
主とエストお嬢様の喜びの為に、シャルさんの手間を省いて差し上げるのですからね！
ちゃんと感謝して下さいよ？

「はいはい。ユーリさんは本当に、気難しい気分屋ですねぇ。マスターはいったい、あなたのどこを指して素直などと言うのやら」

ムスーッと、不機嫌に『あっち』と、利き前足でエストにあてがわれた寝室を指し示すユーリに、シャルはやれやれと呆れた顔をして背中からバサリと純白の翼を広げ、夜空へと舞い上がった。
『気難しい気分屋』だなんて、それはむしろこちらの台詞だ。

シャルの外套に遠慮なく爪を立ててしがみつくユーリを抱えたまま、彼は人目を避けて外壁を蹴ったりせり出した窓を飛び移り、エストの部屋のバルコニーに降り立った。
開いている訳が無いと踏んでいたが、シャルがガラス張りのドアに手を当ててノブを回すと、いとも簡単に開く。
一歩足を踏み入れて薄明かりの中見渡してみる。ソファやテーブル、置かれた調度品からして、寛いだり来訪者と対面する居間として活用されるお部屋らしい。

「ガラスを割らずに済んで良かったです」

シャルはホッとしたように安堵の息を吐き出し、そんな独り言を漏らす。

ユーリはビシッと、シャルの顔面に利き前足で裏手ツッコミを入れた。

……いや、シャルさん。
そこはガラスを割ってでも入り込む事前提にするの止めましょうよ。
そこまでして部屋に入ってこられたくありませんて、普通。

「痛いです、ユーリさん。
……マスターから、『絶対にエストの手に渡るようにしてこい』と言われたのですが、それならば寝室に置いておくのが最も確実かと……」

シャルはシャルなりに、主人からの命令を真摯に受け止め、知恵を絞って考えているらしい。
そうして導き出される結論がどことなく明後日の方角を向いているのは、彼が人間ではなく天狼だからであろうか。それともシャルという個人の感性の賜物か。

不審な侵入者の形跡が堂々と残された寝室に置かれた置き土産……セリアさんならエストお嬢様に見せる前に、迷わず確実に跡形もなくなるように処分するでしょうねえ。お仕事に命懸けてる感じでしたし。

ユーリの冷たい眼差しに、シャルはむーっと不愉快そうな表情を浮かべつつ、袋から再びブーケを取り出して、手近なテーブルの上に置いた。

「わたしだってちゃんと、マスターからメッセージが吹き込まれた伝達綿毛を預かってきましたよ。
不審者などではありません」

うん、そんなモノが残されてたら、主の協力者からの信頼が失せますからね。
今後も、エストお嬢様の部屋のガラスは割らないようにしましょうね。

ユーリのチクチクとした嫌味に、シャルは不機嫌そうな表情のまま、彼女の頬を指先で軽く押しつつ、再びバルコニーから外へと飛び立った。
あっという間に高く上空へと上昇してしまうシャルの腕の中で、ユーリは強風に煽られぬよう彼の外套に縋り付く。
薄暗い夜の戸張に覆われた古城は、どこかおどろおどろしい雰囲気を醸し出し、静かに暗く沈んでいる。

シャルさん、またこんなところにまで上ってきて……私はまだ家には帰りませんってば。

「はいはい。ユーリさんはエステファニアお嬢様の側で、飼いネコ中ですものね。
ねえ、ユーリさん。ユーリさんにとって、グリューユの森にあるあの家が、帰るべき自分の家だと思い始めたのは、いつからですか？」

シャルから頭をぐりぐりと撫でられながら、不意にそんな問い掛けをされたユーリは、首を傾げた。
召喚されたばかりの頃は、確かにあの家は『主人であるカルロスの自宅』という認識だった筈だ。それが、『ユーリにとっても帰るべき自宅』になったのは、いったいいつからか。

え……さあ、よく覚えていません。
何か、気が付いたらあの家が帰る家になっていました。

「そうですか」

正直に分からんと答えるユーリに、しかしシャルはどことなく機嫌良さそうに頷く。

あの家はカルロスとシャルの『愛の巣』だから、ユーリが出て行って清々している、などという流れでもなさそうだし、いったいシャルが何を喜んでいるのか、どうにもよく分からない。

この同僚の真意を推し量るのは途轍もない労力と、途方もなく長い間積み重ねてきた経験を必要としそうである。

「さて、次はユーリさんのお散歩でしたね」

お散歩違います、情報収集ですー。

ユーリの訂正を「はいはい」と、シャルは軽く受け流して、バサバサと翼を動かしながら高度を下げてゆく。

そういえばシャルさん、ブラウリオさんって人、ご存知ですか？

十中八九アルバレス家の公子だと思うんですけど、なーんか、エストお嬢様に色目を使ってきて気持ち悪いんですよ。

アイツ怪しいです。あの取り澄ました顔は、何か企んでる系の顔です！

「……顔は関係無いと思いますが……

ブラウリオ、ブラウリオ……はて？　わたしはアルバレス侯爵家の貴族は、侯爵閣下と継嗣のアルバレス様しか存じ上げませんからねえ」

ふわっと屋根の上に降り立ったシャルは、声を潜めて返事を囁きつ

つ、ユーリを抱え直して周囲をきょろきょろと見回した。近隣に生き物の気配や匂いが無いかを確認しつつ、晩餐会会場である大広間がある方へと足音を忍ばせて近寄っていく。
誰かに見つかりでもすれば、シャルは速やかに撤退せねばならないが、ユーリはなんとしてももと居たパヴォド伯爵に提供された客室に戻らなくてはならない。万が一こんなところに放置されてはたまったものではないので、ユーリもかなり声量を絞って会話を続ける。

侯爵閣下って、ドゥイリオ様ですよね？　あの好々爺っぽいアットホームな方。
継嗣って、侯爵閣下の息子さんですか？

「ああ、正確に言えば次のアルバレス侯爵位を継ぐ継嗣はそちらですよね。
その方は存じませんが、そのご長男ならユーリさんも面識があるじゃありませんか。
ハーフエルフで連盟所属の魔術師の、アルバレス様ですよ。あの方は侯爵閣下の長男の長男になりますから」

……へ、へー。アティリオさんって、跡継ぎ最有力候補だったのですか。
ちょ、ちょっとだけ思索モードに入りますよ？

意表を突かれたユーリが、微妙に混乱しつつそう断りを入れると、シャルは「はいはい」と答え、彼もまた黙って周囲の様子に気を配りつつ地面へと降り立つ。
さて、周辺の警戒と移動は遠慮なくこの同僚に任せて……そういえば、彼はいったいどこを目指しているのか。

それは取り敢えずさておき。

パヴォド伯爵が何故、娘を嫁がせる相手にアルバレス侯爵家の公子の中でも、真っ先にアティリオを選んだのか納得はいった。よほど家格が不釣り合いでもないのならば、まず打診するのは定まった婚約者がいない独身の長男であろう。それが自然というものだ。どちらの家から持ち掛けられた婚約話かは分からないが、少なくともあのブラウは跡継ぎではないらしい。

侯爵家の居城で、さも自らがもてなす側として振る舞って当然、という顔をしていたが……

果たして彼は、エストに純粋に興味を抱いているのか？

それとも、『アルバレス侯爵家の継嗣』に付随してくるであろう婚約話の対象であるエストを、『いつか自分のものになる』と認識して色眼鏡で値踏みしていたのか？

アルバレス侯爵家の跡継ぎが誰になろうが、私はどーでも良いんですけどねえ……

「それはわたしも同感ですね。

正直、エステファニアお嬢様の事が無ければ、貴族社会なんて関わりたくはありません。面倒臭いです」

身も蓋もないシャルの一言に、ユーリは控え目に鳴いて同意を示した。

そして、しばらく自分の考えに集中して、認識を怠っていた周囲の状況に疑問を抱く。

ところでシャルさん、ここどこですか？

人気がなく小さな庭になっており、明かりが漏れているので誰かが在室であると思われるどこかの部屋に面した窓の下に潜み、壁にぴ

ったりと張り付いている。
どこの誰の側に来たのか、さっぱり分からない。
シャルがユーリの口元に軽く指を押し当て、『静かに』という無言の指示を出してくるので、大人しく黙り込んで耳を澄ます。

「……んもーっ。ほんっと、グラシアノ様は頼りにならないーっ！　どーしてエストお嬢様の隣席をブラウリオ様に許すのよーっ！」
「落ち着きなさいよ、セリア。良いじゃないブラウリオ様。会話は饒舌だし、エストお嬢様も楽しんでいらっしゃるようよ？」
「ダメダメダメっ！　あれはエストお嬢様のお愛想笑顔よ！　わっかんないかなあ！」
「あれがお愛想笑顔……あたし、見分け方分かんないんだけど。もしかしてあたし、エストお嬢様の侍女失格なの？」
「うんにゃ、セリアが特殊なのよ。第一、本心はエストお嬢様にしか分からないしね」
「違うわ、愛よ！　敬愛心で主君のお心をお察しするの！」

……聞き覚えのある女性達の声が耳に入ってくる。
どうやらこの部屋は、エスト付きのメイドさん達の控え室にあたるらしい。
わざわざセリアの下へやってきただなんて、やはりシャルは彼女に何か特別な思い入れが……

「相変わらず面白い人ですねぇ、セリアさんは。あの人を観察していると、人間の愉快な一面がたくさん知れて興味深いです」

……言動が面白おかしい観察動物扱い？
シャルさん、僭越ながら申し上げますが。

人間やエルフや念の為ハーフエルフに向かって、『綺麗ですね』『可愛いです』『美しい』『好き』『愛してる』といった類いの発言をシャルさんがするとですね、多大なる誤解を招きますので、今後口になさらない方がよろしいですよ？

にじりにじりと、壁沿いに移動して次のお部屋の窓に近付くシャルに、ユーリは小声で忠告しておいた。

同僚は不思議そうに首を傾げる。やはり本人は自らが天狼であり、異性として見ていない彼女らから意識されるという可能性について、全くさっぱり理解していないらしい。

現にですね、セリアさんはシャルさんの事を『軽薄な輩』として非常に深いお怒りを示していましたから、今度機会があったら『今後は誤解を招く発言は慎みます』と謝っておかないと、友人としての縁も切られちゃいますからね。

「……そういうものなんですか？
女性とは本当に難しい方ばかりですね。大抵の男は、ぶん殴って分からせれば済むのに」

ふう、やれやれと、シャルはさも彼の方が余計な気を遣わされてばかりで、周りの女性は面倒な相手しか居ないと言わんばかりである。この同僚のマイペースさが、ユーリには時折、無性に羨ましいと感じたりもする。

……シャルさんは誰をぶん殴って拳でどう理解しあったのかが、非常に気になるところです。

9

あざとい、だとか。本音が丸分かりだとか。
自分でもそんな事はよく分かっている。
シャルが人間とは些か異なる感性を持っている事につけこんで、したり顔でユーリの都合の良いように彼に助言という名の誘導を行っているのだから。
けれど、それが悪い事だとは思いたくはない。恋しい彼が、他の女性に目を向けないよう、恋心を向けられぬよう、そう地道に根回しをしておいて何がいけないというのか。

「うーん、このお部屋からも嗅いだ覚えがある匂いがするのですが……明かりが点いていませんね。眠っているのでしょうか？」

相変わらず、子ネコのユーリを腕に抱いたまま、建物の窓の下に張り付いてお散歩という名の諜報活動に付き合っているシャルは、彼女の耳元に唇を近付けて小声で囁いてくる。
誰が居るんです？

「マスターをちょくちょく睨み付けてくる方で……おや、人が」

ユーリの疑問に答えようとしたシャルは、匂いを嗅ぎ取ったのか小さく鼻を動かし口を噤んで窓を避けて立ち上がり、ユーリをそっと窓枠の上に乗せた。
この建物の窓にはガラスが入っているのだが、どうやらきっちりと閉められておらず隙間が開いている。

ユーリはそおっと室内の様子を窺ってみるが、明かりもなく外からの光源も望めない為、殆ど見えない。隙間に近付き静かに身を伏せて耳を澄ませる。
試しにユーリもくんかくんかと匂いを嗅いでみるが、カビっぽい匂いと高級な蜜蝋が溶けた匂いが僅かに嗅ぎとれるのみ。こういう時は、この同僚の生態は羨ましいと思うユーリである。

「……待たせたか」

まず、ユーリには全く聞き覚えの無い男の声がした。

「いや、さほど」

また別の誰かが、そう応える。
カタン、と、暗がりの中から小さな物音がして、イスか何かにつけて腰掛けたのだろうか。
室内で待っていたらしき人物の声には、ユーリにも聞き覚えがある。
この声は……そう、声量を抑えて低めているせいで聞き分けにくかったが、今朝も耳にした例のおじ様執事さんだ。

「東からの知らせは？」

と、謎の男が問い、

「順調に増強している、と。
山の様子に変わりは？」

おじ様執事さんが鋭く答えて返す。
会話を交わしている人物から推察すると、室内に居る人数は2人だけなようだが……どうも主語をボカしているせいで、いまいち分か

らない。
まあ、厳重に秘匿すべき情報のやり取りであれば、こんな窓がある部屋で交わす筈もないだろう。

おじ様執事さん、ぐらぐら様にもザナダシアがどうたらこうたらって、今朝も言ってましたし。東って多分、ザナダシアの事ですよね。『不穏な動き』『増強』『出兵』……ザナダシアが今までよりも軍備を増強している？

むむむ……と、考え込むユーリだったが、室内の彼らは当然そんな彼女に考える猶予など与えずに会話を進める。

「それについてだが。
ここのところ、山の動きが活発化している」
「……百年前から、あの山は活発的だが」
「例年の比ではない。気のせいかと思える程度だが、今年の春から確実に激しくなってきている」
「具体的には？」
「流出する数が徐々に増している」
「……頂上で、何か起きたのかもしれんな」

謎の男とおじ様執事さんの会話、察するに山とは霊峰レデュハベスを指していると思われるのだが、どこまでも彼らの口から出るのは奥歯に物が挟まったかのような曖昧な内容である。もどかしい。
それにしてもこの執事さんはパヴォド伯爵家の、恐らくはグラに付き従っている人物だと思われるのだが、それではこの情報交換を交わしている謎の男は何者なのだろう。アルバレス侯爵家の人間なのだろうか？

「それで、かの方の意向は？」

またしても彼らの断片的な情報は別の話題に移ったのか、それとも『戦に備えていると思われるザナダシアへの対策』についてなのか、謎の男はおじ様執事さんに問う。

「今しばし、雌伏、と」

「あいわかった。では、これで」

「ああ」

そんな短い会話で、会合は終了したらしい。ほんの僅かな床板の軋みを立てながら、誰かがカチャリとノブを回してドアを開き……その向こうもまた薄暗い廊下であったが、明かりが灯された燭台が壁に取り付けられており、足早に部屋を出て行く男の後ろ姿のシルエットを浮かび上がらせた。

中肉中背の、ウェーブがかかった燃えるような赤い髪の男……

多分、私の知らない人だとは思いますが……

いったい今の会話は、要するになんだったんでしょうねぇ。

おじ様執事さんもまた、謎の男の退室からは時間を開けて室内を出て行く後ろ姿を窓の外から見送りつつ、ユーリは首を傾げた。

そんなユーリは不意に胴を掴まれて、物凄い勢いで背後へと引っ張られた。無意識のうちに甲高い悲鳴を上げそうになった口を、懸命に噤む。

彼女を乱暴に捕獲した犯人ことシャルは、また何か真新しい出来事に気が付いたのか、使用人控え室が立ち並んでいるらしき建物の壁伝いを、胸元にユーリを抱えつつじりじりと忍び足で移動し始める。

ユーリは先ほど耳にした内容に関して、シャルの推測を伺ってみようと口を開いた。

シャルさんシャルさん、さっきの山とか東とかって、レデュハベス山脈の事だと思います？
活発的って、魔物が強くなったんでしょうか。それとも噴火間近の火口があるとか……

「さあ？　わたしはたまにレデュハベス付近にまで狩りに行きますが、毎回たいして代わり映えしませんねえ」

シャルは気のない調子かつ小声でユーリに返事を返しながら、建物の角の向こうを覗き込んだ。
つれない同僚の態度に苦笑を漏らしつつ、ユーリも首を伸ばして様子を窺ってみると、どうやらそこは中庭を横切る回廊になっているらしく、柱の一つ一つに備え付けられた松明が、そこを通る人物の動きに合わせてゆらりと幾つもの影を生み出す。
目を凝らして見てみると、どうやらパヴォド伯爵とアルバレス侯爵ドゥイが警護やお付きの者を数名背後に従えつつ、何事かを語らいながら歩いているようだ。

まっずー……晩餐会終わっちゃったんですね。
シャルさん、私をさっきの部屋に返して貰っ……

てしてしと、彼女を抱きかかえているシャルの胸元を軽く叩きつつ頼み込もうとしたユーリは、途中で声を詰まらせた。
両閣下の警護の者と思われるうちの１人が、「何奴！？」と鋭い誰何の声を上げながら、手にしたカンテラを明らかにこちらの方に向けて突き付けてきている。

嘘っ！？

「……この距離で気付かれた？　侮れないものですねえ」

私が彼らの気を引きますから、シャルさんはその隙に離れて下さい。
見つかったら要らぬ詮索を受けます。

流石は侯爵を直接警護している精鋭とみるべきか、即座にカンテラを持った人間が1人、警戒しつつ近寄ってくるので、ユーリはシャルに早口で告げ、同僚の腕の中から下りようとしたのだが、それよりも早く彼の顔が近づいてきて……

「お休みなさい」

そんな短い囁きと共に、またしてもネコ耳を噛まれた。同僚のこの噛み癖はなんとかならないのだろうかと思考の片端で考えつつ、ユーリは地面に降り立つとカンテラの明かりに向かって駆け出した。
「にゃ～、にゃ～」と、わざと大きな鳴き声を上げつつ、この場合はやはりパヴォド伯爵に向かうのが自然であろうと、閣下の下に一直線に駆け寄る。ユーリ個人としては、顔を見て安心するお方ではないのだが……迷子の子ネコが飼い主を見掛けたら、一目散に駆け寄るのではなかろうか。

「おや、ユーリ。こんなところにまでお散歩に来たのかい？
駄目じゃないか、お部屋で良い子にしていなくては」
「み～」

パヴォド伯爵の靴に擦り寄ると、両手でヒョイと抱き上げられたので、ごめんなさいの鳴き声を出した。
閣下はハンカチを取り出して、ユーリの足裏を軽く拭い取りながら目を細める。

ううう……閣下のお言葉が、

『やれやれ。こうも簡単に尻尾を掴ませるようでは、私に出来る知らんぷりの限度を超えるねえ。
君には無理な仕事だったかな？』
にしか聞こえません……

「ほっほっほ、置いて行かれたと思うて、エスピリディオン殿を探しておったのかのう」
「いやいや、冒険心が疼いてお部屋を抜け出したは良いが、迷子になったのかもしれません。
ああ、君、今頃私の奥方が部屋にこの子が居ない事に気が付いて心配しているだろうから、言付けておいておくれ」

そんな会話を交わしながら再び歩き始めるアルバレス侯爵とパヴォド伯爵ののんびりした態度に、例の鋭い感覚の持ち主らしき警護の人間は、一度チラリとユーリが駆け出してきた角を睨み付けたが、そのまま再び2人の後に付き従う。
どうやらシャルは上手く逃げおおせたようだと、ユーリはホッと安堵の吐息を吐き出して両目を閉じた。

と、不意に嗅いだ覚えのある匂いが風に乗って僅かに漂ってきたような気がして、ユーリは再びパチリと目を開いてパヴォド伯爵の腕の中でキョロキョロと辺りを見回す。

この匂いは……『ライオネル君』の香料？

無駄に強いインパクトを残してくれた獅子様、あの香料をミドルノートで揮発する香水はどちらかというと男性に人気が高いらしいが……
その香りを立ち上らせている人物は、たった今通り過ぎた通路にて、両閣下が目の前を通った際にスッと頭を下げた執事風の格好をした

男からした、と思われた。

またあの、ウェーブがかかった燃えるような赤い髪の人……

ユーリはパヴォド伯爵の腕の中から、曲がり角を曲がるまでただじっとその姿を見つめ続けてみたが、彼が顔を上げる事は無かった。

アルバレス侯爵とパヴォド伯爵は、繊細な天井画が描かれた広くて明るい室内へと落ち着いた。
ランプの明かりが幾つも灯された室内は、確かに薄暗さは駆逐されているのだが、電球や魔法の明かりに慣れた目には、炎が揺らめく光源というのは見ていて非常に疲れる。
お付きの人にお酒と酒肴の用意だけをさせてしまうと、護衛さえ遠ざけて室内にはソファに向かい合った2人……と、パヴォド伯爵のお膝の上のユーリのみ。

「のう、エスピリディオン殿。
そちの企みの方は順調かの？」

手酌でトクトクとグラスに酒を注ぐアルバレス侯爵の姿に、伯爵閣下のお膝の上という微妙なるポジションのユーリは益々居心地悪くもじもじしていたのだが、ズバッと直接的な切り口上に、思わずあんぐりと口を開けてしまった。
この2人、本当にどんな関係なのだろうか。

「そうですねえ……思っていたよりは手間取っているようですが、概ね順調ですな」
「それは重畳」

ほっほっほ、と、やはり好々爺然とした笑い声を漏らすアルバレス侯爵閣下。
いったいパヴォド伯爵閣下が何を企んでいるのか、具体的にはー！？　と、耳をダンボにしているユーリをからかうように、

「はいユーリ、あ～ん」

などと、開いたままだった口の中に、伯爵閣下が手ずからお酒のおつまみのうちの一つ、チーズを小さく千切って押し込んでくる。

閣下、美味しいですが、このチーズはちゃんと塩分控え目ですか？私は普通のネコじゃないから全く無問題ですが、人間用の食べ物では、普通のネコにはたまに害になるものが……！

「そうか、美味しいんだね」
「どれ、儂の手からでも食べてくれるかのう？」

ユーリの鳴き声は当然ながら全く通じていないらしく、笑顔の伯爵閣下に羨ましそうな顔を浮かべた侯爵閣下が、カナッペを割って差し出してくる。

ええ、ええ。
今の私は単なる、賑やかしと笑いを振り撒く小動物。食べますよ、食べますとも。

モグモグと素直に口にするユーリに、やんややんやと謎の盛り上がりを見せる両閣下。
彼らのこの反応は、お酒が入っているせいなのだろうか？
遠い目をして、諦めの境地のままお膝の上で丸くなるユーリであった。

この方々が何故、こうしてわざわざ2人きりの場を設けて向き合っているのか……全く予想もつかないが、単なる知人との酒盛りの席という気がして仕方が無い。

「それで、ドゥイリオ殿。
レデュハベスの様子は如何ですかな？」

やはり手酌で注いだお酒のグラスをテーブルの上にコトリと置いたパヴォド伯爵が、何気ない様子で問う。
先ほどの謎の男からの発言により、ユーリの中で『実は活火山疑惑』が湧いている霊峰の話題に、ピクリとネコ耳が反応してしまう。

「そうさのう……
どうも、今年の春から瘴気が増しておるようじゃ」
「今年の春から？」
「あの山が人を拒むようになって、早百年。それが何故今になってなのか、儂にもとんと見当がつかぬがな」

アルバレス侯爵はそう言ってグラスをくゆらせ、彼が手にした器の中で深紅の液体が揺れる。
パヴォド伯爵は顎に手を当て、「ふむ」と小さく呟いた。

「時にエスピリディオン殿。
近頃周囲に鼠が隠れておるようじゃが」

悪戯っぽいアルバレス侯爵の発言に、侯爵の居城の中をコソコソと嗅ぎ回っていた自覚があるユーリは、ビクリと身を震わせた。
バレているのだろうか。先ほど、護衛に気取られたが故に、敢えてユーリが大袈裟に騒ぎながら姿を現したのは、仲間の存在から気を逸らす為なのだと。

「鬱陶しい鼠など、駆除すれば良いだけですな」

たいして即座に返すパヴォド伯爵の言は、実に淡々としている。背中を撫でられつつ、ユーリは益々小さくなった。

「ほほう、エスピリディオン殿のネコは、よほど優秀な狩人とみえる」

「ははは、ユーリが鼠を銜えてきたりすれば、フィデリアが卒倒してしまいますよ」

「レディ・フィデリアは繊細じゃからのう」

うう……どうやら私はパヴォド伯爵閣下から、諜報要員としては役立たずの烙印を捺されてしまったようです……

まあ、スパイ活動をしている奴を探り当ててこいと言われても、確かに発見出来るかどうかは全く自信がありませんが。

その後も、ひたすら大人しく酒盛りのお話に耳を澄ませていたユーリであったが、結局パヴォド伯爵の企みとは具体的にどんなものなのか、全く触れられる事なくお開きとなった。

パヴォド伯爵は、アルバレス侯爵との旧交を温める酒盛りなのか遠回しの情報交換の場だったのか……どちらとも取れる席から退室し、ユーリを抱えて客間の方に戻っていった。

てっきり夫妻の寝室に連れて行かれると思ったのだが、伯爵はエストの部屋に足を向けてユーリを娘の腕に手渡す。

「私はこれから、フィデリアと大切な家族設計計画のお話の時間だからね。

エスト、ユーリを頼んだよ」
「はい、お父様」

……ええと、閣下。
娘に向かってウィンクをなさりながら、何を仄めかしていらっしゃるのですか。
エストお嬢様も、お父様のご発言に全く動じていらっしゃいませんし。

どうやら、伯爵閣下は昨日の馬車内での宣言通り、奥方と真剣に今後の『たのしいかぞくけいかく』を今夜しっかりと練るつもりらしい。
これでエストにではなく、グラの方にユーリを預けて行っていたら、彼があの無表情からいかなる変化を遂げていたのか、非常に気になるところである。

「それじゃあお休み、エスト、ユーリ」
「お休みなさいませ、お父様」
「に〜」

お休みなさい、と頭を下げて閣下を見送り、ユーリはエストの頬にすりすりしながらゴロゴロと鳴き声を上げた。

エストお嬢様、離れていて申し訳ありませんでしたーっ。

「ふふ、ユーリちゃんったら、お部屋を抜け出して迷子になっていたんですって？」

寂しさの反動から甘え付いてきていると思ったのか、エストはユーリの頭を撫でながらクスクスと笑みを零す。

い、言えない……迷子を装って、シャルさんとスパイごっこな夜間デート？　っぽい事をしていただなんて。

ユーリを腕に抱きかかえたままエストが通り過ぎる居間、そのテーブルの上にチラリと視線をやってみるが、確かにシャルが置いた筈のブーケが消えている。
キョロキョロと花の行方を探して室内を見回したユーリは、寝室のベッド脇の花瓶に生けられている事に気が付き、安心して力を抜いた。

昨夜も何かを縫っていたお裁縫箱が寝室の小さなテーブルの上に出ており、イスの上に腰を下ろしたエストはユーリをお膝の上に乗せて、袋から銀色の物を取り出した。

「ほら、ユーリちゃん。
やっと完成しましたのよ、あなたへのプレゼント」

それをユーリに差し出してくるので、彼女は恐る恐る両前足を伸ばしてそれに抱きついた。

「気に入ってくれたかしら？」
「みーっ！」

にこっと微笑みかけてくるエストに、ユーリは全力で頷いてぎゅぎゅっと抱き付く。

銀色のふさふさの毛並みに、尻尾。愛らしさを引き立てる三角形な耳。イヌっぽくもある鼻面と琥珀色の瞳に、極めつけは背中から生えた白い翼を持つ……それはどっからどう見ても、シャルをデフォ

ルメしたぬいぐるみだった。
大きさは子ネコサイズのユーリと全く同じくらいで、抱き付くと中身は綿か何かがたくさん詰まっているのか、柔らかくて抱き心地が良い。

「はぅっ……あの謎の生き物のぬいぐるみ、流石はお嬢様がお作りになられただけあって、それだけでもう滅茶苦茶可愛かったのに……！
ユーリちゃんがぎゅーしてると、何この破壊力!?」

にこにこと微笑みながら頭を撫でて下さりつつ、花瓶からお花を一本抜き出してユーリの耳元に飾りつけるエストお嬢様の背後では、セリアが苦しげに悶え、謎の何かと激しい戦いを繰り広げていた。

移動二日目、本日エストお嬢様に色目を使ってくる、いけ好かない男出現。要警戒及び要観察。
パヴォド伯爵に逆恨みを抱く輩からの嫌がらせ及び、工作の気配無し。
本日の収集情報、レデュハベス山脈にて異変があった模様。
エストお嬢様がたいへん嬉しそうに、お花を愛でるお姿をじっくりと眺めつつ……以上、ユーリより我が主へ、本日の最終報告です。

閑話　ご主人様からみたわんことにゃんこ　そのよん

前々から分かっていた事ではあるが……我が家のわんことにゃんこは基本、アホだ。

カルロスは自室にて1人机に向かっており、エストからの贈り物である、『ペットと暮らす楽しい生活』のイヌとネコを飼う際の悩み相談が寄せられているページを、パラリと捲った。
やはり、それぞれの種族的特徴が異なるイヌとネコを共に飼う場合、よそでも様々な問題が生ずるものらしい。

カルロスの場合、群れで暮らす生き物であるイヌを先に家に迎えており……内容を要約するとつまり、イヌにとって慣れぬ存在であるネコに吠えつくといった行動によって、ネコがストレスを覚えぬよう、イヌが入り込めないネコだけのスペースがあると良い、といったアドバイスが書かれていた。
要するに、イヌとネコの距離感というものは、飼い主の都合を押し付けたりなどせず、本人達に図らせるのが一番という事だ。相性が悪い子は何年経っても緊張状態だし、相性が良い子はとっても仲良し。

……という事を念頭に置いて、喧嘩上等とばかりに本人達の好きなようにさせていたのだが……いかんせん、カルロスさんちのわんこはとてつもない捻くれ者だった。情緒が未発達で自分の感情に鈍いというのも、大問題である。
『女の子は大事にしろ』と教育してきたはずであるというのに、わんこの心無い台詞にぴーぴーと泣くにゃんこ。

自分の庇護下にあるしもべのユーリを、主人としては傷付けられるなど容認する事は出来ない。それが例え、もう一方のしもべによるものであったとしても。

あくまでもユーリはカルロスに従う存在であり、シャルに彼女の尊厳を侵害する権利など無い。逆もまた然り。

……長くなったが、つまりカルロスはシャルへのお仕置きとして、ユーリをちょっと離れた場所に避難させてみたのである。

ユーリと突如引き離されたシャルはと言うと、家の中を無意味にウロウロウロウロしたり、ユーリが放置していったシーツを洗い直して呆けたりと、実に分かりやすい反応を示し。そのくせ、そんな自分の行動が普段と変わらないなどと思っている。どこまでアホなんだお前は。

『ユーリを苛めるようなら、お前を元の世界に送り返すぞ』と脅しつけてみたところ、わんこはにゃんこの下へとすっ飛んで行った。

ユーリと一日離れていただけで、最早耐えきれなくなっているその現状に、早く気が付け。

俺が言った言葉で、シャル本人の中では『行きたくない世界に、送り返されるのは嫌だから』ユーリに会いに行った事になっているらしい。

渋々、全速力で、ユーリの側から人の気配が離れるのを、まだかまだかと苛々しながら物影に隠れてジッと待って。もうその時点で、シャルの行動は矛盾だらけなんだが……何故か、本人の中では統合性が取れている事になっているらしい。つくづく謎だ。

オマケに、カルロスが気を利かせて、ユーリを喜ばせるべく花を持参していくようにと助言したにも関わらず、本当にただ『エストに渡す為』だけに花を持って行き、ユーリには見せるだけで期待させた挙げ句に落胆させるだとか。

もうアホ過ぎて、内心しょげかえるわんこやにゃんこを、フォローしてやる気力すら萎える。細やかなプレゼント贈呈ぐらい、スマートにこなせんのかこのアホイヌは。

そして明日はようやく、王都に到着したパヴォド伯爵家の方々の下に、ユーリを引き取りに向かうところだ。
ついでに本部にも顔を出して、調査不足が判明した調べ物をこなして……

最近の愛読書となりつつある本をパタンと閉じ、机の上の定位置の本立てに仕舞うと、カルロスはイスから立ち上がって改装中のシャルの部屋へと向かった。
コンコン、と、半開きになっているドアを軽くノックをすると、中からイヌバージョンのシャルが尻尾を揺らしつつ出てきた。

「シャル、しっかり用意は出来てるか？」
「はい、マスター。
タンスもしっかり備え付けましたし、鏡台もありますし、テーブルとイスに、衝立もあるんですよ」

カルロスに室内の様子を見せるシャルは、どこか自慢げに語る。『褒めて褒めて』と言いたげに尻尾を振って見上げてくるシャルを撫でてやりつつ、カルロスは改めて室内を見回した。
室内のど真ん中を遮る折り畳み式の衝立に、片側にはミニテーブルとイスが置かれ、鏡台とタンスが壁側にちょこんと置かれている。
衝立を挟んで反対側には、シャルの服が入ったタンスに、すっかり部屋の片側へと追いやられた寝藁が敷かれている。何気に、今まで剥き出しだった寝藁の上には、シーツが広げられていた。

「……まあ、必要最低限、ってところだな」

数日しかない準備期間で、そこそこ調えられた方だろう。ユーリには衝立が必要かもしれないと考えつく辺り、シャルもそれなりに成長したらしい。

この部屋をユーリが喜ぶかどうか、と尋ねられれば微妙なところであるが、カルロスの家の中で空いている部屋といえば玄関脇の控えの間ぐらいである。そこは本当に細やかな『待合室』であって、言わば玄関口と同じようなもの。そんなところににゃんこのお部屋を用意する訳にもいかない。

ではどこが適当か……となると、殆ど家具が存在しないシャルの私室と相部屋にさせる、ぐらいしか選択肢が思い付かなかったカルロス。

ユーリ本人は、シャルと同室というのは戸惑うかもしれないが、シャルの方はあっさりと了承して、にゃんこを迎え入れるべくいそいそと家具を揃えたりと、大歓迎状態である。何故その状態で本当に理解していないのか。

ユーリ、心の中じゃあ自分の部屋欲しがってたもんな。でもあいつ、空き部屋が無いからって結局遠慮して言い出さねえし。

そんなユーリだから、同僚と相部屋状態で彼女の部屋を用意されていたとしても、怒り出したりはしないだろう。喜ぶか、戸惑うかは別問題として。

ともあれ、自宅増築の大改装を行うか、もっと広い家へお引っ越しをするにしても、なるべく結婚をその機会にしたいとコツコツと貯蓄しついるカルロスにとって、可愛いにゃんこの為であっても、安易にお家の増改築に手は着けられない。

カルロスの道義心や道徳的な観点から見ると、男女同室というのは却下するべき案な訳であるが……それもこれも、全てはわんこの為である。

これでユーリが、シャルの事を望んでいないのであれば主人としては困ったものだが、幸いというか上手い具合に相性が良かったらしい。

あとはこれで、カルロスが横から手出しする事無くシャルが自覚して、そのまま成就してくれれば良いな、と思うのだ。何せあのにゃんこは、十年以上掛けてようやく現れた唯一条件に合う娘なのだから。

だが、カルロスにとっていくら可愛いわんことはいえ、あまりの鈍さにイラッとしたりもするので、今後も多少のお仕置きは必要かもしれない。

元の世界では、バーデュロイの富裕層並に衣食住に困らぬ生活を送ってきたユーリにとって、この家での節約生活に慣れないのは当たり前だ。覚束ないながらも、それなりにこちらでの生活に慣れてきたようだし、彼女の部屋ぐらいは用意してやりたいのが親心。……イヌが入り込めないネコだけの避難スペースには、エストが最適であると、今回のにゃんこの骨休めでよく分かった事であるし。

明日はせっかく王都に行く事だし、にゃんこに服でも仕立ててやるか。

……いや、生地を買ってやったら、自分で縫うのかあいつは？

ユーリの故郷の被服事情に思考を巡らせてみたカルロスは、既製服で溢れかえっている状態に、マレンジスとの甚だしい常識の違いに少し頭痛がしてきた。

既製品もあるにはあるが、服といえばオーダーメイドによる注文、もしくは生地を購入して自ら縫うのが当然の世界で暮らしてきたカ

ルロスにとって、にゃんこの故郷は物質的な選択肢が多すぎて、恐怖すら覚える。

裁縫や縫製の知識が無い訳ではなさそうだし、それは本人の意志に任せるとして。カーテンを取り付け、鎧戸が開け放たれているその窓を見やったカルロスは、改めてしもべ2人のお部屋になるその室内に視線を巡らせて……何か違和感を覚えた。

必要最低限の家具はある。

やや手狭な印象を受けるのは否めないが、しかし何かが足りていないような居心地の悪さ。

「なあシャル？」

「なんでしょう、マスター？」

ここ数日、お部屋の改装を楽しそうにやっていた、最早ご主人様であるカルロスの目からは、『恋しい女の子と過ごす愛の巣作り』に、目をキラキラさせて準備を調えていたようにしか見えないわんこ。

カルロスは考え事をしている間も、延々彼の毛皮を撫で回していたのだが、距離を取る事無くされるがままになっていた。

「ユーリのベッドが見当たらないんだが、お前はあいつをどこで寝かせるつもりだ？」

それともなんだ、わんこよ。

お前はにゃんこに部屋を用意してやっても、それでもにゃんこを俺と添い寝させる気か？　ここでお前がそう答えたりしたら、例えシャルの本心がどうであれ、俺はこの先ずーっとお前とユーリが共寝するのは許さんが？

『息子は可愛いが、父親としては娘の方がもっと可愛い』などとい

う、幼い息子と娘を持った親バカ的心境を味わってしまっているカルロスの、そんな様々な意味合いを含めた問い掛けに、シャルはパチクリと瞬きをしながら主人を見上げて答える。

「何の事ですか、マスター？
もちろんユーリさんは、ここで寝るんですよ？」

そう言いつつわんこは、タトタトと軽快に床を移動してシーツが広げられている寝藁の上に、おもむろに横たわった。

「……」

相変わらず目をキラキラさせつつ、機嫌良く尻尾をふりふりしながら、ユーリとの同室生活に期待を寄せているらしきわんこ。

……うん、そうだな……お前、なんだかんだ言いつつ、ケモノだしな……告白とか交際とか婚姻とかぜ～んぶすっ飛ばして、異性だろうが共寝が当然なんだな……

念の為にシャルの思考を追跡してみるも、わんこの中でようやく群れの一員と認められたらしいユーリは、子ネコ姿でイヌバージョンのシャルの前脚にもたれて寝入っている映像ぐらいしか、彼の頭の中には浮かばない。
要するに、カルロスの中でシャルとユーリが保護すべき幼子、我が子に近い感覚を抱くのと同じように、シャルの中でユーリの群れでのランクは『自分の兄弟格』であると理解しているらしい。

本来はどうだったのかは分からないが、少なくともバーデュロイで暮らす事を余儀無くされたシャルは一人っ子状態で、何気に自分と対等で競い合える兄弟が欲しかったようで……

待て。
もしかしたら本当に、シャルにとってはユーリはそうでしかないのか？

新しくしつらえた寝床の上で、ウトウトしだしたシャルの頭の中を再びこっそりと探ってみるが、カルロスとしては確定的だと思われるシャルの記憶も、そうなると多少怪しくなってくる。
あくまでもカルロスの思い込みであって、全てはまだまだお子様であるわんこの、ユーリにたいする甘えでしかないのだとしたら。

「……まあ、そのうち発展するだろう」

カルロス自身だとてほんの数年前までは、まさかエストへの愛情が異性にたいする恋愛感情に育つだなんて、思いもしていなかった。
今現在、情緒未発達なシャルの中で、子供特有の甘えと独占欲しかユーリに向けていないのだとしても、いつまでもそのままだとは考えにくい。

廊下と室内の魔法の灯りを消して、カルロスはシャルの傍らに寝そべった。いつもの「ぐー、ぐー」という彼の寝息を聞いていると、その平和さに自然と笑みが漏れてくる。

……取り敢えず。
ユーリはこの先も、寝る時には必ず子ネコ姿にさせておこう。
このケモノなわんこの『自覚を促す心理的発展』は、十中八九ヤバい方向性である予感がしてならない。というか、オスとしてのごく自然な成り行きというか……

そして夜が明け、寝ぼけ眼のカルロスを熱心に促して、早朝から猛スピードで王都へと飛ぶシャル。本当に、これで無自覚なのはどうしてなのだと、厳しくツッコミを入れたいほどの喜び勇んだ様子のわんこの背中に張り付いて運ばれたカルロス。

王都にあるパヴォド伯爵家の屋敷を訪れ、朝から出迎えてくれたセリアに礼を口にしつつ、抱き寄せた子ネコ姿のユーリは……

“わ～い、主ーっ！”

相変わらず可愛かったが、その前足で掴んでいる物体が、その愛くるしさを芸術的なまでに高めていた。

どこからどう見ても、シャルの姿を模してあるとしか思えない銀色のぬいぐるみを掴んで離さず、キョトンとした表情で小首を傾げてカルロスを見上げてくるユーリ。

「せ、セリア、ユーリが掴んでるこのぬいぐるみは……？」

カルロスが、『ぬいぐるみと子ネコ』という素晴らしい情景から目が離せないまま問うと、

「エストお嬢様の、渾身の作品です……素晴らしいと思いませんか、カルロスさん！？」

力強い声がして、カルロスは腕の中のユーリをぬいぐるみごとぎゅむっと抱き締めつつ、同志として共感を覚えたセリアに向けて、しっかりと首肯した。

「ああ、こいつはすげぇ……まさにエスト万歳だ！」

「ですよね！　エストお嬢様はわたしが考えるよりも遥かに、可愛

さへの道をご存知です！」
「ネコにぬいぐるみ！
しかも、サイズが同じぐらい！　色彩の対比が鮮やかなぬいぐるみをぎゅーぎゅーしたユーリ！」
「可愛さが罪な子ネコ！　むしろこの可愛さを増したエストお嬢様に乾杯！」

当人同士では通じ合っているのだが、他人には計り知れない方向へとヒートアップする一方であるカルロスとセリアの会話に、ゴホンゴホンと咳払いが挟まった。

「ああ、セリア。そろそろエストを起こす時間だろう」

カルロスと人間の姿のシャルが通された応接間のソファに、ずっと腰掛けていたのだがセリアが連れて来たユーリによって場が謎の盛り上がりを見せ、話についていけなかったグラが、無表情のまま促した。

「はい、失礼致します」

先ほどまでの興奮状態はどこへやら、一転して落ち着いた素振り……を精一杯装っているらしきセリアは、応接間から退室してゆく。

「失礼しました、グラシアノ様」
「いや」

ユーリをシャルの腕に預けてから、改めて伯爵家の公子に向き直り礼を取るカルロスに、グラは相変わらず言葉少なく寛大な心を示す。

もしも、幼い頃のグラシアノ様が俺を拒絶せずに、そのまま守り役

に収まっていたら……俺は今頃、どんな人生を送ってたんだろうな。
エストの時のように、性別の問題で女性使用人にその座をすげ替えられる事なんて、まず無さそうだが。
……まあ、それも全て昔の事だ。

それよりもまず問題なのは。

「にゃ？」
「……」

カルロスの背後で、やたらと不穏な空気を醸し出して、腕の中のにゃんこを怯えさせているわんこである。
シャルはどうやら、ユーリが抱えたぬいぐるみが非常にお気に召さないらしい。というか、カルロスが軽く思考を追跡してみたところ、『ズタズタに引き裂きたい』という衝動を、抱えているようである。

シャル、エストが丹精込めて縫ってくれたぬいぐるみに手ぇ出したら、タダじゃおかねえぞ？
つうか、ユーリはまた泣き出して、「もう地球に帰りたい！」って言い出すかもなー？

カルロスがそんな心の声を飛ばすと、シャルは戸惑ったように瞬きをして、落ち着かない様子でこちらにチラチラと視線をやってくる。
どうやら、暴力衝動は収まったらしい。

順調にわんこの情緒が育ってるのは、実にめでたい。
お前のお間抜け加減には、もう十分慣れてきたつもりだったが……
初ヤキモチの対象が無機物ってなんだ、シャル。そこはせめて生き物に嫉妬しろ。

番外日常編　ある日のシャルさん

◆

わたしのマスターは、基本的に女の子には甘くて男には辛いと思う。
わたしと同僚に対する態度の違いが、それを如実に表している。

今日もマスターは、わたしの同僚なユーリさんを子ネコ姿にして、愛おしげに抱き上げて手ずから餌やりをしている。
わたしがマスターの手で食べさせて頂いたのは……赤ん坊の時分だけである。ユーリさんはもう、１８歳だというのに。
わたしが焼いた焼き菓子を割って、ユーリさんの口元へと運んで食べさせるマスター。ユーリさんはパクリとそれを頬張り、口や頬をもごもごさせている。

「美味いか、ユーリ？」
「み～（美味しいです～）」
「んー、よしよし。お前は本当に素直で可愛いなあ。俺の事好きか？」
「み～（主大好き～）」
「そうかそうか」

その様子をなんとはなしにぼんやりと眺めていたわたしに、マスターがこちらを振り向いてニヤリと笑った。
何か無性に苛立つ。

“ふふん、どうしたシャル。羨ましいのか、ん？”

マスターはわざわざ思念による言葉を伝えてきて、わたしは『何の事か分かりません』と答えて、踵を返した。

◆

調合のお仕事の後は、とにかく臭いがキツくて辛い。
もしやわたしは職業選択を誤ったのだろうかと、真剣に考える瞬間だ。

フラフラしながら頭から湯船にザブンと突撃して臭いを取り除き、そしてようやく頭がしゃっきりしてきた。
ザバッと湯船から顔を出したら、目の前で人間の姿のユーリさんがお湯につかっていた。子ネコ姿で入浴なんて試みられたら、鈍臭い彼女は間違いなく溺死するけれども。

「ユーリさん、いつからそちらに？
もしやこれが噂の、堂々たる覗きというやつですか」

彼女の肩に鼻面を乗せつつ問うと、ユーリさんはわたしの『撫でれ』という要求に抗えずに応え、ガシガシとやや乱暴に首筋や背中、お腹の辺りをかき回しつつ、

「私がお風呂に入っていたら、毎度の事ながらシャルさんがフラフラしながら入ってきたんじゃないですかっ。
あーもー、お湯が汚れちゃいましたよ全く……」

グチグチと文句を言うものの、その手はやはりわたしの毛並みに夢中のようである。

わたしは遠慮なくユーリさんの顔面をベロンと一舐め。

「んぐっ！？　びっくりしたー。
急に何するんですか、シャルさん」
「ユーリさんが美味しそうだったので」
「……その牙で噛まれたら、冗談じゃなく肉が削げ落ちますので、舐め舐めだけで勘弁して下さい……」

という訳で、もう一回ベロンベロン。うん、何か美味しい。
ガックリうなだれていたユーリさんがくすぐったいと笑った。
最近、やけに頻繁にユーリさんがとても美味しそうに見える。

◆

ある日、ユーリさんがむうう……と唸っていた。
自由な時間があれば、たいていは二階の書斎に入り浸っている彼女が、何やら居間のソファに深々と腰掛け思案している。

「ユーリさん、いったいどうしたんですか？」
「シャルさん……どうしておもむろに隣に座るんです？」

わたしがポスッとその隣に腰を下ろしながら問い掛けると、ユーリさんはずずっと反対側にズレながら胡乱な眼差しを送ってきた。

「さて？　どうしてでしょうねえ」

話すのならば、隣に腰を落ち着けた方が良いと、深い理由もなくそう思っただけなのだが、眉間に皺を寄せながら何故と聞かれても困る。

むしろユーリさんの方こそ、何故ソファの限界いっぱいにまで仰け反るのだろうか。
そんな事をされたら逆に、それ以上に距離を詰めたくなるのだが。

「近いっ！　シャルさん近いですからっ！
つーか重っ！？」

じりじりと座っている場所を移動させ、手凭れの部分に背中を押し付けているユーリさんに上からのし掛かるような体勢になったところで、彼女の口から悲鳴が漏れ……何故だか体中が熱くなった。

“真っ昼間から何してやがんだ、このアホイヌがっ！？”

そんなマスターからの思念がわたしの脳裏に叩き付けられて、それと同時に一瞬にしてユーリさんの体が子ネコの姿に変化し、彼女は着ていた服の中からもぞもぞと這い出てピョンとソファから下り立った。
ズンズンと足音高く居間のドアの前にやってきたマスターは、バンッ！　とやや乱暴に開け放ち、目をぱちくりさせているわたしをヨソに、

「にゃ～、にゃーっ（うぇ～ん、主ーっ）！」

ユーリさんは一目散にマスターの足下へと駆け寄り、マスターは彼女を腕に抱き上げて頬擦りした。

「んー、よしよし。怖かったなあ。もう大丈夫だぞ？」

猫なで声でユーリさんに話し掛けるマスター、擦り寄るユーリさん。
妙にムッとした気分が湧き上がってくるわたしにマスターはふふん

とせせら笑い、彼女を抱いたまま悠然と居間を出て行った。

いったい何だと言うんだ？

納得のいかなさにムカムカとしつつ、せめてソファの上に残されたユーリさんが着ていた服を畳んでおこうと手を……

“シャル、それに手出ししたら、ユーリから向こう一週間は半泣きで逃げ回られるぜ？”

笑い含みの思念が送られてきて、わたしの手はピタリと止まった。

……本当に、ユーリさんはさっぱり分からない。

◆

ある日の夕食の後、後片付けを終えたわたしが食堂に戻ると、食事中は人間の姿だったユーリさんが、またしても子ネコ姿になっていて、イスに座っているマスターの膝の上で小さく尻尾を揺らしていた。

いつもならば、ネコじゃらしで遊んだり彼女を撫で回しているマスターであるというのに。ただ彼女の背中に軽く手を置いているだけで2人とも黙り込み、目を閉じている。一見したところでは、眠っているように見えなくもない。

「マスター、何をなさっていらっしゃるのですか？」

わたしの問い掛けに、マスターとユーリさんは同時に目を開いてこちらを見てくる。

「ん？　ああ……ユーリの世界の音楽を聴いてた。こう、ユーリが頭の中で精密に浮かべてだな、それを追跡すれば、自宅が手軽にフルオーケストラの公演会場に早変わりだ。こいつの故郷の国は高い水準の娯楽性で、世界でもそこそこ一目置かれてたらしくてな。なかなか面白いぞ？」

……ユーリさんは本当に、多種多様な手段でマスターの気分転換を提供している。

まさか、頭の中に記憶した音楽を思い浮かべて楽しませるだなんて。そんな手法、わたしには思いもよらなかった。

“どうしたシャル？　お前がどーーーしても聴きたいのなら、聴かせてやらんでもないぞ？”

テーブルに片肘を突いたマスターから、ニヤニヤしながらそんな思念が飛ばされてきたが、わたしは『別に興味ありません』と頭の中で答えて、ふいっと踵を返して自室に戻った。

後日、マスターが寝ている間にユーリさんにせがんで、たくさん歌って貰った。

聴いていて何故か破壊的な衝動が沸き起こってきた。

彼女の故郷の歌は、恋歌が多いようだ。別に実体験ではないと笑うユーリさんに、あっさりわたしの中の暴れ回りたい気分は消えた。

なんだったのだろう？

◆

またしても今日も、マスターが子ネコ姿のユーリさんと戯れている。

「ははははは、そらそらユーリ頑張れ～」

「みーっ（だから私にはネコじゃらしに釣られる性質は無いんですってばーっ）」

壁にぶつかっても怪我しないよう、わざわざクッションをそちらに立てかけて、細長く纏めた布地を等間隔に置き、その横に胡座をかいたマスターが上下左右に動かすネコじゃらしを、ユーリさんは障害物をジャンプして避けつつ必死で追い掛けていた。

本人の自己申告通り、彼女は目の前でネコじゃらしが揺れ動いていても、鬱陶しいとしか思わない。だが、その遊びが大好きなマスターは、ユーリさんが鼻で笑いつつネコじゃらしを無視すると、とてもとてもご機嫌斜め～になる。

なので、非常にマスター思いなユーリさんは、そのお遊びに前向きに取り組んでいるのである。

「そーれっ」

「にゃっ（おのれ猪口才なっ）」

そしてやっている間に段々、ユーリさんの方もその遊びに熱中しだすのが常であった。

そして、ユーリさんがすっかりネコじゃらししか見えなくなったところで、ジャンプした勢い余って彼女はクッションに正面衝突し、

「おおっ！？」

「に！？（え！？）」

立てかけてあったクッションが倒れてきて、彼女はその下敷きにな

った。
驚きと重さで些か混乱し、上手く脱出出来ないらしきユーリさんが下で懸命にもがいているようで、クッションはもぞもぞと動き、視界にそれだけ見えている尻尾がブンブンと揺れる。

そしてマスターは、そんなしもべの危機を救ってやるでもなく、片方の手が口元を覆い、もう片方の握りしめた拳は膝の上でプルプルと震わせている。
そしてぐりんっと、マスターはわたしの方に顔を向けてきた。その表情は、命のやり取りの最中や後には引けない仕事中さながらに緊迫感に満ち、真剣そのもの。

“やべぇ……なんだこの愛くるしさ！　うちの娘超絶ラブリー過ぎる！
ぜってーヨソの野郎に嫁にはやらん！”

……誰か、我々のマスターの行き過ぎた親バカっぷりを諫めて下さる方はいらっしゃらないものか、と、頭の片隅で考えつつ。わたしは、ユーリさんの上に乗っかっているクッションをひょいと持ち上げて、同僚の救出に及んだ。

◆

「そこで俺は考えた」

3人で食卓を囲んでいた最中、脈絡もなく唐突にマスターがそう宣言して、静かにスプーンを置いた。
わたしには今一つ理解が追い付かないが、大方ユーリさんとの思念による会話を交わしていて、ふと声が漏れたのだろう。

別に、わたしとてユーリさんと同席している場で、マスターと内緒話を交わす事ぐらいあるので、それについてはどうとも思わない。

「何をでしょうか、マスター？」

わたしがそう問い掛けると、マスターはこちらへと視線を向けてきた。

わたしは遠慮なく、大皿の上のサラダを大量に取り分けてドレッシングをかけた。

フォークを刺してもごもごと頬張る。実に美味しい。

わたしは肉しか食べないと思われがちだが、葉物野菜も好物である。

「シャル……俺と一緒に風呂に入れ！」

マスターは、至極真面目な表情を浮かべて命じ。斜め右の席に着いているユーリさんは、遠い眼差しでパンを千切ってスープに浸している。

わたしはモグモグごっくんとサラダを飲み込み、

「嫌です」

いつもの笑みのままわたしは簡潔に返事を口にし、再びフォークをサラダに突き刺してあ～む、と二口目を口に運び、モグモグと咀嚼。

「昔はあんなに、何をするにも俺の後をついて回ってきたのに……！」

マスターはテーブルに肘を置き、頬杖をついて嘆くが、赤ん坊の頃の習慣を持ち出されても困る。

というか、マスターはわたしの洗い方がしつこいというか、撫で回

したいのか執拗にゴシゴシしてくるので、逆に毛並みから油分が抜け過ぎてパサパサになってしまうから嫌なのだ。

◆

「シャルさん、いざ、尋常に勝負です！」

「受けて立ちましょう。ユーリさんがわたしに勝とうだなんて百年早いという事を、しっかりその身体に刻み付けて差し上げます」

腰に片手を当て、もう片方の手をわたしに向けて人差し指をビシッと突き付けてくるユーリさんに、わたしは鼻で笑いながら取り敢えず両腕を組んで見返してみた。威厳が出る態度とは、どうすれば示せるものなのだろう。

「……で。お前ら結局、組んず解れつ何やってんだ？」

わたしとユーリさんの、真剣勝負の真っ只中であるわたし達の自室のドアにもたれかかったマスターが、我々に呆れた眼差しを向けながらそう問い掛けてくる。

わたしはブリッジ状態でマスターを上下逆さまに瞳に映し出し、ユーリさんは丁度わたしのお腹の上で交差して乗っかるような形で、体重をわたしに乗せつつ四つん這いに……これは間違いなく、同僚の計略に引っ掛かってしまったようだ。

だが、それをすんなりと認めてやるのも癪である。

「見ての通り、今私達は真剣ツイスター勝負中です、主！」

シートに四色の絵の具で丸い円を描いた、ユーリさんお手製のツイ

スター用シートを床に広げ、お互いの手足を置く色を交互に指定していくという、単純だが難しいゲームだ。本来は指示盤を使うらしいが、そっちは作っていないので指定制にしたらしい。

「ほ～」

そして、わたしやユーリさんの思考からゲームの趣旨を理解したらしきマスターは、ドアにもたれ掛かったままニヤリと笑った。

「ならその『シジバン』とやらの代わりに、俺がお前らに平等に指示してやろう。文句は無いな？」

「主……我々しもべに変なポーズをさせて、耐え忍ぶ姿を見て大笑いする気満々ですか」

「……」

「何を言うか、ネコよ。思いがけないランダム制とやらが、そのゲームの醍醐味なのだろう？」

因みにわたしは何気に、先ほどから会話に加わる気力が残っていない。

ユーリさんの体重の重さに耐えつつ、逆さまになった頭のクラクラ加減を耐えるのみ。子ネコ姿ではあんなに軽いのに、人間の姿だと無駄に重たくないですかユーリさん？

それから数回マスターが指示した命令に従って動いた結果、わたしとユーリさんは同時に床に転げた。

……人間の手足の動作限界の長さや角度からして、ムリなものはムリな色を指定しないで下さい、マスター。

わたしとユーリさんによる、今宵の真剣勝負は引き分けとなった。
ユーリさんはまだ何か、元の世界で遊んだゲームの道具をせっせと製作しているようである。

◆

「そこで俺は考えた！」

とある食後のティータイム中に、またしてもマスターが唐突な一言を申された。
今回は、ユーリさんもカップを片手にキョトンとした表情を浮かべているので、２人だけの内緒話中に、声が漏れ出たのではないらしい。

「何をでしょうか、マスター？」
「シャル、イヌバージョンになれ！　ユーリ、ネコにするから二階で支度してこい！」

わたしの疑問には答えず、嬉々としてお命じになるマスター。
わたしは思わずユーリさんと顔を見合わせる。
主の真意は今ひとつ分かりかねたが、我々は彼のしもべ。粛々と命に従ってそれぞれの動物姿にて、マスターの足下に跪くわたしとユーリさんを満足げに見やるご主人様。

「それでマスター、我々を突如こちらの姿にされたのは……？」

わたしの問いに、マスターはユーリさんを抱き上げてわたしの背中に寝かせ、マスターご自身は……わたしの腹にべったりと貼り付いてきた。

「もちろん、お前らの毛皮を撫で回したくなったからだ！」

マスター……その、自分がやりたいと思った事を貫き通す姿勢そのものは、素晴らしいのではないかと思います。
ですが、わたしの腹を撫で回すマスターのその手付きが、どうにもこうにも鬱陶しいのです。

「にー（夏の暑さにも負けず、よくやりますねえ。流石は主）
み～（そう言えばシャルさんって、その毛皮暑くないんですか？）」
「ああ、それはユーリさんにも言える事ですよ。
ユーリさんだって、ネコの姿でいても暑さに耐えきれないとは感じないでしょう？」

マスターのいつもながらの動物好き衝動にたいし、遠い眼差しを浮かべたユーリさんが気を取り直したように問い掛けてくる。
ユーリさんは常々その点について、不思議で仕方がなかったらしい。
どうせわたしはマスター曰わく、ユーリさんよりも鈍いそうですから？　そんな疑問を抱いたのは、たった今ですよ。そんな実情は彼女には言いませんけど。
さあマスター、我々しもべの疑問解決はお任せします。

「あのなあシャル……まあいい。
お前らクォンの外殻膜には、マレンジスの気候に耐える機能も備わってるから、夏場に毛皮の動物でいてもある程度の暑さなら耐えられる。冬場の雪原の中でも同じな」

ほー、そうだったのですか。
今のわたしは夏毛ですから、それで十分涼しく過ごせるのだと思っていました。

「み～（つまり主は、夏だろうが遠慮なく我々しもべを撫で回したいが故に、外殻膜に気候変化への耐性を付与したのですね？）」
「その通りだが、何か文句でもあるか？」
えっへんと威張りくさるマスターに、ユーリさんは呆れたような鳴き声を漏らし、もぞもぞと動いてわたしの背中の上で丸くなったようだ。
子ネコ姿の時のユーリさんは、実によく眠ると思う。これもいわゆる、ふて寝だろうか？

◆

今日もマスターは、わたしとユーリさんをイヌネコ姿にして、戯れる時間を楽しんでいた。
「にゃ、にゃ～（ところで主、ふと疑問に思っている事があるのですが）」
寝そべるわたしの腹を枕代わりに、まったりと横たわるマスターの腕の中で、ユーリさんがてしてしとその肉球の一撃を幾度も振るう。ユーリさんのそんな些細な行動にさえ、マスターの眉尻が緩むのはなんとかならないのだろうか。
「どうした、ユーリ？」
「みみ～（私の姿を子ネコにするだけでは飽きたらず、まさかネコ娘になさったりなどは……？）」
「……なんだそりゃ？」
「みぃ（人間の私の頭にネコ耳をくっ付けたり、お尻から尻尾を生

やさせたり？）」
「要するに、ユーリさんもわたしと同じように部分変化がしたい、と」
懸命に説明している彼女の発言を要約すると、そういう事だろう。
しかし彼女は、「んにゃうっ！」と、激しい抗議を表明してきた。
「あー、期待させてるところ悪いが、な。
俺が与えた姿の方に、元の体の一部を露出させる事は可能だが、逆は無理だ。あくまでも、ユーリは本体が人間でネコは仮初めの姿だからな」
「み～（それを聞いて安心しました、主……）」
マスターとユーリさんのやり取りを総合すると、つまりユーリさんの現在の子ネコ姿に人間の体の一部を露出させる事が可能、という事になる。
わたしは真剣に、『子ネコ姿に人間の体の一部』のどの部位を付け加えたら利便性が高まるだろうかと、想像を巡らせてみた。
前足を人間の手にしたら細かい作業にも向いているだろうし、首から上を人間の体のままにすれば、簡単に人間とコミュニケーションが取れそうだ。
“……シャル。お前のその、ボケた思考回路と鮮明で詳細な想像図はなんとかならんのか？”
何かいけませんでしたか、マスター？
“明らかに魔物だそんな生物はっ！！”

頭の中がキーンと痛むほど、マスターから厳しいお叱りのお言葉を賜ってしまった。
わたしはただ、より良きしもべとしての後輩の有り様を模索していただけだというのに、何がいけなかったのだろうか。マスターのお考えは時に深遠過ぎて、ついていけれないものがある。

◆

ふとわたしは気が付いた。
ユーリさんがよく口にする発想の逆転とやらを、今実行してみれば良いのではないだろうか。

鼻面を向ければそちらには、子ネコ姿のユーリさんの頭を撫で回しつつ、「お前は本当に可愛いなあ」などとメロメロな台詞を口にしているマスター。
つまり、ユーリさんを改変するのではなく、マスターの将来のつがいであるエステファニアお嬢様で想像してみれば良いのでは。

わたしはエステファニアお嬢様のお姿を思い描き、彼女の頭にネコ耳を取り付けてみた。ドレスの後ろから、尻尾も覗かせてみる。
……さして強そうな印象は受けない。この姿に、あまり意味は無さそうだ。

「しゃ、シャル……お前……！」

何故か突如として、マスターがわたしのあぎとをガッ！　と掴み、真剣な目を向けてきた。
マスターの腕の中から放り出されたユーリさんは、ふうやれやれと溜め息を吐きつつ、こちらのやり取りに無関心そうに絨毯の上に丸

くなった。

「どうかなさいましたか、マスター？」

「……な、なんでもないっ……！」

わたしのキョトンとした眼差しに、マスターは首を左右に振って、何かを振り切られたご様子だった。

本当に、我々のマスターは不思議な方である。

◆

ゆらゆら、ふわふわする。

とても緩やかで、心地の良い空間にわたしは漂っている。

慣れた匂いと共に、前脚に安心する温もりが伝わってくる。

「にー、なぁん（シャルさん、大好き）」

どこかからかそんな声が囁かれて、わたしは心地良い微睡みに落ちてゆく……

――ゆーりはね、ずっとずっとしゃーちゃんのこと、大好きだよ！

――だからしゃーちゃんもゆーりのこと、ずっとずっと大好きでいてね？　やくそくね！

ユーリさんが傍らに寄り添っている晩に見る夢は、いつも幸福感に満ちているのだ。

キャラクター及び世界設定など（ネタバレ多々）

○ユーリ

本名：森崎悠里　出身地：地球、日本国

種族：人間　外見：黒髪黒眼　年齢：１８

使い魔としての変化：人間⇔ネコ／ターキッシュアンゴラっぽい長毛種、変化姿なので成長せず永遠の子ネコ（笑）小さく軽い

魂の属性：寂寥・愛慕＞肉親との繋がりが浅く、孤独感に苛まれる寂しがり屋さんな人生を送りそうですが、その分愛情深い人になります　総括すると天然です

設定諸々

脳内では咄嗟に様々なツッコミが浮かぶが、上手く舌に乗せて喋れない、お喋りが下手で頭でっかちな人。

些細な事象から無駄に想像力を働かせて深読みし、たまに自分で自分の首を絞めたり身動きが取れなくなったり、墓穴を掘るタイプ。

インドア派、虫は嫌いなので飼い主様のところへ得意げに持ってきたりはしません（笑）

日本生まれの日本育ち。

幼少期から父は居らず、またどんな人物なのかよく知らない。

母親はパチンコ通いでさほど働いている様子も無かったが、生活費は何故かあった（父からの養育費と推測）高校の頃に母は没する。

兄弟無し、親戚も特に居ない。謎の銀行振り込みは母亡き後も継続され、そのまま進学。

大学に入学し、オモチャ屋さんでアルバイトを始めた頃、精神異常気味ストーカーに付きまとわれだす。

キッパリ交際を断るも延々付きまとわれた挙げ句、バイト中の倉庫

に放火され死にかけたところをカルロスに救われる。
使い魔契約で記憶や知識を写したカルロスとも、

「異世界だなんて、あのキモ男は絶対に追ってこれないし好都合！」
「……『ストーカー』？
なんだあの気持ち悪い男は！」

……という点で主従的に意気投合し、割と良好な『ご主人様と飼いネコ』生活に。
魔力ゼロな為、使い魔としての個人的特殊能力は主とのテレパスのみ。後、ネコ時の跳躍力は三倍。走り幅跳び６ｃｍのジャンプ力が、なんと１８ｃｍに！（ビミョー）

オモチャ屋倉庫から召喚された際に、一緒に紛れ込んできた水鉄砲が武器代わり。
悪ノリしたシャルから渡された錠剤を入れて水を注ぐと、刺激性の高い液体が射出される。
ハバネロやブート・ジョロキアを水にした、的なものを想像して頂ければ。何気に凶悪、取り扱い注意品。

○シャル
本名：シャールデュファシュロォス　出身地：？（本人も分からず）
種族：天狼　外見：銀髪琥珀色の眼　年齢：１４（推定）
使い魔としての変化：天狼⇔人間／人間社会で生活中な為、カルロスの成長に合わせて少しずつ外見年齢を上げていっている。現時点では２７～３０辺りに見える。中身はアレって詐欺です飼い主様。
魔術適性：風　親和性＞炎
魂の属性：寂寥・愛慕＞肉親との繋がりが浅く、孤独感に苛まれる寂しがり屋さんな人生を送りそうですが、その分愛情深い人になり

ます　総括すると天然です

設定諸々

見た目は頼れるお兄さん（２０代後半）と見せかけて、実は最年少。子供の姿だと仕事上不都合が多いので、人間の姿に変化すると青年ぐらいに見えるように、カルロスが調整。

たまに出る、天然なのか計算された腹黒なのか？　微妙なラインのシャルの言動は、実は単なる深い意味の無い子供らしい悪戯心（爆）

親しい相手には天の邪鬼で意地っ張り、素直になれない甘えん坊なお子さまぶりを存分に発揮するワガママっ子。

天狼の姿は、銀の毛並みの狼に純白の翼が生えた姿。空だって飛べちゃえます。白昼堂々、人を口に銜えて誘拐だってできちゃいます。

一応主も背中に乗せて飛べます。そんな彼をイヌと言い切るご主人様（汗）

使い魔としての能力は多彩、様々な感覚が鋭い。

動物の鳴き声から意図を読み取る事も可能。使い魔として、明らかにユーリより格段に有能である。

ほぼ生まれたての状態でカルロスの使い魔契約召喚に引っ掛かり、そのまま育てられた為、親族の記憶は皆無。

呼び出された時点で衰弱しきって瀕死の状態だった為、何らかのトラブルに見まわれていたものと思われる。一度元の世界に返された事があるのだが、そこは……

赤ちゃん狼なシャルのあまりの可愛さに、強引に魂を奪う事をカルロスは嫌がり、そのまま育てる事を決意。故に、シャルの契約内容は、

『シャルがいつか本心から望むものを用意する』

とされ、現在は仮契約状態である。

使用人として十数年間みっちり仕込まれた為、我儘なカルロスの世話にも慣れた、家事万能スーパー執事。

○カルロス

本名：カルロス　出身地：マレンジス、出身国は不明

種族：クォーターエルフ　外見：金髪碧眼　年齢：２５

魔術適性：光　親和性＞風、水

魂の属性：寂寥・愛慕＞肉親との繋がりが浅く、孤独感に苛まれる寂しがり屋さんな人生を送りそうですが、その分愛情深い人になります　総括すると天然です

設定諸々

ストリートチルドレンだった為、家名は無し。エルフの血を引くが、外見にその片鱗は窺えず見た目は人間。（父親がハーフエルフだった記憶が、僅かに残っている）

野垂れ死にしかけていたところを魔法使いとしての才能を見出され、パヴォド伯爵家が後見となって魔術師連盟の学校に入学する。

子供の頃に世話をしたエストが、どんどん愛らしく可憐な美少女に成長していくさまに内心戸惑い、激しく心惹かれながらも身分違いであると、それなりに自制している。

恋しい人を獲得する為、ただ今水面下で密かに努力中……

魔術学校では天才的な能力を開花させるも、マレンジスの魔術師としては使い魔契約で躓く。

適性な使い魔を召喚出来る者は稀だが、呼び出した存在の魂を吸収しない魔術師の方が更に稀。というか長い魔術師の歴史上、記録に残っている中ではカルロスが初。

二匹も呼び出せた事は快挙であるにも関わらず、そのまま使役して

いる事に連盟のお偉い方は苦笑い。しかも理由が、

「こんなに可愛い生き物が殺せるか！」

「最初っからその予定で召喚したんでしょ？　君、バカなの？」

などという子供（当時１０歳ぐらい）の言い分。

学校は首席で卒業するが、連盟で研究室を貰わずにフリーの魔法使いとして野に下る。

かねてよりやってみたかった調香師のお仕事に、学んだ魔法が活かせてそれなりに満足な日々。

使い魔二匹はペット……もとい、身内的感覚を抱いている為、ポッと出のユーリをやたらと構う主や、ユーリ本人に対してヤキモチじみた複雑な心境のシャルを、内心ニヤニヤしながら眺めている。

○エスト

本名：エステファニア・ファルマシア・パヴォド　　出身地：マレンジス、バーデュロイ国

種族：人間　外見：金髪翠緑の目　年齢：１６

魂の属性：難航・慈愛＞望みを叶える為に様々な困難にみまわれる、苦労の多い人生を送りそうですが、その分他者を思い遣り慈しむ強さを身につける事でしょう　総括すると姉御です

設定諸々

カルロスを後見しているパヴォド伯爵家の令嬢。

カルロスが魔術学校に通っていた頃は、王都にある伯爵家の屋敷で共に生活しており、エストの子守りもカルロスの仕事の一つだった為仲が良い。

貴族令嬢ではあるが行動派であり、積極的に幅広い立場の人々と交

流の機会を設け交友関係を築く。目を見張る美貌とあいまって、かねてから社交場にて噂に上っていた才媛。
とある王族の後宮入りの話が囁かれているせいか、特に決まった婚約者はおらず。その外に堂々と婚約話が持ちかけられているのは、アルバレス侯爵家からのお話である。
密やかに内々での求婚者は昔から後を絶たないが、彼女本人はカルロスに心惹かれている模様。

活発でお茶目、悪戯好きな面もあるが、素直なお嬢様である。

○アティリオ
本名：アティリオ・ミュゼラ・アルバレス　出身地：マレンジス、バーデュロイ国
種族：ハーフエルフ　外見：亜麻色の髪水色の目　年齢：２５
魔術適性：水　親和性＞風、精神
魂の属性：渇望・義烈＞自らの熱望するものは悉く目の前で他者の手に渡る、飢えに近い感情を味わう人生を送りそうですが、決して諦めずに自身の正義を貫こうとする事でしょう　総括すると熱血です

設定諸々
アルバレス侯爵の孫。
隔世遺伝によりエルフの血が表に現れたタイプのハーフエルフ。チェンジリング。
両親兄弟を始め親族全てが人間である為、肩身が狭い思いを味わっている。
カルロスと同じ時期に魔術師連盟の学校に入学するも、試験でも実技でも悉く彼に一歩及ばず、常に次席のまま学校を卒業。
連盟で研究者として生活している今も、在学中から変わらずカルロスへのライバル心を燃やしている。

カルロスが召喚したシャルについて、『あれはイヌであるか否か』の真剣論争を繰り広げた１０歳前後の対立以来、カルロスとは仲が悪い。イヌ派としては、シャルがイヌだとは断じて認めていない。因みに使い魔契約術は、その他大勢の生徒と同じく、頑張っても何も呼べませんでした（笑）

○パヴォド伯爵
本名：エスピリディオン・ファビアン・パヴォド　出身地：マレンジス、バーデュロイ国
種族：人間　外見：金髪翠緑の眼　年齢：４４
魂の属性：晦渋・活路＞自身の言動は悉く他者から誤解され、真意が伝わらない人生を送りそうですが、その誤った認識の分、良い意味で物事が進む事にもなるでしょう　総括すると親馬鹿です

設定諸々
エストの父である、当代パヴォド伯爵。何かを企んでいらっしゃるご様子。
発言の内容は常に裏側を深読み、機微読解能力を要求されるが……？
奥さん最愛で、結婚する際に城下街の名前を奥さんとよく似た名前に改名した、大規模だが意味分からん愛情表現を大真面目に実行に移した人。

○ベアトリス
本名：ベアトリス・アリアドネ・ベルベティー・キーラ・ディベルキュルス　出身地：マレンジス、デュアレックス国
種族：ハイエルフ　外見：金髪碧眼　年齢：３１２
魔術適性：光　親和性＞風、水

魂の属性：賢才・遺失＞優れた才能を発揮し、他者からは群を抜いて突出しているが故に、自身が正しいと感じる道を突き進み、大切な物を置き去りにしてしまう人生を送るでしょう　総括すると慌て者さんです

設定諸々
バーデュロイ国に魔術師連盟を設立した中心メンバー。
光系結界術の第一人者、特化術士。
とある理由により、自身の周囲に常時結界を張り巡らせている。

数百年前から、基本的にデュアレックスに居着く事なく大陸中を放浪して回っていた。
連盟が把握している中では、生き残っている唯一のハイエルフ。

カルロスの父親であるハーフエルフが、死の間際「バーデュロイにお祖母さんが……」と言い残し、ベアトリス自身も人間との間に出来た息子が行方不明である。
得意な魔術の系統や、外見的特徴、その他些細な手掛かりに符合する為、確証はないがベアトリスはカルロスの祖母ではないか？という疑いがある。（その為、カルロスが彼女を堂々と婆さんと呼ぶのは、周囲からも黙認されている）

○セリア
本名：セリア・リュリュメル・アント　出身地：マレンジス、バーデュロイ国
種族：人間　外見：金茶色の髪榛色の瞳　年齢：１８
魂の属性：逸雄・右傾＞いつまでも若々しく溌剌とした発想や行動力を持ちますが、意外なところで頑固で保守的な一面から逸脱出来ない人生を送るでしょう　総括すると好奇心いっぱいさんです

設定諸々
アント男爵家の長女。既に四年ほど、エストのレディーズメイドを勤めている。
実家は所領を持たない貧乏貴族で、一般人と変わらぬ暮らしぶりを送っており、１１歳の時から行儀見習いの名目でパヴォド伯爵家でメイドとして働く。
お嬢様とカルロスのラブストーリーに、内心ではキャーキャー騒いでいる明るいお嬢さん。

〇フィデリア
本名：フィデリア・ラナルターゼ・フィリアナ・パヴォド　出身地：マレンジス、バーデュロイ国
種族：人間　外見：ストロベリーブロンドの髪、水色の瞳　年齢：３８
魂の属性：夢想・愛育＞幾つになってもどんな現実が立ちはだかろうとも、いつまでも柔らかく優しい生き方を忘れず、また他の人にも細やかな幸せを振り撒く事を怠らない人生を送るでしょう　総括すると夢見る夢子ちゃんです

設定諸々
元・公爵令嬢、現在はパヴォド伯爵の妻。
無論、本人的には夫とは政略ではなく大恋愛の末の恋愛結婚。
ほわ～んとした性格の為か、伯爵閣下の言動を額面通り受け取って、ラブラブ生活を送っている。
夫との間に子供を多数設ける。

○グラ
本名：グラシアノ・エヴァランジュ・パヴォド　出身地：マレンジス、バーデュロイ国
種族：人間　外見：ストロベリーブロンドの髪水色の瞳　年齢：２１
魂の属性：哀愁・愛惜＞何故か運が悪く、可哀相な目にばかり遭ってしまいますが、めげずに真っ直ぐさを保つ姿に、その境遇を憐れむ周囲の人々から応援される人生を送るでしょう　総括すると胃薬要ります？さんです

設定諸々
パヴォド伯爵の長男、跡取り息子。
お父様の紛らわしい言動に最も振り回されている、ちょっと可哀想な人。
表情が無いか、眉間に皺が寄っているか、父親の発言により困惑↓顔色が青褪めているか、の３パターン以外の表情は激レア。めでたい事に胃潰瘍持ちではない。
笑顔を絶やさず、舌も滑らかな両親に似ず、無口で無愛想な無骨者。
貴族の嗜み以上に武術を得意とし、頭を働かせるよりも身体を動かす方が性に合っている。

○ドゥイ
本名：ドゥイリオ・キャレイ・アルバレス　出身地：マレンジス、バーデュロイ国
種族：人間　外見：白銀の髪（老齢により色素が抜けた）水色の目　年齢：６８
魂の属性：鬱然・？＞

設定諸々
現・アルバレス侯爵、アティリオの祖父。
好々爺然とした初老の男性。

○ブラウ
本名：ブラウリオ・ルティト・ナジュドラーダ　出身地：マレンジス、バーデュロイ国
種族：人間　外見：亜麻色の髪水色の目　年齢：２２
魂の属性：道化・？＞

設定諸々
アルバレス侯爵の娘を母に持つ、次期ナジュドラーダ伯爵。アティリオの従兄弟。
所領の運営などを学ぶため、祖父の下で修行中の身。
ナジュドラーダ伯爵家は、アルバレス侯爵家の分家にあたる家柄。
トリップしちゃうとクサい台詞がこんこんと湧き出てくる、変な性癖を持つ。

◇異世界・マレンジス
剣と魔法、そして魔物が跳梁跋扈する世界。過去、大陸の中心に位置するエルフ族が治める大国により、人間が治める周辺の国々は属国のように扱われていた。
長寿であり強力な魔術を操る彼らによって、世界は支配されていたといっても過言ではない。
大陸の共通語は彼らエルフ族の言語である。

しかし、百年ほど前に異変が起こり、世界の情勢は一変する。

◇魔術師連盟

魔術を使う為には、エルフ族の血を引いていなくてはならない。
現在では迫害されがちなエルフ族及びエルフの血を引く人々が、魔術を国の役に立てる事を誓い、引き替えに国から保護を受ける組合、バーデュロイ国においては『魔術師連盟』と称される。
他国では未だにエルフ族に対して敵意を露わにする人々も少なくない為、連盟を頼って亡命してくるエルフ族も多い。
連盟に所属している限り、魔術師達はバーデュロイ国内において様々な保障や保護が受けられるが、兵役など多くの義務が課せられる事になる。

魔術師……魔術の研究を専門職にしている人。
魔法使い……魔術を扱える知的生命体への呼称。一般人はすべからく「エルフ＝魔法使い」と認識している。
術者……魔術師と魔法使いの区別なく指す呼び名。これを使う人は、ある程度魔術への知識や理解がある。

◇魂の属性

魂にはそれぞれ固有の特色が記されており、生きてゆく上で定められた属性に運命が引き寄せられてゆく。
大まかな個人の性格的なものと考えて頂ければ。

◇バーデュロイ王国

マレンジス大陸の西南西部に存在。
領土はさほど広くはない中規模の国家だが、気候が穏やかで農作物の収穫高が高い。森林が多い事も特徴。
『使えるものは何でも使え』『実力でのし上がれ』が気風。

◇デュアレックス王国
かつて、マレンジス大陸中央部にて栄華を誇った大国。
大陸全土の国家を手中に収めていた。
エルフ族による、エルフ族の為のエルフ族大国。
国民は魔物の出現によって散り散りとなり、逃げ延びた多くのエルフ達は周辺諸国の人間達からの迫害を受ける。
現在のデュアレックス王国の国土は強力な魔物達の住処であり、瘴気が溢れている。

◇ザナダシア王国
マレンジス大陸の南部に存在。
近頃、大規模な魔物討伐に向けて、軍備を増強しているらしい。
隣接しているバーデュロイとは、数十年間微妙な関係。
エルフ族に対する差別と弾圧は激しく、僅かでもエルフの血を引いている事が判明すると……

ユーリは居心地悪くシャルの腕の中でもぞもぞしていた。

のんびりとした道中を経て、昨夜遅くに一家は王都にあるパヴォド伯爵家のお屋敷に到着し。

今夜はシャルさん来ないのかな？　まだかな？　などと、ソワソワしながら待ち侘びるも結局同僚の訪いは無く。そのまま夜は更けてゆき、諦めてエストのお部屋の長椅子を占拠してぐっすりと眠っていたユーリだったが、朝も早くからセリアに抱き上げられて目を覚ましたのであった。

そして連れて行かれたお部屋、応接間にて、彼女は主の元へと返されたのである。

どうやらカルロスやシャルが来訪した時刻は、貴族階級の常識からすると非常識なまでに早い時刻であったらしい。

伯爵閣下やレディ・フィデリアはまだ寝室であるし、エストですら朝のお支度を調えていない。

という訳で、パヴォド伯爵家お抱え魔法使い的な、どうも多少特殊な立場であるらしいカルロスを出迎えたのは、本日も早朝から暑苦しくも生真面目に朝の鍛錬を行っていたグラのみ。

ユーリを腕に抱き、ネコ耳をつんつんとつついてちょっかいを出してくるシャルの手にネコパンチをお見舞いしつつ、ユーリは片方の前足でしっかりとぬいぐるみを抱き締めたまま、カルロスの背中を見つめた。

グラと挨拶や当たり障りの無い世間話を交わしている主は、どことなくよそよそしい。それはグラの方も同様で、妹であるエストとカ

ルロスの親密さを考えると、やけに他人行儀である気がする。

むむむ……ぐらぐら様って、エストお嬢様と主の関係にあまり賛成ではないのでしょうか。単純に、誰にでもあんな風に素っ気ないのでしょうか。

「それでカルロス、仕事の方は順調か？」

「はい、お陰様で。有り難い事に、私を指名して下さるご贔屓の顧客もついてきております」

ここ数日間身近に接してきた公子様だが、思えばグラの笑った顔は見た覚えが無いなあ……などと考えているユーリのネコパンチ攻勢をものともせず、ネコ耳をみよんみよんと引っ張るシャル。

思索や観察の邪魔をしてくる同僚の腕を、ていていていっ！　と、遠慮無く肉球で連打しつつ、主の背中をジーッと眺める。グラと会話する際のカルロスは、伯爵閣下と対面している時と同じように口調が改まっていて、両者の距離感は広そうだ……などと感じてしまう。

そんな事を考えているユーリの尻尾を、肉球連打になど痛痒を感じない様子で、しつこく撫で下ろしてくる同僚……

ええいっ！　シャルさんさっきからなんなのですかっ！？

「お待たせしましたわ……あら？」

「フシャーッ！」と、威嚇的な鳴き声を上げつつ、ベシベシッ！と、シャルの顎にネコパンチを繰り出すユーリに、カルロスとグラがギョッとしたようにシャルの方を振り向き、それと全く時を同じくして軽やかに応接間に姿を現したエストは、いつも大人しいユー

リの珍しい威嚇の声に、驚いたように首を傾げた。

「ユーリさん、下からアッパーは流石に痛いです」

ええいっ、さっきから止めて下さいって行動で示してるのに、執拗にざわざわしてくるシャルさんが悪いんでしょうがっ！

ユーリのネコ耳や尻尾を弄り倒していた手で、わざとらしく顎を撫でさするシャルに、彼女は「みゃみゃっ！」と、嫌なものは嫌であると示した。

「まあ、どうしましたの、ユーリちゃん。またシャルに苛められましたの？」

ユーリは居心地の悪い同僚の腕の中から、心配そうに歩み寄ってきたエストの腕の中へと、ぴょんと飛び移った。

「みぃみぃ」と朝の挨拶代わりに擦り寄って喉から甘えた鳴き声を出しつつ。やはり、エストの腕の中は安心する。

エストはユーリの頭を撫でてやりながら、

「もう、シャルはまたユーリちゃんに意地悪したのね。

カルロス、まだわたくしがこの子を預かっていましょうか？」

「いえ、エステファニアお嬢様、わたしは苛めてなど……」

厳しくキッ！　と見据える無力である筈のエストの眼光に、とってもお強い筈の天狼さんは、気まずそうにたじろぎつつもごもごと口ごもる。

カルロスはシャルの頭をぐしゃぐしゃとかき乱すと、

「まあそう言ってやるな、エスト。シャルは多少ユーリを構い過ぎ

ただけで悪気はねえよ。
もうしねえから、許してやってくれ」

苦笑気味にエストに執り成し、後半はユーリに向かって同意を求めてきた。

シャルさんはもう少し、小動物と接する時には加減というものを覚えて欲しいものです。

そう呆れつつも、シャルの抱っこは警戒してご主人様の腕に飛び乗るユーリである。

「……ネコという生き物は、やはりどうも落ち着かん」

黙して一同のやり取りを眺めていたグラは、低い声音でポツリと呟いた。
ユーリのご機嫌の起伏の激しさに、見た目が可愛いという感覚より何より、面倒臭いという実感の方がより強く感じ取れるらしい。

伯爵邸にて住み込みで働く使用人さんの為の一室をお借りして、こっそりと人間の姿に戻ってもぞもぞとお着替えをしながら、ユーリは小さく溜め息を吐いた。
自己嫌悪から、久々にお洋服を身に着ける機会であるというのに、ちっとも気分が向上しない。

“反省したなら、もう二度と同じ轍は踏まなきゃ済む話だ”

はい……申し訳ありません、主。

不意にカルロスからテレパシーが伝えられてきて、ユーリは心の中で素直に謝罪した。
シャルの気紛れなちょっかいに憤慨して癇癪を起こし、殴りつけた挙げ句にまたしても関係険悪に……自分は全く成長していないではないか。
ユーリは同僚と意志疎通が可能なのだから、彼にネコの扱い方を言葉で伝えてやんわりと窘めるべきであったのだ。それが大人の対応というものであろう。

ううう……せっかく主とエストお嬢様の、短くもラブ甘タイムな逢瀬になる筈だったのに……！
バカバカ、私のバカーっ！

ユーリがギャーギャーと怒りを露わにしてしまったせいで、カルロスもエストもユーリを落ち着かせたり、ムッと苛立つシャルを押し止めたぐらいで、ろくに会話を交わすヒマも無く時間切れになってしまったのだ。

“らぶあま……？　いや、グラシアノ様が同席なさっている場では、どのみちそんな展開にはだな……”

いいえっ！　空気状態がお得意なぐらぐら様ならばきっと、見て見ぬ振りをして下さると、私は期待しています！

頭から通した細い紐をシャツの襟の下に入れ、ポーラー・タイとして胸元で金具を調節しつつ、ユーリは重々しく頷いた。こちらでは紳士が身に着けるタイにこの手のタイプは存在しないらしく、一見すると風変わりなペンダントのように見えるらしい。
クラバットや他のタイの類いはなんだか息苦しい上に、ユーリには致命的に似合わない。

少しばかり伸びてきた髪の毛を指で梳いて、緩く三つ編みに編むと、子ネコ姿の時にもずっと身に着けていたピンク色のリボンを結ぶ。

「あっ」

髪留め用のゴムを留める際には楽々とこなせていた、そんな些細な身支度であるが、片手で髪を纏めておきながらリボンを結ぶというのは非常に難しい。

あまり時間をかける訳にもいかず、身に着け終えた服が入ったいた布袋にぬいぐるみを入れて肩に掛けたユーリは、今日もリボンを片手に握ったままドアを開いた。

「お待たせ致しました、主」

壁に背を預けて廊下で待っていた主人に向かって一礼すると、カルロスは短く「いや」と答えて、あまり待たされてはいないから気にするなと示してくる。

最近、ユーリのご主人様は彼女が人間の姿でも、多少甘くなってきたような気がする。相変わらず子ネコ姿の際のメロメロっぷりは突き抜けているが。

手にしたリボンに視線を落とし、無くさないようポケットにでも仕舞おうとしたところで、ユーリの指からスルリとそれが引き抜かれた。

そちらに視線を向けると、彼女の傍らに立った同僚は相変わらずむーっと眉をしかめつつも、ブラシで軽く彼女の髪を梳き、右サイドに纏めてリボンを結んだ。その可愛らしい蝶々結びは、相変わらずの早業である。

「……ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

重たい口を開いてなんとかお礼を口にするも、やけに気まずくてシャルの顔を見上げる事が出来ない。これで、『私はシャルさんとお揃いじゃなくて、三つ編みが良いんです！』などと言い出そうものならば、更に関係が険悪化しそうだ。

ごめんなさいと謝らなくてはならないのに、どうしてもシャルにそう素直になれない。

シャルさんってもしかして、いつもブラシを持ち歩いているんですか？　という軽口を言い出して笑い飛ばす事すら上手く出来ない。

「さて、それじゃサッサと行くか。あんまり長居も出来ねえしな」

もじもじと気まずい沈黙を保つユーリの頭をポンと軽く撫で、カルロスが踵を返して歩き出してしまうので、ユーリは慌ててご主人様の背中を追い掛けた。シャルは当然のようにカルロスの右斜め後ろに付き従うので、ユーリは何となくカルロスの左側の半歩後ろを歩く。

シャルとは微妙な距離を開けて並んで歩いているようなものだが、ユーリがそちらにチラチラと視線をやってみても、シャルはいつもの何を考えているんだか不明な微笑を浮かべたまま真っ直ぐ前を向いている。

廊下を歩きつつ、ユーリはキョロキョロとあちこちを見回して観察してみた。普段、主人である伯爵家の方々やお客様が入り込む事の無い裏方に当たる場所であるせいか、この棟は飾り気も少なく非常に質素だが、隅々まで掃除が行き届いていてとても清潔な印象を受ける。庭が見える窓にはガラスが入っていて、非常に明るい。こちらの世界ではガラスは高級品らしいが、炎系魔術を扱う術者が比較的安価で販売しており、バーデュロイの王都では一般市民の家でも

窓にはガラスが入っているとか。しかし防犯上の観点からみると脆いせいか、窓ガラスはヨソの地域の民家では普及していない。グリューユの森の家に窓ガラスが入っていないのは、あの僻地に職人さんを呼ぶのが面倒だからしい。

正面の玄関ではなく、通用口に向かっているらしきカルロスの後をついて行きながら、あちらこちらに視線をやっていたユーリは、通り過ぎた廊下の向こうに見知った人物の姿を認めて、目が合ったのでぺこりと小さく会釈をした。苦々しい表情でこちらを睨むように眺めてきていたおじ様執事さんは、忙しいのかスッと身を翻して廊下の奥へと姿を消す。彼が向かった方向は、伯爵家一家が生活する本邸になる。

あの方、結局普段は何をなさっていらっしゃる方なのでしょうねえ……常にぐらぐら様のお側に付き従っていらっしゃるでもなし。主を頻繁に睨んでいらっしゃるようですし、やっぱり『エステファニアお嬢様に纏わりつく害虫がっ！』とか思っていらっしゃるんでしょうか。

「ほらほらユーリさん。そうやってぼーっとしているようなら、遠慮なく置いていきますよ。
本当にあなたは鈍臭いですねえ」

おじ様執事さんの背中を眺めてそんな疑問を抱きつつも、シャルからそんな嫌味を飛ばされて、ユーリはムッとそちらを睨み付けた。

「私が鈍臭いんじゃなくて、シャルさんがせかせかし過ぎなんです！。
もっと私の足の短さを考えてから発言して下さい」
「ああ、あなたは短足ですものね。これは失敬」

「え～え、私は短足ですよ？
シャルさんの本来のお姿のおみ足より、ほんの手の平半分長いぐらいしか無い短さですからね。おほほほほ」

レディ・フィデリアの笑い方を真似て、口元に手の甲を添えてお上品に笑い声を響かせてみたところ、同僚の顔に普段から張り付けられている微笑みの仮面に、ピシッとヒビが入ったような気がしないでもない。
嫌味に嫌味を返せるようにはなってきたようであるが、ユーリが目指すべき成長の方向性としては、何かが間違っているような。

「ぶぶっ」
「……マスター……」

そして、そんなチクチクとしたやり取りを交わすしもべを引き連れて街中に繰り出すべく通用口をくぐったカルロスは、シャルとユーリの会話に耐えきれなくなったのか、口元を押さえて吹き出した。
笑いの発作を懸命に堪えているせいか、その肩はプルプルと震えている。
そんな主人の楽しげなご様子に、シャルは恨めしそうに呻く。

「ま、まあ女って生き物に口ゲンカで勝つのは難しいもんだぞ、シャル？」

バシバシとシャルの背中を叩きながら、遠慮なく大笑いし始めたカルロスの態度から考えると、どうやらユーリの成長はご主人様的に喜ばしい類いの育ち方であるようだ。

2

閣下への、きちんとしたご挨拶はまた後日となる。お忙しい伯爵閣下であるが、カルロスとの面会は頻繁に行っているらしい。唐突に押し付けられたも同然のユーリを、とても可愛がって下さったレディ・フィデリアにも、改めてお礼を申し上げに行きたいとは思うのだが、向こうはこれから社交に忙殺される身だ。そうそう気軽に会えるとも思えない。

そんな事を考えつつユーリは、様々なお店が軒を連ねる繁華街を歩く主の後を懸命について行く。王都は祭りの期間でもなくとも、常に人でごった返しているが、ユーリは普段の速度よりも早足になりつつ、今日は以前垣間見た時よりも更に人が多いような気がして、首を傾げた。

歩き慣れない歩調に足がもつれ掛けたところを、繁華街の人込みに紛れ込んだせいですぐお隣を歩いていたシャルに、手を掴まれた。途端にドクンッと、彼女の胸が激しく高鳴る。

「あ……」

「まったく、何をしているんですか、ユーリさん。あなたはどこまでも世話の焼ける人ですねえ。ほら、マスターに置いていかれますよ」

同僚が素早く腰に腕を回して体勢を整えてくれたお陰で、ユーリは人込みの中で無様に転倒しての圧死は防がれた訳だが、腰に回された腕はすぐに外してくれたというのに、相変わらず彼女の右手はシャルに捕らわれたままだ。その手を軽く引かれて先へと促されるも

のの、一度飛び跳ねた心臓はそう簡単には落ち着かない。

「あ……りがとう、ございます……」

「いいえ、どういたしまして」

俯いたまま、気恥ずかしさから小さく小さく口の中でお礼を呟いたというのに、この喧騒の中でもシャルの耳はユーリの声を正確に拾い上げてしまえるらしい。羨ましい、羨まし過ぎる生態である。

……ねえ、シャルさん。

私達って今、ケンカ中じゃありませんでした？　それともシャルさんにとっては、あの程度の反抗や口答えなんて、気にもならない、取るに足らない態度なんですか？

私の機嫌が良かろうが悪かろうが、『そんなもの』はどうでも良いとしか、思っては下さらないのでしょうか？

シャルの体温が伝わってくる手に、ほんの少しだけ力を込めてみた。ユーリの歩調に合わせて、少しばかり速度を落としてくれた隣の同僚をチラチラと見上げてみるが、彼女の些細な行動に特に何かを感じ取った様子もなく、真っ直ぐに前を歩くカルロスの背中に視線を注いでいる。

ユーリは繋いだ手を少しばかり自分の方に引き寄せて、シャルの腕を見下ろした。

こーゆー事を、自然かつ簡単に出来ちゃうところに、シャルさんの女ったらしな遍歴が見え隠れする気がします。ですがどうせシャルさんにとって、私と手を繋ぐなんて行為には『迷子防止』とか、『歩くのが遅いどーぶつの手綱代わり』とか、そのくらいの意図しか無いんでしょうね……

されるがままに手を取られて歩いているのは、人込みの中でユーリがはぐれたりすれば、主人であるカルロスに余計な手間を掛けさせてしまうからだ。
決して、ケンカ中の同僚の譲歩っぽいサインだと浮かれている訳では無い。と、いくら自分に言い聞かせようとしても、正直な心臓はトクトクと跳ね上がる。

内心では唸り倒して、嬉し恥ずかしな状況にゴロゴロと転がり回っていたユーリだったが、カルロスが一軒のお店の前で足を止めたので、シャルの手を振り払って小走りで主人の傍らに駆け寄った。これで更に、同僚の顔色を観察してみる勇気は湧かないので、決して振り返らずに。

「主、こちらのお店に何か入り用な品がおありなのですか？」

王都の繁華街は、フィドルカの街の宝飾品などのお店が立ち並ぶ大通りと同じく、ガラス越しにディスプレイが展示されており、ユーリが覗き込んでみたところ、上品さを感じさせるお洋服や帽子などが飾られている。

「おう」
「お洋服屋さん、ですか？」
「んー、まあ既製服も置いてはあるが、むしろ仕立て屋だな。ほれ、この道沿いに歩いてくと連盟の塔があるだろ？　この近辺は連盟の連中が利用する店が多くてな。俺やシャルもこの店で服を仕立てて貰ったんだ」
「へ～」

主人が指差す方角には、真っ直ぐにそびえ立つ象牙の塔もとい、象牙色に塗られた連盟本部である長い塔が存在感を放っている。

ディスプレイの片隅には、確かに作りがしっかりとしていそうな、フード付きのマントも飾られている。ひっそりと、連盟所属の魔術師御用達らしい雰囲気を醸していた。

「つー訳で、今日はお前の服を作るからな」

カルロスはお店のドアを開いて、カランカランと軽やかなベルの音を響かせながらユーリを振り向き、そんな宣言と共に、さっさと店内へと歩いて行ってしまう。ユーリはカルロスから言われた言葉の意味を咄嗟に理解出来ず、まごついてしまったのだが、

「ほらユーリさん、あなたが出入り口を塞いでいては、通行の邪魔になります」

「うっ？　あっ、ちょっ」

基本的には主人に忠実であるらしき先輩が、彼女の背中をグイグイと押してきて、ユーリは強引に店内へと連れ込まれてしまった。きょろきょろと見回してみた店内には、仕立て屋さんという響きの通り、壁一面を占める棚に様々な色合い生地が並べられている。ハンガーラックに掛けられた既製服も何着か置いてあり、カラフルで視覚的な洪水に目がチカチカする。

「んまーっ、こっちの坊やが今日のお客様？　黒髪だなんて珍しいわぁ～」

唐突に甲高い声を浴びせられて、ユーリはギョッとしてそちらに視線を集中させた。カルロスと向き合っていた赤いドレスのご婦人が、足取りも軽やかにウキウキと満面の笑みを浮かべてユーリの側に近寄ってくる。頭の天辺から爪先までじっくりと眺められ、ユーリは無意識のうちに後退り、背後に立ったままのシャルの胸元に縋り付

いていた。

「もう、カルロス君ったら、アタシの服を大事にしてくれてるのは嬉しいけど、何も女の子に男の子の服を着せることないじゃないの」

「気色の悪い言い方すんな。単に、服仕立てるまで俺のお下がりを渡してただけだろうが」

わざとらしくクネクネしていた、多分５０代ほどの元気が良すぎる感のあるご婦人は、あははは！　と、豪快に大笑いしながらバシバシとカルロスの背中を叩く。可憐なるレディのお茶目スキンシップ程度で、ゲホッと咳き込むご主人様のお姿に、しもべとしては救出に向かうべきか悩むところである。

まったくもって、リアルモテ野郎に違いないと睨んでいた我が主の交流がある女性方は、とても個性的な方々ばかりなのですが、気のせいなのでしょうか？　こんなに個性的な女性ばかりを見慣れていたら、エストお嬢様のような清楚な少女に惹かれるのも分かるような気がします。

“……んな納得は要らねえぇぇっ！
つーかお前ら、いちゃついてねえでご主人様を助けろ！”

うむ、と頷いていたら、カルロスからそんなテレパシーが送られてきて、ユーリは意味が良く分からずキョトンと瞬きをし、自らの状態を改めて見直した。
彼女の手は両方ともシャルの胸元に添えられていて、上半身を捻りながらカルロスの方に向けて主人の様子を眺め。シャルの両腕はユーリの腰に回されて、顎が彼女の頭に軽く乗っかっている。

「んにゃ～～っ！？」

「急にどうしたんですか、ユーリさん？」

自らの状況を把握したユーリは、ネコ姿が長かった弊害か、おかしな悲鳴を上げながら無我夢中でシャルの腕を振り払い、大慌てでカルロスの背後へと身を隠した。

相変わらずのほほんとしているシャルは、同僚の愉快な奇行に不思議そうな表情を浮かべはしても、ユーリのように恥ずかしがる素振りもなく。

何てこと何てこと何てことーっ！

ユーリは自らの行動に頭を抱えてしまった。

ここ最近での子ネコ姿の際には、シャルの胸元に抱き上げられるなど、ごく当たり前程度の接触となりつつあったが……そんな行為に慣れすぎて、自分が今『人間である』という事を忘れてしまっていただなんて。このまま年頃の乙女として持っていて当然の、羞恥心や恥じらいが無くなり、見苦しい人間になってしまったらどうしよう。

やっている最中はまったくの無自覚無意識でも、こうして後から思い出してはのたうち回る羽目になるような接触など、ダメージが大きすぎる。

「あー、まあ、そういう事で、こいつを頼むわ。
既製服を買うか仕立てるかは、ユーリの自由にして良いからな。
ほれ、行くぞシャル」

顔を赤くしながらうーうー唸り、頬を押さえているユーリの頭を軽くわしゃわしゃと撫でたカルロスは、ご店主さんらしきご婦人の方に彼女を押しやり、首を傾げているシャルの首根っこを掴んでドアへと引きずってゆく。

「え、あ、主？」
「俺とシャルは本部で調べ物がある」
急に置いてゆかれるような口振りに、オロオロとカルロスとご婦人を交互に見やるユーリに、
“支払いは後で俺が出すから安心しろ。今日はまだやる事がある上に、長くなりそうなお前の買い物に付き合うのはごめんだ”
テレパシーですっぱりと断りを入れてきた。カルロスらしさに思わず納得してしまったユーリである。
“ああ、それから。
動きにくいかもしれんが、悪目立ちするから足を出すような服を仕立てるなよ？”
は～い。
カランカランと、再び軽やかなドアベルの音を響かせて、次の目的地へと向かう主人の背中に深々と一礼して見送ったユーリ。
「さあ、こっちで採寸しましょうね、ユーリちゃん！」
「は、はい……」
そして、どこぞのエルフさんを彷彿とさせるご婦人が、嬉々として呼び寄せたお針子さんと思わしき少女達の真っ直中、乙女の戦場へと引っ張り込まれてゆく……

長い、長い戦いであった。
ハイテンションなご婦人や、可愛らしいお針子さん方に囲まれて、頷き着せ替え人形状態になっていたユーリは、半裸からようやく一着のお洋服を身に着ける事を許された。

白い七分袖ブラウスに、レモンイエローを淡く薄めた色合いのロングスカートの組み合わせで、腰の辺りに胴全体を締め付けるのではなく、胸を強調するような形の前を紐で締めるコルセットを身に着けて、それを飾り結び用のリボンで飾り付けられた。ドレスの下に身に着ける物ではなく、服の上から身に着けるもので、太いベルトや着物の帯感覚に近い。靴も少年用の長いブーツから、少女達が履くローファーっぽい革靴が踝より上の丈である、フレアースカートの裾から覗いている。首や胸元を覗かせるのが昨今の流行らしいが、ユーリはブラウスの襟がきっちりと閉じれるタイプの服を選択し、ポーラー・タイを再び身に着けた。
仕立て屋のご婦人は、このポーラー・タイを興味深く観察していたが、そのうちファッションに取り入れられるとしたら、やはり少年服になるのではなかろうか。女性用は襟ぐりを開くのが主流のようであるし。

女性は表を歩く際、頭に何か被るのが当たり前という感覚があるらしいので、日除けも兼ねてスカートとお揃いの色合いの帽子を購入。
……代金を支払うのはユーリ本人ではなく、主人であるが。

鏡の前で、クルリと回転して確認してみる。髪に結ばれたままのピンク色のリボンとの色合いも、違和感は無い。
さほどおかしな印象は受けないし、なかなか可愛らしいのではないだろうか。

シャルさん、可愛いとか似合うとか、言ってくれるでしょうか……？

期待感から心臓が再び、ドキドキと早くなってしまう。ユーリを異性として意識する事など全く無いシャルであるが、自分とは違う生き物を、綺麗だとか可愛らしいと感じる感性は持っている……とは思うので、ユーリがめかしこめば何らかの反応は返ってくると思いたいところである。

カルロスからは、よほどこちらの認識と食い違う奇抜なファッションでない限り、ユーリの好きなように服を仕立てて良いとのお達しであったが、一から生地を選んで形を相談して……というやり取りを行うには、ご婦人やお針子さん達のような気力が足りなかったので、既製服を選ばせて頂く事に決めたのであった。

基本的に、マレンジスでは洋服というものは主人から下げ渡された古着を着用するか、身内からの古着か、生地を購入して自ら縫うのが庶民の常識であり、仕立て屋さんに服を作ってもらうのは富裕層ばかりである、らしい。自分で作れるのならば頑張ってみるのだが、悲しい事にこちらの世界にはミシンが存在しない。

冬になる前に毛糸を買って、編み物にでも挑戦してみたいものですねえ。

シャルに手編みのセーターを編んであげたら、もしかしたら彼は喜んでくれるだろうか。

視界の端に毛糸の塊が並べられているのを確認し、そんな事を考えながら着ていた少年服を畳んで袋に仕舞い、一番上に改めてぬいぐるみを仕舞い直す。

履いていたブーツが入る大きさの袋をオマケしてもらえたが、両手が結構な大荷物になってしまった。

お世話になった仕立て屋さんの皆さんにお礼を口にしてから店を後にし、ユーリは通りに突撃する前にん～っと伸びをした。

「えーと、連盟の塔は、っと……」

賑わう繁華街の通りの左右を確認して、象牙色の塔を認めたユーリは、一つ頷いてそちらの方に歩き出す。

新しいお洋服を早く見てもらいたいと、鼻歌混じりに人波に合わせて歩いていたユーリだったが、思いがけない出来事とは、気が付かないうちに忍び寄って来るもの。

前方から敢えて流れに逆らいつつ早歩きで直進してくる、フードを目深に被ったマント姿の人物を至近距離に至ってからようやく発見し、慌てて避けようとユーリは身を捻ったのだが、距離を取る前に向こうの方がどんどん近付いてきて、正面からぶつかってすっ転ぶ羽目になってしまった。これだから、人出が多い場所は苦手なのだ。

「あたたた……」

尻餅をついてしまったが、幸いにして建物の近く、人が歩かない通りの端に転げ出た為、落とした荷物もユーリ本人も、誰かに蹴り飛ばされる心配をしなくて済みそうだ。

腰を押さえて呻くユーリの前に、すっと手が差し伸べられた。

「すまない、こちらの不注意だった。怪我はないだろうか、お嬢さん？」

この辺りは、連盟の魔術師が頻繁に出歩いているらしいと聞いていたので、フードを目深に被ったマント姿の人物にも、さして警戒していなかったユーリであったのだが、この衝突者の声には非常に聞き覚えがあった。出来れば聞きたくなどない、その声。

ユーリが恐る恐る、ゆっくり顔を上げてみると……そこには予想通りのイヌ派ハーフエルフ、アルバレス侯爵家の公子様らしいアティリオが、腰を屈めてユーリに向かって手を差し出してきていた。バッチリと、彼と目と目が合うと、アティリオは何かに気が付いたように、目を見張る。

「君は……」

まずい。まずいまずいまずい！

ただ今ユーリは、カルロスやシャル、エストやベアトリスなど、結果的にアティリオへの牽制となり、ユーリの身を守ってくれるであろう人々の庇護下から外れた、単独行動中である。

今、アティリオに捕まえられたらユーリはどうなるのか？　考えるまでもない。……撲殺、だ。

命が懸かっているのだ。ぐずぐずと迷っているヒマは無い。即座にユーリは地面に落ちた荷物を全て拾い上げて素早く立ち上がると、アティリオからクルリと背中を向けて、裏路地へと身を踊らせ全速力で逃走を図った。

「なあっ！？　こら待て！」

背後からアティリオの怒声が響き、即座に追い掛けてきたらしき足音が聞こえてくる。

ひ～んっ！？

死に物狂いで走りながらも、ユーリはどうしてこんな目にーっ！？

と、嘆かずにはいられないのであった。

3

人気の無い路地裏に、全速力で走る2人分の足音が響く。ほんの少しばかり道を逸れれば、そちらは多くの人々で賑わう活気と喧騒に満ちた大通りである。だが、そこは静かな住宅街なのか網の目のように張り巡らされた狭い路地が伸びており、建物はどれも見上げるほどに高く、空が狭い。

ユーリは無心に足を動かして駆け、左に曲がった。

体が変化する、という事は、少なからず生活や行動に影響を及ぼすもの。

特にユーリの場合、急激な身長と体重の変動もある上、二足歩行と四足歩行という移動方法や体の動かし方の違いに慣れる必要も出てくる。シャルが夜間には必ず元の姿に戻るように、ユーリもまた主人の意に従い、人間とネコの姿をいったりきたりして、強制的に慣れさせられる毎日を過ごしている。

「はっ、はっ、はっ……」

そしてここ数日エストの下に預けられていたユーリは、その間ずっと人間の姿に戻ることなく、身軽な子ネコ姿でジャンプしたり抱っこされてばかりいた。

有り体に言えば、カルロスのネコ可愛がりタイム『ネコじゃらしでダッシュ&大ジャンプ！』もしくは『ネコ、トンネルに猛烈まっしぐら突撃！』を、ここしばらくサボっていたという事である。あれらは主が息抜きに楽しむ為であると同時に、ユーリがネコの体の動かし方を学ぶ為の時間でもあった。いわゆる、趣味と実益を兼ねて、というやつだ。

……ネコ可愛がりタイムのその意義を、カルロスから滔々と上記の説明を受けてごり押しされた経緯があるユーリは、主人の趣味が９９．９％を占めているに違いないと睨んではいるが。

「んんっ、はっ、はっ……」

ともあれつまりユーリは、ここ数日間ネコとしてゴロゴロしてばかりいたせいで、体力や筋力が落ちたようなのである。オマケにコルセットは苦しくて走りにくく、ただでさえ遅いユーリの走る速度は益々落ちる。更には土地勘も無い為、人があまり通らない入り組んだ路地裏を直感的にぐるぐると駆けたせいで、すっかり方角を見失ってしまった。

「このっ、待てと言っているだろうっ！」

だが、追っ手ことハーフエルフ魔術師のアティリオは、まだまだ体力がおありのようで、大声で怒鳴りつけてくる。流石は研究室に引き籠もってばかりいる事を許されぬ、ハードな外回り仕事が義務付けられた魔術師。

走る速さも向こうの方が明らかに早く、ユーリは縦横無尽に曲がり角でターンする事で、速度の優位性を削いでいた。直線の道を真っ直ぐに走っていたならば、とうの昔に彼に捕まっていただろう。

ああもうっ、アティリオさんしつっこい！

右に左に、明確な目的も無いまま追っ手をやり過ごせる場所を求めて走り回っていたユーリは、ただでさえ狭い路地がますます細くなっているような気がして、嫌な予感を覚えながら再び角を曲がり…

…慌てて方向転換をしようと急ブレーキを掛け、つんのめって壁に肩をぶつける羽目になった。ユーリが無作為に走り回った結果、つ

いに行き止まりに突き当たってしまったのだ。

ダンッ！　と、彼女の背後から勢い良く伸ばされた腕が、ユーリを閉じ込めるように彼女の顔の左右で壁を突く。両腕で抱えた荷物を盾にするようにしっかと胸元で抱えつつ、ユーリが恐る恐る体の向きを変えて背後に向き直ると……いつも目深に被っているフードが零れ落ち、さらけ出されたアティリオの顔が、眼前で彼女を見据えていた。

「……捕まえた」

お互いに呼吸は酷く乱れていたが、いち早く息を整えたアティリオは、そう低く囁くような声を発してふっと笑みを浮かべる。

激しい動悸とまだ整わない吐息のまま、ユーリは思わず背後の壁にべったりと背中を張り付けてしまうが、彼女は壁すり抜けなどという便利な特技などは持ち合わせておらず、逃れる筈もない。それどころか、より背後へと距離を取ったせいか、アティリオの顔がますます近寄ってくる。彼の水色の瞳には彼女の姿がくっきりと映っていて……ユーリは恐怖から息を飲んだ。

「さあ」

ほんのすぐそば、目に映るものはアティリオの姿だけ、手を軽く持ち上げれば簡単に触れられる距離にいる彼は、うっすらと笑みを象った唇を開き、低く潜められた言葉を囁いてくる。

殺される！　背筋を走り抜けるゾクリとした感覚に、身を震わせながらユーリはギュッと瞼を閉じ……

「さあ、小さな盗っ人さん、観念して僕の荷物を返して貰おうか」

「……へ？」

アティリオから言い放たれた思いがけない台詞に、ユーリは固く閉じていた両目を開きつつ、間抜けな掠れた吐息を漏らしていた。口は声を発した微妙な状態のまま、半開きになって硬直してしまう。眇められたアティリオの眼差しには、殺気立っているというよりもむしろこう、幾分呆れた色が混じっているような……

「誰に頼まれたのか、出来心なのかは知らないが、明らかに術者と分かる者の荷を奪おうとするのなら、連盟に所属する全てのメンバーを敵に回す覚悟をする事だ」

君にそんなご大層な意志があるようには見えないが……などと、アティリオは溜め息混じりに呟く。

ユーリは未だ震えが治まらない全身を叱咤しながら、もつれる舌を動かして声を絞り出す。この状況は、ユーリが想定していたものとは、些かズレがあるようだ。事態の正確な把握と確認をして、保身に努めねば。

「……に、荷ってなんの事、ですか？」

「今、君が、しっっっかりと、その腕に抱きかかえている袋の一つだ。もう諦めて返しなさい」

幼い子供に言い聞かせるような、そんな疲れを滲ませたアティリオの声音に、ユーリは視線を手にした荷物に落とす。ブーツが入っている麻の袋に、主人であるカルロスからのお下がりの少年用の衣服一式と、ぬいぐるみが入った麻袋と……一際手触りの良い、リネンのような滑らかな生地で作られた袋が、何故か彼女の腕の中で存在を主張していた。

……えーっと……

ユーリは自らの行動を、脳内で高速逆再生してみた。
荷物をしっかり抱えながらアティリオに向き直る、アティリオの腕が檻のように伸ばされて逃走を封じられる、行き止まりに突き当たる、当て所なく逃げ惑う、荷物を拾い上げて猛ダッシュ、衝突者がアティリオだと気が付く、ぶつかった衝撃で尻餅をついて荷物を落っことす、ご機嫌でお店を出て道端で人とぶつかる……
荷物を拾い上げてから今まで、コレを離したり他の袋を持った覚えなど全く無い。つまり、衝突の衝撃で落とした荷物を慌てふためきながら拾った時に、アティリオが取り落とした袋も纏めて掴んだ、という事に……

「こ、コレ、あなたのですか？」
「そうだ。まったく……」

恐る恐るその袋を差し出すと、アティリオはユーリが壁とオトモダチ状態を余儀無くされていたその手を壁から離し、袋を受け取った。
彼が袋の中身を確認している間に、コソコソとその場を離れようとしたユーリは、「待て」と呼び止められた。

「あの、まだ何か……？」
アティリオは、ユーリの同僚であるシャルが天狼と人間の二つの姿を持つ事を知っており、また彼女の黒髪はバーデュロイでは珍しい色合いであるらしい。故に『黒髪の女の子＝カルロスの使い魔黒ネコのユーリ』という図式を見出したとばかり、ユーリは考えていたのだが、どうやら敵はそう断定して追い掛けてきた訳ではなさそうだ。

下手に口を開いてボロを出しては適わないと、アティリオの前から姿を消そうと目論んだのだが……そう簡単に逃がしてはもらえない

らしい。
細い路地に仁王立ちして道を塞いでいるハーフエルフは、汗ばんだ前髪を鬱陶しげにかき上げ、ユーリを見据えてくる。

「荷物を返したなら、それで簡単に許されて解放されると思っているのか？　いいか、人から物を盗むという事は自分の尊厳を汚す行為であると同時に、君自身の身を危険に曝す事にもなるんだ。お金が必要ならば真っ当に働きなさい。誰かに脅迫されて渋々僕の荷物を狙ったのなら、正直にそう言いなさい」

ええええ～、スリ？　置き引き？　当たり屋？　アティリオさんの中でどれに該当しているのかは分かりませんが、私、すっかり盗みを行った扱いで、再犯を防ぐ為に説教されてるー！？

「あのう……私、あなたの荷物を盗むつもりは全くなかったのですが……」
「現行犯が何を言う」

犯罪に手を染めた事が無い、平凡な一般市民になんたる濡れ衣であろうか。ユーリの命を狙って追い回してきた輩から説教を受ける謂われなど無いと、むしろそちらの方が殺人未遂の犯罪者じゃないかと言いたい。

「私は、身の危険を感じて逃げ出しただけです！　勝手に人を盗賊に仕立て上げないで下さい！」
「……君は何を言っているんだ？」
「追い掛け回す前に、荷物返せぐらい、言って下さいよぅ……本気でまた襲われると……」

ずりずりと、壁に背を預けたままユーリは崩れ落ちた。

慌てて勘違いして、早合点して勝手に怯えて。アティリオを一方的に責めるのはユーリの身勝手だと分かっていても、涙がぼろぼろと零れる。命を狙われるだとか、怯えて警戒心を常に抱くべき相手をいなすだとか、こちらの世界は複雑だ。

「……どうもよく分からないが、僕の荷物を盗んだのは故意ではないと？」

地面にへたり込んだまま無言でこくこくと頷くユーリに、頭上から深々と溜め息が降ってきた。

うっかり泣き出してしまったせいか、綺麗に畳まれた清潔感と高級感溢れるハンカチが差し出されてきたが、ユーリは首を左右に振って固辞する。そんな物をひけらかしてくるなど、貧乏人にたいする無意識の嫌味なのか、公子サマ。

「苦し紛れの言い逃れではなく、本気で早合点だと主張するのなら、君は途方もなくそそっかしい人間だと自分で認めている事になるが？」

「鈍臭くてバカで危なっかしいと、同僚からよく言われます……」

もう、出来れば放っておいて欲しい。せっかくのおニューの服は汗を吸い込んで、あちこち泥や砂埃を被ってしまって悲しくなってくる。怖いものに遭遇すれば、浮き足立って即座に逃走の二文字で頭の中がいっぱいになってしまうという悪癖は、どうすれば矯正出来るのだろう。

俯いたままのユーリの頭に、ポンと何かが乗せられた。何だろうと手を伸ばして摘まんでみると、仕立て屋さんでスカートとお揃いで購入した帽子だった。衝突した時か全力疾走をしていた時にでも、いつの間にか落ちたのだろうか……

「これは君のだろう？」
「はい」
「お転婆も大概にして、早く家に帰りなさい。危険人物に似ていたのかどうかは知らないが、子供を襲うような奴だと勘違いされたなんて……そんなに僕の人相は悪いのか？」

さっきまで手ぶらだったと思ったが、アティリオはいったいどこにこの帽子を抱えてたのかなあ、などという疑問が湧きあがりつつも、泥も砂も被っておらず、綺麗なままの帽子を再び頭に乗せる。
そんなユーリはさておき、アティリオは何やら、一目見て不振人物の汚名を被せられた事に、多少ショックを受けているようである。

似た雰囲気や顔立ち以前に、そもそもユーリを付け狙ってきた本人なのだが、イヌ派なアティリオにとってはカルロスのクォンである黒ネコを追い掛け回したつい先日の出来事は、犯罪に当たらないのだろう。今目の前にいる人間のユーリと、黒ネコのユーリが繋がらないのならば、尚更だ。

「……どうも昔から遠巻きにされがちだしな……この耳のせいだけじゃなくて、気が付かない間に不快感を持たせるような表情でもしてるのか？」

アティリオは壁に手と額を突き、聞いていて何かこちらが反応に困るような独り言をブツブツと呟きつつ、ズーンと落ち込んでいるようだ。彼が常にフードを目深に被っているのは、自分の顔やハーフエルフ特有の中途半端な長さの耳にコンプレックスを抱いている為らしい。
2人揃って自身の至らなさに、精神的ダメージを被り落ち込む路地裏の行き止まりにて、微妙な空気が流れる。

と、アティリオがふと壁から顔を上げて、未だ地面に座り込んだままのユーリに手を差し出してきた。もう立ち直ったのだろうか。

「なんにせよ、この時期に女の子がこんな人気の無い場所を1人でブラついているのは危ない。家まで送って行こう」

むしろあなたが一緒に居る方が危険なんですが、とか、あなたが追い掛け回してきたからこんな場所に辿り着いたんだ、などなど、言いたい事はあれども正直にポンポンと口に出すのは、自分の首を締める事になりそうだ。

アティリオの手は取らずに立ち上がったユーリは、そういえば、と、改めて周囲を観察してみる。ここは王都のどこらへんなのだろう。薄汚れた古い壁、人の気配も無く、人が1人やっと通れるような狭い路地、何階にも高く建てられているせいで、日照の悪そうなカビ臭い建物……窓らしき四角く壁をくり抜かれた場所には、王都だというのにガラスすら入っていない。

光あるところには影もある。富める民があれば、貧しい民も……

「……ここは、君のようなお嬢さんが気軽に出歩ける場所じゃない。早く離れよう」

スッと肩を軽く押されて促され、ユーリはギュッと抱えた袋を抱き締めた。

王都はそう、華やかなだけじゃない。

「もうすぐシーズンだから、ただでさえ人が増える。こういうところに踏み込むのは止めた方が良い」

どんなに見回しても、目印になる白亜の王城も、連盟の塔も見えな

い。そう、ここは……

「あっ」
「うん？」

アティリオと共に歩くなど、出来たら遠慮したいところだが、自分の早とちりによるミスのせいだと自らに言い聞かせ、大人しくハーフエルフに連れられて大通りを目指して歩き出したユーリの目に、ガラスが入っていない窓の向こうで動く人影が見え……あっという間に薄暗い路地裏たる地上、アティリオの背後へと降り立ち、彼が振り向く前にその首筋に手刀を叩き込んだ。小さな呻き声を漏らし、アティリオは成す術もなく崩れ落ちる。

「な、ななな……」

目の前の黒ずくめの顔を隠した人物は何者か、何故突然アティリオを不意打ちしたのか、ユーリが驚愕していられたのは、ほんの束の間の事だった。タッと、彼女の背後に誰かが降り立った音がして……ハッと振り返る前に、後頭部に激しい衝撃と激痛が走り……ユーリの視界は暗転した。

4　※暴力表現有り

バイト先にて、倉庫で黙々と賞味期限チェックを行っている最中に、気配も無く背後に立った何者かから急に肩を叩かれた悠里は、ビクッと小さく身を飛び跳ねさせながら、大急ぎで後ろへと向き直った。無意識のうちに、数歩分の距離も取る。

「やあ、森崎さん」

「……ここは、関係者以外立ち入り禁止ですよ」

無表情のまま片手を軽く上げ、場違いなほど飄々とした挨拶を寄越してくる野々村に向かって、悠里は低く忠告した。野々村から距離を取るべく更に数歩後退り、お菓子が入っているオリコンに足が当たってバランスを崩しかけ、眉を顰めながら軌道修正する。

この倉庫に入る為には倉庫の商品搬入口、もしくは店内の『スタッフオンリー』の注意書きが貼られたドアから侵入してくるかの二通りになる。だが、今日の商品入荷はとうに終了している為、搬入口には鍵が掛けられセキュリティーが作動している筈だ。店内から入るにしても、倉庫の出入り口は常時従業員が詰めているレジから丸見えで、不審者が入ろうとしていれば止めに入ると思われる。

「やだなー、森崎さん。オレ、立派に関係者だよ？　なんたって君に用があって、わざわざこんなトコにまで足運ばされたんだし？」

「意味が分かりませんし、私はあなたに用はありません。さっさと出て行って下さい」

キッ！　と睨み据える悠里だったが、迫力など全く感じられないとばかりに野々村は「あはは」と、薄っぺらい笑みを浮かべる。

どこから侵入してきたのか、何のつもりかは知らないが、出入り口には防犯カメラが設置されていて、しっかりと記録が残っている。

『森崎さんの気のせい』『被害妄想激し過ぎ』などといった言い逃れなど出来ない状況であるというのに、野々村はヘラヘラと笑いながら手を伸ばしてくる。

「近寄らないで！　店長！　店長っ！　不法侵入者です危険人物です！　警察呼ん……っ！」

野々村から逃れるべく後退り、彼を怯ませるべく事務所に居る筈の店長に向かって大声を張り上げた悠里は、クルリと向きを変えて事務所に飛び込む前に野々村によって肩を押され、背後にあったラックに後頭部を強打してしまった。打ち付けた部分から頭部全体へ激痛が走り、視界には火花が散ったように感じながら、うつ伏せに倒れ込んだ。

野々村はさして力を込めたようには見えなかったというのに、悠里の体は勢い良く吹き飛ばされたかのようにラックへと叩き付けられたのだ。その衝撃で積み重ねられていた商品や段ボール箱、オリコンがドサドサと悠里の上に雪崩のように滑り落ちてくる。足は完全に重たい何かに挟まってしまったようで、動かす事が出来ない。後頭部を打ち付けた痛みも激しく、震える手で頭に触れてみると、ぬるりとした感触が伝わってきて……

「ちょっと森崎さん？　相変わらず勝手だね、君。オレの話、ちゃんと最後まで聞いてくんないと困るんだけどー？」

悠里の傍らにしゃがみ込んだ野々村は、彼女の顎を軽く持ち上げて顔を覗き込んでくる。彼女は怪我をして痛みに呻いているというのに、何故加害者である彼は平然としているのか。

何かがおかしい。この男はずっとおかしいと思っていたが、本格的におかしい……！

「さ……わる、な……」

「ワァオ、まだ駄々こねちゃうの？　君ホント、役に立たない上にめんどくさっ。

あのね、オレ辛抱ばっか強いられてきたから、これ以上はあんま待たせないで欲しいんだよね。ほら、オレってＭい人じゃないからさぁ。まーだ出し惜しみする気？」

ガンガンと痛む頭と、ぼやけてゆく視界が次第に狭まってゆく。だんだん聞き取りにくくなってゆく野々村の戯言も、いったい奴が何を言いたいのか、悠里にはさっぱり分からない。

「だからオレ考えたんだよね。

大人しく兆候を待たなくても、こっちから強引にアクション起こせば流石に動くんじゃないかなー？　ってさ」

ぼんやり遠ざかってゆく意識の中で聞いた、野々村の「だからせいぜい、大きな悲鳴ヨロシク」というサディスティックな要求を最後に、悠里の意識は黒く塗り潰された。

何かの物音が聞こえる。

絶対に、あの忌々しい変態の望み通りに悲鳴など上げてやるものか、と、半分覚醒しきっていない意識の中でも強く決意をした悠里は、あの男を牢に送り込んでやるという誓いを胸に、目が開かないまま耳を澄ませた。

「……ねえ、アティ兄さん。やっぱりアティ兄さんってアホでしょ

う」
「……うるさい」
「いや、ボクは何度だって言うね。
や〜いや〜い、アティ兄さん伝令係のクセに捕まってやんの〜。計画がむちゃくちゃだねっ」
「仕方がないだろうっ！　不測の事態だったんだ！
だいたい、先に捕まっていた上に今の恥曝しな姿をしたお前にだけは、絶対に言われたくないぞブラウっ」
「兄さん声大きい。シィーだよ、シィー」
「くっ、ぐぐぐ……！」

……しばらく大人しく耳を澄ませてみたところ、彼女のすぐ傍らにて、非常に幼稚なケンカを繰り広げていらっしゃる、彼女も面識がある公子様方がいらっしゃるようであった。
悠里は……いや、ユーリはどうやら板張りの床に寝かせられた状態で、両足首と両手首を太いロープ状のものでギッチリと縛られて、拘束されているらしい。背中側に回されている手首をグイグイと引っ張ってみるが、びくともしない。

私……また昔の夢を見てたんですね。こんな縛られたりしてるから、あんな悪夢を……ううう。
それにしても、この声はアティリオさんとブラウのあんちゃんのようですが、何かブラウにーちゃんエストお嬢様の前とは性格違いませんか？

「あ、お姫様が目を覚ましたようだよ兄さん」

目蓋をゆるゆると持ち上げ、ぼんやりとした輪郭しか映し出さない視界を安定させるべく、瞬きを繰り返すユーリの顔を覗き込んでくる……

「ぶはぁっ！？」
「うん、元気はあるようだね。良かった良かった」
「……お前、明らかに引かれてるぞブラウ」

アティリオもまた、ユーリと同じように両手両足を縛られているらしく、芋虫的な状態でしか移動出来ないようだが、この際それはどうでも良い。そんな事よりも問題は、同じように拘束されている…何故か似合わない女装をしているブラウである。
頭に被った金髪縦ロールの鬘がズレており、片方の目にモノクルを付けた顔全体を、白粉か何かで真っ白くしてほっぺたを真っ赤に塗りたくり、唇に毒々しさを思わせる紫の口紅を厚塗りし、どぎつくも赤いドレスはパニエか何かでスカート部分が膨らんでいる。胸元の膨らみは……何を詰めているのだろう。

実は本当に、性別・女性だったりするとか？　今の奇抜なお化粧の下の素顔を見た事があるユーリとしては、実はブラウは女性です、と言われても「そうなのか」と、すんなり納得がいく麗しさを持ちあわせてはいた。今のこの奇抜なファッションを全て取っ払えば、という注釈が頑として付くが。
一目見たその日から、その姿から決して目が離せず吸い寄せられる……という現象が、怖いモノ見たさでも発揮されるのだという事を、ユーリは生まれて初めて知ったのである。日本語にて『ひかれる』という同じ音を使いながらも、『引かれる』『惹かれる』という、二通りの真逆の意味を表す言葉のマジック、その真髄を見た。

「あの……お、おおお女の方、ですか？」

まずはここら辺をしっかりと明確にしておかねばと、ユーリはもぞもぞともがいて上半身を起こして向き直り、勇気を出してブラウ…

…と呼ばれてはいたゴテゴテした人に尋ねてみた。第一印象と第二印象がここまで激しく異なる人物というのも珍しい。いっそ、別人であれば良いのだが……声に、嫌というほど聞き覚えがある。

「ほらご覧なさい、しっかり耳の穴かっぽじって聞きましたか、アティ兄さん？　ボクのこの格好で、見事に女性を装えているよ」

「……違うブラウ、それは明らかに違う……」

ユーリの質問を受けて、ブラウは彼女の疑問に答える前に、嬉々としてアティリオに自慢げにふんぞり返り、アティリオは力無く首を左右に振って弱々しく否定する。疲労感が滲み出ているが、弟がこんな扮装をしていて喜ぶ兄は確かにそうそういないだろう。

ブラウがアティリオを兄さんと連呼している事から察するに、彼らは兄弟なのだろうか。

それにしては、ブラウの耳はごく一般的な人間の形なのだが……

インパクトの強い目覚めだったせいで確認するのが遅れたが、ユーリはじっくりと周囲を観察して、自分が現在置かれた状況の把握に努めた。

屋外ではなく、どこかの建物の中のようだ。

床はいかにも年季が入っていそうなささくれ立った板張り、部屋の広さはユーリが端から端まで大股で歩いてだいたい5歩ほどで、高さを確認しようと上を向いてみたら、首が吊りそうなほどの角度になって、ようやく天井が見えた。嫌になるほど高い場所に、薄暗い室内で唯一の光源らしき天窓が見え、差し込んでくる光はまだまだ明るい。あの路地裏で何者かの手によって気を失ってから、さほど時間は経っていないようだ。

殴られたらしき後頭部がまだ痛むし、体を動かしたら吐き気がしてきた。

顎を引いて、天井付近から再び周囲を見回してみる。
石造りの壁に、出入り口は金属製らしきドア。
室内に荷物や家具などは一切置かれておらず、部屋の中に居るのはユーリ、アティリオ、ブラウ（仮装中）のみ。３人は全く同じように手首足首を固く拘束されていて、手荷物などはどこにも見当たらない。

「わ、私の荷物ーっ!?」

その事に思い至るなり、ユーリは思わず叫んでいた。あの中には、大事な大事なぬいぐるみが入っているというのに、気絶させられて目を覚ましたら荷物が行方不明。大問題だ。

「真っ先に心配するのが、身の安全でも貞操でもなく、荷物……？」
「アティ兄さんのお姫様は、どうやらかなりお幸せな生活を送ってきたお嬢様みたいだね」
「だから僕の姫などではないと……」
「だって、名前知らないんだからしょうがないじゃない」

ブラウとアティリオに縋るような眼差しを向け、「私の荷物、どこ行ったか知りません？」と尋ねるユーリにたいして、両者の反応はこれだった。ユーリ本人にとっては、それほど重要度の高い物だとは思わないのだろうか。いや、命も貞操も大事だが。

「さて、お嬢ちゃん。そろそろ話してもらえるかな？
君が何者で、どうしてボクらを攫ったのか」
「……はあ？」

例の、緊迫感が皆無になる見事なゴテゴテ扮装の公子様らしいブラ

ウに、恐らくは真顔で詰問されていると思うのだが……やはりどうも、そのメイクを近付けられても吹き出しそうにしかならない。

「さっきも言っただろう、ブラウ。彼女は単に偶然居合わせたせいで、一緒に攫われてきてしまっただけだと」

「アティ兄さんのそういう、女の子はいたいけで悪性なんて欠片も無いって、簡単に信じ込んで擁護する一面は嫌いじゃないけどね。状況証拠からみて、この子が限りなく黒に近いグレーである点を、見逃す気にはなれないなあ」

「……私、疑われてるんですか、ブラウさん」

状況証拠とは何だ？　と、虚を突かれたユーリは、痛む頭を壁に押し当てて考え込んだ。……痛くて考えが上手く纏まらない。

「アティ兄さんとわざとぶつかって荷物を奪い、人気の無い路地裏に誘い出し、仲間が誘拐してここに放り込んだ、ほらカンペキ」

「どこが？」

「それだと、私まで一緒くたに捕まっている意味が分からないんですが……」

どこか投げやりなアティリオの突っ込みに被せて、ユーリが溜め息混じりに反論すると、ブラウはしばしジロジロと彼女を観察し、

「そりゃ使い捨てだからじゃない？　まあ、なんでも疑ってかかるのがボクの仕事だからね。

で、いい加減に名前ぐらい名乗ってくれない、お姫様？」

モノクル越しに、パチンとウィンクを寄越してくる。エストの前での『対ご令嬢モード』とは対照的な、ワザとおちゃらけているのか地なのか不明な、掴みどころの無いあんちゃんっぷり。いったいな

んなのだろうか、この胸にモヤモヤとくる残念感。
どうやらブラウの中ではユーリは『誘拐犯の一味疑惑』が残ったままのようだが、尻尾を出すまでは泳がせておく事にしたらしい。しかしユーリは潔白であるのだからして、そんな疑惑を強引に押し付けてこないようならば、無視しておけば良い。

それはさておき、名前を問われるというのは大いに困った。
ユーリの本名はマレンジスでは奇異に聞こえるだろうし、『カルロスの第二の使い魔の名はユーリ』という事は、アティリオが既に知っている事実だ。ここでユーリと名乗っては、後々アティリオに勘付かれてしまう可能性も出てくる。

偽名？　偽名を名乗るしかないの？
でも、なんて名乗れば……

――お母さんと悠里の名前はね、お揃いなのよ？
――全然違う？　嘘じゃないわよ。だってね、悠里の『悠』っていう漢字は、名前として付けるのなら『ちか』とも読めるんだから。
――ね？　お母さんの名前、『千佳』とお揃い。

「私は……チカ、といいます」

ここで咄嗟に出てくるのが母親の名前な辺り、自分のマザコンっぷりになんだかなあ、だが、自分を呼んでいるのだと即座に反応出来そうな偽名が、すぐに浮かばなかったのだから仕方がない。

「ティカ？　ふうん……もう知ってるだろうけど、ボクはブラウでそっちの彼はアティね」
「……アティだ。改めてよろしく、ティカ」
「いえあの、『ティカ』ではなくて『チカ』です」

流石に不振人物にたいして、本名を名乗ったりはしないらしい。
どうやらユーリの発音では上手に聞き取れないらしく、何度言い直してもどうしても『チカ』が『ティカ』に聞こえてしまうようだ。
ますます本名から遠ざかってゆく。

「アティ兄さんとティカちゃん、名前まで似てるねぇ」

……『まで』って、他にも似ている部分があるのでしょうか？　この人と一緒にされたくないんですけど……

「私、何がどうなってるのか、全然見当も付かないんですが、これはいったい何事なのでしょう？」

荒縄に縛られている足を見やり、ユーリは疲労感を滲ませながら尋ねた。そこは擦り切れて赤くなり、先ほどからじくじくとした痛みを訴えてくる。背中側に回されているせいで見えない手首も、同じように赤くなっているのだろう、とても痛い。というか最早全身が痛くて、手を挟まないよう気を遣いつつ、ぐったりと壁に体重を預けた。

「ようやく聞いてきた。呑気だねえ、ティカちゃんは」
「あなた様のその扮装に驚いて、意識がそちらに持っていかれたもので」
「つまり、君の目を釘付けにしてしまったボクのこの美貌が、全ての元凶だと！　ああなんて罪深いボク……！」
「……今この時ほど、こいつが縛られていて良かったと思った日は無いな。お前のその陶酔台詞とオーバーリアクションには、大切な何かが擦り切れていく気がする」

アティリオさん、多分それは堪忍袋の緒だと思います。

「ああっ」などと呻いたブラウは、身をくねらせてそのままバランスを崩して床にもんどり打って倒れ、そんな彼の背中を縛られたままの両足でチョイチョイと蹴りつけるアティリオ。

変な人だ……エストお嬢様を狙う男とかって警戒するよりも先に、ブラウのにーちゃん本人がもう既に紛れもない変人だ！
いや、この惜しげもなく恥曝し的な扮装を目撃した段階で、すぐに看破すべき事実でしたが！

ユーリは転がったブラウから視線を外してアティリオの方に焦点を当て、

「すみません、私、早く帰りたいんですけど……なんとかなりませんか、魔法使いさん」
「攫われたにしてはやけに肝が据わっていると思えば、僕を当てにしていたのか君は？
残念だが、何とかできるのなら、とっくに脱出している」

頼りたくはないが、手っ取り早い手段はアティリオの大脱走に引っ付いていく事だろうと踏んだのだが、着ていたマントは誘拐犯に奪われたらしきローブ姿の魔術師は、憂鬱そうに溜め息を吐いた。
もぞもぞともがいて方向転換し、こちらの方に顔を向けてきたブラウが口を開く。どうでも良いが、暴れまわったせいかメイクが多少崩れて、ますます不気味になっている。

「この部屋全体に、魔術遮断結界が張られてるんだよ。知ってる？
魔術遮断結界」
「……え！？」

ブラウの軽い調子で口にされた事実に、ユーリはギョッとして主人とコンタクトを取ろうと、心の中で強く念じてみた。

主！　主！　聞こえますか、主！？

だが、どれほど強く念じようともカルロスからの応えが全く無い。先ほどのアティリオとの逃走劇を演じていた最中でも、あれほど必死に逃げ回っていれば、無意識のうちに救援信号は送っていたと思うのだが……ユーリの意識が途中で途絶え、目が覚めた場所は魔術遮断結界の中となれば。

ここがどこか、王都のどこかか郊外なのかすら分かりませんが……場所が分からなくては、主からの救いの手は絶望的ですか？

ユーリにとって、絶対的な主人であるカルロスとの精神的な繋がりは、強い安心感をもたらす支えだ。最後の最後まで諦めなければ、主人が助けてくれるという信頼感は、どんな状況に陥ったとしても大丈夫だと思える。

けれど、ひとたびカルロスとの繋がりが断たれてしまえば、ユーリはこのマレンジスでは、単なる無知で無力な小娘でしかないのだ……

5　※暴力・残酷描写有り

ただ今、どことも知れぬ狭くて埃っぽい、薄暗い小部屋からこんにちは、なユーリです。
相変わらず誘拐犯らしき人物はちらりとも姿を見せず、室内に居るのは手首足首を拘束された私とアティリオさん、ブラウのあんちゃんです。

「じゃあ、現状を整理しようか」

相変わらず珍妙な扮装を纏ったままのブラウが、しごく真面目に場を仕切っている。床に転がったままなのは起き上がるのがちょっと大変だからだろうし、メイク落としだってここには無い。だからそう、彼は決してふざけている訳ではないのだろう、とは思えるのだが……いかんせん、直視しがたい姿だ。ユーリは慎ましく、ブラウから僅かに視線を逸らした。

「その前に、お前のその珍妙な姿をまず何とかしろ。そろそろ見るに耐えなくなってきたぞ、僕は」

だが、みの虫か芋虫を連想させるそのうにょんうにょんと身をくねらせるブラウの姿に、アティリオの方は気持ち悪いとばかりに蹴りつけようとにじり寄り……バランスを崩して彼の隣に倒れ込んだ。
いったい彼らはこの非常時に、何をしているのだろう。

「ハッハッハ、アティ兄さんったら、この僕の美貌が眩しすぎると恥入る必要なんてないとも！
兄さんはこの美しいボクの従兄弟なんだから、十二分に鑑賞に耐え

得る顔さ。自信を持って下さいね！」

アティリオがブラウのようなナルシズム的自信の塊の性格になっても、それはそれで世界が息苦しくなるような気がするユーリである。
無言のまま、寝返りを打つようにしてブラウから背を向けたアティリオは、彼の戯言を黙殺した。
『兄さん』なんて呼んでいるから彼らは兄弟なのかと思っていたのだが、正確には従兄弟同士らしい。

「ボクとアティ兄さんは、それぞれ別れてとあるお仕事中でした。だけど不意を打たれて、気が付けば見事にここでこうして捕らわれの身。
この部屋で目を覚まして以来、外部からの何らかのアクションは全く無し、静かなものだね。
連絡や脱出を試みようにも、少なくともこの部屋全体に魔術遮断結界が張られていて、縛られてて動けませーん」

無言を貫いているアティリオをヨソに、ブラウが今の状況を纏めてみたところで何か進展がある訳でもなく、ユーリの脳裏には疑問ばかりが湧き上がる。

彼らが取り掛かっていた仕事とは何なのか？
何故こうして誘拐されたのか？　誘拐犯の目的は？　組織的な犯行？
こうして拘束している理由と、生かして一纏めに部屋に転がしているのは何故？
それに……

「あのう、アティ……さん」

うっかり『アティリオさん』と呼び掛けそうになったユーリは、ど

もりつつもユーリのすぐ目の前で転がっているハーフエルフ魔術師へと声を掛けた。ユーリは……いや、チカ……ティカと呼ばれる女の子は、アティリオとは今日が初対面であって、彼は『アティ』としか名乗っていないのだから、『アティリオ』だなんて決して口にしてはいけない。

呼び名なんて些細な事からもボロを出さないよう、しっかり気を付けて行動しなくては、余計な勘ぐりをされて、益々ややこしい疑いを持たれてしまう。

万一に備えて、少女・ティカのプロフィールを捏造しておかねば、言動に一貫性が見えず怪しまれてしまう可能性も出てくる。

えー、ティカはごく普通の人間の女の子。つい最近気が付いたらバーデュロイ国に居て、故郷の事も過去の事も何も覚えていないが、どうも無くした記憶では誰かに襲われたのか、乱暴されるかもという脅迫観念に駆られて、見知らぬ人には怯えてしまう。記憶喪失だから、世間知らずで常識も知らない。故郷の手掛かりを求めて王都にやって来たばかり。

この国のエルフやハーフエルフといえば、すべからく魔術師連盟の魔法使いさんだと認識していて、定期的に村を訪れては困り事の相談に乗ってくれてる凄い人達で、他国では偏見の目で見られてて大変らしい。

魔法が使われているところを見た事は有るけれど、それは村の結界修復の光ぐらいで全然詳しくない。

嘘をつく際の心得曰わく。虚構に現実味を持たせるのならば、真実を巧みに織り交ぜるべし。

よし、もしも私の事を何か尋ねられたら、この設定を渋りながら小出しにして押し通そう。話さなくても、常にこの設定を念頭に置いて振る舞わないと……もうこの人物背景が既に十分怪しい人間ですが！　だけど、私にはバーデュロイの国籍も無いし、王都事情にも

明るくないから流れ者を装うしか無いじゃないですか！

「何だ？」

何か名案でも浮かんだのか？　と言いたげな期待を滲ませた表情に、ユーリはびくびくと震えながら疑問を口にした。

「魔法使いさんって、縛られてても魔法使えるんですか？　私には、結界の有無なんて全然分かんないんですけど……」

「喋る事が出来て、術に集中出来るなら問題は無いよ。魔術遮断結界は……この部屋のは、探知遮断が付与されてるから、初めは分からなかった」

つまり、アティリオは実際に何らかの魔術を使用しようとして、効果がかき消される事を確認した、という事か。

――連盟の連中に、俺の住まいを知られたくねえからな。けど、見る奴が見れば遠距離からでもそこに結界があって、誰が張ったのかはだいたい分かる。けどそれじゃあ意味がねえだろ？　お前流に言うと、『ステルス』を付加してる。

結界の効果について、主人であるカルロスが軽く説明してくれた内容を必死で思い返しつつ、ユーリはぐるぐると思考を回転させた。結界がそこにある、という事も、誰が張った物なのかも、知ろうと思えば出来る事。逆に言えば、知られたくは無い、気付かれたくないから探知遮断を付与した。

探知遮断無しで結界を張って手掛かりを残しておけば、簡単に自分のところに辿り着かれると、犯人は分かっているから……？

「……魔法について詳しい人間なら、魔法使いを拘束しておくのなら猿ぐつわをしておけば良い、って分かってる。でも、私みたいに全然分からない素人なら、縛られてても魔法が使えるなんて分かんない……なら、どうやって魔術遮断結界なんて構築したの？」

「良いところに目を付けたねえ、ティカちゃん。

そ、術者を無力化する魔術遮断結界なんて、ド素人が用意するのはまず無理だ」

相変わらず、芋虫のようにむにょんむにょんと謎の動きを繰り広げているブラウが、楽しげに口を挟んだ。

「ティカちゃんが術者……魔法使いを怖い人だと思っていたとして、気絶してる魔法使いを魔法が使えないように確実に無力化しようとしたら、どうやる？」

ブラウの問い掛けに、ユーリは首を傾げた。うっかり脳裏に、『ひと思いに殺ってしまえば良いんですよ』などと、笑顔で言い出すとっても闘争派な先輩様の声が過ぎったが、んな恐ろしい意見は言えない。

「えーと、まず両手足縛って猿ぐつわを噛ませて目隠しをして、身長よりも高い位置に逆さ吊りにして……」

「待て、もう良い」

「ティカちゃんってば、過激～。何そのスマートな拷問ルート」

……何かマズかったのだろうか。

ユーリとしては、術者が短時間で高い殺傷能力を発揮すると知っていたからこそ、無力化するならば徹底的にと考えただけだったのだが。

アティリオは眉をしかめてユーリの顔を見上げてくる。

「ティカ、君は魔術師に何か恨みでもあるのか？　そこまで念を入れるなんて……」

あなた様は怖いです。基本、魔術師様方は怖いです。

だって私、クォンですから。言えませんけど。

「ま、素人さんが魔法使いを警戒すると、それぐらいの対応をするって事だね、兄さん。

この中途半端な監禁状態はおかしい。非っ常ーにおかしい」

「ああ。誘拐してきた者をわざわざこうして同じ場所に集めたり、そのくせ魔術遮断結界が張ってあったり……」

不可解な状況に叩き込んでおきながら、その場には他にも誰かが居る……監禁場所を複数用意出来なかったのか、ユーリはそこまで考えて、ハッと顔を上げた。

「口が自由で、同じ場所に人が居れば、必然的に中に居る人同士は話し合う……」

「うん、つまりそれは、ボクらの会話や様子をどこかから監視されてるって事になるね」

「べ、ベラベラ喋り倒しちゃいました、どうしましょう！」

誘拐犯はわざわざ魔術遮断結界を張るという手間を掛けてまで、アティリオやブラウから聞き出したい情報があるのか？

しかし、そうだとするとこんな悠長な事などせずに、目的の情報を吐かせるべくそれこそ拷問にでもかけそうなものだが……

「さて、そう考えると……下手に喋るのも躊躇われるな」

そうアティリオが低く呟いて、おもむろに立ち上がり、ユーリは驚いて「え、縄は!?」と、叫びそうになった。唇から漏れかけた声を噛み殺す。

すぐさまユーリの傍らにしゃがみ込んだアティリオは、固まっているユーリの手足を固く縛っている荒縄を、手早くぷつりと切った。いったいどこから取り出したのか、アティリオの手には薄いナイフが握られていて、彼は無言のまま自分の唇に人差し指を軽くあてがって、静かにするようにというジェスチャーを寄越してくる。

コクコクと頷いて了解の意志を伝え、ユーリは痺れが残る手首をさすった。

無様に床に転がって、みの虫のようにぐにゅ〜とした動きをしていた筈のブラウもまた、無言のまま立ち上がり、慎重にドアの様子を調べている。

ブラウはスッと片手を持ち上げて、こちらには背を向けたまま何本か指を立てたり握って動かしたりといった仕草を示す。その動きに合わせてゆらゆらと揺らめくドレスの袖は、レースが過剰なまでにたっぷり縫い付けられていて……

そうか。ブラウさんが床に転がったりぐにゃぐにゃしてたのは、彼があの服のどこかに今アティリオさんが持ってるナイフを仕込んでて、縄切ってたんだ!

そう考えると、続いてアティリオがブラウの隣に倒れ込んで彼に背を向けたのも、自分の縄を切らせる為なのだと分かる。つまり、ユーリに「状況を整理しようか」などと話し掛けてきたのも、全ては監視しているであろう誘拐犯を油断させる、縄を切っているなんていう状態を悟らせない為の、時間稼ぎだった訳だ。

などと考えているユーリの目の前で、ブラウのドレスの袖口からにゅっと数枚剃刀が出てきて、彼はそれを指先に挟む。

……そ、その奇天烈な扮装の中に、どんだけ刃物隠し持ってるんですか？　公子サマ。

「ティカは僕らの後をついて来て。離れないようにね」

ブラウから手信号で何かを伝えられたらしきアティリオは、ユーリの耳元に唇を近付けてそう早口で囁くと、無言のままブラウと頷きあい……

「さあ……」

アティリオがドアの前に佇み、ドア目掛けて全力で体当たりを仕掛けた。

バンッ！　と、派手な物音を立ててドアがぶち開けられ、その向こう側に立ち竦んでいる、恐らくは聞き耳を立てていたと思しき黒ずくめの覆面さんに向かって、

「狩りを始めようか！」

嬉々としたブラウの叫びと共に、彼が投擲した剃刀はアティリオの頭上を掠めて標的へと殺到する。

「ぐわぁっ！」

「兄さん、１人逃がした！」

「ちっ。思ったより結界の範囲が広いな！」

怖っ。ブラウさん今、迷わず目を狙って剃刀投げましたよ。

聞き耳を立てる為には、薄くドアを開けておかねば会話は聞き取れ

なかったのか？　鍵が掛かっていないドアの前に居た謎の誘拐犯達は、アティリオとブラウの奇襲に不意を打たれて目を押さえて悲鳴を上げているが、1人即座に反応して身を躱した黒ずくめは、迷う事なく戦略的撤退を選択して廊下の角に消え、その向こう側から黒いモノを撒き散らしてくる。
それと同時に、ピーッと鳴り響く甲高い笛のような音。

アティリオとブラウが素早く避けた黒いモノは、廊下に着弾するなりシュウシュウと嫌な音を立てながら床を溶かし、ごく小さくだが、穴を開けている。……あんな物が直撃していれば、ただでは済むまい。怪我をした仲間が倒れているというのに、そんな乱戦の最中に撒き散らす道具ではない。実際、ブラウの剃刀によって怪我を負ってうずくまり、避け損なった黒ずくめの2人は苦痛の呻き声を上げてそれ以上動かなくなってしまった。

どうやらアティリオは、ブラウの剃刀投擲から逃れた黒ずくめに向かって魔術を使おうとしたようだったが、廊下も遮断結界内であるらしい。咄嗟に魔術に集中しようとした隙に距離を広げられ、忌々しげに舌打ち一つ。

更にブラウがドレスの胸元に手を突っ込み、中から詰め物らしきパッドを一つ引っ張り出し……パッドを引き剥がして曲がり角の奥に向かって投げつけると、突如として弾け飛ぶ閃光。ユーリはまだ閉じ込められていた部屋の中で、口をポカーンと開けた状態で唐突に始まった戦闘を眺めていたのだが、その光を間近で直視した訳でもないのに目がチカチカする。

「手応えが無いな。逃げたか」
「ティカ、狙い撃ちにされたくなかったら戦場では立ち止まらない！」

「ええっ！？」

痛みに瞼を閉じて目元を押さえているユーリに向かって、アティリオからそんな叱責が飛んできた。どうやら知らないうちに、彼女は戦場に足を踏み入れていたらしい。

大慌てで痛む目を開けて周囲の様子を窺うと、石造りの廊下を突き進むアティリオとブラウの姿。置いていかれてはたまらないと、派手に暴れ始めた彼らの後を反射的に追い掛け……ふと、この２人について行く方が危ないんじゃ？　という一抹の不安が過ぎる。

どういう原理なのかは不明だが、閃光弾のような物を放って曲がり角を曲がった直後の不意打ちを受ける可能性を阻止したらしきブラウは、ドレスの胸元を盛り上げる片側がぺったんこ状態でアンバランスなお姿のまま、両方の手首を軽く捻り再びその指先に薄い刀を数枚挟む。

もしかしなくても、その残ったもう一つのニセ乳も閃光弾だったりするのですか、ブラウ様。

公子サマの珍妙過ぎる扮装は、全部丸っと引き剥がしておかねばヤバい。非常に危険だ。その下にどんな武装を隠し持っているのか、分かったものではない。

誘拐犯が何を考えてユーリ達３人を攫ってきたのかは不明だが、縛って転がしておいただけで、ブラウとユーリが身に着けていた物は何も取り上げられていない辺り、最も警戒されていたのは魔術師であるアティリオで、素人っぽいユーリやブラウは侮れていた可能性が非常に高い。確かにユーリは戦闘訓練など積んでいない１００％一般人だが、ブラウは明らかにゲリラ戦に慣れている。服に仕込んだ暗器の中から、瞬時に最善の判断を下して武器を選択し、人を傷付ける事にたいする躊躇いも全く見当たらない。

いくらなんでも、ブラウの武装を確認しておかないなど、油断し過ぎとしか言いようが無いが……もしや、女装のせいで本当に女だと思われて服には手を着けなかったのか？

ひ～ん。シャルさん、主ーっ！　怖いよ～っ！　たーすーけーてーっ！

届かないと分かっていても、心の中で悲鳴を上げ続けるユーリであった。

「兄さん右！」

廊下を先行するアティリオとブラウは足音を消す事もせず、速やかに駆け抜け……従兄弟の警告に即座に反応したアティリオは、右側に身を捻って薄暗い廊下の影から奇襲を仕掛けてきた黒ずくめの投げナイフを避けた。一瞬前までアティリオが立っていた方の壁にナイフは突き刺さって、その衝撃を物語るようにビーンと小さく揺れる。それと殆ど同時に、ブラウが低い体勢から剃刀を投擲して、影の向こう側から上がる悲鳴。

や、やっぱり付いて来るんじゃなかった雰囲気が、ひしひししていませんか今っ！？

人の気配だとか、殺気を察知など全く出来ないユーリは恐れ慄きながら、爆走中の従兄弟コンビの後を追い掛けるのであった。狙われたら間違いなく死ぬ。挟み撃ちなんてされたら、乱戦に突入などされれば、それは即ちユーリの死亡フラグだ。

シャルさん、主ーっ！　ここ怖いーっ！

6　※暴力・残酷描写有り

実に賑やかかつ派手に暴れだしている従兄弟コンビであるが、ユーリはそんな彼らの背後をなるべくコッソリと、足音を潜めながら付いて行っていた。

進めど進めど窓のような物もなく、廊下にはほぼ等間隔に松明が取り付けられていて、あちこちに暗い影を生み出していた。監禁されていた部屋の天窓が非常に高いところにあった事や、どことなく湿気っている澱んだ空気、どれほど進もうとも明かり取りの窓が見当たらないところから推察するに、この廊下は地下にあるものと考えられる。松明が揺れるのは空気が対流しているという事と、十分な酸素があるという事。どうやってここは換気されているのだろう。

先行する2人から離れすぎて、分断されたりしてはユーリは間違いなく対抗出来ない。死角になる暗がりから何が出てくるかも分からないし、アティリオとブラウの姿を見失ってはぐれれば、ユーリはこの薄暗い地下で方向を見失って、簡単に迷子になってしまう。

かといって不用意に近寄り過ぎて乱戦エリアに入り、敵の攻撃可能距離に重なってはいけない。弱い者から潰すのは兵法の定石であり、ユーリは紛れもなく弱者であるが、アティリオやブラウがその気になれば使い捨ての盾代わりにされたり、逆に敵の方が彼女を人質に利用しようとする可能性もある。素人がのこのこと戦地に紛れ込んでも足を引っ張るのがせいぜいで、最悪同士討ちや流れ矢……

「さあっ。このボクの美しさの前に平れ伏すがいいっ！」

もとい、ブラウが高笑いを上げながら豪快に振る舞っている剃刀や小型の刃物……ダガー、だろうか。それがグッサリ刺さるのが関の山だ。

「今のお前の美貌に関しては、誰も追随を許さないんじゃないかっ！？」

アティリオさん、それはプラス面での美しさではなくて、マイナス方向って理解で良いんでしょうか。

「ついにボクの唯一無二たる美しさに気がついたんだね、アティ兄さん！」

多分、今現在のあなた様の美貌に感心するようになっては、人として何かが終わる気がいたします。

廊下の暗がりから、天井から、黒ずくめが彼らの行く手を阻まんと幾度も音もなく現れ、謎の黒いモノを撒き散らしてゆくが、あれの正体はなんなのだろうか。石造りの床をシュウシュウ溶かして、ところどころ穴ぼこだらけにしていく。硫酸の類いか何かだろうか……？　ユーリにはさっぱり見当もつかない。

戦闘中は標的にならないよう、出来るだけ大人しく暗がりで息を潜める。移動中は不意打ちされないよう、常にアティリオとブラウがカバー出来る範囲で一緒に走って、彼らが応戦するまで立ち止まらない。

はっきり言って、つい先ほどまで路地裏でも全力疾走させられていたユーリの体力は、もはや限界に近い。

「戦力の逐次投入は下策だと思わない？　アティ兄さん」

「臨機応変のつもりなんじゃないか？　少なくとも彼らは、真正面からぶつかり合って戦うような訓練を積んだ連中じゃない」

どうやらわざと大きな物音を立てながら戦う事で、ユーリへ注意が向かないようにしてくれているらしい2人は、倒れ伏した黒ずくめへとチラリと視線をやって眉を潜めた。誘拐実行犯達は、アティリオやブラウと真っ向から格闘戦を仕掛けるには、力量不足であると見ているらしい。

アティリオ・ブラウの従兄弟コンビは破竹の快進撃を……有り体に言えば連戦を余儀無くされているのだが、襲ってくる黒ずくめ達を難なく下している。

油断無く辺りを警戒しているブラウの傍らのアティリオから手招きされ、ユーリは嫌々ながら側に寄った。彼女の息がかなり上がっているせいか、ブラウが安全を確認しながら廊下を進むのだが、どうも速度が多少落ちている。アティリオの傍らで早足で歩きながら、ユーリは少しでも呼吸を整えようと苦心する。

今のところは彼らを頼るしか出来ないが、アティリオは出来たら関わり合いになりたくない人筆頭だ。

正体がバレたら、このままどことも知れぬ地下で命を刈り取られ……

「怖いのなら無理に見なくて良い。大丈夫だよ、ティカ。僕らが君を、絶対に無事に家まで送って行ってあげるから」

恐ろしい予測にブルリと震えるユーリを、度重なる戦闘や無念のまま床に横たわる黒ずくめ達の姿に怯えていると思ったのか、アティリオはわざわざ身を屈めて彼女の顔を覗き込み、励ますように自信あり気な笑みを浮かべてみせる。

……ブラウのあんちゃんの別人っぷりにも驚きましたが、アティリ

オさんの女子供にたいする、一貫して柔らかい態度にもびっくりです。この人が女性には全般的に紳士だと知らなかったら、私に気があるのかも？　などと勘違いしまう人もいそうですねえ。あ、もしや連盟の後輩の女の子達もその口なので？

ユーリは首を振って横道に逸れた思考を戻し、多少は整ってきた息を吐いて唇を湿らせ、疑問に思っていた点を口にする。

「怖いのもありますが、不思議なんです。狭い廊下だから纏めてかかってくる事は出来ないのでしょうが、どうして彼らは怪我を負った仲間を庇うのでもなく、味方を巻き添えにするような武器を使い、敗北を悟れば自ら命を絶つのでしょう」

声が震えていた。命の危険を感じる非常事態に遭遇すると、脳が危険から身を守ろうと混乱して滅茶苦茶に働くせいで時間の流れがゆっくりに見え、色彩もおかしく見えるというが、まさか実体験を味わう事になろうとは。

懸命に物陰に隠れて悲鳴を上げないように口を押さえて震えていた戦闘の最中、今まで襲ってきた黒ずくめは全部で１０人にも満たない人数であったが、ほぼ全員があの謎の黒いモノを所持していて、ぶちまけてきたり自分で頭から被ったりして、息を引き取ってしまうのだ。お陰で情報収集をしようにも、話も出来ない。

正直に言ってしまえばこんなところは早く出たいし、黒ずくめ達が自らあの黒いモノを被って自決する姿は怖くて怖くて仕方がない。だが、ユーリがこの薄暗い地下通路で起きている出来事で、震えて腰を抜かしてその場から動けなくなったり、恐怖のあまり気を失ったりせずに自分の足で立って小走りになっているのは、皮肉にも同行者達を心の底からは信用していないからに他ならない。

アティリオは、こんな事に巻き込まれた不遇の少女であるユーリ…『ティカ』を、粗雑に扱うつもりもなさそうだし、不憫だと同情的ですらある。

だが、彼は『カルロスのクォン』の命は主人へと捧げられて当然の存在だと考えている魔術師。そしてブラウは、エストや祖父であるアルバレス侯爵への態度と、現在の奇抜な扮装のまま暗器を自在に操るその殺伐さと、人を小馬鹿にしたような言動……薄ら寒い何かを感じる。心底殺しが楽しくて仕方がない、なんていう危険な類いの人種であれば、アティリオはブラウと軽口を叩き合う事などせず、嫌悪感も露わにしていそうなものだが……

「まったくだね、ティカちゃん。いくらこのボクの強さと、芸術を超越した美しさに胸を撃ち抜かれたからといっても、何も世を儚む事などあるまいに……ああっ、敵の心さえ惑わしてしまうなんて、ボクはどこまで罪深いのだろう！」

ブラウの別世界へのトリップぶりに、アティリオは薄暗い廊下でもはっきりと分かるほど、嫌そうに顔をしかめた。

暗い石造りの廊下は壁と天井へ音を反響させ、暗い通路の向こうへとブラウの陶酔台詞はエコーを伴って溶けていく。

……この言動は、ふざけているのか本人本気なのか、いったいどちらなのでしょう。ブラウリオ公子、侮りがたし……！　要警戒です。要注意人物です。発見の後、即時離脱をお勧めしたい人ですね！

「真面目な話、ここまでの状況からして……恐らくは今回の誘拐は、急な計画変更による場当たり的な物だったんだと思う」

アティリオはブラウの自己を称える賛美歌をすっぱりと丸無視して、

ごく普通の表情で語り出す。聞いてないフリか。流石は従兄弟、『対ブラウ・スル～スキル』の高さが半端無い。

「拉致してからの放置、無駄な空白、練度の低い戦力の分散配置……ま、見限られたと焦って、強行手段に出たんだろうねえ」

そしてそんな、流されて知らないフリをされた方のブラウもまた、恨みがましい素振りをみせるでもなく、平然と口を挟んできた。

「見限られた……って、誰が、誰にです？」

見てはいけない、見てはいけない。足早に通り過ぎる足元で、揺らめく松明の光に照らされず、闇にひっそりと沈む彼らを、私は見てはいけない……

直視したら、折れてしまうから。

布地に染み込ませた獣脂が燃える松明の臭いと、カビ臭さが入り混じったこの臭いを、私は記憶しては……

泣き叫んで、立ち止まって、我を忘れてしまったら、私はこの薄暗い地の下でうずくまって、地上に出られない……！

「ザナダシア、だろうねぇ。弱っちくて信じらんないけど、彼らはザナダシアの細作だ……正確にはもどき、かな」

ブラウがサラリと口にする情報に、ユーリはザナダシアって誰だっけ？　などと、必死に記憶を浚う。つい最近耳にしたばかりの単語の筈だ。

ふと、ペースを緩めてユーリの顔を覗き込んできたブラウは、「ふうん……」と、鼻を鳴らした。

「な、なんですか？」

「いや？　君って本当にそのスジの人じゃなかったんだ、って思って」
「そのスジってどこのスジだ」

呆れたように呟いて、サクサクと前に出るアティリオに先行を譲ったブラウは、ユーリに向かって「はい、どーぞ」と、背中を向けてきた。立ち止まってしまったが、良いのだろうか。

「どうぞとは？」
「ん～と、おんぶ？　ティカちゃん、さっきから息が切れてるじゃない。子供はね、怖い時は素直に大人に頼って良いんだよお嬢ちゃん」
「でも、そのう……」

今までの薄暗い廊下での立ち回りは全て、この珍妙な扮装の公子様の多彩な暗器と戦闘能力で圧倒していた、と言っても過言ではない。ユーリは完全なるお荷物で、魔術が封じられたアティリオは辛うじて邪魔にならない程度、要するに頭数だ。

「ああもう、面倒臭いなあ」

そう言い放ったブラウは、ユーリの腕を背負い投げでもするように強引に奪って前に回させると、「よっ」などという掛け声と共に、ユーリの両足の膝の裏を持ち上げて軽々と背負ってしまった。

「……何をしてるんだ、ブラウ」
「だから、おんぶ？　子供が疲れてる時はこれでしょう」
「男の子ならともかく、赤の他人の女の子相手には失礼だろう、お前」

足が遅いユーリをブラウが強制的に背負ったお陰で、廊下をひた走る速度が上がったアティリオとブラウ。
淑女にたいする対応ではないと従兄弟を諫めはするが、『とんでもない！』とばかりに顔を真っ赤にして怒りだす様子は無い。

「落っことされたくなかったら、しっかり捕まっててね～」

などとサラリと口にするので、何か納得がいかないながらも、ユーリは仕方がなく彼の肩を掴む。

……思えば、こちらの世界で人と接する際は、ほぼ常に子ネコ姿でした。写本作業で本部の一室に引き籠もっていた時も、別段誰かに紹介されたでも無く。元の姿でバーデュロイの人々と接したり挨拶したりするのは、今日が初めてといっても差し支えありません。
……薄々、そうじゃないかとは思っていたんですがねえ。仕立て屋のご店主さんの態度といい、アティリオさんの言い分といい、ブラウさんははっきり断言するし……もしかして私、未成年者にみられています？
こちらの世界の成人は１６才だそうですが、間違いなくもっと下……それこそ、１０才ぐらいへの態度ですか？

ほとんど分岐が無いうねる通路を駆け抜け、突き当たりには上へと向かう階段が暗くぽっかりと開いていた。足元を慎重に確かめつつ、螺旋状になっている階段を一段一段しっかりと踏みしめて、登ってゆくアティリオと、未だユーリをおんぶしたまま彼の後を追うブラウ。

「ブラウさん」

ＲＰＧなら、この階段にトラップとか仕掛けてそうだなあ……油は

基本ですね！　などと、故郷でのゲームでの苦い失敗を不意に思い返しつつ、ユーリはすぐ間近にあるブラウの耳元で名前を呟いた。白粉だろうか。この人からは、レディ・フィデリアに抱き上げられた時と同じ匂いが鼻を掠める。

「ブラウさんは、私の事、疑ってるんじゃなかったんですか？」

それなのに、簡単に背中を向けたり、おんぶしたりなんかして。

「君こそ、ボクが服のあちこちに刃物仕込んでるの知ってるのに、背負われたらそのまま袖口から伸びた毒針が足にグッサリ！　とは思わない？」

ブラウの面白がるような台詞にギクリと身を震わせてしまったが、

「そんな面倒な真似なんてしなくても、ブラウさんがその気になれば私の命なんて簡単に奪えるじゃないですか」

「ティカちゃんのそういう強がりなとこ、面白くて良いなあ」

人を背負って階段を登っているというのに、まったく辛そうな素振りもみせずに軽快に螺旋階段を進んでゆくブラウ。前を行くアティリオは、そんな彼らの会話が聞こえているのかいないのか、ペースを崩す事すらない。

「筋肉の付き方、足捌き、重心移動方法、眼球の動き、唇の乾き、呼吸、声の抑揚、発汗。どれだけ観察してもねえ、信じがたいけど、ティカちゃんってば本気で怯えてる子供なんだよねえ……」

「……はい？」

「凄いよ、君。どんな生活送ってきてどんな身分の子なのか、全然分かんない。大陸共通語は術者並みにネイティブで上品、文句の付

けようもない完璧淑女なクセに、バーデュロイの国語は男口調でたまにスラング混じりだし。
仮にこのボクが見破れないほど凄腕の工作員なら、もう敬意を表するしかないじゃない。誇ると良いよ」
「……私、別に工作員とかじゃありませんから。
私、知らないうちに卑語とか喋ってたんですか？」
「アティ兄さんの反応がとっても楽しいから問題ナシ！」
「いや、アリだと……」

どんな人生を送ってきたのか、今一つ見切れないと言い切られたのは、ユーリは異世界からの来訪者なのだからしてさもありなん、だ。
マレンジスに知らん顔して溶け込むには、まだまだ努力が必要なようだ。

こちらの世界の言葉は、主人であるカルロスの言語知識を刷り込まれているのだからして、簡単にするすると出てくる言葉遣いこそ男口調であり、それを喋っていた、という可能性を考慮しておくべきであった。
主人との会話は基本的に敬語……大陸共通語でのやり取りに日本語混じりが主だったが、喋りやすい口調にしようと思うと、どうやらバーデュロイの国語で男口調が脳内から翻訳されて口から出ていたようだ。今後は気を付けなくては。

「あの、さっきの、ザナダシアがどうのって言うのは？」
「ザナダシアは、バーデュロイの隣国にあたる」

ユーリの疑問に、アティリオがおもむろに口を挟んできた。

「かの国は……一言で言えば、森林や水源が少なく茫洋な砂漠が広がる土地だ。バーデュロイの水と緑を欲して、過去にも様々な策を

講じてきた」

「あの国は魔物の出没数も多いね。そして、そんなザナダシア国の中で最も勢力を誇っている一派が、このマレンジスから魔物を駆逐し、住み良い清らかな世界を取り戻す事を掲げる『世界浄化派』」

ブラウの吐き捨てた一言に、ユーリは訳が分からず首を傾げた。魔術師連盟に所属する術者達の主な奉仕内容が魔物退治であるように、このマレンジスの人間達にとって、魔物とは対立する天敵に定められている。

「掲げられた理想を聞く限りでは、恐ろしい集団ではなさそうです、けど……？」

「魔物は怖いものねえ。けど、あの黒ずくめ達の親玉が、十中八九世界浄化派なんだなこれが」

「んん？　それじゃあ言ってる事とやってる事が、全然違うんですね」

ユーリが知る限りにおいて、あの『世界浄化派』とかいう集団の実行部隊にあたる？　黒ずくめ達は、バーデュロイの王都で人を拉致って放置したり、まばらに襲いかかっては返り討ちに遭い、自決したり、乱戦で同士討ち状態になったりだ。魔物退治なんて、全然やっていないではないか。

「彼らの掲げる理想を実現する方法は一つ。『エルフ族の血を引く者がマレンジスから姿を消せば、魔物もまた浄化されるであろう』」

「……は？」

淡々と述べられたアティリオの言葉に、ユーリは間抜けな声を上げた。

「ティカちゃんって、もしかして知らない？
一昔前……だいたい百年ぐらい前に、エルフ族のデュアレックス王国が滅びて、それと時を同じくして大陸各地に魔物が出現するようになったって」

ブラウとアティリオの話を纏めると、だいたいこんなところだ。
元々周辺諸国を属国扱いで、当時圧政を敷いていたデュアレックス王国の政府。当然人間達はエルフ族への反感も相当で、そんな最中に突然、レデュハベス山脈から瘴気と一緒に魔物がぼわぼわ出てくるわで、レデュハベス頂上にある王宮、王族であるハイエルフ達を始め、そこに集っていたデュアレックス王国の頭脳とも言うべき人々は軒並み行方不明。王国は統制とれずに崩壊、哀れ避難民となったエルフ達は人間達から疎まれ。その上『世界浄化派』なんて連中が現れ、魔物が溢れたのはエルフ達が悪いのだと、難癖をもっともらしく吹聴して回り……
涙無しには語れない歴史だ、エルフ族。

いったいこの螺旋階段は、どこまで登るのだろう。体感としては、いい加減地上に出てもおかしくはないというのに、階段はどこまでも上へと続いている。
エルフ族の苦難の歴史に思いを馳せ、それは主人であるカルロスがザナダシアを嫌っていて当然だろうなあ……などと溜め息を吐いたユーリの脳裏に突如、

“ユーリ！　聞こえるか、ユーリ！？”

カルロスの焦った大音声が響き渡った。
地上へ向けて螺旋階段を登っている間に、いつの間にか魔術遮断結界を抜けていたのだろう。

主……！　良かった！

ユーリは無意識のうちにブラウのドレスの肩の部分を強く握り締め、安堵の吐息を漏らす。

“いったい何があった!?”

はい、それが……

「ティカちゃん、どうかした?」

テレパシーに集中するユーリの様子を訝しく思ったのか、ブラウがふっと彼女の方へと顔を向けてくる。

“どわッ!?　なんだそのバケモンはッ!?”

その、奇抜過ぎる化粧に彩られたかんばせを間近で見たユーリの心臓も飛び跳ねたが、少しでも情報を得ようと彼女の視界や聴覚にも同調してきたらしきご主人様へは、かなり強烈なダメージを与えたようである。

7

カルロスと思念によるテレパシー回線が繋がった。もうそれだけで、ユーリの胸にはこの上ない安心感が満ちてゆく。
もう大丈夫だ。後はこのまま頑張って、主人の下へと逃亡を図れば良いだけ。ユーリが上手くやれずとも、カルロスならば絶対に迎えにきてくれるのだから。

“ん……だいたいの状況は把握した。取り敢えず、そいつら2人は逆さ吊りだ”

……だ、大丈夫……なんですよね？　何故に顛末を理解するなり、主の第一声が『アティリオ・ブラウを逆さ吊りに処す』なのでしょう。
『自由を奪う』というと私の中で真っ先に浮かぶイメージが逆さ吊りなのは、確実に主の影響ですねこれは。
それで主、シャルさんはその、私が行方不明になって心配していたりは、その……

何故だろう。同僚の現在の様子を尋ねているだけであるというのに、やけに後ろめたいような感覚がする。
そんなユーリの内心など全てお見通しなご主人様は、

“ああ、シャルな……あのアホイヌ、俺がユーリとの思念が突然繋がらなくなった、つったら、王都のど真ん中でイヌバージョンに変わろうとしやがるから、眠らせといた”

ええと……

“街の外か、連盟本部の中ならともかく……王都の中で一般人が、イヌバージョンのシャルが空飛んでるのを目撃したら、魔物が侵入したと大騒ぎになるからな”

な、何か面倒ばかりお掛けして申し訳ありません……

忙しい最中にどいつもこいつも手間が掛かる、と言わんばかりのカルロスからのお言葉に、ユーリは居心地悪く謝罪の念を送った。しもべの方が主人に世話を焼かれていては、立つ瀬がない。

ユーリが主人との絆を確かめ合っている傍ら、狭い螺旋階段を先行して登っていたアティリオは、ふと立ち止まって自らの手に視線を落とし、握ったり開いたりしだした。

「どうかしたの、アティ兄さん？」

体力切れで文字通りお荷物となったユーリを軽々と背負ったままのブラウが、背中の彼女から従兄弟へとその顔を向き直して訝しんで問い掛けると、アティリオは何かに納得したように一つ頷く。

「どうやら遮断結界の効果範囲は、主に地下に限定されていたようだ。少し待っててくれ」

「了解」

そんな短いやり取りの後に、アティリオはぶつぶつと口の中で何事かを囁き始めた。

カルロスとの情報交換に集中しようにも、どうやら主人の方も慌ただしく動いているようで、テレパシーは断続的だ。ユーリはアティリオの声に耳を澄ませてみる。

「界に満ちる無限の源、妙なるものよ。
我が意志を映し出す水鏡となれ」

パチンと小さく何かが弾けるような音がして、アティリオの指先に、白く光る蛍光ペンを使って一筆書きで描かれた矢印のような物が現れる。
彼の指先に浮かぶそれを思わず凝視し、何故に矢印？　と、ユーリの頭には疑問符が浮かぶが、こちらの世界に矢印記号が存在するのかどうかも分からない。アティリオのイメージとしては弓矢なのだろうか。

「何、その形？　何かアティ兄さんらしからぬ素っ気なさじゃない？　もっとこう、夢と冒険心を出そうよ」

作り出した術者本人でも、受け取る側でもないブラウがムチャな注文を付ける。個人的にはユーリも、今回の一筆書き矢印より、前回見た一筆書き蝶の方が幻想的でセンスに満ち溢れていたと思う。そう、あの光る蝶はなかなか綺麗だったから、出来ればアクセサリー代わりに一つ欲しい、などと思っていたのだ。

「連絡用の書簡に冒険心なんて不要だろう。そもそも、この形状が一番スピードが出るんだ」
「へー、どれぐら……」

アティリオは従兄弟の相槌を待たず、矢印を浮かべさせた指先を軽く曲げた。と同時に、弾丸のごとく凄まじい勢いで飛び出していった光る矢印書簡は、ブラウの耳元を掠めるようにして方向転換し、そのまま螺旋階段の壁にぶち当たるも、まるでそこに遮る物など何も無いとばかりに、速度を落とす事なくそのまま突き抜けてどこぞ

へと飛んで行った。矢印が通った後の壁をジーッと観察してみるが、抉れた後すら見当たらない。

「目ではなかなか追いきれない速度だな。知っているだろう、ブラウ？　情報伝達系統は僕の得意分野だ」

「……兄さん、今、ワザとボクを狙わなかった？」

「なんの事だ？　第一、あの書簡は万が一ぶつかったとしても無害な事は、お前もちゃんと知っているだろう」

「当たったところで痛くないって知ってても、すんごい速度で目を狙って矢が飛んできたら驚くからね？」

「そうか。お前の強心臓にも苦手意識はあるんだな」

……アティリオさん、何気に今までの鬱憤が相当溜まっています？

内心呆れるユーリをヨソに、軽い口喧嘩をしながら再び階段を登り始めたアティリオとブラウ。

“悪い、ユーリ。待たせたな”

仲が良いんだか悪いんだか不明な従兄弟コンビよりも、ユーリにとっては主人であるカルロスからのテレパシーに集中する方が重要だ。

いいえ。主、私にも、何が何だか分からない状況なんですが……アティリオさんとブラウさんは、別行動で何かのお仕事中だったっぽくて、気がついたらザナダシアの間諜っぽい連中に捕まってました……ブラウさんがあの黒ずくめはザナダシアの細作、それもかなり未熟な連中だって推測しているんですが、根拠はよく分かりません。

“なるほど……まさかナジュドラーダのブラウリオの仕事に巻き込まれるとはな”

カルロスの口振りでは、ブラウが何やら荒っぽい類いのお仕事に関わっている事を、主人は承知していたように感じ取れる。

ナジュドラーダ……？　ブラウさんはエストお嬢様を狙ってる、単なるナルシストあんちゃんじゃなかったのですか。

“ナジュドラーダ伯爵家は、アルバレス侯爵家の一門だ。ブラウリオはそこの跡継ぎ。表向きはキザったらしい貴族のボンボンだが……どうやらユーリが目撃した事実からして、裏では誰かさんの忠犬として暗躍してるようだな”

忠犬？　犬……スパイですか。にしては、あまり身を潜めていないどころか、むしろ目立ちまくってますが……

“似合わない女装と滑稽な言動、シュールな化粧ばかりが強烈に印象に残って、中身はサッパリ分からんがな。体型が判別出来ないし、下手に顔を覆って隠すよりは、正体を見破られにくそうだ”

嫌な隠し方である。

“お前の言う黒ずくめの連中の正体だが、少なくともザナダシアに迎合する連中じゃないか。
ユーリが見た、石や生物を溶かす謎の黒いモノ……あれは恐らく、ザナダシアの世界浄化派の連中が手下に使わせてる『瘴気の砂』だ”

……瘴気の、砂？

“ザナダシアの領地北部は、デュアレックスと接してる砂漠だ。北から流れ込んできた瘴気が砂に混じって黒く染まり、色んな物を溶

かす強力な毒薬になる。
世界浄化派の連中が周辺国から恐れられてる一因だ。その精製と持ち運び方法を編み出した事で、連中は強い発言力を得たんだ”
強力な毒薬で得た、権威？　そんなのは……諸刃の剣ですね。
と、カルロスとのテレパシーに集中していたユーリは、ご主人様からの有り難い講釈に熱心に耳を傾けていたのだが、階段を登るアティリオとブラウが足を止めたので、彼らの様子を観察してみた。
「このドア、多分向こう側からは隠し扉になってるんじゃないかな」
薄暗くて分かりにくかったが、彼らが足を止めて注目していたのは小さめの木製のドアのようだった。だが、こちら側からは取っ手のような物が見当たらず、アティリオが押してもドアは開かないようだ。
「ここは緊急避難脱出用通路、ってところですかね。ティカ、ちょっと下ろすよ」
「あ、はい」
階段の途中で慎重にブラウの背中から下ろされたユーリは、自分の足で立ちながらそっとドアから距離を取る。何となくだが、アティリオとブラウは穏便にコッソリと脱出する事を望んでいるのではなく、先ほどから派手に立ち回って誘拐犯達の注意を惹き付けたがっているような気がする。
“うちのネコは賢いなあ”
そう、何よりもこの主人が、先ほどまではユーリが誘拐された事を

焦っていた割には、今はまったくもって落ち着き払っているところからして、裏に何か絡んでいそうだ。

主……今、いったい何をなさっていらっしゃるのですか？

“別に俺が企んだ訳じゃねえんだが……総合すると、売国奴の検察・摘発任務に今現在就いてるのがブラウリオって事になるな。相手が相手だ、アティリオは連盟本部から、その補佐と伝達に駆り出されてるみてえだな”

何か話の流れからして、誘拐の主犯はザナダシア相手に売国行為を行っていた疑いがあり、ブラウは以前から密かに内偵を進めていた……という事らしい。

そんな大仕事の最中にたまったま、ユーリがアティリオのそばに偶然居たものだから、そのままついでに攫われてしまった、と。纏めてみると、なんとも間抜けな話だ。

“アティリオからの伝書矢、相変わらず早ぇな。もう本部に届いてるらしいじゃねえか。

お前が巻き添え食ったなら仕方がねえ。婆さんの協力要請を受けてやるか……ユーリ、すぐに迎えに行くから、無茶はするなよ”

「アティ兄さん、ボク思うんだ。

美しいこのボクの前に立ちはだかる、開かないドアなんて……ぜ～んぶ、爆破しちゃえば良いんだよ」

ご主人様からのお優しいご忠告に、素直に『はい、主』と、頷こうとしたユーリだったが……ブラウの穏やかな台詞と盛大なる爆発音によって強引に遮られた。咄嗟にユーリを庇って、階段を共に何段か転げ落ちたアティリオのお陰でどこにも怪我は無いが、彼女の視

界に映るのは、突如として弾け飛んだドアと、もうもうと立ち込める煙。

「ば、ばく……？」

「ななな、何事だっ！？」

「あっれー？　何か、想定以上に爆破威力があったな。鍵を壊せるぐらいの威力で良かったんだけど」

“……やっぱりあのバケモン、逆さ吊りにしてやる”

いきなり何事なのかと唖然としながら階段の上を見上げるユーリの目に、残っていたもう片方の胸元のニセ乳がどこぞへと消え失せたブラウが、ご機嫌に破壊されたドアの向こうへと、蹴りつけるようにして足を持ち上げ……重たい何かが倒れたような音を響かせてから、踊り込んだ。

ドアと繋がっている部屋か廊下には誰かが居たらしく、慌てふためく声が聞こえてくる。

「ティカ、怪我は？」

「大丈夫です」

ユーリを胸元へと抱き込むようにして庇いながら階段を転げ落ち、背中を石壁にぶつけたアティリオは、真っ先に彼女の怪我の有無を確認して、安堵の息を吐き出し、

「君はここに隠れていて。僕らが決着をつけてくるから」

螺旋階段にへたり込んでいるユーリに、安心させるように頭を軽く撫でてから立ち上がり、ブラウが消えた壁の向こう側へと飛び込んでゆく。

ユーリは階段を這うようにして登り、派手に破壊されたドアの向こう側をこっそりと覗き込んだ。
もうもうと立ち込める煙と、ドアを隠していたらしき書棚は先ほどのブラウの蹴りによってか倒れており、高そうな絨毯の上に本がバラバラに散らばってしまっている。

どこかの金持ちの書斎、だろうか。ユーリが覗き込んでいる向かい側の壁面にもずらりと書籍棚が備えられており、室内にはどっしりとした立派な執務机に、その奥にはガラス張りの両開きのドア、そして広々としたテラスまで備わっている。
ユーリが隠れながら見渡せる範囲から察するに、この建物は王都の中のどこかのようだ。見覚えのある広場の噴水が、視界の片隅でキラキラしている。

部屋の主人の護衛だろうか。幾人か倒れた人影があり、室内でまだ動いているのはアティリオとブラウ、そしてこの部屋の主人らしき、恰幅の良い紳士……というか、小太りの男。服装や撫でつけられた髪の毛など、金持ちではありそうなのだが……いかんせん、焦ったようにギョロギョロと目線を動かして、侵入者の視線から腰が引けている辺りに、全く威厳が見当たらない。

あ、あれが誘拐の主犯さん？　何かこう、私がイメージしていた、威圧感漂うヤクザ的な雰囲気全く無いんですけど……むしろこう、気弱なカエル顔のお爺さんというか……

「お久しぶりですねえ、ゲッテャトール子爵。相も変わらず不細工だ」

ああ、美しくないイヤだイヤだ、と、嘆かわしげに首を左右に振っ

て溜め息を吐く、ナルシー爆破犯。

ブラウさん、あなたはもうちょっと歯に衣を着せた発言は出来ないのでしょうか。

ブルブルと震えていたカエル……もとい、ゲッテャトール子爵と呼ばれた老人は、ビシッとブラウに向けて杖を突き付け、

「き、貴様のようなおぞましい姿を晒した輩に、醜いだの不細工だの言われる筋合いはないわ！」

敢えて誰も口にはしなかった台詞を、ついにブラウに向かって言い放つ勇敢なる者となった。

それに、てっきりブラウは激昂するかと思いきや、彼は余裕綽々でカツラな金髪縦ロールを指先で軽く払い、鼻で笑う。

「ボクの美しさに嫉妬し、谷底へと引きずり込まんとする俗物の、なんと哀れな姿だろう。美しさはそう、時に鋭利な刃物となる……！」

「……このバカは放っておいて。お久しぶりです、大大叔父上。このような形でお会いしたくはなかった」

「ああっ……」などと、聞き飽きた陶酔台詞を垂れ流すブラウを華麗に無視し、アティリオは真顔でゲッテャトール子爵と向き合った。

脳内で勝手に翻訳した、『大大叔父』などという言葉なんてあったかな？　と、ユーリは一瞬戸惑うが、バーデュロイには存在する『曾祖父母の弟』を指す単語が、日本語では存在しないので咄嗟にそんな造語が浮かんだらしい。

誘拐事件の首謀者が、アティリオさんの親戚……つまりこれは、有り体に言えば単なるお家騒動ですか！？

明かされたっぽい事件の謎の一端に脱力しつつ、アティリオの親戚にしては、まったく似ていないなあ……などと、壁に隠れたままゲッテャトール子爵を観察してみるユーリ。

子爵は不愉快そうに手にした杖を床に勢い良く突くが、フカフカの絨毯は音も衝撃も吸収してみせる。

「黙れ、痴れ者が！　貴様のような穢らわしい亜人なぞ、ワシの縁者でもなければアルバレス侯爵家の家名を名乗る資格も持たぬわ！　恥を知れい！」

老人とは思えぬ大音声は、ビリビリと室内やガラスを震わせて響き渡る。

アティリオとブラウが突然現れて、怯えているのかと勝手に勘違いしていたが、ゲッテャトール子爵が落ち着きなく身を震わせていたのは、怒りを抑えつける為だったらしい。

アティリオは老人の叫びに眉を潜め、

「僕の姿が気に食わない事と、故国を売り渡す事は、全く別の話でしょう。ゲッテャトール子爵。

いったい何故、卿はザナダシアと通じ合われたのか」

淡々と事務的に、事情説明を求める。

「何故、何故かだと？　貴様がそれを尋ねるのか！　貴様のような穢らわしい亜人を一掃する、その至上命題に疑問の余地などありはせん！

正しき貴族爵位は高貴なる正しき血筋が受け継ぐべきであり、そこ

にアルバレス侯爵家の血を引かぬ貴様が受け継ぐなど、偉大なる祖へ顔向けが出来ぬ愚行よ！　許し難い蛮行じゃ！」

顔を真っ赤にし、口角泡を飛ばしながら叫ぶゲッテャトール子爵。よほど今まで、アティリオがアルバレス侯爵家の爵位を受け継ぐ身として定められている事に、納得がいかなかったらしい。

「ただ、僕を排除する為に、ザナダシアの世界浄化派を招き入れ、王都での活動を支援していたと？
そんなバカバカしい……僕がアルバレス侯爵に相応しくないと仰るのなら、一門の当主たるアルバレス侯爵閣下にそう奏上なさればよろしい。あなたには、一族を率いる閣下へ助言や忠言を口にする権利がおありの筈」

呆れ返ったように諫めるアティリオに、子爵は手にした杖を振り回して打ち据える。
初撃では驚いてされるがままになっていたアティリオだったが、

「はいはい、そこまでそこまで」

更に杖を振りかぶった老人の枯れ木のような腕を、いつの間にか子爵の背後に回り込んでいたブラウが掴んで止めた。

「残念だけどもねえ、ゲッテャトール子爵が仰りたいのは、アティ兄さんに侯爵としての業務が務まるかどうかじゃないんだな。いっそ、兄さんが愚鈍だとか、病弱なら子爵としてはまだ問題は無かった。それを口実に廃嫡を進言出来るからね。だけどもゲッテャトール子爵としては悔しい事に、アティ兄さんはアルバレス侯爵家の人間として、陛下からの覚えもめでたい。燦然たる後継者だ」
「きっ、貴様、このワシを誰だと思うておる！　下賤なる者が高貴

なるこの身に触れることなど許されぬ大罪であるぞ！」

「高貴な方は、祖国を売り渡したりなどなさらないと思われますがねえ……ゲッテャトール子爵、あなたは単に、エルフ族の血を引く者を疎んじていらっしゃるだけだ。

魔術師連盟を存続させている王室も、現在のバーデュロイの体制も、そして、ハーフエルフである孫を後継者に定めているアルバレス侯爵閣下の事も」

ブラウは子爵の腕をギリギリと容赦なく捻り上げ、杖を取り落とさせるとそれを蹴りつけて弾き飛ばし、絨毯の上を滑ってきたそれは、ユーリの目の前の書棚の角に当たって止まった。

「よせ、ブラウ！　いくらなんでもご老体相手にやり過ぎだ！」

「ボクはねえ、アティ兄さん。

血筋だの高貴だの、そんな言葉で脚色して命令するだけしてふんぞり返って、自分の手は汚したがらない輩はどうかと思うんだ」

「……『アティ兄さん』に『ブラウ』じゃと……？」

顔色を変えて従兄弟の手を掴んで止めさせようとするアティリオと、お化粧のせいで表情がよく分からないままのブラウ。そんな彼らが口にする互いの呼び名に、ゲッテャトール子爵は訝しげに背後を振り仰いだ。

「ようやく気がついて下さいましたか、大大叔父様？」

「貴様、そのなりはなんじゃ！？　アルバレス侯爵家一門に属する高貴なる男子たるもの、常に毅然たる装いを心掛けんか！」

自分の腕を捻り上げている相手に向かって説教とは、何故だろう、疑念を抱いたアティリオとゲッテャトール子爵の血の繋がりが、今やけに納得がいった。

「ボクの麗しい姿を隠さない事には、勘付かれてしまうのだから仕方がないじゃないですか。
お陰様で、大大叔父様の主家にたいする反逆の現場もしっかり押さえさせて頂きましたし、証拠書類も有り難く頂戴させて頂きましたよ」
「どこに仕舞っとるか貴様ーっ！？」

どうやらブラウは、子爵とアティリオが口論しあっている間に、執務机をこっそり漁っていたらしい。
ジタバタと暴れる老人を片手だけで押し止め、ブラウのもう片方の手で摘んだ紙をひらひらと振って……ぺたんこになった胸元にもぞもぞと仕舞い込む姿を見て、激する子爵。確かに、収納場所はもう少し選ぶべきではないかと思う。

「ワシは国の為、アルバレス侯爵家一門を思うて常に行動しておる！　反逆なぞ、そのような世迷い事を……！」
「あいにくと、アティ兄さんを『アルバレス侯爵家の血を引かぬ亜人』だなんて罵った一言は、しっかりボクの耳に入りましたよ大大叔父様。それは伯父上夫妻にたいする、ひいては両者の婚姻を纏めたお祖父様にたいする侮辱であると、懇切丁寧に説明しなくては理解出来ませんか？」

ブラウが掴んでいた腕を解放してやると、ドサッと床へ崩れ落ちるゲッテャトール子爵。
そんな彼を見下ろして、アティリオはとても悲しげに口を開く。

「ゲッテャトール子爵、あなたはエルフ族の血を引く術者全てが、このバーデュロイから……ひいてはマレンジス全てから姿を消せば、満足であると仰るか？」

「当然じゃ！　エルフ族なぞ……訳の分からん術を操る奴らの血を引く者なぞ、この世界には要らん！　魔物と一緒くたに消え失せれば良い！」

子爵の叫びに、ブラウが肩を震わせ……「あはははは！」と、突然大笑いしだした。

「何がおかしい！」

「これは傑作だ……！　世界浄化派の絵空事をこうまで信奉している輩が、まさか身内に存在していただなんて！」

お腹を抱えて涙まで浮かべて爆笑するブラウ。お陰で崩れに崩れた化粧に、更に頬を滴り落ちた跡まで追加されて、不気味度が大幅アップしている。

「ゲッテャトール子爵、あなたは数百年前のマレンジスの実情をご存知ないのか」

たいして、アティリオは相変わらず淡々とした口調で語り出す。

かつて、エルフ族の王国デュアレックスは、周辺諸国の人間達から恐れられていた事。しかし純血のエルフに拘ったエルフ達は、人間との間に混血児が生まれると、その子はデュアレックスから追放していた。

人間達はエルフ族の血を引くというだけの理由で、エルフ族と人間の間に生まれた混血児を不必要に崇めたてた事……

「デュアレックス王国は、どの国家よりも長く古い歴史を持つ。エルフ族の血を引いているという事は、王国の正統性を高めるに足るものとされていたんですよ、大大叔父様」

「貴族が高貴な血族であると、当時そう認識されたのは……祖先にエルフ族の血が入っていたからだ」

「……下らぬ！　ワシは純粋な人間であって、亜人の血なぞ……！」

子爵の言は、途中から悲鳴じみた声にすり替わった。何故ならば。

「大気に満ちる大いなる源よ、清らかなる水よ、我が下へ集いて具現せよ」

呟やかれた一言は、ユーリの主人であるカルロスが照明用の魔術を唱える時と同じ、適性のある元素を魔術によって呼び集めるだけという、ごく簡素な術だ。そこに殺傷能力など無く、呼び集められた元素は水、その手のひらの上に浮かぶ球体はただただ、素朴な美しさを秘めているだけ。

「どうなさいました、大大叔父様？　単に水を集めるだけの術ですよこれは」

「何故、何故だブラウリオ！　高貴なる人間である貴様が何故、そのような亜人どもの奇怪な術を……！」

子爵が恐怖したのは、人である筈のブラウが、エルフ族の血を引く者しか扱えない魔術を披露してみせたからだ。

「何故って、先ほどから申し上げているではありませんか。ボク達アルバレス侯爵家一門は、バーデュロイ王国の貴族達の中でも、最も色濃くエルフ族の血を引いているからですよ。

それとも今度は、ボクの母がハーフエルフの男と不貞を働いたのだと、声高に叫び立てますか？」

「バカな、そんなバカな事がある筈が……！」

「ボクらの大大叔父様であるゲッテャトール子爵閣下ならば、更に

エルフの血が濃いですからね、きっとボクなどよりもよほど高度な魔術を扱えますよ。ああ羨ましい羨ましい」

クスクスと、楽しげに笑うブラウは、茫然自失している子爵の頭上へと手のひらに翳していた水をバシャリと振り掛ける。

アティリオはブラウの行動に溜め息は吐いても、驚いている気配も無い。恐らくはそう、従兄弟が魔術を扱える事を、彼もまた知っていたのだ。

「世界浄化派の言い分は、確かこうでしたね。

『全てのエルフ族の血を引く者を消せば、魔物もまた闇へと還る』

ここでいうエルフ族の血とは、どの程度の濃さを指すのでしょう。ハーフエルフか、クォーターか、その子供までか？　魔術を扱う資質がある者全てか？

一滴でもその血を引いている者が対象となるのならば……恐らく、このマレンジスに生きる人々ほぼ全てが該当する事になりますよ、ゲッテャトール子爵閣下」

平坦な声音で告げられたアティリオの宣言に、老子爵は潰れたカエルのような呻き声を発して、絨毯の上に倒れ伏した。

8

アティリオの指先に、先ほども見た光る矢印書簡が、いつの間にか戻ってきている。

「やけに静かだけど、もう始まってる？」

「ああ。確保の後、鼠一匹たりとも逃がすな、だそうだ」

「退路は塞いどけ、ね。はいはい」

果たして書簡からは何を伝えられたのか、ブラウはアティリオの短い説明だけで十全に理解したようである。

濡れそぼった絨毯の上で、放心してしまっているゲッテャトール子爵。彼の価値観とは相容れない現実、それをどう受け止めるのか、はたまたあくまでも拒絶するのか。それはユーリの預かり知らぬところだ。

子爵が大人しくなったようなので、ユーリは隠し通路からもぞもぞと這い出て、彼が取り落としてブラウに蹴り飛ばされた杖を拾い上げる。

なんですかねえ……エルフの血筋だなんて、私の感覚としては『ファンタジックで素敵！』でしかないんですが。そんなにショックなものなのでしょうか。

マレンジスの彼らを『エルフ』と脳内翻訳しているユーリであるが、遥か昔……それこそ、トールキン教授がかの有名なファンタジー作品を発表する以前の人々のエルフ族のイメージと言えば、邪悪な怪物だとか、そういったイメージだったという。『エルフ族とは、耳

が尖っていて森を愛する華奢で美男美女種族』という連想に塗り変わったのは、地球でも最近の話だとか。

子爵にしてみればエルフとは、それこそ私にとっての、黒かったり茶色かったり飛んだりして、北海道には存在しないらしい某Gと同じような立ち位置なのでしょう、きっと。あれが自分の祖先だなんて……確かに、考えたくもないおぞましさです！

“……なあユーリ。俺はいったいどこからツッコめば良いんだ？”

ををを……と、頭を抱えているユーリの脳裏に、偉大なるご主人様からの脳内通信が入ってきた。

殆ど同時に、階下から複数の人が騒ぐ声や物音が聞こえる。いったい何の騒ぎだろう。

“ゲッテャトール子爵邸に強制捜査だ。地下室に結界張ってあっただろ？　その術を解析せななならんし、瘴気の砂は所持しているだけで危険な毒薬だ。さっきまで警備と突入部隊がいがみ合ってたんだが、婆さんがブチ切れやがって”

は、はい？　え、ベアトリス様が？

違法薬物所持による強制捜査……魔術師連盟には、捜査権なんてあるんですか！？

“魔術を犯罪に使用した術者の取り締まりと、世界浄化派に関してはな。魔術師を巡る騒動は、魔術師が解決しろっつーお上の意向らしい。

あああクソッたれ、何も知らねー使用人を人質に立て篭もりやがって！”

……何やら、少なくとも三階ぐらいの高さにある書斎で子爵が親戚筋の青年らから詰問されていたのと時を同じくして、ゲッテャトール子爵邸の一階では大騒動が勃発していたらしい。

道理で、主人であるゲッテャトール子爵の書斎の壁が爆破されようとも、警備や側仕えの人間がすっ飛んでこない訳だ。

しかし、アティリオが書簡を飛ばしたのは本当につい先ほどの筈。にも関わらず、もう本部から人が集まってきているなんて……今回の捕り物はよほど、スピーディーに運ぶよう念入りな計画が立てられていたもののようだ。

“地下の隠し通路の出口は念の為に張らせてるが、書斎の方も抑えとけっつー指令が、婆さんからアティリオに届いてる筈だ。今下りてくんのは逆に危ねえから、上でじっとしてろ、もうすぐ迎えに行けるからな”

宥めるようなカルロスからのテレパシーに、ユーリはもう一踏ん張りらしいと了承の旨を返す。本来なら不参加であった筈の今回の捕り物に、階下では駆けつけてきたカルロスが混じっているのだとすれば、今すぐにでもそちらへ飛んで行きたいけれども……彼女が下りて行ったところで、足を引っ張ったり要らぬ怪我を負ってしまう可能性が高い。

ご老体を労るでもなく、せっせと執務机を再び漁り始めたブラウと、せめて何か拭くものは……と、ドアの向こうの様子を探っているアティリオを見比べて、杖を子爵閣下のお側にそっと置き、ユーリは悩んだ末にアティリオの後を追う。

アティリオとブラウ、ユーリにとってはどちらも信用出来ないのは同じだが、得体の知れないブラウよりもまだ、ユーリの正体がバレていないアティリオの方に軍配が上がったのだ。

書斎に一つだけあった大きな両開きのドアの向こうは、主寝室になっているらしい。
巨大な天蓋付き寝台が中央に置かれ、揺り椅子にガラステーブル、キャビネットにはお酒らしき瓶。

物音に気が付いたのだろう。アティリオが振り返って口を開く。

「ティカ、見て、僕らの荷物がこんなところに纏めてあったよ」
「えっ!?」

アティリオが、見覚えのある高そうな生地で出来た袋を振ってみせるので、寝台を回り込んでみると……確かにユーリが抱えていた麻袋がぽつねんと置いてあった。
ホッと安堵すると共に、荷物につられて思わずアティリオのすぐそばに駆け寄ってきてしまった。恐る恐るそちらを見上げると、ふわりとした笑みとぶつかる。

「……中身、何か無くなっていないか確認したらどうかな?」
「は、はい」

袋の口紐は開けられた形跡があり、中身を確認する手が少し震えてしまったが、エストからのプレゼントであるぬいぐるみも、主のお下がりのお洋服も、きちんと揃っている。思わずギュッと胸元に袋を抱き寄せた。

主、主、私……早く家に帰りたいです。
だって、この人のこんな顔なんか見たくない。これ以上知りたくない、関わりたくない。
彼は私にとっての殺人鬼、どちらが本当の姿なのか分からずに混乱するなんて、そんな事になったら。もしも私が子ネコ姿でアティリ

オさんに遭遇した時に、躊躇ってしまうかもしれない。彼はもしかしたら、とても優しい人なんじゃないか、なんて。
危機感がどこかへ行ってしまって、そのまま命を刈り取られてしまうかもしれない。

“ユーリ、大丈夫だから。もうすぐ迎えに行けるから、だから今は、俺の頼みをきいてくれないか”

ユーリの目を通して、寝台からリネンのシーツを剥ぎ取るアティリオの背中を眺めているらしき、主人の感覚がする。

頼み？　私はあなたのしもべです、主。
主の願いを、望みを叶える事が、私の存在意義です。

この主人が、改まって頼み事なんて珍しいなと考えながら答えると、カルロスから意外な願いを告げられた。
ユーリは唇を湿らせて、主人の願いを叶えるべく口を開く。

「アティ……さん」
「ん、どうかした、ティカ？……ああ、そうか。ごめんね、ゴタついてて。連盟から人が来る手筈になってるから、ブラウが後始末を終えたら、すぐにでも君を送っていってあげるから。今は下はちょっと……騒がしい事になってて」

どんな状況になっていようとも、『まだ子供であるティカ』を不安がらせないようにと気を配っているらしきアティリオは、困ったように曖昧な説明を口にする。
しかしユーリは今の状況を問いたい訳ではなく、早く帰りたいと、アティリオに駄々をこねたいのでもない。

「アティさんは、どうして、ご自分のお母さんの事を馬鹿にされたのに、怒らなかったんですか？」
「……急に、どうしたんだ？」
「さっき、壁に隠れてたら、耳に入ってきました。ご自分のご両親の事を悪く言われて、怒って良いと思うんです」
相変わらず、私は思った事を上手く喋る事が出来ないな……と、自分の口下手さに悲しくなってくるが、たどたどしいユーリの訴えを理解したらしきアティリオは、困ったように頬をかく。彼が手にしていたシーツを引っ張って、ユーリが折り畳むのを手伝ってやると、ポツリと零した。
「……僕も疑っていた事だから、ね。人からそう断言されたら、『ああ、やっぱり』って、心のどこかで考えてしまって……怒りなんて湧いてこなかったな」
「本当のご両親じゃないと、思っていらしたんですか？」
「僕はほら、見た目がこんなだろう？　昔から奇異の目で見られて……僕の両親も、弟も、親戚も、全員人間なんだ。そんな中にハーフエルフの僕が独りで」
「でも、アティさんが自分の息子じゃないと思っていたりすれば、お父さんはあなたを育てたりしないと思うんですけど……」
人間の両親にハーフエルフの息子だなんて、後ろめたい事があるのならば誰の目にも明らかではないか。
「昔は僕も、そこまで考えが及ばなかったな。お祖父様から連盟の学院に通うよう言い渡された時も、追い出されたように感じられて……
そうしたらブラウの奴が、『兄さんは先祖返りであって、僕の従兄弟である事に変わりはありません！』とか言い出して、変装して連

盟の学院に通い始めて……あの頃はブラウの奴もまだ可愛げがあったのに、どこでどう道を間違えたんだろう」

「間違えたのではなく、単純に喜び勇んで道を飛び降りながら踏み外したんだと思います」

「……」

突如として話題がブラウの今昔にすり替わった。よほどあの従兄弟の現状には頭を悩ませているのか、アティリオががっくりと肩を落とす姿はなかなかに面白い。

“……ちょっと待て。あのブラウリオの野郎は独学じゃなくて学院に通ってやがったのか！？　だがアティリオに懐いてた後輩なんざ、昔っから女だらけ……まさか、ルティか！”

主、何を焦っていらっしゃるのです？　そもそもルティって誰ですか。

「あっちからは家を継げと言われたり、こっちからはハーフエルフは相応しくないと言われて、正直なところ、どうして僕は人間に生まれなかったのかってうんざりするよ。

でもね、学院に通って魔術を学んでた時も楽しかったし、今、連盟で仲間達と一緒に働く事も楽しいんだ。魔術師である自分は、好きだから」

“……アティリオは、ずーっと俺に突っかかってきてたんだよ。俺にはアティリオの苦悩が分からない上に、コイツの立場が羨ましくて、アティリオは俺が羨ましい。

俺は見た目人間と変わらなくて、貴族の義務に縛られてる訳でもなくて、術者。アティリオにしてみりゃあ、理想的な立場なんだろうな”

いわゆる、隣の芝生は青い、ってやつですか。

カルロスがアティリオを羨む理由なんて、考えるまでもない。
もしも主人が大貴族の跡継ぎだったならば、大手を振って愛おしい令嬢の手を取り、愛を囁き、抱き締めて慈しむ事が出来るのだから。

“ん……俺もアティリオも、そこを理解してるから、絶対に『お前が羨ましい』とか、ハーフエルフだから云々とか、そういう悩みは口にしねぇんだ。『君には分からないさ』とか言い捨てやがって。なあ、水臭せえだろ”

そうですね、主。

カルロスからのテレパシーに首肯しつつ、ユーリはぽんぽんとアティリオの頭に軽く手を置いた。長年の付き合いのくせに、素直にお互いを『友人だ』と認められないところだとか。心配しているのに、自分では面と向かってそう言い出せない主に代わって。
だからこれは、ユーリがアティリオに気を許した訳ではなくて、あくまでもアティリオを気にかける主人の代行だ。

「ティカ？」
「もしもあなたが人間だったなら、きっと魔術師と関わる機会は減っていたんじゃないですか？」
「そうだろうね」
「じゃあ、良い仲間と出会える姿に生んでくれてお父さんお母さんありがとう、ですね」
「……そうだね」

アティリオは、彼の頭に置かれたユーリの手をそっと持ち上げて…

…どうして、そんな泣きそうな顔をするのだろう。

「アティさんが魔術師の自分を好きで、そんな風に思えるように生んでくれたお母さんを馬鹿にされたら、やっぱり怒るべきだと思うんです」

「ありがとう、ティカ」

だからどうして、泣きそうな顔のまま笑ってみせるのだろう。そして、掠れた声でお礼を口にするのか。ユーリはあくまでもカルロスの代行であって、アティリオの友人ではないのに。

「もしも～し？　お姫様と良い雰囲気なところ悪いんだけどさあ、アティ兄さん。ボクも兄さんに聞きたい事があるんだけど？」

寝室と書斎を繋ぐ、開け放たれたままのドア、そこにいつの間にやら佇んでいたブラウが、ゴンゴンと乱雑にノックしながらそんな声をかけてきた。

そちらに目をやりつつ、ユーリはアティリオに取られていたままの自らの手を引っ込める。シーツを畳む為に下ろしていた麻袋を拾い上げて、すがりつくようにギュッと抱き締めた。

「……調べ物とやらはどうした、ブラウ」

「だぁって、気になる話題が耳に入ってきちゃったら、ねえ？」

こちらに同意を求められても困るのだが、会話が耳に入ってくるのはあくまでも不可抗力だ！　という状況に関しては、ユーリも多分に身に覚えがある。

「アティ兄さんは婚約話が持ち上がってる、さるご令嬢の事はどう思ってるのさ？」

うむ。それは私にとっても非常に気になる質問だ。
良いぞ、そのままエストお嬢様との婚約話に関して、根掘り葉掘り聞き出して下さいブラウのあんちゃん！

“うお、誰だシャルを起こした奴は！？
ユーリ、後は頼んだ！”

って、え？　主に眠らされてたシャルさんが起きたんですか？
……って、テレパス回線切断されてるし。いったい階下の状況はどうなっているんでしょう……

「は？　いや、それはわざわざ今、口にするべき話か？」
「今でなくていつ聞けと？」

カルロスとのテレパシーが途切れて不安を抱くユーリはさておき、ブラウから振られた話題に何故か焦ったように、わたわたと畳んだシーツを振り回しつつ室内のあちこちに目をやるアティリオ。

「兄さんと違ってボクは予定が詰まってて、今日この時を逃したら、アティ兄さんとろくに話す時間も取れないんだから」

紫色の口紅がぽってりと厚塗りされた唇を尖らせて、ブラウはおもむろに自らのカツラ、金髪縦ロールをかきあげて右耳を露わにする。

「彼女、普段はここにピアスしてるんだよ、知ってた？　アティ兄さん」
「いや……彼女は綺麗なウェーブヘアーだし、そういえば耳なんて見た覚えがないな。
……そんな事を、お前が何故知ってるんだ」

ユーリが居合わせているせいで、エステファニア嬢と名を口にする事は躊躇われたのか、彼女とだけ形容されて従兄弟同士の会話は進む。

「晩餐会では、髪を結い上げてたんだよ。その時にピアス穴に気が付いてさ……それも、空いてるのはどうしてか片方だけだよ？ピアスを着ける習慣があるなら、何でわざわざ晩餐会ではイヤリングにしたのかなあって、疑問に思うじゃない。だから、ご令嬢が滞在中はそばに張り付いて観察してみた訳だ」

ブラウの悪びれない発言にユーリは、パヴォド伯爵ご一家がアルバレス侯爵家の居城滞在期間中の、ブラウの行動についてを思い返してみた。

エストに頻繁に接近してくるブラウを、セリアが毛嫌いしたり、グラが無言のまま彼を遠ざけようと冷戦を繰り広げたり……まさかブラウは、エストを口説くのが目的ではなく、観察しようとしていたのだとは、思ってもみなかった。

「……いったい何をやってるんだ、お前は」

「失敬な。観察の傍ら、完璧にエスコートしてみせたよ！で、彼女が普段身に着けてるピアスを見掛ける機会があったんだけど……あれは彼女、想い人がいるね。それも、身分が釣り合わない男だ」

「な、何を根拠に、おま……」

アティリオさん、主とエストお嬢様の微妙なる関係をご存知なのでしょうか。物凄い動揺っぷりです。ええもう、かえって挙動不審です。

「そりゃあ、ご令嬢が身に着けるには相応しくないイミテーションのピアスを、後生大事に豪奢な髪の毛の下に隠してればね。晩餐会で外してたって事は、ご自分と相手の立場を理解してるって事でしょ？……あのピアスは、彼女の明確な意思表示だ。で、兄さんのその反応からして、彼女の想い人が誰かも知ってるみたいだね」

「さ、さあ……僕にはなんの事だかサッパリだな」

ドアに軽く背を預け、出入り口を陣取って横目で従兄弟を眺めやるブラウに、アティリオは実にバカ正直な表情を浮かべて思いっきり顔を背けた。

「……ふうん、なるほど？　ボクは彼女、良いと思うよ。流石は王の妃になるべく育てられたご令嬢だね。思考は柔軟で利発、機転が利いて、見目麗しく、人心を掴む事に長けてる。彼女がアティ兄さんの奥さんになれば、２人とも幸せになれると思うけどな」

ブラウがいくらエストを絶賛してくれても、なんだかちっとも嬉しくないユーリである。

自分で狙っていた訳ではなくて、従兄弟に相応しいかどうかが気になって検分していたのだとしても、だ。ユーリとしては、『エストお嬢様は主のお嫁さんになって、主とお幸せになるんだから！』と、声を大にして言いたい。

「……僕の婚約話なんかにかまけていないで、お前は自分の心配をしろ！」

「えー？　いや、兄さんの方がはっきりしないと、ボクも誰との話を進めるべきか方向性が定まらないんだけど……

兄さんが、連盟での仕事を大切に思ってる事は知ってるよ。でも、大大叔父様のような考えの方を一門の長として纏め上げる事が、アティ兄さんに求められている役割だ」

「分かっている。僕がどっちつかずな態度のままでいれば、おのずと一族の意見は割れる」

「我らは王国の盾にして矛、忠誠を捧げし我らが王の歩みし道を切り開き、付き従う者ならば。王よ、未来を見据えたまえ。我らの屍を振り返りめされるな」

ブラウは歌うように謎の言葉を口ずさみつつ、スタスタと書斎の方へと戻り、不愉快そうな表情のままこちらを睨み付けてきているゲッテャトール子爵の肩を、ぽんぽんと叩く。

「という訳で、大大叔父様。どうやらアティ兄さんはお陰様で、爵位継承を放棄する意志はなさそうですよ。

むしろこう、大大叔父様が背中を押して下さったようなものですね。あははは！」

アティリオは無言のまま、タオル代わりにシーツで子爵の濡れたお体を拭おうとするのだが、老子爵閣下は甥の気遣いなど不要とばかりに振り払い、先ほどユーリが拾い上げた杖をしっかりと絨毯に突き、背筋を伸ばしてこちらを睨み付けてくる。

ユーリがそっと寝室から書斎に足を踏み出し、下の様子を見てみようかとバルコニーの方に足を向けてみても、やっぱり子爵の視線は彼女に固定されている。

……えーと、これは『お前は誰じゃ』って眼差し……？

「ゲッテャトール子爵、彼女がどうかしましたか」

お前が僕を攫うついでに誘拐してきたんだろうが、と言いたげなアティリオの問いに、子爵は一歩ユーリへと距離を詰めてくる。
アティリオもブラウも、子爵閣下がユーリへ危害を加えるとは考えていないのだろう、彼の行動を止める素振りも無い。ゲッテャトール子爵は誇り高き貴族であり、縛されるまでもなく審問の場に立つ人物であるから。

思わず一歩、ユーリは後退る。
すっかりと今回の誘拐事件は解決されたようなつもりでいたが、そういえば、疑問点はまだまだたっぷりと残されていたのだ。
エルフ族が嫌いなゲッテャトール子爵が、世界浄化派に組する連中が、何故、魔術遮断結界などというものを用意してまで、アティリオとブラウ、ユーリを地下に放置していたのか。
身包み剥がされていても不思議ではなかったのに、何も盗られていない。けれど、荷物は一度開けられた形跡がある。そして、それが置いてあった場所は主寝室となれば、子爵自らが荷を改めていたという事になるのか？

……いったい、この人は、何を考えていたの？

「……黒髪に黒眼、しかしザナダシアの民ならば必ず持つ褐色の肌を持たぬ子供……
姿が見当たらぬと思えば、隠れておったか」
「……黒髪に黒眼はザナダシアの民の特徴ですが、ティカの肌はザナダシアの者ではないからでしょう？　大大叔父様？」
「黒髪の娘、そなたは何者か。世界浄化派の者が探しておる子供とは、そなたで間違いは無いのか」
「……は？」

ゲッテャトール子爵の問いに、ユーリの理解が追い付かずに首を傾

げた次の瞬間。
天井から舞い降りてくる黒ずくめの人物が2人と、ユーリの背後で勢い良くガラスが突き破られた甲高い音が響く。

……そうだ！　何か引っ掛かると思ったら、私とアティリオさんを誘拐した実行犯は、あの手際の良さは間違いなく『未熟なスパイもどき』なんかじゃなかった……！

「……大大叔父上！」
「ちっ！」
「……しゃっ！？」

ユーリの喉は、声が絡みついたように上手く言葉が発せられないまま。
背後から飛来した銀色の輝きはユーリの前に飛び出し、黒ずくめはそれに咄嗟に対応出来ぬまま、こちらに向かって黒い粉のような物を振り撒いてくる。それは当然、彼女の前に庇うように躍り出た銀色の獣へと降り注ぐ。

……全ては一瞬の出来事だった。

そして、事件は迷宮入り？

純白の翼を持ち、銀色の毛並みの大きな狼は、このマレンジスにただ一匹。

ユーリの脳裏に蘇ったのは、薄暗い地下通路で目撃した、松明の灯りにゆらゆらと揺れていた黒ずくめの亡骸。瘴気の砂を被った部位は、原型を留めないほどに融解した……

“シャルッ！？”

「いっ……いやぁぁぁぁっ！？」

ユーリの視界を占めるのは、銀と白の色合いだけで……頭から黒い粉を被ったシャルが、彼女の悲鳴に応えるようにゆっくりと鼻面をユーリの方へと向け、琥珀色の瞳が彼女を捉えた。バサリと広げられた翼が、ユーリの頭上から彼女を包みこむように舞い降りてくる。ユーリは震える腕をシャルの方へと持ち上げた。

「追跡は！？」

「……！　すまん、間に合わん！」

「っ！　大大叔父様、お怪我は！？」

「大事無い」

白と銀色で埋まる視界のその向こう側では、騒がしい物音や声が錯綜しているようであったが、ユーリにとって大事な事は、目の前にいる、彼女を助ける為に飛び込んできて、頭から猛毒を被せられたシャルの安否だ。

ユーリがシャルの鼻面へと指先を伸ばし、せめてその黒い粉を払い落としてしまおうと……

「シャルッ、無事か!?」

そんな混乱した場へ大急ぎで駆けつけてきたのか、バンッ！　と、乱暴にドアが開かれて書斎に飛び込んできたカルロスの声に、

「マスター、そんなに慌ててどうなさったのですか?」

シャルはまったくいつもと変わらぬのほほんとした声音で尻尾を振りながら、あっさりとユーリの傍らから足取りも軽く主人の下へと一直線。思わず、手を差し伸べた体勢のまま硬直するユーリ。

銀色の巨体が目の前から退いたお陰で見渡せるようになった書斎では、体はテラスの方へと向けられたまま、首だけ動かして声も無くシャルを凝視しているアティリオ、そしてゲッテャトール子爵。書斎と寝室を繋ぐドアを蹴り開けた体勢で口をあんぐりとさせ、呑気にほたほたと駆け寄ってくるしもべを上から下まで眺めやるカルロス。

「しゃ、シャル、おま……っ!?
ぶ、無事なのか!?　瘴気の砂を浴びたんじゃ……!?」
「瘴気の砂……って、なんでしたっけ?」

眠らされてからようやく再会が叶ったのか、主人へと盛んに尻尾をぶんぶんと振っていたシャルが首を傾げると、毛並みに絡まっていた黒い粉が少量零れ落ち……高そうな絨毯を一瞬にして溶かしながら消えてゆく瘴気の砂。
ユーリが思わず、先ほどシャルがテラスのガラスドアを破壊しなが

ら飛び込んで来て、黒ずくめ達から瘴気の砂を浴びた着地点を観察してみると、やはり高価な絨毯にはところどころ大きな穴が開いている。

「〜〜っ！？　集え水よ！　かの者を捕らえ、清き流れにたゆたい全てを押し流せ！」
「がぼっ！？」

聞き覚えのある術の詠唱と共に、カルロスがさっと頭上に掲げた右手。その背後から、これまた見覚えのある水流で出来た綺麗なツルが勢い良く噴き出し、シャルを頭から飲み込み……主人の魔術に飲み込まれたまま天井付近に持ち上げられ、哀れ、天狼さんはガボガボと水流の中でもがく羽目に。
あの水のツルは、水やりと捕獲して逆さ吊り以外にも、水流の中で溺死というオプションも付けられるらしい。

主……確か逆さ吊りの刑に処すのは、アティリオさんとブラウさんの2人の予定だった筈では……？

ユーリはあうあうと唇を無意味に動かしたまま、まるで洗濯機の中にでも放り込まれたような状態を披露するシャルの姿を追っていると、カルロスの背後、寝室の方から更なる人影が現れた。

「あらやだっ！　シャルったら珍しくイヌバージョンじゃない！　ちょっとカルロス、遊んでないでシャルを降ろしなさいよっ。あたしモフモフした〜い！」

相変わらずテンションの高い女性魔術師、連盟でもそこそこ高い地位にいるらしきカルロスとアティリオの師匠、ベアトリスだ。握った両手をぶんぶんと上下に振って、シャルの獣姿に大喜びしている。

今日も今日とて彼女の周囲には結界が張られているのか、相変わらずベアトリスの姿を正確に認識出来ない。声や仕草、顔を確かに見ている筈なのに、ベアトリスの姿を思い描けない。何よりも恐ろしいのは、それを理解していてもその点について何ら違和感を覚えないという、脳が誤魔化されているこの感覚。

「申し訳ありません、師匠。王都での世界浄化派の実行部隊、主軸を取り逃がしてしまいました……」

「婆さん！　シャルが、シャルが瘴気の砂を頭からっ……！」

「ふん、魔術師連盟の亜人めが」

「ちょっとカルロス、あたしはモフモフしたいんだってば！」

しもべが瘴気の砂を浴びたせいか、カルロスが攻撃魔法をシャルに放つというご乱心っぷりを見せている最中のベアトリスの登場に、一時期静まり返っていた室内は一気に騒々しさを取り戻す。お陰で、誰が何を喋っているのだかさっぱり聞き分けられない。

ユーリはハラハラしながら天井付近を見上げつつ、水流の中でぐるんぐるんと回転しているシャルの姿をひたすら目で追う。……そろそろ、あの同僚の息が保たなくなりそうなのだが、いつまであの調子なのだろうか。

なんやかんやと大騒ぎの後、混乱していたカルロスが最もシャルを苦しめ、天狼さんのヒットポイントを極限まで削り取った一幕からしばらくして。

ようやく無事に降ろされたシャルは、イヌバージョンの姿のまま「おえっ、げふっ！」と、盛大にえずきながら、書斎の床の上にぐったりと腹這いになっていた。

現在、壁は一部爆破されていたり絨毯は水を吸って悲惨な事になっ

ているゲッテャトール子爵の書斎に居るのは、ユーリ、カルロス、シャル、そしてアティリオとベアトリスの五名。
ブラウはあの騒ぎの中ユーリが気が付かない間に姿を消しており、ゲッテャトール子爵は王宮にて査問会にかけられるらしく、軍部に所属する者と見受けられた迎えがやってきて、身柄を確保され、馬車に乗り込みどこぞへと連れて行かれた。行き先はやはり王宮らしい。どういった部屋に置かれるのか、は定かではないが。

さてそんな最中、濡れそぼった同僚の毛並みを、子爵のベッドのシーツでゴシゴシと拭ってやるユーリの反対側では、べったりとシャルの腹に張り付くベアトリス。
拭く物が無いので勝手にシーツを拝借しているが、シャル本人はそれで拭われるのがなんだか嫌そうである。子爵の匂いでも残っているのだろうか。

ジーッと同僚の姿を眺めやっても、瘴気の砂をたっぷり浴びた筈の天狼さんは、それによって体を溶けさせた様子が全く無い。ユーリが地下通路で目撃した時には、本当に一瞬にして人体を溶かしていた強力な毒薬であったというのに。
絨毯への被害から考えても、瘴気の砂に見せ掛けた偽物という事も無さそうだ。いったいシャルはどれだけ頑丈な体をしているのだろう。

「アティ、現状の報告を」

そんなエルフ魔術師は、姿勢はともかくとして真面目な声で弟子を促す。

「はい。ウィルフレドではなく偶然僕が屋敷内に入る事になり、少々予定は狂いましたが、予め侵入していたルティと共に計画通り世

界浄化派の一派を引きつけつつ、陽動に動きました。
魔術遮断結界が張られた地下に縛られ放置されていましたが、予想以上に潜んでいた敵の数は少なく、この部屋に飛び込んで容易にゲッテャトール子爵を確保する結果となりました」

師の前にかしこまったアティリオがスラスラと報告する声が、風通しの良くなった室内に響く。
カルロスは気分の悪そうなシャルの首筋を撫でてやりつつ、無言のままユーリに視線を寄越してくる。

“……で、だ。
お前がこの場に居るのも、世界浄化派の連中の思惑も、『どうしてそうなったのか分からない。身に覚えがない』のは、俺が一番よく理解している。
だが、婆さんとアティリオ、連盟本部のお偉方にたいしても、その言い分は通用しねえ。世界浄化派の連中は、いわば魔術師連盟の天敵だからな。根掘り葉掘り聞いてくるぞ？”

主人の眼差しは、これからどうするよ？　と、お手上げ状態である事を伝えてきている。
ユーリがカルロスの使い魔、クォンである事を連盟の首脳陣を始めアティリオに正直に明かせば、ユーリの身の潔白や『世界浄化派なんて存在を、今日初めて知った。誘拐されて関わった』事は信じて貰えるかもしれない。カルロスが、世界浄化派に与している裏切り者だと疑われていない限り。

だが、それ以降はどうなるのか？　またしても魂を吸収せずに使役していた2匹目のクォンの存在を隠匿したのは、連盟にたいして誠実にはなれぬとばかりに己の真の実力を発揮せず、奉仕を怠る為であったと断じられはしないか？

カルロスの立場はより不安定になり、連盟での信用を無くせば、彼の寄りどころが無くなってしまう。

そしてユーリは、たとえ魂の吸収という手段を使わずともカルロスの役に立つシャルとは違って、使役しようにも足を引っ張ってばかりの無力なユーリは。

大勢の連盟の魔術師達から、カルロスに命を捧げる事を迫られる事になるのかもしれない。

「……ふむ。肝心のルティは今どこに？」

カルロスとユーリ、そして主人とテレパスを交わしているのか彼女からは伺い知れないシャル。無言のまま心の中で大急ぎで打ち合わせをしている主従には話を振らず、ベアトリスはまずアティリオからの報告を吟味しているようだった。

「話は前後しますが、僕とあちらの少女、名はティカといいます……彼女と僕を攫ってきた世界浄化派の実行部隊と推定される2人組が書斎の天井から姿を現し、瘴気の砂を撒き散らし、時を同じくしてテラスから飛び込んできたカルロスのクォンがそれを全て浴び、2人組は直後にテラスから離脱、ルティは即時追跡に移りました」

アティリオが指差す天井を見上げてよくよく目を凝らしてみると、確かに板がズレている箇所がある。彼らはあんな高いところから飛び降りてきたのか。

いったいブラウはいつの間に姿を消して、どこへ向かったのだろうと頭の片隅で警戒していたのだが、あの昼日向では悪目立ちしそうな黒ずくめ2人組がとっとと逃走を図ったので、後を追いかけていったらしい。

それにしても、ベアトリスもアティリオも、ブラウではなく『ルティ』と当然のように彼を呼んでいるが、本当にユーリが知っているブラウリオ公子と同一人物なのだろうか。ひょっとすると彼は、魔術師連盟の中では『ルティ』と名乗っているのかもしれない。

そっちだって呼び名が似通っているじゃないですか、ブラウさん。

アティリオの淡々とした報告はまだ続けられた。

「僕らが地下で捕らわれていた最中、地下通路にて世界浄化派の手の者とおぼしき相手との交戦中、また、この書斎にてゲッテャトール子爵への聴取の際も、あの2人組は密かに僕らの様子をじっくり窺っていたのではと、ルティは推測したようです」

先ほどから引き続き大活躍しているのか、指先に例の光る矢印書簡を浮かべさせ、ブラウからの連絡を聞いたらしきアティリオは従兄弟の推測も言い添える。

「聴取によって聞き出したゲッテャトール子爵の言によると、卿は王都での世界浄化派の活動拠点提供、資金面での援助、情報漏洩及び、バーデュロイ国内における世界浄化派賛同者を密かに呼び集めていた模様です」

アティリオが長々と報告している最中、ドアの向こうから灰色のローブ姿の魔術師が静かに姿を現し、彼は一旦口を閉ざした。

現れた魔術師はベアトリスへと一礼し、魔術師連盟とは命令系統が異なる、国の保有する軍隊である王都の治安維持部隊の手によって、屋敷内に留まっていたゲッテャトール子爵の身内、雇われていた使用人全ての確認を済ませ、世界浄化派への関与が見受けられた人物は隔離してある事を報告してきた。

「そう……付近の住民への被害、目撃者は？」

ベアトリスは、ゲッテャトール子爵の屋敷付近に住まう住人達の様子を、ひどく気にかけているようであった。

真っ昼間から貴族のお屋敷で暴動よろしく爆発があったり、毒が撒き散らされたりすれば、それは近隣の住民とて不安がるだろう。どんなに速やかに事を運んだとしても、騒ぎを起こした事には違いが無いのだから。

しかし、どうやら子爵邸の広さが幸いしたらしく、連盟から魔術師が何人も押し掛けてきた事や、子爵本人が人目を避けて馬車に乗り王城へと連れて行かれた事は気付かれず、非難の声は寄せられていないようだ。こっそりと、影で噂が走る事になるのかもしれないが……

「現場の処理は治安部隊の管理下に移ったわ。あたし達は一旦撤収しましょう

……アティ、子爵が真実どういった行いをしていたのか、それは売国行為か否かを審議する権利は、あたし達に委ねられてはいないわ。そちらにまで介入するのは越権行為よ」

「はい、分かっています師匠。

僕はあくまでも、ゲッテャトール子爵が属するアルバレス侯爵家一門、その次期総領と目されているのであって、アルバレス侯爵ではありません。

今の僕はただの、魔術師連盟に名を連ねる一魔術師です」

濡れた絨毯の上で背筋を伸ばして佇み、静かに師を見返すアティリオ。おもむろにシャルの傍らから立ち上がったベアトリスは、そんな弟子に一歩近寄り、

「良い子ね、アティ。あなたは頑張ったわ。
辛くても、苦しくても、頑張ったわ」
「師匠……」
ぽんぽんとアティリオの背中を軽く叩き、ふわりと抱き締めたのだった。

う～ん、以前ご一緒させて頂いた、『ぶらり馬車、街道を行く。魔術師連盟より御用聞き奉仕の旅』の最中からずっと思っていましたけど、アティリオさんってお師匠様大好きですよね、あの人。
仲良しな師弟の姿に、主は何気に面白くなさそうな表情をなさっていますし。どっちがお師匠様から可愛がられているか、張り合ってる面でもあるんですか？

どうしよう……場所を移すって、これから本部の塔に行くんですよね？　いっそのこと途中で姿を眩ませたりすれば……

“お前が二度と人間の姿に戻らん覚悟なら、やってやれん事も無いが？”

……無理ですね。この先の一生を、ネコとして生き抜ける気が致しません……

ユーリが絶望的な気分で小さく首を左右に振ったその時、

「ティカ、悪いんだけど、君には聞きたい事があるんだ。
すぐに家に送って行ってあげると、約束した身でおこがましいけど……連盟の本部にまで来て貰えるかな？」

相変わらず気分が悪そうなシャルの傍らに座り込み、シーツで水分を拭ってやっているユーリにしっかと目を合わせ、アティリオがそう尋ねてきた。口調こそ疑問系の任意同行であるが、そこに拒否権は見当たらない。

「あ……」

ぐしょぐしょの絨毯の上に座り込んで濡れたからではなく、ユーリは恐怖からカタカタと身に震えが走る。
カルロスの瞳が、僅かにスッと眇められた。

「ああ、そう言えば」

と、そんな緊迫感の走る書斎に、場違いに脳天気な声を発したベアトリスは、ポンと両手を叩いた。
彼女は横たわるシャルの背後を回り込み、震えて固まっているユーリの肩に軽く手を起き、アティリオへと顔を向けた。

「あなたには紹介してなかったわね、アティ。
彼女はあたしが、バーデュロイからず～っと東の方を旅してた頃に、お世話になった人の孫でね。あたしを頼って最近バーデュロイに身を寄せてきたのよ。
バーデュロイの事も、王都の事情にもとんと疎いからねぇ～。てっきり今頃は王都見物の真っ最中かと安心してたのに、まさか、アティと一緒に誘拐されてるだなんて。ティカちゃんったら、今日は大変だったわね」

畳み掛けるようにベアトリスは『黒髪の少女ティカ』を、自らが面倒を見ている娘だと言い切る。ニコニコと笑顔でそう同意を求められて、ユーリはベアトリスを見上げて困惑した。いったいぜんたい、

彼女は何を言い出しているのだろう。

“……いーから、今は取り敢えず婆さんに話を合わせとけ、ユーリ！”

なかなか口を開かないユーリに、カルロスからテレパシーによって唆す声が届く。

「は、はい。ご心配をお掛けして申し訳ありませんでした、ベアトリス様」

ユーリが恐る恐るそう答えながらぺこりと頭を下げると、ベアトリスはぎゅむっ！　と彼女を背中から抱き締めてきた。

「んもう、ティカちゃんったら、相変わらず他人行儀なんだから！」

「師匠が身元を引き受けていた子だったのですか。なんだ。それならそうと、ティカも早く言ってくれたら良かったのに」

「えっと……」

どう相槌を打つべきか、困惑して口ごもるユーリに先んじて、カルロスが人の悪い笑みを浮かべながら口を開いた。

「どうせお前が、コイツを全力で追い掛け回したり脅かしたんじゃねえのか、アティリオ。ティカは繊細だからな～」

「……まるで見てきたかのように言うな、カルロス」

「なんですって!?　信じらんないっ！　あれだけあたしが、女の子には優しくしなさいって言い聞かせてたのに……アティったら、またそんな事したの!?」

「ご、誤解です師匠！　あれはあくまでも不可抗力であって……！」

慌てふためいて抗弁するアティリオと、益々ぎゅうぎゅう抱き付いてくるベアトリス。

……あれ？　これと似たような会話、以前どっかでしませんでしたっけ？

2

えー。ただ今、魔術師連盟本部の塔、長老議会室よりこんにちは、な、ユーリです。

「だがベアトリス、現場に飛び出して行くのは控えてもらいたい。君に危険な真似はさせられん」

「クリストバル、全く動かないあなたが、あたしの行動に制限をかけてくるいわれは無いと思うけど？」

「確かに、私には君を縛り付けておく事など出来ん。だが忘れないで欲しい。君の体は、命は……君1人のものでは無いのだと」

魔術師連盟の代表、金髪に榛色の目を持つクリストバル長老の一言に、議会室に衝撃が走ったように、ユーリには感じられた。

『君の体は君1人のものじゃない』

『君に危険な真似はさせられん』

……つ、つつつ、つまりっ！？　ベアトリス様って、今、お腹に赤ちゃんがいらっしゃるんですかーっ！？

しかも彼らの口振りからして、お父さんはクリストバル代表ですよね、これ！？

そんな、びっくり仰天ニュース発覚な一言から、少しばかり時間は遡る。

ユーリは汚れてしまったお洋服から、泣く泣く元々着ていた主様からのお下がり少年服に着替え、魔術師連盟本部の塔へと向かっていた。

先を歩くベアトリスとカルロス、そしてアティリオ。一歩分後ろをついて行くユーリとシャル。ブラウは未だ逃走した黒ずくめ達を追跡中なのか、姿を消したままである。

因みにシャルも、イヌバージョンでは街中を歩く訳にはいかないらしく、今は人間バージョンに戻っている。

シャルに今日の出来事をざっくりと語ってもらうと、曰く。

寝て起きて、主人の匂いを辿って子爵邸を訪れ、入り口は封鎖されているので人目を避けて路地の木陰にて変身し、全力で塀を飛び越え敷地内に侵入したら、テラスの奥にユーリの背中が見えたので、「マスターはどちらに？」と尋ねようと一直線に向かったら、うっかりガラスを突き破っちゃった。変な臭い粉は掛けられるし、踏んだり蹴ったりです。

……という事らしい。

彼女の危険をいち早く察して、全速力で駆け付けてくれた……！

そんな感動が台無しだ。

魔術師連盟への道すがら、そんな寂しさを覚えるユーリに、シャルは腕に抱えた麻袋の中身を確認し、嘆息する。

「これがユー……ティカさんの趣味ですか。相変わらずあなたは、お洋服を汚す天才ですね」

「うるさいです。私だって、好きで新しいお洋服を汚した訳じゃ……」

せっかく、綺麗に着飾った姿をシャルに見てもらいたかったのに。

新しく誂えたお洋服は、泥や埃で薄汚れて、汗を吸い込んでしまっ

た。唯一、帽子だけが被害を免れて子爵の寝室に荷物と一緒に放置されていたが、今の服には到底合わない。

「まあ、あなたが着ていたお洋服を汚すのは、今に始まった事ではありません。
汚れも悪臭も、わたしが全て新品同様に洗い落として差し上げましょう」

ぴんと伸びた姿勢でうそぶき、ふふん、と、鼻で笑いながら自信満々に胸を張る同僚がやけに頼もしい。

「しゃ、シャルさんの背後から後光が見える……！」
「ティカ、騙されちゃ駄目だ。それは単に、あのクォンの髪を陽光が弾いているだけだ」

そんなやり取りを交わすシャルとユーリの間に割って入ってきたアティリオが、大真面目な顔で諭してきた。予告も無く間近で覗き込んでくる彼の顔に驚いて、ユーリの心臓が大きく飛び跳ねた。
アティリオとしては、シャルは危険動物に区別されているらしく、ユーリが『シャルさんシャルさん』とイヌバージョンだろうが人間バージョンだろうが、変わりなく懐く姿を、心配そうに遠回しにだが諫めてくる。

「……アルバレス様、あまりティカさんに近寄らないで下さい」

どうやら、ユーリがアティリオを殊の外苦手としている事実を同僚は一応理解しているらしく、シャルの腕が伸びてきて手首を掴まれ、彼女を傍らに引き寄せてきた。その態度に、眉を吊り上げるハーフエルフ魔術師様。

「お前こそ、その手を離せ暴虐クォン。お前の馬鹿力で、ティカのか細い手首が折れるだろうが」

しゃ、シャルさん……明らかに逆効果です！　アティリオさんの中で、『暴虐クォンの本性を知らず、人にもなれる大きなイヌ、だと騙されている可哀想な子供ティカ』認識が深まったっぽいんですが！

だが、そんな忠告を同僚の耳に入れるには、アティリオの目が邪魔である。

威嚇ではなく、胡散臭いモノを見るのでもなく。アティリオから純粋に、身の安全を心配して気を配られると、どうにも調子が狂う。

「人聞きの悪い事を言わないで下さい、アルバレス様。わたしは彼女を乱暴に扱ったりしません」

「ハッ。どうだか。

僕はお前がどういった狩りを行うのか、今まで幾度となく見てきたんだ。人間の子供への加減が出来るとは到底思えないが？」

アティリオから殺気をぶつけられようが、歯牙にもかけないシャルであるが、嫌味や皮肉、言葉の戦いに関する経験値は低い方らしい。自分への口撃ならば、ただ受け流してしまえば良いと考えているようだったが、今日はそこに第三者が絡んだ当て擦るような台詞、ユーリに関わる言葉が投げつけられて、右から左へ流してしまえないようだ。

簡単にアティリオの挑発に乗ってしまい、ユーリの手首のみならず、肩にまで腕を回してしっかりと抱き締めてくる。グルグルと、シャルの喉から威嚇するような声が漏れているような気がする。初めて聞いた。

ここで、恥ずかしいから離れて下さいなどと口にしてしまえば、ア

ティリオは我が意を得たりとばかりにユーリをシャルの側から引き離そうとするだろう。

我慢我慢……これは単なる保護、子供扱い、アティリオさんへのシャルさんの警戒心の表れ……

心臓が無駄に爆発しそうな胸元を押さえ、なんとか悲鳴を押し殺したユーリ。しかし彼女の努力を嘲笑うかのように、肩どころか腰までがっちりと腕が抱き付いてくるシャルの目は、あくまでもアティリオに釘付けだ。

と、そんな同僚の後頭部を、先を歩いていた筈のカルロスが突如として全力で殴りつけてきた。ドガッ！　と、なかなかに痛そうな音が響き、思わず両手で殴られた自らの頭部を押さえるシャル。

「マスター、急に何をなさるのですか」

「往来のど真ん中で白昼堂々、何をしとるかお前はっ！　もっと人間社会の礼儀と常識を学べこのアホイヌっ！」

怒れるご主人様はユーリの手を取って早足で歩き、立ち止まってこちらのやり取りを見物していたベアトリスの傍らに並んで歩き始めた。

「……ちょっとちょっとカルロス！　あたしの知らない間に、この三角関係が益々面白い事になってるじゃない。いったい何があったのよ？」

ウキウキと声を弾ませて、ベアトリスはカルロスの耳に内緒話をしてくるが、それが丁度ユーリの頭上を挟んでの行動な為、彼女に丸聞こえである。

三角関係……？　命狙われてます状況なこういうのも、三角関係って言うんでしょうか、ベアトリス様。

「知らん。だがまあ、アティリオの今までの遍歴を考えると、さもありなんだが」

「……あー、な～る。年上じゃない点を除けば、アティのど真ん中一直線ね、確かに」

「だーから俺は、予めしっかり忠告しといたんだがなあ……アティリオの野郎、聞き流しやがって」

「アティはしっかりしてるようで、抜けてる部分があるものねえ。ま、それも可愛いんだけど」

恐らく、ユーリにも関係する話題ではないかと思われるのだが、主人とその師のひそひそと交わされるやり取りは、イマイチ話が見えない。

そして何より、お互いの印象がかなり悪いらしい背後の2人の様子を窺う勇気も出ない。

「だがなあ婆さん。アティリオの性格からして、もっとグイグイいく筈だろ？　だからつまり、単なる世話焼き性分じゃねえか？」

「えーっ、そんなのつまんないーっ。あたしはもっとこう、乙女の胸がときめく三角関係を期待してるのに」

「……無闇に焚き付けんなよ？」

頭上で交わされる、カルロスとベアトリスの謎の会話を聞き流しつつ、ユーリは自分が理解出来る明白な点について推測を巡らせてみる。

うーん、ベアトリス様って……今日初めて私と出会ったと認識してるんじゃ無いっぽいですねえ。

って事はつまり、前回の魔術師のフィールドワーク中から既に、私は単なる黒ネコではないと見抜いていらっしゃったのでしょうか？
ベアトリス様は連盟の中でも右に出る者の居ないほど、結界術がお得意らしいですし。それこそ主の付与したステルスなんて簡単に見破り、姿形以外……外殻膜で私を識別出来ていたのだとすれば、書斎での唐突なベアトリス様の発言や行動も、クォンである私を庇っての事だと推測出来ますが。

むむむ……と、考え込みながら足を動かしていたユーリは、カルロスとベアトリスの間に挟まれるような形で本部の塔の中へと足を踏み入れていた。

再び訪れた連盟本部の塔は、相も変わらず静けさに包まれていた。
一行は、例のふわふわ浮き上がりエレベーターに乗ってぐんぐん上の階へと上って行き、揃って大扉の設えられた部屋へと案内された。
これからここで何をするのか、を主人からテレパシーで聞かされたユーリは、緊張しながら開かれた扉を潜る。

室内は何故か真っ暗闇だった。背後の大扉が『ギ～……バタン』と、やけに大きな音を立てながら閉まると、そこは完全なる暗闇に閉ざされ。
ユーリが盛んに瞬きをしながら、一寸先も見えない黒く塗り込められた視界の中手を伸ばすと、何かに触れた。

「どうしたの、ティカ？
ああ、暗いのは慣れないのかな。大丈夫だよ、長老様方がいらっしゃれば、すぐに明るくなるから」
「そ、そうですか」

……思わずギュッと握ってしまったのは、近くに立っていたアティリオの指だったらしい。彼だと気が付いたユーリは、即座に手を離す。暗闇の中、軽く前髪の辺りを撫でられたような感触が伝わってきて、慌てて一歩後退ったところで、天井から明るい光が照射されてきた。暗闇に慣れた目には、光は痛みさえもたらすものであるが、それは不思議な事にユーリの目を傷つける事がない。

それは例えるのならば、一筋のスポットライトだろうか。指向性を持たせて、殆ど真下のみを照らし出すその光は、室内の壁の部分は闇に沈めたまま、中央に設えられた半円形の卓に着くエルフ達を照らし出している。

えー、こちらの魔術師連盟では、長老と呼ばれる熟練の術者方が集まって連盟全体での方針や問題を話し合う、評議会制がとられておりまして、その長老格はベアトリス様を入れても全部で５人。

連盟に所属する術者の数は、今現在学校でお勉強中の子供達を入れても、１００名余りだそうです。

こんなご大層な塔が建てられていて、魔術師連盟の存在はバーデュロイ国内に広く浸透している割に、所属人数が少ないような気がいたしますねえ。

それだけ、マレンジス大陸中に離散を余儀なくされたエルフ達は、数を減らしているという事なのでしょうが……

ここ、長老議会室には純粋に話し合いの場としての活用のみを求めた結果、魔術だけではなく、ありとあらゆる行動を制限する結界が張られているらしく、内部での魔術使用は勿論の事、外部からの物理攻撃すら跳ね返すと主人から豪語された。室内に入った今は、当然の事ながらテレパシーは通じない状態だ。道理で、以前塔の中を必死こいてアティリオの魔の手から逃げ惑っていた際、カルロスからの返事がこなかった訳だ。

その時の恐怖が嫌でも蘇ってきて、ユーリはつつ……と、なるべく

アティリオから距離を取り、シャルの服の裾を両手で掴んだ。

この部屋では剣を抜く事も、危険物を撒き散らす事も不可能だと説明されたユーリは、試しに走ったり飛び跳ねたりしてみようと足に力を込めてみて、のったりとした動きしか出来ない事を実感した。

……この部屋の中では、お喋りと寝るぐらいしか出来そうに無い。

「この部屋の中で居眠りしたら、婆さんからはたき起こされるからな」などと、主人からからかわれた事から察するに、この結界を張った術者はベアトリスで、彼女の行動は制限されないようだ。

広々とした議会室、その円卓に腰掛けるのは、年若く美しい美青年と美女、４人のエルフ達。見た目は若々しさを保っているが、長老格と目されるだけあって、彼らもまた、長い時間を生きてきた経験豊富なエルフ魔術師達なのだろう。

出入り口の真正面、真ん中の席に着いているのが、魔術師連盟を取り纏める代表であるクリストバル。金色の長い髪と長い耳、金糸の刺繍が入ったローブ……テーブルの上に軽く両手を置いている仕草にさえ、強い存在感を放っている。そう感じるのは、ユーリが緊張しているせいだろうか？

彼の右隣の席が空白なのは、そこは本来ベアトリスの席なのではないかと思われる。

「お帰り、ベアトリス。

やはり君は我慢出来ずに飛び出していったんだね」

「ただいま、クリストバル。

お小言は後回しにしてちょうだい。まずは報告があるわ」

円卓に向かって一歩進み出たベアトリスは、今回のゲッテャトール子爵世界浄化派癒着疑惑事件における、連盟所属魔術師誘拐に端を

発した一連の騒動についてをつらつらと報告しだした。
ゲッテャトール子爵邸でのアティリオの報告や、ブラウが入念な下準備の末、何故か従兄弟と同じ場所に拘束されていた件といい、今回の出来事はゲッテャトール子爵邸を拠点として暗躍していた世界浄化派に組する人々を炙り出す為、連盟側がお膳立てして張っていた罠だったらしい。

誤算は、情報伝達係であった筈のアティリオが作戦開始時点で所定の位置に待機しておらず、何故か路地裏に駆け込んで行って、これまた何故か世界浄化派の実行部隊の2人組に誘拐された事であるが、その程度の想定外の出来事など問題無く作戦は遂行され、世界浄化派の活動拠点と協力者は失われる事となった。

……スミマセン、何でアティリオさんが路地裏に居たのかって、私のうっかりのせいです……

びくびくしているユーリには更に心臓に悪い事に、アティリオとユーリが誘拐された際の敵の動きの不可解な点、世界浄化派が探しているらしい人物が居る事、更には『そもそも何故、アティリオとユーリを誘拐する必要があったのか』という基本的な疑問点についてが俎上に上げられる事となった。
発言を許されたユーリは無論、自分には心当たりが全く無い事を訴えておくのだが、彼らの目は当然厳しい。

「そこから推測される絵柄が、三通り浮かぶのう」
「と、申されますと？」

びくびくしているユーリを見据え、男性長老の1人がゆっくりと口を開いた。彼の丁度向かい側の席に着いている女性が、腕を組んで冷めた目で彼を見返す。

「一つ、そこな娘は世界浄化派の手の者であり、連盟内部へ突き刺すべく放たれた楔である。
一つ、そこな娘は世界浄化派の連中が血眼になって探しておる人物であるが、本人にとってはあまりにも些細な出来事であった故、関連に思い至らない。
一つ、そこな娘は世界浄化派の連中が血眼になって探しておる人物と、偶然同じ特徴を持っておっただけ」

可能性を一つ一つ上げてゆきながら、口調だけが老人っぽい長老は立てた指を一本一本折ってゆく。

「さて、いったい世界浄化派の連中はこんな小娘を捕まえて、何がしたいのかね？」

今までずっと口を開かずにいた長老は、ひたすら面倒臭そうにそう吐き捨て、行儀悪く卓の上に片方の肘を着いてその手のひらの上に顎を乗せ、「ふわ～あ」と、欠伸混じりにそう零す男性魔術師。

えー。因みに私から見て左から順番に、お爺さん口調の長老様、ベアトリス様のお席っぽい空白、クリストバル代表、お行儀と素行が悪そうで眠たそうな男性長老様、口数少なく冷ややかな眼差しで睥睨なされる女性長老様、という席順になっております。

「世界浄化派の連中が探している人物の条件は『黒髪で黒眼、肌は褐色ではない子供』たったこれだけです。
確かに、バーデュロイでは滅多にお目にかからない組み合わせではありますが、かと言って該当者がティカ1人だけとは到底思えません。それこそ大陸の東部では、その色合いの民だけが暮らす国は事実幾つも存在します。

彼女1人を過剰に警戒し、不適切な対応となるのは望ましくないと思われます」

自らのクォンである、という事実を隠し通しているという後ろめたさ故か、カルロスが慎重に言葉を選びながら冷静に発言する。やはり我が主は格好良いと、益々主人への忠誠心がメキメキ上がってゆくのを感じるユーリである。

「この子は、あたしが預かっている子よ。世界浄化派へ肩入れするような理由は、全く無いわ」

「ではベアトリス、あなたがそう思い込むように世界浄化派の一派が仕組んだ可能性は？」

「そこな娘が真実無害であると証明出来る手立てなぞ、わしには考え付かぬ事よ。故に、疑わしき者は排除される事が望ましい」

ベアトリスの低い声に、左右から女性長老と老人口調の長老の畳み掛けるような声が降り注いでくる。

排除、その一言にユーリの足が震え上がった。そんな彼女の怯えた気配に気が付いたのか、傍らに立っていたシャルが、薄暗い中でユーリの手を握ってきた。大丈夫、と励ますように、指を絡めて寄り添ってきてくれる。

怖くない、怖くない。

だって、たとえテレパシーが途切れてても。私のすぐ側には、シャルさんも主も居るんだもの。

「……あたし達はかつて、大きな過ちを犯したわ」

ベアトリスはキッと真正面を……クリストバル代表を睨み据えながら、唇を開いた。

「自らの力に驕り、周囲を振り返る事も無く……我々がこのマレンジスを支え、発展させてきたのだと。魔術を発現させる事を躊躇わなくなり、エルフ以外の生命を、尊厳を軽んじた。その結果が今のマレンジスの姿よ！

祖先の失態を子孫が拭う羽目になって、それでもあたし達はまだ、同じ間違いを繰り返そうと言うの！？」

「間違いとは心外じゃ。わしはあくまで、どう転ぶか予測不可能な異物は入れられぬと申しているまで」

「それもこれも、子らを思うが故の事」

「そういう決めつけが、独善的で傲慢であるとは考えないの？」

「落ち着きなさい、ベアトリス」

苛立ちを隠そうともせず、語調を強めるベアトリスに、開始以来、黙して議会の成り行きを見守っていたクリストバル代表がようやく口を開いて窘めてきた。

「疑わしきは罰せず……本人に何の自覚も持ち合わせていないと言うのならば、問い詰めても無駄でしょう」

「そーそ、連盟の内部に世界浄化派の手が食い込むのを懸念してるなら、ガキんちょの保護者はベアトリスから外部の奴に代わらせりゃあ良いじゃん。

はい、問題解決議題終了。解散って事で良いか議長ー？」

クリストバル代表が周囲を順繰りに眺めながら、集った面々から同意を得ようと投げかけた言葉は、例の面倒臭がりで眠たそうな長老によって、強引に纏めに掛かられた。……そんなに議会が面倒ならば、何故に長老などやっているのだろう。

「……生憎ですが、まだ全ての問題は解決していません」

「そうじゃの。祖先の失態をと申すのならば、ベアトリスよ。当然今後は、そなたは自らの身を守る事に細心するのじゃろうな？　今日のように、現場に飛び出していったりなどせず」

女性長老様と老人口調長老様って、仲が良いのでしょうか？　どっちかが発言したら、必ず口を開いていますね。

……ベアトリス様って、そんなに毎回毎回、鉄砲玉のように飛び出してばかりなお方なのでしょうか？

「どうしてそうなるのよ、皆して。あたしは机に縛り付けられるような仕事は、不向きなんだって言ってるでしょ？」

「だがベアトリス、現場に飛び出して行くのは控えてもらいたい。君に危険な真似はさせられん」

「クリストバル、全く動かないあなたが、あたしの行動に制限をかけてくるいわれは無いと思うけど？」

というところで話は冒頭に戻り、クリストバル代表の口から爆弾発言が飛び出してきたのだった。

「確かに、私には君を縛り付けておく事など出来ん。だが忘れないで欲しい。君の体は、命は……君1人のものでは無いのだと」

重々しいクリストバル代表の台詞に、深く頷く長老方。例のやる気ナッシング長老でさえ、『ベアトリスはもっと体を労れ』とばかりに、幾度も首肯している。

ユーリは懸命に頭を働かせて……驚きからぐるぐるしている頭を回転させて、一つの台詞を引っ張り出してきた。

「ベアトリス様！」

「なあに、ティカちゃん？」
「おめでとうございます！」

全身全霊を懸けて、この喜ばしい出来事を寿いだというのに、ベアトリスから返ってきた答えは、

「……へ？　ああ、うん、ありがとう……？」

という、なんとも煮え切らない態度だった。
ただでさえエルフ族が減少しているこのご時世に、子供を授かるだなんてとても素晴らしい出来事の筈なのに、ベアトリスはもしかしたら赤ちゃんを産みたくはないのかもしれない。

……はっ！　まさかクリストバル代表は、ベアトリス様の同意を得ずに子供を……！？
それはいけませんっ！　子作りは夫婦間の同意のもと行い、赤ちゃんはすべからく望まれて産まれてこなくては！

3

『限りなく黒に近い、と疑わざるを得ない状況下にあるグレーゾーンの娘・ティカ』などという認識をおのずと周囲に抱かれているユーリは、長老議会室での査問会をなんとか無事に終える事が出来た。

それはひとえに、ユーリが世界浄化派と繋がっているという確たる証拠が無いからであるし、魔術師連盟は慢性的な人員不足であるという問題も切実に絡んでいる。不確かな情報だけに、長老達はいつまでもかかずらってはいられないし、万が一ユーリが世界浄化派の弱みを突ける存在だった場合、連盟側に悪感情を持たせていては取り込みづらいという打算もある。

なんというか、魔術師連盟……というかエルフ族って、四面楚歌ですよねえ……

結局のところ、ユーリの処遇は『様子見』に落ち着いた。

連盟の重要人物であるベアトリスの側近くに居るのは具合が悪いという事で、彼女の弟子の中でも、活動拠点を本部や王都に据えていないカルロスが面倒を見るように、という方向へと話の流れを持って行ったベアトリス。

彼女の発言から推察するに、やはり彼女は『黒髪の少女ティカ』を『黒ネコのユーリ』と同一人物であると考えているようだ。手掛かりとしては外殻膜を見抜かれた、と考えるのが最有力だが、ベアトリスは何故、クォンであるユーリをそのままにしていたのか……シャルにたいして、執拗に魂を捧げるよう迫らないという態度を示しているのだから、弟子がクォンの魂の吸収するか否かに関しては、アティリオほど拘っていないのかもしれない。

どうやらベアトリスは、まだ議会室で話し合いを続けるらしい。そこから出されたのはユーリとカルロスとシャル、そしてアティリオの４人。

今回の事件について、知り得た情報を報告し終えた構成員や、部外者にはもう議会室に居て欲しくないという事だろう。

ユーリが思い付くだけでも『誰が何の為に魔術遮断結界を張ったのか？』といった点は、議題に上がった訳ではないが、単なる部外者や平の一構成員に、事件の全容を知らせる必要は無いと判断されたのか。

“お疲れ、ユーリ”

相変わらず重たい音を立てながら閉まる両開きの扉を背に、長老議会室から出たお陰で、主であるカルロスから早速労いのテレパシーが送られてきた。心の声が通じ合うようになって湧き上がってくる安心感から、ユーリもまたいつものように心の中だけで返事を返そうとしたのだが、ふと、そういえば今日初めて知った出来事がある事に思い至った。この問題はカルロスだけではなく、ベアトリスに関わりを持つ全ての人々と話し合うべき話題だろう、と考えゆっくりと唇を開く。

「あ……カルロス様」

うっかりいつもの調子で『主』と呼び掛けそうになったユーリは、慌てて主人の名を舌に乗せる。

「どうかしたのか？」

「まさか、ベアトリス様がおめでただなんて、私、知らされていなかったからびっくりしました」

議会室の扉を振り返りながらのユーリのしみじみとした発言に、

「……なにいっ！？」

「なんだって！？」

「おや、そうだったのですか。それはお祝いを言いそびれてしまいましたね」

男性陣はそれぞれ、驚愕の意を表明してきた。

あまりにも鈍いその態度にやや苛立ちつつ、ユーリは唇を尖らせる。

「もう、皆さん今頃気が付いたんですか？

『外仕事は減らしてもっと体を労れ』とか、『君１人の体じゃないんだから』とか、妊娠した女性を案じる定番の台詞じゃないですか！」

「い、言われてみれば……そうか、ティカの唐突な『おめでとうございます』発言は、そういう意味だったのか」

「妊娠……？　婆さんが、妊娠？　２５歳……いや、妊娠期間含めると２６歳年上の甥に？」

「エルフ族の懐妊祝いには、何を贈るのでしょうねえ？」

ユーリの発言に、ますます動揺を深めるアティリオとカルロス。

今この場で冷静に思考を巡らせていて頼りになりそうなのは、彼女の同僚ぐらいだろうか。

「何を贈るんでしょうね？

でも、長老様方の態度からして、ちょっと心配です。もしかしてベアトリス様が私達に赤ちゃんの事を黙っていたのは、安定期に入る前に流れてしまう可能性があるからかもしれません……」

しゅん、と俯いて呟くユーリの言葉に、

「婆さん、あれで３００歳越えだしな……難しいのかもしれん」

「そんな事になったら、師匠がどれほど悲しまれるか！」

腕を組み、苦々しい表情で唸るカルロスと、拳を握り締めて熱く叫ぶアティリオ。

「子供が安定期に入る前は、お母さんは安静にしているのが一番ですけど……

魔術師連盟の長老って、やっぱり激務なんでしょうか」

「あの様子じゃあ、婆さんは爺婆共にしか打ち明けてねえみたいだしな」

「さり気なく周囲が気遣って、師匠の負担を軽減して差し上げねば……」

真剣な顔で『ベアトリスおめでた発覚!?』を論議しつつ、ユーリは連盟本部内にある宿泊設備が整っている階へと連れて行かれたのだった。

そしてそれから数時間後の現在、ユーリは何故かベアトリスと共にお風呂に入っていた。

……いや、魔術師連盟本部の中にお風呂がある事は、前回のお泊まりの時でも子ネコ姿のまま主にお風呂場で洗って頂いたのでそれは存じておりますし、砂埃だらけの状態だったので素直に嬉しいのですが！

こ、こここここ、ここは共同浴場かつ女湯じゃないですかぁぁぁぁっ!?

脱衣場にて。ベアトリスの手によってユーリは強引に服をひん剥かれ、彼女本人も気楽に脱ぎ捨てて颯爽と風呂場へと向かって行ってしまい、ユーリは半泣きになりながら視線を壁へと固定させたまま恐る恐る浴室へと足を踏み入れた。

ユーリは正真正銘、身も心も性別女性である。

だが彼女の主人であるカルロスは、ごく大多数の男性諸氏と同じく女性を好む健康な成人男性。必要とあらばユーリの記憶や五感を共有したり追跡するかのご主人様を持つ故に、偶発的な事故であっても他人のプライバシー侵害の元となる出来事は、なるべく避けておくべきではないかと思うのだ。

そもそも、ユーリ自身の着替えや入浴タイムは考慮しなくて良いのか？　という点もあるが、それは日常生活を送る上で防ぎようが無い部分として、とうに割り切られている。というか、割り切るしかないとマインドコントロールして開き直っている。

「ほら～ティカちゃん、そんなお風呂場で目をつむったまま歩いたりしたら危ないわよ？」

ユーリの苦労など、全く気にも止めていないのか単に思い至らないのか、ベアトリスは前を隠しもせずに彼女の手を取って湯船へと引っ張ってゆく。

温かな湯気が立ち上るそこへ、抵抗出来ずに引きずり込まれるようにしてダイビングしたユーリは、傍らで「ん～っ」などと両腕を高々と持ち上げて満足げに伸びをするベアトリスの、顔にだけ視線を固定させるという、涙ぐましい努力に腐心する。

何故私は、主人とは異なる性別に生まれてきてしまったのでしょう

……お陰で、地味で細かい苦労を背負わされている気がします。

着衣を全て取り払って入浴しているベアトリスであるが、こんな時でも彼女は結界を維持したままであるらしく、相変わらず正確な顔立ちが認識出来ない。

「さあて、ティカちゃん。今は丁度人が入ってこない時間帯だから、安心してお喋り出来るわ」

不意にこちらを向いたベアトリスが、声に愉快そうな含みを持たせながらそう口を開いた。

突然風呂場に連れてこられたのは、ユーリが気にしていた事を彼女に直接問う機会を、わざわざ設けて下さったというのか。

「あの、ベアトリス様……その、いったいいつ頃から……？」

「そうねえ……初日から、かしら。何か違和感があるな～って考えながら撫でてたら、けっこうすぐに分かったわよ？」

最も気になると言えば、ベアトリスの妊娠発覚に関してだ。

そこで恐る恐る問うてみると、なんと妊娠初日からすぐに理解していたとは。常に自分の周囲に結界を張り巡らせているからには、自身の胎内での新たな命の芽生えという変化にもすぐ気が付く、という事なのだろうか。

「じゃあ、どうして今まで黙っていらしたんですか？

すぐにでも、周囲に報告なさるのが自然なのでは」

「報せても、無闇に波風を立てるだけだしねえ……色んな見方があるもの。誰しもが喜ばしい出来事として、すんなり祝える訳でもないし」

むむむ……やはり、ベアトリス様は順調に妊娠初期を過ごしている訳ではないのだろうか。

「なんでもかんでも、周囲に正直に打ち明けていれば良いってものでもないでしょ？
無闇に暴き立てず、黙ったままにしていた方が、結果的に上手くいく事だってあるわ」

「そういうもの、なのでしょうか……」

「そういうもの、よ。
現に、あなたもカルロスも、この前のフィールドワークから今日まで、特に憂う事も無くごく普通に生活出来てたでしょ？
何もわざわざ暴露する事も無い、あたしの胸の内にだけ秘めておけば良いか、ってね」

“婆さん……”

女湯の会話であるにも関わらず、しっかりこっそり聞き耳を立てていたらしきカルロスの、複雑そうな呟きがユーリの耳に入ってきた。
まあ、女性に関してはかなり礼節を重んじるらしき主人だ。わざわざこの場で、ユーリの視界を通して情景を眺めてみようなどとは考えまい。

まあでも、目隠しして、風呂場にて交わされる言葉と水音にだけ集中していたら、それはそれで淫靡なシチュエーションである気がしますねぇ。

“……お前のその、残念ではしたない思考回路はどうにかならんのか。仮にも嫁入り前の娘が”

ユーリが正直な感想を漏らすと、カルロスからは微妙な感覚を交え

たツッコミが脳裏へと飛んできた。
それに答えようとしたユーリだったが、ベアトリスがザバリと湯を蹴立てながら勢い良く湯船から立ち上がったので、慌てて慎ましく視線を逸らす。
湯気にけぶる、ベアトリスの裸身のシルエットが僅かに視界を横切ってしまったが、その辺の事故にまではユーリにだってフォローしきれない。

「さて、背中流してあげるからこっちにいらっしゃい、ティカちゃん。
……そういえば今更だけど、ユーリちゃんって呼んだ方が良いの？」

湯船から出るなり、ユーリの腕を引っ張って洗い場のイスに彼女を強引に座らせたベアトリスは、ユーリの背後に座りスポンジ状の物で背中を流し始めた。ヘチマのような植物の一種らしい。
魔術師連盟の本部のお風呂場には、鏡があるんだなあと、ユーリはなんとなく感心してしまう。元の世界ではあって当然な気がしていたが、グリューユの森の家には、鏡は一枚しか無いのだ。

「こちらの姿の時は、ティカでお願いします……アティリオさんにユーリと呼ばれているところを目撃されたら、バレてしまう気がします」
「そうねぇ、アティは頭良いものね」

背後からクスクスと、愉しげに笑う声がする。

「そういえばベアトリス様。
私がそうだと気が付いたのは、結界に気が付いたからなんですよね？」
「ええ、ざっくばらんに言えば、少なくともティカちゃんがあたし

と同レベルの結界術特化術士でない限り、姿変化させて自由に動き回れるなんて有り得ないわね。
カルロスに外殻膜の応用を教えたのは、そもそもあたしだし」

そしてふとベアトリスはそこで一旦言葉を切り、ユーリの背中をスポンジで洗う手を止めた。

「そういえば今日は、良いタイミングでシャルが飛び込んできて、命拾いしたわね。
あの子、昔っから妙に絶妙な場面でばかり飛び込んでくるのよねえ。
カルロスとティカちゃんに割り振られるべき分から、シャルが幸運を吸い取って生まれ落ちたのかしらね？」
「……どうしてでしょう。何故か、否定したくても出来ない感覚がしてしまうのです」

今までのマレンジスでの生活において、実にナイスなタイミングでばかりシャルが助けに入ってきてくれたような気がするユーリ。
根源的な魂は同一存在であるのだから、シャルがカルロスとユーリの分まで幸運ゲージを満たして生まれた説は、何か本当にありそうで怖い。

「やあねぇ、冗談よ。
今日は、シャルがティカちゃんの身代わりになって、瘴気の砂を浴びたんでしょ？
そのタイミングでシャルが飛び込んでこなければ、ティカちゃん大変な事になってたものね」

背後からベアトリスの両腕が回されてきて、またしてもぎゅむ！と抱き締められてしまう。

「そうですね……あの時、偶然シャルさんが庇ってくれなかったら、今頃私、死んで……」

改めて人から指摘されてしまうと、今更ながらカタカタと震えてきた。冷静を保っていたようでいて、ユーリは実はまだ、全然落ち着いていなかった。それを今、ようやく自覚したのだ。

刃物が人を傷付ける場面も、悪意や殺意を目の当たりにする事も、毒によって人が亡くなるところも……ユーリは今日、初めて見たのだから。

あの地下通路では、無理やり自分を誤魔化していた。生き延びる為には感覚を麻痺させるしか無くて、考える事をひたすら拒否していた。泣き喚いているだけでは事態は何も好転しないと、そう、特にあのブラウは仕事の妨害をしてくる者には容赦しないだろうという恐怖が、本能的にユーリの口数を減らしていた。

「え？　いやいや、例えティカちゃんが瘴気の砂を被っていたとしても、死なないわよ？」

湯冷めした訳でもないのにプルプルと小さく震えるユーリにたいし、散々ぎゅむっと抱き締めてきた挙げ句、「あたしの背中も流してね～」などと、実に気楽に促してくるベアトリス。

「あの、ベアトリス様。それはどういう……？」

疑問を口にしながら、ユーリがチラリと鏡へと視線を投げかけながら背後の様子を窺ってみると、早速背中を流してもらう気満々でこちらに背を向けているらしきベアトリスの、綺麗な背筋のラインが。仕方がなくユーリもまたスポンジに石鹸を付けて泡立て、エルフ魔術師様のお背中を流させて頂く。ユーリが動かなければ、こちらを振り返ってでも催促がきそうだ。

「ん～？　あれ、ティカちゃんはどうしてシャルが瘴気の砂を浴びても平気だったか、分かって無いの？
なんとっ、外殻膜は瘴気まで遮断出来てしまうのだ！」

『どうどう？　スゴいでしょスゴいでしょ』と言いたげな自慢げなベアトリスの台詞に、ユーリは彼女の背中をスポンジで上下に擦りつつ小首を傾げた。
外殻膜は、物理法則が異なる異世界から召喚された使い魔達でも、環境変化による悪影響を受けないよう、フィルターの役割を果たす、簡単に言ってしまえば姿変化をも可能とするバリアである。

……という事は、あれ……
もしかしてあの時、シャルさんが飛び込んでこなかったとしても、私は死ななかったどころか、傷一つ負う危険性すら無かったって事じゃあ……？

おかしい。
例え単なる偶然が重なった結果だったとしても、シャルにたいして欠片程は抱いていた、身を挺してまで自分を庇ってくれたという感謝の念や感動が、どんどん削げ落とされていく。

まさか外殻膜が、そこまで強力な防護効果を発揮するとは思いもよらなかったが、よくよく考えてみれば、ここマレンジスにおいて、太陽から降り注いでくる危険物質Ｘも瘴気の砂も、『異世界人のユーリに害を為す、マレンジス特有の危険物』である事に変わりは無い。いや、本当に危険物質Ｘが存在するのか否かは定かではないが。

「という事は……私達クォンには、瘴気が毒にはならないのですか？」

「少なくとも、シャルの例からして前々からそうじゃないかな、とは思ってたわ。あの子、たまにレデュハベスの近くにまで平気で日帰りで飛んで行ってたし」

“……言われてみれば、シャルはデュアレックスの領土に足を踏み入れても、いつでもケロッとしてたな。普通の人間は、デュアレックス近郊の瘴気を一週間ぐらい吸い込み続けていくと、体調を崩すんだが”

毒の回る速度は、意外と緩慢なのですね。世界浄化派の人達が精製した瘴気の砂が、強烈過ぎるのでしょうか。

ふと口を挟んできた……というかテレパシーを飛ばしてきた主人の納得の声に耳を傾けつつ、

「という事はつまり、あの時シャルさんが飛び込んで来なくても、私はなんの被害も受けなくて……それは、かなりマズい事態になっていたのでは」

ユーリはハタと気が付いた。
ベアトリスが言いたい事が、ようやく思い至ったような気がする。

少しでも浴びれば、即座に人体を融解させてゆく強烈な毒薬、致死量はほんの僅か……そんな瘴気の砂を大量に被っていながら、年端もいかない子供が無傷で立っていたとしたら？　それは、明らかに怪しい。訝しめ怪しめ疑えと、よりにもよってアティリオやブラウ相手に大声で触れ回っているようなものだ。魔物と認識されて、その場で攻撃されていたかもしれない。

“……ユーリ。俺はこれから、シャルに褒美をやるという緊急命題

が降って湧いた”

ユーリが窮地に追い込まれるという未来図を、華麗にして着実に防いだにも関わらず、水責めにして逆さ吊りという憂き目に遭わされた同僚を労るべく、ご主人様が何やら立ち上がったご様子である。

私ももっと、シャルさんに感謝の気持ちを表さなくては……そんな思いを抱きつつ、ユーリは全身を洗い流して再びまったりと湯を堪能するのであった。

「師匠っ！　お疲れ様です」

お風呂から上がったユーリは、素直にカルロスに貸し与えられた今日お泊まりする部屋へと足を向けるつもりであったのだが、風呂場の出入り口の前に陣取っていた人物がベアトリスに向かって声を掛けてきた。

身に着けているゆったりとしたローブとフード付きのマントは薄いグリーン、亜麻色の髪の毛に水色の瞳、片目にはモノクルをつけた……何か見覚えのある女性だ。

魔術師連盟にあっては珍しく、耳の形が丸い。

「お疲れ様、ルティ。首尾は？」

「ここでは少し……お部屋でご報告を」

ベアトリスは平然と、彼女に向かってルティと呼び掛けているが、それはブラウの連盟での呼び名ではないかと思われる。そしてブラウは、アティリオの態度から鑑みても、性別は男性である筈。

じっとルティと呼ばれた人物を観察してみる。

ゆったりとしたローブは腰の辺りや肩幅といった、全身の骨格を曖昧にしているし、フードの襟で喉元も見えにくい。そして胸元にはまたしても、何を詰め込んでいるのだか不明な細やかな膨らみ。声は柔らかく高いが、裏声という可能性もある。ちょっとした仕草や口調、歩き方……そんな些細な違いで、見事にぱっと見は女性にしか見えない。

「……ブラウ、さん？」

ユーリが恐る恐る呼び掛けてみると、ブラウは即座に反応した。ほんの一歩の大股で彼女との距離を詰め、人差し指でユーリの唇を軽く押さえる。
そして上体を屈め、彼女の顔を覗き込んできたブラウは、

「しぃーっ、ティカちゃん。例え気が付いたとしても、知らん顔してくれなきゃ。お互いに、ね？」

ブラウリオとしてのいつもの声音で、冗談半分のような台詞を低く小さく囁きかけてきつつ……ユーリの目を覗き込んでくるそのモノクル越しの眼差しに、ユーリは背筋に悪寒が走るのを感じていた。

4

唐突ですが、やはりというかなんというか、私、ただ今大ピンチです。

「それで、ティカちゃん？
君はどこの国の生まれで、どんな経緯でバーデュロイに来たのか、教えて貰えるかしら？
ああ、もちろんベアトリス師匠に辿り着いた経緯もね？」

報告がしたい、と告げてベアトリスのお部屋に場所を移したルティの格好をしたブラウは、椅子に座っているユーリの真っ正面に立ち、腰に両手を当てて見下ろすようにして詰問してくる。

で、す、よ、ね～？　普通、訝しみますよねそりゃあ。我ながら不審人物な自覚はバリバリあります！

ベアトリスが気を利かせたのか、単純にブラウが呼び集めたのか、室内にはベアトリスとユーリだけではなく、カルロスとイヌバージョンのシャル、そしてアティリオも思い思いの場所で寛いでいる。

ユーリがこのマレンジスでの足跡をもっともらしく捏造し、ブラウに説明したとしても、だ。この世界の知識が無く、全く見知らぬ国を祖国と偽っても、すぐさまボロが出るのは目に見えている。
王都へと足を踏み入れるだけでも、身元を証明する身分証が必要になるのだ。国境を越えるにも、恐らくはパスポートに相当する何らかの証書が要るだろうし、入国記録など残っている筈も無い。密入国を装うには、ユーリにはサバイバルの知識が殆ど無いから無理が

ある。

心配そうに、チラチラとユーリへと視線を寄越してくる主人と同僚に目をやってから、ユーリは思い切って唇を開いた。

「それが……お話したくても、何も話せないんです」

「へえ、それはまたどうして？」

獲物を狙う猛禽類の眼差しとはこんな風なのだろうか、ブラウの瞳がキランと光るのを眺めつつ、背中では冷や汗がダラダラと流れ落ちてゆくのを感じながらも、ユーリはめげずに言葉を続ける。

「つい何日か前に、私は気が付いたらこの国に居ました。そちらの……カルロス様のお家です。バーデュロイという国家の中の、パヴォド伯爵領という場所だと教わって、どこから来たのか、何者なのか、どうして倒れていたのかを尋ねられましたが……私は、何一つ分からなかったんです。このマレンジスの地図を見てもピンときませんし、何を見聞きしても、しっくりと馴染むような感覚も覚えなければ、何かを思い出す事もありません」

「ティカ、君は記憶が……？」

滔々と語られるユーリの言葉に、アティリオは戸惑ったように声を上げ、ブラウにねめつけられて大人しく口を噤む。

「それで？」と、続きを促してくるブラウに、ユーリは誘拐されていた真っ只中につらつらと考えていた設定にやや変更を加えつつ、続きを舌に乗せる。

「人が多いところに行けば何か分かるかもと、王都に連れてきて頂いて、ベアトリス様と面会をしたら……知り合いの孫？　だと言い

出されて」
「だってティカちゃんってば、あたしが昔お世話になった人と、同じ顔なんだもん。今回の事件をちゃっちゃと片付けるまで、王都見物を勧めたら……後は、ルティも知っての通りね」

ユーリの奇想天外な説明に、ベアトリスは実にもっともらしく重々しい声音で相槌を打ち、椅子の上で足を組みながら顎を撫でた。
ユーリの発言はまるっきりの嘘という訳でも無いし、全ての記憶を失っていて何も思い出せない、などと断言してもいない。
虚構に真実味を与えるのは人間の思い込みであり、誰しも自分の都合の良いように解釈しているに過ぎない。

「ブ……ルティ、さん。ルティさんこそ、分かるのなら教えてくれませんか？
私はどこの国で生まれてどんな風に生活してきて、どうして今はバーデュロイに居るのか」

カルロスから召喚された春以前に、ユーリの生きた足跡など、このマレンジスの地にはどこにも存在しない。入出国記録も無く、戸籍も存在せず、親類縁者もおらず、彼女を個人的に見知っている人間など、皆無。まるで煙のように、ある日忽然とそこに現れた黒髪の少女。
その背景を、探り当てられるものならやってみせれば良い。強引な当て推量か、作り上げられた人物像を勝手に押し付けてくるぐらいしか出来まい。そう、真実に辿り着かない限り。

挑戦的な態度に見える事がないよう、ふるふると怯えたままブラウの質問に答え終えると、ユーリは自分の話は終わりとばかりに口を閉ざした。
彼女のような、弁舌に長けてはいない人種が下手に言葉を重ねては、

手掛かりを与えたり矛盾点を暴かれたりしかねず、そういった隙を巧妙に突かれて畳み掛けられたら太刀打ち出来ない。
嘘を吐く時には、多くを語りすぎては嘘臭く感じてしまう。多弁で煙に巻けないのならば、だんまりを押し通すのみだ。
しばらくじっとユーリを観察してきたブラウは、
「ふぅん。なるほど、ね……確か、カル先輩が引き続きティカちゃんの面倒を見るんでしたよね？」
室内を見渡して、可愛らしく小首を傾げた。女装男子にああいった仕草が許容されるのは、だいたい何歳ぐらいまでなのだろうか。やたらと様になっている。
「僕はまだ、どうにも納得がいっていないがな」
「ほぼ常時、本部に詰めてる術者が文句言うな」
「ま、ティカちゃんの事はそれで良いとして……」
相変わらず、面と向かい合うと軽い口喧嘩に発展するカルロスとアティリオのやり取りに割って入り、ベアトリスは水が入ったグラスの中身を一息に呷り、ブラウに視線を定めた。
「じゃあルティ、さっさと本題の報告に入ってちょうだい」
「はい」
卓上にコトン、と、空になったグラスを置き、弟子の1人であるらしいブラウをせっついた。
それを横目に見つつ、槍玉に上げられている状態からはなんとか脱出を果たしたユーリは、そろそろと立ち上がって、先ほどから我関せずな態度で床に寝そべっているシャルの傍らに座り込んだ。首の

辺りに腕を回して抱き付き、そのもふもふした毛並みに頬擦りしても天狼さんは全く態度が変わらず、嫌がって暴れ出す素振りも無い。

「ああ、そうだ。
あなたのあの臭〜いお洋服、ちゃんと洗っておきましたからね。今は陰干ししてあります」
「え、ホントですか？　スカートの裾に泥とかが跳ねてたと思うんですけど……」

ふと目を開けたシャルからおもむろに告げられて、ユーリは驚きながらも心配な箇所について言及してみる。こちらの世界にも、頑固な泥汚れをスッキリ落とす洗剤の類いがあるのだろうか。
それにしても、先ほどまで着ていた服を何度も臭い臭いと嘆かわしげに言われると、年頃の乙女としては流石に傷付く。シャルの鼻が特別良いのだから、仕方がないと分かっていても。

「柑橘類の皮と一緒にお湯に浸けて置こうかと思いましたが、洗濯板の上で洗ったら簡単に落ちましたよ」

洗濯のコツは、全力でゴシゴシせずにまぁるく円を描くようにしながら力を抜いて洗う事です、などと、相変わらずどこの主夫だと尋ねたくなるような台詞を告げるシャル。

「シャルさん、ありがとうございます」
「いいえ、わたしはあなたのような不器用な人種ではありませんので、簡単な仕事です」

ふふん、と、いかにも至極簡単朝飯前な作業だ、と言わんばかりに自慢げにうそぶきつつも、尻尾が揺れているのがおかしい。

遠慮なく抱き付いたまま、シャルの毛並みを堪能しているユーリはさておき、室内では深刻な話題が持ち上がろうとしていた。
柔らかで聞き取りやすく自然な高い声と、服装や仕草に細やかな変化を付ける事で見事に『女性の雰囲気』を獲得しているルティことブラウは、例の黒ずくめ2人組は逃走を計る為にわざと大通りの人込みに紛れたようで、あと一歩のところで逃した事を報告し、

「そこで一つ、気になる事があるのだけど」

毛並みに頬擦りしてくるユーリを、尻尾でぺちぺち叩いているシャルへと視線を向けた。

「ねえ、シャル。君はあの黒ずくめ達に接近したんでしょ？　匂いで特定は出来ない？」
「無理ですね。彼らの匂いを嗅ぎ分ける前に、わたしはあの臭い黒い粉を浴びてしまいましたので、匂いなんて覚えていません」

確かに、あの黒装束を脱いで隠して人込みに紛れてしまえば、判別するのは難しそうだなあ……などと考えているユーリの傍らで、シャルはブラウの問い掛けに興味無さそうに淡々と回答し、あ～ふ、と、欠伸を漏らす。
確か以前、シャルは『ブラウリオ公子という人物は知らぬ』と言っていたが、ルティとしてならば面識があったらしい。

「そう……地下に魔術遮断結界を張っていた術者は、確保してあるわ。
世界浄化派所属のクォーター、１０歳だそうよ」

室内に集った弟子達を見渡して、ベアトリスは苦々しい声音で言葉を紡ぐ。師から告げられた内容に、はっきりとカルロスの眉がしか

められた。

「……その子は、生きてるのか？」

「辛うじて、ね。今は昏睡状態で治癒を受けてるわ。許容量を越える術を展開したんだもの、持ちこたえるかどうかは五分五分よ」

どういう事なのでしょう。世界浄化派は、エルフ族の血を引く者を根絶やしにしようとしている癖に、手の者に術者を加えている、と？　ですが、１０歳って……

“術者に対抗する為に、捕獲したエルフ族を人質にしてガキを働かせてんだよ。

ゲッテャトール子爵邸には、補佐する魔法陣が無かったからな……ガキが王都の結界の内側で陣無しで結界を維持し続けて、生きてるのが不思議なくらいだ”

親類を盾に、脅迫して手先として操り、まるで使い捨てのように見捨ててゆく……世界浄化派の思惑は、毒をもって毒を制すなどという覚悟でさえなく、文字通り道具でしかないのだろう。

「今回の事件、ルティはどう見る？」

アティリオからの促しに、しばし逡巡するように瞬きをしたブラウは、ゆっくりと唇を開いた。

「そう、ね……結論から言ってしまえば、ゲッテャトール子爵はトカゲの尻尾として切り捨てられたんだと思う。

あたし達を殺すつもりなら、わざわざ天井裏から降りてこずに、そのまま瘴気の砂を振り注いでくれれば良いだけの話よ」

「観察、そして世界浄化派の存在をアピールする為に、わざと姿を

現したって事ね」
「はい。恐らく、世界浄化派の連中が誰かを探している、というのは確実なのだと思います。あの地下通路で、ティカちゃんが探し人本人であるのか否かを、探っていたのではないでしょうか？」
ブラウとベアトリスのやり取りに、カルロスがぽむと両手を叩いた。
「つまり、だ。あの黒ずくめ2人組の狙いは端っからティカの方であって、アティリオの方こそついでに誘拐されたって事に……いやむしろ、アティリオがティカを危険な地に追いやった結果、つーか」
「……大大叔父様に、反当主の意を表面化するつもりがまだ無かったのなら、アティ兄さんを攫う意味も分からないし、巻き添えを食ったと考える方が自然なのよ。
大大叔父様、平気そうなお顔をなさってたけど、内心はびっくりしたんでしょうねえ。人質は魔術師連盟の構成員、とだけ認識していたのに地下から甥っ子が現れたなら」
「……ルティ、カルロス。ちょっと黙れ」
カルロスとブラウはタッグを組み、意地の悪い眼差しをアティリオへと向けてハーフエルフさんの痛いところを突く。
……主。ブラウさんというか、ルティさんと仲良しだったのですね。
“まあな”
「……つまり、だ。世界浄化派の連中が探している、黒髪黒眼の子供とやらかどうかを見極めて、ティカではないという結論に至ったから瘴気の砂を撒いて行った、と。そういう事か？」
「そうね、確実に殺すつもりがあったのなら、もっと効率的な手段を取っただろうし、該当人物を確保する必要があるのなら、隠し階

段で独りになったところで攫ってた筈……
殺すのでもどこかへ連れて行くのでもなくて、ただティカちゃんの心に恐怖を塗り込めたかった、って見方もあるけど」
「……いくら世界浄化派が異常な連中だろうと、ここまで大掛かりな事をしておいて、目的が嫌がらせという事は無いんじゃないか？」
アティリオとブラウの推測に、ユーリはシャルの翼に軽く煽られつつ、ポツリと零した。

「私が世界浄化派の人達が探している人かどうか分からなかったから、不確定要素を排除する為に、魔術遮断結界の中へ誘拐された、と」
「その理論でいくと、世界浄化派の探し人さんは術者、もしくは魔力を操る能力を保有している知的生命体って事になるわねえ」
ベアトリスの合いの手に、ユーリは首を傾げた。

「魔力を操る能力は、エルフ族の血を引く魔法使いさん達にしかないんじゃないんですか？」
「いんや、この世の中に広く浸透している魔術ってのは、あくまでも魔力を公使する術体系の一種だ。
実際、魔力を練って操る魔物は多いし、シャルだって日々、魔力を使って空飛んだり料理したりしてんだぜ？」
「……なんですと！？」

シャルが魔力を持っているらしいという事を聞いてはいたが、それを自在に操っているなどという話は初耳である。
思わずユーリがシャルの鼻面を覗き込むと、同僚はキョトンとした表情でぱちぱちと瞬きを繰り返しながら彼女を見つめ返し、

「あなたは今更何を言っているんです。
いくらなんでも、この翼の羽ばたきだけで人を乗せて空を飛べると思う方が、非論理的ではありませんか？」

呆れたようにやれやれと鼻面を左右に振り、組んだ両前脚の上に下ろして目を閉じた。先ほどからシャルは実に眠たそうであったが、このままベアトリスの部屋で眠ったりしては、彼女にわしわしと撫で回され安眠妨害されてしまうのではあるまいか。

あ、主……私、いずれネコではなくて天狼さんの姿に変身出来るように術を組み替えて頂いて、自由に空を飛びたいという野望を抱いていたのですが……！

“そんな願望があったのか、ユーリ。
残念だが、姿形はそっくりシャルを真似出来るが、俺はお前に魔力までは与えてやれん”

ガーン……！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3269v/

イエス、マイ・マスター

2011年11月22日04時49分発行